

不死の感情・改

いのかしら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*

この話は惨劇なのか、英雄譚なのか、はてはただの歴史の1ピースか。それは私には分かりません。

この小説へようこそ。明日をあなたは信じていますか？

目次

不死の感情・改に先立って	ガルパ
ンとは	1
第1章 自分の戦車道、始めます！	
第1章 ① 真の最強の終焉	20
第1章 ② 平穩	31
第1章 ③ 濁流とエンペラー	48
第1章 ④ 神格集結	64
第1章 ⑤ スポンジ軍団のホーム	80
パーティー	80
第2章 練習試合です！	
第2章 ① 初陣の初動	91
第2章 ② 我が意志よ	106
第2話 ③ 船の底の secret	130
第2章 ④ 箱根を越えて	150
第3章 強豪、サンダース戦です！	
第3章 ① 最高の環境	160
第3章 ② チームとして	172
第3章 ③ 仕事	189
第3章 ④ 暴戻の容認	204
第3章 ⑤ 逃避の代償	217
第4章 これが本当のアンツイオ戦です	

第4章	①	偉大なる者	234
第4章	②	学園の道	252
第4章	③	昔話	266
第4章	④	総帥の未来	277
第4章	⑤	溝の中	290
第4章	⑥	捧げよ	305
第5章		プラウダ戦です!	
第5章	①	真実の街	319
第5章	②	大地へ	335
第5章	③	刺抜き	345
第5章	④	雪の膠着	357
第5章	⑤	安楽へ	371
第5章	⑥	襲来	395

第5章	⑦	大洗の民	406
第5章	⑧	蛙	425
第6章		決勝戦です!	
第6章	①	効率的	447
第6章	②	相互信用	463
第6章	③	曇天の朝	479
第6章	④	チャレンジ	499
第6章	⑤	母親たち	514
第6章	⑥	人道への罪	528
第6章	⑦	戦場に集う者	545
第6章	⑧	各々の戦い	559
第6章	⑨	敗走	577
第6章	⑩	最高のチーム	592

第6章 (11) 主人と娘と

610

第6章 (12) 愚将の忠誠 |

643

第6章 (13) 幸せな日 |

667

第7章 ゆきゆきて戦車道

第7章 ① 役目 |

682

第7章 ② バターコーヒー |

697

第7章 ③ 戦車の道 |

717

第7章 ④ 黒森峰女学園 |

729

第7章 ⑤ 大洗の救世主 |

742

第7章 ⑥ 勝負の先 |

755

第7章 ⑦ 不死の霞 |

777

特別章

特別章 ① 大洗前日譚 |

787

特別章 ② 島田愛里寿さんです!

811

不死の感情・改に先立つて　　くガルパンとはく

西住みほ「初めまして、大洗女子学園2年生の西住みほです。

今回はこの『不死の感情・改』の連載に当たりまして、『そもそもガルパンとは何か』という部分を、初めての方にも分かりやすくできるような心がけつつ、大まかに解説していきますと思います」

秋山優花里「西住殿、これはガルパンの二次創作ですよね？どうしてこのようなものを、しかも第6章が盛り上がっているところで挟んできたのでありますか？」

こちらは秋山優花里さん。私と同じ、大洗女子学園に通う高校2年生。実家は床屋さんで、なにより戦車好き、という点では誰にも引けません。最初は控えめで人見知りみただったけど、今はそうでもないよ。気分が盛り上がるとキャラが変わるけど、そこまで頻繁にはないかな。

戦車道においては、私と同じドイツのIV号戦車に乗るあんこうチームに所属し、装填手を務めてくれています。

西「それがね、作者の井の頭線通勤快速はリアルでも小説書いてる、って知り合いに触れ回っているんだって。こんな作品だけど。

そしたら

『すまない、ガルパンは分からないんだ』

という方がそこそこいらっしやったみたい。だからそういう方や、あとはこの先ガルパン知らないけどこの作品を閲覧していただけた方に、作品を違和感なく楽しんでいただけるように、ということ、書いてみるんだって」

五十鈴華「そのような方、特に後者は数はいないと思うのですが……」

こちらは五十鈴華さん。私の同級生で、学園に来て始めて友達になった一人。実家は華道の家元さんで、よく自分でも花を生けてるんだって。ちよつと抜けてるところもあるけど、基本はしっかり筋の通った人だよ。ここだけの話、よく食べるんだよね……
戦車道では同じくあんこうチームで、砲手を務めてくれています。狙いは百発百中、華道での集中力はこういう所でも活かされるみたい。

武部沙織「そうだよ。そんなことより本編の連載は大丈夫なの？」

こちらは武部沙織さん。華さんの昔からの知り合いで、学園に来て初めての友達の人だよ。人とのコミュニケーションがすつごく得意で、学園に馴染めなかつた私にも真つ先に声をかけてくれたの。それに家事に関しては一級品。

一応男子からモテることを心底望んでるみたいだけど、ここ女子校だからね……

戦車道においてはI V号あんこうチームの通信手を務めてもらってます。実はメールの早打ちも得意だよ。

西「本編はしばらく大丈夫だって。あ、ちゃんと土曜8時投稿は続けられる、という意味だね」

冷泉麻子「それにしても、この作品は原作とは異なる展開なんだから、わざわざ解説するまでもないんじゃないか？」

こちらは冷泉麻子さん。沙織さんの親友で、学年首席の明晰な頭脳を持った人だよ。ただし朝にとにかく弱くて、遅刻記録が200日以上も連続してたんだって。あとは甘いものが好きだよ。

戦車道においてはI V号あんこうチームの操縦手。操縦の仕方はマニュアルを見たら覚えてくれたよ。わけがわからないよ。

西「でも学園艦や学園都市、戦車道に関してはガルパン原作を元に分かっていた方が、この先の話も分かりやすくなるんじゃないかな……だって」

秋「……一理ありますな。なら西住殿に関する紹介もなさると」

西「そうだね。避けては通れないだろうし」

五「それではまず、ガルパンの根幹を成すスポーツ、戦車道について紹介しましょうか」

戦車道

戦車道は健全な婦女子を育成し、世に役立つ人物を送り出す為にある。目指すべきは自己鍛錬と相手への敬意、そして照準器の先に見据えた己の心である。

西「……とりあえず戦車道連盟規定の冒頭を引っ張ってきたけど……」

武「これじゃダメ。訳わかんないじゃん」

秋「それなら私が！」

戦車道とは、基本的に安全性を備えた戦車を使って行われる、伝統あるスポーツであります。戦車内にはカーボンコーティングが施され、試合に用いられる実弾が当たって

も、内部に影響はありません。

その代わりに戦車道の試合に出場する車輛にはセンサーと白旗が多数取り付けられます。そのセンサーによって砲弾が貫通、またはエンジン損傷など、戦闘続行が不可能と判断された時は、白旗が上がって撃破された、とみなされます。そうしたら試合は続けられません。

基本的に戦車道は女性が主体となつて行われるスポーツになります。全国大会に出場するチームも、全て女性のみから構成されています」

武「なんで女性だけなんだっけ？」

秋「設定の都合かと」

冷「メタすぎるだろ。確か男性が装甲に守られるべきではない云々の話があったが」

秋「現実だと……武道かつ女性中心、ということで薙刀がイメージに近いかと」

西「ルールは大きく2種類。殲滅戦とフラッグ戦です。

殲滅戦は文字通り2チームが戦い、片方が全滅するまで続けられます。敵戦力を如何に削ぎ、試合を優位に持っていくかが鍵となります。

一方フラッグ戦はチームで1輛だけフラッグ車を決め、その車輛は目立つように三角の旗を立てます。その車輛を先に撃破した方が勝ちです。いかにフラッグ車を攻め、守

るかが鍵となります。そして何よりフラッグ車さえ撃破すれば、戦力的に劣勢でも逆転があり得ます。

全国大会は基本的にフラッグ戦で行われます。全国大会では車輛数の上限が定められていて、勝ち進むと上限が上がっていきます。初戦は10輛ですね」

秋「あとは使用できる戦車にも条件がありますな。使用できる戦車は1945年8月15日までに設計、または運用されていた戦車のみであります。連合国軍が最終局面で投入しようとしていたセンチリオンあたりが限界ですな」

西「次は学園艦と学園都市に関して、だね」

冷「学園艦から行こう。学園艦は空母型の巨大な船だ。大洗女子学園学園艦だと全長7.8km、幅1kmある。だがこれでも日本の学園艦全体の中じゃ小さい方だ。戦後の重工業化政策の一環として造られたぞ。

この空母型の船の甲板の上に形成されているのが学園都市だ。家や寮など学生の住居や校舎のみならず、コンビニなどの商業施設など生活のための設備も一通り揃っている。

大洗女子学園学園都市の場合、人口は3万人に対して、学生数は1万8千人。それ以外には先生方や商業施設の経営者など学園艦や学園都市を支える多くの人々がいらっ

しやるぞ。

この艦の運行に関しては……茨城県大洗町の大洗港を母港としている以外は面倒だからパス」

五「確かに、まずは大洗女子学園について伝えなければ教えられませんものね。それではその点は私の方から。」

大洗女子学園は茨城県立の女子中学、高等学校です。学科には普通科を始め、水産科、被服科など多くの科が存在しています。そのうちの一つ、船舶科がこの学園艦の運行を担っています。

これを見ても分かるように、我が校は生徒の自主性をかなり重んじており、生徒会にも大きな権限が与えられています。

また生徒は選択授業をとる必要があり、その必修選択科目の一つに戦車道があります。私たちはそれを履修する形で戦車道をしているわけです」

西「学園艦や学園都市についてはこんなもの、かな」

冷「あ、あとは他の学園都市についても少し話していいか？」

武「そうだね。結構奇妙な設定だし」

冷「ま、簡単に言うと、戦車道で私たちの敵になったり味方になったりする学園都市

は、それぞれ二次大戦時にあった国をモデルにしている。一応対応を示しておくぞ。

黒森峰女学園↓ドイツ

聖グロリアーナ女学院↓イギリス

サンダース大学付属↓アメリカ

アンツイオ高校↓イタリア

プラウダ高校↓ソビエト連邦

知波単学園↓日本

継続高校↓フィンランド

BC自由学園↓ヴィシーフランス&自由フランス

これくらい分かかっていれば、作中では困るまい」

秋「でありますね。続いては……西住殿に関することですか」

西「そうだね。これは私が進めるよ。」

そもそも戦車道は戦前にルーツを持つ伝統的なスポーツで、国内にもいくつか流派があります。島田流とかね。

私の実家は熊本県にあります。そしてその実家、西住家は戦車道の流派の一つ、西住流の家元を継承する家系でした。

私はその次女として生まれました。姉は西住まほ、私がかつていた黒森峰女学園で

戦車道の隊長を務めています。

私もそこに入学し、黒森峰大会10連覇を賭けたプラウダ高校との試合に、1年生ながら副隊長として臨みました。

しかし結果は負け。さらにフラッグ車を任されていた私が濁流の中に落ちた味方戦車を助けにしようとする中で、そのフラッグ車が撃破されて負け、でした。

それが一際問題となった理由が、西住流が勝利を重んじる流派であった、ということ。私の行動は結果として敗戦を招いた。10連覇を止めてしまった。戦車道の中で、学園の中で私が孤立するのは時間の問題でした。

そして戦車道から逃げるつもりで転校してきたのが、ここ大洗女子学園だったわけ
「す」

武「そこから戦車道をやり始めた経緯は……作中も一緒だし、それでいいかな」

西「こんなものですかね……」

五「です、ね」

武「じゃあさ！大洗のみんなをチームごとに簡単に紹介していいっていい？」

冷「いいんじゃないか？作中でも重要な仲間たちになるし」

西「それでは沙織さん、お願いします」

カメさんチーム 使用車輛：t38（チエコスロヴァキア）↓ヘッツアー（ドイツ）

角谷 杏 車長・通信手・装填手 3年生

大洗の生徒会長さん。いつつも干し芋食べてて飄々としてるけど、やる時はやってくれる人。1月1日生まれでじゃんけんに負けたことがない、とかやけに運がいいよ。

小山 柚子 操縦手 3年生

大洗の副会長さん。仕事をしているのは大概こつち。優しそうな姿とその通りの振る舞いだね。

河嶋 桃 砲手 3年生

生徒会の広報の人で、会長さんと小山さんとは昔から仲がいいらしいよ。砲手だけど砲弾は当てられないよ。あとは沸点が低めだね。

カバさんチーム 使用車輛：III号突撃砲（ドイツ）

エルヴィン（松本 里子） 車長・通信手 2年生

カバさんチームは歴女チームと呼ばれてて、それぞれ好きな時代があつて、かつそれにあつた仮装……をして過ごしているよ。エルヴィンさんは二次大戦時。頭にはイギリス製のゴーグルを乗せてるね。

カエサル（鈴木 貴子） 装填手 2年生

カエサルさんはいつもは歴女チームのリーダーだけど、戦車道の時はエルヴィンさんが車長を務めているよ。カエサルさんは古代ローマが好きなんだつて。

左衛門佐（杉山 清美） 砲手 2年生

左衛門佐さんは戦国時代、特に真田幸村が好きだよ。なんでかは知らないけど、いつも左目を閉じているよ。

おりよう（野上 武子） 操縦手 2年生

おりようさんは幕末、特に坂本龍馬が好きなんだつて。最近他所から面白い操縦方法を教えてもらったらしいよ。

アヒルさんチーム 使用車輛：八九式中戦車（日本）

磯辺 典子 車長・装填手 2年生

アヒルさんチームは部員数不足のバレーボール部を復活させようと戦車道に参加したチームだよ。磯辺さんはこのチーム唯一の2年生。バレーボールでは背は低いけどセッターとして活躍。サーブも上手いよ。

結構な頻度で「根性！」と言ってるね。

近藤 妙子 通信手 1年生

背が高くて、エースアタッカーでジャンプサーブが得意らしいよ。

河西 忍 操縦手 1年生

こちらも背が高くて、アタッカーを務めているよ。

佐々木 あけび 砲手 1年生

バレー部チームはほんと背が……ブロックが得意なんだって。

ウサギさんチーム 使用車輛：M3中戦車（アメリカ）

澤 梓 車長 1年生

ウサギさんチームは1年生だけで構成されてるチームだよ。澤ちゃんは結構自由な人たちが多いこのチームのまとめ役。冷静になれるから、この先みぼりんの後を継ぐのかな……？

山郷 あゆみ 主砲砲手 1年生

ボーイツシユな見た目のさばさばした性格の1年生だよ。

丸山 紗希 装填手 1年生

いつも明後日の方向を見ている1年生だね。滅多に喋らないよ。聞き上手、と言われれば確かにそうかもしれないけど……

阪口 桂利奈 操縦手 1年生

かなり活発な1年生だね。返事の「はい」を「あい」って言うてるよ。

宇津木 優季 通信手 1年生

マイペースで大人しそうな感じの1年生だね。昔彼氏がいたらしいよ。ギギギ……

大野 あや 副砲砲手 1年生

明るいムードメーカーの1年生だよ。丸眼鏡をしてるけど、よく割れてるね。コンタクトにしたらいいと思うけど……ちよつと口が悪いよ。

カモさんチーム 使用車輛：Blb is (フランス)

園 みどり子 車長・装填手・副砲砲手 3年生

カモさんチームは風紀委員の人たちから構成されてるよ。全員おかつぱなのが特徴だね。委員長の園さんは生真面目な人で、遅刻しまくってる麻子の天敵というか腐れ縁というか……麻子はそど子って呼んでる。

後藤 モヨ子 (ゴモ代) 操縦手 2年生

そど子さんの恐らく後輩。若干おかつぱが長めだよ。

金春 希美 (パゾ美) 主砲砲手・通信手 1年生

そど子さんの恐らく後輩。若干おかつぱが短めだよ。

レオポンチーム 使用車輛：ポルシエティーガー（ドイツ）

ナカジマ 車長・通信手 3年生

レオポンチームは自動車部からなっているチームで、車輛の整備とかで協力してもらっていたけど、ポルシエティーガーが発見されたのを機に本格的に参戦してもらったよ。雨の日が好きらしいね。

スズキ 装填手 3年生

髪が茶髪気味の人だよ。

ホシノ 砲手 3年生

髪が黒髪の人だよ。

ツチャ 操縦手 2年生

自動車部唯一の2年生だね。金曜日ドリンクバー飲みまくるのが趣味らしいよ。

アクリクイさんチーム 使用車輛：三式中戦車（日本）

ねこにゃー 車長・通信手 2年生

アクリクイさんチームはネットゲームでの知り合い同士が集まったチームで、戦車道で始めて顔見知りになったらしいよ。ねこにゃーさんは私たちのクラスメイト。銀髪長めの髪で、瓶底眼鏡をしているよ。それを取ると美人なんだけどなあ……

ももがー 操縦手 1年生

こちらは桃のマークで右目を塞いでいるね。理由は知らないなあ……「くもも」とか「くなり」って話しているね。

関係ないけど、大洗でももがーさんの看板置いてある串カツ屋さんは、作者のお気に入りだよ。

ぴよたん 砲手・装填手 3年生

銀髪で髪が長めの方だよ。「くだつちや」とか「くぞな」って話しているね。

サメさんチーム 使用車輛：マークIV（イギリス）

お銀 車長 2年生

サメさんチームは船舶科の中でも、無法地帯と化していた学園艦の底の方のバー「どん底」に集まってきた方々だよ。なんでも河嶋先輩に恩があつて参加するんだって。

お銀さんは「竜巻のお銀」の異名を持つらしくて、いつも飄々としてるよ。

ラム 操縦手 2年生

ラムさんは「爆弾低気圧のラム」の異名を持つらしいよ。いつも髪の毛と顔が赤いよ。お酒飲んでるわけじゃないらしいけど。

ムラカミ 砲手 2年生

ムラカミさんは「サルガツソのムラカミ」の異名を持つらしくて、体格がとても大きいよ。喧嘩はやめた方がいいよ……

フロント 操縦手・通信手 2年生

フロントさんは「大波のフロント」の異名を持つらしくて、とても歌が上手いよ。よく「どん底」で歌っているんだって。

カトラス 砲手 2年生

カトラスさんは「生しらす井のカトラス」の異名を持つらしいよ。うん、一人だけ毛並みが違うね。名前に関する解釈（適当）は最新作に載るよ。

カトラスさんは「どん底」のバーテンダーとして働いてるんだって。物静かだよ。

武「こんな感じかな」

五「自動車部の方々の適当さが目立ちますね……」

武「いや、あの人たちむしろ自動車部で一つな人格ありそうなイメージ強くて……」

秋「まあ……確かに……」

冷「いずれにしてもこんなものだな。一通りの紹介はしたし、そろそろ眠い」

武「麻子！まだ寝ちやダメだよ！むしろこつから本編スタートなんだから！」

五「ですがここで書かれた設定は原作のもの。この作品もそれに乗っかっている部分は多々ありますが、独自の設定も展開もマシマシであること、そこはご理解ください」

冷「基本この作品ガルパンそのものを壊しかねない部類にあるからな……」

西「そんな作品ではありませんが、次より始まります『不死の感情・改』。どうぞ最後までお読みいただけましたら、作者が喜びます」

秋「いやそこは幸いです、とかありがたいです、とか言うところですよ、西住殿」
西「それでは、『不死の感情・改』、はじまりはじまり……」

第1章 自分の戦车道、始めます！

第1章 ① 真の最強の終焉

平原で炎をあげるI-I号戦車。上部のみを的確に燃やし、煙を上空へ太く立ち昇させる。緑爽やかな初夏の風に長音のホイッスルの音が混じる。

「故宮高校フラッグ車、走行不能。よってプラウダ高校の勝利」

淡々とした審判の声が響く。何処かのテレビ局のヘリがある場所の上で、周りの空気を引き裂きながらホバリングする。

「見えました！ あちらです！ ……出てきました！ JS2！ JS2です！！ 今年の優勝はプラウダ！ 本年度戦车道硬式大会優勝はプラウダ高校です！ ついに最強の黒森峰、その呼び名に終焉が来てしまうのでしょうか！」

ヘリに乗ったアナウンサーは興奮した調子で言う。JS2とともにいた部隊のうちのT34／85のキューポラから、ヘッドギアを付けた少女が顔を覗かせた。

「笑っています。いま少女がはつきりと笑っています！！ これが、新たな伝説なのでしよう！」

会場は先程の所ではない。鉄道でここからしばらく行けば、先ほどの場所にたどり着くだろう。先程の所へ行けるのはどっちか一方だが。

空の雲は空全体の50%ほど。快晴ではないが、気象庁の判断では晴れだと言える。風の調子も悪くない。双眼鏡で遠くを眺めていた。目の前に映されるのは森の木々の幹、木の皮が所々外側へ捲れている。そしてその先の隙間に広がる草原。断片情報を統合すれば、それはそれは広いものだど理解できるはずである。

「みほ、見えるか？」

隣のティーガーターのキューポラから上半身を出して姉が尋てきた。だが先程から2つの穴が脳内で合成されて映る映像には、遠くで風で揺れる葉のついた枝以外動くものはない。

「いえ、異常ありません」

足元の戦車の安定を確認しつつ双眼鏡を下ろし、ほっと一息ついた。一時的な安全は何事にも変え難い。

しかしすぐに風が湿気っぽくなってきた。また見ると今度は枝以外にも動くものがあった。草原の奥の小さい林の陰から戦車群が顔を覗かせた。その見分け方は、戦車の正面が丸っこかったら敵、という単純なものである。

「来ました！ 敵戦車発見。2時の方向。距離約一二〇〇、T34です。1輜……2

輛……3輛です！」

「3輛なら問題ない。ここで撃破する。各車前進ののち、1号車は先頭、2号車は中、3号車は後尾をそれぞれ撃破せよ」

姉の素早い指示が飛ぶ。この判断の速さは私には十分には出来ない。私も後ろのキューポラに身をねじり込み、すぐさま砲手に指示を出す。

「真ん中です。停止後、一撃でお願いします」

ティーガーIの88ミリ砲が轟音と共に火を噴く。しかしその弾は少し手前の小さい丘の上で土煙を生んだ。

「外した。着弾30メートル手前です！ 次弾早く！」

くそが。一撃だと言っただろう。

「1号車命中！」

「3号車命中！ 1輛こちらに向かって来ます！」

立て続けに情報が舞い込む。さすがは黒森峰の最精鋭、試射無しで命中させる。完全に遅れを取ってしまった。生き残るには当てるしかないだろうが。

「距離一一七〇！ 風は4時方向に3m！ 撃て！」

すぐに再びティーガーIの車内に砲尾から薬莖が排出させる。しかしそれは当たることなく、敵の右斜め上を飛んで行くのが眼に映る。

「この距離で、しかも静止射撃で2発も外すなんて！ 訓練で何をやってたんです！」
前の人選をミスった奴を蹴飛ばして敵車両を確認すると、側面に砲弾が命中し、文字通り爆発していた。横を確認するとティーガーIIの砲身から煙が登っていた。姉のだ。

「……全車後退。森の奥へ進め」

身を乗り出す。風はとても冷たく無情で、そして強張っていた。

姉の車輛の者が簡易机と茶を用意し、姉はその上で地図に印を付けつつ、茶をすすっていた。

「他部隊の状況は？」

「確認済みの範囲内では、接敵なしとのことですよ」

「他の確認も早めに済ませろ」

空の雲は少し増えていた。60%といったところか。風は止みつつあった。

「お姉ちゃん……」

姉は振り返らない。

「砲手と呼んでこい。それと隊長と呼ばんか。いつも言ってるだろう」

「はい……」

私は歯をガタガタ震わせている砲手の手を掴んで引きずり下ろし、両手首を抑え肩甲骨の間を押しながら前へと連れて行く。連れて行くときまずはポケットに手を突っ込み、彼女の拳銃を放り捨てる。ナイフはお持ちでないようだ。

「……」

姉が席を立った。次の瞬間、張り手が音を立てて彼女を地面へと叩きつけた。頭に付けていた帽子が放物線から外れて彼方へと吹き飛ぶ。

「……何をしている。仲間を危機に直面させるのが楽しいか？」

「……」

頬に手を当てたまま動かない。かなり腰と手首のスナップを効かせて打ち込んでいた。私でも喰らいたくはない。

「張り手は五月蠅いからやめてください、隊長」

「拳の方が良かったかな」

手を何度か顔の前で開閉させ、踵を返して姉が再び席に着いた。

「いずれにせよみほ、こいつは次はチームから外せ。お前はいつも人選が甘すぎる。下手したら次がなかったかも知れないんだぞ？ 我々SS12小隊は栄光ある黒森峰一のエリートだ。その名に恥じぬよう、相手に恐怖を与える存在でなくてはならない」

そう言うのと机の上の茶をもう一口すすり、淡々と続けた。

「お前も西住の血を引く戦車乗りの一人だ。黒森峰を、西住流の名を汚すような戦いをするな。戦場で必要なのは友情じゃない。敵だ。分かっているな？」

「はい……申し訳ありません」

「取り敢えずここでは助かったから、任命責任は保留にしておく。

しかし敵は何を考えている。我々に釣り野伏せが通じるとでも思っているのか？

おい、周りはどうだ？」

「現状ソ連戦車のエンジン音は有りません。射線の通りにくいここに潜んでいるとは思えません……」

風の向きが先ほどと逆になりつつあった。私はその間に張り倒されたやつの腕を無理やり引き上げる。

「そうか。だが偵察などは送られているだろう。風向きも変わってきたし、狙撃などにも警戒せねばならん。些細なことでも何かあつたらすぐに」

「隊長！」

監視に向かっていた姉の車輛の者がこちらに駆け寄り、姉の足元で息を切らして膝をつく。

「どうした！」

「西住隊長！ 南方に大量の発射煙が!!」

姉はすぐに首から下げていた双眼鏡を目元に寄せる。

「……シユターリンオルゲル！」

苦虫の汗が飛びそうな声が小隊に緊張が走らせる。

「クソツ、こつちが本命だったか！総員緊急乗車！至急このエリアから退避せよ！
我々から損害を出すわけにはいかんぞ！」

姉は机を蹴飛ばして頭からキューポラの中に入っていく。私も考えずにそれに倣う。

「全速後退！ 急いで！」

ティーガーⅠも私の声とともに後退を始めた。空からはロケット弾が風をきる轟音のみ。全力で動くエンジンの音は掻き消される。数がおかしい。どう考えても一斉に全ミサイルを発射したようにしか聞こえない。この先運用する必要なぞないのだ、と言わんばかりに。

顔からは粘度の高い嫌な汗が顎の下に溜まって落ちる。そしてそれらは森を焼き払わんとばかりに躊躇なくSS12小隊を襲った。葉と煙の境界が無くなり、先程を超える音と振動が伝わる。

「きゃあああ」

震度6弱を思わせる振動が発生した。災害訓練の時に訓練専用の車に乗った体験と

比較すれば、恐らくそのくらいはあつただろう。

「落ち着いて、落ちついて後退を続けて」

ミサイルが落ちてこないことを祈り続けた。しかし手綱はその祈りの相手ではなく、プラウダが握っている。けたたましい音とともに正面が黒く染まった。

炎のはじける音で次に目を開くと、黒い煙で占められた車内の中で、砲手が先程の痛みを間違いなく知覚出来なくなっているのを目で見た。視覚よし。手足の指先を曲げる。触覚、神経よし。足も動く。重度の火傷も負つてないようだ。死んでない、と結論付ける頭も働いている。状況を確認。煙の匂い。脱出だな。

キューポラを触ると火傷するレベルで熱い。熱いと漏らしつつ咳き込みながらなんとか押し開け、上半身を外に出した。煙も私の体の側面を通って抜けて行く。車輛の前方に命中したようで、他の乗員への希望は抱きようがないだろう。

「みほー！」

煙で痛くなり涙が出てくる目をなんとかそちらに向ける。そこには姉の車輛の者2人と左ひじを抑えた本人がいた。一帯は焦土と化し、さつきまでの森の様子は半径数十メートルに渡り焦げた切り株に置き換えられていた。煙にさらなる焦げ臭さが鼻をつく。

「生存者はお前だけか。無線も……無理そうだな。3号車は直撃で全滅。1号車もこれだけだ……無線も全車輛やられ、救援も呼べん。やむを得ん。車輛を放棄して後退し、味方との合流を模索する。全くイワンの奴め、たった3輛に無茶しやがる」

姉の車輛の者が手を差し伸べ、靴越しに熱を感じながらなんとか車輛から出た頃には、草原の向こうから幾重のエンジン音とともに戦車が向かってきていた。それも我々のものとは異なるもの。

「敵戦車突っ込んで来ます！ T34／85が5輛……いや10輛です。デザント兵を載せています」

デザント付きか。

「隊長……」

「歩兵随伴か……逃げられない、か。残念だが打つ手がない……投降しよう」

姉は私が考えた通りの判断を下す。姉は頭を下げ、1号車の後ろを指しながら全員に隠れるように言った。

ティーガーの排気口が4人を見下ろす中、多くのデザント兵の声が響く。言語は実に多様で、何を言っているかは分からない。だがそれがうおーでもウラーでもアツラーアクバルでも万歳でも結末は大差ない。

履帯の回る音が時々刻々と激しくなる。足音が微かにエンジン音に混じり出す。その時共にいた者の一人が、恐怖からか戦車の背後から飛び出した。

「と……投降します。撃たないで」

「バカ！ 体を出すな！」

姉の叫びも虚しく機銃の音とともにティーガーIIの脇に血まみれの屍体が完成した。胴体に数発、頭にも何発か食らったのだろう。左目の左側の骨も削れたらしく、赤く染まった目玉がゴロリと転がり、視神経のみで引つかかっている。まあ、死に急いだのはある意味で正解なのかもしれない。

「来るぞー！」

ティーガーIIの両脇からT34が2輛現れ、完成した屍体を捻り潰し、1両が前方に回って自分らを囲むように止まった。

「撃つな！」

「投降する。撃つな！」

「降伏です。降伏します！」

それらに呼応して姉から順に立ち上がり、両手を高く上げる。そして叫ぶ。力の限り。デザート兵の持つ銃の口がこちらを向く。彼らの指が一人でも動けば、私もさっきの者の仲間入りだ。私はお断りしたいが。敵のデザート兵の指揮官らしき者が銃を構

える兵を静止させ、兵を1人呼んで銃を向けたまま姉の肩を掴ませようとしていた。

「我々は黒森峰SS12部隊！戦車道規定に則り投降する！全員の同捕虜条項に従った処遇を要求する！」

3人は1人ずつ銃を向けられている。黒い銃口の先がぎらりと光る。

私は、生きたい。

理由なんてない。

ただ、死にたくない。

「撃たないで！ 撃たないでください！ 私たちは投降します!!」

第1章 ② 平穩

R R R R R R R R R R

アラーム音が部屋に響く。

「撃たないでください！ 投降です！」

いるかの時計のヒレを押すと、アラーム音ではなくベッドから落ちる音、そして背中から振動が脳内へ響いた。

「わわっ」

目を開けるとそこは白かった。まもなくそれが雲と煙ではなく、天井だと分かった。自分の部屋……か。空気が、非常に綺麗だ。咳とは無縁だ。微笑みながらのんびり立ち上がり、窓際に行く。外が明るい。

ここにはもう私を殺そうとする人はいない。窓を開けて命を狙われることもなければ、日常的に護衛がつけられることもなければ、夜に大きな音を出さないように気を配る必要もなく、命を賭ける場所に向かう必要もない。

雨戸を音を立てて開ける。窓際を蝶が舞い、目の前の道路には鳩が舞い降りてきている。

朝起きた時にあと数時間で死ぬ、と覚悟するような日は来ない。いつか、何十年も先、これまでの人生の期間を何度も繰り返した先、おばあちゃんになって病気が寿命で死ぬまで生きられる。

空は快晴。少しの雲もない。予想できない、まるで無限の時間。こんなに自由で素晴らしいことはない。

「もう……うちじゃないんだー！」

ゆつくりと布団を三つ折りにして、初めて着る制服に手をかけた。

それでも長年の癖は抜けないもので、外で鍵を開けた後数秒無音状態を作って外に気配がないことを確かめ、出てからも左右をさっと見る。

「とっつ」

家を出る前にもう一度鍵を確認し、出発。階段を下った先にいたのは、犬をつれる人、美味しそうな匂い溢れるパン屋さん、笑いながら登校する今日からの同級生、先輩、後輩。外の人は皆今日を生きている活気に満ち溢れているように感じられる。

日常の生活でも歩兵SSに睨まれている前の学校とは大違いだ。歩いている間に大きな校舎が何棟も並ぶのが見える。校舎についた青と白の大きな紋がのびのびとした感じを強調している。きつとここの校風もその通りなのだろう。

それともう一つ気になったことがあった。それは私が学生だと思った人間は皆一様な制服、一切違いのない制服を着ていたことである。ここには軍人はいない。唯一とも呼べる治安組織である風紀委員も、腕章を除けば制服であった。恐れるものがないほど、平穩なのだろう。

普通一科A組、ここが今日から私のクラス。部屋の中からは友と久しぶりに会ったことによるものであろう陽気な話し声が伝わる。

「おはようございます。皆さん最後の夏休みはいかがが過ぎましたか？来年は受験勉強の為、……」

ドアの向こうから先生の声が聞こえる。それでも若干の話し声は残る。よく許されているな、と僅かに感心した。

「それでは転校生を紹介します」

ガラツとドアが思いつきり開く。

「西住さん、入ってください」

「え、あ、はい！」

教壇の前に立って先生が肩を軽く叩く。

「こちらが転校生の西住みほさん。西住さん、一言よろしく」

「え……熊本から来ました西住……みほです。えっ……と、よ、よろしくお願いします」

「ありがとう、それでは西住さんは左奥の方のあその空席に座ってください」
「は、はい」

実に強引な方だ。その日はホームルームと始業式だけだった。どうやら生徒会長は角谷という人らしい。この学園の生徒会長はかなり権限が強いと聞いたことがある。その割には周囲に武器を持った護衛らしき者もない。本当に安全な土地なのだろう。私は今日だけでそれを何度実感すればいいのか。

次の日、今日から通常授業だ。生き生きしている皆の様子とは裏腹に、私に話しかけようとする人は4限の終わりまでいかなかった。

昼休みが始まる前に私は筆箱をしまおうとすると滑って定規を落としてしまった。拾おうと机の下に潜ると頭をぶつけ、ペンが左側に落ちてきた。それを拾おうとすると今度は机の脚にぶつかり、机の上に立っていた筆箱が倒れ、中身が床にぶちまけられた。それらをやつとの思いで集めて、席に座っていた。虚無感が覆い、一つため息をついた。私は筆箱さえ操れないのか。

「ハイ彼女っ！一緒にごはんどろっ？」

その覆いを打破する明るい声が、私の心にするすると入り込んできた。

左右に人がいないことを確認し、後ろを振り返ると茶色の髪の毛の癖つ毛の人と黒髪のス

トレートの人が立っていた。

「沙織さん、西住さん驚いてらっしゃるでは無いですか」

「あつ、いきなりごめんね」

「突然申し訳ありません。よろしければお昼ご一緒しませんか？」

ストレートな黒髪を持つ人が軽く頭を下げてから高貴な口調で聞いた。

「わ、私とでしようか？」

急だったため理解が追いつかなかつたが、2人は揃って微笑みながら頷いていたので、話に乗ることにした。同学年の人と飯を共に食べるなど久しぶりのことである。普通はいきなり接近してきた彼女らに疑ってかかるべきだが、持ち物にそれを裏付けるものがなく、二人のデータから考えてすでに候補からは外しており、なにより彼女らの笑顔が私をそうさせた。

私は二人とともに食堂に向い、盆を取り、それぞれ注文して待つ。

「えへへ、ナンパしちやった。自己紹介まだだったね。私はね」

「武部沙織さん。6月22日生まれ」

「えっ？」

「五十鈴華さん。12月16日生まれ、ですよね」

「はい」

「すごい！誕生日まで覚えててくれたんだ！」

「うん、一応、ですけど」

彼女らが私を知ろうとした理由など知らない方がいい。そうしている間に私の盆の上に鯖の味噌煮が来て、ごはんと味噌汁がその左右についた。

「行つとき」

正面の店のおばちゃんが言う。

「えっ、でもまだ漬け物が……」

「あんたら三人友達同士だろ。席取つてきな。漬け物ならこの子に2つあげとくから」

目が輝いてきた。中年後半の彼女の顔ですら10は若く見え、体の中から込み上げてくる何かを感じる。踊るように席に行こうとしたが、バランスを崩して盆のものを落としてしまいそうだった。何とか回避したが、私のおちよこちよいだけは死んでも治るまい。幸い近場に四人分の机が空いていた。

「よかったです、武部さん達が声かけてくださって。私一人で大洗に引越して来たもので」

「そっかあ。まあ人生色々あるよね。泥沼の三角関係とか、告白する前に振られるとか、五股かけられるとか」

「えっ……と」

お前は急に何を言ってるんだ？人間同士の関係はこのようなものだったか？私も私だが、もしこれらが事実なら、いや事実が寸分でも混じっているなら、正直この武部さんがどのような人生を過ごしたか気になる。

「そうだ！名前で呼んでいい？」

武部さんが聞いてきた。なにがそうだ、なのかは分からないが、口がすでに横一文字に広げたまま動かない。

「構いませんよ」

「じゃみほ、聞いてよー。なんか最近多くの男の人に話しかけられるんだけど」

いきなりタメ口かい。

「どんな感じにですか？」

「おはよう、とか今日も元気だねっ、とか」

「武部さん、明るくて親しみやすそうですからね。誰とでもすぐ仲良く出来るとは素晴らしいことだと思いますよ」

これが精一杯のフォローである。いや、本当に。

「それはモテとは違うものだといつも言っているではありませんか」

五十鈴さんが盆にラーメンと山盛りの野菜炒めと大盛りごはんと味噌汁を持ってき

た。やはりそうか。こちらの人の方が見た目から信頼できる。というか、その飯は一人分なのか？分けて貰っても困るだけなのだが。

「そうだ、西住さん。漬け物をお渡ししますわ」

「何よ華、もー！」

「お話もよろしいですが早めに御飯を頂いてしましましょう」

「それもそうですね」

「いただきます」

全員手を合わせ、武部さんは納豆、五十鈴さんは味噌汁、私は魚に手をつけた。私は周りの様子を確認していたが、2人に少し不思議がられたようなのでやめておいた。少しでも話をしようと、武部さんのさつま芋の煮物を見て聞いた。

「大洗ってさつま芋が有名でしたよね」

「そうそう。干し芋とか、一部では乾燥芋っていうらしいよ」

「そうなんですか」

「そうだ今度さつま芋アイスの店行かない？」

「そんな店があるのですか？」

「うん。色々とトッピングの種類もあつて美味しいよ。今日は必修選択科目の練習があるから無理だけど」

「お茶をしに行くとか女子高生みたいですね」

「私達は女子高生ですわ」

……言われてみれば。

「そういえば西住さんは必修選択科目は何になさいますの？」

「えっ……と、すみません。必修選択科目とは……」

「紙もらつてないの？あの先生豪快だけど忘れっぽいからねー。必修選択科目っていうのは、伝統的なものから一つ選択して乙女の嗜みとして学ぶっていうもので、」

「私達は戦車道を選択しているのです」

「せ、戦車道ー！」

私はその言葉を聞いてすぐに肩をすくめて、少し大きめの声を出した。周りの注意を引いてないかサツと確かめるが、それほどでもないのが幸いだ。だが顔がみるみるうちに青くなるのが自分でもわかる。馬鹿な……

「どうなさいました？」

「この学校、戦車道の授業ないと伺っていたのですが……」

私は身を乗り出して顔を五十鈴さんの方に寄せた。それが嘘であることを願って。

「数年後日本で戦車道世界大会が行われるので文科省から通達があり、今年から導入されたそうです」

だがそれは実に容易く破壊された。

「……五十鈴さんと武部さんはなぜ戦車道を？」

なぜ……この2人が？ 私のいた世界には似つかない2人が？

「と申しますと？」

「あ……えつと、五十鈴さんのような方ですとなんか香道とか茶道、華道などが似合うかな……と思ひまして」

「私の家は代々華道の家元の家系なんですけど、アクティブなことをして新境地を開きたくて。」

「私は戦車道やるとモテるって聞いたから。そういえばなんでみほはこんな時期に転校して来たの？」

「……………」

うつむき押し黙る。聞く必要はない、そのはずだ。それに何なのだ、彼女らのこの理由は……

「でも必修選択科目は自由に選べるから」

「それよりも早く食べないとお昼休み終わってしまいますよ」

「そ、そうだねみほ。早く食べよう」

「はい……………」

五十鈴さんが盆の上の物を全て平らげたことは、戦車道がこの平穏な地にあることと比べれば些細なことではしかなかった。

5 限目が終わると、廊下から足音が聞こえてきた。そしてクラスの前から長身の片眼鏡をかけた生徒とそれより背が少し小さいが胸のある生徒に挟まれて、始業式で見た小さな生徒が干し芋を食べながら入って来た。クラスの者が口々に生徒会長だ、なんて生徒会が、誰に用だ、などと言っている。

「えっと……」

会長さんは分かるが、他の2人が何者か分からない。

「片眼鏡で目つき怖そうなのが広報の河嶋さん。温厚そうなのが副会長の小山さん。そして小さいのが会長の角谷さん」

沙織さんが教えてくれた。

「会長、あの者です」

教壇上にて片眼鏡の生徒が私の方を指差す。この学園の主が私なんか用だろうか？

「やあつ、西住ちゃーん」

その小さな生徒が左手を挙げて明るそうに言う。視線は明らかにこちらだ。

「えっ、はい?」

「西住みほ、少々話がある。教室の外に出ろ」

席に座る私を河嶋と言われる人は上から見下ろした。3人に連れられて教室の外に出る。

「必修選択科目なんだけどさ、戦車道選んでね、ヨロシク」

何を言っているかもう一度聴きなおそうとした。

「戦車道やってね」

私が聞く前にそう言いつつ会長は顔を近づけた。確定だ。

だがとりあえず何か言い返さねば……

「えっ……あのっ、ひ、必修選択科目ってじ、自由に選べるんじゃないよ……」

「いやあー運命だねえー。君は戦車道をやる運命にあるんだよ。」

大丈夫、こちらは西住ちゃんがやってた物騒な硬式には参加しなくて、軟式の方に参加しないから。とにかくヨロシク」

会長が私の左肩を叩いてきた。私のは体をビクツと反射的に震える。威圧感だ。この小さな身から湧き出る、武器も持っていないのに湧き出る威圧感だ。それが私の体を強張らせている。

「じゃ、行くよ」

「はい」

すると片眼鏡の女が私に耳打ちした。

「貴様に選択しないという選択肢はない」

「かーしま、行くぞ」

「はい」

3人は最初と同じ並びで教室から出て行った。

私の目の焦点は定まらなくなった。後から思い返してもこの間に何を視界に入れていたか思い出すことはできない。どこか現実にはない物をその視界に収めていた気分だった。その目を保持したまま6限に突入した。

『君は戦車道をやる運命にあるんだよ』

『貴様に選択しないという選択肢はない』

それらの言葉が私に重くのしかかっていた。生徒会が何を考えているのか。なぜここが戦車道をも？

軍備保持？この海によって陸から隔離されたこの学園艦で？見た感じ目立った生産設備もないし、他校から見ても占領の価値はないだろう。生徒数的に投資の価値も薄

い。

権力強化？様子を見た限り権限が強いという話は本当のようだし、治安も安定している。これ以上必要なのか？疑念と不信感が私を包み込む。

「じゃあー、次の問題。西住さん」

私の耳元を波が過ぎ去る。

「西住さん？大丈夫？」

「みほー」

武部さんが声をかけると、私の体は少し反応したが、別に彼女や先生を見ているわけではない。

「どうしたの？体調悪いなら保健室行つてきなさい」

そう言われ、何も言わずゆっくり立ち上がり、指示に流された。

保健室のベッドは6つの内3つが埋まっていた。

「今日はやけに病人が多いわね。ま、しっかり休みなさい」

保健室の先生は去った。私の両隣が埋まっているのだ。そこにいたのは武部さんと五十鈴さんであった。

「みほ、どうしたの？」

「すみません、少し……」

なぜ彼女らがここに居るのかは良いとして、幾分か心が落ち着いた。保健室までの道中は良く覚えていないが、先程から薄く黒くなっている白い天井が認識できる。

「生徒会の方々に何か言われたのですか？」

五十鈴さんも右を見るよう寝返りをうってきた。

「そういえばどうしてこんな時期に転校してきたの？彼氏に振られた？」

「いや、そういうことではなくて……」

本当にこの武部さんの脳細胞を1つずつ見て見たい気もする。それよりも私はこの問いに答えるべきだろうか、との問題が浮かぶ。少し考えたが、答えることにした。そうでなければずっと会うたびに聞かれそうな気がしたのだ。

「実は私の一家は戦車乗りの家系で、」

「へえー」

「まあ、そうなりますと遺産相続とか次期当主をめぐる骨肉の争いとかですの？」

「いや、そういうことでもなくて……私以前は戦車道に励んでおりましたけれども、親から破門されてしまいました、恥ずかしながら戦車道を避けて逃げて参りました」

その話を聞いた武部さんは顔を引きつらせているが、五十鈴さんはあまり変わっていない風に見える。

「そうだったんだ……いや、なんかごめんね……」

「構いません」

「……私も同じなんですよ、みほさん」

「えっ？」

「私も戦車道をやったために親から勘当されているんです。

それでも私は戦車道を通じて、これまでと違う人のものではない自分の道、自分の華道を見つけたいんです。ですからみほさんも破門にされたことを逆手にとって自分の道を探ってみてはどうでしょう？」

「自分の……道」

不意にチャイムが鳴り響く。

「授業終わってしまいましたね。せっかくくつろいでいましたのに」

「この後はホームルームだけだね。とりあえず先生に言って選択科目の紙を貰おうよ」

「そうですね。申し訳ありません、つまらない話を聞いてくださって」

「とんでもないです」

私は2人の付き添いを断り、一人で家路に着いた。何でだろうな、一緒にいたら根本も全てあからさまにしてしまいそうだから、か。

その日の夜寝床で選択科目の紙と向かい合っていた。腕には体の左肩から右脇腹へ包帯が巻かれたクマの人形を抱えている。榴弾が斜面に命中し崩れる音。川に滑り落ち沈むIII号の姿。川に降りキューポラを開け戻ってきてから嗅いだ煙の匂い。

それらが一通り終わると次は銃声、鮮血の熱、手から感覚が薄れ地面から聞こえる金属音。そして砲声、機銃音、叫び声。

目を瞑りクマの人形を力強く抱きしめた。眼前にはあの時の光景が寸分狂わず浮かび上がってくる。

「自分の……道……」

微かな望みをかけて昼間五十鈴さんに言われた言葉を頭の中で繰り返す。だが一瞬の希望は昔の罵声と恐怖にかき消された。

第1章 ③ 濁流とエンペラー

次の日、武部さんと五十鈴さんの前に見せた必修選択科目希望用紙には香道の欄に丸が付けられていた。2人の様子から戦車道であつても私の戦車道ではないのかもしれない。しかしどうであろうと戦車道の本質は変わらない。それが私の結論だつた。

「……すみません、私どうしても戦車道をしたくないのです。そのためにこの学校に来ましたから」

2人は顔を見合わせ、頷きあつた。

「誰も反対はしませんよ」

「そーそー、もし生徒会の人たちから何かあつても協力するから」

そう言つて2人が机の上に手を重ねる。温かい。私は会釈することでしたか感謝を表せなかつた。

昼休みに紙を提出した後、食堂で再び揃つて昼食を摂つていた。だが前の様な盛り上がりにはかけている。その最後の一角をつき崩したのは急に入った放送だつた。

「2年A組西住みほ、2年A組西住みほ、大至急生徒会室に來い」

河嶋さんだ。

急に箸が止まる。

気が重い。

「大丈夫ですよ、一緒に行きましよう」

「私も出来る限り協力するから！」

「はい……」

「これはどういうことだ？」

河嶋さんの手にあるのは今朝出した必修選択科目希望用紙だ。

「どうしてこうなるかねえー」

会長さんは干し芋を一口に入れる。どう見ても人を呼び出した人間の応対方法ではない。というよりその対応が要因としては大きいのだが。

「私は貴様に行ったはずだがな。断ることは選択肢として存在しない、と」

「どういうことよー！」

武部さんが素早く反駁する。

「特別入学許可時の書類でそう契約されているのだ」

何を言っているのか、と思つたが、棚の書類を見ていた小山さんが一枚の紙を取り出した。武部さん達とともにその書類を見るが、必修選択科目についての話など全く見当

たらない。普通1科を選択する、あと私の書いた住所欄、そのような事務的なことしか書いてない。というかそのようなものなら私がサインするはずがない。

「どこの部分ですか？」

すると小山さんが黄色の蛍光ペンを出し、周りを2重に囲んでいた、装飾だと思われるカタカナの部分に線を引いた。そしてそれを私たちから見て上下逆に向けた。すると線を引いたところは

『センシヤドウヲリシユウスル』

と1文字ずつ角度をずらしながら書いてある。さらに小山さんがもう一箇所線を引いた。

『この紙面に書いてあることについて同意の上入学する』

その後には西住みほ、と私直筆のサインが書かれていた。

「これでわかったか？西住みほ、貴様は戦車道を選択することに貴様の手で同意したのだ。それに我々にはそちらの都合を考慮する余裕はない。西住みほ、貴様には戦車道をやってもらおう。西住の名において出来ないとは言わせない」

河嶋さんが両手を腰に当て胸を張った。単純だが、確かに有無を言わせぬ手法だ。サインする前に確認しておけば良いと思うが、後の祭りだ。

「そんな……」

「卑怯ですわ」

五十鈴さんがすかさず言う。普段、数日の付き合いだがおそらくそうだろう、とは異なりかなり語気が強い。

「そもそも選択科目は何をやるかと自由です。強要する方がおかしいです。それにこれはみほさんを騙そうとしていることがありありと見てとれます。戦車道チームを強くする為に人の道を外れることを行うのは戦車道そのものの意義に背きます。そのような人が主導する戦車道チームで戦いたくはありません。私は香道に選択科目を変更致します」

「えっ、五十鈴さん!」

「私もそうします。みぼりんを強制的にチームに加えるなら私は戦車道やめます」

2人は力強く言い張る。なんの冗談だ、と思うより先に動揺が襲う。しかし逆に生徒会の3人は動揺するそぶりはない。

「そんなこと言っちゃつていいのかなー? そんなこと言つてると3人まとめてこの学校にいられなくしちゃうぞ?」

会長さんは干し芋を3枚一気に食べ、肘掛に肘を乗せながら視線をこちらに向けた。露骨な恫喝である。

「なっ!」

「脅しですか!」

「脅しではない。会長はいつも本気だ。それにこちらは強要などしていかない。ただ合意した書面通りの内容の実施を要望しているに過ぎない」

河嶋さんが私たちに詰め寄る。そうなのだ。それだからたちが悪い。

「ねえ、3人とも謝ったほうがいいと思うよ、ね?悪いようにはしないから」

今まであまり話さなかった小山さんまでか受け入れるように促す。私はずつと下を向いて考えていた。このまま2人の好意に甘んじていいのか、と。この学校にいられなくされるということは、強制退学はいくら権限の強いということこの生徒会長でもしな一と思うが、自主退学に追い込むなり、とにかく彼女らをここから追い出す手段なら幾らでもある。私一人なら我慢できるが、2人には私の為に苦しむ人にはなつて欲しくない。

しかしその為に戦車道をやろうと思うと、過去の記憶のフラッシュバックにより目眩が誘発される。気を抜いたら本当に倒れそうだ。

葛藤の間も生徒会と武部さん、五十鈴さん達との口論は続いたが、平行線を辿っている。武部さんと五十鈴さんは恫喝に対しても毅然とした態度を崩さない。何故だ。何故彼女らは私というちつぽけな人間の為に自らの犠牲も顧みず、ティーガーに向かうI号戦車のような立ち位置なのにも関わらず、反論し続けることが出来るのか。

それに私は全てを話したわけじゃない。やりたくないのは事実だが、その理由をしつかり伝えてはいない。その隙間だらけの地盤を足がかりにして、何故ここまで抗える。そういえばここに戦車道があると聞いてしばらく、疑問に思っていることが一つあった。彼女たちは何故こんなに楽しそうに戦車道が出来ると言えるのか、である。

私知知っている戦車道はそんなものではない。少なくとも新しい道が見えるなんて言語道断の世界である。何かあるのか。ここには私の知らない戦車道が、楽しい戦車道があるのか？

しかしかすかに湧いた興味は濁流に飲み込まれる。血と硝煙への拒否が脳内を包む。目の前に現れたのは、それまでであった絨毯ではなかった。川、どす黒く渦巻く、対岸があるかも分からぬ大河、それが私の行く手を阻む。

私は前のめりになり、口を手で押さえながら少しバランスを崩した。

五十鈴さんと武部さんがすぐに傍から手を差し伸べ、身体を支えようとする。

「ほら、みほだつて戦車道をやるか考えたらこんなに具合悪そうじゃない！それでもやらせるつて言うの！」

「そうですよ！やりたくない人をチームに加えても、チームの士気が悪化するだけで得なんてありません！」

2人は必死に私を擁護している。先ほどの昼飯が腹から登つて来る。無理だ。私に

やはり戦車道は出来ない。この流れが、あまりに強すぎる。

「ええい！　そもそもなんでお前らが来るんだ！　もともとうちら生徒会と西住の話だ！　貴様らには関係ないだろう！」

「戦車道に関する要件なら私たちが居ても問題ないじゃないですか！」

「それにみほは私たちの友達よ！　守る理由が必要なの！」

「そうです！　友達ならその危機に手を差し伸べるのは自然なことですよ！　なら河嶋さん

は角谷会長や小山副会長が困った際、仕事の関係抜きで助けないと仰るのですか！」

「馬鹿を言うな！　西住が学園に来たのは一昨日だ！　そんな急速に友情が出来るわけが」

「日数がなんだっていうの！　そんなの関係ない！　みほはやりたくないって言ってる

の！　だからやらせたくない！　そのために手伝いたい！　ただそれだけよ！」

友情。

その言葉を聞いたのはいつぶりだろうか。ああそうだ。ずっと捨てるように言われ続けたものだ。

……確かにここに来て彼女らに助けられた。話しかける者がいなければ、きつと周りの誰からも察知されず暮らすことになる。それだけなら都合がいいかも知れないが、きつと今回の話から助けようとする者もいなかっただろう。

友情、なんと優雅な響きか。しかもそれを向こうが与えたのに、さらにそれを基に私

を助けようだと？冗談だろう、何か裏があるのだろう、とは思えない。思おうとしても否定される。現にここで2人は私を庇っているのだから。

ここには友情がある。

彼女らは友情を残しつつ、戦車道を行なっている。

これは明らかな証拠だ。

この戦車道は、私の知らない、夢のような現実。それはある。

筏を得た。

大河の流れも少し落ち着きを見せた。

川上では2人が土嚢をありったけ川に投げ込んでいるし、この筏も彼女らが作ったものだ。

ここまで行為を受けて動かぬは我が身の恥。

時は今。胃の中から物的証拠が来る感触が治まっているうちに。

私は飛び乗った。蜃気楼に思っていた向こう岸は捉えてある。

濁流は舵の効かぬ筏を容赦なく襲う。

砲声

戦車を穿つ音

呻き声

叫び声

血の匂い

焦げ臭さ

銃声

銃の反動

手に着く嫌な温み

痛み

身体の違和感

嫌悪感

その全てが私に戦車道をさせまいと妨害する。

やめろよ。

ヤメロヨ。

ナンデイキテンダヨ。

オマエダケガナンデ……

思い出したくもない顔が、目の前に現れてはその存在を頭に焼き付けようとしてくる。

必要なのは、私の意志だ。それらに抗い向かおうとする意志だ。

向こう岸から一本のロープが垂れている。

これを掴めば、2人は救われる。いや、私もだろう。

どれくらい経っただろうか。私が渡ったのは黄河か揚子江かと迷ったほどであった。ついに、地面を踏んだ。

足元にまわりつこうとする濁流の最後の抵抗を払いのけ、私は両足で地面を踏んだ。

地面を何度も踏みつけて、それが揺るぎないことを確認すると、私は口を開いた。

「私、戦車道をやります！」

驚きの声とともに私の隣にいた2人が私の顔を覗き込む。

そのさらに向こうの角谷会長は、にこやかに何度もうなづいていた。

「……言ったね？」

「はい。私はここ大洗で新たな戦車の道を見つけたいです」

「ほう……」

「本当にいいの、みほ？」

「構いません。むしろ私を庇ってくださいったお二人への感謝もありますし、何より貴女がたがっている戦車道なら出来る気がするのです。しかしその代わり私からの条件も呑んで頂きたいのですが、よろしいですか」

「そうだろうね。ウチらもタダじや西住ちゃんを手に入れられないとは思っていたし。どうだい、この先の交渉はお互いピンでいこうじゃないか」

一人で、か。まあ確かに2人に聞かれない話にもなるかもしれない。

「な、なんでそんなことしなきゃいけないのよ！下手な話ふっかけたりするんじゃないでしょうね！」

「しないよ。こつちも小山とかーしま下げるからさ」

乗るしかないだろう。

「分かりました。よろしくお願いします」

「みほ、いいの？」

「はい。私が戦車道をする事には変わりはありませんから」

私は出来るだけ良い笑顔を武部さんに見せたはずだ。

「みほがそういうなら……」

「私たちは引きましようか」

「会長、宜しいのですか？」

「いいよ。さあ、小山とかーしまは2人を……面談室の奥にでも案内してあげて。お茶

菓子とかもあげていいから」

「はあ……」

4人は一つの塊となって部屋から抜け、私は会長の向こうの校旗と青い海を眺めつつ、話しかけられるのを待った。

「もう行つたかな……」

足跡は遠くに消えた。隣の部屋にも現在人はいない。ただこの小柄な皇帝と脆弱な戦車乗りしかいない。

「さて、ここからは本音の話し合いだ。こつちも西住ちゃんについてはある程度把握している。その想定で話して貰つて構わないよ。それで、条件は？」

「……まずは大洗の戦車道は権力維持のためではない事、それを保証してください」

「つまり戦車道を軍備として暴動などの鎮圧に使うな、つてことね。いいよ、そんなぐらゝ」

にこやかに干し芋を一枚とつて食いちぎる。

「……随分あつさりしてらつしやいますね」

「そりゃね。暴動なんかが起きる事態になつたら、それはウチら行政の責任だ。それを戦車道で埋め合わせしようなんてタチが悪い責任回避だよ。ウチらは公立だから、ちゃんと憲法に基づいた自由は保証してるしね。それにそんなことそもそも戦車道創設の目的にしてないし。余所への軍事侵攻とか海の上からじゃなんのメリットもないしね。」

飛行機もないし」

「なるほど……」

母校の奴らに聞かせてやりたいわ。

「次に、今年の夏以降、いや今年大洗に入学した人間のデータを見せてください」
向こうが少し顔を歪ませる。

「……そりゃキツイね。なんせ個人情報見せろってことでしょ？ウチらにもプライバシーを保護する責任があるからさ。あ、でも入学者はこっちで一応調べているけど、それっぽい人間はいないよ。それで信じて貰えるかい？身の安全は風紀委員会を通じて保障するよ。勿論日々の生活の邪魔にならないようにね」

ではクラスの人の名前を先生が教えてくれたのは何だったのか、と思ったが、何れにせよこれが妥協ライン、か。風紀委員の実力は分からないが、仮にも元名門大洗の治安維持部隊。下手なものではあるまい。

「……分かりました。あとは一度練習を外から見学させてください。以上です」

向こうは今度は呆けた顔をしている。ポーカーフェイスは苦手そうだ。

「……それは勿論構わないけど、そんだけかい？もっと聞いてくるものかと思ったけど。例えば戦車道を創設した目的とか」

「いえ、洋上の学園艦が戦車道を作ろうとしている時点で、何かしら危機的状況があるこ

とは想定できませんから」

またあからさまに顔が歪んだよ今。

「……学園艦の人間全てが君みたいに勤のいい人間じゃなくて助かってるよ。それじゃ、こつちからもある程度戦車道をやる上での要望を伝えておこうかな」

「……と仰いますと？」

戯けたフリをするが、ここまでして私を戦車道に加えたのだ。相応の願いがあつての事だとは検討がつく。

「西住ちゃんにはウチらの参謀をやつて欲しい」

「参謀、ですか？」

隊長とかふっかけられるかと思つたが、まだマシか。

「そう。ウチらには戦車に詳しい人はいるけど、公式戦で実際に試合の指揮を取つた人間はいないんだわ。ここ以外で高校戦車道を経験した人間はいないってわけ。」

今は一応指揮について習っているかーしまがやつてるけど、それでマジノと5対5で練習試合やつてボロ負けしてるんだよね。それでウチの指揮のレベルや練度については分かると思うけど」

「それで私に参謀として作戦を立てて欲しい、と」

「話が早くて助かるよ。あとは練習も口出ししていいから」

「しかし参謀やるにせよ、まずはチームメイトとの関係が良くなければなりません。母校のように上下関係が固まってないのなら尚更です。時間はかかるかと思いますが？」

それに練習は目標とするレベルが分からなければ如何ともしがたいです。私は仲間と仲良く出来る戦車道を求めて加わります。それが崩されない範囲内で、という形になります。目標は？」

「時間は大会に間に合ってくれば構わないよ。目標は……」

みほがゆつくりと生徒会室を出て行くと河嶋と小山が入ってきた。

「お話は終わりましたか？」

「いやあすまんね」

会長は椅子にドサツと音を立てて座る。

「どこまで話したんです？」

「かなり本質まで。あの子は嘘ついて誤魔化せる人間じゃないよ。今まで幾多の嘘を見破って勝ってきてるんだから」

「いいんですか、そこまで言っちゃって。普通の人ならまともな精神でいられませんし、なにより漏れたら不味いのでは？」

「大丈夫、西住ちゃんは7か月罵声に耐えた人だよ。とても強い精神力を持つてる。私

はそう思う。それにもとある程度は予想していたみたいだったしね。漏らす気もないでしょ。かーしまもこれでよかったんだよね？」

「構いません。西住にとつてもこれが良いでしょうし、私達は勝たなければならぬ。さもないと……」

河嶋は両手の拳を力強く握りしめた。

第1章 ④ 神格集結

合流した武部さんと五十鈴さんは私と一緒に帰途についた。2人は両隣から不安げに私の顔を覗き込む。

「みぼりん、本当によかったの？」

「はい。皆さんとなら前とは違った戦車道が楽しめそうですから」

「ならいいですが」

「そういえばみぼりん、とは？」

武部さんが胸の前で手を叩く。

「あ、そうだ。うちのチームにゆかりんて呼んでる子がいるの。だからその子にちなんでこれからみぼりんって読んでいい？」

「構いませんよ。あだ名なんてつけてもらったのなんて初めてだから嬉しいです」

その顔は作られたものではない。純粹な喜ばしさが顔から溢れていた、はずだ。少なくとも私は空にも飛べそうなほど心地よい。

あだ名、か。私をあだ名で呼ぶ気が起こる人間はこれまで居なかつたな。彼女らにそう呼ばれながら名字で呼び続けるのは、余りにも仰々し過ぎるかもしれないな。今度か

らは彼女らも下の名前で呼ぶようにしよう。能力も家柄も関係なく付き合える友である証に。

「じゃーねー」

「ではまた明日」

2人と別れ私は家路を進む。

歩くことしばらく、背後に何者かの存在を感じた。振り返ると電柱の影に誰かいるようだ。気にせず進もうとするとその者が次の電柱目指して走る音がする。

何者だ？まさかもうそういうのが来ているのか？

だとしたらなぜまだ向こうにいた時にやらなかったのか。そっちの方が都合が良かったら、と不思議に思ったが、まずはその正体を確認せざるを得ないだろう。

「あのっ！」

すかさず振り返りその者の顔を見た。えらく髪のもつさりした、偵察には向かなそうな女子である。その女子も突然声をかけられたことを驚いているようだ。少々の沈黙が2人の間を流れる。

「さ、流石伝説のSS12部隊のエース。索敵能力半端ないです！ご無事で何よりです！」

この者は違うな、と半ば確信していると、その女子がいきなり口を開く。そのままましくし立てられるように続ける。

「あ、申し訳ないです。私は普通2科2年3組の秋山優花里と申します。本物の戦車乗りの方と出会えて誠に光栄であります」

せわしなくポーズを変え、目の色を変えながら続ける。何を言っているかよく分からないが、何者だろうか、こいつは。

「前から黒森峰のファンで試合はいつも戦車マガジンでチェックしてました私も戦車大好きです。一番好きな戦車はポリッシュユ7TPですいえ決してウケ狙いではありません。西住殿はどの戦車がお好きですか?……あ、西住殿と呼ばせていただいてよろしいでしょうか? 私も是非西住殿のお仲間に加えてください!」

なるほど。早口過ぎて得られた情報は断片的だが、彼女は所謂軍オタ、と呼ばれる者の一人か。諸君:……こいつ今すぐ人目につかない路地裏にでも連れて行っていいだろうか。

死線を何度も彷徨った私にとって、軍オタという人種はそれを面白おかしく楽しんで見る人だ。人種差別はしたくはないが、それでも苛立ちは覚える。こいつもこのままなら、死線を彷徨わせてやろうか。

「あの、秋山……さん?」

取り敢えずこの女の話を区切った。取り敢えず話を統合する時間をくれ。そして死にかけて。

「はい、マイフューラー！」

秋山とかいう女は右手を上には伸ばし、革靴のかかと同士を叩き音を出した。かつて私がかやっていた行為そのものだ。

「戦車は人を殺すための道具です。私は止むを得ず乗っていましたけれども、ああいうものは早く世界から無くなってしまえばいい、と思つています。だから遊びてそういうのが好きな人とはお友達になれません」

率直に言つてこの畜生好きの女に寒気がした。そしてこれが私の本音だ。前に向き直りそのままこの女から離れる。話す価値も無い。

少し歩くと、何者かが背後から私の腰に抱きついた。先ほどの女である。

「も、申し訳ありません西住殿！ 私が生意気でした！仲間なんてとんでもない。家来です家来！ 西住殿の家来にしてください！忠犬優花里とお呼びください！」

どこからそう言う結論が生じたかは知らないが、少なくとも勘違いしているようだ。自分が話す前に人の話を聞け、と数十回は言つておきたい。

「だからなんでそうなるんですか」

その行動と発言に素直に突つ込む。すると秋山は急に現状を理解したのか、腰から離

れてしおらしくなった。

「えっと、秋山さん？」

「も、申し訳ありません西住殿！私小さい頃から顔見知りが激しくて、戦車の話になるとパニックつてよく変なテンションになってしまふんです。本当にすみません」

秋山は顔を紅潮させ平謝りを繰り返さざるを得ないようだ。テンションとかもはや超越していた気がしたが、まあそれは構わない。大衆の面前で土下座し始めそうなので、一旦やめさせよう。そういえば優花里、か……

「あ、いえ、私も顔見知りするのでそれはいいんですが、あなたが『ゆかりん』さん？」

「な、何故それを？」

ビング。まあこれからの仲間なら入院させるわけにはいかんな。

「た……沙織さんが言ってたのはあなただったんですか」

「武部殿をご存知で？」

「では戦車道で同じチームになる方ですね」

「こ、こちらこそよろしくお願い致します！憧れの西住殿と同じチームなんて光栄すぎてなんといいたらいいか」

「私に、ですか？姉ではなくて？」

すでに揉みくちやになっている頭をさらに揉みくちやにしている女の好みがなんで

私なのか、という純粋な疑問しか浮かばない。私はそんな褒められるような人間ではないはずだが。

「はい、元々戦車道マガジンなどでお見受けしていたのですが、特に去年12月の軟式大会決勝戦！」

私は固まる。それこそが自分のトラウマの一つである。これについて褒められたり、無論憧れを受けたことなぞない。それを讃えられたら、私にはどう反応したら良いか分からない。

「あの時味方を思っただけ川に落ちた仲間を助けに行くあの勇姿！あれが中学、高校と戦車のせいでクラスから仲間はずれや嫌がらせされ、友人の出来なかっただけでなく親も趣味を理解してくれなかった私に、真の戦車道のあるべき姿を見せてくれたんです！」

彼女の目は素直に人を尊敬する目だ。戦車のみを通じてではなく1人の人として西住みほを憧れの対象としている。それは戦車道の家元の子として美辞麗句を多用する大人を見続けてきた人には一目で分かった。でもそのことは彼女を苦しめることでもあった。

「秋山さん、私はそれが理由の一つとなり西住流を破門されているんです」

「えっ？……そうだったんですか！」

「7月の硬式大会が最終的な理由になっているのですが、やっぱりあの時やられたら負

けであるフラッグ車の車長の役割を果たさなかったことは理由の大きな要素だったようです。西住流は勝利を重んじますから。そしてそれが、私がここにいる理由です」

無情だろうか。いや、これが真実だ。

「す、すみません。西住殿。そうとは知らず無神経なことを！」

「いえ、いいんです」

「で、ですが恐れながら、あの時仲間を救おうとしたこと、私は間違つてなんていないと思います！それが間違いというなら、それは人として誤つた道です！」

膝を地面につけながら、胸の前で拳を作つて熱く語る。その目は、決してお世辞ではない。

「……まさか私に憧れている人が、そしてあのことを褒める人がいるなんて思いもしなかったです。でも今までのことが少し報われた気もします。ありがとう、秋山さん」

空を向き一息を吐くと秋山さんに礼を言った。真の熱意がああの時のトラウマに幾許かの光として差し込む。

「破門されてようと私の西住殿への憧れは変わりません。不束者ですがよろしくお願ひします！」

秋山さんは私に敬礼を返した。それは右手を掲げるものではなかった。うん、そちらの方が似合つてる。

次の日の朝、珍しく私にもは寝坊した。というのも昨日言われたことを実行出来るかどうか考えていてよく眠れなかったからだ。それが出来たのも前みたいに寝坊した際に殴られることがない安心感ゆえなのだが。

「遅刻遅刻！」

朝食も食べずに急いで学校に向かう。走って学校に向かっていると目の前に人影がある。学校の生徒であるのは見ればわかるがそれにしては非常に覚束ない足取りをしている。まるで酔っ払いの千鳥足のようであり、いつ倒れるかもわからない感じだ。

無視することもできる。いや、普通はそうする。しかし横を駆け抜けようにも前がゆるらりと塞がれそうなのだ。ぶつかったら手も付かずに倒れそうなのでそうそう下手なことは出来ない。

「あの……大丈夫ですか？」

私はその人物に駆け寄ってそう言った。

「ううっ、辛い」

「えっ？」

「朝が辛い」

どちらかという睡眠そうだが、彼女はその場にへたり込んでしまった。

「辛い……いつそ、このまま全てを投げ捨ててしまいたい。ああ……それが出来たら、どんなにいいか」

「なんの話ですか？」

「だが、行かねば」

彼女はなんとか立ち上がり、再び歩き出そうとする。しかしフラフラしておりまともに歩けそうには思えない。

「肩をお貸ししましょうか？」

彼女の傍らに寄り添うと肩を貸して体を支えた。

「すまない」

そう言うと彼女は私が身体を持ち上げるのに合わせ私に寄り掛かった。

「私は、冷泉麻子」

眠そうにしながらなんとか名乗る。それを聞き名乗り返そうとする。その時

「あっ！」

肩が急に重くなったと思ったらこの冷泉さんは完全に眠りに落ちていた。

「冷泉さん、冷泉さん！起きてください」

「ううん……ムニャ……」

ダメだこりゃ。起きる気配はない。仕方なくそのまま行こうかと思ったが、体重をか

けられたためずり落ちないようにするのが精一杯だ。中々前に進めない。

「このままでは遅刻する。……仕方ない」

私は冷泉さんを背負うと、すみませんと一言かけて、彼女の首に自分の荷物を掛け走り出した。

校門の前では遅刻取り締まりのために風紀委員の人がいた。

「遅いわよ。後もう少しで遅刻よ」

「すみません。冷泉さんが行きで眠ってしまっつて」

風紀委員は背負われている冷泉さんの存在に驚きをみせた。

「西住さん、今度から冷泉さんを見かけても、手を貸さないでいいから。この人遅刻の常習犯なのよ。ほら、あんたもいい加減起きなさい！」

声をかけられても起きず、風紀委員の人にほおを軽く叩かれからやつと冷泉さんはゆっくりと目を開けた。

「……そど子」

「私は園みどり子よ。あんた彼女のお陰で連続遅刻記録が244日で止まったんだから感謝しなさい」

常習犯とは聞いたが、それは常習犯というレベルを超えた根本的な要因があるのでは

?

「……すまない」

「いえ、私こそすみません。首の荷物とりますね」

注意深く冷泉さんの首から荷物を外す。

「では」

遅刻になつてはたまらない、と走つて校舎に向かおうとすると彼女が呼び止めた。

「まだ君の名を聞いていなかった」

何故か、とも思つたが、とりあえず自分の名を言うとなぐに走り再開した。

次の戦車道の授業の日、私にとっては初めての授業の日、日が少しずつ西からさすようになる中そこに見えた光景は、この前の角谷会長の言つた試合結果を納得させるものだった。

「えつと、これで全戦力ですか？」

「そつ。まあ今度38tはヘッツァー改造キットが来るから改造するけど、艦内探しまくつたから戦車はこれ以上増えないよ。予算も無いし」

「……」

そこにいたのは

I V号戦車D型

I I I号突撃砲F型

M 3中戦車L e e

3 8 t 戦車

八九式中戦車

ポルシエティーガー

B l i s 戦車

三式戦車

マークI V

それと36人のこれから一緒に戦車道やる仲間達だった。それぞれ車輛にマークがあり、それが各チーム名を表している。

「マジノの時の5輛は？」

「I V号、I I I突、M 3、3 8 t、八九式。残りの4輛はその後見つかったからね」

使い物になるのはポルシエティーガーの56口径88ミリk w k 3 6とI V号の48口径75ミリk w k 4 0、I I I突の48口径75ミリS t u k 4 0、後は数合わせ

だ。いくらヘツツアーが来ても相当うまく運用しないと厳しい……

おまけに第二次世界大戦に運用されてない戦車もある。開発設計やエンジン出力、砲や装甲も考慮すると、相手戦車の撃破はおろか偵察にさえ使えるか分からない。

簡単に言えば戦車同士が戦うことを前提に設計されていないのだ。

車輛だけ見ると、会長が提示した目標はそれが大それていると言えるレベルだ。

顎に指をかけ考える私の肩を会長がつかむ。

「まーまー西住ちゃん。軟式なんだからそんな深刻に考えずに、これスポーツだから、スポーツ」

「あ、そうですね。つい硬式の方で考えちゃって。」

「それでは今日の練習内容を発表する。今日は行進間射撃の訓練だ。的は近いが流鏑馬のような感じで各チームやってみらうから真面目にやれ、いいか!」

河嶋さんが場を仕切る。

「はい!」

そして全員自分の戦車に散っていった。私は初めに決めた通り、少し離れた場所から教練を見学した。今回の行進間射撃の教練は3周行う。その様子は黒森峰で厳しい教練を受けた者として見れるものではなかった。速度は整地にも関わらず15km/hほど、装填に7秒かかり、それでさえ5枚の板のうち当たったのは3枚。黒森峰ならそ

の場で試合の観戦にさえ行かせて貰えないだろう。

それが主力の一角であり、他のチームも2、3枚、下手したら1枚しか当たらないという状態だ。前言撤回させてもらおう。大それていると言うことすら大それている。同時に戦争なんぞに使えない証拠でもあるのだが。

隊長をやっている河嶋さんの練習内容は悪くないし、統制もある程度取れている。しかし選手のレベルに合っていない。簡単に言えば蹴伸びさえまともに出来ない人間にバタフライを教えるとか、アンダーサーブも打てない人間にスパイクの指導をしているようなものだ。

話によると練習内容は自衛官の人に尋ねた通りにやっているらしい。

まあその自衛官がまともであるといいが、練習方法は一般的なものなので、恐らく実際の練習風景を見ているわけではないのが理由だろう。

救いは私の予感が当たっていたことくらいだろうか。休憩中の会話は盛んであるし、車輛ごとのチームワークは総じて良い。帰り道はチーム混じって帰ることもあるようだ。軟式のみを知る者たちの、和気藹々とした戦車道、悪くない、むしろ良いが、目標を達成するには厳しいバックグラウンドだ。

私は練習後会長さんのところに赴き、河嶋さんとともに戦車道に参加する旨と練習内

容に関する提言を一緒に干し芋をつまみながらした。

私はい……華さんや沙織さんとの仲を考慮され、ⅠⅤ号戦車、あんこうチームに割り当てられることになった。なんと先日会った冷泉さんも同じ車輛だそう。走行中に寝たら蹴り起こそう。うん、そうしよう。居眠り運転ダメ、ゼツタイ。

2回目から私の指示を基にした練習が行われた。基礎練からの一般的なものだ。しかし簡単に自己紹介した上でそのことを河嶋さんから皆に告げられると、不満げな顔をするものもいた。

「急に基礎練習のみにするって？現状練習出来てるのになんで変えなきゃいけないんですか？それに今まで大洗の戦車道は桃さんが仕切ってたじゃないですか。どうして急にこんな何処の馬の骨か分からない奴が組んだ練習なんてしなくちゃいけないんですか？」

「ま、馬の骨なんて見たことないけどね」

「し、しかしだな、この西住は……」

河嶋さんの視線が不安げにこちらを向く。私は自分の扱いは向こうに任せてある。

「……戦車道の有名どころから来た者だ。私よりも戦車道にはずっと詳しい。西住を迎えることで、冬の大会に向けて相手と互角に戦える力をつけるんだ。マジノとの練習試

合の時、私たちはまともに張り合うことさえできなかった。私は……隊長として無様な負けだけは見たくない。その為だ。

無論これまでの練習方針は維持するし、練習内容は私も合意した上で決定するから、異様に厳しくなるとかそういうことはない。だから安心して練習に臨んでほしい」

「……」

不満げだが、一応は納得してくれたようだ。彼らにとつては私という異物の介入によりこれまでの流れが断ち切られることが恐るべきことなのだろう。私もこの空気を壊したいと思うほど空気の読めぬ場違いな者ではありたくない。

その日は私もⅠⅤ号戦車に乗り込み、装填手として練習に参加した。カイルでの行軍や的への停止射撃などの基礎練習のみで終わらせたが、それさえも次に進むための最低限の完成度を満たせていない。

流石に厳しいことは言えないから、地道にアドバイスしていこうか。

第1章 ⑤ スポンジ軍団のホームパーティー

その後の数回の教練で他のチームの履修者も私のことをある程度受け入れ始めてくれたようだ。砲撃、運転、構造上の注意などについて聞かれたら、出来るだけ分かりやすく、まあたまに沙織さんの言い換えを必要とする時はあったけど、アドバイスするようになった。

私の専門はドイツ戦車なわけだが、他の車輛は優花里さんの手助けも受けつつ説明していった。5ヶ月間の練習は決して無駄だったようではなく、チームの人々もそれらを受け入れる素地は出来ており、能力の伸びは見たことがないほどであった。恐らく石のような優秀な人材は揃っていた母校に比して、ここに揃っているのはスポンジのような素人ばかりだからだろう。

その日から暫くして、私は彼女らが必要とする水準に達したと判断して、彼女らが初日に見せた練習、流鏑馬の戦車版を練習させることにした。初めは装填手だった私だが、車長の優花里さんが私を下に抑えるのは申し訳ない、と役目の変更を申し出て、それを私は受けて車長の席に着いている。

無線を付けて速度を25 km/hに上げさせ、装填を早めさせる。

「優花里さん、装填はなるべく早目を心がけてください」
「分かりました！」

次の的の時は5秒になっていた。外した。

「華さん、3度左！優花里さん、4秒以内に装填！」

「ハイ！ただ今」

優花里さんの顔に焦りが浮かぶ。そりやそうだ。彼女の今の体力でこのスピードは困難なはず。優花里さんはその周でなんとか4秒で装填できるようになった。結局この周で当たったのは1枚、河嶋さんが他の車輛も速度を上げるよう指示したため当たる枚数は少なくなり、1枚も当たらない車輛も出た。3周目は当てることも重視しよう、と話し合った。まだ早かったかもしれない。

3周目は華さんが1枚目の板を命中させた。

「麻子さん、スピード落ちてる！もっと上げて！」

次の板は装填が間に合わず当てられない。

「優花里さん遅い！3秒！」

「ハ……ハイ！」

優花里さんの目に涙がうかぶ。疲れから装填に5秒以上かかってしまった。私からの蹴りが優花里さんの左側頭部に食らわされる。うん、これは信賞必罰だから。それに

あの時軍事オタらしくベラベラ話されたこと、少しは返しても良からう。正直あれはイラツときた。

「サー、イエツサー!!」

その時他の3人は冷や汗を流しつつ自分の分まで優花里さんが怒られているのだから、自分達はその分真面目に練習しなければと強く思ったようだ。飴と鞭は大事。

それに文句を言われなくなってきただけ、私もこの雰囲気の中に溶け込めてきているのだろうか。それとも雰囲気そのものが変わってきているのだろうか。

……他の人はその時の優花里さんの光悦した表情に気づくことはな……さそうだね……こいつマジモンのマゾなんじゃないやなからうか。

決して私がサドなわけじゃないぞ! 部屋のクマの人形も自作じゃないから! ちゃんと市販品だから!

逆に私もたまたま忘れ物を取りに行った際に、グラウンドで数チームが居残りで練習する様子を見た。必死に人工の丘陵を登り、稜線射撃になるよう角度を必死に整えている。彼らは目標を知らない。されどどんなチームが敵であろうと対等に試合をすることうに向けて皆が本気であることを感じ、彼らの期待に応えなければいけない、と感じた。大会以外では負けてしまってもいい。そこから何か学べるものがあるならば。紅白

戦なども織り交ぜるなかで、その思いは私の傷を覆い始めていた。

だって素晴らしいじゃないか、負けても傷すら負わないのだから。

練習が終わったある日の夕方、そこそここの面子での車輛の運用にも慣れてきた頃の帰り道で、沙織さんが一緒に夕食を食べないか、と言ってきた。無論皆用事も特になかった為、優花里さんが一度家に確認を取って来ると話した以外、皆即決した。問題は場所である。

一つの案は外食。まあ学園都市にも学生向けの店舗は多いので有りである。私もそうなる可能性が高いだろうと思つたし、博打になるなら賭けるのはこいつだ。練習で疲れてるから、というのが最大の理由だ。

他にも、とはいってもこれくらいしかないだろうが、小規模ホームパーティという案もある。だがまず誰の家か、準備してないのに食材はどうするのか、何も決まってる。しかし提案した人間が沙織さんだった、というのが私の賭け金を吹き飛ばした。一銭も失つてはないけど。彼女が作るなら、ということ以外話が決まってしまったのである。そしてその結果が、今私が部屋を必死に片付けている最大の理由だ。

「……うーん、まだ汚い気がするなあ」

掃除機はかけた。ベッドの布団の端は整えた。台所の洗い物も全て片付けた。玄関

も整理した。スリッパは人数分無かった。ボコの人形は全部定位置にいる。時間も近い。人を呼ぶなんて経験はほとんどない為、どこまでが許されるのかも分からないが、仕方ないけれどもここが妥協出来るラインかな。数人で階段を上る音が聞こえ始めてきたし。

料理を作ることになり、必要な材料は沙織さんが調達してきてくれた。ジャガイモやニンジン、レタス、ミニトマト、牛肉などである。これだけである程度候補は絞れた。

問題は誰が作るか、である。まず麻子さんは既に床の上で眠りかけているのでなし。続いて華さんは名家の娘さん故料理の経験が少なく、ジャガイモを切ろうとしたら包丁で指を切ってしまったのでなし。一応指は即座に消毒し、絆創膏を貼った。こういうのは場所によっては命取りだからな。

その対応をじっと輝かしい視線で見つめていた優花里さんは、実家住まいのため家庭料理を一人で作る技量はないとのこと、なお軍隊料理法なら使えるらしい。いや、飯盒とかあつても意味ないから……

残るは私と沙織さんだが、料理なら天才的技量を持つらしい沙織さんが主導することになった。メインは肉じゃがだ。

私はその間ご飯を炊き、優花里さんがレタスをちぎってボウルに入れて、その上にミニトマトを半分に分けて載せる単純なサラダを拵える。ドレッシングは家にあった和

風のものを使った。ボウルは手頃なものが見つからなかったので料理用の金属ボウルを使おうとしたところ、沙織さんに軽くキレられたため、皿2つ分に分けた。

華さんはその間に花瓶に花を生けていた。私には下手にそんな命を摘み取る趣味は無いのだが、彼女の手捌きと作り上げられた作品からは、使われた命の尊さをも包含する優美さが感じられた。

「じゃ、食べよつか!」

「はいっ!」

炊飯器が軽快な音を鳴らしてしばらく、私たちは麻子さんを何とか起こし、卓を囲んで手を合わせた。

「いただきまーす!」

美味い。私も最近自分で料理をするようになったが、焦がしたりするのが日常だ。そもそも肉じゃがに手を出したことはない。それに比べてなんだ!この肉じゃがは。料亭のつけ添えで出て来ても問題ないぞ。思わず一口入れて暫く固まってしまったじゃないか。気づいたら周りが全員見つめてて赤面したぞ、全く。だがその後に出て来た男にモテるためには肉じゃが、の超理論は分からん。いやそうとも限らんやろ。

私の知ってる男の中でマトモな人間は父親ぐらいだ。女子校にいたこともありよく知らないという部分はあるが、その僅かに知っている男は大概がマトモな人間ではな

い。私の記憶が薄れている人間は分からないが。

しかしまあ食事となると、それを肴にするにせよしないにせよ、話に花が咲く。学校での先生についての話、授業の話、最近のテレビ番組の話、果ては戦車道の仲間についての話まで。例えばウサギさんチームは練習試合で車輛放棄して逃げ出して、河嶋先輩にキレられた話だ。まあそれは私もキレル。というより軟式だからこそ出来ることだ。硬式なら機関銃の丁度いいのだな。

あとはカバさんチームは歴女の集まりで、それぞれ得意な時代があるとか。格好見ればある程度分かる。優花里さんとは特にエルヴィンさんと軍事史についてもある程度話が合うそうだ。

そんな中で一つの話題が飛び出した。

『私の前の学校はどんな所なのか』
である。

答えなくてはならないのは勿論として、これにはどのように答えるか、が重大な問題になる。言えないことさえザラにあるのだ。何を言おうか、少し迷いかけた。優花里さんはじつと顔を見てくる。彼女にとって私の母校には夢でも詰まっているのだろうか。

「……私の前の学校は黒森峰、ってところで……」

「黒森峰ですか。名前は聞いたことありますね。確か熊本の学園都市だったかと」

関東の人間にとってはその程度、か。

「はい。黒森峰女学園は熊本県中部にある学園都市であります。その名の通り女子校でありますね」

ま、優花里さんが話すみたいだし、下手なことを言ったら封じる程度で良いだろう。

「みぽりんがいたってことは、戦車道が強い所なの？」

「その通りです。高校戦車道全国大会で9連覇を達成したこともある強豪中の強豪です！使用している車輛もティーガーII、ヤークトティーガー、エレファントなどといった重戦車揃いで侮れません」

「強いな。何だ、財政的なバックアップでも有るのか？」

「まず戦車道の流派として最大規模を誇る西住流が単独で提携を結んでいるのが大きいですね。あとは黒森峰女学園が西日本でも1位2位を争う有力校であるのもあります。勉強のレベルも非常に高いと聞いてます。その分学費も高めに設定出来ますから、戦車道を支える一つの要因かと思われませんか」

「西住、ってことは、みぽりんが破門された、というのはその西住流ってこと？」

「まあ、そうなりますね」

「でもさ、そんな所と試合するかもしれないでしょ？勝てるの？」

「……現状だと、非常に厳しいでありますよね」

「ですが試合になったら、やれる事をやりましょう。そもそもその黒森峰と試合をするかも分かりませんし、まずは目の前の練習に注力しましょう！」

「そうだね、そういえば……」

そこで話題が変わった。そしてその先黒森峰の6文字が会話に現れることはなかった。

そう、これでいいのだ。この場は肉じやがが美味ければそれで構わないのだ。彼女らが西住流なんて、黒森峰なんて知る必要はない。コンビニが提携している1種類しかない寂しい所のことなんて。

結構長引いた。話すことが山ほどあった。そして洗い物をするところまで皆が手伝ってくれた。寮の出口まで送った後、彼女らが全て角を曲がって姿を失うと、私は顎を持ち上げて、月とシリウス以外も燦々と輝く夜空を見上げた。見る先には一点の曇りもない。

私が戦車道に加わって一月後、その日の教練が終わると全員整列し、正面に立った河嶋さんが口を開く。

「皆今日の教練もご苦労だった。早速だが今週末練習試合を行うことになった。場所は
大洗、相手は聖グロリアーナ女学院だ」

「!!」

驚きを隠せない。それは隣の優花里さんも同様なようだ。

「聖グロリアーナってそんな戦車道強いのか?」

沙織さんが私に小声で聞いてくる。

「聖グロリアーナは戦車道では過去に優勝経験があり、一昨年の全国大会で準優勝します。毎大会ベスト4には入る強豪校です」

優花里さんが私が答える前に答えてしまった。内容は一切間違っていないからいいか。「いやーダメ元でやったら受け入れてくれたんだよね。ということでもみんな用意しつかりねー」

会長さんが干し芋を食べながら言う。ほんとこの人干し芋好きだな。確かに美味しいとは思うけど、すつごく喉乾くんだよな。

それにダメ元じゃないだろ、多分。そんな強豪校にして有力校が何の目的もなくこの、言ってしまったら悪いが弱小の学園都市との練習試合なんて受けるはずがない。

「明後日の放課後に各車長と我々で作戦会議を行う。遅れず来るように。今日はこれにて解散!」

「お疲れ様でした。!」

総員の礼は試合への気合いを入れるものだった。

まあそのことは置いておこう。彼らの今までの努力と手に入れた知識、経験は決して無駄にはしない。

私の大洗での初陣が今始まろうとしていた。

第2章 練習試合です！

第2章 ① 初陣の初動

2日後の放課後、生徒会室。そのホワイトボードには河嶋さんが用意した試合会場の地図と黒い線の書かれた紙。

机の上には車長の数と会長さんと小山さんの分の地図が用意されていた。

「まず試合会場は前回も言ったが大洗で、その南西部の高台と隣接する市街地の一部だ。今までの彼らの戦いを見るにチャーチル、マチルダIIと言った歩兵戦車を中心に、輻数の関係からクルセイダー巡航戦車を投入すると思われる。

チャーチル、マチルダIIの装甲は厚い。我々の一番強いポルシェティーガー以外の戦車なら100m以内でなければ抜けないと思え。しかも相手にはちよこまかと動くクルセイダー巡航戦車がいる。整地60km/h出せるこいつの機動力に勝てる戦車は我々にはいない。遭遇戦になる上、舗装路が多いから市街戦は避けるべきだ。

そこでその地図上に丸をつけたところを見てくれ。東西に通る道の途中にあるその高台に待機し、1台が敵を手前のキルゾーンに引きつける。ここなら仰角から考えて敵は道中からこちらを狙うのは厳しい。

つまり擬似的な稜線射撃を生み出した上で、その手前の道で1列になった敵の部隊を倒して数的優位に立つ！特にマチルダやチャーチルを撃破出来れば、クルセイダーはこちらの装甲と大差ない。こっちにも勝ち目がある！」

河嶋さんがその右手をボードに叩きつける。

「おおー！」

どよめきの中で皆はこの作戦の成功を思い浮かべ、楽観的になっていた。ただ1人を除いて。

私は顎に手をかけ、頭で駒を動かしていた。悪くはない。彼女が今年から始めたばかりなのを考慮すれば、戦術の基本は抑えている。敵戦力が縦に細長くなる場所で、その先頭を戦力を集中させて順々に撃破する。各個撃破の典型だ。

イメージ的には陸上の地形を利用した丁字戦法、といったところか。だが典型的過ぎる。この地形を見たら、戦術の基礎に触れたものならばそれを考慮に入れるだろう。みすみすこれに掛かるものが隊長ならば、そのチームが大会で上位に進出することはあるまい。

そしてこの作戦は取り逃がすと両翼包围を受ける上、後ろの道の形状からして早期脱出が困難になる諸刃の剣である。そして生憎、現状の能力ではその刃はこちらを傷付ける可能性が高い。

要するに相手が如何様に行動するか、そして敵が直線状に並ぶ短時間で実際に撃破可能な能力を我々が持っているのか、それらが十分に計算されていない。少し顔が曇る。それを気付かれたようだ。

「どうしたの西住ちゃん。なんかあつたら言つてよ」

それを見て会長さんが身を乗り出して聞く。

「いえ……」

「言つちやつて良いんだよ。参謀として来てもらつてんだから」

にやけた顔で会長がさらに顔を近づけてくる。確かにこのことを言わなくて利点はない。皆も真面目にやつているのだから私もちゃんと言うべきことは言わねば。河嶋さんの方に顔を向ける。

「あの、確かに待ち伏せ作戦は良いかと思えます。しかし相手の装甲と今の我々の砲撃の腕ではキルゾーン内で全車両仕留められるか微妙です。もし突破されたら、地形的に我々は両翼から挟み撃ちを食らうことになります」

なるほど、ああ、といった声とともに頷く者などが出る。

「五月蠅い！黙れ！これ以上の作戦があるというのか！そもそも車輛数が同じといえども、乗員や車輛の質的には大きな差があるんだぞ！地理的優位を優先的に確保するのは当然だろう！なんなら貴様が作戦考えろ！」

ただ一人そうではなかった河嶋さんが反論する。いや反論ではない、単に激昂しているだけだ。この人練習でもキレる時あったけど、まさかこれでキレるとは思わなかった。いや、その『地理的優位』が本当の優位とはなり得ないだろうから言っているのだが。

だが強く言われると萎縮して言い返せなくなってしまうのは、私の悪い癖だと思ってしまう。それに私もまだより確実性のある他の策を思い付けていない。

「まあまあ。西住ちゃんの言うことも最もじゃないか」

会長さんが私の側に着きつつ、河嶋さんをなだめてくれる。

「それと、」

その中でナカジマさんが手を挙げた。

「この待ち伏せの場所の背後に道があるじゃないですか。そこから敵が来た時の対策はどうなっていますか？」

「よくぞ聞いてくれた！」

間髪入れずに自信ありげに、河嶋さんの右手の指先がナカジマさんの方を向く。

「これが今回の待ち伏せ場所での戦車の配置だ」

もう一枚の紙がホワイトボードに張り出された。それは待ち伏せ予定地の場所の地図を拡大したものである。崖に挟まれた東西に渡る道の途中に、例の高台がある。その

高台のところに、縦に戦車を表すと思われる記号が9つ並ぶ。

「北からIII突、3式、Blbiss、M3、マークIV38t、ポルシェティーガー、八九式。IV号が困だ。そして場所はキルゾーンの方を前に弓形の布陣をとる。重要なのはM3とBlbiss」

「えっ?」

「うちらなの?」

澤さんと園さんが前を向く。

「その2車輛は砲塔の回転で前後ともに攻撃が出来る。万が一挟み撃ちをされても前後両側を攻撃出来るこの2輛を中央に置くからその2輛は東から来た戦車の撃破もしくは足止めを頼む。こちらの道は2輛も通れない狭い道、1輛封じれば道は塞げる。その時III突は砲塔を向けるのに時間がかかるから下に行つてもう一方の側面を叩く!」

またどよめき起きた。皆を再び楽観的な空気が包む。ここに陣を取るならばこの布陣には同意する。しかしその空気に私の挙げた問題はかき消されてしまった。しかもBlbissの人員では両方からの攻撃に耐えるには足りないと思われたが……

そのまま作戦会議は終わってしまった。

週末、大洗の港に接近した学園艦から9輛の戦車を載せた輸送艦が出航した。

大洗女子学園は今では数少ない学園艦のひとつだ。だが事情により大洗の港には接岸出来ない。向こうもまた学園都市から輸送艦に戦車を載せて大洗港に乗り付けている。

こちらはその後専用車両で試合会場へ向かう。試合会場周辺は封鎖され、近くの広場には久々の地元での試合に合わせ、多くの出店と住民が観戦に来ていた。祭である。この住民たちも試合会場になったため家にいらなくなりこつちに来ていている場合あるため、一様に喜ばしい姿だと断言することは出来ない。

試合開始場所には大洗の戦車9輛、聖グロリアーナの戦車はチャールズ歩兵戦車1輛、マチルダII歩兵戦車4輛、クルセイダー巡航戦車4輛、そして華美な服装をした者たちがその背後で一列に並んで曲を演奏している。

平和日本の始め 命を受け

蒼海の中より興る

相模の友ぞグロリアーナ

伝統ぞ証 成長の証ぞ

我らの先人は 歌い合えり

統べよグロリアーナを 海原を鎮めよ

グロリアーナは崇高であれ

それが彼女らの所属する学院の歌であることは、聞けばすぐにわかる。

私は隣にいた会長さんを肘で突いた。

「ちよつとちよつと、会長さん？」

小声で耳元に口を寄せる。

「どつたの？西住ちゃん？」

「いやいやいや、何ですか？彼女ら、グロリアーナの学院長親衛隊の軍楽隊ですよ？何でこんな練習試合の応援に呼んできてんですか？」

「私が呼んだんじゃないよ？向こうが勝手に連れてきた。まあ私も試合の盛り上げ役として丁度いいからOK出したんだけどね」

「いやしかしですね、私は外交は門外漢ですけど……」

「門外漢なら、専門に任せてくれないか？」

一枚干し芋を齧りながら、会長さんはこちらに視線を向けた。じつと、私の動きを封じる風を呼び寄せる。なるほど、彼女は分かっているのだろう。それがどういふ道かは知らないが。

チャールズ歩兵戦車のキューポラから紅い服に身を包んだ少女が現れた。身軽に戦

車から降りると一歩前に進み出る。こちらは河嶋さんがこれを迎える。

「この度は急な申し出に関わらず受け入れてくださったこと、誠に感謝する。ダージリン殿」

河嶋さんが頭を下げる。

「構いませんことよ。我々は黒森峰やプラウダなどの行う野蛮な戦いには身を染めませんの。それに出場しないならば、互いに騎士道精神に則り正々堂々と試合を行いましょう」

ダージリンさんは少々微笑み、身をあげて河嶋さんと握手を交わす。両校の生徒は一列に整列する。

「只今より聖グロリアーナ女学院対大洗女子学園の試合を始める。一同、礼！」

「よろしくお願いします」

審判の透き通る声と皆の挨拶がよく広がる。

「それでは20分後に開始となります。各校、準備を！」

両校の生徒は各車輛に去った。向こうから聞こえる校歌の続きを口ずさんでいたら、沙織さんから不思議がられた。

審判の笛の合図とともに両校の戦車が発進する。

「今回の作戦を確認する。今回はあんこうチームが囿となり、我々が待機する523地点まで誘き寄せる。それ以外は移動後北から予定通り並んで待機。車長は場所を操縦手と連絡しながら移動するように！」

確かに相手は強豪、我々なぞ取るに足らぬ相手かもしれない。だが我々だって練習して自分たちの技を磨き上げてきた。それを今こそ示す時だ！絶対勝つぞ、いいか！」

「はい！」

河嶋さんから作戦の確認と檄が飛ぶ。車輛はⅠⅤ号を除いて途中で右折し、待ち伏せの場所に向かう。私はキューポラから身を出した。正直気分は乗り切れない。斜め上に長く息を吐き出す。

ⅠⅤ号は直進し、平原を見下ろす場所に陣取った。

「私が偵察に向かいます。皆さんはそこで待機してください」

「西住殿、私も行きます」

優花里とともに車外に出て、平原が隅まで見える場所で身を伏せた。

視界の右側から砂埃とともに陣形を組んだイギリス戦車の群れが現れたのは、それから間も無くであった。

「敵5輛前進中。チャーチルとマチルダⅠ」

双眼鏡で確認した。色も皆違うから分かりやすい。

「距離1040メートル」

「へっ?」

いきなり距離を算出した私に優花里さんは驚くいたようだ。なぜなら私の持っている双眼鏡は優花里さんが持っているようなメモリ付きのものではない、ただの曇りのないレンズだったのだ。優花里さんは自分のもので測ったようだが、すぐに1040メートルだと算出した。

私は嫌いだが流石は軍事オタクという人種に区分けされるだけはある。戦車の大きさは頭の中に書き込まれているようだ。言っておくが彼女自身を嫌うわけではない。その一面以外が素晴らしいことは私自身よく知っている。

「すごい!どうして分かったんですか?」

「この双眼鏡使い慣れてるし見た目の大きさと実際の大きさを比べたらわかります」

あっさり言ってしまったが、これは当然なものではないのだ。彼女の啞然とした口と憧れが込められた目が組み合わさった表情がその証明だ。

「それにしてもすごい行軍ですね」

「はい。あれだけスピードを合わせて走れるなんて素晴らしいです」

「我々の戦力だとポルシェティーガーしか正面装甲は抜けませんが」

「それは戦術と腕かな?」

微笑んだ顔を優花里さんに向け、沙織さんに合図した。あ、カッコつけすぎた……
「こちらあんこう。敵発見、これから引きつけます」

河嶋さんが答えたことを沙織さんがハンドサインで示す。私は一つ咳払いをしてから、キューポラの中に身を投じた。

「麻子さん、敵に気付かれないようにゆっくりエンジンかけて。優花里さん。AP（徹甲弾）装填」

「はいー」

短いリズムで低音を刻むエンジン音が響き、IV号が少し前進する。

「華さん、狙ってください。距離は980です」

砲塔が少し回り、砲声とその後には砲弾がマチルダIIからIメートルほど離れた所に着弾した音が、視覚より少し遅れて流れてきた。上がった土煙を眺め華さんが振り返る。

「すみません、みほさん。外してしまいました」

「いえ、いいんです。撃破が目的ではありませんから」

あの練度で最初からあの近距離に寄せるとは、やはり華さんには静止射撃の才能がある。黒森峰のあの人よりは上かもしれないな。

ふとあの顔をが頭をよぎる。生きる為に能力的に排除しようとした彼女の顔が。や

めろ、この試合くらいはやめてくれ。

「西住殿、大丈夫ですか？」

優花里さんの声で幻影はとりあえず消えた。気を取り直して深呼吸。敵は5車輛陣形を歪ませることなく旋回し、こちらに向かつて来ていた。

「では敵をポイントまで引き寄せます。麻子さん、できるだけジグザグに走って敵を攪乱してください」

「分かった」

敵の第一射が近くの岩に命中する時、撤退命令を下す。

ダージリンは着弾後、装填手オレンジペコの淹れた紅茶を飲み切った。

「あそこからですか。アツサムさん、あなたの言っていた羊達は少しは走り回るようですわよ」

砲手アツサムが照準を冷静に合わせながら答える。

「それでも羊には変わりありません」

「全車追撃」

指示を下すと、それに対する返事かのごとく通信手が他の車輛との無線を繋いだ。

「こちらローズヒップ。敵8輛を523地点で発見しましたわ。どうなさいます？ダー

ジリン様のおっ紅茶の冷める前に勝負を決めてしまってもいいのでは？その為の準備は整っておりますの」

ダージリンは不敵な笑いを浮かべる。

「紅茶はポットに蓋をして蒸らしてから楽しむものよ、ローズヒップ。そちら4輛は待機。次の指示を待ちなさい」

5 輛はIV号への追撃を開始した。

「やはり凡庸なる羊のようですね」

「全く」

5 対1の競争は熾烈になっていた。次々火を噴く砲塔。それらを私の指示のもと麻子さんは見事に車輻を左右に揺らし、回避していた。この技術は黒森峰の親衛隊に居ても遜色ないレベルだ。おまけに操縦方法をマニュアル読んだら覚えていた、と聞いた時は私でも啞然とした。そんな人間がゴロゴロいたら世の中楽だろうに。いや逆にその中で凄い奴が出てくるんだらうな。

「みぽりん、中に入って」

沙織さんが頭の上の蓋を僅かに開けて呼びかけてくる。

「こちらの方が敵の様子が見やすいので。軟式だから当たってどうこうなるものでもな

「いのですし」

「そうじゃなくて、万が一みぼりに何かあったら……」

ほおを緩めた。自分より友である私を心配してくれる人がいることが嬉しかった。まあこれを全く無視するのは後味悪そうだ。

「ならばお言葉に甘えて。あ、麻子さんすぐ左に！」

10センチほど身を屈めた。そしてすぐ右にマチルダIIの砲弾が着弾した。

「こちらあんこう、あと4分でこちらに到着します」

「了解。こちら異常なし」

「クルセイダーが見当たりません。気をつけてください」

「分かった」

「……下手を承知で申し上げますが、もう1輦、例えば89式とか偵察出しませんか？クルセイダーの動向が一向に分からないのは厳しいものがあるかと」

「いや、下手な分散は各個撃破的になる。ここで火力を集中せねば、撃破出来るものも出来なくなる。そちらの5輦が集団で行動しているところを見ると、クルセイダー4輦も集中運用している可能性が高い。1輦だけ繰り出しても見つかったら終いだ。特に八九式ではな。」

今回IV号を偵察に出したのも、一定の機動力といざという時にはそれらを相打ち出

来るだけの火力を見込んだからだ。それに匹敵する車輛はここにはない。それに最も近い三式では相打ちまで持ち込める練度はない。これから離脱させる時間も無い。よつて却下だ」

「……はい。準備を宜しく願います」

一方ダーズリンも同時に無線を使った。

「あと4分でそちらに到着しますわ。用意しておいてくださいいね」

「おつまかせですわ。葉っぱのダンスは終わってしまいましたし、蒸らしすぎてミルクティーにびったりになっておりますの。底までしっかりかき混ぜて差し上げますわ」

「素晴らしいわね。さあ、羊は足の速い牧羊犬を使ってまとめますわ。ペコ」

「了解です。AP装填完了」

「It's game time.」

ダーズリンは右手を前に差し出した。

「さあ、戦車道を楽しみましょう」

第2章 ② 我が意志よ

あと3分でポイントに着こうとするときに入った無線に驚愕した。

「クルセイダー4輜が背後から急襲。キルゾーンを突破された」

こちらはもうポイントまでの一本道に入った所。背後から敵が追ってくる中引き返すのは不可能。つまりクルセイダー急襲で混乱しているまさにそこに、チャーチルとマチルダIIが乗りこんで来るのである。しかも挟み撃ち。

「取り敢えず私達が撃破されないように後退！」

最早絶対絶命、私の考えた最悪のシナリオが実行されていた。

こちらは523地点。敵が来た時にウサギさんチームのM3とカモさんチームのBlissの放った砲弾は、全速力で突っ込んでくるクルセイダーに華麗に避けられ、カモさんチームとウサギさんチームはすぐにクルセイダーの砲弾の餌食になった。「IV号が来る前に潰せ！撃てっ！撃てっ！撃ちまくれい！クルセイダーの装甲でこの近距離なら、当たれば撃破出来るぞ！」

河嶋はそれしか命令しない。まさにトリガーハッピーの状態だ。しかも自分の撃つ

た弾は一発も当たらない。そんな感じのカメさんチームの38tもすぐに側面に砲弾を食らいお陀仏になる。III突はなんとか下に回避して、IV号と合流するときに備えていた。

高台では砲撃戦が繰り広げられる。レオポンチーム、アライクイさんチームが1輛ずつ撃破したが、こちらは撃つた直後のアライクイさんチームの3式とサメさんチームのマークIVが撃破され、レオポンチームもエンジン近くに被弾している。

酒場での乱闘が繰り広げられていた。

「カモさん、ウサギさん、カメさん、アライクイさん、サメさんが撃破されちゃって、レオポンさんも危ないって。乗員はみんなは無事だよ」

沙織さんからの報告に流石の私も耳を疑う。たった1分で5輛撃破、しかも最主力のポルシェティーガーが撃破寸前である。おまけに隊長車が撃破されている。この相手がクルセイダー4輛だと言うのだから驚きだ。仮に4輛全て犠牲にする気でも、こっちにこれだけの損害を与えられた上、先頭から砲撃というこっちの作戦を封殺出来るなら大いに価値がある。

こちらの策に対する対応としては最善ではないが十分過ぎる。私なら後ろの道を作る崖の上に待機させ、合流直前に稜線射撃させて上からボッコボコにしてやるところだが。そしたら最後にノコノコやってきた私たちを撃ち抜いておしまいだ。

ま、そこは彼女らの言う騎士道とやらの成した道なのだろう。あるいは時間の関係か。こちらに救いがあるなら、彼女らがとった策が最善ではないことと、負傷者が確認されていないことだろう。

「急ぎましょう」

焦りを隠しながら淡々というしかなかった。

ダージリンは戦況報告を聞きほくそ笑んでいた。

「そして最後に羊を頂くのは一番強いブルドッグ」

新たに淹れられていたカップの紅茶を全て飲み干した。

「ブルドッグですか？」

オレンジペコが装填しながらダージリンを見上げる。

「そいつは牧羊犬ではないわ。番犬よ」

一発撃ったアツサムが言う。ペコは首を傾げる。どうやら意味が分かっていないようだ。

大洗側は大きく混乱していた。隊長車が撃破されたため命令が途絶え、なんとか個々が戦っている状態だ。私から話しかけても返事がくる車輛はない。

「西住ちゃん！」

急に会長さんから無線が入る。

「会長さん、大丈夫ですか！お怪我は！」

「それはいいんだ。全員問題ない。それよりこつからの指揮は西住ちゃんが採つてくれ」

「えっ？ちよつ……」

「頼んだよ。負けたら祭りでチームごとあんこう踊りやつてもらおうから！」

急ぎ目に、しかし耳に残る声が駆け抜けた。

「えっ？あんこう踊り……切れちゃった」

沙織さんが声を震わせて振り向く。

「み、みぼりん？い、今何て言った？」

「会長さんが指揮は私に任せることにして、負けたらうちのチームごとあんこう踊り？というのをやれって」

「あんこう踊り！あれ踊ったらお嫁に行けない！」

沙織さんが頭を抱える。何なのだそれは？

「絶対ネットで晒し者にされます」

優花里さんも同調する。

「よくわからないですけど……そんな酷い踊りなのでしょうか？」

「勝とうよ！勝てばいいんですよ！」

「そうですね。試合ですから負けるわけにはいきません」

「そうですね、やりましょう。西住殿！」

「やるしか無いぞ、西住さん」

皆がこちらに勝利を求め呼び掛けてくる。本当にあんこう踊りとは何ものか。少なくともこうやって絶望の淵から戦意高揚に繋げられるだけの力は持つようだが。

いや、そんなこと考える場合ではないな。隊長、副隊長兩名が失われた今、やる他ない。皆で勝ちを掴みに行こうか。

「……分かりました。どこまで戦えるか分かりませんが、できる限りのことはやりましょう」

力強く息を吸い込み、私のかつての心呼び起そうとする。勝ちへの絶対的な希求を。

「沙織さん、他の車輛の現状を！」

「分かった。アヒルさん！」

「こちらアヒル！一応無事です！車長に繋がります！」

近藤さんの声が返ってくる。

「うちの車長が臨時の隊長になります。よろしくお願いします」
「了解した！指示を頼む！」

無線を繋がれた磯辺からの返事が返る。その後もカバさん、レオポンさんも私の隊長案に賛成した。まあこれは隊長の責任回避もあるんじゃないかなろうか。

「まずクルセイダーの撃破を優先してください。III突も上に上がって」

「OK」

レオポンチームの中島さん

「心得た！」

カバさんチームのエルヴィンさん

「了解しました！」

アヒルさんチームの近藤さんが答える。

坂を登り左側面に退避していたIII突がすぐにクルセイダー1輦を仕留める。

「こちらカバ、1輦やったぞ」

「分かりました。我々の到着と共に市街地へ後退します。レオポンさん、しんがりを頼みます」

「了解したよー」

「why not！」

「大洗は庭です。任せてください」

皆の陽気な返事が帰ってくる。期待がこの一身に集められるのを感じた。I V号が斜面の右から登るなかで、3輛に囲まれつつあった最後のクルセイダーを近距離で撃破した。これにより、大洗は背後への退路の確保に成功した。

「全車後退！ あんこうを先頭に進んでください！」

裏の道に入り、他の車輛の速度を見つつ砲弾を躲しつつ移動する方向を麻子さんに指示する。これは容易いことでは無いが、私からしたら難なくこなせることであり、むしろそれを聞いて素早く速度と向きを変える麻子さんの方が素晴らしい。

するとしんがりのポルシェティーガーのエンジンから煙が登る。それと共にポルシェティーガーはとまり、自動判定装置の旗が上がる。

まあもともとぶつ壊れやすいエンジンに砲弾を打ち込まれていたんだ。ここまで動いたことを奇跡と思おう。

「こちらレオポン、やっちゃった」

「いえ、ありがとうございます」

「西住さん、宜しく頼むよ」

ポルシェティーガーが道の半分を塞ぐ形になった。そのおかげで敵の行動を遅らせ、

私達はなんとか敵を振り切り市街地に入った。アハトアハトの喪失は痛い、寧ろこれからの戦いでその巨躯は障害になり得る。そう思おう。

「こちらは3輛、敵は5輛。戦力、防御力は相手の方が上ですが、こちらは地の利を活かしましょう」

さあこい田尻凜。これが私の、負けが許されるがそうしたくない意志が見せる戦いだ。

道中を警戒しながら進んでいたマチルダⅠⅠに対し、路肩の狭いところに入ったⅠⅠ突が側面から奇襲を仕掛け、白いフラッグをはためかさせた。

「やったぞ！マチルダⅠⅠ一輛撃破！」

沙織さんの無線に状況を伝えるエルヴィンさんの嬉々とした声が舞い込む。彼女らから提案された作戦だったのがこんな上手いくとは。

私はすぐにその場を離れるよう指示し、彼らの土地勘に委ねた。

その頃もうⅠ輛のマチルダⅠⅠが罠の中に入ろうとしていると報告が入った。屋内駐車場と二段式パーキングが向かい合わせになっている場所にアヒルさんチームが待機し、わざわざブザーを鳴らしてまで迎え入れたそうだ。

「こちらアヒル！マチルダⅠⅠ撃破！」

続いてアヒルさんチームはそう一報を送ってきたが、一応麻子さんに場所を確認させてから、いや確認するまでもなく煙の立ち上り始めた場所へ向かってもらった。

アヒルさんチームは驚いただろうな。駆けつけたあんこうチームのⅣ号が砲身から煙を登らせながら走り去ったのだから。

やっぱり八九式じゃ無理だったか。保険かけといて良かった。煙が出てたから燃料タンクは壊せたみたいだけど。さてこれで2輛撃破。数ではトントンになった。だが向こうもこちらの遊撃戦を許してはくれないだろう。ここからが勝負よ。

「マチルダⅠー2 輛撃破されました！」

ダージリンの乗るチャーチルにこの報告が飛び込むと、彼女は驚きで右手を滑らせた。反時計回りに回りつつ地に落ちたティーカップが割れて四散する。これで3輛対3輛。数的優位は失われた。思わず顔をしかめる。

「おやりになるわね……」

おそらくこの変化はⅣ号のあの少女、西住みほによるものだろう。面白くなって来た。カップを失った分以上に楽しませてもらおう。

「全車作戦変更」

あんこうがマチルダⅠⅠを撃破してからしばらく、エルヴィンから報告が入った。

「待ち伏せ場所の近くに敵がいる。こちらには気づいていない。狙うなら今だ」

さてここで yes と下せるか、それが重要だ。聖グロリアーナほどの敵が何度も待ち伏せに乗るのか、と。おまけに先ほどの場所に近い、ということが私を惑わせる。

「隊長、攻撃命令を！」

エルヴィンさんが急かしてくる。確かにここで機会を逃す方が後々響くかもしれない。

「……わかりました。くれぐれも慎重にお願いします」

それから30秒後、

「こちらカバさんチーム。すまない、撃破された。囮作戦を使ってきた」

敵が油断を無くした。明らかに私のミス。撃破の為の火力は完全にⅠⅤ号に託された。そう考えていた時側面から履帯の音がする。チャーチルだ。

「側面にチャーチル！全速前進！」

麻子さんにアクセルを踏み込ませる。また壮大な追いかけてが始まった。合流した残りのマチルダⅠⅠと共にチャーチルが全速で逃げるⅠⅤ号を追う。麻子さんの土地勘に頼りつつこちらは敵の攻撃を避けさせ、周囲の道路や建物が砲弾の餌食となって

崩れ落ちる。

ただひたすら逃げるしかないIV号は当たらずに済んでいたが、いきなり道の真ん中に看板が見えた。工事中による封鎖だ。考えてみれば船の上には彼女らに最近の工事の概要など知りようもない。誰も責められない。

引き返そうとするが、背後にはすでにチャーチルとマチルダII2輜が来ている。砲塔を回転させて対応しようとするが、まもなく雁首そろえてIV号にその砲塔群を向けた。

「こんな諺を知ってる？イギリス人は恋愛と戦争では、手段を選ばない」

チャーチルの上でダーズリンが何かほざいているが、知るかアホ。そんなことはどうでもいい。重要なことじゃない。今ここをどうやって切り抜けるか、いま考えるべき問題はそれだ。ダーズリンの拳がった手が振り下ろされようとしたその時、

「ゆくぞー！」

左脇の道からサツと八九式が入ってきて、急ブレーキをかけた。

「アヒルさんチーム！」

「来てくれたんですね！」

優花里さんの喜びの声を聞いた。

可能性が姿を露わにした。プランが早急に固まる。

軽い金属音がその後にこだました。チャーチルの装甲が厚すぎて撃ちぬけなかったのだ。マチルダⅠも撃ち抜けないからしようがないね。

次の瞬間には3つの砲身が火を吹いた。その3発は全て89式を撃ち抜き、煙と共に旗が上る。

「1秒停止！マチルダⅠに1発撃って！そしたら脇に！」

3輦が一斉に撃った後の絶対的なタイムラグ。

4秒あれば十分だ。

砲塔と車体の間を狙った1発は見事にマチルダⅠを撃破へ導く。

敵の弾を捨てさせたことへの感謝は後で伝えねばな。

脇に入ったら次の角で右に、全速力で突っ走らせる。

途中の道で敵視認。

やはり歩兵戦車は歩兵戦車だった。

「麻子さん！次の角右に曲がったら壁に沿って走ってください！」

素早く車体をカーブさせ、角へ急ぐ。

道から最後のマチルダⅠが砲身を覗かせる。

直ぐに停車させ、素早く撃たせる。

その弾は側面に見事に命中した。

白い旗が登る。

あとはチャーチルとの一騎打ちのみ。

「後退！」

素早く車体を後退させる。チャーチルが発砲するも蛇行した車輛には当たらない。

I V号も素早く発砲するもチャーチルの厚い正面の装甲に弾かれる。

デカブツだけに大層な装甲を持ちやがって。

I V号は数少ない可能性のある側面を狙いたい。

しかしそれを察しているチャーチルは側面を見せないように移動する。

その機動、まさに見事。

このままでは防御の薄いI V号の方が不利だ。

「短期決戦で行くしかない」

次のチャーチルの弾丸が右側に着弾する時に指示を出した。

「敵に突撃するふりをして素早く敵側面に回り込んでください。旋回は出来るだけすぐ

に終わるように。かなり難しいと思いますが麻子さん、出来ますか？」

「やってやろう。そうすれば勝てるんだろう？」

どう考えても戦車道を始めてから半年の人間に頼むことではないが、この際気にしていてはいられない。

彼女の技量なら可能だ。

優花里さんが装填を急ぐ。

麻子さんが撃ったあとの煙の残るチャーチルの正面へ進める。

チャーチルがすらりと長い砲身をこちらに向ける。

「今っ！」

その声と共にI V号は左、そしてすぐ大きく右に曲がる。それに合わせチャーチルの砲身もぐるりと回る。

甲高くコンクリートの地面を削る履帯。

そして互いに静止する。

双方の砲が火を吹いたのはその直後だった。

煙が周囲を覆う。

無言の煙が晴れた時、純白の旗は一本のみ挙がっていた。

その旗の側にはあんなこのマーク。

「大洗女子学園、全車輛撃破！ よって聖グロリアーナ女学院の勝利！」

審判は笛の音に続き宣言した。

大洗は、負けた。

キューポラの縁に寄りかかった。顔には少し笑みが現れているだろう。

満足だ、ただそう思った。自分の出来ることはやった。敵が手強いことが非常に面白かった。この負けも生きて味わうことが出来る。

これまでこの気持ちも味わえる戦いはいつぶりだろうか。

口から微かに声が漏れる。

「待って！」

沙織さんの一言で現実に戻される。

思わず斜め下の車内を覗き込む。

「負けたらうちのチーム全員であんこう踊りじゃ……」

「あつ……」

だから本当に何なのだそれは。

「取り敢えずやれることはやったんだ。戻るぞ」

麻子さんがなんとかその場をまとめ、私も力の抜けた体をキューポラから引き抜き、全員車輛から出て移動する。

「全員、礼！」

最初の場所に集まった両チームの選手再び互いに一列に並んで頭を下げた。まずは

破損した車輛の輸送準備だろうか、と背筋をぐいと伸ばしていた。するとダーズリンが部下らしき女を2人連れてこちらに歩み寄ってきた。

「貴女が西住さんでしょうか？初めまして、聖グロリアーナ女学院戦車道部隊隊長、ダーズリンですわ」

おまけにこちらに向けて話しかけてきたのだから、私は身体が急にロボットになった気がした。

「は、はい。私が……西住みほ、です。隊長でもない私のことを覚えて貰っているとは、えっと……本当に光栄です」

正面に向き直り深めに礼をする。

「貴女を知らない戦車道関係者の方が珍しいと思いますわよ。それよりも貴女がかの学園を離れた後も戦車道をなさっているとは、少し驚きましたわ。あれだけのことがあった後ですもの」

「……えーと、これにはなにぶん理由がありました……」

来たばかりとはいえウチの学校の評価は落としたくないから、なんと言えば良いか。

「えっと……みほりん、相手の隊長さんと知り合いなの？」

傍から沙織さんが顔を覗かせた。この話を切ってくれたのはありがたい。話しづら

いったらありやしなかつたからな。

「まあ……知り合いといますか……」

「話したことはないけど、互いの顔は知つて共々認識している関係、といったところでしょうか」

詰まつているところに最適な助け舟が流されてきた。

「そんなところ……なんででしょうかね？」

「分かりにくいよー、もー」

「彼女は？」

「私の車輛の通信手にして、友人である武部さんです」

「初めまして。武部沙織です！モテモテになる為に戦車道やってまーす！だけど最近は戦車道やることそのものが楽しくなってきました！」

阿呆。少し舌を出して顔の横でピースサインしながらいきなり言うことがそれかい。キラツとか擬音が付いてそうだぞ。ダーズリンさん思いつきり面食らつてるじゃないか。まあ戦車道を楽しそうにやる友人の姿を見せられたのはプラスかな。

「な、中々個性的なご友人をお持ちですね」

「お恥ずかしい限りで」

「恥ずかしいって何よー！」

見たまんまだわ。恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。こつちが頭下げなきやいけなくなるだろうが。私たちの世代での戦車道の主流を担うであろう方にかかる言葉ではない。

「ですが貴女の笑顔が見れただけで、こちらとしては十分ですわ」

「あ、えつと……一つ疑問があるのですが、宜しいでしょうか？」

軽く手を挙げて顔をダージリンさんの方へ戻した。初めて話した人にこちらから声を掛けることが出来たことは、後になってから驚きをもたらした。

「ええ、簡単なものなら」

「ありがとうございます。本日の試合、あのクルセイダーの投入時間から貴女方は我々をそれ以前に見つけていた、つまりI V号を除く残り8輜があの場所にいたことを知っていたはずですよ。」

なら何故そのまま両端を塞いで叩かなかったのです？クルセイダーを先に投入しなければ我々はまともな手を打てず全滅し、貴女方もこの試合ほどの被害は出なかったでしょう。そしてその程度のことには貴女が気付かなかったとは思えません。

宜しければ何故そうしなかったのか教えて頂けませんか？」

ダージリンさんは手に持っていたカップを少し傾けてから微笑んだ。

「簡単な話ですわ。あの程度の作戦、貴女が立てるとは思えませんもの」

「……と仰いますと?」

「貴女と正面から戦ってみたかった、というのは理由として不足かしら?」

「……率直に申し上げますと、この戦車道部隊はそこまで優秀ではありませんし、外部にもそのように認知されているでしょう。そこにグロリアーナが練習試合とはいえ負けた、若しくは戦況が拮抗したとなれば、グロリアーナにおける貴女の立場は悪化するでしょう。」

それは貴女が望む所ではない。それでもこの試合で最善の勝ち方を狙わないのですか?」

「試合前に申し上げたでしょう?我々は野蛮な戦いには身を染めませんの。軟式戦車道においては勝ちが全てではありませんわ。それくらい学院も学院長殿下も承知済みです。」

それに私は仮に一騎打ちになっても負ける気はありませんから」

話には幾らか納得出来たが、流石に私に対して油断し過ぎだ。ひとつ釘を刺しといてやろう。

「なに、次があるなら私が勝ちます。そういうことなら私も安心して戦えますよ」

「あら、それは楽しみにしておりますわ」

次、か。私から言っておいてなんだが、そんなことを考えたのも前、いつあっただろ

うか。勝たねば組織内で足を掬われる。場合によっては死。そんな世界では思いもしなかったことだ。

「ダージリン様、そろそろ」

背後の部下の1人がダージリンさんに耳打ちする。

「ええ、そうしましょう。すみません、西住さん。そろそろ……」

「あ、お引き止めして申し訳ありませんでした」

ダージリンさんは手を振りながら背を向け仲間と合流していた。戦車の方に見せかけて少し離れた場所へと引き下がっていく。

「流石ですよ西住殿！あのダージリン殿に直々にお声を掛けていただけなんて！」

「みほさんをお褒めになっただけじゃないましたし、私も嬉しいですよ」

「よく分からんがよかったな。勝てなかったけど。あ、戦車は自動車部が仮整備、輸送含めて手配済みだそうだ。学園艦に帰ったら整備も全部するらしい」

他の3人も話が終わったタイミングで私たちのいる方へやって来た。

「それはすごいですね。あの量ですよ？」

「徹夜でやれば一晩で出来るらしいぞ」

「ジョークだろう？黒森峰の整備隊でも20輛使った試合の整備なんて、10人使って1日がかりだぞ。たった4人で夜も眠らず、それで車輛のお国もバラバラな9輛を修復

するとは。いや、練習の時も次の日には全部修理済みになってから凄いとは思っていただけど……損傷のレベルが違うぞレベルが。

そのの見物はあと回しにするとして、反省会をとっと開きたいところだが、どうもそうはいかないようだ。

「いやー、お疲れ。西住ちゃん」

背後から会長さんが声をかける。生徒会の2人も一緒だ。

「約束通りやってもらうぞ」

河嶋さんが5人に視線を向ける。その目に怯える者と悟る者と理解していない者がいた。

「はい服」

そう言つて会長さんが真つピンクな服とこれまたピンクの帽子を取り出した。襟を持ち一枚ずつ数を数える。

「うん、8枚あるからよろしく」

「えっ? 8?」

河嶋さんが冷や汗を流す。

「うちらもやるよ。頑張つた部下にやらせて隊長がやらないってことはないよね? こういうのは連帯責任だし、何より隊長が真つ先に撃破されたのはいかんでしょ」

会長さんがサラツと言う。小山さんは微笑みを河嶋さんに向ける。

会長さんとはかく、やつぱり小山さん腹黒いだろ絶対。沙織さんは温厚そうだった紹介してくれたけど。ガチギレしたら全裸で戦車に載せたりしそう。無表情で。私の空想であつてほしいけど、もちろん。

「うっ……」

「ダーズリン」

少し離れた場所へ会長さんが呼びかける。その声にダーズリンさんはどこからか仲間とともにこちらへ向かってきた。ていうか呼び捨て？

「如何しましたか、角谷さん？」

「私らこれから向こうの広場で歓迎も兼ねて踊るんだ。見に来てよ」

「そのピンク色の服ですか？ 私たちに媚びても上とは繋がりませんわよ？」

「なあに、そんな面倒な裏はないさ。敗者の見世物として見てつてくれ」

自分もやるのに会長さんはけらけらと気楽に笑っている。

「それならせっかく時間も空いていることですし、歓迎を受けますわ」

私は納得した。

大洗マリントワー前広場。ここには元から白い舞台が用意されている。行事な

どもにも使われるのだろう。どこからかやってきた司会が話を切り出す。

「最後は今日の敗戦への反省をこめて、大洗女子学園の戦車道チームの人があんこう踊りを踊るそうです！」

会場がどよめきに包まれる。ケータイやカメラを用意する者がちらほら見受けられる。

「やつぱり晒し者にされますよう」

優花里さんが内股になって怖気づく。

「恥ずかしいよー、もー」

沙織さんも自分の格好を手から隅々まで確認してから手で、それも鱗のようなものがくつついたものだが、顔を覆っている。

「やるしかありません」

華さんは覚悟を決めたようだ。こういう時ほんと強いよなこの人。

麻子さん？ 変わりない。何も気にせず虚空を見つめている。

「出番です」

係りの者が裏方の幕をめくる。生徒会の3人から順に舞台と上がる。

もはやこの珍妙極まりない格好で踊ることは規定事項。私の敗北のささやかな責任だ。正面にいた人の群れがどうしてようと、私は甘んじてこの罰を受けるのみ。

くあつああんあん、あつああんあんく

何も考えていない。ただ周りに合わせて手足を動かす。しかしよく分からない一体感がその8人を覆っていたのは事実だった。回ったり足を上げたり忙しいっただりやしない。

くあつたまのあつかりはあくいのかかし

隣からは愚痴が聞こえるが、こういうのは連座、連帯責任だ。下手な事を考えたら負け。会長さんだけが楽しそうだったのは、彼女がこの罰ゲームを仕組んだのだから然り、か。

第2話 ③ 船の底のsecret

試合後は破砕された大洗の街に留まる訳にはいかず、停泊している学園艦に戻ることになる。こういった公的な場で試合をする際、破壊された施設には戦車道連盟から補償金が出る。

大洗なら地価は隣と比べたらまだ安い方なのだろう。というより元からそんなに金がかかるところで連盟は試合を許可しない。大洗市街戦でさえあまり望ましいものはなかったはずだ。

事実硬式では市街戦は滅多にない。

だが向こうが許可した範囲内でスポーツをした、これに対し批判される筋合いは無いのでまあほつとこう。

試合の後生徒会室で行われた反省会で会長さんから私を副隊長とする案が出て、車長全員の懇願、さらにそこに会長さん直々に隊長と副隊長が同一車輛に乗ることは如何なものか、との提言もあった末私もそれを呑んだ。

というより、初めからそうして欲しかったが適当な成り手がいなかったようだ。だから私を引き入れた訳だが。

今日の試合や副隊長の件など考えなくてはならないことは山ほどあるが、試合後の今日くらいは生きている安寧を享受したい。早速地上のコンビニで新発売されていたもみじアンパンなるものを楽しんだが、それだけでは不十分だ。

その為反省会の後一緒にいたナカジマさんに戦車の修理の手伝いをしようか、と申し出たが、慣れた仲間の方が仕事が早いから、と断られた。その通りだろう。正直私もドイツ戦車以外の修理とかは分からない部分もあるし。

さてこの反省会であるが、基本車長のみが集まって、車長ごとに各車の意見を纏めて行われる。理由はいくつかあるが、この生徒会室に戦車道履修者全員が入れないことがその一つだ。つまりあんこうチームはここにはいない。

反省会で出された内容は後で各々にメールで伝えるとして、もうすでに家に帰っており、何より試合で疲れているであろう彼女らをもう一度呼び出すのは忍びない。

はてどうしようかな、部屋に戻るかな、と艦橋の下で帰り道につこうとした時、誰かに呼び止められた。

「西住さん」

サメさんチームのお銀さんである。頭の上の白い帽子が目立つ。その上の羽も何処かで見た覚えがあるが、まあいい。

「今日この後時間あるかい？」

「ええ、自動車部の方々を手伝おうかと思つていたのですが、断られてしまったので」「ちよつとお誘いしたいところがあるんだが、いいかい?」

「どちらへ?」

「私たちのアジトへさ」

正直スケ番の匂いにする彼女らに対する苦手意識はあるし、彼女らも河嶋さんへの思いが強いせいか、練習中も私の指示より河嶋さんの指示を聞こうとする。正直戦車道のメンバーの中で一番仲が良くない相手だ。風紀委員の園さんから深く付き合わなくていい、と忠告は受けているが、何度も戦い続ける仲間として関係を深めるのは損ではないだろう。

「どんなところですか?」

「まあバーだね。飯も出るし、今日は試合で早々に負けちまったお詫びとして幾らか出すよ。全額は出せないけどね」

お銀さんは申し訳なさそうに頭を掻く。軟式なら撃破されたことをそんな重く捉える必要もあるまいに。ま、硬式ならそもそも捉えられないんだが。

「いえいえ、その必要はありませんよ。喜んでお尋ねします。私もお腹が空いていますし」

「じゃあ早速、付いて来てくれるかい?」

丁度いい暇つぶしができた。私はお銀さんに連れられて、この巨大な学園艦の中へと潜り込んでいった。

甲板の入り口からは急な階段を経て内部に入り、蛍光灯が炯々と灯る下深く深く沈む。お銀さんは時々すれ違う船舶科の人に声を掛けながら、私に対しては無言のまま先を急ぐ。

崖のような場所に取り付けられたはしごを下つて少し行くと、そこは甲板とは別世界が広がっていた。

裸の白熱電球に照らされてぼんやりと広がるのは、食い物のゴミの散らかった通路。鉄条網で区切られた向こう側からは奇妙な笑い声がする。食い物のゴミの中には肉に関連するゴミもあるらしい。鼻をくすぐる腐敗臭。澱んだ空気の重々しさも混じる。

ああ、辞めてくれ。君だけは思い出したくもない。その生気のない顔よ、私の頭にまた来るな。

「大丈夫か？ 濟まないね、私たちが居る場所はこんな所なんだ。まあ、臭いは居たら慣れちまうもんだがね」

お銀さんの声でやっと私は幾らか正気を取り戻した。危うく食欲を完全に喪失するところだった。その言葉で引き出される顔はなんとか伏せた。

「お、姉さん。そちらはお客さんつすか？」

「そう。陸のお偉いさんだ」

「『どん底』に、つすか？」

「ああ。そつちは問題ないか？」

「平気つす。それじゃ」

お銀さん鉄条網の向こうの白い服の女と話した後、我々はその鉄条網を避けて少しいった先にあるエレベーターの前に辿り着いた。業務用であるらしく、近づく中で重いモーター音が轟く。中は車一台丸々入れそうな程広い。

「こいつは学園艦の底部で作業する人たちの為の物資搬入に使われるやつなんだ」

きよろきよろと中を見渡していると、彼女がそのように教えてくれた。

「そんなエレベーターを勝手に使っちゃって大丈夫なのですか？」

「私たちが行く店の材料もコイツで運ばれるから大丈夫さ。私は許可証もらつてるし。風紀委員には死んでも渡さないけどね。ま、死ぬことはないんだけどさ」

そんなことを話している間にエレベーターの扉が開き、何故かあるベニヤ製の隠しドアを押し開けて煉瓦の通路をジグザグに進む。慣れているのだろう。分岐点が多いのにそれを迷うことなく選択していた。

それにしてもベニヤ板の装飾、結構リアルだったな。

ある角を曲がると、暗闇の奥にネオンの光が輝いていた。音楽も漏れ出ている。こんな文字通りの『どん底』には似つかわしくないほど清らかな、だが力強さも秘めた歌だ。

「そっか」

「ほう……」

私は興奮していた。子供が悪戯に赴く前の如く。彼女が扉を開くと、漏れ出た音は本流となって耳に注ぎ込まれる。

「お、親分。遅いじゃないっすか」

「悪い悪い、反省会の後お客さんを誘ってたら遅くなっちゃってね」

「ど、どうも……」

「反省会の内容は後で教えるよ」

だが雰囲気には威圧的なものも混じっている。

「ようこそ、どん底へ……注文は？」

私はこういう所に来たことはないが、どういう事をすればいいかは知っている。こういうのは柄になくはつちやけるのが吉だ。財布の中身は確認済み。

「……とりあえずビール。出来ればドイツのをお願いします」

「……ドイツビール？あなたお子ち……ええ？」

「え？」

何か変な事を言っただろうか。部屋にいたサメさんチームの全員が私を見つめている。歌も途切れた。

「い、如何なさいました？私何か変なことを？」

なに、バーなのにそういう所じゃないのか？

「……隊長、イける口か？」

「いや、本物は無いですけど、前の学校にいた時に少しは」

「あ、そう……ほれカトラス、注文だぞ」

「……」

カトラスさんはすぐに冷蔵庫を漁り、一本の茶色い瓶を取り出した。歌も再び部屋中を飛び回り始め、私はお銀さんの隣のカウンターに腰を下ろした。歌も再び部屋中

「……お銀は？」

「いつものラム酒」

「……まいど。隊長、こいつで良い？」

「あ、それをお願いします」

ビットブルガー、懐かしい名だ。水滴をまとった瓶とジョッキがカウンターに置かれる。

「……つまみは？」

「私はポテトを」

「あたしはパイプでいいや」

「……ムラカミたち、お代わりは？」

「とりあえずいいや」

「ラム酒もう一杯。もうちよい強いのない？」

「ノンアルに強いもひつたくれもないだろうが」

「濃いやつよ濃いやつ」

「……高くなるよ？」

「ツケるから良いよ」

「ラム、お前今までどれだけツケてんだよ」

そう言いながらムラカミさんはニヤついている。ここではそういうのも日常茶飯事なんだろう。

「……ポテト。ラム酒も」

「ありがとうございます」

カリッと程よく揚がって黄金色に輝くポテトが、白い皿の上に乗せられた。

「おう。じゃあみんなこっち来い」

後ろのソファに座っていたラムさんやムラカミさん、そして歌を中断したフリントさんもカウンターの方へ来る。すぐに3杯の水がムラカミさんとカトラスさん、フリントさんの手に収まった。

その間に私はジョッキを斜めにして黄色い飲み物を注ぎ込む。こういうのはね、緩やかに注ぎ込んで、いかに泡だてないかが重要なんだ。ただ静かに、静かに。その分泡の弾力に力を与える。

そしてお銀さんは胸元から袋に入ったパイプを取り出し、口に啜えた。火はいつもつけてないよな。

「それじゃ、今日の試合は負けたけど最後の健闘、そして今後の一層の奮闘を誓って、乾杯！」

「かんぱーいー！」

グラス同士の衝突の後、私は杯を傾けた。苦味と共に喉が鳴る。お銀さんたちもそれぞれのグラスを口元に寄せる。

はあく、やっぱり久々のビールは良いわ。これはノンアルだけど。私は将来酒呑みになるだろう。酒のせいで脳味噌を空にでき、そして死ぬなら悪くない。

「おおつ、いい飲みっぷり」

「ははっ、隊長ヒゲ生やしてら」

「あ、ほんとだ」

上唇を指で拭うと白い泡が付いてくる。

「隊長、あんさんやつぱり凄いや。グロリアーナってのは戦車道の強豪なんだろ？そこを相手にピンでのやり合いに持ち込むなんてさ」

お銀さんが肩の間を軽く叩きながら笑顔で語り掛けてくる。

「ウチらなんてほんとに何も出来なかつたってのに」

「いえ、そんなことないですよ」

「なあに、アタイらのことはアタイらがよく分かつてる。あんな初っ端で吹っ飛ばされちまつたんじゃ、斬り込んで手柄なんてあげられやしないよ」

フrintトさんがコップの中の氷を揺らしながら隣に腰かけた。

「次は絶対に敵を撃破してくるよ！」

「ああ、サメさんの、そして船舶科の名に懸けて、今回みたいなあほヅラは2度と見せねえ！」

「おおー、流石親分。そんなじゃ、もつと鍛えないとねえ」

「と、そうだ。隊長、あなたに一つ謝っておかないといけない事がある」

お銀さんがグラスを降ろしてこちらに正面を向ける。

「何でしょう?」

「すまなかつた」

そのままこちらに思いっきり頭を下げた。何だ? そんな謝られるほど悪いことをされた記憶はないが。私が半ば呆然としているのを向こうも察知したらしい。

「桃さんの作戦に対して隊長、あんたは的確にその問題点を指摘した。そしてそれが間違っていないかつたことは、皮肉にも試合で証明されてしまった。

そして私は桃さんに同調した。桃さんには此処を守ってもらつた義理がある。そしてなにより、正直言つて私らは急にやつてきて、桃さんに代わつて練習の指揮を執り始めたあんたが、私は気に入らなかつた」

様子から察してはいたが、自分自身で認識もしていたのか。

「だがあんたの練習で皆確実に上達していた。自分たちも含めてね。あんたに変わったことへの反発は戦車道の面子には最早なかつた。つまりさ、あん時に反駁したのは単なる義理を笠にした悪足掻きだつたつてわけさ。

そしてそのせいであのザマさ。言い訳も何もあつたもんじやない」

なるほど、そういうことね。完全に理解しました。そういうことなら彼女の荷を降ろしてやるのが良いだろう。

「いや、謝つてもらつたことではないですよ。だつてあの時の河嶋さんのご指摘は間違つ

てないんですから」

「……へっ？」

今度は向こうが呆けた顔をしている。

「そもそも私は会長さんからの指示がなければ、口を挟む気はなかったんです。あの時まだ私は河嶋さんの案の代替となる作戦を決めていなかったんですから。人のミスを指摘するだけなら誰だって出来ます。真にあのような場で発言するべきことは、それを如何に正した案を出せるかです。」

だからそもそも河嶋さんが正しいんです。それに同調したお銀さんが謝る必要が、理由を問わずどこにあるでしょうか」

出来るだけこやかな顔をする。

「隊長……あんた、天使か？」

「いえ、既に悪魔に片足を突っ込んでますよ」

「ははっ……なら海賊らしく悪魔に地獄までついてこうかね。悪かったな、こんなところで湿っぽい話しちまって」

「いえ、これから楽しみましょう。何か食事系はありますか？」

残り瓶半分ほどのビールをジョッキに移し、最後のポテトを摘んでから呷る。

「……肉焼いて塩コショウ振っただけの奴とかどう？」

「何肉ですか？」

「牛。でも経産牛のやつすいやつしかないけど、それでもいい？一応手は加えるけど」

「じゃあそれで。ミディアムレアくらいでお願いします。付け添えにパンも。それが出たら今度は……うーん、ワインは無いかあ……」

「……カクテルでも作ろうか？」

「そうですね……取り敢えずもう一本別のビールを。食後にカクテルをお願いします。お銀さんは如何なさいます？」

カウンターの正面に直った彼女は、左手一本で拒否を表明した。

肉は繊維を包丁で何度も切ってからサツと焼いたようだ。赤身主体だから脂肪もそんなに気にしなくていいし、思ったよりはるかに柔らかい。味付けも単純だが、その分肉の旨味が味の主体となる。

付け添えにニンニクチップが付いている。あまり乙女には似合わぬ代物だが、肉との食い合わせの中で手が伸びるのは避けられない。

次のビールは日本の一般的なものの、ノンアルコールだ。こっちもまたこれでいい。だが香りの良さならやっぱりドイツビールだ、と常々思う。

「……前は燻製とかもう少しマシなもの出せたんだけど、燻製作れなくなっちゃってね

……」

「いえ、これも十分美味しいですよ。そういうばお銀さんたちってこちらに住んでいらつしやるんですか？」

「そうだね。戦車道をするまでは地上に出ることさえ滅多になかったよ」

「ここで普段は何を？」

「普段はね、艦内の整備とか施設の維持とかさ。危険な所にも入っていくこともあるね。この学園艦つてさ、海中に入っている部分が海上にある部分よりもはるかに大きいのさ。だから定期的に見回っても整備しきれない。

だから私たちがいる、と考えてくれればいいかな。空き家は簡単に荒れるけど、人さえいけば結構何とかなるからね。あとは大荷物の輸送や検査。地上組じゃ250メートル下のことは手が回らないから、危険物が来たらこっちの仕事だね。そんな仕事は来たことないんだけどさ」

「住むのが一番の仕事、なんですか？」

聞いたこともない職務だが、理由は納得出来る。

「言っちゃえばそうだね。ここら辺がちゃんとしてないと、船としても運航できないから。縁の下の力持ち、だったらいいんだけどね。ま、縁の下なんて入ったこと無いんだけどね」

「私の前の家は有りましたね、縁側」

「へえ、和風の家なのかい？」

「純和風でしたね。やつてることに似合わず。それにしてもプリントさんの歌は初めて聴きましたけど、お上手ですね」

「そうだろうそうだろう。普通のバーだとジャズとかがかかかってそうだが、ここで音楽を流さないのはこの声が皆の最大の精神安定剤だからさ」

「なるほど。そういうえばここは学園艦のかなり深くと聞きましたが、エンジン音が余りしませんね」

「エンジンなら船の後ろ側だから逆側だぞ。あつち行くと煩いから落ち着いてなんかいられないよ。ま、最近の私たちなら何とかなるかもしれないけどね」

「たしかに。私は頭を外に出すようにしてますがまだマシですが、車輛によつては本当に耳に来ますからね。戦車道やつてて聴力検査に引つかかる人、時々いますよ」

そんな会話をしながらも時は過ぎ、次のビールを空にした時、肉も食べ切った。そしてその肉汁をパンに絡め取る。見事に美味いんだなこれが。

腹は見事八分目。あとはカクテルだけかね。

シエイカーを上下に激しく振っていたカトラスさんがその動きを止め、コップに中身

を注いだ。

「……………これは？」

ここが薄暗いせいの中身が一瞬よく分からなかったが、よく見ると黒い飲み物であった。

「……………私オリジナルのカクテル。ジン、アングスチュラ・ビターズ、オパールネラ・サンブーカ、ウンダーベルグの4種を使ってる。ジンをちよつと多めにしてるから呑みやすいと思う」

生憎カクテルには詳しくないのでそれぞれがどのようなものかは知らない。聞いてみると、2番目と4番目は薬酒に近いものだそうだ。

グラスの柄を持ち上げると、周囲はともかく中の液体の成す円錐の中心までは光が届きそうにない。本質が見抜けないカクテルだ。

「ニンニクの匂いならコイツを飲めば気にしなくていいわ。名前は特に付けてないけど、強いて付けるなら『secret forest』かな」

「ウホッ、なんかカッコいい」

「秘密の森、ですか……………で、この色。

なるほど。ご存知でしたか」

「そうさ。ここにいる奴は知ってる。というか、あんた雑誌に載るくらいの有名人だっ

たんだな。地上の本屋に聞いたら直ぐに探してくれたよ」

「はは……そんな御大層な身分では無いのですが……」

「何を言うんだい！ あんた戦車道の名家の娘さんなんだろう？ そりや桃さんもあんな風に見えるはずだわ」

ラムさんが瓶を片手にもう片手で肩を叩いてくる。グラス持つてなくて良かった。

「ですがその名家を破門になった身ですよ？」

「なーに、そんなの大したことじゃない。しかも戦車道最強の黒森峰の副隊長だったんだろ？ 凄いじゃないか。そりやグロリアーナが戦車道の強豪でも、あんたが張り合えるはずだわ」

「……でも何故『secret』なのかも、恐らくご存知」

カトラスさんは使用した容器を私の食事した皿とともに流しへ置く。

「噂話の段階だけだね」

「……」

「安心しな。そこら辺について掘り下げる気は無いよ」

「その方がよろしいかと」

私はそれに口を付けた。

「……苦いですね。」

「でも、薬つぼさは薄いと思う。ウンダーベルグのストレートとかマジで胃薬だから」
「確かに」

「ま、破門されてこっち来ているってんなら、あんまり甘い記憶じゃないんだろ？」

「ええ、苦い」

「……実際は薬として効いてるんだけどね」

「薬になるとは思えないんですがねえ」

私はもう一口含んだ。ゆっくり、ゆっくりと、噛みしめるように時はすぎる。

フリントさんが曲を変えた。重く、それがゆっくりのしかかる恋愛歌。ただそのままであれば良かったのに、変わることでなんて求めてなかったのに、そんな歌詞だと思われる。

昔のさらに昔を美化していないか、自分にそう問いかけさせた時、私はNOとは断言できなかった。しかし空白の感情に何かが注ぎ込まれるのを感じた気がした。それが曲によるものか、カクテルによるものかは分からない。

飲み終わり、曲も止まる。仕上げに水を一杯頂いた。

「また来てくれよ」

海風にさらされた帽子を抑えつつ、お銀さんははにかんだ。

「ええ、是非またお邪魔します」

「カトラスもまたオリジナルカクテル作って待つてらっしゃい」

「今度は甘めの方が良いですね」

「ほう、甘いもん好きかい？」

「ええ、どちらかといええば」

「じゃ、そのように伝えとくわ。次の練習、楽しみにしてるよ」

彼女は手を振り、再び巨大な船の底へと帰っていく。

どしりと来ている身体を流れる熱い血流は、私を散歩へ導いた。このままじゃ眠れるものも眠れない。

今日の店、また来よう。財布が軽くなったとはいえ、それ以上の効用がここにはある。カバンにイヤホンは入れていたが、それをさす気はなかった。風の音と生活する音、それらをリズムに取り、黒と白以外の色をスパイスに歩を進める。

赤信号で立ち止まっても、正面を通る車はない。すれ違う歩行者も見当たらない。だが部屋の明かりと街灯がコンクリートの地面をしっかりと照らし出し、安全性に不安はない。

途中、最近ジョギングをしていて分かった階段から下に降りる。しかし船の底に戻る気はない。

この散歩の目的地に來た。甲板の一段下、ベンチなどが設置された遊歩道である。

海の向こうに見えるは夜景。左半分においてはマリインタワーだけが一段高くこちらを照らしている。だが左と右どちらが明るいかとなると、断然右であった。

遊歩道の端の手すりに腕を乗せ、さらに強い海風に当たる。意識がさらにはつきりしてくる。これじゃ眠れそうにない。

カクテルもビールも美味かったけれども忘れさせることはできなかつた。今日は考へたくないと思つていたことが頭をよぎり始める。

時計を見たら、散歩のうちに日付は超えていた。人と話していると、時が過ぎるのは本当に早い。

第2章 ④ 箱根を越えて

あの聖グロリアーナ女学院に善戦した、そのことに喜ぶ者は多数いた。しかし一部の者はうかない顔をしていた。

気楽に考えられるならそれはそれで素晴らしいが、生憎私もその一部に含まれていない。

私はこの学園の目標を知っている。それを達成する為に必要な實力は、手を抜いたグロリアーナには十分勝てる程度でなくてはならない。だが実際には負けた。

無論これからも練習を積む。だがそれは他もそうだ。ウチだけが格段に向上するわけじゃない。

「はあ……」

昼休み、車庫で整備されて鎮座するIV号に手をつきため息をついた。軟式は航空戦が無いため、戦車しかない我々でも目標を達成する可能性は硬式よりかは高い。

しかし私は西住流を破門された者。黒森峰と戦うとなれば、軟式とはいえ私を全力で叩きに來るだろう。それで皆に、そしてこの学園に影響が出たら……私はどうしたら良い？

思素に耽つていたせいか、私はらしくないことに背後からの足音に気がつかなかつた。

これが下手な奴なら首を切られていたかもしれないというのに。

「みーぽりん！」

「わっ！沙織さん、どうしたの？」

いきなり両肩を掴まれ、素早く振り返り聞き返す。

「昼休みになつて教室にも食堂にもいないからここかな、と。華も来てるし、せつかくだからここでご飯食べない？」

私も後で食堂で食べる為弁当を持ってきていた。そこで沙織さんの提案を快く受け入れることにした。全員ⅠⅤ号の上に登る。

「みぽりん、どうしたのこんなところでため息なんかついて」

話をするにしてもこの話はしても良いのだろうか。飯と共にするには少し重い話な気もするが。いや、ここは友である彼女らを信頼するべきだろう。

「いや、途中から入った私がいんなの上に立てるのかなつ、て」

「でもあの状況からチャールとの一騎打ちまで持つていくことが出来たのは誰でもなくみほさんのお力ですわ。負けはしましたけど、あの試合が出来たことに後悔はありません」

そう言い華さんはサンドイッチにかぶりつく。なおそれは合計パン一斤はある。でかい。

私の力と言われたが、そうでもない。少なくとも華さんがあの時正面からマチルダⅠを隙間から撃破し、そして麻子さんに路地を的確に進める操縦技術を持ち、優花里さんが一定の装填速度を維持し、沙織さんが他車輛と素早く通信してくれなければ、一騎討ちなどには持ち込めなかった。

だから私がここについて未だよく知らない立場であるにもかかわらず、私のみが徒らに持ち上げられるのは喜ばしくないのだ。しかしそれを如何に伝えるか。場合によっては自慢に対する謙遜とも捉えられかねないのだ。既にそうかもしれないが。

するとそこに弁当を持った優花里さんが来た。優花里さんは戦車を見る為1人でもちよくちよく来ているようだ。

「皆さん、いらしていたんですか。何のお話をされていたんですか？」

ⅠⅤ号の上に加わり、弁当を開く。

「いやー、みぼりんが自信なさそうだから優花りんもなんか言っただけで」

「いや、自信無いっていうかなんていうか……」

自信ない、という言葉もあながち間違いじゃないだろう。何より私がかつてのこと故にその立場を受ける自信が無いのだから。

「西住殿が頼られているから皆が副隊長に押したんですよ。自分を否定しなくていいんですよ！ 私は西住殿を素晴らしい指揮官にして無二の仲間であると確信しているであります！」

自分を否定しない、それは私が過去にやったことをみんな知らないから言っているんだ。もし私の過去の罪を彼女らが知ってしまったら……それでも彼女は私を友のまま信じてくれるだろうか。

この不安は、伝えられない。如何なる言葉を尽くしても私の伝えたい内容を満たすことは出来ない。

「どうしたんだ」

いきなり開いたキューポラから麻子さんが顔を出した。つーかどっから出て来てんだい。

「あー、麻子また授業サボったでしょー」

「自主的に休養をとっただけだ。」

何時もながらひでえ言い草だ。そんなこと口にはしないけどね。

「もう、おばあに言いつけるよー！」

麻子さんの顔が引きつり、目線をそらす。

「……それは困る」

「5限からは真面目に出なさいよ」

顔色が明らかに変わった。後で麻子さんのお祖母さんのアドレスを沙織さん経由で入手しようか。

「……分かった。ところで何の話だ？」

「みぼりんが副隊長なったけど、自信無いつて」

「そんなことか」

「えっ？」

麻子さんのあまりに素っ気ない返事に皆驚く。私もだ。

そんなこと、なのか？

「人の上に立つのに必要なのは支える人だけだ。副隊長だからって気負うことはない。困ったことがあったら私達に頼ればいいじゃないか」

麻子さんが戦車から身を出して、車体を通じて降りてきた。

「でも……私ここに来たばかりですよ？練習内容の指示ならともかく、実際にチームの纏め役である副隊長になるなんて……」

「来たばつかなんて関係ないよ！みぼりんの指示なら信頼して試合に臨める、と思ったからみんなが推したんでしょ？」

「そうですよみほさん。私達は仲間です。あんこう踊りの恥ずかしさを分かち合つたんですから」

「大丈夫だよみほりん。私たちにできることなら協力するから！そうでしょ？」

「勿論であります！私は何があつても西住殿についていくであります。手伝えることがあればお任せください！」

「……ありがとう」

仲間だ。本当の仲間だ。有能無能関係でも利得関係でもなく、信頼と友情からなるものだ。

彼女たちは頼つていい。難しいことは関係ない。ただこの仲間と一緒にいたい。出来るだけ長く。

逃げた先のは私を否定するものじゃなかった。

この仲間となら自分の道を見つけられる。

その後いろいろなことがあつた。

次の寄港日、私の誕生日に合わせてみんなで大洗の街のアウトレットで買い物した。たまたま会つた華さんの家の使用人の新三郎さんの人力車で大洗の町を走つた際は、こ

れは試合で工事中の場所に行ってしまった私に地理を覚えてもらおうと沙織さんが提案したのだが、海岸に松並木を目指してたなびく風が心地よく感じられた。

あと華さんの実家についての話を少し新三郎さんから聞いたりもした。これはなかなか面倒そうだ。

流派からの破門というものは中々ひっくり返されるものではないことは私が一番良く知っている。そうしなければ破門自体が罰としての意味を失うからだ。

何があれば再び五十鈴流に戻れるのか、それは分からないだろうが、何らかの形で結果を出すしか無いのだろう。彼女らにとっては戦車道は乙女の道なのだ。

私は西住流とか二度とごめんだけだね。

アウトレットなり、めんたいパークなり、港周辺での昼飯なり、磯前神社なども巡った。途中の店で少々買い食いをしたが、その中で焼きそばパンにアンチョビが入っているとされるパンを買った。美味いかどうかはわからないが、焼きそばに塩だから少なくとも合わないことはないだろう、と予想していた。

しかし実はそのパンに乗っている丸いパンがアンパンだった時は流石に閉口した。美味かったけど。

その後大洗の街を縦断して潮騒の湯に移動し、塩っぽい温泉を享受した。

露天風呂から若干外が見えづらかったのは残念だが、気持ちよかったですよ。

練習に関しても集中力が増して、自主練する車輛も増えた。失敗が人の動機になる、参考になる出来事だ。

例えば走行間射撃、停止射撃問わず砲撃の命中精度が全チーム上昇した。停止なら全車輛平均して命中率3／4だ。黒森峰のEース層には劣るが、下位層や補欠となら張り合える。

それ以外にも隊列維持、走行技術、どれも同じ車輛に乗った強豪を相手とするには不足なし。あとは敵車輛の方が優秀でも戦える力を養うのみ。

このままチームの技術力が他校と平行なグラフを描くことを恐れていたが、そうとも言いつけない状況は喜ばしい。

質問してくる人も増えた。その分優花里さんを中心としたあんこうチームのメンバーに頼らざるを得ない環境が続いた。

彼女らの無償の手助けには大変助けられたし、それへの感謝も何度も口にしたりして伝えようとしたが、麻子さん以外は友人だから、ただそれだけ述べて正面から受け止められたことはなかった。

そう、本来はこうであるべきだ。私だけが異様に拘っているだけなのだ。

麻子さんはこの拘りに付き合ってくれた。手を取ってありがとう、というのと、どういたしましての言葉とともにそれを握り返してくれる。

きっと直ぐに沙織さんの口から出た親族が祖母であることと関係があるのかもしれないが、私にそれを深追いする趣味はない。

大洗は戦える、少なくとも強豪相手にガチンコで接戦には持ち込める。そう確信を持っていて。

11月30日、ヘッツアーに改造された38tを含む9輦の戦車とともに、戦車を載せた連絡船は熱海港に到着。明日の全国軟式戦車道大会開会式の行なわれる自衛隊東富士演習場へ向かった。

温泉街の外れを抜けて十国峠を越え、岩戸山と城山の間をすり抜けると、観光地芦ノ湖が姿をあらわす。船が浮かび青く澄んだ湖の対岸では、ロープウェイが観光客を乗せて盛んに行き来していた。

「ねえみぼりん。大会が終わったらここ来れるのかな?」

「確かに箱根の湿性花園は私も一度お邪魔したいです」

「道中の御殿場アウトレットでも良いかも〜!」

これから曲がりなりにも試合だというのに、彼女らの視線は次の楽しみに向いている。

それもそうか。次の試合会場まで移動しなくてはならないから、ここに残れる期間は

そう長くないことはあとで話そう。

そして私も今、試合後を楽しみにしている。戦った者同士による躊躇いのない会話を、私は既に待ち焦がれてしまっていた。

「西住ちゃん。気分はどうよ？」

「あ、会長さん。正直、自分の中の興奮が抑えられているか心配です」

「出来てないね。笑顔だもん」

「そう言う会長さんだつて干し芋食べるペース早くありません？」

「いやー、今日は一段と美味しい感じがしてね。向こうに着くまでに500g一袋食べちゃいそうだよ」

「食べ過ぎですつて」

「本当に食べ過ぎてたら私こんなに小さくないつて」

確かにそうなのかもしれない。寧ろそればつか食べてたからこの体格なんじゃないか？いや、この方筋力あるからそれはないか。

チーム全体の士気も高い。この高揚がプラスに使えるかは、私次第。

そしてその覚悟は皆の顔に支えられ、私の心の中に既に築かれていた。

第3章 強豪、サンダース戦です！

第3章 ① 最高の環境

日本戦車道連盟規定

戦車道は健全な婦女子を育成し、世に役立つ人物を送り出す為にある。目指すべきは自己鍛錬と相手への敬意、そして照準器の先に見据えた己の心である。

：

1. 試合はフラッグ車ルール、または殲滅戦ルールを適用する。フラッグ車ルールはフラッグ車の走行不能となった時、殲滅戦ルールは全車走行不能または戦闘体制が崩壊したとみなされた時に敗北とみなす。

……

1. 硬式戦車道とは人命を賭して非常時に最高の策をとれる人間を選び集中的に育てる為に行うものである。

1. 大会中の犠牲者及び負傷者は事故扱いとする。それに対する戦車道連盟からの保障は行わない。

……

1. 通常硬式戦車道はフラッグ車制を導入する。しかし大会本部の総意に基づく決定により変更可能とする。

……

1. 試合会場は大会本部の決定のもと行うものとする。なお、同一回戦は同じ会場で行うこと。硬式は捕虜管理の敷地なども確保できる場所である、と連盟に認定された場にて行うこと。

……

1. 戦車は1945年以前に設計、製造されたものを使用する。他の使用武器も同様とする。それにそぐわない武器の使用は、理由の如何を問わず使用チームの反則負けとする。

また硬式戦車道において歩兵用短機関銃はトンプソンM1、モシンナガン、Stg42のいずれかと弾を100発を毎試合1車輛につき1組支給、拳銃は九四式拳銃に弾丸1発を装填し毎試合ごとに1人一丁支給する。

1. 戦車砲弾は大会本部から支給、または使用を許可されたものを使用すること。それ以外の砲弾の使用は使用チームの反則負けとする。

……

1. 試合会場周辺は自衛隊により包囲する。逃亡と判断された場合は射殺を許可す

る。その死者は犠牲者扱いとする。

……

棄権要項

1. 棄権は戦車道連盟理事校のチームのみ認められる。

……

1. 硬式戦において試合参加チーム以外が、事前に戦車道連盟に通告した上で同盟校として試合に参加することを認める。ただしそれに伴う砲弾の支給は行わない。

……

捕虜扱い要項

1. 捕虜とは投降したもの、及び敗北チームの生存者を指す。

……

1. 試合によりあるチームが負けた際、そのチームの持つ捕虜は無条件に解放される。

……

12月1日、ついに2012年度第74回全国高校生軟式戦車道会場である自衛隊東富士演習場が開場となった。全員にユニフォームが配られる。

「わー、これがユニフォーム」

バレー部の人たちがいつものユニフォーム以外の服を着ているが、案外違和感がない。

「どう、似合う?」

「お似合いですわ」

ユニフォームの背中のおんこうのマークを見せながら沙織さんが確認し、それに対して華さんが微笑んで手を胸の前で合わせている。いつもの格好ができない歴女達は少々不満気だ。だが帽子やマフラー、羽織だけは譲れないようだ。

「何だか戦車兵みたい」

「だよー」

1年生はユニフォームを見て騒いでいる。確かにここまで紫に近いユニホームは私にも他に思いつかない。かといって戦車兵らしいか、と聞かれるとそうでもない気がする。

優花里さんは目の上に手をかざして他校の様子を見回していた。

「おおつ、有名な高校が来ているでありますね。あつ、サンダース発見!

流石サンダース、あの周りに屋台がいっぱい出ているであります! あ、あれはもしかやシャワー車輛! そしてシャーマンがずらり!」

「どうやら初めて間近で見る強豪校に興奮しているようだ。まあ元々戦車道ファンだからな、そうなるか。」

「あのー、桃さん。この服の上からスカートじゃダメですかね……」

「ダメだダメだ！せめて開会式くらいはそのカッコでいろお！」

「そうよ！あとカバさんチームの人たちも！コスプレ禁止！れつきとした式典なのよ！学園の代表ということを理解してちゃんとしなさい！」

「ええ……」

サメさんチームの面子は、特にプリントさんはカッコに拘りがあるらしく、河嶋さんや園さんと口論している。前の付き合いからか、こういう光景も微笑ましく思えるようになっていた。

だが流石にスカートの上からスカートはいかがなもんかと思うぞ。

死ぬはずが、なかった。

ふとサイレンが鳴り、それに合わせてそばに来ていた5羽ほどの鳩が一斉に飛び立った。飛ぶ時にフンを撒き散らさなくて良かったな。

「これより開会式を始めます。選手の皆さんは指定の場所に戦車を置いた上でメインス

タンド前にお集まりください。」

メインスタンド前には大きな画面とその前に朝礼台のようなもの、そして16校のチームの選手が各2列縦隊で整列していた。私の前には河嶋さん、斜め前は会長さん。横には小山さんが並んでいた。その後ろにあんこうチームの仲間から順に続く。

戦車道連盟代表の挨拶を筆頭に来賓の挨拶、前回優勝校プラウダの隊長と副隊長による選手宣誓などが次々と行われた。肩車はしないんだな。

「もう開会式始まってから30分以上経つよ。いつもこんなに長いのか、みほりん？」

後ろの沙織さんが左の耳元でつぶやく。いつもは挨拶せず紹介のみで終わる人が、次々壇上にて挨拶している。そのせいで時間はいつもの倍近くかかっている。正直ウンザリしてきた。とつとと軟式の試合をさせろ。

そんな疑問を持ちつつ、ケータイ電話による通信は禁止であるから、ルール違反があった場合は即座に没収する、と伝達した会場案内係の自衛官が台を降りると、司会者がこう言った。

「最後に今大会の実行委員長よりお話を頂きます」

「やつと最後だよー」

後ろの沙織さんは辛さと安堵が入り混じったような声をあげる。私も一息つこうとしたが、その息を噎せ返るような勢いで飲み込んでしまった。

裸足の上に履いたスニーカーのかかをと踏み、胸部が黒に腹部が白のパーカー、白地に黒の筋が脇に入ったジャージを着た初老の男が、2人の護衛の自衛官と共にゆつくりと、軋む音のする数段を登ってきた。

その男の顔を見たことがあった。いや、正しくは忘れたくても悪夢に寄生して忘れられない顔だった。

「皆さん、ここにちは」

男は浅く頭を下げる。

「北野っ!!」

忘れもしないこの名前。

思わず叫んだ。他の学校からも同様の声が聞こえた気がした。その男の背後の画面に3文字が映された。

『B R 法』

「えっ、みぼりん、どうしたの？何あれ？」

沙織さんが再び背後からひそひそ話す。しかしそれに答える余裕は1ミリたりとも存在しなかった。

「競技開始以来八十有余年。今や戦車道はすっかりダメになってしまいました。そこで今大会では皆さんの培った技能を埋もれさせないよう最高の環境を用意させていただきました。どうか日頃の訓練の成果を存分に発揮してください。以上です」

他の挨拶した人々よりは遥かに短かったが、その話に込められたものは間違いなく、限りなく多かつた。

北野は2人の自衛官と共にゆつくりと段を降りた。選手はざわめいた。

BR法、その画面に残されたものが何なのか、北野は何が言いたいのか。

それが分かるのはこの場のほんの一部の者だけだ。

だが彼らも間も無く気付くだろう。この言葉があつてはならないことに。

「何？みぼりん、どういふこと？」

沙織さんが先ほどよりはつきりと、不安げな顔で尋ねた。顔にこの時期に似合わない汗が流れる。冗談も大概にしろ、と言いたくなるが、依然として画面には同じ3文字が粛々と表示されたままである。

確認が必要だ。あの3文字が私の想定しているものと一致していない、という証拠の。

「優花里さん！待機場所に支給されている弾を一発持つて来なさい！」

「はい！ただ今！」

優花里さんはすぐに待機場所に向けて駆けて行った。彼女も何かしら良くない雰囲気は感じているのだろう。私と同様汗が見える。

「あんこうチームとカメさんチームはちよつとこちらに集まってください」

まだ確定ではない。まだ確定ではない。

取り敢えず不安な気持ちを出来るだけ周りに伝えまいと微笑もうとするが、目も笑おうにも笑えない。

「西住ちゃん、さっきのはどういうことだい？」

カメさんチームのメンバーが集まってきた。しかし視線さえ合わせる余裕がない。目線を合わせたら顔を見せてしまう。

「優花里さんの答えが全てです」

そう答えるのが精一杯であった。

数分後、優花里さんが89式用の57ミリ砲弾を抱えて急いで走ってきた。

「西住殿、大変であります！戦車の内側の炭素繊維のコーティングが全て剥がされて没収されています！」

皆が固まる。その意味を理解するのに時間がかかる。私でさえそうなのだ。

「優花里さん、その弾を置いてください」

鋭く尖った鉄の塊。最後の微かな希望を小さな人差し指に託そうとする。置かれた弾を指で叩くと鈍い音がする。その音で皆理解した。私も確信した。

「中が詰まつてる……間違いないですね。これは硬式用の弾です」

軟式用は貫通性能を抑えるため弾の中央を空洞にして軽量化し、砲弾の先を丸くしている。しかしこの砲弾は先が尖り、空洞がない。火薬の威力もまた強化されているだろう。すなわち貫通性能が格段に高い。

「硬式ルールが導入されているのは黒森峰とプラウダ、あとはヨルダン、故宮とあと数校などほんの一部だけだったはずなのですが……」

ルールブックを確認していた小山さんが今年7月の大会の参加校を告げた。そう、これは軟式大会のはずだ。だが……

「BR法は殲滅戦ルールで行われる硬式戦の通称です。私も今まで実際に行われたことを聞いたことはありません。が、この様子ですと事実なのでしょう」

「バトルロイヤル、って訳かい」

「硬式って……戦車の中でも当たったら怪我するってこと？」

「いや、バラバラになって即死だろ」

「そ……そんなのやめようよ！みぼりん。参加辞退して帰ろう！」

「私達と同じルールなら、会場は自衛隊に封鎖されています。逃亡は射殺され戦死扱い

です」

「そんな!」

「まーまーみんな落ち着いて。動揺してたらいい知恵も出てこないって!」

会長さんが干し芋を袋に一緒に入っているビニールのカバーごと食べながら言う。その様子を河嶋さんが会長をチラリと見たが、すぐに視線を外した。私は河嶋さんの目を見た。手のうちの一つは彼女が吞まねば実行出来ない。

「と、とにかくやられなきやいいんだ!勝てばいいんだろ!我々は勝つために参加したんだ!一回戦の相手は何処なんだ!」

河嶋さんが自分の不安を払拭しようかというほど大きな声で叫ぶ。隊長がそう言うのなら、そうするしかない。逃げた所で問題がどうこうなる訳でもないのだから。

華さんが近くのトーナメント表を覗く。

「えっと……、サンダース大学付属高校です」

「げっ!サンダース大学付属高校!いきなり優勝候補の一角じゃないか!」

不安は増すばかりだ。

ひとつと言えるのは、戦わなければ確実に死ぬ。それが私と河嶋さんから全車長に伝えられた。返事をする者は誰一人いなかった。

そしてこの時、私の中ではとてつもなく恐ろしい考えが、ほぼ確信となって私の胸に

仕舞い込まれてしまっていた。

私をもっと才能豊かな人間であつたならば、このような結論は導かずに済んだだろうし、仮に導いても実力でそれをひっくり返せただろう。しかしこの愚かな私にそれを成し得る自信も実力もなかった。

第3章 ② チームとして

サンダース大学学園都市、この学園都市は長崎県の旧大瀬戸町・西彼町・西海町・大島町・崎戸町とその後編入した川棚町、東彼杵町、波佐見町、佐世保市を範囲としている。かつてアメリカの支援で建設された学園都市であり、また港湾都市佐世保を管轄していることもあり資産が豊富で、大会参加校最大の約500輛の戦車を保有している。都市住民の総人口は大洗の3万、黒森峰の20万を超える50万人程（佐世保市を含む）である。

その戦車道隊長私、ケイと副隊長のアリサとナオミがテントの中にあるひとつの机を囲んでいた。

「……どうしようかしら」

何時もは楽天的だ、と自分自身のことを捉えているが、今日ばかりは真剣な顔で話さざるを得ない。

「まさか硬式戦ルールを適用するなんて。正気の沙汰じゃないわ」

「……」

ナオミは腕を組み、椅子にもたれかかる。

「最初は大洗ですか。データによりますと、パワーは我々が上です」

机の上に右手を置いたアリサが言う。確かにそうだが、そうとも言えない事実もある。

「しかし相手にポルシェティガー、III突、IV号、ヘツツアーがあります。彼らがある限りこちらにも相応のダメージを受けるのは確実よね」

私は隊長だ。命令のない今、私の最大の職務は隊員を皆無事な状態で長崎の地を踏ませることだ。それが勝利に勝つことはないことは、私が何より理解している。

「隊長の戦車道は戦争ではない、というスピリットに則るなら棄権すべきかと」

ナオミが背もたれから身を起こす。

「棄権するの！今年戦車道始めたばかりのところに！我らサンダースがそんなところに負けるくらいなら包囲網突破を考えたほうがましよ！」

アリサが立ち上がり反論する。そう、問題は弱小と思われるが大洗に降伏することが、我がサンダースの地位を貶めないかにある。私としては相手に西住みほがいる上、練習試合でグロリアーナ相手に奮闘したと聞く。弱小とは思えない。

去年の冬に西住みほが行ったあの行動。みほが乗るフラッグ車と他数輛が川岸を走行していた時、待ち伏せしたプラウダの戦車が川の土手を破壊、黒森峰側の1輛が川に落ちた。それを助けにみほはフラッグ車から飛び出し、救助に向かった。その間にフ

ラッグ車は撃破された。

戦うとなれば、彼女を殺さねば終わるまい。そんな人物を殺していいのか。迷った。

そんな間ずっと2人は論戦中だ。

ふと外から声がある。席を立ててテントの幕を上げた。外には部下が1人直立不動で敬礼していた。情報は伝えてある。だからこそ行為は正さねばならないと考えているのだろうか。

「ケイ隊長、学校長より無線です。至急とのことです」

「分かったわ、すぐ向かうから待ってて」

敬礼を返す。身を翻し、2人の方を向く。

「校長に呼ばれたわ。待機しといて」

「イエス、ママ」

2人はサツと立ち上がり、敬礼で答える。

無線室には1人の無線士が待機していた。一礼して入り受話器を取る。

「こちらサンダース戦車隊長ケイ。いかがしました、アイク？」

一つ命令を受けた。私は分かりました、と一言告げて無線室を出た。

もとのテントに戻ると副隊長2人が顔をこちらに向ける。席に着く前に口を開いた。

「黒森峰を倒すべし、それが学園長の言葉よ」

これが指し示す意味は一つだろう。私の意思には背くものだが。

「つまり……」

「大会に参加し、大洗などを倒して決勝に進む、と」

「トーナメントの都合上そうなるな」

「だったら思い切りやってやりましょう。プラウダと黒森峰を潰して、このふざけた戦車道を終わらせるんです！それが出来るのは我々しかいません！」

アリサが机を叩き叫ぶ。しかしナオミがここで手をあげる。

「ナオミ？」

「……降伏を勧告する、という手もありますが、どうでしょうか。無駄な血は流したくありません」

それをアリサが手を差し出して制する。

「いや、それはこつちから勧告すべきじゃないわ。こつちから戦いを回避しようという心持ちで黒森峰と戦えると思う？万一欠員が出て我々の戦車道ならば補充可能です。試合をしたくないというのなら、向こうが提示すべきでしょう。それが無いのなら

……」

「そうね……分かったわ。私達はこの大会、戦い抜くわよ」

迷いはなかった。それが命令であるし、経験も必要だ。少なくとも初戦がプラウダや黒森峰であるのは避けるべき。そしてここで力を示すことが出来れば、のちの試合の手へのプレッシャーにもなり得る。

すぐに隊員に集合命令を発令した。私のこの気持ち維持されているうちに。

台が設置され、その後ろにサンダースの校章が掲げられた。それに見下ろされる様に200人以上の隊員が集められた。これらの者は戦車の乗員だけではない。救急隊や娯楽車両の管理者らもいる。

頭に光る4つの星とともに皆の右手側から台に上がる。

「Attention! (気をつけ)」

アリサの号令と共に、隊長を含む全隊員が足を揃え、力強く敬礼した。

「これより！我らサンダースのケイ隊長よりお話がある！全員心して聞くように！」

ひとつ深呼吸した。その目に皆を覆い、勇気を与えられるよう力を込めた。あとは私の心からの決意を示すのみ。

「いい、これだけは覚えておきなさい！臆病者が勝利の為に命を捧げたりはしないわ！馬鹿正直な戦友を死なせて勝利だけを得ようとするのよ。そして勝者としての栄

光は、その臆病者が生きながらにして享受する！　まるで自らがそれを得たかのような顔をして！

諸君！　校内にはこの度の戦車道大会への参加をやめるべきだ、という声が流れているという話があるけれど、それは臆病者が流したデマよ！その証拠に！　この私が！　今大会への参加を決断しているわ！負けるだの棄権だの、今後これらの言葉は母校サンダースへの重大な冒瀆と思いなさい！」

歩き回りながら手に持つ鞭を手に叩きつける。

「栄光なるサンダース大学は教師も、生徒も、父兄も、常に戦いを求めているわ。ビー玉、駆けっこ、大リーガー、ボクサー。我々は小さい時から戦って勝つ者こそ愛し、負ける者には同情さえ示さない。

かつて一度我が校が負けた時を見よ！その際に指導していた奴らに対し、我々は10年以上気にも留めなかった。ただの道路脇の石ころだった。

我が校がそれ以来常に勝利するのは何故か？　それは負けることさえ憎んでいるからよ！戦いは人間が、いや生物皆が熱中出来る最強の競技。素晴らしいものだけ残り、それ以外は淘汰されるわ」

鞭は今度は右肩に手首を折り返して当てる。

「諸君らの中には死を恐れるものがあるでしょう。かく言う私もそれに含まれてない、

といえは嘘になるわ。確かにこの場のほんの僅かな人間が、大きな戦いで死ぬことになるでしょうね。

誰しも最初の戦いは恐れる。もし違うと言う人間がいたら、そいつはホラ吹きよ。しかし真の英雄とは、恐れつつも戦える人を指すのよ。何分か、何時間か、何日かかけて、私たちは戦場で恐れを乗り越え、命令への即応と細かな注意力を武器に前に進むでしょう」

背を向け後ろの校章を見上げる。

「戦車部隊はチームよ。同じ街で暮らし、同じ街で食べ、同じ街で眠りにつく。そして同じ街のために戦う。何事もチームが優先で個々の人格など存在しえないわ。」

だが中には乗員の人格も認めろ云々と言う大馬鹿がいて、戯言をツイッターやフェイスブックでつぶやき、ブログに書き散らすのよ。そして何の価値もない、単なる色が変わるだけの同情を得ようとする。そういうやつに限って実戦では何の役に立たないカスよ！ ゴミ同然よ！」

最後の一言を強調すると正面に向き直る。

「我が校の装備や食事は最高で、生徒の質と士気も世界一。私は正直相手校に同情を禁じ得ないわ。彼らは負けて恥辱を受けるだけでなく、はらわたを引きずり出され、その脂は我が戦車の履帯を洗うのに使われるのよ。だけど彼女らに同情する必要はないわ。」

何故そんな貧相な装備でわざわざ戦いを挑もうとするロクデナシに同情する義理があるの？」

一つ息を吐き、その後大きく息を吸い叫ぶ。

「無論私も皆と同じく学園の地を再び踏むことを望むわ。しかしみんな地面に寝っ転がったまんまでは、試合に勝つことは出来ない。

この望みを成し遂げる道はただ一つ。心に刻んでおきなさい。相手のロクデナシをぶちのめし続けることよ。とつとと奴らを引つ叩けば、私たちはとつとと家に帰れる。

最低最悪の一切合切を粉碎し、満を持して仇敵のヘボ先生を撃ち殺す！

これも肝に銘じておきなさい！ 守りを固めるなどということは我が校にはありえないわ！ 我々には攻撃ターンのみ、陣地の死守は相手校の役割よ！ 陣地保持なんて報告をする暇があつたら、先に進みなさい！

進撃に続く進撃こそが我らの戦法！ 上手くやろうとしてしまいう前にひたすら進み、奴らをガチョウの糞のようにメタメタにしてやりなさい！」

腕を振るい上げていた腕を降ろした。

「栄光ある勝利をつかんだ暁にはそれを生涯誇るこそができるわ。いつか諸君がその子供に学生時代何をしていたのか尋ねられてもこう答えなくて済む。

『ただの目立たない学生だったよ』と。

自由に魂を捧げし美しき英雄たる諸君を率いてこの戦いに参加できることは私の誇りであり、我らの偉大なる母校サンダースの誇りであるわ！諸君も英雄となるに足りる誇りを持って戦いなさい。

黒森峰とプラウダに、この地が奴らの独壇場ではないことを、大洗を完全に制圧して思い知らせてやりなさい！

以上よ！怯むな、進みなさい！

神よサンダースに恩寵あれ！」

「イエス、ママ!!」

最後に今までになく意思を込めた敬礼をきめる。総員の大きな返事が響き渡る。全力で敵をたたたく、そのことでサンダース全隊員が一致した。

「……流石です、隊長」

台を降りた先には、各自車輛の準備するよう指示した後のアリサが待ち構えていた。「神よサンダースに恩寵あれ、ねえ」

「良いんですよ。神に頼るのは準決勝以降。それまでは神に決められずとも、既に我々が決めていることですから」

机の上には1人に1つつつスープの入った器とコップが用意されていた。会長さ

んがコップを掲げる。

「それでは前祝いにジューズでカンパーイ！腹捲えが済んだらいよいよ試合開始、ガンバロー！」

会長さんの挨拶いつもの軽い感じだ。しかしカップ同士の当たる音は聞こえない。

「西住殿、キンチョーして喉を通りません」

スプーンを持ったままが地図を確認する私に、優花里さんが話しかけてきた。ジューズの残りを喉に流す。

「そうですね。もう次の次がプラウダなんて」

「え？いえ、相手はサンダースであります！参加校ナンバー1の装備と物量を誇る優勝候補であります！」

「ああ、でも航空支援のないサンダースならなんとかなるんじゃないでしょうか？それに1回戦なら車輛数も限定されますし。こちらの主力はヘッツァー、III突、ポルシエティーガーともに防衛タイプなので引いて守りを固めましょう。それでもサンダースは押ししてくると思います。」

ですがサンダースは硬式においてならプラウダや黒森峰より士気が大きく劣りますから、そう気負うことはないでしょう。それにその次のマジノかアンツイオも共に硬式の経験はありません。戦車の質から考えると、そんなに気にかけることはないかと」

「……そういえば、先ほどお会いしていた方はどなたでありますか？」

「今回には関係ないので大丈夫です」

全く、この口調を維持するのも辛いんだぞ。そんな話をそらしたりしようとしてくるんじゃない。上手く伝えてくれよ。

珍しく華さんがお代わりすることなく食事が終わり、片付けされずに残った唯一のものである機の周りに全車長が集まる。河嶋さんが真つ先に口を開く。

「西住、今回はお前が策を立ててくれ。硬式経験者はお前だけだ。軟式とは訳が違うだろう」

「分かりました」

まあ、そりやそうくるか。バツ印が2つ書かれた地形図を食い入るように見つめる。一つは我々、もう一つはサンダーズだ。ある程度考えた後、それとは別に1枚の紙を置いた。

「敵は盆地にて包囲戦を行おうと計画しております。偵察も出してくる模様です。しかも敵の西住は我々を航空支援がないと舐めています」

ヘッドホンを外したアリサが伝えてくる。

「フツ、しゃらくさいわね。あいにくウチは諜報も一流なのよ。それならば逆包围をかければいいわ」

「偵察を瞬殺しましょう。相手から我々を見失わせるのです」

「ナイスね。そうしましょう」

そう。実に素晴らしい情報だ。我々が賭けるのは命なのだ。試合という場で戦うだけでなくフェアであろう。そうじゃなければ爆弾の雨で終わらせるわ。

午前11時、審判の笛の合図と共に第74回戦車道大会1回戦第4試合、大洗女子学園対サンダース大学付属高校の火蓋が切つて落とされた。

「パンツァー、フォー！」

大洗側も私の掛け声とともに移動を開始した。ウサギさんチームとアヒルさんチームが偵察として前に向かい、その他は指定された場所に向かう。

「ウサギさん、盆地の方の351地点まで先ほど付けた丸太の束を付けていてください。盆地を過ぎたら切つて外してください」

「了解しました」

「全車、土煙を出さないように！速度はゆっくりで構いません」

始まった。履帯が木々の間をゆっくりと、煙が葉に紛れる程度にしか上がらぬよう進

む。

「西住殿……」

優花里さんがこちらを見上げるのを、右足の爪先で肩を叩いてから口元に寄せて制する。何があるか分からん。無用意に口を開くでない。

「西住副隊長、こちらアヒル、ただいま626地点、敵影はありません」

「了解しました。そちらで一度待機してください」

「分かりました」

通信手の近藤が磯辺にみほの指示を伝え、近くの木の下に停車した。

「本隊と随分離れたな」

「そうですね、キャプテン」

磯辺はそのままキューポラから身を乗り出し、双眼鏡を構える。辺りの見晴らしは率直に言つて良くない。

「しかし西住副隊長はあのように仰つてましたが、あの話本当なんですよね？」

「まあ確かに車内のコーティングは剥がされているようだが……」

「砲弾もいつもより重い気がします」

「そ、そういうえば、私たちとウサギさんチームだけさっきの食事豪華だったよね」

「何でか西住副隊長に訊いたが、全く答えてくれなかつたな。何なのだろうか。それにしても偵察といつても敵の動きが無くては何も……ん？」

「ねえ、何か音がしない？」

佐々木がハッチの外に目を向ける。磯辺が首を左右に振つて見ると、右に敵戦車が数輛見える。距離も近い。

「て……敵発見！右側面3時！砲塔旋回早く！早く！」

佐々木が汗を流しながら必死にハンドルを何周も回す。回し終わった佐々木の顔が照準器に戻り、その中央に捉える。敵は側面を晒している。幸いまだ敵は我々に気づいていない。

「撃てッ！」

磯辺の合図とともに照準を定めて引き金を引く。しかしその後には聞こえたのは、完全に弾かれたとしか言いようのない甲高い金属音だ。

「弾かれたか！こゝ、後退用意。作戦通り敵を誘い込むぞ！」

河西がレバーを引き、後退しようとしていた。

アリサ車の車内ではかん高い音がこだましている。

「居たな……ブリキの箱め。捻り潰してやる。どこ当てても撃破出来るでしょ」

「ベティ待つて！豆タンクでしょ」

砲塔の回転を始めていた砲手のベティをアリサが制する。するとアリサはキューポラから身を乗り出した。

「ハロー、そしてグッバイ」

開けながら一声挨拶すると、すぐに梓に腰と足を掛け、手元の12・7ミリ機関銃の引き金を引く。けたたましい音とともに後退しようとしていた八九式を銃弾の嵐が襲う。銃弾は貫通して車内のバレー部員をも突き抜けていった。

悲鳴が一瞬間こえたが、すぐに聞こえなくなる。エンジンに最後の1発が当たったのだらうか、撃ち終わった後自動判定装置の作動する音が悲しく響いた。車内に残されたのは、車内の左側に寄った、一つあたり10箇所の穴が空いている元人間。

彼女らが試合前に訊いた、この試合では人が死ぬという話を実感する時間は、残されることはなかった。

「こちらアリサ！八九式撃破しました。乗員の生存もなし！このまま進んで敵の側面を叩きます」

「Good！うちらもM3とつとと撃破するわよ！」

早速の朗報。アリサは既にこの雰囲気の中で自身の在り方を確立している。早く私

もこの現実に慣れなければ。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園高等学校 犠牲者

磯辺 典子

サンダース 銃殺 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

近藤 妙子

サンダース 銃殺 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

佐々木 あけび

サンダース 銃殺 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

河西 忍

サンダース 銃殺 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

「アヒルさんチームとの通信切れました」

沙織さんが振り向き報告する。通信が切れる、それはすなわち死である。そんなに地獄の釜の底を眺めたような顔をするのも然りか。私は久々に見たぞ、その底を。

「側面からも来ましたか。さすがですね。各チーム右方向の森を警戒してください」

予想の範疇。彼らはチャンスはあれどそれを逃した。そして情報と引き換えに死んだ。それだけだ。

そうせざるを得なかったのだ。八九式の硬式で使い道なんてどうあがいてもこれが精一杯。そうであるに違いない。そうだ。そうだ。

いずれにせよ場所がわかったのは重畳。あとはこれを活かすのみ。

第3章 ③ 仕事

「アヒルさんチーム、走行不能」

澤の背中に戦慄が走る。しかし他のものは深く考えていない。というのも、澤は仲間が平穩の中で試合が出来るように、微かな気遣いを以って事実を隠匿していたからだ。そしてその効果は明確に現れていた。

「とりあえずアヒルさんチームの無事を確認するね」

そう言つて宇津木はアヒルさんチームの周波数に無線を合わせる。

「こちらウサギチーム、アヒルさんチーム無事ですか？」

無言が数秒続き、宇津木がヘッドホンを外す。

「どうだった？」

「いや、返事が無いよー」

「撃破されたなら一言くれるのがルールなはずなのにね」

その意味を分かつてしまった澤は胃が丸ごと口に登りそうになるのを感じた。しかしそれはすぐに引いた、喜ぶべきことが理由ではなかったが。澤は素早く双眼鏡を構える。かなり遠いが戦車がいるようだ。4く5輛といったところか。

「あや、11時方向の敵の距離わかる?」

「えっ、どれ? ああ、あの小さいの? うーん、シャーマンが6メートル弱だから……多分1000は離れているんじゃないかな?」

「ありがとう」

咽頭マイクのスイッチを親指で入れる。

「西住副隊長。敵発見しました。現在えー、776地点、敵は4〜5輛です。距離は1000。どうしますか?」

「作戦通り北の盆地に誘い出してください。鼻の長い車輛いますか?」

「んー、すみません。遠くて分かりません」

「それがいたら気をつけてください。有効射程は3000あります」

「分かりました。現在結構離れてますが誘い出します」

砲撃音、そして間も無くいきなり近くの土と木数本が辺りに拡散しつつ吹っ飛んだ。

「えっ、な、何があったの?」

混乱に襲われるウサギさんチーム。遠くに見える戦車のうち1輛がこちらに砲塔を向けているのが何とか分かる。しかもそれは西住副隊長に言われた鼻の長い車輛だった。あの距離からこんなに正確に撃ってくる。まともには戦えない。

「主砲、副砲それぞれ1発撃ってすぐ後退!次が来る前にいくよ!」

「は、はい！」

2つの砲が放った砲弾は敵には届かなかった。ならばただ後退するのみ。この木立のせいでこちらも当てづらいが、それは向こうも同様のはず。誘い出すことが本来の役割である。

「……チツ！」

ナオミがファイアフライの車内で舌を鳴らす。

「ナオミドンマイ！逃げてるから追うよ！大洗の目を奪いなさい」

「イエス、ママ」

「Go ahead！」

前進を始めさせた。他の4輜も砲撃を開始し、M3を襲う。木を根っこから撃ち抜く砲弾。ウサギさんチームの副砲も負けじと打ち返すが、木に当たり邪魔される。

厄介だ。このままだと彼らの術中にはまりに行くようなもの。木が邪魔で、ナオミが十分実力を発揮出来ない。

「中々すばしっこいわね。このままだと盆地まで行っちゃう。仕方ないわ、M3に砲撃を続けつつ、盆地を囲む敵を右側面から叩くわよ！」

「イエス、ママ」

ナオミは実に物静かなスナイパーだ。たとえ自分と相手が共に動いていても、難なく当てる実力を持つ。そして硬式にて大洗と戦うことを最後まで避けようとしていた一人。

だが今は飛び回るM3に無情な砲弾を浴びせかけている。相手の車長が頭出してるけど、御構い無し。こんな直ぐに人は変われるものだろうか。自分の性に合わない疑いが、ふと浮かんでしまった。

無線を繋げさせた。

「ナオミ」

「手短に頼む」

「わざと外してないわよね？」

「……」

しばらく何も帰ってこなかった。息する音さえも。

「あ……」

「私の戦車道に於ける仕事は変わらない。仕事の邪魔なら断る。通信終了」

89式を撃破したサンダースの別動隊は、盆地にしていると想定している敵の左側面を攻撃するべく、履帯の音を響かせる。その為側面に注意を払うことなく、林道を縦一列に

並んで進んでいる。

この時を待っていた、この一列に並ぶ時を。勝つ気でノコノコやって来た雷神の横つ腹を突くは今。

「見えました！先頭M4が5輛。レオポンさんチーム先頭を砲撃！88ミリです。1発で確実に仕留めてくださいッ！」

指示が飛ぶ。この指示を出す者は躊躇つてはならない。八九式とは比べ物にならない轟音がし、ポルシエティーガーは反動で少し後退する。

その砲身から飛び出した88ミリ砲弾は狂いなく先頭車輛の車体側面を撃ち抜く。砲塔は宙を舞い、車体のありとあらゆる金属板の隙間から爆煙が吹き出す。

お見事。

それを確認し、次の行動に出る。

「カメさん、カバさん、あんこうは最後尾5輛目を砲撃!!華さん、足回り狙ってください」先の2人の砲撃には期待してない。ただ華さんなら確実に履帯を壊してくれる。

あんこうから撃たれた砲弾は転輪に命中、履帯の破壊に成功した。カバさんから撃たれた砲弾は車体側面に命中するも貫通はせず、カメさんから撃たれた砲弾は命中しなかった。

カバさんチームの命中は今後の戦術に於ける大きな利だ。カメさんの河嶋さんの砲

撃は当然の結果だろう。

「2発命中！擱座しました」

先頭と後尾を撃破された敵別動隊は一本道で立ち往生していた。前進も後退も出来ない。車輛同士がぶつかり合う。

さあ、時は来た。敵の増援が来る前に。

「全車中の3輛を砲撃！撃ちまくってくださいッ！」

大洗現存車輛の殆どの砲門が残りの車輛に狙いを定める。

「えつとそど子、47ミリ砲と75ミリ砲どっちを？」

「どっちでもいいから片っ端から撃ちなさい！」

「河嶋ア、うるさい！もつと静かに撃て！」

「会長、こんな時に無茶言わないでください。あと干し芋食ってないで手伝ってくださいー！」

「さつきはしくじったが、そうはいかせない！フオイアー！」

「さあ、海賊に次の機会はない！波濤を超えるぞ！」

「ヨーソロ！」

その報告に驚きを隠せなかった。

「アリサ隊は交戦1分で全車被弾、全滅だそうです。」

「なに！敵主力？馬鹿な、盆地にはまだ……」

「敵部隊の場所は643地点だそうです！別動隊の生存者が突入は中断して負傷者を收容するよう許可を求めています。」

「向こうの損害は？」

「……残念ながら最初の八九式のみようです。あと、アリサ副隊長の車輛は全損、生存者のいる見込みは……」

「……」

右手の親指の爪を噛み切り、破片を吐き捨てた。森の中からは黒い煙がもうもうと立ち昇っていた。ウソではないだろう。

乗せようと思ったら乗せられたか！

こちらでも向こうの場所が把握できたのは良いが、向こうは第1波を撃退して士気が上がっている。対してこっちは撃破の情報による不安があるだろう。

……西住みほのレベルが把握出来た以上、このまま数的劣勢が向こうに与えられたまま戦う必要はない。車輛を整備して戻れば良い。長期戦なら物資、環境面から考えてこっちに分がある。

こちらの場所はばれた。戦闘が始まってから誰も口を効かない。お喋り好きな沙織さんでさえらしくもなく神妙な顔して、恐怖と戦っているだろう。そう、これが実戦、硬式戦。5輻足止めはした。うち2輻は撃破した。双眼鏡で向こうを眺める限り、動き出す気配はない。

この後ウサギさんチーム率いる本隊と正面から戦っては、損失が大きくなり過ぎる。試合の形態上、そして目標の達成の為にそれをこつちから完全に避ける手段はない。

しかしそれは向こうが犠牲に構わず突っ込んで来る隊長だったらの話だ。ウサギさんチームから連絡がないところを見ると、どうやらそうでもないようなのが幸いか。

股下の布が蒸れる。こんな密室に5人で屯しているのいつものことだが、今日は冬のくせに一段と蒸れて妙に温かい。

いや、違う。蒸れているだけではない。よくよく神経を研ぎ澄ませてみると、冷えた太腿にぬくもりがある液体が伝って垂れている。左右のどつちかは知らんが。

不意に笑いが漏れる。私はこんな一時的な安心の中で緩んでしまうような人間だったか。はたまたこの状況に恐怖を覚えているのか。

ここは敵がファイアフライだけでもこつちに差しむける可能性なども考慮して警戒を怠らなすべきじゃないか。

ま、他の人が気づいてないのは幸いだ。ウサギさんチームに確認を取らせよう。

「こ、こちらアンコウチーム。ウサギさん、無事ですか!」

「こちらはなんとか大丈夫です。梓に変わりますね」

呑気な宇津木さんの声から変わったのは、いつもより低めの澤さんの声だった。沙織さんも私に無線を繋げる。

「西住副隊長! 敵の追撃がやんだのですが」

「撤退ですか? 静止ですか?」

「撤退です。こちらの移動以上に距離が離れています。ファイアフライも引き上げているようです!」

その直後、サンダースの陣地の方角から白い煙が登る。それが何を示しているかは断定出来ないが、他の情報から推測は出来る。

「……サンダースは突入を中止したようです。元の陣地に戻ってきてください」

「了解しました」

深く息を吐き出した。

「サンダースは一旦突入を中止したようですね。やはりプラウダとは違います。それではこちらでも移動しましょう。反転してください」

「ぶはあー。緊張で息が詰まる」

ヘッドホンを外した沙織さんが開け、ハッチから湯気が登る。他の車輛の様子を見る

に、みんなも既に気づいているんだろうな。これは死ぬのが少し伸びただけにすぎない、と。緊張が解けて気絶する者が居なくてよかった。

雲と煙が混じる空の下、最初の陣地に残る車輛が帰ってきていた。カップと温かい飲み物が用意され、各人に配られる。私も一杯頂き、それを両手で包みながら配られる場所から少し離れた場所で、試合会場の地図と向かい合う。

誰も会話しない。話してもこの状況に見合う話題が無いのだろう。私もそうだ。

沙織さんがすぐさま審判の元に向かい交渉する。しばらく話をした後こちらに戻ってきて、数少ない会話を始めた。

「沙織さん、どうでした？」

「ダメ、棄権は戦車道連盟理事校以外は一切認められていないって」

だろうな。奴らに私らの話を聞く利点はない。寧ろサンダースの話を呑むだろう。沙織さんが言い終わる頃には審判は逆方向に遠く離れていた。

「冷泉殿、あの、ココアを……」

「……ありがとう」

ココアから立ち昇る湯気は風になびかれ消えていく。

「冷泉殿……あの、バレー部チームがやられたのにみんな意外と淡々としてるといいま

すか……こういうものなのでありますか？」

カップを手を持ち、指を暖めている。

「衣食足りて礼節を知る……他人に同情して悲しむには……まず自分の安全と余裕が必要条件なんだろう。私達だってまだ助かったわけじゃないしな。今は誰もが心の底じゃこう思ってるんじゃないか？」

自分じゃなくてよかった、って」

さすがは麻子さんその通り。結局そこだ。

他人の死は突き詰めれば第三者の死。自分と直接的な関係はない。極論を言っしまえば完全な共感は不可能という点で、持ち物を無くしてしまったのと同じだ。

そうなればまず思うのは自身の生存だろう。

さて、先程と同じでは通じるまい。向こうの行動も予想出来なくなった。まだデータ取ってるなら寧ろ裏をかいて作戦を伝えた通り実行するなどやりようはあるのだが。

「降伏、出来ないの？」

飲み終わって一息ついた後に、あんこうチームとカメさんチームが集まっていた所で沙織さんの口が開く。

遂に出てきたか、その言葉が。小山副会長がルールブックの最初の方を確認する。

「降伏の規定自体はあります。ただし戦車道に関連する犠牲者は全て事故扱いです。処遇は捕らえた側の一存で何の保障もありません」

「でも死ぬよりマシでしょ。みんな降伏しようよ!」

「オイ待て! 戦闘自体は今こっちが勝っているんだぞ! 確かに相手はサンダースだが、戦闘を始めた以上その命の保障だって無いんだ! なぜ相手が優しい前提で考える?」

降伏

コウフク

音だけは幸福に等しい。確かにある経路を辿れば幸福かも知れない。しかしその経路になる可能性は、決して高くない。

降伏

そして生憎私は、そのうち半ば逆の経路を辿ってきてしまっている。

足から力が抜ける。両膝が勝手にストンと落ちる。さらに運動もまともにしていないのに、息が荒くなってくる。

音が、臭いが、感触が、脳味噌の中で渦巻いている。

「だ……だめ……で……」

「みほさん、どうしました?」

絶え絶えにしか言葉を発せなかった。華さんが体を支えてくれる。胃の中に薄荷を

ぶちまけたような感覚だが、吐きそうではないのは幸いか。吐くと体力を使う。

「みぼりん、大丈夫？急にどうしたの？」

「このじよ……ハア……で、こう……ヒユ……くだけ……は、だめです……」

「降伏がダメ？なんでよ！みぼりんだって死にたくないでしょ？」

「た、武部ちゃん。一回西住ちゃんをこっちで横にさせてあげて」

「あ……ありがと……フウ……います」

「みほさん、今はいいですから。無理しないでください！」

「え、えつと……過呼吸の対処法って……」

「紙袋か？とりあえず袋持って来て」

私は近場の丸太に頭を寄りかからせていた。気道はしっかりと確保されている。

白んだ空をキャンバスにして、記憶の中の光景が投影されてくる。瞼を閉じて、時が流れるのを待つ。袋のお世話になる前に、肋骨が意識的に呼吸を抑えられるようになってきた。

「大丈夫？」

「大丈夫……です。少し……落ち着いて……きました」

「ほんと？無理しないでいいんだよ？」

「何れにせよ……暫くサンダーは……試合を再開出来ない……でしょうし」

「それで、みぼりさんも降伏ダメなんて、どうしてよ？」

支えてくれながらも、沙織さんの顔には薄っすらと怒りさえ見える。

「……最早向こうに……犠牲を与えて……しまっています……。こちらを明確に敵だと……考えているでしょう。向こうが……無条件で降伏を……受け入れて……くれるとは………思えません」

「そうだ。西住の言う通りだ。向こうの好き放題なんだぞ！仲間を殺した奴らを許すはずがない！少なくともそのことを信用して動くべきじゃない！」

「で、でも好き勝手ついても、相手も人間よ？流石に降伏して殺されはされないんじゃないの？」

分かっていない、人というものを。彼女は元から男を理解してないけれども。

「人をなめて………はいけません。これまで………多くの人を………殺してきたのは、紛れもなく………人なのですから」

納得はしないだろう。彼女は本気だ。サンダースへの降伏というものに、生存への微かな望みを見出し、しがみ付いている。

それから引き？がすためには、私も本気で説得をかけねばならない。戦いの最中で降伏すること、人に命を握られること、そしてその状況下で人は何をするのか、それを伝え切らなければならない。

もしあの時依頼されたことを為さねばならないなら、これは重要な仕事だ。命を賭けた後である今なら出来るだろうか。思い出したくもない記憶だが、引つ張り出すしかない。

「実は……わたし……プラウダの捕虜になったことが……あるんです……」

優花里さんは驚きの視線を向ける。彼女にとつて噂であり、話半分に聞いていたものだったのだろう。それが真実だというのだからそんな顔になるのも仕方ない。

その丸太に腰掛けていた会長が頭を抱えた。この人は元からこのことを知っていただろう、立場的に。私のことをある程度把握しているとも言ってたしな。だからこそタチが悪い。

息が荒れるのは治ったが、言葉は上手く口から湧いてこない。だが出来る限りの力を以って語り始めた、あの悪夢の日々を。

第3章 ④ 暴戻の容認

今年の7月、みなさんと会う少し前にあつた硬式大会の1回戦で黒森峰の9連勝が止まりました。プラウダのシュターリンオルゲルというミサイルの大量使用作戦に完敗したのです。

私のいたSS12部隊も狙われ、車輛を破壊された姉と私と姉の車輛の者の3人はプラウダに捕らえられました。私の車輛の者は私以外全員ミサイルの直撃で死にました。むしろ生き残ったのが奇跡です。

連れて行かれた先は地下の牢屋のような所でした。そこでまず所有物を服を含め没収され、手首同士を紐で結ばれました。逆らう者はナイフで服を切り裂かれました。

先にいたほかの隊の者2人と共に、一つの部屋に押し込められました。運ばれる時は男の管理官に髪を掴まれました。

「やめろ！捕虜に対するこんな扱いは戦車道規定違反だ！」

姉が思わず反論します。すると掴んでいた男は手を離し腕と挟むように鳩尾に膝蹴りを食らわせ、押し倒してその上に馬乗りになりました。

「あー？誰に向かつて口きいてんだ？黒森峰の狼どもが人間の言葉を話すんじゃないー

よ」

そういうが早いか、すぐさま男は姉の顔を何発も何発も殴りました。一回骨が折れるような音がして、姉の口調が殴られている間にいつもの男口調から女口調に変わったのをよく覚えていきます。

「殺人鬼にはいかなる同情もしない。お前達がプラウダにやったことを思い出すといい。この程度、報いと思つても足りるものではないわ」

試合終了後見に来ていたプラウダの副隊長のノンナがブリザードの渾名にふさわしい冷酷な目を向けながら言いました。

「……やり続けなさい」

「勿論です、こいつらは100回殴つても殴つたうちに入りませんよ。それより、報酬はマジなんですよね？」

「ええ、完遂したらくれてやる」

散々殴られたあとの姉は両ほほを腫れ上がらせ、鼻と口から血を流し、ただ泣きながらゆるして、ゆるしてと繰り返していました。

「オラよく見ておけ。お前らの隊長様が泣いて詫びてらっしゃるぞ」

男は髪を掴みながらそう言うのと不気味なほど大きな声で笑い始めました。

「お前も立て」

私が不意にこぼした言葉を気にすることなく、男は私の腕を掴み姉と顔を突き合わせました。姉と私は互いに気まずくて視線を逸らしていました。

「この2匹は西住流とかいう黒森峰戦車兵のエース姉妹らしいな。こんなメスガキが何人同胞を殺しやがったんだ」

男は私と姉の髪をひつつかみ頭同士を何度もぶつけ始めました。男はそれを面白がっているようでした。

「ははは、こんな珍しい打楽器を使えるなんてな！」

そう言うと、男はおそらくロシアの歌を歌いながら頭同士をぶつけ続けました。ぶつけ合ひすぎて血を流しふらつき始めた私を男は顔から地面に投げ捨てました。別の男が面白半分に姉のこめかみに銃を突きつけます。

「片方壊れたし、この玩具処分するか？」

「し……死にたくないです。撃たないで……」

「はははは、そりゃそーだよな！でもまだまだ楽しめそうだからやめとけよ。楽しみは長い方が得だろう？」

「はははははは。ちげえねえ」

男の高笑いを聞きつつ、あの、試合前にいつも

” 忠誠を誓った黒森峰のために戦え！”

などと言う姉が、死地に向かう人々を統率してきた姉が、自分が生きる為に必死に命乞いしている様に、何かが崩れ落ちるような尋常ではない恐怖を覚えました。いや、その時は恐怖なのかも分かりませんでした。

次の日、私と姉は手首の紐の代わりに首輪を繋がれました。そして手首の紐を紙の箱にラップの芯を付けた砲塔のようなものを、頭に乗せられました。そして男がよだれをダラダラ垂らして吠え盛っている黒い猛犬を連れてきました。

「ホラ競争だ走れ走れ！パンサー、ティーガー！」

その猛犬は吠えながら迷いなく私達を襲い始めました。時たま犬の脚が前に振りおろされ、自分に触れる時が怖くて仕方ありませんでした。男が面白がってさらに犬を私達の方へ近づけたりもします。

「ははは、どうした頑張れ」

「追いつかれて食い殺されても止めないからな」

「自慢の大砲で戦ってもいいんだぞ？まさかそのアハトアハトが飾りつてこたあねえよなあ？同胞を何人も屠ってきたんだらう？」

「はははは」

男達は面白そうにこちらを見ます。1人は写真を撮っているほどでした。

夏の日について殺されるかわからない緊張の中で何時間も走らされ続けるのです。勿論喉が渴いてきます。

私達に与えられる水は顔にぶちまけられる男たちの小便のみでした。それでも飲まなければ死にます。もう本能で水を求めていました。

また次の日、その日はプラウダの隊長のカチューシャと副隊長のノンナが視察に来ました。カチューシャは私達以外の3人の頭に黒い袋を被せ、用意されたりボルバー式の拳銃でロシアンルーレットを始めました。私達を候補から除いたのは、こんなので殺すのが勿体ないから、と言っていました。

最初の人の顔にその銃口を近づけ、引き金を引きます。

1 発目、空砲。

2 発目、空砲。

3 発目も、空砲。

4 発目で発砲され、1人の頭を弾が貫通しました。その遺体はそのまま放置されました。

撃ち終わった後カチューシャは、思ったより面白く死ななかつたわね、と慣れているかのごとく銃の返り血を拭くと、悠々とその場を離れました。

その先は記憶が朧げで、気絶と覚醒を繰り返していました。

殴られる犯されるは日常茶飯事。犯される時は彼らが犯りたい時にやってきて、マグ口では面白くないから、と水をぶっかけられて起こされてから何度も何度もやられました。た。

初めてやられたときは竿姉妹だとかなんとか言っていました。ですが既に殴られ続けた後だからでしょうか、特段強い痛みを覚えた記憶はありません。まあ、神経も削り減らされていたんでしようね。

他の時に一旦覚めた時、3体の遺体がコンクリートの床に放置され、姉は黒い袋を頭に被り、赤いハーケンクロイツの描かれた布を着せられ、台の上に立たされていました。両手の指に金属らしき紐がつけられていました。どうやら電流を流されていたようです。それを見て私はもう一度気絶しました。

それからどのくらい経ったでしょうか？後から聞いたら、私たちが収容されていたのは10日だそうなので、きつと最終日だったのでしょう。足音を立てて男が入ってきました。たまに水溜りに入るような音もします。

「たまらねー臭いだな、息ができねー。死んだ奴は氷に漬けとけつて言っただろ」

男はイライラしているようで、近くにあつた死体を結構強く蹴り飛ばし、死体はくの字に曲がったまま壁に激突しました。私はもうそれに対する感情を起こすことも、臭いを感じることもさえ出来ませんでした。男は手首を柵に結ばれた私達の前で止まりまし

た。

「ヨオ2匹ともしぶてえな。いい知らせだぞ。我がプラウダの優勝で大会は終了した。ここも閉鎖して引き上げた」

そう言うのと男は持っていた銃のスライドを引き、姉の左ほおの下にめり込むように突きつけました。

「死ぬ前に最期のお祈りをさせてやる。姉ちゃんからだ。子供の頃を思い出して心を込めて祈れ」

男は姉の頭を引つ掴みます。

「て……てんにましますわれらがちちよ……みながあがめられますように……みくにがきますように……みこころのてんにおこなわれるようにちにもおこなわれますように……わたしたちのしよくじをきようもおあたえください……わたしがひとをゆるしたようにわたしのつみもおゆるし……」

姉の顔からは穴と呼べる穴から液体が垂れ流されていました。

「よしよしよく出来た。今度生まれる時は戦車道なんかやるんじゃないぞ。アーメン」

その後に響いたのは銃声ではなく、バネがストッパーから外れる音でした。

「ん？チツ、また不発か。オンボロ銃め」

男は耳元で銃を振り、投げ捨てました。すると奥から軍服姿の人が出てきました。

「何やってる！もうトラック出すぞ！置いていくからな！」
「待て、すぐ行く！」

走り始めた男の背中では私はスローモーションでも見ているかのように目に焼き付きました。静寂。時が止まりました。

「……………助かった」

それを私は自分の声で進ませます。

「お姉ちゃん……………私達……………私達助かったんだよ……………お姉ちゃん？お姉ちゃん？」

周りにはいつの間にか人が集まっていた。そこにいる全員が私の口から発される一言一言をただひたすら耳から取り込んでいた。

「その後、解放され黒森峰に戻った私達は病院に運ばれ、精密検査を受けました。幸いにも私は身体的に後遺症が残る行為はされていませんでした。」

しかし姉は鼻の骨を折られ、植物状態と診断されました。そしてその日から一度も目を覚ましていません」

他のものは誰ひとりとして話そうとしなかった。人には経験しなければわからないものがある。これはおそらくその一種なのだろう。ただ、その深刻さのみは伝えられたようだ。

「……何もそこまで話すことはない……」

河嶋さんが空気を維持しつつ口を開く。

「ガチの戦車道ってそこまでやるのか……こりやマイツタね……」

「……あの噂は、マジだった、ってわけかい。奴隷船の大西洋横断よりよっぽどひどい」
会長さんと途中から来ていたお銀さんが続いて独り言を述べる。彼らの背後で優花里さんは拳を握りしめていた。

「会長、みなさん、もう……」

大粒の涙を流し、つつかえながら続ける。

「こうなってはもう、戦って勝つ以外なくなつたのであります！」

ま、私たちの精神に対する犠牲と引き換えに、作戦は無事に成功したわけだ。

ウサギさんチームの者も人が集まるのを見て軽い気持ちで来ていた。みほの話を途中から聞いた、聞いてしまった。

「……」

「……」

聞き終わった後話す者はいなかった。そして反応することなく放心状態のまま少し離れた元の場所に戻った。皆椅子に座っても空を眺めたりうづくまるだけだ。

「……梓は……知ってたの？」

山郷がなんとか喋る。

「……何を？」

澤は空を見上げながら返す。

「……要するに、アヒルさんチームにはもう会えない、つてこと」

「……うん……」

「……どうして？」

「……みんな、逃げ出しちゃうか嫌になっちゃうと思ったから……そうなたら先輩達に迷惑かかるかもしれないし」

「確かにね……で、逃げられるの？」

「それが出来たら逃げてるよ……自衛隊に包囲されて無理だつて」

「降伏しても……あなるんだよね……」

「つまり……生きたいなら戦うしかない、つてこと……」

「だったら、さつき秋山先輩が言ってたみたいに戦うしかないじゃん！やるしかないよ、梓！」

「みんな……いいの？佳利奈とか、紗希とか……」

「……いいよー」

阪口は席を立つ。それでも少しふらつき、視点もあやふやだ。

「仕方ないよねー」

「……」

丸山はまだ空を眺めている。すると大野が新しいお茶のポットを持ってきた。

「……」

「そういえばあやは？」

「何？」

「このままこの大会に参加するかってこと」

「するしかないんじゃない？死ぬか、死ぬまで戦うか、なんでしょ？」

ポットを机に置きながら平然という。

「……だよね……」

「……」

丸山はこちらに虚ろな視線を向け頷く。これでこの場は纏まったかと思いきや、それを崩す言葉が一つ。

「……イヤ！」

「優季？」

「人を殺すなんて絶対イヤ！なんでみんなそんな事が言えるの！」

そう、はつきり言ったのだ。いつもの掴みようなない柔らかな声はその存在を封じ込まれている。

「……でも、ここは自衛隊に囲まれているんでしよう?」

「うん。逃げようとしたら殺されて、戦死扱いだつて。で、降伏しても……」

「さっきの通りと……やっぱり生きるには、ここで戦うしかないんだよね」

「そういうこと、になるね」

「優季ちゃん、一回落ち着こう。それしかないんだよ、生きるには」

「イヤ……なんでみんなそんな事が言えるの?自分が人を殺すんだよ?そして自分が殺されるかもしれないんだよ?もう既に死んだ人もいるんだよ!」

宇津木は席を倒し、自動的に立った。説得をかける澤や山郷の顔を、恐れとともにせわしくなく見回す。

「……仕方ないんだよ。そうせざるを得ないんだ……」

「イヤ、そんなのイヤ。いやああああ!」

縛りを引きちぎった人形は、全力で5人に背を向けた。ただこの集団、大洗女子学園戦車道から離れる方へ。

「あつ……待って!」

「ど、どうしよう……梓!」

「…………え、えっと、佳莉奈とあやは優季をすぐに追いかけて！」

「あいあいあーい！」

阪口と大野はすぐに宇津木を追いかけ始めるが、半分野生を解放しているその背中を捕らえるのは厳しい。

「私が報告に行くから、あゆみと沙希は戦車の準備を」

「戦車を？戦車で追うの？」

「確かに危険かもしれないけど、もし追いつけなかった時のために。速度はそっちの方が出せるから」

「…………分かった」

第3章 ⑤ 逃避の代償

「河嶋隊長！西住副隊長！」

先程まで神妙なる雰囲気に含まれていた場に、それを打ち壊して澤さんが突入してきた。

「澤、どうした？」

「優季が……優季が……」

「優季？宇津木がどうかしたか？」

「だ、脱走しました！」

ふむ、脱走か。まあ一人くらいは出るかと思つたが。誰だつて好き好んで戦闘に身を投じるわけがない。仮にそれしか手段がなくとも。

「な、なんだと！」

「今佳利奈とあやが追いかけてますが、結構優季が走るのが早くて……」

「と、とにかく連れ戻せ！サンダーズに捕まったりしたら面倒だ！」

「その為にも戦車を使わせてください！」

「あ、ああ」

「……お待ちください」

私は丸太を枕にしたまま割り込んだ。

「どうした、西住。無理はしなくても……」

「宇津木さん、どちらに逃げましたか？」

「えつと……こつちです」

澤さんは森の奥、サンダース陣地の逆側を指差した。

「……そちらですか。だとしたらサンダースの捕虜となる可能性はほぼない。それに情報漏洩のリスクもない。澤さん、車輛の使用は認めません。阪口さんをすぐに呼び戻してください」

「お、おい、西住……」

「宇津木さんの喪失は……サンダースの再攻勢へM3が即応出来ないことと比較すれば、決して得にはなりません」

「に、西住副隊長！優季を見捨てろと！」

「……大野さんによる追跡は認めます。装填手の負担を考えれば、砲是一门でも何とかなりますから……ただし操縦手である阪口さんが使えないのはリスクが大き過ぎます」

「……そうだな。目下の敵であるサンダースを無視する訳にもいかない。阪口は連れ戻せ。その為に他の車輛の装填手に応援を頼むのは認めよう。それまでに捕まえられ

ばそれでよし。ダメなら……」

「……はい。ではそのように」

その後優花里さんやカエサルさんも交えて宇津木さんらの追跡が行われた。だがかなり遠くに行ったらしく、そもそも追いかけている阪口さんの発見にさえ手間取つていた。

「西住、宇津木を見つけるつもりはあるか？」

見守つてくれていた沙織さんが、私が調子が良くなってきたのを見てトイレに行つた間、河嶋隊長が近づいてきて尋ねた。

「さて、どうでしょうね」

まだ試合は続いているが、向こうが攻めてこない限り停戦は継続される。サンダースの救護者テントへ一つの足音が近づいていた。入り口の幕をかき上げてテントに入る。

「あーた、隊長！」

入り口近くにいた頭を負傷した患者は身を起こそうとする。

「起きなくていいわ、そのままそのまま。ケガは大丈夫？」

その者を制止させ、にこやかな顔をして問いかける。

「ハイ」

「危険な任務をよくこなしてくれたわ。きみ、この者は？」

「頭の傷も浅いので明日には戻れるかと思えます」

「本当ですか！」

救護担当の者が手に持つ紙を読むと、その者は再び起き上がろうとしたので、これまた制した。

その後も一人一人ベッドの元までより声をかけていく。彼らは戦った。敵を倒すべく前に進んだ。命令に従って。私には過ぎたる部下たちよ、感謝しなければならぬ。

「自分は足をやられました、一刻も早く治して部隊に復帰したいです」

「あなたは英雄よ。早い復帰を期待するけど、無理はしないで」

彼女は乗っていた車輛が撃破され、脱出した拍子に戦車から落ちて足を負傷した。だがそのまま這って陣地まで戻ってきた、まさに英雄だ。手を握ってその活躍と生存に敬意を表する。

ふと一番奥のベッドを見ると、そこにいた者は身を起こしてベッドに座り、何かずつと、誰かを相手にすることなく話している。

「彼女はどうしたの？ケガはしていないようだけど」

「ストレスによる戦闘神経症です。ずっとこの調子で食事にも手をつけません」

戦闘神経症？戦場へ赴く意志を持ちながら、怪我をして行けない者がいるというのに

?

アリサなんてこの環境に即座に適応し、敵に対して攻撃することを躊躇わなかった。殺した後もそれに囚われることなく、攻撃の手を緩めなかった。

そんな人材は亡くなったのに、なんでこんな役立たないのが生きているの！

ナンデコンナノガ……

「おいー」

足を一歩踏み出し、左手のストレートをその者の右頬にめり込ませる。その行為を気付かぬうちに行なっていた。殴られた者は勢いの余りテントを支える鉄骨に頭を強くぶつける。だが左手を使ったことからみて、私にも微弱な良心は残っていたのだろう。だがそれに私の動きを止める程の力はない。

「この臆病者がツ！鬱のフリをしていれば任務を逃れられるとも思っているの！仲間が貴女の代わりに戦って傷ついて、死んでいってるのよ！恥ずかしいとは思わないの！」

泣き腫らした目を持つその者の襟首をつかんで、もう一発拳を喰らわせる。

我々が戦うのは大洗だけではない。プラウダ、そして怨敵黒森峰と戦わねばならない。そして勝たねばならない。

これからも戦いが続くというのに、こんな者のためにベッドを分け与えていては、他

の者の士気にも影響する。

こいつの代わりは、我が校にはいる。

「今すぐ部隊に戻りなさい！戻らないと、次出撃する際スチュアートに括り付けて先頭を進ませてやるわ！それさえもいやなら……」

「ケイ隊長！おやめください！」

救護担当の者がケイを止めようと両肩の下から腕を入れてくる。そこそこ力はあるようで、なかなか振りほどけない。

この野郎邪魔するんじゃない！せめてもう一発は。

「戦えないなら戦える奴の弾除けになって役に立ちなさい！」

「えつとー、あの、ケイ隊長」

しかしふと聞こえた声で少し落ち着きを取り戻し、掴もうとしていた手を緩める。背後にいる救護担当のさらに背後、そこに通信担当の者が息を切らして立っていた。

「どうしたの？」

「こちらでしたか。本校より通信が入っています。校長からです」

「アイクから？分かったすぐ行くわ」

「棄権!!」

無線室にて耳に入ってきた言葉を疑ってかかった。しかし2回問い直しても、帰ってきたのは同じ言葉だ。

何を言っている？まだ始まったばかりじゃないか！

「冗談じゃないです！少しくらいの犠牲が何だつていうんです！今日は大事をとって後退しましたが、相手にも損害を与えていますし、こちらの補充はもう終わっています！私に任せて戦って貰えば、この戦い必ずサンダースを優勝させてみせます！」

怒りの余りヘルメットを叩きつける。

「いや、あなたがGOとさえ言うてくれれば、こんな大会のトーナメントに合わせてグダグダ戦う必要すらない！直ちに航空部と連絡を取り、プラウダはともかく、黒森峰は直に乗り込んで学校ごと壊滅させてみせます！」

それでこの血なまぐさい学園都市と戦車道、そして我が校の恥辱の歴史も終わりです！それが貴方の目的だったはずです！違いますかアイク!!」

しばし無線の向こうから声はしない。私はあなたの目的のために奮闘した。何故それを捨てなきゃいけないのか！

「……私は黒森峰を倒せとだけ言つたはずだ。お前はそれに違反した。よってケイ、お前をサンダース戦車隊長から解任する。あと私は戦争する気はない。」

後継はナオミだ。彼女をここに呼び出せ。以上」

もう無線の向こうからはなにも聞こえなかった。そのまま受話器を元に戻し、何も言わなかった、否、言えなかった。

テントから出るとその前で一人待機している者がいた。

「隊長、出撃準備整いました」

「結構！次の指示が下りるまで待機せよ。あとナオミをこつちに呼び出してちょうだい！」

出来る限りにこやかな顔で敬礼を返す。

「イエスマム！」

その者がその場を去ると、陣地とは逆方向にゆっくり歩き出した。

何を間違えたのか。このまま棄権したら、アリサが、先に亡くなった仲間の死に一体何の意味があるのか。

近くの丸太に腰掛けて、頭を抱えた。無駄死にを命じたのは、私だ。ならば彼女らが死んだのは、私のせいなのではないか。

「ケイ」

そうして悶々としているうちに、ナオミは背後にいた。

「呼び出されたはいいが、こんな所で何をしている？もう準備は整ったと報告を受けてないのか？」

「……ナオミ、無線室に行きなさい。アイクが貴女に直々に話したいことがあるそうよ」
「……わかった」

踵を返してナオミは私がさつきくぐったばかりのテントの入り口を通り抜ける。その背中に強さ、何かは分からないが揺らがぬ強さを感じ取れたのは、数少ない救いなのかもしれない。

大洗側は次の策を考えていた。こちらは三輛撃破したが、残りの車輛、乗員の質を考慮すれば相手が上回るだろう。今後進むためには、出来るだけ車輛も温存させねばならない。

そしてその間に、阪口さんと大野さんは宇津木さんを見失って帰還した。車輛を出せなかったことは不満だったようだが、冷静な判断力を失っている存在を下手に組織に戻しては、逆に混乱をきたす可能性がある。

私は結局あの後30分近く立ち上がれなかった。立ち上がろうとしても足元がおぼつかないのだ。沙織さんや華さんに見守られつつ、指示のみを出して回復を待っていた。

「……問題はサンダースがいつ動くかだな」

河嶋さんが頭をひねる。

「でも敵が動く前に出ると確実に煙で発見されてしまうぞ」

「……向こうはもう摺座した車輛の補充を終えているでしょう。そうなってしまつては、こちらから攻勢をかけるのは得策ではありません。少なくとも今ではありません。ここは車輛の確認や補充に専念して、タイミングを待ちましょう」

「そうは言うがな、西住。物資に余裕があるのは向こうだ。長期戦になるとこちらが不利。ならばこっちから仕掛けるべきじゃないか？」

「……遭遇戦で双方同程度の損害が出ることだけは避けなければなりません。ですが先程のような奇襲は再びは通用しないでしょう」

すると近くにいた審判がトランシーバーを手に取り、口元に寄せていた。何かブツブツ話している。それが終わるとホイッスルを口に咥えた。そのあとなつた音に皆が注目する。

「サンダース大学付属高等学校、途中棄権！ よつて大洗女子学園高等学校の勝利！」

「……」

「か……勝つたのか？」

急の出来事に頭が混乱する。皆もそうだし、私もだ。サンダースが何をしたかつたの
か見当もつかない。

「おめでとうございます。2回戦進出です。そしてもう一件報告があります。宇津木優

季さん、K I A扱いです」

「……はっ」

第74回戦車道大会公式記録

○大洗女子学園高等学校 v s Xサンダース大学付属高等学校

被害 大洗1輜 サンダース3輜

サンダース大学付属高等学校途中棄権

大洗女子学園高等学校 犠牲者

宇津木優季

サンダース 銃殺 試合会場からの脱走を目論み、警告を無視した為射殺 K I A

「……勝ったんだね」

地平線に沈もうとする太陽を望みながら沙織さんが言う。背後ではヘリが飛ぶ轟音が時たまする。

「うん……」

「そうですね……」

実感が薄いというのもあるが、何か落ち着かない。もしかしたら澤さんが離れた場所

で涙を流しているのも影響しているかもしれない。夕日が明るさを失い、次の試合会場への移動に向けてトラックに戦車が載せられ、カバーが掛けられる。

闇に落ちる空を各々が各々それぞれの思いで見ている。その空の星を数え始めた頃、静粛な空気を破るように声が掛かる。声の主は河嶋さんだ。

「どうしましたか?」

「いや、ただ手紙を預かっただけだ。冷泉、お前宛だ」

右手に持っていたごく普通の手紙を麻子さんに手渡す。河嶋さんから渡されたハサミで封筒の封を切り、三つ折りの紙を開く。

彼女が開かれた紙を見ていた時間はとても短かった。すぐに手を離すと、手紙は左右に揺れながら空中に身を委ねる。

「麻子、どうしたの?」

沙織さんが声をかけ、肩を叩く。かつて手紙に向けていた視線の向きから変化はない。

「……なんでもない」

「なんでもないわけじゃないん! なんなのよ!」

「冷泉さん、話してください」

沙織さんと華さんがそれぞれマコさんの肩を握り揺さぶる。

「……おばあが倒れた」

「……えっ？」

「冷泉殿のお婆様が倒れたのでありますか！ 一大事であります。一刻も早く病院に向かいませんか！」

「といつても……親族の方は？」

「……麻子が小学生の時に両親が交通事故で亡くなったの。だからおばあちゃんが唯一の肉親」

「……」

麻子さんが会いに行ける策を必死に考えようとした。僅かな可能性でも探そうとした。

しかしどう考えてもその壁を乗り越えるのは無理だった。

「……西住さん、銃はあるか？」

「……へっ？ えーと……」

「まさか麻子……」

「会いに行く」

麻子さんの視野は大きく狭まっていた。答える前に麻子さんは陣地に走り、すぐにⅠV号の中にあつたトンプソンを持ってきた。そして4人の前を通って走り去ろうとし

た。何も出来なかった。

そうはさせまいと沙織さんが麻子さんの腰にしがみつく。

「麻子！死んじゃうからやめて！」

「行かせろ！行かなきゃおばあに怒られる！」

「自衛隊に包囲されているんだよ！戦っても勝てないって！実際に優季ちゃんが殺されているんだよ！」

「行かねば……」

「こんなところで死んだ方がおばあちゃん怒るよ！やめて、麻子！」

「……西住さん、空から脱出できるか？」

麻子さんは力を弱める。体重を乗せていた沙織さんが思わず落ちる。

とりあえず怪我はしてなさそうだ。

「えっ？……どこで手に入るか分からないし、もし手に入ったとしても自衛隊の戦車に撃墜される、と思う。自衛隊基地から脱出しようとしたら撃墜にかかるだろうから、操縦する人が相当腕が良く無いと脱出は無理。いや、良くても無理かもしれない」

顎に手をかけて答えた。子供と大人、部活とプロでは勝てるはずもない。

「……そうか……」

「残念だけど……大会が終わってから行くしか無いです」

首を振る。友人の唯一の家族の一大事、それにそうとしか答えられない自分にはぞを噛んだ。

「……そうか。わかった」

麻子さんの手からトンポンが落ち、取っ手から落ちて銃身が石にぶつかる。甲高いその音を聞いたその時、あの日の記憶が蘇る。あの、私の根底を定めた日が。

思わずしゃがみ込み目を瞑り耳を塞ぎ震える。

「みほさん?」

「西住殿!」

「……」

震えが止まらない。空気の冷たさがあの時の背筋が縮み上がる感覚を助長する。恐怖だろうか、何かが身体を凍結させようとしていた。

目が、見えた。あの時の、あの、目が。逸れることなく、ただ私の目のみに狙いを定めている。恨みか、怒りか、それとも他の何か、私の知り得ない何かか。

「いや……見ないで!見ないで!」

「に、西住殿?」

「ゆかりん!取り敢えずみんなみほりんを見ないで!全員、すぐに!」

皆すぐに沙織さんの柄にない必死な声での指示に従った。

「みぼりん、大丈夫だよ。誰も見てないよ。私も」

「いやあ……」

「大丈夫、大丈夫……」

下を向いたまま、沙織さんはそつと背中に触れる。それが相手の背中だと分かったことが、体の震えを治めるのに役立つたようだ。

「ふー……ふー……」

「西住殿、今のは」

「……やめておけ。西住さんのトラウマはあれだけじゃ無いはずだ。我々が知る必要も無い。西住さん、分かった。待つしかない」

麻子さんは幾分落ち着きを取り戻したようだ。良かった。この操縦手の欠落は今後の戦術において致命的すぎる。

「だ、大丈夫？みぼりん？」

「沙織さん……ごめん、ありがとう、ありがとう……」

「いいよ、何があつたかわからないけどみぼりんは絶対に私達の友達だから。絶対逃げないから」

少し荒れた息と肩を抑え、沙織さんの手を掴みゆつくり立ち上がる。友達、私にはいま心からの仲間がいる。私を信じてくれる人達がいる。

「……本当だよね」

「もちろん」

「もし……もしも……」

「西住殿、これ以上お話しされる必要はありません。何があつても私達は西住殿を信じてついていくであります！」

優花里さんが胸を張る。

何があつても……ねえ……

「信じて……いいよね」

「当たり前だ。私は生きておぼあに会わないといけない。その為にはお前さんの指示が欠かせない。頼む。私を生き残らせてくれ。その為に生きてくれ」

深い一礼は周囲に神妙な雰囲気をもたらす。話せぬ疑いを抱えていた私も、黙って首を縦に振る他になかった。

また、言えなかつた……

まだ、私は逃げている……

許されざるべき、ことから……

第4章 これが本当のアンツイオ戦です！

第4章 ① 偉大なる者

アンツイオ学園都市、この学園都市は栃木県旧下都賀郡石橋町、国分寺町、河内郡南河内町を管轄下に入れており、北関東自動車道が東西に横たわり、東北本線が南北を縦断している。

イタリア風の樂觀的な校風が特徴で、その廉価と質の高さを両立した食事と、安定した勉強の為の治安のみを求める校風が、のちの独裁政権成立に一役買ったと言われる。

人口は約7万人。アンツイオ高校学園艦の陸上移設時に移設先として要望を受け、宇都宮への利便性などが評価されて決定したとされている。しかし石橋、国分寺、南河内の3町で進められていた合併協議に、移設を命じられ、他都市との交渉が難航していたアンツイオ学園都市が便乗した、というのが実態である。

しかしこれが仇となる。観光施設を含む多くの海上施設を内陸に輸送する際に多くの費用と時間を取られた上、それに手間取っている間にバブル景気が到来。地価が高騰し施設用の土地買収に苦勞した。さらに廉価な食事の提供の為の補助金が財政改革を妨げ続けた。

「アンツイオの触れてはならぬもの。それはこれだけ飯の金」

という言葉が政治の世界で流れているのは、それだけ補助金の切れ目が縁の切れ目であることを示している。

その広大な敷地、そして東京のベッドタウンとしての南部の発展とは裏腹に、アンツイオ学園都市は財政難に長年苦しむ羽目となる。

12月3日夕刻、岩手県陸前高田市郊外、アンツイオ高校陣地。

以前の軟式戦車道大会は陸上自衛隊船岡駐屯地にて行われていたが、東日本大震災の復興支援の一面もあり、昨年从这里で行われることが決まった。

「……明日か、カルパッチョ」

その中央にある本部テントの中で、私は背もたれに深く寄りかかる。プラスチック製の安物の椅子だ。受け止めてくれる柔らかさはない。

「そうですね。総帥。早いものです」

副隊長の2年生カルパッチョは落ち着いて答えた。背筋はピンと張り、膝の上の手は握り締めている。

事情は聞いたが、そりゃ身体も強張るわ。

「姐さん、飯できましたよ」

カルパッチョが深く息を吐くと同時に、奥からもう1人の副隊長ペパロニが自作の料理を持って出てきた。アンツイオのノリを具現化したような人間が、今日ばかりはおとなしいから不気味だ。

「姐さんはカルパッチョ、カルパッチョはラザニアでいいな」

「ペパロニ、貴方のは？」

カルパッチョが辺りを見回す。皿は2枚しかない。

「あたしのはナポリタン多めに作ったんで、みんなと分けてきます」

「そうか、行ってこい」

「それじゃ」

ペパロニは鍋2つを持って歩いて行った。部屋には静寂が戻るし、空腹感もそれほどでもないが、食わざるを得ない。

「いただきます」

無言で皿のものをつまむ。

「……どう出ますかね、大洗は」

数口食べたカルパッチョが口を拭きながら言う。

「あの西住みほのことだから、仲間を思っ受けて入れよう言うだろうな」

「西住みほの身柄引き渡しを条件に降伏すれば、その他の者は解放する、ですか。これで

食いついてくるか……本当に解放するのですか？」

「もちろんだ。嘘はつかない。西住みほは転校したばかりだから、もし人柱にしても、他の者を人柱にするよりは、大洗との関係が大幅に悪化することは防げる、というのが一つ。もう一つは、ここでの損害は避けられるなら避けたい。次に注力したいからだな。

が、もしそれでも受け入れなかつたら……やるしかない。そうしなければあんな有利な条件で協定を結んでくれた黒森峰に申し訳ない。あの裏切り者西住みほを潰さねば

……」

「……」

元々私は現在大洗でのうのと生きている西住みほを快く思っていないかった。

その理由として大きかったのは、12月の軟式戦車道大会決勝、そこでフラッグ車の車長のみほが職務を放棄して、川に落ちた仲間の救出に向かったこと。

仲間を大切にする所は共感する。しかし何故それを自分で行ったのか理解し難かった。それは他の者に任せ、自分はその場から離れず堂々と指揮すべきだったのだ。

今までの歴史でもトップの逃亡により総崩れになった戦いは数知れない。それは遙か古代のアレクサンドロスの時代から示されている事実だ。

同じ西住の教えを学ぶ者で、いつも学園から結果を求められてきた私にとって、勝ちを捨てることとわかりきっていることを行うとは許せなかった。

さらに追い討ちをかけたのが今年7月の硬式大会である。尊敬する彼女の姉、まほを助けられずに黒森峰から逃げたばかりか、逃げた先で戦車道大会に出場し、降伏することなく戦おうとしているのだ。

許し難かった。生きていてだけならともかく、戦車道をやって反逆しているとは。

「総帥、ペパロニに今夜それぞれの好きな物を作らせたのって……」

カルパッチョが完食した皿を置く。

「言いたくないが……最期の晩餐かもしれないからな」

しかしトップたるもの、威勢の良いことばかりも言つてられない。

1回戦の損害が1輦だった大洗に対し、アンツイオはマジノ女学院と対戦し、敵のセモベンテ殲滅作戦によってセモベンテ4輦、カルロベローチエー輦を失っていた。ただでさえ少ない火力が大きく減ったのだ。その不足は誰が見ても明らかだ。

敵には高火力のポルシェティーガー、III突、IV号、ヘッツアーが残っている。更に姉ほどではないが高い指揮能力を持つ西住みほもいる。IV号と張り合えるのがP40、それも1輦しかない我々だ。まともに戦えば勝ち目は無い。

かといって向こうが降伏して車輦を鹵獲しても、こちらで使える車輦が無いのが泣き所だ。こちらら最近中戦車導入したばかりだからな。重戦車、または追加の中戦車を使える人材がおらん。

西住みほと戦うとなれば、まともに戦うわけにはいかなくなる。

私も最後の一切れを口に入れてナイフとフォークを置くと、口元を拭つて鞭を手に席を立つた。

「総帥、如何なさいました？」

「少し外の風を、な」

テントの幕を払い、空を眺める。星々の細やかな輝きが天球に散らばり、満月に近い月が周りの星々を包み込む。

少し漫然とその光に目をとらわれていたが、まもなく風に乗つて音が流れ始めるのを感じた。音源は少し離れた場所、アンツイオの部下たちが戦車と共にいる辺りだ。

♪ドウーチエ！ ドウーチエ！ 我らの長

ドウーチエ！ ドウーチエ！ 偉大なる者

貴女が望めば この身を捧げん

戦車の上におはす おおドウーチエ！

♪必ず幸福をもたらす 我らがこの地に

勉学と自由を以つて 手の鞭の導き

芯にあるはローマ魂 永遠の帝国

我らが平穩である為 彼女を支えん

♪ドゥーチエ！ ドゥーチエ！ 崇高なる者

ドゥーチエ！ ドゥーチエ！心の炎

アンツイオの者らよ 高らかに歌おう

空が奏でることく おおドゥーチエ！

♪ドゥーチエ！ドゥーチエ！未来を護らん

ドゥーチエ！ ドゥーチエ！ 皆のドゥーチエ！

明日を行く若獅子 今ぞ猛る時

アンツイオよ永遠に おおドゥーチエ！

♪日本人よかく呼べよ おおドゥーチエ！

私の歌だ。何種もの声が重なり合ってハーモニーを奏でている。

「ドゥーチエ賛歌、ですか。何度聞いても陽気な良い歌ですね」

「ははっ、陽気っちゃ陽気だが、良い歌かは別だと思うね」

何が偉大なる者か、何が崇高なる者か。私は今仲間の命を守ることではなく、学園の名誉を如何に守るかを第一に考えているではないか。

だがこれを覆す訳にはいかない。私が愛し、十役会議の仲間が愛し、アンツイオ黒服党の者が愛し、守っていかんとするこの学園が永遠たる為には、撤退せず進撃を続ける

他ないのだ。そうしなければ、我々はプラウダに呑まれる。断固独立を維持する意思は見せねばならない。

進撃するにはこちらの団結心を活用し、戦い尽くすための策が必要になる。そうなる
と、あれしかない。

「カルパツチョ、一つ策がある。しかし余り使いたくはないが、使わざるを得ん」

「総帥、それは……」

その1時間前。大洗女子学園陣地。

「河嶋隊長、西住副隊長。アンツイオからの使者が来ています」

東富士から尻が痛くなるようなオンボロの列車で到着し、車輛の状態を確認していた河嶋さんと私の所に澤さんがやってきた。

「アンツイオから？降伏か？」

何だろうか。降伏ではないのは間違いない。西住の教えを受けた人なら、まず選ばない道だ。

「まあいい、通せ。席と茶を用意してくれ。私達もすぐ行く」

「分かりました。もう1人お呼びして欲しい方がいるそうなのでその方も呼びます。」

澤さんはそのまま走り去った。

「そのもう一人って……誰だ？」

「誰でしょう」

私にも分からない。

暫く歩いた先で、本部のテントの幕が上がる。

「済まない、遅くなった。私が隊長の河嶋、こちらが副隊長の西住だ」

河嶋さんが詫びを言つて席に着く。私も頭を下げそれに続く。澤さんが2人に追加で茶を出す。

「澤、もう一人は？」

「もうすぐかと……」

「私はアンツイオ高校戦車部副隊長の落合陽菜美と言います。よろしくお願いします。」
落合さんが一礼すると、外から走ってくる音が近づく。そして勢いよくカエサルさんが入って来た。

落ち着きが欲しいね。一応ここは司令本部みたいなものなんだから。

「ひなちゃん！」

「たかちゃん！無事で良かった！」

2人は抱きついた。その一瞬の有り難みを互いの身に焼き付けようとしていた。2人の関係はそれを見れば誰でも分かった。

さつきは落ち着けなんて考えて悪かった。どちらも戦車道やりながらの交友か。素晴らしいね。

「あの、女同士の友情も良いんだが本題に入ってくれないか？あまり待たされるのは好きじゃないんだ」

それがあまりに長いので河嶋さんがしびれを切らした。急にしおらしくなってカエサルさんがテントから出る。久しぶりらしいし、別に良いんじゃないかね。口出さないけど。

「すみません。こちらが我々の総帥からの書状です」

落合さんが2人の前に紙を差し出した。河嶋さんが受け取り、三つ折りのそれを開く。私はそれを横から覗く。一言一句、僅かな欺瞞も暴いてやろう、との意思が河嶋さんの目から溢れ出てる。

「……到底受け入れられん。帰れ」

欺瞞はないようだが、畳むこともなく河嶋さんは落合さんの前にその書状を突き返す。

待て待て。仮にも講和の使者としてきている人間に対して、そう無礼を働く訳にはいかないだろう。

戦う前だ。文面を見るに、向こうが敵と見ている人間は限られている。だが戦いと

なつてしまつては、残りの者も敵とみなされてしまう。徒らに命を捨てる道を選ぶ必要はない。

そしてその道には私の決断が必要であるが、それは結構あつさりと自分の中で固まつた。以前なら絶対選ばない道だつたんだけどな。

「ま、待つてくださいい！」

「なんだ西住？まさか降伏する気なのか？秋山も言つていただろう。戦つて勝つしかない、と」

「いえ、まず他の人と相談してから決めた方が……」

「相談するまでもない。我々には勝たなければならぬ理由がある」

「これは皆さんの生死に関わる問題です。我々だけで決めてはいけません」

「しかしだな……」

無言で河嶋さんの目を見つめる。

「……分かつた。そこまで言うなら相談しよう。濟まない、返事は今日中には返すが先になる。書状はこちらで預かり、決まり次第こちらから使者を送るから帰つてくれ」

「分かりました。失礼致します」

落合さんは席を立ち、手を重ねて一礼すると平然と去つた。

「……といつても、これを受け入れたら西住、お前の命は……場合によつては皆殺しかも

しれんぞ」

河嶋さんが書状を二本指で挟んで振る。だが私は知っている。あの人は真面目だ。

「……安齋さんはそんな人じゃありません。嘘をつくような人では。皆殺しだけは避けられるでしょう」

「会ったことあるのか？」

「今年の春の西住流の合宿に参加していました。たった数週間の間でしたが、それでも彼女は多くの面識を持ち、そしてその相手のほとんどから好印象を得ていました。かく言う自分もその一人です」

全く照れ臭い話だ。だが人を惹きつけ仲間を集め、その仲間と協力する点において彼女ほどの力を持つ人間は見たことがない。

「……まあいい。それは後だ。確かに会長には目を通してもらわなければならん。澤、この後車長全員集めてくれ」

「分かりました」

10分後、そのテントにはすべての車長と生徒会の者が一堂に会していた。

「各車輛の状態は？」

「全車良好です。明日の試合は問題ないかと思えます」

ナカジマさんが他の自動車部員からの書類を確認する。

「それは何より。他に誰か報告はあるか？」

「私から良い？」

小山さんが身を乗り出しながら手を挙げた。

「大会本部を通じて食事の手配が済みました。全員に完全に分けて2日分はあります」

「……長期戦にはならないだろうな。相手がアンツイオだし、良くなつてはいるらしいが予算に余裕はあるまい」

「なら100%提供します」

「いや、いざという時もある。80%くらいに抑えておいた方がいいんじゃないか」

エルヴィンさんが決定直前に割つて入った。

「腹が減つては戦はできぬ、と言うじゃないですか」

「それにみんなそんなに食べないだろう……こんな環境じゃな」

「無くなるように与えるべきじゃないよ。ま、残しても食べられるかは分からないけどね」

「……だな。柚子ちゃん、8割で頼む。」

「分かった。桃ちゃんがそう言うなら」

「桃ちゃん言うな。取り敢えず話はこんなものか。じゃあ本題に入ろう。今回集まつて

もらったのはこのような書状がアンツイオから渡されたからだ」

前略 大洗女子学園

我々アンツイオ高校はこの度の戦車道大会にて不運にも貴校と対戦することとなりました。我々も不要な犠牲は求めません。

我々は貴校の副隊長西住みほの身柄をこちらに引き渡し、我が校に降伏するならば車輛、所持品含めて全員即時に解放することを約束致します。

仮に我らと戦って価値を得たとしても、勝ち上がった貴校と次に当たるであろうプラウダ高校には圧倒的な物量差があります。降伏することを勧告致します。

敬具

「……降伏しろと」

エルヴィンさんがまじまじと書状を見る。他の車長の人たちもそれに続く。

「まあそういうことだ。私はするべきではないと思うが」

話を切り出すのはこの時において他になし。私が真に過去と決別出来るチャンスが。

「……私はするべきだと思います」

大きく息を吸ってから、一息に言い切った。

「ほう……それはどうしてさ？」

「安齋さんは嘘をつく人じゃありません。あの人は今年の西住流の合宿に参加していたのですが、あの人と合同チームを組んだ人達は皆こう言っていました。嘘をつかず信頼でき、仲間思いの優しい人だと。」

そう言ったかつての仲間を、私は信じたいんです」

「しかしそうだとしてもお前の身は危いぞ。文面は身柄の引き渡しだけだが、西住流を信じ、黒森峰と結んだ安齋のことだ。西住流を破門されたお前を殺すことで、黒森峰からの信頼を得ようとするかもしれない」

「それでもいいです。皆が無事解放されれば……」

「そーいえば、アンチヨビってアンツイオで味方と敵の差別化政策取ってたよね。確かに左派の下野市民同盟とか抑圧してたと思うけど」

会長さんは干し芋を一枚つまみながら口を挟む。てか、あのペースで食べててまだ残りがあるのか。何袋あるんだい。

「はい、会長。我々は確実に差別される側かと。安齋が仲間思いであることが裏目にとっても考えられます。アンツイオは今年黒森峰から50億円もの資金援助を受けています。相当な恩義を感じているでしょう。それに我々は勝たなければ……」

「でも……これが最後のチャンスなんです！プラウダや黒森峰に降伏したら確実に殺さ

れます！でも今ならまだ大丈夫です。なんなら私が直接安齋さんと交渉しに行ってもいいです。皆さんを確実に解放させます。勝つよりも大事なことがあります！皆さんも思っているはずですよ。”生きて帰りたい”、つて！そしてみんなは学園生活を平和に全うして欲しいんです！

私はこの学校に来て、学校も戦車道も大好きになりました。今ならその気持ちが残っています！その気持ちのまま自分の戦車道を終えたいんです！”

こんな全力で主張したのは、ここじや初めてか。人生で2度も首を切られる覚悟で話す人間は私が最後であつて欲しいが。

その場の者は黙り込む。

”生きて帰りたい。”

その思いを持っていない者は誰一人いないに違いない。

またあんこう鍋を作つて食べたい。

生徒会の職務を全うしたい。

みんなともつと長く過ごしたい。

歴史資料をもつと見たい。

風紀委員の仲間とまた会いたい。

みんなとゲームしたい。

雨の中車を乗り回したい。

どん底で一杯飲みたい。

そして何より、また戦車道がしたい。

しかしそれらは私が、下手したら死んでまでも生き残る価値のあるものなのか、そんなことわかるはずがないのだろう。

私にも分からない。皆が助かるを免罪符に死のうとしている我儘に過ぎないのだから。

黙り込む中で一人震えていた、河嶋さんはその場で震えていた。

「学園生活を全う？……西住、お前は何をいつているんだ！優勝出来なかったら、我が校は……我が校は廃校になるんだぞ！」

目線を真つ直ぐ私の方に定め、机を叩き声を張り上げた。

「えっ!!は、廃校!」

おいちよつと待て。廃校は想定してたけれど、優勝出来なかったらとは聞いてないぞ！正直軟式でベスト4行けば良いだろうと踏んでいたし、その為の練習を組んできた。

黒森峰、プラウダ、サンダース、聖グロのいずれか一つを倒せるのと、全て倒さなければならぬのでは訳が違う。おまけにこれは硬式戦だ。試合ごとに戦力は減る。

「ごめん……騙すつもりはなかったの……」

小山さんは肩をすくめ、目線をそらす。

「会長さん……」

目線はゆつくりと会長さんに向かう。僅かな夢を賭けて。が、返されたのはただ黒い目だった。

「河嶋の言う通りだ。この戦車道大会で負けたら、我が校は廃校になる」

第4章 ② 学園の道

2012年1月、東京 虎ノ門 文部科学省 学園艦教育局

「廃校！」

新たな生徒会を立ち上げたばかりの角谷らに告げられたのはその重い事実だった。

「ええ、学園艦そのものを将来的に全廃する一環です。学園艦は維持費も運営費もかかりますし、それに加え昨年あった東日本大震災に伴う福島第一原発の事故で、原子力は危険であるという概念が国民にあります。福島第一よりも大きい原子力エンジンを搭載する学園艦が廃止されるのは当然の流れです。

さらに最近は大洗港が津波による土砂で埋まり、港湾に停泊もできないそうではないですか。母港に停泊も出来ないのにその名を借り続けるのは如何なものかと」

「でも、学園艦が無くなっても学園都市そのものまで無くなるのは……」

平然と書類の文言を連ねる担当官に河嶋が反論する。

「都市をまとめて移す費用を考えれば、都市そのものを廃止にして、学生を周辺都市に振り分ける方が早いのです。昔は戦車道が盛んだったそうですが、最近実績があるならともかくここ20年まともに実績がなく、生徒数も減少している学園を残す必要はありません」

せん。むしろ今まで残っていたのが奇跡です」

「実績ね……」

担当官のその一言が心に引つかかる。

「……じゃあ、戦車道やろっか！」

角谷は腕を組みながら左右に座る2人に語りかける。

「ええっ！」

「せ、戦車道ですか！」

左右の2人は驚きを隠さない。それもそのはず。戦車道は莫大な予算がかかるうえ、ここ数十年ベスト4クラスは固定されているからだ。

仮に全国大会に行ったとしても1勝できれば御の字だと2人は知っていた。しかしそれだけでは済まず、続けて発された角谷の言葉に耳を何度も疑った。

「まさか優勝校を廃校にしたりはしないよねー」

膝に手を乗せ担当官に詰め寄る角谷が口にした言葉は一度は絶望させるには十分だった。この人は、戦車道で優勝する気だ。なんてものに学園の運命を託してしまったのだ、と。そしてこの軽い感じの一言から大洗の戦車道は始まった。

「……学園が無くなったら……私達は何の為にここまでやってきたんだ？学園の仲間を

失ってまで私達は何も変えられないのか！バレー部の奴らに私達は何て言えばいいんだ！」

河嶋さんが立ち上がり両手の拳で机を叩く。そして叩いた後も拳は強く机に押し付けられている。

……あまり言いたくはないが、リターンを待ち過ぎると投資の意味がなくなる。仮に大洗が存続しても、その先の運営には学園都市の荒波という困難が待ち受けているだろう。

だがそれを理解してもらおうのは厳しい。その先は彼女らの関知するところではないのだから。ここは申し訳ないが、彼女らを利用し、夢を語るか。

「……彼女らもこれ以上犠牲を出すことを求めてないと思います。学園がなくなるとしても、無益な争いはやめるべきです。学園都市の希望が血で解決される時代には終わりが来ます！ここで手を引くべきです！」

「そんな時代がいつ来る！少なくとも今ではない。お前には分からないだろうが、我々はこの大洗女子学園を、この学園都市を愛してる！心から！バレー部を借りて欺瞞を語るな！」

それに生徒会はこの学園都市を守る限りの手段を使って守る義務がある！その道が唯一存在するのはこの戦車道大会だけだ！」

「その道を唯一にしたのはあなたの方でしょう！サンダースに対し、こちらが優勢な状況にて棄権させるだけでも十分過ぎる結果です！ここから先プラウダ、黒森峰と戦って勝利を期待するより、棄権する方がよっぽどまともな考えです」

「そもそもこちらが条件を提示してしまっているんだ。それをこつちから覆して、要求が認められる訳がない。

やるしかないんだ！この何年も受け継がれた伝統ある学園を、そう簡単に無に帰してはいけけないんだ！願いは無条件で叶うものじゃない！」

「学生を死なせるのが学園都市を司る生徒会の取るべき道なのですか！寧ろ学生の能力を将来に活かすのが本来の道ではないのですか！」

「それはそうだ。だからその道をこの先使う何万、何十万という生徒の為に大洗女子学園を残すのが一番の役目だ！」

「少子化で生徒数の減少が明らかなか中で、そんな顔の見えない存在に拘り続けた結果が、学園都市間の現状ではないですか！何が伝統です！だいたい戦後から、良くて1000年の歴史があるかないかの学園都市が、易々と伝統を名乗るものじゃありません！」

「馬鹿が！これまで生きてきた人が生み出してきたものが伝統だ！そしてその最たるものは学園、そして学園都市だ！貴様は政治というものを、選挙で選ばれた人間による政治を分かっているじゃない！」

「ええそうですね。政治なんて分かりたくもありません。仮にその嫌な話をするなら、今回の行動は同じく選挙で選ばれている議会の承認を受けているんですか？」

何れにせよ、生徒たちが将来学園の外でいるんな人、いろんな集団に出会うチャンス、将来に活かせる有用な頭脳を費やしてまで、守るべきものではないでしょう！」

「いいや、守るべきだ。それだけではなく生徒たちが生きる為にも、心の故郷として、帰属意識の対象とする場として、学園は残さねばならん」

「そんな対象は国にでも預けときゃいいんです！」

「その国が我が校の廃校を決定してるじゃないか！」

「私自身前の学園を離れて、この新世界を見つけました。学園が仮になくなったとしても、新たな学園に行くのは悪ではないはずです！大洗に拘る必要はありません」

「西住ちゃん」

2人の論争を聞いていた会長さんが身を背もたれから起こし、真っ直ぐ目を見つめてくる。纏う雰囲気は以前感じたことがあるものだった。

「生き残った者はどうなる？」

「えっ？」

「西住ちゃんが今までにどんな経験をしてきたかは知ってる。それから逃げたくなるの

も分からなくはない。でもこの降伏案を受け入れて、西住ちゃんが殺されたら、他の人はどうなると思う?」

「……」

「それは西住ちゃんが一番よく分かっていると思う。その後悔に一生苛まれることになるのさ、下手したら死ぬよりも辛いくらい。」

” 本当に西住ちゃんを死なせてまで生きていいのか” ってね」

頭の中で何人もの顔が浮かんで消えていく。そして会長さんの出してきた問いは、私の胸の中でいつでも渦巻いていたもの。

「西住ちゃんは黒森峰の時のそれに今も苦しんでいると思う。私達は最初バレー部がやられた時は不謹慎だけど

” 自分じゃなくてよかった”

と思えた。それは自分自身もそうなりえたからさ。しかし今回は違う。私はアンツイオ、もしくは黒森峰が西住ちゃんを結果的に殺すと思っている。恐らく九死一生位、もつと悪いレートかもしれないわけさ。しかもそれを他人が変わることはできない。

それを送り出してしまったら皆が平穏を取り戻したあと、平穏であればあるほど苦しめられるのさ。自分の決断と責任に、死ぬまで。西住ちゃんが死ねばそれでおしまい、

なんて単純な人間はいないよ。

これ以上一生苦しめられる人を増やしたくはないんだ。頼む」

この人は分かっている。どのような御託を並べ立てようと私の意見が我儘に、逃避に過ぎないことに。確かに助かって、皆は生きている間苦しみは取れるまい。

しかし生きる事はそんな絶望ばかりではないはずだ。そしてこの中で一番絶望を知り、人生の楽しみ方を最も知らないのは、紛れもなく自分だ。

「……これが本当に最後ですよ……ここで勝ったとして次のプラウダと黒森峰はやすやすと勝てる相手ではありません！勝ったとしても必ず犠牲が出ます！戦いたくないならば言ってください！皆さん！」

「……戦うべきだ」

エルヴィンさんが組んでいた腕を解く。

「……なぜ……」

「今回サンダース側でも我々の手による死傷者が出ている。我々がこのまま降伏したら彼らもまた何の為に死に、傷ついたんだ？私達は何の為に殺したんだ？何の為にあの森の中から砲弾を放ったんだ？」

戦いたくないのは事実だが、それが苦しみを生むならば悔いなく戦うべきだろう」

「……」

「西住さん、貴女を死なせたくはない。この蛮行についてこの中で一番知っているのは貴女だ。貴女には生きてこれを辞めさせるといふ仕事がある。それを任せたい」

周りの者の一部はエルヴィンさんに同調するそぶりを見せる。

「あたしらが知っているのは噂だ。経験しているのは確かに副隊長だけだ。その経験を伝える、それを名分にするなら、副隊長以外の適任者はいないね」

「西住副隊長だけが死ぬなんて……嫌だ」

「でも……」

反論できなかった。皆の為に、という事が皆を苦しめることになる。

それは良いとしても、自分には生きねばならない理由がある。生きてやらねばならない、他の人には出来ないことがある。私の理論は崩れた。そしてそのことを脳内で反芻し続けていた。

「戦う、という事にしたいが。異論は？」

「……」

誰も話さない。生き残つても生きるのが苦、誰もそうなりたくはなかっただろうな。ならば……とは考えて欲しくないのが本音だが、人の思考には干渉できない。そして私も、無理だ。

「……ではこの降伏案を破棄する」

「それとさ、」

会長さんは再び背もたれに寄りかかり、干し芋を口に含む。まだあるか。

「隊長西住ちゃんにしない？」

「えっ？私か？」

いきなり言われた一言に動揺する。ちよい待て、約束が違う。いやそういうことは良くて、どういうことだ？

「だつてさ、この大会はじまつてから西住ちゃんがほぼ取り仕切っているじゃん。硬式について一番詳しいのも西住ちゃんだし、実態と名前合わせない？」

まあ確かにそうかもしれないが……

「会長、私は……」

「かーしまは副隊長として西住ちゃんしっかり支えてもらうよ」

その場から大きな拍手が聞こえる。

「えっ、えっ？えっ！ちよつと……」

「別に西住ちゃんは今まで通りのことやってくれればいいから！他はみんながやるから」

そうではないのだ。拍手が続く中で、言葉をまとめた。

「……でも今まで河嶋先輩が隊長として統率してくださいました。お陰で私も策のみを

安心して講じることができてきました。それを取って代わる資格は私にはありません。しかもそもそも戦車道を始めたのは生徒会の方々です。その方々が主導すべきです」

「……だよー。分かった、すまない。これまで通り行こう」

向こうは珍しく簡単に引き下がった。そうだ。これでいい。

「これ以外に話し合うことはないな。作戦は明日にする。松本、鈴木を呼んでくれ」

河嶋さんが人差し指を右に振る。

「えっ？カエサルですか？」

「そうだ。あいつが使者として一番妥当だ。アンツイオの副隊長と仲が良いようだからな」

「了解しました」

車長たちは全員そのテントから各々の行くべき場へと立ち去った。私と河嶋さんを除いて。

「……すまん、西住」

「いいえ、いいんです、河嶋先輩。あれは嫌なことから死んで逃れたい、という私の我儘に過ぎない事。それを会長さんに気づかれた時点で、私に反論の術はありません」

「あれは……真意か？」

「なんのことですか？」

「私が隊長として統率できて、それを取って変わる資格は自分にはないって……」

いつもの様子とは裏腹に椅子に座ったまま身を前に倒す。

「本当です。嘘なんて……」

「分かっているんだ、自分には隊長なんて向いてないと。聖グロリアーナの時も焦って闇雲な指示しか出せない有様だし、マジノの時なんか完敗だ。この大会もほぼお前に頼りきっている。隊長として面目ない。しかもお前には勇気がある」

「えっ?」

「みんなが助かるからって自らの身を投げ出すなんてことできる奴そうそういないぞ。私にはそんなことできない。お前も私と姉さんと比べたらとても頼りになるとは言えんだろう。そういうことだ」

河嶋さんは身を前にしたまま首を振る。これが彼女の本来の姿なのかもしれない。

「……それは違います!河嶋先輩は本当に隊長に相応しい方です!」

「……どうしてここまで聞いてそんなことが言える」

「人の上に立つ人に必要なのは支える人だけ、麻子さんから副隊長になって自信がなかった時そう言われたんです。もし必要ならば、私が支える人になります。みんなが先輩を批判するならその批判は私が受けます。どうか、私たちを優勝へ導いてください」

「……それならお前が隊長で我々は批判とかを受ければいいんじゃないか?いや、生徒

会として寧ろそつちに回るべきじゃないのか？」

腕を組んでこちらを向く河嶋さんに、うつむいたまま首を左右に振る。そうではない。私には出来ないのだ。私の本質として不可能なのだ。

「私が持つて無くてリーダーに必要なもの、それは疚しくないこと」

「……」

「私はどうやつてもそうなのではないのです」

暫く私の顔を眺めた河嶋さんは、少し仕方なさそうに口を開いた。

「……分かった。私がやるしかないようだな。どこまでできるかわからないがやることはやろう。西住、サポート頼んだぞ」

河嶋さんは身を起こし立ち上がる。少し吹っ切れたみたいだな。良い顔だ。

「……はい」

「隊長、カエサルを連れてきました」

私の絞り出した返事と同時に、エルヴィンさんがカエサルさんを連れてテントに入ってきた。

「私に何か？」

「これからアンツイオへの手紙を書くから、それを渡しに行ってもらいたい。アンツイオの副隊長と友人であるお前が妥当だ」

「1人ですか？」

「敵の使者も1人だった。こちらが多く送る必要はない」

「分かりました。手紙の用意ができたら呼んでください」

カエサルさんとエルヴィンさんは身を倒すと、そのまま外に行った。

「……紙と封筒つてあるか？」

「紙とシャーペンなら有りますが？」

「ボールペンか筆ペンは？」

「……ちよつと無いですね」

「じゃあ仕方ない。それでいいか」

河嶋さんは丁寧な字で私の渡した紙に返事を書いた。一文字毎に想いを込めるかのようにゆつくりと、丁寧に文字を刻む。

「これでよろしく」

「分かりました。行ってきます」

カエサルさんは外へ走り去り、エルヴィンさんは帽子を取り一礼すると幕を払っていった。彼女には不憫な思いをさせるが、こうなってしまった以上仕方ない。

「ところで西住、次の試合の作戦は考えているか？」

「最初の配置が山がちな会場でこちらが標高が下という不利な状況なので、取り敢えず

上を目指します。地理的に沿岸部では上から狙われやすいため、そちらに行くべきではありません」

「でも敵は前回のマジノ戦でセモベンテ4輜を失っていると聞いている。戦力で言えばこちらが圧倒的に有利じゃないか？」

「アンツイオの特徴はカリスマのあるアンチヨビさんに率いられている士気とノリと勢いです。それに乗せられたらこちらにも被害が出ます。でもそのくらいの戦力差があるなら敵の取る策は一つだけでしょう」

「なんだ？」

「それは……」

第4章 ③ 昔話

「対戦車戦だ」

「！た、対戦車戦ですか？」

カルパッチョは驚きを隠さない。だろうな。私が取る手段としては前例から外れている。

「戦力で相手が勝っているならその戦力をいかに少ない戦力で削ぐか、それが重要だ。そうなると成功すれば戦車1輛、失敗しても味方1人ですむこの策が妥当だ。ただでさえ敵のどの車輛の車体を抜けないカルロペローチエを6輛も出さなくてはいけないんだ。他に手はない。まともに戦っても負ける」

「でも……その策は危険が付き物です。みんながやつてくれるか……この場において叛逆されるのは危険でしょうし……」

「私が皆に頭を下げる。そこまで士気も落ちてないようだしな。我々の目的は勝てばそれでいいが、それよりいかに西住みほを地獄におくるか、そこに主眼を置きたい」

「その為にみんな戦うでしょうか？直接的な恨みを持つ人間はいないでしょうし……」

「西住みほが天に召されれば大洗の命令系統は混乱する。そうさせるのが我々が生き残

る唯一の手だ。そう説明する」

「なるほど……」

「それに必要なものは黒森峰に頼んだ。あと例のものは？」

「あれですか？あれなら今夜中にこつちに着くようですよ」

「予定より遅れたが、それさえあれば勝ち目はある。西住みほの乗るのはI V号だ。それさえ撃破できれば……」

外から金属がぶつかり合う音がする。

「姐さん、ペパロニです」

「入れ」

「姐さん達、少しナポリタン残りあるんすけどいりますか？案外みんな食わなくて。特にアンチョビ姐さんとかカルパッチョだけっすよね」

2つの鍋が机の上に乗る。生憎これ以上食っては胃に来そうだ。ストレスかね。

「いや……いいい」

「私も……」

2人が首を振るとペパロニは鍋をまた持って裏へと引いた。

「今日は早く休もう。明日全力を尽くせずに死ぬ訳にはいかない」

「分かりました」

「あ、そういえばさつき大洗からの使者が戦車置き場に来ていましたよ」

何最後に滅茶苦茶重要なことを言っただお前え！真っ先に言うべきだろうが！

素早く席から立ち上がり、机に鞭を叩けつける。

「本当か！何故それをすぐ言わないんだ！すぐに呼んでこい！」

「すみません。了解つす」

ペパロニは鍋を置いたまま駆け出した。

「はあ……」

「まあ、ペパロニらしいじゃないですか」

「いやまあ、そうなんだけどさ……事務連絡くらいはちゃんとして欲しいんだがなあ

……」

すぐにそのテントにカエサルなる使者がやって来た。机の上には勝手にペパロニが用意したナポリタンが置かれている。お前もうそれ冷めつつあるじゃないか。

「失礼します。大洗女子学園の鈴木貴子と言います」

「たかちゃん！ようこそ！」

「ひなちゃん！」

「私はアンツイオ高校戦車道部の隊長の安斎だ。アンチョビのほうがいい」

「ではアンチヨビさん、こちらが大洗からの手紙です」

物分かりがよくて助かる。そしてこちらもそうであることを願ひ、三つ折りにされた紙を受け取り、ゆつくりと開いた。

拜啓 アンツイオ高校戦車道部

大洗女子学園は貴校からの提案を感謝しますが、その内容は我が校には受け入れられないものでございます。

西住みほを貴校及び黒森峰女学院に殺させてまで、残りの者が生き残ることはいたしません。その生き残る可能性についても、貴校を信賴することはできません。

我々は目的の達成の為に不本意ながら砲火を交えるしか道はございません。

大洗女子学園戦車道隊長 河嶋桃

敬具

紙の左右を握りつづす。怒りのあまり言葉も出ない。その場にいた私を含む3人は、視線をその紙に向け動こうとしない。予想外だ。まだ返事をはぐらかすとか、さらなる交渉を要求する、なら話として分かる。だが何故そこまで西住みほを守ろうとするのか。自分の命を捨てることになるのに。

紙を完全に握りつづし、無造作に投げ捨てた。命を捨てる愚か者たちに、情けはいらぬ。

「随分酷い感謝の言葉だな。ならばこちらも砲火を返すことにする！まずこの者を捕らえなさい！見せしめとする！」

「えっ？何？」

「お待ちください！」

激昂する私をカルパッチョが抑える。何故だ。敵となった以上、それを減らし、戦意を揺らがせるのは損ではないはず。

「止めるな、カルパッチョ！」

「落ち着いてください、ドゥーチエ！まだ試合は開始していないのでこの者は捕虜にはできません。下手なことをすると戦車道連盟規約違反となるかもしれない。そうならどうにも……ここは一旦我々の反応を伝えさせるのがよろしいかと」

「だったらこの者を見すみすかえせというのか？！少なくともただで返せるほどお人好しじゃないぞ！」

「自分達が死んでも西住みほを守ろうとする者達です。脅しは通じません。西住みほのみを対象にするなら他を気にしない精神を見せるべきです」

なるほど、激昂して気でも違っていたのか。こういう時にいるカルパッチョは本当にありがたい。

「……そうか、解放しよう。だけでもこのことは伝えておきなさい！この判断は間違い

なく後悔を生むと！」

「は、はいっ！」

カエサルなる女は少し腰が抜けかかっていた。まあこれだけやれば十分か。……彼女、カルパッチョの知り合いか。最後の別れくらいはさせてやるか。

「カルパッチョ、送って行きなさい。怒ったらお腹空いた。これ頂くよ、ペパロニ」

「どうぞ！」

少し乱暴に机の上の Pasta を手に取る。アンツイオにいる限り許される行為ではないが、この時くらいは許してもらおう。これから火起こしなぞ勘弁つかまつる。

「たかちゃん、行こう」

カルパッチョが使者の手を優しく握り、使者はその手を支えに立ち上がった。

「ありがとう」

「顔も見たくない！とつとつと行きなさい！」

2 度ほど右手を振るとフォークとナポリタンの皿を持って裏に下がった。怒りはここでは向こうに本気と見せる為に演じよう。しかしここで我々と戦うことを選ぶとは……向こうが棄権しているとはいえ、実質的に既にサンダースに勝っているんだ。まさかこれからプラウダに降伏する気じゃあるまいし、黒森峰なら尚更だ。

ということとは……裏があるな。

「そうか、対戦車戦か……」

「故宮の得意技です」

河嶋さんも私もそれぞれ腕を組んでいる。

「いきなり爆弾を取りつけられてドカン、ということか。対策を取りようがないな」
「場所さえ分かれば怖くはありませんが、足下を車長が注意するくらいしか……黒森峰の時も故宮戦は被害がそれなりに出ましたし」

「取り敢えず明日全車長にそのことを伝えよう。対策はその後だ……西住」

「な、なんですか？」

いつも少し低めの鋭い声を出す河嶋さんだが、さらに低い声で話しかける。

「すまないが、少し昔話を聴いてくれるか？」

河嶋さんが身を前に軽く倒し、両肘と両膝をつけ、手を組む。

「ええ、私が相手でよろしければ」

「むしろお前じやなきやいけないな。私がお前の来る前、自衛隊の方から指揮を習ったことは聞いているな」

「ええ、会長さんから伺いました」

「なぜ私が、というのは知らないか」

「ええ。しかし戦車道が生徒会の主導で行われている以上、そこから隊長が輩出されるのは自然かと」

「まあそれはそうなんだがな、私は志願して隊長になったんだ」

「志願して……」

隊長に志願……それは並大抵なことではないだろう。先程会長さんが簡単に引き下がったのはそのせいもあるやもしれん。

「私は高校からの編入生なんだ。中学はお前なら知っているだろう。タンジマート学園だ」

「タンジマートですか。硬式参加校のひとつですね」

「私は高校のある先輩と仲が良かったんだ。なんで知り合っただったかな。ああそうだ、寮で部屋が近かったんだ。確か中学に上がって一人暮らしになって、不安で仕方なかった頃、助けてくださったんだったかな。」

アイス食べに行ったり、買い物に行ったりな。戦車道は結局やらなかったが、その人の前では素の自分が出せた……懐かしいな、本当に」

河嶋さんが目元を拭う。いつもの先輩気質の姿は見る影もない。本当に大切な方だったことが見て取れる。

「で、その方は……」

「死んだよ。3年前のプラウダ戦で」

「え!!」

「側面から砲弾を喰らい即死だったそうさ。車輛も炎上したらしく、帰ってきたのは右腕だけさ。顔もなければ、肘から上さえ焦げてしまっていた。だがな、その手の爪に大会前に着けた付け爪が付いていたんだ。」

それだけなら良かったかもしれない。でもそれは私がプレゼントでお揃いであげたものだったんだ。葬儀に行った私の目に映ったそれはもう死ぬまで忘れる事ができない。私の未来を、その人が目の前で見せている気がした。その後の話が全く耳に入らないし、何が起こったか記憶が曖昧だ。

だが一つ確かなのは、その日の夜私が駅で列車を捕まえて、有り金を叩いて遠くに逃げたことだ。先輩からそうするよう言われた気がした。串本の学園都市から出来るだけ遠く、遠く。それしか考えられなかった。

それから親の理解を得て大洗の試験に合格して、私は戦車道と縁を切った、はずだった」

河嶋さんは頭を抱える。

「……河嶋先輩……」

「翌年、翌々年の大会で、戦車道に携わっていた私の同級生は殆ど死んだ。戦車道に参加

してなかった奴でも、中には勇敢にも青師団のやつに義勇兵の名目で行って死んだ奴もいる。私は逃げて良かったと自分を納得させようとした。そしてそれを忘れようと高1から生徒会活動に全力で参加した」

「……だったら戦車道の導入に賛成したのは、」

「それは軟式だと仰ったのと、角谷会長を信じたからだ。あの人は素晴らしい方だ。人を纏める天才だ。それと私はここに来て変わったんだ。自信を持てるようになったんだ。そうしてくれた学校に恩を返すのは当然じゃないか！ 会長と柚ちゃんがいたから、ここまでトラウマに縛られる事なくこれなんだ！」

河嶋さんの興奮の余り、机が反動で浮くほど強く叩かれる。何も言葉を返せずいた。

「……すまない。この話をしたのはお前が初めてだったものだから。お前なら理解してくれると思ってな。実はお前をうちに呼ぶよう進言したのは私なんだ。無理にでも加えよう、というところまで含めてな。だから恨むなら私を恨むといい。

今回の降伏に反対したのも、学校の廃校阻止もできないのに自分の判断で来てもらって、自分の判断で自分の代わり死ね、という完全に自分の所為で亡くなった人の死体を見たくなかったんだ……ははっ、こんな時に自分の事を考えているなんて隊長失格だな、全くだ」

背もたれに寄りかかり、河嶋さんは自嘲する。彼女が失格なら、私は何か。無期限謹
慎あたりか。

「いいえ、私はここに呼んでくださったおかげで、真の仲間を見つけたんです。こちらが
感謝したいくらいです。ありがとうございます」

「それなら一つ言っておこう。先んじて死んで喜ぶ奴はここにはいない、とな。明日試
合だ。早く休まないとな。すまないが作戦は頼んだ」

申し訳なさそうに立ち上がった河嶋さんがテントから出るのを目で追うと、地図の数
カ所に印をつけ、宿舎に戻った。宿舎に着いた後も地図と格闘した。殺すにはもった
ない、優しさと強さを兼ね備えた人を倒すための策をたてるため。

申し訳なさはある。だがそれよりも生きねば。

第4章 ④ 総帥の未来

新しい朝が来た。しかしそれは希望あるものではない。早朝からアンツイオ高校の陣で隊長、副隊長ら3人は今後の対応を話し合っていた。

「カルパッチョ、黒森峰に頼んだ物は届いているか？」

鞭を机に軽く打ち付けながら声をかける。

「ええ、箱にぎっしり。よくもこれだけ用意出来るものだと思いますよ。あと学園からの荷物も準備を整えさせているところですよ」

「姐さん、あれなんなんですか？危険物ってあるんすけど？」

「危険物だ、後はお楽しみ」

何かを察知したのか、ペパロニはそれに触れることなく、距離をとっていた。こいつはおつちよこちよいだから、これくらいの方がいい。それよりそろそろ試合の時は近づいている。心苦しいが、伝えておきたいことがある。単に私だけで抱える勇気が無いだけなのだ。

「……皆を集める前に、お前ら2人に話しておきたいことがある」

「何っすか、ドゥーチェ」

「……はい」

カルパッチョは何か察してるようだな。私は一度テントの外に出て、他の皆が戦車の確認をしている音を聞き取り、周りを見渡してから戻ってくる。

「ここから先は本当にこの3人だけの話だ。学園の運営の根幹の話だからな。特にペパロニ、話すなよ」

「話しませんよ、ドゥーチエがそこまで言うことを」

「……ならいいか、時間もないし率直に言おう。これからアンツイオは崩壊する。それを我々は止めることは出来ない」

「アンツイオは崩壊するって……馬鹿なことを言わないで欲しいです、ドゥーチエ！みんなこの学園が好きじゃないですか！」

ペパロニからしたら信じたくないことだろうな。私だつて気づいた時は発狂しそうになったんだから。机に手をつきながら身を乗り出してくる。

「……学園主任の……紅戸さんですか」

「そう。私というストッパーが切れてからは、都市運営の主導権は一気に向こうに傾くだろうな。そしてそれを止めうる人材は、ペパロニとカルパッチョ、お前らだけだった」
「それは……私たちが戦車道の副隊長だから、ですか」

「まあそうだ。確かに私の後継者と名乗るに一番相応しい存在だろうな。が、それだけ

じゃない。人脈が広く人当たりも良いペパロニと、実務を確実に素早くこなす真面目なカルパツチヨ。2人が手を組めば私も超えるドゥーチエになったはずさ」

「ウチらがドゥーチエを超えるドゥーチエつか……想像出来ないっすね」

「ですが……」

「そう。この大会に参加してしまつた以上、最早生き残るのは不可能に近い。ひとえに私の能力不足だ。すまない」

「……黒森峰を通じて、脱出を融通してもらうのは……協定から考えて問題ないはずだ」

一度は考えたことだ。だがよく考えずとも不可能だ。

「無理だな。そしてその無理な理由が、私たちが居なくなつたらアンツイオが崩壊する一つの理由だ」

「そういえば、何でアンツイオが崩壊、なんてことになるんっすか。紅戸さんがドゥーチエがやつてたことも含めて、全部決めるようになるだけなんじゃないっすか？」

「その紅戸の野郎が問題なんだよなあ。が、お前にどう説明したものか……そうだ、トロツコの問題を例に使おう」

近場にあつたナイフの束から4本掴み、机の上に角度が120、60、60、120度に近くなるように並べる。

「トロッコ問題というのは、線路の片方に5人、もう片方に1人縛り付けられているところに暴走トロッコが突っ込んでくる。レバーを引けば1人轢かれるが、引かないと5人轢かれる、つてやつだな。自分で手を下すか、を問う質問だ。」

この問題だとレバーに触らない、という選択肢があるが、政治をするものにレバーに触れないという選択肢はない。そして今回のこのアンツイオという3本のレールには、左から順に7人、2人、5人が縛り付けられている。少なくとも私にはそう見える」

トロッコの線路は上からだと言われ飛行機のように見える。その先頭の方から3つのトロッコの経路を指で示しながら説明を続ける。

「誰がそんなことをするんっすか」

「いいから黙って聞け。去年まではレバーは左に引かれていた。アメリカからの経済不況も合わさって、経済は破滅的だった」

「ま、そのお陰で私は300万リラのジョークが使えるんっすけどね」

「お前も皮肉なんて言えるんだな」

「へへ、照れるっすよ」

あんまり褒めてはないんだがなあ。

「それを何とか真ん中まで持つてきた。その際に紅戸と私は協力したわけだが、その後紅戸はレバーを右にもつと引こうとした。あいつには右のレールに人の姿は見えてな

い。いや、人の姿には見えてないらしい。そして私はなんとかそうさせないようにしてきた」

「ですが、ドゥーチエも私たちもいなくなってしまうと……」

「レバーは振り切れるな。そして5人は死ぬ。学園都市の混乱は免れない。その隙を見逃してくれるプラウダではないだろう」

「……どうなっちゃうんっすか?」

「良くてテロの続発、一番可能性があるのは内戦に勝利しての現政権の存続、悪くて政権転覆して親プラウダ政権の誕生」

2人ともその悲惨な光景を想像して言葉も出ないようだ。たたみかけるようで悪いし、何より私が口にしたくない言葉だが、さらに続けさせてもらう。

「……黒森峰は、もうウチと手を切りたがっているのかもしれない。だから自衛隊の中に黒森峰に近い奴がいても、脱出の手引きをしてくれる可能性はほぼ無い」

「……その心は」

「この大会の実行委員長があいつだった。つまり黒森峰は今回大会が硬式になることを知っていた。なのに我々に一言も知らせがなかった。我々の戦力の殆どが戦車道と黒服隊であることを知っているにも関わらず、だ」

「ですがプラウダに対し、直近で対峙している我が校を見捨ててしまうと、黒森峰は他校

の信用を失ってしまうのでは？」

「……昨年の青師団の件もあるし、何よりアメリカからの経済不況の影響がないはずがない。もう介入したくないのかもな。あの危険物も手切れ金代わりかもしれない」

「……黒森峰が硬式大会にすることを止めなかったのは……」

「恐らくだが、合法的に自分たちの面目を潰したカチューシャを殺す機会を作る為だろう。黒森峰の隊長代行だったかな、を務めてる逸見も優秀な奴だったしな。可能性はあるだろう。」

暗殺を仕掛けても成功確率は高くはないだろうし、仮に成功しても黒森峰に真つ先に疑いがかかる。戦車道はまたとない機会のはずだ。

そして向こうからすれば、アンツイオとの協定は私個人との協定のもりだったのかもしれない。そう考えれば、私が辞めるか死ねば協定の意味が無くなる。5億をドブに捨てるとは、私たちには考えも寄らない手よ」

「黒森峰の名に劣らぬ真つ黒な外交ですね」

「外交なんてやったもん勝ちだからな。そしてバックに付いていた黒森峰がウチから手を引くと……」

「左派がプラウダの支援を受けて蜂起、と」

「そ。だから内戦が一番可能性があるわけさ。そこまで来れば聖グロが介入するかもし

れないけど、期待は出来ない」

答えはない。戦火に吞まれる校舎。砲弾を撃ち込まれるスペイン階段。それに何も出来ない自分。私も2人がいなければ思いっきり地団駄を踏んだだろうし、喚きもしたに違いない。

「……一回な、お前ら2人だけ大洗に降伏させようか、とも考えたんだ。大洗が負ければルール上解放される。だが私には2人なしで大洗に勝つ方法は思いつけない。何より仮に解放されても、私を守れずに勝手に降伏した者呼ばわりされ政治の表舞台には立たない。そうなれば結末は変わらない」

「でしようね、ドゥーチェがその選択をなさらないのですから」

「残念ながら……我々はこのにいるしか無いんだ」

「……ドゥーチェ、何があるうと、私は最期までドゥーチェと共にある所存です」

「も、勿論私もつす！」

俯き気味に、だが気力で首を持ち上げて、顔で分かかってしまうのにこちらに訴えかけてくる。生きたいなら既に私を見捨てていることも可能だったというのに。

「そんなに悲しそうな顔をするな、2人とも。それを打破する道は、全くないわけじゃないんだから。大洗を、プラウダを殲滅する。我らの手で。そうすれば黒森峰とは何とかしてみせよう」

「……ですね」

「もし必要なら、私は2人の盾となっても守ってみせる。お前らは私より遥かに重要な命だ」

「……勿体無いお言葉」

「そんな訳ないっす！必ずやドゥーチエも、私たちも生きながら、アンツイオの階段に、店に、戻って来ましょう！」

「……そうだな！またペパロニの鉄板ナポリタンでも食うか！」

「ええ！」

気持ちが高まる中、腕時計を確認する。

「つと、そろそろ時間が近いな。よし、2人は皆をP40の前に集合させてくれ。私は話が終わったら作戦会議をここでするから、その準備をする」

「はいっ！」

「了解っす！」

ペパロニとカルパッチョはテントから左右に分かれ走り去った。ナイフを元に戻して静寂に少し身を預ける。

「ふう……西住みほ……戦いの時だな。と、まずい、カールが乱れてる」

近くの鏡の前で顔の両脇に垂れ下がっている長いカールの乱れを正す。身嗜みも

ドゥーチエの職務の一つ。人前に出るときは派手な格好をして、ダサイ感じを排除する。この髪型も眼鏡をコンタクトにしたのもその為だ。

「よおし、こんなものか。それにしても西住みほ、か。確かに貴女は害だ。西住流にとつても、黒森峰にとつても、そしてそれらを手を結ぶアンツイオにとつても。が、決して悪ではなかった。

あの時友を助けに行つたこと、勝利の放棄故に西住流にとつて許されぬこと。理解は出来ないが、共感はある。一回合宿であつた時も、特に悪印象はない」

鏡の向こうにいるのは安齋千代美。

「もし私たちに背負うものがなければ、友だつたかもしれないな」

その独り言を聞くものはない。

暫くのち、P40の上に乗つた私の周りを、アンツイオ高校戦車道部の隊員が囲んだ。深く息を吸い込んだ。

「アンツイオ学園戦車道隊員にしてアンツイオ黒服党黒服隊員である諸君！よく聞いてくれ！いいか！今回は西住流の逆賊西住みほとそれを守ろうとする者を、アンツイオの名において叩き潰すための試合だ！

西住みほは西住流を破門にされただけでなく、黒森峰を叩くため戦車道大会に参加し

ているのだ！挙げ句の果てに西住みほの身柄と引き換えに自由の身を約束しても、徹底抗戦を選択した！大洗の馬鹿どもは何としても西住みほを生存させたいようだ！

ならば我々の不滅の槍をもって、奴らを撃滅するほかない！西住みほさえ殺せば、大洗にまともに指揮を取れる奴はいない！降伏なぞしよう者は、西住みほに逆らった事を理由に大洗に皆殺しにされるだろう！総員総力を挙げて戦ってくれ！」

「ドゥーチエー！ドゥーチエー！ドゥーチエー！」

ここでトーンを落とす。完璧な人間にトップは務まらない。

「と、まあここまで格好付けたことを言った訳だが、この中には絶対には生きていたい、と思う者もいるだろう。そう思うこと自体を否定することは出来ない。それに大洗と戦う理由に私の西住流における個人的感情が絡んでない、と言えば嘘になる。だから今この場で大洗に降伏したい、と思う者がいても構わない。

今ならまだ許されるだろう。逆に試合が始まれば、我々は許されまい。ここから去っても私は非難しない。残る者が非難することも許さない。そうしたい者はいないか？」

戦車から降りて、一人一人の顔を眺めながら戦車の周りを回る。だが皆私の顔をはつきりと見つめ返し、動こうとする者はいない。

「……いないのか」

「ドゥーチエー！」

集団から一人、私の名を叫ぶ者がいた。

「アマレット……」

「こんな時に何言い出すんつか！我々は黒服隊員！その青年団の一員として、ドゥーチエを守る為に、アンツイオを守る為に戦うって誓ってるじゃないですか！」

「いや……そうだが……な」

「そうですよ！ドゥーチエは戦いなさるおつもりなのでしよう！だったら逃げるなんて出来るわけないじゃないですか！」

「ジエラート……」

「そうだ！ここにはドゥーチエを地獄に送りながら、のうのうと煉獄に行こうとする者なんていやしませんよ！地獄の釜の底までお伴します、ドゥーチエ！」

「パネトーネ……」

「ドゥーチエ！ドゥーチエ！ドゥーチエ！」

再びの連呼が周囲を包む。それに何も出来なかつた私は、何らかの合図があつたのかそれがサツと静寂に帰した時も、ただ狼狽えるだけだつた。

♪母よ涙は無しで 子は強者だから

流れる声の清らかさ、姿川の如くなり。声の主を確認すると、カルパツチヨだつた。

♪都市の友よ 悲しむなかれ ここには敗北はない

次は男体山の如く荘嚴なる歌声。ペパロニのものだ。

この歌はアンツイオ黒服隊青年団歌。ここの皆がくまなく知っている歌だ。

♪進め部隊よ 黒き炎 我らの存在 示す紋章

その声に周りの皆も揃って歌い始め、私の四方八方から取り巻こうとする。歌いながら胸元の紋章の形のバッチを、指で挟んで皆掲げている。

♪平原を進み 学園を守れ 機関銃と青春を手に！

彼らは本当に、一人残らずやる気だ。大洗が敵であるからではなく、私を守る為。一番のみで歌声は止まった。再び戦車の上に乗る、こちらを向く皆の視線を見渡す。

「大馬鹿者がっ！」

叫んだ時に、自分の頬を涙が伝わっていたのを知った。

「お前らは本っ当に馬鹿ばかりだ！飯の時間になれば話も聞かずに食堂に直行！節約したおやつ代は練習後のパーティーで吹っ飛ぶ！その練習も指示通りのことも出来ない時さえある！」

何とか十役会議を説得して予算を持ってきても、車輛の増強には回しきれなかった！やっとな手に入った中戦車がP40だ！本っ当にどうしようもないよ、お前ら！」

鼻水までもか。私の顔にはティッシュが即刻必要だな。だがそんな事を気にする時

ではない。

「だがな！私はそんなお前らと戦車道ができ、同じ時を過ごしたことを後悔したことはない！一度たりともない！断言する！楽しかった！お前らと過ごした全ての時が！喧嘩をしようと、気分が落ち込んでも、試合で勝てなくても、側にいたお前らは最高の仲間だった！」

だからここで私が死んだとしても、後悔はない！お前らと過ごせた記憶を共有出来る限り！そしてそのお前らと最期を迎えられたら、私は幸せな人間に違いない！」

袖で顔に付く全ての液体を一気に拭ってしまった。ははは、汚い、みつともない。

「しかし！私はタダでこの命をくれてやるつもりはない！皆の命もくれてやるつもりもない！大洗の、プラウダの全ての命と引き換えでなければ渡せるものではないことを、奴らに教育してやれ！」

「おおっー！」

「自由万歳！平等万歳！学生万歳！労働者万歳！雇用者万歳！それらを守る兵士万歳！君たちの失敗は私の責任、アンツイオの失態も私の責任だ！諸君！私に自分の責任を預けてくれ！古代ローマのごとき栄光を我らの手に収める為に！」

諸君！Vittoria（勝利を）！」

私は高く右手とその手にある鞭を掲げた。

第4章 ⑤ 溝の中

作戦概要を知らせた後の大洗のテントの中は、重い雰囲気に包まれていた。足元を注意する、そうしなければ死ぬ。視界の狭い戦車にとつてそれがいかに難しいことか皆理解しているだろう。

「それが対戦車戦の脅威です。一箇所に固まって餌食になるのは避けたいのですが」

「だったら拡散するのがいいのか？」

「いいえ、それでは各個撃破の対象になります。2つ位に別れたいです、が」

「どう割れるかか」

「……だったら、対戦車戦陣地のありそうな方に機銃のある戦車を回した方がいいんじゃないか？」

エルヴィンさんが頭の上のゴーグルを調整する。

「歩兵を一掃するなら砲弾より機銃の方がいい。まさかトーチカ作ってるわけじゃあるまいし、塹壕程度ならどんな砲火力でも怖くはないしな」

「そうなると機銃があるのはIII突以外か。だったら対戦車戦やりそうな方にM3、Bibis、ポルシエティーガーを回せばいいんじゃない？」

会長さんが干し芋を一枚つまみながら頭をこちらへ回す。

「といたしますと?」

「M3は背があるし、ポルシエティーガーは底を一番抜かれにくい。

そして別れた後の戦力比を考えるとB l b i sを送るのがいいんじゃないか? ポルシエティーガーの足に合わせれば敵を捜しやすいつしよ。どつちにP 4 0がいてもI V号、ヘッツァー、I I I突がいれば対応可能でしょ」

背があれば上から塹壕などを見つけやすいし、アハトアハトさえあれば予め破壊できる。榴弾砲があるB l b i sがあるのも良いな。良い編成だ。しかし本当にマークI Vが使いづらい。機銃が5つと多いのは良いのだが、トロイ。時速10 k m出せないとかどんだけよ。

「成る程、そうですね。でしたらその手でいきましょう。問題はマークI Vなんですが……そちらに回します?」

「それで良いんじゃないか? ゆっくり進むべきは対戦車戦する方だろうし」

「あたいらもそれで構わないよ。というよりあたいらの踏破能力じゃ急な方は登れないよ」

お銀さんの同意を得られたなら良いか。

「ではそのようにお願いします」

「ところで西住、敵はどこに来るかわかるか？」

「こちらをご覧ください」

机に地図を広げる。そこには昨日の試行錯誤の跡が残っている。

「昨日考えて出た答えは、敵陣地を西に迂回する道か、ここから敵陣地を直接狙うこの道の途中のどちらかです。私はこっちの西の道だと思えます」

「というところ？」

「こちらの方が坂が急です。敵はこちらなら高低差を利用して戦力を集中すれば、直にぶつかっても勝てると思うのではないかと」

「そうか。初動で地形ではこちらが大きく不利か」

「ええ、出来るだけ同等に戦える一本西に南北に走るこの道までいかに早くたどり着くか、それが重要です。ですがその前に交通の要衝であるこの交差点に行きましょう。その地点を保持しつつ、偵察を出して相手の配置を確認します。行くのは4人、迂回する道と直接狙える道を両方調べてください。場所がわかったらそこをできるだけ避けて通ります」

「了解」

全員が返事した後、車輛整備の確認に散っていった。空は青く澄んでいる、怖いほど。対戦車戦、もしあの目標を本当に達成せねばならない時、これも選択肢として上がって

くるのだろう。

午前11時、陸前高田のリアス式海岸の一角でホイッスルが鳴る。互いの学園を背負った戦いの始まりだ。

「偵察の人たちは指示した方に向かってください。マークIVは後方の警戒を」

「はいよ」

坂を登り始めたIV号から通達された命令に合わせて2人組が2つ、正面の道には優花里さんとカエサルさん、右脇の道には山郷さんとスズキさんが、それぞれトンプソンM1を装備して向かう。

「西住殿、行ってまいります」

「敵の配置の情報を取るのが目的です。敵に会ったら戦わずに引いてきてください。生きて帰ることを最優先にお願いします」

「了解しました」

「分かった」

「分かってる！」

偵察が出発した後、件の交差点に到達したこちら側は、周囲を警戒しつつ車輛を予定の進路に向けられるよう振り分ける。向こうは奇襲を狙って来るだろう。現在ここに

集中している以上、それを封じるには周囲全面を警戒させるのが最善だ。

「各車の車長は耳を澄ませて、私たち以外のエンジン音がしたらすぐに報告を。車輛の砲塔は外側に向けてください」

「西住ちゃん、頭出してるけど大丈夫なのかい？狙撃とかしてくるかもしれないよ」

「その危険性は薄いでしょう。アンツイオ黒服隊の主要装備はライフル。自動小銃には慣れてないでしょうから、というのが一つ。もう一つは、徒歩で敵陣地からここに来るのは試合開始後の時間から考えて不可能だからです」

「なるほどね。じゃあ時間が経ったら頭を仕舞ってくれるわけだ。こちらは西住ちゃんに死なれたら困るからね」

「ははは、でしたら時期に甘えることにしましょう」

双眼鏡を眺めながら周囲を見渡しつつ、耳の音を全て判別しながら時は過ぎる。車内に戻り水を一杯口に含んでいると、正面を向いていた麻子さんの声が車内に響いた。

「西住さん、怪我人だ！」

「怪我人！」

先に敵がいるのか！すぐに頭を出して様子を見ると、優花里さんが肩にカエサルさんの腕を背負ってこちらに駆けて来ていた。

「優花里さん！」

「西住殿、負傷者です！カエサル殿が肩を撃たれました！」

負傷したのはカエサルさんのようだ。すぐに車輛を降りて傷口を確認する。右肩の上部の皮の一部を吹っ飛ばされたようだ。骨には到達しておらず、大事ないだろう。カンドけれど、症例のなかでは遥かにマシな方だ。

「……骨までは届いてないみたいなので、布を巻いて止血してください。敵はいたようですが、何処に？」

「この道の半分少し手前程、約1km先です。セモベンテ2輛、カルロベローチエー輛が道の脇の森の中で待機中！」

その対応に追われている間に山郷さん達が合流した。こちらは怪我などは負ってないようだ。

「山郷さんのほうは？」

「こちらはP40が1輛、セモベンテ1輛が道の脇で待っています」

「……主力を分割して森で待機？」

顎に手をかける。敵の方が戦車の性能が明らかに劣るのだから、分散して各個撃破されるのは愚の骨頂。防御有利でもないのだから、リーでさえやらないぞ。

「我々を二手に分けさせる気ですかね？西住殿。だとしたら何のために……」

「ちよつとグデーリアン、痛い」

「我慢するであります」

カエサルさんが肩に視線を向けて顔をしかめるが、優花里さんら顔色変えず肩に巻いた布を締める。こういうのが後々効いてくるからな。彼女は装填手だから、肩に痛みがあるて厳しい。

「優花里さん、消毒は？」

「手持ちで何とかしました」

何持つて来ているのか、とも思ったが、軟式の試合でも怪我する可能性はあるからな。救急箱はあつても不思議じゃない。それがそこまで大きくないカバンからパツと出てきたことは驚きだが。

「まずはまだ発見できてないカルロベローチエの動向を警戒します。カバさんチームはエルヴィンさんが装填手を代行してください」

「Ich verstein (了解です)」

「3式、Blibis、ポルシエティーガーは完全に右側に集まってください。出発して相手がボーとしている間に各個撃破します」

相手の策に乗せられているかも、とも考えたが、ここらに集中されているのを発見され、こちらの砲を向けられぬうちに狙い打たれるのも良くない。動こう。

「了解しました」

全方位への警戒を少し緩めて、方面別に分かれるように車輛が進む。

その配置換えが終わろうとしていた時、背後からエンジン音がする。それらは時間と比例して大きくなる。大洗の車輛は全てここにある。とすると……

「突っ込めー!」

一際目立つ声が予感を的中させた。カルロペローチエ5輛が前進してくる。交差点に向かう道まで、カルロペローチエの快速性を生かして裏に回り込んだのか。しかもこのタイミング、最適だ。

全車が大洗の車輛に向けて機関銃を撃ち始める。車輛を撃ち抜くことはないのはありがたいが、急に車内に来襲する金属音は大洗の隊員をびびらせる。

「きやあああ」

「て、敵襲だ!」

「相手は何処を撃つても抜けません。落ち着いて狙ってください!」

指示が飛ばすが、皆は焦り対応が満足に取れない。背後から来た為に砲塔の回転に時間がかかる。その間にありつただけの銃弾を浴びる。

カルロペローチエはその間にこちらの車輛に近づき、体当たりまでも行う。その体当たりの餌食にIII突がなったようだ。

「こちらカバ!体当たりで履帯をやられた!」

「今は危険です！ 車輛は抜かれませんが、その場で待機してください！」
「り、了解！」

IV号が砲塔が回転し、華さんが引き金を引く。それがカルロベローチエ1輛を捉える。カルロベローチエは吹っ飛び、半回転して地面に横たわる。カルロベローチエ4輛は指揮車輛らしきものを先頭に、バックしながら機関銃を撃ちまくってくる。

こちらの場所はばれた。だが向こうの待ち伏せ地点を、少なくとも右の道では把握している。左ではばれているから移動させているだろうが、まだ対応は可能。

「右の道へ行きます」

「ぶつつぶせー！」

「ぶつつぶせー！」

命令を出す前に、車輛に体当たりされて怒ったウサギさんチームがカルロベローチエを追って右の道へ進む。待て待てそんなに飛ばすな。後ろが追いつかないじゃないか
「あつ……ちよつと……仕方ありません。カモさん、レオポンさん、サメさん。右の道へ行ったウサギさんを追ってください」

「わかりました」

「Aye, Aye.」

Blibbisが先に、ポルシエテーターがその後、後尾にマークIVが続いて道を

行く。

「カルロベローチエの全車輛の場所を把握したので、カバさんチームは待機して履帯の修理を。あんこうとカメさん、アリクイさんは正面の道を登ります。あんこうに続いてください」

「了解！」

I V号が発進し、それに続くようにヘッツァー、3式が坂を登る。ここは獣道を少し平らにしただけの道であり、石でがたつき揺れる。坂もさらに急になり、うまくスピードが出せない。

ウサギさんチームは砲塔をカルロベローチエの方に向け、37ミリを撃ち続ける。それに続くカモさんチームも75ミリを吹かせ、撃破しようとする。レオポンチームとサメさんチームは坂を登るのがやっとで追いついていない。

ペパロニ率いるカルロベローチエ部隊はその軽快さを使い、巧みに砲撃を避けるが、砲弾が飛び交うなかで当てることは避けられない。1輛、また1輛と砲弾に当たっていく。残りは2輛、ひたすら機関銃を撃ち続けている。撃ち抜けるわけもない、と知りながら。

「あと2輛だよ！梓！」

「どンドン撃つよーもつと飛ばして！佳利奈！」

「あいあいー！」

ウサギさんチームの者は車輛を撃破したことで興奮している。何も出来なかった味方を相手の死で補おうとする。

「あの……」

澤は車輛の者を抑えようとするが、宇津木の代理として河嶋と通信している間に最高潮に達している4人相手に、1人ではどうにもならない。阪口はアクセルをさらに踏み込む。次に大野が撃った37ミリはペパロニのカルロペローチエを撃ち抜いたように見えた。車輛はバランスを崩し、煙を上げたまま木に激突した。それに気を良くしたウサギさんチームの者は、最後の1輛を仕留めようと躍起になる。

「沙希ちゃん、何か言った？」

何かを聞いた気がした大野が37ミリを装填する丸山に問うが、丸山はすぐに75ミリの装填に移り何も答えない。山郷に一声かけるが、どうも彼女ですら何も分かってないらしい。気のせいかと再び照準器を目に当てた。

最後の1輛のカルロペローチエは少々上下に揺れたあと、機関銃を撃ち続けながら後退する。ウサギさんチームはその場所に突撃した。すると床の下から音がする。重い金属のドアが閉まり、鍵がかかったような音だ。澤はその音を合図に作戦会議の文言を

こねくり回し、全てを悟った。

「脱出してー！」

そう叫ぶと自身もそばにあつたトンプソンを掴み、キューポラから身を出して脱出する。山郷が右横から、阪口が正面から脱出する。澤と山郷は近くの森の中に逃げ込む。その後すぐにM3は底を文字通りぶち抜かれた。

車輛に空いている穴の全てから煙が登る。阪口は足が爆風に巻き込まれ、前に飛ばされる。なんとか立ち上がろうとしたその時、前方で急停止したカルロペローチェが大量の機銃弾をばら撒く。大量の弾丸を浴びた阪口の身体は赤い水滴と共に半回転して宙を舞った。その後猛スピードでカルロペローチェは後退していく。

M3から他に外に出てくる者と、阪口を気にかけて声を掛ける者はいなかった。

「森にいたぞー！」

「殺せー！」

爆発から離れていたアンツイオの隊員は、その音響の終焉とともに行動を開始する。澤はとつさに近くの木の裏に隠れたが、山郷は間に合わなかった。機銃弾による犠牲者6人目が、澤の隣に誕生した。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園高等学校犠牲者

大野 あや

アンツイオ 爆殺 死体損壊激しく致命傷は不明 即死

丸山 沙希

アンツイオ 爆殺 死体損壊激しく致命傷は不明 即死

阪口 佳利奈

アンツイオ 銃殺 銃撃による失血ショック死 即死 多数の銃痕有り

山郷 あゆみ

アンツイオ 銃殺 銃撃による失血ショック死 即死 多数の銃痕有り

その様子を見たカモさんチームの面々は驚きを隠さない。すぐ近くでM3がいきなり爆発したのだから。操縦手も思わず手を離していた。

「あ、あれが対戦車戦……」

車長の園が呆然としたあと口から搾り出す。

「……パ、パゾ美！前の地面に向かって撃ちなさい！このまま進んだらBlibisも爆発してしまうわよ！」

自分で言った言葉にハツとした園が砲手に指示を出す。それに砲手のパゾ美も頭を

動かし始める。

「そ、そうだね。ソド子」

「榴弾でいいよね、装填よし！」

「照準よし！行くわよ！」

轟音とともに煙の登るM3の左側に着弾し、辺りに砂が撒き散らされる。砂に混じつて、上半身を出していたアンツイオの戦車部員の肉片と血しぶきが撒き散らされる。太い木の背後だったお陰か、榴弾の破片の一部が澤の腕を傷つけただけで済んだが、その傷を気にする余裕は無かった。

「……………くそつ、まだまだっ……………」

土煙の登る塹壕から血を流し、トンプソンを持ちながら外に出ようとするアンツイオの戦車部員がいたのだ。

「うわああああ！」

澤は大声で叫びながら木の脇から飛び出し、無我夢中でその者を狙った。5発ほどを外した後、残りの弾の一部がその隊員を撃ち抜いた。

だがその部員ははるかに優秀だった。叫び声を聞きつけて即座に銃を向けると、澤が5発外している間に放った一発が、確実にその眉間を撃ち抜いていたのだ。こうしてこの塹壕周辺から生存者は消えた。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園高等学校犠牲者

澤 梓

アンツイオ 銃殺 頭部狙撃による即死 額に銃痕あり

第4章 ⑥ 捧げよ

「ソド子！銃声がするよ！まだ居るみたい！」

「だったらもう一発打ち込みなさい！向こうはこっちに向かつては来ていないんでしょ！」

「り、了解！」

その後再び放たれた一発は、轟音とともにその塹壕の再利用を不可能にした。B1 bisは速度を再び上げて前進し、アンツイオの作ったと思われる塹壕を確認する。本当に確認するか後藤と金春は尋ねたが、園は確認は必要だ、と譲らなかつた。

数名の死体が分断されて散乱するのみで、もうこちらに銃を向ける者はいない。だが念には念を、と手持ちのトンブソンM1を底にばら撒かずにはいられなかつた。

壁に寄りかかつて息絶えていたものも、ずるずると塹壕の壁の土を巻き込みながら、目をその壁に向けつつ底に横たわる。少し離れた場所に点在するかつての仲間より、その遺体から目が外せない。

共に降りた後藤と金春は、近くの林の中で吐瀉物を土の上に降り注がせている。園も吐き気を覚えたが、落ちていたM1を回収させると、後続を待たず追撃するよう指示し

た。

私たちはただ職務を全うしただけ。M3は副隊長の指示に従わなかった為になつた。だがこの前進が規定事項だった以上、誰かはこのようになる運命だったのかもしれない。

坂を登り始めて間も無く、坂を下りてきたカルロペローチエを容赦なく撃ち抜く。

「どうしてここまで一輛で降りてきたのでしょうか？」

華さんが尋ねてきた。自分から呐喊して死ぬ奴の気など、分からない。

「なんででしょう？」

「西住殿、そろそろ敵が待つていたところがあります。警戒を」

「分かりました。各車左に注意を払ってください」

少し速度を落とし、道なりに行く。

「ここでありませう」

なるほど確かに森の木々に隠れているセモベンテがいる。華さんに照準を付けさせ、私の合図とともにI V号の砲弾は当たった、はずだ。

しかし当たった後のセモベンテの反応は、撃破というより砕け散った、という表現がぴつたりだった。

「偽物！」

騙された。手前に待ち伏せしていたから対戦車戦をしないと思ったが、大きな間違いだ。もう一輛も同様だった。流石はアンチョビさん、一筋縄ではいかないか。これはこつちも少しは覚悟しなくちゃなあ。

それにしてもよくあんな板用意したものだ。対サンダーズの計算のもとで用意していたのかもしれない。

その少し前、坂の上の自陣で待機する私のもとに無線が繋がる。カルロベローチエ部隊の一輛からだ。

「隊長、報告します！こちら私の車輛以外、ペパロニ副隊長車も含め撃破されました！対戦車戦用の塹壕も破壊されましたが、塹壕でM3の撃破に成功しました！」

内容の理解をしてからも暫く表情。動かさなかった。その後今日2度目の涙が頬を伝う。ペパロニは死に、危険を顧みず対戦車戦用の塹壕に入ってくれた者も無残にやられた。しかも撃破できたのはM3のみ、戦力が削れたとは言えない。その死の価値は、途方もなく軽くなってしまいか。

しかしまた汚らしく涙を拭いて前を向く。そして、キューポラから上半身を出して鞭を大きく振りかぶる。まだそれを断定する時ではない。ここにはP40とセモベンテ

三輛が残っている。

「全車前進。敵を撃破せよ！」

交差点に置いた見張りからIII突の履帯破壊と敵が二手に分かれたことを聞いていた。目当てのIV号が正面に来ることも。ならば狙うはただ一つ。

「諸君！対戦車戦に向かった者らは確実に戦果を挙げた！我らも続く時だ！こちらの方が高台だ。多少射程外でも狙える。撃ちまくれ！」

IV号を撃破し、我らに勝利を！」

「総帥万歳！」

砲火力はこちらに集結済み。ポルシエティーガーが来る前に各個撃破したい。その為にはすぐ正面に来るIV号、ヘッツァー、3式を素早く叩き潰すしかない。P40が一輛とセモベンテ三輛に下山を命令した。

「M3が殺られたわ。その代わり敵の塹壕のようなものは破壊したわ。あとカルロベローチェは追加で3輛撃破」

沙織さんが慌てた声で受け取った報告を伝えてくる。こちらがこの状況である以上覚悟はしていたが、やはりか。車輛と人員は失ったが、最悪の事態ではない。だが沙織さんは日頃からウサギさんチームと仲が良かった。それだけに思うところがあるよう

だ。

「……作戦通りともに西の道に向かってください。こちらはこちらで対処します」

「分かったわ。まだ一輛残っているから、追撃しておくわね」

「了解しました」

報告を受けた直後、近くに砲弾が着弾する。その数、四発。幸い全弾外れたが、キューポラから身を出すとかなり離れた場所にセモベンテとP40が見える。向こうに対戦車陣地を作つてあるなら、こちらには砲火力。見事に嵌められた。だがその火力を合わせてもこちらが上。あまりやりたくない戦いだが、やるしかない。

「道の先に敵発見！撃破してください！」

正面に向けている砲から大洗側も応戦し、砲撃戦が始まる。どちらも距離を詰めようと前進するため、走行間射撃となりなかなか当たらない。三式が幸先よくセモベンテ一輛を撃破するが、P40の撃つた弾がヘツツアーの側面をかする。貫通しなかったものの、左側がへこむ。

「あとともに三輛……落ち着いて狙ってください！砲手と操縦手は連絡を密に！」

「西住ちゃん！私とかーしま替わるね」

とうとう相互に狙われる状況になって、河嶋さんが砲手から解任されたようだ。会長さんの射撃技術が如何程かは存じないが、命中率は上がるのだろう。それにしても向こ

うの射撃頻度が低い。確かにカルロペローチェが射撃しながら走行していたから、こちらから人員を対戦車戦に割いたのだろう。そうしたら真つ先に割り当てられるのは装填手。

先程変わった会長さんが操作する砲が、とあるセモベンテを狙う。狙いは確かにその車輛に向いていたのだが、なんとP40が射線上に割り込み、自ら白旗の台座となった。安齋さん、貴女も西住を犯して死ぬことになるか。いや、もしくはこれも勝ちのための一手法なのか？

「P40、撃破。会長さん、ありがとうございます」

だがそんなことを考える時でもない。淡々と戦果を述べる。それを話し考えている間にI-V号が一旦止まり、華さんが別のセモベンテ一輛を狙い撃った。

「残り一輛です。落ち着いて狙いましょう」

3式が外したものの、向こうから反撃は来ない。その間にヘツツアーの再度の砲撃が最後のセモベンテに命中した。今度からは会長さんに砲手をどんどん努めてもらおう。

向こうの砲撃が少なかったことと、会長さんの技術が思った以上に高かったお陰で、奇跡的に被害なしでこの場を乗り切った。

「敵計4輛撃破確認。このまま山を登ります。前進してください」

坂をさらに進むと、敵戦車の残骸が道を塞ぎつつあった。I-V号を先頭に、その隙間

を押し開けて進む。最早使い物にならないP40の中など、覗く気にもならない。焦げ臭い匂いしかないだろう。だが最後に撃破したセモベンテも煙は登っていたが、人がいるような匂いがしない。だが車輛が撃破されている以上人員がいようと使うことは出来ないため、試合はもうすぐ終わるはず。それ故に気にしないでいようとしたら、終わりを示す無線が園さんから入った。

「こちらカルロペローチエ撃破よ！これでこつちにはカルロペローチエはもういないはずだわ」

それを聞くや否や、森から笛の音が鳴り渡る。

「アンツイオ学園高等学校全車輛走行不能。よつて大洗女子学園高等学校の勝利！」

車輛を止めさせてキューポラから身を乗り出し、深く息を吐き出した。勝てた。生き残る希望とともに死ぬまでの時間が、また少し増幅された。この時間を私は何に使えるのか。

第74回戦車道大会公式記録

○大洗女子学園高等学校 v s Xアンツイオ高等学校

被害 大洗1輛 アンツイオ10輛

アンツイオ高等学校全車輛走行不能

試合が終わったからといって時間が空くわけではない。残存車輛の整備、補給を進め、次の会場までの移動準備を整えなくてはならない。次を不安に思う者も多いはずだが、誰も何も言わずすべきことをしている。ここに一人でもウサギさんチームの人がいたら状況は変わるのかもしれないが、この状態でそれを気にする人は見受けられない。

「ヘッツアーの装甲、大丈夫そうですね？」

「一応穴とかは空いてないけど、削れてはいるね。出来れば追加装甲とかでカバーしたいところだけど……」

「ルール上実際に付けられていた追加装甲なら可能かもしれませんが……」

「費用的に無理だね」

「しかしヘッツアーの火力は捨てがたいのは事実。他に使える車輛もありませんし、そのまま使ってください」

「分かった」

ヘッツアーの傷はあまり深くはないようだ。バランスが少し崩れるかもしれないが、このまま運用を続けることが可能だろう。その傷に触れて確かめていると、背後からこちらに近づく人がいるようだ。

「西住殿！」

「どうしました、優花里さん」

振り返ると、優花里さんは駆け足で来たらしく呼吸が乱れていた。

「連盟の方がお見えであります。なにやら捕虜の扱いに関する事らしいです」

「捕虜？この殲滅戦の状況で、ですか？」

「はい」

戦車を撃破されて中の人が生き残ることは滅多にない。私はその例外を体験したことはあるが。まあ確かにその前例がある以上、可能性はあると言わざるを得ない。

「では河嶋さんも呼んでください。二人で話しを伺います。確かテントの方にいらしたはずですよ」

「了解であります！」

彼女は私の指示した方へ去っていった。

「西住ちゃん、私は行かなくていいのかい？外交は門外漢なんだろう？」

「解放を軸に考えればよろしいでしょう？今後を考えれば。それくらいは分かります」

「そうだね。それが分かっているならいいや。まあ問題は今後があるかなんだけどね」

「……じゃ、行きますね」

私たちの陣地の入り口、試合会場への連絡口のところに、審判に連れられた五人のア

ンツイオの者らがいた。一人は腕を怪我をしているらしく、青い顔をしてその部分を抑え、隣の者が軽い口調なれどもそれを気に掛けている。またその五人のうち一人は、降伏勧告の使者として訪れた人だった。

「装備品は既にこちらで回収済みです。それでは、扱いはそちらに任せます」

「ありがとうございます」

五人とも手を結わえられているわけでもない。こちらは一応支給された拳銃を用意しているが、向ける気はない。

「……とりあえず全員こっちへ来い」

雨が降りそうなわけではないが、入り口で対応するのも何だろう、とのことらしい。河嶋さんは近くにあったテントの所へ誘導しようとする。その時、振り返ろうとした私たちの前で、使者だった、確か落合とかいったか、女が、膝を地面につけ、地面にその綺麗な部類に入るであろう顔を擦り付けていた。五体投地か何かかい。

「必要とあらば私の命は差し出します！ど、どうか残りの仲間の命だけは……」

「お、おい、カルパッチョ！」

「貴女がたの仲間を殺して負けておきながら誠に凶々しいことですが、どうか彼女らの命だけは……」

命乞いか。そしてここに捕虜がいることと、あそこで匂いがしない方角があったこ

と。

「……あなた、セモベンテに乗ってましたか？」

「……はい、それが……」

やはりか。で、確か戦車道で副隊長に就くほど安齋さんに近い人物。なるほど。

「立ちなさい」

できるだけ低い声で鋭く、そう伝える。聴きながら私自身こんな声が出るのか、との驚きを隠していた。

「はい？」

「立ちなさい、と言ったのです。貴女がたの身柄が私たちに委ねられていることはご存知ですよね？」

「……はい」

狐につままれた顔をして、膝の土を払ってから彼女は直立の姿勢に戻る。その姿勢が整った時、私は彼女の襟首を掴み上げ、まだ土の残る額にぶつからんばかりに自分の額を寄せた。

「……」

目線をずっと合わせたまま動かさない。彼女の方は何をされたか分かってないようだ。

「お、おい西住、何を……」

「(い)は私に」

河嶋さんには悪いが、ここは私と彼女が話す場となった。

「……まず交渉の仕方として、こつちの手札を読む前に自分の手札を曝け出すのは阿呆のやることです。副隊長の貴女の命、その札を使うのはすぐではないはず。違いますか？」

「……いえ、(こ)は交渉の場ではありません。懇願の場です。そもそも貴女がたと私たちが対等に話せるはずがないのですから」

「では何故そもそも貴女は自分の命を手札に使うのか、答えて差し上げましょう。安齋さん、いえアンチヨビさんの方が宜しいでしょうか、その方を死なせておきながら、自分だけ生きて帰る訳にはいかない、などと考えているのでは？」

足がすっかりついてないせいか、一際大きな振動が腕を通じて伝わってくる。凶星か。

「そんな事を考えている人間を殺す価値はこちらにはありません。少なくともそれを対価に全員解放など問題外です。貴女が実質この捕虜の集団を束ねていると考えて、選択肢という温情を与えましょう。一つはこのままこちらは何もせず全員解放する。もう一つは全員殺さない程度まで痛めつけた上で身包み剥いで解放する、です。どちらにし

ますか?」

「……前者を」

「宜しいですね?」

「……はい」

私は手をパツと離した。向こうは少しバランスを崩したらしく、少しよろめいた。

「に、西住、全員解放は構わないが、ただで、というのは仮にもM3を失ったこちらの心情に沿わないんじゃないか?」

「ふーむ、そうですね。ではこの中でアンツイオで屋台をやってたりする方はいらつしゃいますか?」

「わ、私! 私やってるつす!」

「私もやってます!」

二名が手を挙げた。

「そうですね、それは素晴らしい。では貴女がたが今夜の夕飯を作ってください。怪我している方はこちらで最低限の治療をしましょう。夕飯が美味かったら解放しますよ。

そちらの方、どうも骨折なさっているようですから、添え木を都合しましょう。河嶋隊長、これで宜しいですか?」

「あ、ああ。飯が美味くなるなら、悪い話ではないな」

「ではそのように」

その日の夕飯はイタリアン風味の格段に美味しいものだった。これまで会長さんや沙織さんの作ったおかずや、優花里さんの飯盒で炊いたご飯が不味かったわけでは決していないが、金を取れるレベルになるとやはり違う。

戦場でパスタを茹でた話は嘘だと聞いたことがあるが、美味しい飯が士気に関わるものだということは確かだ。その点黒森峰はご飯かパンとザワークラウトとかだからなあ。良くてソーセージ。

その後彼女らには一応の手当てをして解放した。かといって彼女らが今後無事に居られるかどうかは分からない。

第5章 プラウダ戦です！

第5章 ① 真実の街

その部屋からは時たま紙をめくる音のみが聞こえるだけだった。その静寂の中にドアをノックする音を響かせる。

「失礼致します、同志カチューシャ。ノンナです」

「いいわよ。入りなさい」

ドアを開け、資料とポットをそれぞれの手に持つて入る。だが同志カチューシャに会うには、荷物を検査機に通しながら防弾ガラスに囲まれた金属探知機の下を通らねばならない。無論問題なし。カーペットのひかれた大きな部屋にある、背の高めの椅子に座っているのは、金髪の高校生とは思えないほど小さいお方、彼女は小さいが分厚めの書籍と向き合っている。

「同志カチューシャ、次の会議の資料と、粛清者のリストを持つてまいりました」

冊子に赤い葉を挟み机に置き無言で受け取ると、私の持つていた書類に目を通す。

「今回の粛清者は……ハマナ ジュン、工業科の生徒ね」

「この者は外部生として注意対象ではありませんでしたが、頻繁に地域外に出ている形跡があ

り、政治委員による尾行の結果スパイだと判断しました」

「なるほどね。校内の内通者は遠慮無く殺つてしまいなさい。どこの?」

「黒森峰のようです」

「そう、懲りない奴らね。たまには他のところが送つてきてもいいのに」

同志カチューシヤは無造作に書類を机に投げる。

「民族主義者、水平派らもここ数ヶ月は大きな動きはありませんが、黒森峰に動きがある以上油断は禁物です。ところで同志カチューシヤ、ロシアンティーのお代わりはいかがですか?」

「頼むわ、ノンナ。で、次の会議の内容は何?」

「今年度の農業、林業関連の結果予想と、それに伴う来年度の計画調整とのことです」
「私には分からないことね」

「そうですね。基本は農産部に方針に任せましょう」

「それだけ?」

「あとは同志カチューシヤの印が必要な書類がいくつかございます」

「後で目を通しておくわ。置いて」

同志カチューシヤは頭の後ろで手を組み背もたれに身を委ねる。机のカップにポットを上げながら湯気の立ち上る紅茶を注ぎ、林檎ジャムの皿を脇に置く。

「同志カチューシャ、先ほどお読みになっていた本は？」

机に置かれた本の表紙を覗く。そのタイトルは『ロシア語基本単語集』であった。

「いつでも能力向上を怠らない様、流石です。私も見習わなくては」

「し、しようがないじゃない！流石に会議のたびにロシア語が出来ないのをからかわれたら、ちよつとは仕返ししたくなるでしょ！」

かわいい。偉大なる方だが、身体と一部に潜む相応の性格。ここが人々を惹きつける所以の一つかもしれない。

「ロシア語も文学に、また我々プラウダに於いては重要な役割を担っております。学ぶのは損ではないかと」

「そうよね。学校の勉強も戦車道も勿論だけど、他のことも積極的に取り組んでこそそのプラウダの学生よね」

「脳みその凝り固まった黒森峰には出来ない芸当です」

「それにしても最近の政府は大変そうね。もう誰が大臣か、どこるか誰がどの政党に居るか分かったもんじゃないわ」

「終わりが近いということでしょう。もうじきに衆議院を解散するのでは？そこまで追い詰められているといっても過言ではないでしょう」

「実に素晴らしいことね。我がプラウダにとって」

「全くです。野党とは外務局が話を進めていると聞きます。政府との関係もマシになってくるでしょう」

「あ、そうそう。先日のパキスタンでの襲撃の件、反応はどう？」

「早めに手を打ったのが功を奏しました。特にアメリカより早く非難できたことは外交上もプラスでしょう。」

「でしようね。米露関係が最悪な今なら尚更ね。流星は同志ベルドフ」

情報局長であるその名を聞いて、我々に関係する重要な案件をうっかり忘れてしまっていたことを思い出した。全く、同志カチューシャの側近として恥じるべき行爲だ。

「ああそうでした。申し遅れましたが、同志ベルドフが興味深い事実を手にしたそうです」

ファイイルの中にしまっている紙を開く。

「なによ」

「西住流の関係者が秘密裏に12月の軟式大会を硬式にするように動き出したそうです」

「ほんとー！」

嬉々とした顔で肘掛に両手を乗せ身を乗り出しなざる。

「嬉しそうでいらっしやいますね」

「あたりまえじゃない！一年に2回も黒森峰を屠れるなんて！次も勝つてやるわ！」

盛り上がる同志力チューシヤの背後から、不意にノックの音が響く。この部屋に軽快に訪れることの出来る者は限られている。目星は付けているが、確認は取る。

「どなたですか？」

「こちらソホフです、同志ノンナ。同志ジユコフスキーから同志力チューシヤへのお手紙を預かっております。それをお渡しに参りました」

外から男にしては少し高めの声がする。

「お入りなさい、同志ソホフ」

「失礼します」

ドアが音を立てて開く。男は検査機に手紙を乗せた。ベルトコンベアが無害を示す電子音を伴って、私の下に到達する。

「ご苦労様です」

一礼し、敬礼ののち空いていたドアから出て行った。

「ジューおじさんから？なにかしら？」

同志力チューシヤは私の手を通じて受け取ったその手紙を雑に開く。

「なになに？明日食事に行きませんか、ですって？これは……店に入る為のカードかしら？どうしておじさんが直接伝えてくれないのかしら？」

「でもここ、プラウダの外れの店ですが、地域有数の名店として有名ですよ。そして恐らく、ただのお誘いではないと思います」

首を捻りなさる。

「さっきの話についてだと……」

「そうだとしても、私たちは黒森峰に勝てば、そしてさらに向こうの人員をすり潰せばいいんじゃないの?」

「いえ、同志ジュコフスキーはそれ以上のことを考えておられると思いますよ。そして彼が動くなら、彼より上も……」

「それ以上も……分かったわ、この話を受けるわ。ノンナ、あなたも来なさい!」

「喜んでご同行致します」

先程より深く礼をした。同志カチューシャは椅子から飛び降りると、鼻歌を歌いながら明日の服を決めるため部屋を出て行った。机の上の空になったカップに紅茶を注ぎながら、冷たい秋の風の流れる窓の外を眺める。窓の外の木の枝にギリギリしがみついた枯れ葉が揺れている。あの日も、そんな感じだった。

2005年冬、12月。プラウダ学園地域サウスツガル部キツクリ分部タテオカ。外は雪が積もっていたが、空は曇りだった。寒い風が吹く中、祖母、父、母、妹は人民

委員、通称NKVDに捕まった。人民委員は反地域組織とされていたパンノスラブ、排日主義を主張するプラウダスラブ連合という急進的団体を弾圧していた。父はその団体の幹部だった。

朝食を摂っていた時に急に押しかけてきた者達を前に、家族はなすすべなく捕まっていた。私は少し部屋から出ていたので、素早く物置に隠れた。父にもしものことがあつたら隠れて、落ち着いたら逃げろというように教えられていたのだ。

父らは手を縛られ、妹はウサギの人形を抱え、泣いたまま集落の近くの壁の前まで連れて行かれた。北部NKVD隊長のウラジミールイワノフが手元で書類を開いた。

「ニコライノヴィコフ及びその家族を地域への裏切り行為による反逆罪を持つて逮捕し、奪還危険性に伴う特別令状に基づき、銃殺刑とする」

その言葉の後に銃を構えていたNKVD隊員らによる銃声が周囲に響く。その近くで隊長の娘のエカチエリーナ、イワノワ、愛称カチューシャが、何もないと父にせびつた結果暇潰しに貰ったピロシキを頬張つて見届けていたそうだ。

「もう一人娘がいるはずだ。探せ」

白い息を吐きつつウラジミールが辺りを見渡しているとき、カチューシャはピロシキを食べ終わり、近くの物置の扉を蹴り開ける。扉は鈍い音を出して開く。

「うわ、汚ったない。農民つてよくこんな所に住めるわね」

物置の中の戸のハシゴの裏で、黒くボサボサした長髪を気にする余裕もなく私は体育座りをしていた。それを見つけた彼女は指についたパンくずを舐めとる。

「お前の家族は悪い人たちだからパーパが殺しちゃったわ。お前も一緒に死にたい？」首を左右に振る。そんなの私には関係ないことだ。

「ふーん、そうねえ……お前が今ここでカチューシャに忠誠を誓うなら、パーパに殺さないよう頼んであげる」

真つ直ぐ彼女の目を見つめる。大きなあくびを一つして続けた。

「早く決めなさい。カチューシャは気が短いんだから」

何かを感じた。その時は分からなかった。しかし生きる為にそうせざるを得ないなら、そうするしかなかった。首肯した。

「お前、名前は？」

「ノンナ」

これが、初めて同志カチューシャに出会った日。その日以来私はカチューシャ様のもとに厄介になり、カチューシャ様とこのプラウダ学園地域の為に働いてきた。初め生きる為の手段として彼女を見ていたことは否定しない。

だが結構すぐのことだったと思う、彼女の強さと深さを感じ、心の底から忠誠を誓う

ようになっていた。幼そうな外見の殻の中にある清濁併せ持つ強さ、それに呑み込まれた。

彼女が戦車部に入れば進言をして、トップに立つていただくために功績を挙げられるようにした。軟式大会にて黒森峰のフラッグ車を撃破なさり優勝に導いた人気で共産党青年団長に就任なされれば、私は学園第二書記に就任し学園内の彼女への権力集中を進めた。政治委員を各クラスに設置し、革命精神が1人1人に根付くようにし、カチューシャ独裁体制の構築に向け尽力した。彼女は戦車部隊長に就き、私は副隊長兼参謀総長に就いた。戦術などを彼女の為に必死に学び実践で生かした。

地域の裏切り者という恥辱を背負わされた私が、ついここまで来た。今や誰一人私を犯罪者の娘という者はいない。私は名誉を取り戻した。地域に役立ち、周りから賞賛され、敬愛を受けている。これからもっと彼女の為に働き、ひいてはプラウダ書記長になって頂くのが私の夢。

私は彼女を支えるとともに、過去の消去もやった。その為にかつて私の親を殺したNKVDの者に身を売ったこともある。不快感はある。だが彼女のためならば、その言葉で全ての感情と感覚を封じ込んだ。純潔など彼女のためなら喜んで捨てる。全ては彼女の為なのだ。

もし彼女の命令ならば、火の中に飛び込むことだって躊躇いはしない。

翌日、プラウダ学園都市プラウダ学園高等部校舎裏口。まだ秋だが、肌寒い風が冬の訪れに近いことを思わせる。

「ノンナ、行くわよ」

「はっ」

周囲には警備の者が拳銃に指を掛けて警戒態勢を取っている。その正面にあるのは、要人用の車。彼女がプラウダを左右する存在である証左である。乗り込んでからは運転手が勝手に向かうべき店へと導いてくれる。

学園はプラウダ市のタモギ地区及びミヤガワ地区、トリタニ川と大河イワキの狭間にある。向かう店はジュウサン湖東岸を通った先のイマイズミ地区にある。距離にして6km強、車だと15分ほどだ。公共交通もそこそこ充実しているため、市街地中心部では目立った渋滞はない。

彼女とは車内でこれといった話はしない。要件に関してはこちらの予想に過ぎない以上、ここでの合意が意味を成すわけがない。何より、彼女は今も真剣に書物と相対しているのだ。邪魔せねばならぬ道理はない。

広大な学園の敷地の東側を駆け抜け、線路沿いに北上していく。直方体のコンクリートの単調な林を抜けると、港湾施設群が姿を見せてきた。漁港、イマイズミである。汽

水湖であるジュウサン湖の西部、日本海と面する場所に軍民両用のプラウダ港があるが、それとは別に湖内の海産物を取り扱う漁港がここなのだ。市内で特別発展しているわけではないが、夕飯目当ての客が魚屋の前に列をなしている。

その賑わいを流し見していると、車は速度を落とし始め、まもなくある店の前で停車した。

数段しかない階段を登り、強風でさえビクともしなさそうな木製のドアを開けると穏やかな鈴の音が来客を祝福する。

「いらつしやいませ」

にこやかに頭を下げる店員に手紙に入っていたカードを見せる。

「ありがとうございます。お連れの方ならこちらでお待ちです」

時間より前だが、先客がいるようだ。手で先導する店員の先にあるのはドアがついた個室だった。店員がノックしたあとドアノブを捻る。

「どうぞで」

店員に案内され2人は部屋に入り、店員に上着を預ける。代わりの番号札を受け取り、正面を向く。

「ようこそ！カチューシャ、ノンナ。今日はよくきたな！」

席の向こうに座るのは頭をスキンヘッドにした中年の男だ。にこやかに右手を挙げている。細い体に見えて引き締まっている様子が袖などから垣間見える。彼の名はゲラシム・ジユコフスキー、現在プラウダ人民労働防衛隊、通称プラウダ赤軍少将にして参謀総長を務める男である。つい最近までは対日防衛戦略を練っていたはずの男である。

「こちらこそ、本日はありがとうございます。同志ジユコフスキー」
「ありがとうね、ジューおじさん」

丁寧な礼をする私に対し、関係の深いカチューシャはくだけた挨拶で済ませる。親が古くからの付き合いだそうだ。私も何度かお会いしたことがあるが、この軽い感じがどうも慣れない。別にプラウダの中で特段悪い人間ではないのだが。

「ところで、他のお2人は？」

机の上に用意された紙のマットは5枚。今この場に居るのは3人だけだ。

「ああ、それならもうすぐこちらに来るそうだ。場所は決めてないから好きな場所に座りなさい」

そう言われ、2人は入り口近くの席に並んで座る。最近の学園での活動などのたわいもない話から、3人の会話は始まった。そんな会話を進めてしばらくした後、ドアからノックが聞こえ、さっきの店員が扉を開ける。

「こちらです。それではごゆっくりお楽しみください」

その案内の元、2人の男が入って軽く挨拶する。1人は丸メガネをかけた背のあまり高くない男、もう1人は鼻の下にちよび髭をつけた日本人だ。丸メガネの男は知っているが、日本人の方の顔は初めて見る。

「どうもお久しぶりです、同志ジュコフスキー、ノンナ、カチユーシヤ。ベルドフです」丸メガネの男が会釈する。猫背であるためか実際より背が小さく見える。本来は隣の同志ジュコフスキーと大差ないはずなんですが。

「こんばんは、同志ジュコフスキー。初めまして、同志ノンナ、カチユーシヤ。私はついこの前同志モソロフから外務局局長を引き継ぎました松岡と申します。以後お見知りおきを」

席を立ったジュコフスキーと握手した後松岡はノンナたちの方に向き直り、深々と礼をする。

「ようこそベルドフ！ マツオカ！ 今日君らがいないと回らないからね！ 頼んだよ！」食前にビールを一杯頼んだジュコフスキーは少しテンションが高い。席に座ろうとする松岡の肩をジュコフスキーは引き寄せせる。

「ベルドフは2人も知っているとと思うが、マツオカは初めてだろう。紹介しよう。彼はマツオカ ヒロシだ。モソロフはロシアとの関係強化をやってくれたが、マツオカなしに中国との関係改善はなかっただろうな！ まあこいつは信用して構わんよ。私が保証

する」

「同志ジユコフスキー、紹介はこれくらいで。せつかくのここでの食事ですし、乾杯しましょうよ」

嫌がるそぶりは微塵も見せず、マツオカと紹介された男は同志ジユコフスキーの肩を叩き返して応じる。よつぽど近い関係なのだろう。だが私が知らないとなると、裏方寄りか在中の者か。

「それもそうだな。乾杯といこうか。君達はジユースを頼みなさい。今日は君達2人の分は私が払おう。遠慮なく食べなさい」

「いいの？ジューおじさん！ありがとう！」

「……それでは、ご馳走になります」

少々考えたが、ここは乗ることにした。別に貸しになるほどのことでもないし、それでこちらに強要されるようなこともない。そして私自身、十分な手持ちがない。

「私らはワインですな、というか乾杯の前に飲まないでくださいよ、同志ジユコフスキー」

同志ベルドフが苦笑する。

「全くですなあ、ハハハ。同志ジユコフスキーの飲みっぷりは昔から変わりませんな」

同志マツオカは余裕を持って笑う。下手したらかつての同僚辺りなのだろうか。年

も近そうだし。

「度数5のビールなんて酒に入らんわ。君らが決めてくれ。どれにするかね」

「まあ最初ですし魚中心ですから白でしょうな。マジノ系のもあるのですか……うーん、ですがここはテーレ・デ・シユッドウがいいのでは？これはサワークリームが合うみたいですね」

「いいだろう。それでいこう。君達は決まったかね？」

「私はグレープフルーツジュースお願い！」

「私はオレンジジュースをお願いします」

「よしわかった。早速頼もう」

机のボタンを同志ジユコフスキーの岩のように太い人差し指が押す。耳あたりのいい軽快な音楽が店員を連れてくる。店員はそれぞれの飲み物と、追加の大きめのサラダの注文を聞いて去っていった。すぐに飲み物が出され、ジユコフスキーのテイステイングののち、3人の大人のグラスの3割くらいのところまでワインが注がれる。ワインとやらは美味しいのだろうか。この歳だからよく分からない。

「よし、それではプラウダのさらなる栄光と繁栄のために、

ザ ナーシュ フストレーチュ トースト！

（我々の出会いを祝って、乾杯！）」

「トースト……」

前に掲げられた白い飲料の群れに、微かに心動かされた。良い予感なのか悪い予感なのかは分からない。ただ願うのはこの白きものがより遠くにあることだ。

「ところでジューおじさん。こちらの方々を含めて私達を呼んだのは何故？まさか食事だけに誘ったわけではないわよね？」

「勿論、しかも君ら2人が要となる話をするためさ」

そう言い、同志ジユコフスキーは皆にある提案をした。それは確かに同志力チューシャが、いや「戦車道」そのものが要となるものだった。酒が回った彼らが、同志力チューシャのロシア語を冷やかすのは、予想よりもかなり遅い時間になってからだった。

第5章 ② 大地へ

12月4日 岩手県陸前高田市郊外 第74回戦車道大会第2回戦会場

私達は観客席にいた。毎年の軟式大会は多くの観客がいるが、今回はちらほら見えるのみだ。こんな血みどろの試合を間近で見たい奴はそんなにいないということだろう。

「問題は……プラウダに勝てるのか?」

河嶋さんが片眼鏡を調整する。そう、その通りだ。敵は日本の中で断トツの面積と人口を持つ学園都市、いや地域。そこに挑むのは人口は20分の1以下の背後に有力都市もない弱小学園都市、戦車は寄せ集めの7輛、そう疑うのが自然だろう。

「西住ちゃん、どうよ」

会長さんが私に話を振ってきた。だが前の試合での話を聞くに、答えは一つしかない。

「大変厳しいと思います。でも最善は尽くします。次の戦いは少しの油断や迷いが命取りになります。こちらの命はこの先も考えると易々と失えるものではありません。皆さんも私から出る指示をよく聞いて躊躇せず動いてください」

そう、勝てる可能性はある。負けられない以上そう返すしかない。

返事は無い。白けたような雰囲気か、辺りを包む。

「え……あれっ?」

「でも、1年生とバレー部ってその指示に従ってやられたのよね。あの立場に選ばれたのが私たちなら、私たちが死んでたわ。あの塹壕の傍にいたのは、私たちだったかもしれない」

後ろで手を組みながら口を挟んだのはゴモヨさんだ。ももがーさんも同調するようここちらの目を見る。疑心か。これはあれだな。美味いもん食ったせいで余裕ができて、その余裕で変なことを考えてしまっているんだな。全く厄介な。

「な、何を言っているでありますか!西住殿の指揮があればこそこうしてサンダーズとアーツイオに勝利出来たであります!」

優花里さんが力を込めて反論を述べる。味方がいるだけでも有難い。

「そ、そうだ!ねえ、こつちにも戦車有るんだから、自衛隊の一点に集中したりして包囲を突破して逃げるっていう」

「ムリ」

沙織さんが言い終わる前に、優花里さんとエルヴィンさんによって希望は打ち砕かれる。当たり前だ。

「第3世代MBT相手なんてたとえ1輜でも無理だ」

「武部隊、自衛隊はムチャクチャ強いのであります」

「沙織さんは逃げることでばかり考えてらっしゃるのですね」

後ろの華さんも思わず苦笑いする。にらみ合っていた米ソの40年間を舐めない方がいい。その支援を受けた日本も。

61式1輜くらいならなんとかなるかもしれないが、74式1輜だと怪しくなってくるし、流石に100式はどうあがいても無理だ。

「案外もう西住殿は次に誰を犠牲にするか決めているかもしれないぜよ」

「その指標が何かは計りようがないが、能力、車輛、そしてその場の状況。それ次第ではある意味で死を命じられるやもしれん」

「ちよ……何を言い出すでありますか!」

普段は仲の良いカバさんチームと優花里の間にまで険悪な空気が流れる。まずいな。

「やめろ、こんな時に仲間割れなんて最悪だ。今は非常時なんだぞ! 旅先はいつもの2倍我慢しろって言うだろ! 他に誰か指揮できる奴がいるって言うのか! いないだろ!」

河嶋さんが何時もより冷静に擁護してくださる。この語気の強さは、この時は役立つといいなあ。

「そ、そうだ! 西住さんを生かしてこの蛮行を伝える、そう決めただろ!」

「誰も従わないとは言ってませんよ。ワケも分からず死にたく無いって言ってるんです

！せめてそう動く理由を教えてください！西住さんを生かすとしても、その為の餌として死ぬ、というのには納得出来ません！」

そう上手くはいかないか。私に出来るのは不安げな顔をしながら話に耳を傾けるのみだ。誰を犠牲にするか考えている、というのも巡り巡っては全くの嘘にはならない。ここは身を引いて落ち着きつつ、用事を済ませよう。

「会長、少し1人になって作戦を考えてきます」

「ん……ああ、余り気にしなくていいよ」

背を向けて去ろうとする肩に会長は手をかけてくださる。内容自体は気になることじゃない。だがこれで団結が崩れてしまうのだけは避けたい。

「西住殿、自分も行くであります」

優花里さんが後を追いかけてきた。必要ないが、拒絶するほどでもあるまい。

同日、第2回戦会場、黒森峰女学園陣地

此処には一時の平穏が訪れていた。2回戦の相手の継続高校は合意通り開始直後に降伏。もともと同盟関係にあったこともあり、決勝戦参加を条件に隊長の下平美香以下全員解放した。もう車輛の輸送準備は完了し、出発までも時間がある。隊員たちは休息を楽しんでいた。隊長の逸見エリカも同様だ。彼女は負傷者用のテントにいた。

「はい、お口開けて。隊長の好きなジャガイモとソーセージのスープですよ」

口は開かない。エリカは少し無理やり口にスープを流し込むが、それは喉に送られることなく口から溢れる。

「ダメですよ、しっかり食べないと。お身体も回復しません」

しかし反応はない。ただ焦点の合わない目を見せるのみだ。

「ほら、こんなにごぼして……」

布巾を取り出したエリカは口の周りを拭く。表情は優れない。この方の回復を何度神に祈ったことか。されどこの方の目に光が再び灯ることはない。

「エリカ隊長。あの、大洗の西住……副隊長が……」

テントの外から聞こえた見張りの声でエリカは口から布巾を外した。

隊員の一人は私の顔に驚きつつも、話がしたいと告げると身体検査した上で案内してくれた。優花里さんは3歩後ろで待機させている。

「これはこれは元SSS12部隊副隊長、黒森峰で辞めた戦車道をまた始められたそうで、今更何の御用で？」

テントの幕を開けたエリカさんは嫌味たっぷりに声を掛ける。まあその通りなんだが。

「エリカさん、お姉ちゃんの具合はどうでしょうか」

「良いワケないでしょう!」

テントの鉄柱に怒りをぶつけた。だろうな、としか答えられん。

「なんでアンタの方は平気なのよ。大人しそうに見えて腹じや何考えているのかわかったもんじやない。言っとくけどもう黒森峰じやないアンタとはもう会わせないからね。隊長をこんな目に遭わせたプラウダを私は絶対に許さない」

彼女と私の間に黒森峰 S S 歩兵部隊の歩哨が K a r 9 8 k のボルトを操作しながら入ってきた。その不穏な空気に優花里さんは思わず数歩下がったようだが、私からすれば慣れたもの。意識的に背を向けてその場を立ち去ろうとした。

「待ちなさい。次のプラウダ戦、どうするつもりなのよ。まさか大洗の雑魚装備で戦って勝てると思ってるの?」

「……姉になら相談したかったのですが、硬式戦の経験が少ない貴女に話しても……」
彼女の目は目尻が切れんとばかりに見開かれた。歩みを進め始めた私の肩は、その後にとっても強い力で掴まれた。

「西住みほ、私を怒らせないでちょうだい」

誰が怒らせた。単にあなたが怒っているだけだろう。昔から挑発にはとことん弱いよな。その短気、直した方がいいと思うぞ。言わないけど。

もう1本の腕の指先がテントの中に案内する。どうやら話をする気はあるようだ。

暫くしてテントから出た。エリカさんに一礼すると、さっさと背を向けて立ち去った。これで良い。

その晩、岩手の南から北へと戦車の乗る車輛は動き出した。その車内で、使用できる銃がトンプソンM1からモシンナガンM1891/30となる事が発表された。

翌朝、そこは雪国だった。

旭川で付け替えられたDD51に牽引された客車1輛、貨車7輛の編成は、石北の大地を警笛を鳴らしながら東へ駆け抜ける。周りは雪景色となった牧場とその奥に山地が連なっている。客車に寝台などない。大洗の予算では旧式の座席車を借りるのが精一杯だった。硬い椅子が深い眠りを阻害する。

はつと目を覚ました時、周りの者はまだ寝ていたり、話していたり、ただ外を眺めていたり、生徒会の者は大富豪をやっている。丁度会長さんが革命を起こして、河嶋さんの手札に終止符を打ったようだ。

身体にはまだ怠さが残っているが、ここで二度寝してもそれが増すのみだろう。静かだ。聞こえるのは牛の鳴き声の輪唱と少しの人の話し声、それと時たまするカードが叩

きつけられるものだけだ。何もないので外の景色を漫然と見ていくことにした。

話すことはないし、ここにも戦車道連盟の関係者がいる。ライフルの件やそもそものこの大会の様子から考えて、双方ともに連盟と繋がっている。私の不用意な一言が向こうに漏れるとも限らないのだ。

牛が何匹視界の中を通ったか数えるのも面倒になった頃、その徒然なる時は1つの発砲音で阻害された。

「ひっ！」

隣にいた優花里さんが竦みあがる。銃弾は右に広がる農場の1番奥にいた牛の胴を見事に撃ち抜いたらしく、横にバタンと倒れ、周りの牛が鳴き声をあげて散り散りになっていった。銃声の元はアークイさんチームだ。窓は少し開かれ、ねこにやーの持つモシン、ナガンが煙を昇らせる。

「おー、さすがねこにやー。キルデス80%は伊達じゃないなり」

「芋スナキャンプ野郎と罵られても全くブレない不動心！」

ももがーさんとびよたんさんが口々に褒める。ねこにやーさんは反応する事なく黙々と薬莢を排出する。ふむ、距離は540m。揺れる車輛の中から当てるとは、なかなかの技術だな。

「な、何をしていますか！牛は農家の大事な財産でありますよ！」

優花里さんは後ろを向き注意するが、ねこにヤーさんはただじつと外の次の目標に狙いを定め、他の2人は気怠げにこちらを向いた。

「うるさいなり、ウチら明日死ぬかもしれないんだから少しくらい羽目外してもいいなり」

「てゆうか、秋山さん副隊長でも何でもないので仕切りすぎつちや」

「あ、いえ、そんなつもりじゃ……」

優花里さんは押し黙るしかできなかつた。

「に、西住殿！ 幾ら何でも食べるわけでもないのに人の牛を撃つなんてあんまりであります！ 注意をなさってください！」

「これから見たこともない人を撃つのにですか？」

「え……」

「照準はあつているようですので、弾の無駄はしないように」

少し大きめの声でそう通告すると、力の抜けて背もたれに寄りかかつた彼女を見て再び外を向いた。先ほどの牛は最早視界の彼方である。その後銃声はなかつたが、何か不穏な空気は終わる心配が無かつた。

いや情報をくれたことは認めつつ、これ以上撃たないようには注意したと思うんだけどなあ。

列車は湧別川を南に見つつ、遠軽駅で折り返し、遠軽の貨物ターミナルに入線する。すでに時間は昼になっており、寒空の下で戦車を降ろす作業が終わり次第、連盟に指定された旅館「ヒマワリ」に向かった。

部屋は中部屋の和室2つだ。旅館での夕食が部屋に運ばれたが、私と優花里さんとの他の者の間には深い溝が横たわっていた。そして若干優花里さんとの距離も離れている気がした。プラウダ戦に向けてこの状況を改善させたいが、生憎私はこういう時、戦車で前進することで無理にでも付いて来させる方法しか出来ないし、それでは上手くないかなだろう。

そして皮肉にも夕飯が美味しい。熊笹ご飯とか初めて食べたが、その他も含め美味しい。これでは皆の心の余裕は増すばかりだ。その不安に呼応するように外には雪が舞い始めていた。

第5章 ③ 刺抜き

私と優花里さんは他の者たちより早く布団につき、明かりを消した。その中で2人はすぐに眠りに落ちる。あの車輛が悪い。暫くして襖の間から一筋の光が部屋に差し込んだ。若干覚醒したが、まだまだ眠くてそれが何か細かく見ようとする気力は湧かない。

「さて……と、コラーツ！起きろー！」

布団が剥がされる。周りの者の手は私たちの浴衣に手を伸ばす。

「ふえ？な、何でありますか？」

「て、敵襲？」

何事だ！寝ぼけた頭での考えが及ばぬ間に浴衣が剥がれると次に帯に触手が及ぶ。

「脱がせろー！」

「えつ、ちよつ、ちよつと……」

抵抗する間も無く下着2枚の姿にされる。叩き起こされてから30秒もなく行われた出来事に、理解と行動が追いつく訳がない。布団をひっくり返され壁際に転がる。

「コラーツ、西住！秋山！偉そーにすんな！お前達だけで戦ってんじゃねーんだぞー！」

「そうだそうだ！」

「ミリオタがなんぼのもんじや！」

「命懸けで戦っているのはウチらだ。それを無碍にしやがって！謝れ！」

枕や座布団が2人目掛けて宙を舞う。

「そ、そんな、誤解です！私達は……」

待て待て何を考えている。手を顔の前に翳しつつ声を掛けるが、たった1人の反論に耳を傾ける人はいない。しかしほんの一瞬だけ会長さんの顔が真顔に戻った気がした。それが正確かどうかは、これによって導かれる結果次第だ。

「踊れ！辛気臭い顔ばっかしゃがって、芸でもやってウチらを笑わせろ！あんこう踊りやれ！」

会長さんの顔は最早完全にノリに乗っている顔である。それをきっかけに辺りから4拍子の踊れコールが巻き起こる。ふむ、拒否は無理か。優花里さんがこちらを見つめてくるが、数の合わさった人の勢いはどうしようもない。

くあああんあん、あああんあんく

右手を掲げ尻っ放り腰をしている動作からこの踊りは始まる。それが左右頻繁に入れ替わるのだから動作的にはかなりきつい。

くあつたまのあつかりはあーいのあかしーもっやしてこっがしてゆーらゆーら
振り足を上げてその下で手を叩くというさらに激しいものになる。そのせいか声
が小さくなつてゆく。

「もつと元氣よく！」

「腹から声を出して歌え！」

次々と指示が飛び出る。目のピントが狂う。どこを見ているのか自分でも分からな
い。それだけ恥ずかしく忙しいのだ。そして何よりこの部屋を包む奇妙な盛り上がり
が、かつての男たちの幻影を映し出す。

「レイプ目キター！」

「効いてる効いてる！」

各所から笑い声が上がリ、写真を撮るものまでいる。会長さんも笑いながら何枚も干
し芋を口に頬張る。その盛り上がりはあんこう踊りフルコーラスが終わつても止む気
配は無かつた。

疲れた。恥ずかしいけど、それ以上に疲れた。下手な鍛錬よりキツイよこれ。前も
やったけど。犬相手よりはマシだけど。

「よーし、次はなんだ！」

「はいはい！ゆかりんがいつつもみぼりんと一緒にいるのは、別に偉そうにしたいわ

「けじゃなくてみぼりんと一緒にいたいからなんでーす！」

「あらあら」

「じゃあお前らチューしろ」

「えっ？」

「キスするんだよ」

「何が面白いのだろうか。男と女のキスは実に悍ましいものだったが、女同士ならそうはならないのか。そういうものでもないだろう。」

「キース！キース！」

「秋山ー、西住のこと好きなんだろお、やっちゃえー！」

「西住さんも受け入れろー！」

「だが会長さんが生んだ流れは皆の同調で変えられないものとなってしまっている。」

「優花里さん、仕方ありません。やりましょう」

「ええっ！」

「この場を壊さないうちに、早く」

それでも躊躇うそぶりを見せた。やむを得まい。この場を壊し、その切れ端が先鋭化する方が怖い。ある意味でまとまっているこの集団を破壊するのは危険だ。仕方がない。無理矢理に熱い相手の方を抱き寄せて、唇同士をぶつけた。互いの鼻息が当たり合う。

「ヒヤッハー！キスしたぞ！」

「お互い真っ赤じゃないか！」

私も真っ赤なんだろうな。流石に下着姿で女子とキスしたらそうもなるか。収容所の男とキスするよりは遥かにマシだしな。

荒れる息と共に相手を引き離したあと、どこからか油性ペンを持ち出した者らが2人を床に押さえつけ、それぞれの腹に『ダメ隊長』と『飼い犬』と書いた。そしてその姿を見ながら指差して笑い合う。飼い犬……の顔は真っ赤に染めあがっている。うん、まあ犬だな。

なされた姿は四つん這いではなく腹を見せ屈服した犬、だった。

その場の盛り上がりが少し治まってくると、身を起こして壁側に寄り顔を伏せて座り込む。それから目を逸らした会長さんの口が開かれた。

「さーて西住ちゃんもケツまくったことだし、明日のプラウダ戦は誰が指揮をとる？」
「誰って……」

「会長じゃないんですか？」

「ムリムリ、ただの生徒会に戦車戦の指揮なんて出来る訳ないし」

確かに会長さんには不可能だ。だがこのうねりを引き出したのが会長さんなら……

嘗て見た形になる。

「じゃあ、他に誰が……」

全軍突撃、神出鬼没、車長狙撃、案を出す者続々と現れるが、直ちに全て却下されてゆく。生死が掛かっているのだ。生半可な案を飲めるはずがない。遂には案を出す者はいなくなつた。話す者もいなくなつた。ただ無言で隣の顔を覗き合う。

「ちよ……ちよつとやり過ぎちやつたかな……」

肩に浴衣が掛けられた。隣の人と同時に。

「ごめんね、2人とも。私達ちよつとイライラしてて」

「気を悪くしないで……」

「やつぱり西住さんしかいないよ」

下手に出て謝罪の意を表そうとする者が話しかけてくる。なるほど、こういう道に持ち込むか。会長さんの顔を再び眺めると、ただ見つめ返してくる。

「いえ、とんでもないです。明日は一兵卒として皆さんの指示に従います」

「まあまあ、そう言わず機嫌直して……」

「しゃーないね。ウチらもこんだけのことやったんだし、謝るんならケジメだけはちゃんとつけようか」

会長さんが頭を掻きながらその場をまとめ、皆が私たちの前にずらりと並ぶ。よく見

ると結構な人数がこの騒動に関わっていたようだ。

「西住さん、秋山さん、ごめんなさい。どうか今までのことは水に流して、明日もどうか指揮を執ってください」

歪んだ布団の上で多くの者の最敬礼が成す様子に圧倒され、私にできたのはただ頷くことだけだった。

「終わったか」

皆がまだ直っていない中で、視線の先、皆の背後である襖の裏に人がいる。河嶋さんだ。「西住と秋山以外は話すことがある。全員隣に來い」

「面白そうなことから私たちを省かないでくれよ。海賊では裏切りは即斬首なんだよ、ここは海賊じゃないけどね」

お銀さんがその背後から顔を出し、左手の人差し指で組んだ腕の右肘をせわしなく叩く。

「まてかーしま。今回のことは私が主導したことだ。私の謝罪がこれだけで済むわけがない。ここに残るよ」

顔は前に向けたまま会長さんが話す。

「……分かりました。他の者は早くしろ！」

動かない他の者に痺れを切らした河嶋さんが入り口近くの壁を叩く。それに加えて

サメさんチームの面々が皆の背後から突入し、ラムさんに瓶でケツを引つ叩かれたりフリントさんの金切り声を耳元で聞かされたりして、会長さん以外は部屋を連れ出されていった。ムラカミさん強いな。女子とはいえ二人を担ぎ上げてったぞ。

部屋には私と優花里さん、会長さん、そして荒れた布団に散らばった枕や座布団が残される。会長は私達の方に座ったまま腕を使ってすり寄ってきた。

「……」

無言で会長さんを見定める。考えの7割ほどは纏まっているが、残りを詰められない程度にはまだ少し茫然としている。そのまま寄るかと思いきや、こちらにさつと背を向けた。

「……トイレ行って来るからその間に服着てくれない？私らが脱がして申し訳ないんだけど……」

優花里さんと互いに顔を見合わせる。下着に浴衣の袖も通さずただ羽織っている現状を向こうは十分に認識していなかったのか、思わず赤面していた。視線を逸らしあい、無言でいそいそと浴衣の帯を締めた。布団が乱雑になっているのが気に食わなかったが、戻す気力と時間はなかった。

ちやうど浴衣を着終わったころ、水の流れる音と共に手を拭きながら会長が戻ってくる。会長はハンカチをしまうと正面に正座した。その纏う重い雰囲気は2人の背筋を

伸ばさせる。

「……今回、西住ちゃんを副隊長から降ろそうと西住ちゃんを辱めることを主導した。今考えれば本当に馬鹿らしいことをしたと思っっている。秋山ちゃんも本当に申し訳ない」

会長さんが頭を床につけんばかりに深く下げる。顔の下で重ねているその手に触れた。

「顔を上げてください」

この結果となった以上、そしてあの時そのように発言した以上、私の予想は正しかった。

「むしろありがとうございます」

「えっ?」

「……なんだ、バレちゃったか」

会長さんは頭を上げ、後頭部を掻く。優花里さんはまだ状況が理解出来ないようだがその様子に気づかうことなく話を続ける。

「黒森峰でも昔同じようなことがありましたから」

「しかも二番煎じか……マイツタね……」

「えっ?えっ!えっ………」

さらに混乱が加速している。

「えつと……申し訳ないのですが、どういうことでありますか？私よく分かっているのではありませんが……」

優花里さんが会話の隙間から加わる。

「会長さんは大洗を纏めるためにこんな事をやったっていうこと」

「そーそー。あの状態のままプラウダと戦っても負けるだけだからさ」

つまり、西住殿を辱めた後、その後任となる指揮官が大洗にいないことを分からせ、皆が西住殿についていくようにする、ということだ。この人は仲間を纏めて戦う方向に導いたのみならず、その主導が私であると認めさせた。私には出来ない、彼女だから打てる手だ。

「でも秋山ちゃんは本当に巻き込んだんじゃったんだ。申し訳ない」

今度は優花里さんの方を向いて頭を床につける。

「い、いえ。大洗の優勝のために必要ならば喜んで受け入れるであります！」

会長さんはもう一度謝罪の言葉を述べると顔を戻した。二重窓の外の黒い幕に散らばる斑点を眺める。

「雪、強くなってきましたね」

風の音が暖房のついた部屋でも寒さを感じさせる。

「これでも明日、やるんだよね」

「やると思うでありますよ。『どんな環境でも戦いは起こりうる』。それが戦車道の試合のモットーの1つですから」

3人は黙って外を眺め続けた。敵は15輛、我々は7輛。しかもこの寒さは北の学園たるプラウダに有利だ。勝つことの厳しさが底から染み渡っていく。

「〜!!!」

静かになったことで外から河嶋さんの怒鳴り声が聞こえる。

「かーしま、やってるねえ。サメさんチームも付けたし、大丈夫でしょ」

会長さんは姿勢と顔を軽く崩し、後ろに反り腕で支える。

「かーしまもあそこまでやってくれるしき、どんな策でも出してよ。やってみせるからさ」

そう、私の指示を聞いて動いてくれる。それが分かるだけでもいい。あとは私の脳味噌が何とかすればいいのだ。

「分かりました。やるだけのことやりましたよ。ゼロじゃありませんから」

「よし、頼んだー!」

会長さんは両膝を叩くと、体を振って立ち上がる。

「かーしま止めてくる。ごめんね。じゃ」

そのまま襖を開けて部屋に戻っていった。

「西住殿、何か飲み物買ってきましようか？」

背中を見送った優花里さんが立ち上がりながら口元に手を寄せ、空想のコップを握る。

「ありがとう、優花里さん」

だが残念ながら下のフロント近くの売り場は営業を停止しており、2人は部屋の水をそれぞれコップに汲んだ。

「はあ〜」

揃ってそう言葉が漏れた。コップの水は2人の中に染み渡る。布団を正そうとしたが、気がつけば隣の怒鳴り声が止み、長針が短針を抜いていた。嵐は止みそうにない。

第5章 ④ 雪の膠着

バスで自陣の近くに着いた者たちは、皆足首までしっかりと埋まる雪の中に踏み出した。小さな町の中心部にある2階建ての白い壁の建物が大洗女子学園の陣地である。

周りは今年降り続いた雪がしっかりと層を重ね、近くの木の前には1メートル位の高さまで雪が付いている。今は雪がしんしんと降っているが、時折凄まじい吹雪が建物を襲う。

「ちよつと……何よこれ。寒いなんてレベルじゃない……」

「顔が……痛いです」

沙織さんと華さんが震える。彼女らはもちろん上下ヒートテックの上にはフリース、コートも着て厚手のスボンとセーターも着て、さらに毛糸のパンツも履いているのに、それをも突破する寒気が襲いかかる。息を吐いても口の中の時点から白くなっている気がする。

7時、遠軽町生田原八重、東側の摺鉢山から西側に広がる麓に笛の音がこだました。

「ただ今より準決勝第1試合、大洗女子学園対プラウダ高校の試合を開始します！」

審判の高らかな合図とは裏腹に彼女らの士気は上がらない。

「開始と言われても……どうにもならないよな、コレ」

それが総意だった。外は完全に吹雪いている。遙か先はおろか、小さな町の外れの木さえ見えない。そして何より、ただ寒い。

「これは、海ノ口城の戦いだ……」

「いや、桜田門外の変ぜよ……」

「第2次ポエニ戦争のアルプス越えだろ……」

「冬戦争のスオムツサルミの戦いだ……」

「それだ……といいがな」

カバさんチームが口々に言い合っているが、寒いせいか口調が暗い。全く、私たちの空気まで凍えちゃやどうにもならんぞ。

「優花里さん、気温は？」

フードを外し耳を気にせず建物内を歩き回る。優花里さんが建物の温度計に駆け寄った。水銀はここでも凍らないらしい。

「マイナス32度であります」

道央に近いこの町は1年の温度差が激しいが、そんなこの町でもこの気温は珍しいらしい。昨今の異常気象のせいだろうか。しかし不安の原因はそんなものではない。

「エンジンはかかりそうですか？」

「ダメです。セルが回らずオイルも凍っています。動きそうにないですね」

自動車部の面々がⅠⅤ号の上で答えた。だろうな。こんな環境で満足に動ける戦車なんて、ロシアかカナダかスウェーデンくらいでしかそもそも設計されないだろう。そしてロシア人はそんな事より量産性を重視する。

「焼きレンガで暖め続けてください」

建物唯一の暖炉にはまきとレンガがくべられ続ける。その外側にフードを被った人々が半円状に並ぶ。時々その遠近を巡って争いが起こっているようだが、交代するこゝとで決着したようだ。

「なんだあんたら、そんな寒いのか？」

「それにハイ以外の返事ができると思う？」

ちよつとその集団から外れていたサメさんチームが、沙織さんの後ろから声をかけた。かといって彼女らも防寒装備万全に見えるわけだが。

「そうか、じゃあこれやるよ」

お銀さんが手に持っていた紙コップを沙織さんに渡した。何事かと周囲の視線も億劫そうなれど彼女らに向けられる。どうやら中には液体が入っているようだ。一口飲んで口をコップから離し、代わりに手を寄せた。

「な……何よこれ！えっ？辛い！ほんつとに辛い！」

「そらそうだ。ハバネロクラブだし」

「え？何ですかそれは？」

「……激辛ラム酒……多分ノンアル」

激辛、か。ラム酒とはここの様子にはまた似合わないようなものを。

「多分って……」

「どっちにしても体の中から熱くなるから変わらないさ」

「いや、そういうことじゃなくて……みほりん、一応確かめた方が……」

何でこっちに振ってくるんだ。

「つーか向こうのプラウダとかいう奴らだってこの天気でタダで居られる訳がない。奴

らロシア人が多いらしいし、ウォッカでも呑んでんじゃないか？」

「かもしれないですね。まあ、飲みたかったら自己責任で」

「あのう、私、一口頂いてもよろしいでしょうか？」

今度は華さんがそれを要求した。確かにこの人なら何杯でもいけそう。仮に酒でも。

「あ、その人の人を貰いな」

「華あげるこれ……確かにあったまるけど口の中が……」

まあ話しづらくなるのが難点だが、作戦に文句付ける口が開いたりするよりかはマシだ。どんどん他の人にもあげるといい。

「……身体の中からポカポカします」

「だろお。他にいる奴いるかい？」

私はこれから脳みそをフル回転させねばならないので、この時ばかりは酒に頼る訳にはいかない。その可能性があるなら触れぬが吉だ。

「西住」

「河嶋隊長。この先の動きですか？」

「そうだ。こちらが動けないのは見ての通りだが、向こうが動いてくる可能性はあるのか？」

「流石にこの状態ではプラウダも動けないでしょう。人海戦術で何とか動かせるようにしたとしても、こちらを圧倒出来るほどの大軍ではないはず。数でこちらに勝る中、わざわざその優位を削ってはこないでしょう。こちらも天候と気温が回復するまで待ちましょう」

「いきなり膠着状態か……」

「ですが装備がモシンナガンになった以上、狙撃などにも警戒が必要ですし、遠距離からこの建物の破壊を狙う可能性もあります。とりあえず偵察隊を出しましょう」

暫くして計4人による2つの部隊が組織された。第1隊は優花里さんとエルヴィンさん、第2隊は園さんとお銀さんだ。

単純に隊長車かつ人数不足気味であるカメさん、車輛回復の主力たるレオポン、そして防衛用のスナイパーを含みこちらも人数不足気味のアリクイさんを除く各車輛から一人ずつ選抜した形だ。園さんが一度お銀さんと組むのを拒否しようとしたが、河嶋さんの指示もあり何とかのんでもらった。

第1隊は西の方を經由し北へ、第2隊は東の方を經由して北へ向かうことになった。優花里さんは出発前にヘルメットの中に布切れを詰められるだけ詰める。

「何やってんのよ。ぼろ切れなんて詰めて汚いわね。お銀さん、さっさと出発よ」
「分かった分かった」

「全く何でこんな人たちと行かなきゃいけないのよ……」

お銀さんはフードの上からヘルメットという一見不思議な格好で園さんに続き建物を後にした。流石にいつもの帽子は外したらしい。

「こちらも行けど、グデーリアン！」
「了解であります！」

その後にモシンナガンを装備した優花里さんとエルヴィンさんも建物から北に向かった。

くゆきーのしんぐんこーおりをふんでー　どーれがかわやらみちさえしれずーく

外の吹雪はさらに激しさを増している。歌の途中で息を吸おうとした時に喉が固まるような感覚を覚える。優花里はそこで歌うのを止め、胸元から小型の簡易温度計を取り出す。気温はマイナス37度、なんと先ほどよりさらに気温が低下したのだ。下手に立ち止まったりしたら、その場で血液が凍ってしまいそうだ。

「グデーリアン、離れるな！」

エルヴィンの声で優花里は距離ができてることに気づき、胸元に温度計を戻すと、足で雪を掻き分けながら近づいた。そのまま並んで歩み続けるが、周りの景色は至って単調、白一色だ。たまに視界に入る枝しかない木が無ければ、本当に道さえ知れないだろう。

「……しようがない、引き返そう、グデーリアン！一面真っ白で敵も何もない。逆にこのまま行くと迷ってしまうぞ」

その時、優花里は見た。絶対に味方ではない姿を。

「え、エルヴィン殿、あれっ!! T34とスキー兵、プラウダの攻撃部隊であります！」

彼女の指差した先には2輦の戦車とその周りに棒のように立つものの群れがあった。2人は素早く近場の稜線の裏に隠れて伏せる。優花里はさつと双眼鏡を構えた。

「まさかこの天候で……早く戻って報告を！」

立ち上がり背を向け引き返そうとする優花里の肩をエルヴィンが押し留める。

「待てグデーリアン、様子がおかしい」

遠目でだが確かにそれらには妙な違和感があった。2人はゆっくりと稜線の裏から出て、腰で雪を掻き分けて道を作りながら近づく。その違和感は近づいていく中で明らかになった。

もう彼らは動いていない。動く気配もない。戦車の履帯はほぼ雪で埋まり、砲身にもかなり雪が積もっている。周りの人だったものも、腰まで雪に埋まり頭の上にも積もっている様子から、ここに来たのはだいぶ前だとわかる。

「これは……」

「おそらく迂回か奇襲の部隊だろう。プラウダ兵ですらこの寒波には耐えられなかったんだな。よかったと言うべきか、気の毒と言うべきか……」

2人は無言のまま、出来るだけ彼らの目を見ないようにしつつモシンナガンの弾を遺体から少々拝借し、腰でできた道がかき消されないうちにその場を離れた。

願っていた音が聞こえる。

「動いた！西住さん、I V号の砲塔周りは溶けたようです」

I V号の砲塔はモーター音を立てながら反時計回りに回転を始める。だが一度緩んだからとこちらも気を緩める訳にはいかない。

「はい、再び凍らせないように暖め続けてください。それと他の車輛も引き続きお願いします」

「了解しました。次はヘツツアーとIII突の復旧を急ぎます」

「はいよ、焼きレンガ。ほんつとあつついからね」

フリントさんが焼きレンガを持ちながらIV号に近づき、車輛の上にいるホシノさん渡そうと手を伸ばす。

その時、紙にパチンコが当たるような音がし、レンガは地面に向けて放物線を描き、角の一つが砕かれた。それに続きフリントさんが銀髪を引き連れて、手をつくこともなくうつ伏せに倒れる。長身の頂点にあたる頭から真紅の霧が舞う。

受け取ろうとした、ホシノ。

物音を聞き振り返る、皆。

須臾、時が止まる。

初めて正気に戻ったのはやはり私だった。音と様子、そして変更された装備。導かれる答えはただ一つ。止まったままでは次が来る。

「スナイパー！」

その声でスイッチが入ったかのごとく皆は伏せる。地面にばら撒かれた干し芋に會長さんが目もくれないほど。

窓際に駆け寄って伏せ、胸元を探る。確かアレがあるはず。フリントさんはまだ息が有り、頭から流血しながら呻き声を出す。

「……………うっ……………」

「フリント！まだ生きてる！早く、早く手当てを！せめて壁側に寄せるぞ！」

「よせ、危ない！」

ムラカミさんが立ち、フリントさんの元に駆け寄る。河嶋さんの言葉も耳に入らない。

あつた。止めても無理だし、間に合わないだろう。淡々と取り出した手鏡を外に向け、光を探す。

銃声は冷酷だった。彼女の鍛え上げられた肉体は、小さな鉛玉を食い止めるには余りにも無力であった。

少し時間が経つと、ムラカミさんの左手はフリントさんの頭を水源とする血の池の中に浮かんでいた。もう呻き声はない。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

石引 雄香

プラウダ 銃殺 頭頂部の破壊に伴う失血死 銃撃後1〜2分ほど意識があつたと
思われる

村上 景子

プラウダ 銃殺 頭部左側部から右側部にかけて貫通による脳死 即死

「猫田さん、こちらへ」

「はい」

彼女らの命は、逆にこれ以上の損害を防ぎうる情報をくれた。これを価値あるものにするためには彼女が必要だ。仮に仮想の中だとしてもどう動くべきか理解している。それだけでもプラスに働く。

猫田さんが窓際を這つて近づいてきた。彼女をさらに近づけさせ、手鏡を通して外を見せる。

「この奥の建物の3階、右から2番目の窓です。2階から狙えますか？」

「ボクが？」

「動いている列車から見える牛よりは動きませんか？向こうもわざわざ動かないでしょうし」

「……やってみる。ボクはこれくらいしか取り柄がないから」

這って戻った猫田さんはモシナガンのボルトを操作し、動作を確認する。

「動きますか？」

「それは大丈夫そう……あの、西住さんってゲームの成績だからって馬鹿にしないんだね」

「キルレシオ4の立ち回りなんて私には到底無理ですから。ならば出来る人に任せます。それにゲームだけってことはありません。現実でも見せてくださったではないですか」

「おい、西住……何を」

「動かないでください！もう向こうはリロードを終えているはずですよ。2発連続で当たっていることから、向こうは相当の手練れでしょう。身体を出したら、次もまた死にます！」

その言葉に返事せず、ねこにゃーは身を低くして出発する。木製の階段を駆け上り、階段の手すりの終わりから素早く1番近い窓の窓枠に張り付く。ゲームをやる時の定番のルートだ、失敗したりはしない。

そして先ほど西住さんに指摘された建物の窓には、言われた通りそれらしきものが

あつた。こちらはスコープに目を寄せて、窓際に膝を立てる。捉えた。その敵を確認する。敵の銃は1階の方を向き、まだ新たな戸を産もうとしている。こちらに注意は向いていない。このまま銃の引き金を引けば、敵は死ぬだろう。

だがその敵が一瞬くしゃみをした。そして鼻を拭おうとする。それは画面の光の集まりではない。人であつた。ねこにヤーの頭の中を想像が駆け巡る。

どこの誰か知らないけど、私のこの指でこの人の人生が終わる。家族や親戚はさぞ悲しむんだろうな。兄弟はいるんだろうか。現実で脳漿が飛び散るところなんて見たくないな。

邪推に自分が囚われていると感じ、目を閉じてそれを振り払おうとする。何時ものゲームの感覚で淡々とヘッドショットをとればいい。向こうだつてこつちを殺す気だ。来ているのだから躊躇う必要はない。そう信じて目元に力を込めた。

眼を見開いた先に見えたのは棒ではない、点だ。敵が点を持っていた。仇となつた。「あつ……」

その点が自分のスコープの照準と合わさつた時、みほらのいた下の階には先程と同じ銃声が響いた。銃弾はスコープごと彼女の目と脳を撃ち抜き、辺りには脳漿が飛び散つた。

皮肉にも彼女が先ほど敵の姿を借りて想像した様を自分で体現したのである。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

猫田 鳴海

ブラウダ 銃殺 右目から頭部右後部にかけて貫通による脳死 即死

第5章 ⑤ 安楽へ

「華さん！直ぐにI V号に乗ってください！」

銃声は同じ。上からは倒れる音。しくじったか。

だがこの鉛玉を封じる手は尽きたわけではない。時を移さず命令を出す。華さんはI V号に飛び乗り、横のハッチから身を捻り込ませた。次に向こうが撃った弾は、短時間で狙いを定めることは出来なかったようで、ハッチから右にずれた所に当たった。流石にI V号なら銃弾で抜かれたりはしない。

「華さん！榴弾で！」

「はい！」

車中にはツチャヤさんが隠れていたはず。装填を手伝えれば、時間はそうかからないはずだ。

砲塔が右に回転を始めた。だが問題は目標を華さんに見せねばならない。2人の遺体の位置なども合わせれば、どの窓を経由して来たかは分かるだろうが、その何処からかは説明できない以上、光源を直接見なければわからない。近くの布を持って宙に投げた。布は弾に命中され地面に叩きつけられたあと、寂しく銃声が響く。

「みほさん、場所分かりました。ライフルの弾の速さは？」

「850!」

「距離は600……撃てます!」

「撃てツ!」

合図を向こうが確認していたかは分からない。ただ建物を揺らさんばかりの砲撃は、確実にその砲身によって行われた。そして放物線を描いた砲弾は、私が鏡ごしに指差していた建物を見事に捉えた。流石は華さん。腕前は超一流だ。この寒さで砲身が歪んでいたら、それを考慮する必要もあったというのに。

こちらが使ったのは榴弾。建物は階層ごと吹っ飛ばされている。仮に逃げようとしていても、巻き込まれていないはずがない。そしてこの寒空の下動けない人間を助ける暇人はそうはいまい。

キューポラから華さんが頭を出す。

「みほさん、もう1発撃ちますか？」

「いえ、十分です。榴弾であれだけ被害があれば大丈夫でしょう。直前にこちらに1発撃ってますし」

華さんは力が抜けたのかすると自動的に車内に戻った。周りのものにも今ここ

を生き延びれた、そのことに安堵の表情が浮かんでいる。

「これで……大丈夫……なの？」

「……恐らく。仮に2人以上いたとしても、榴弾に巻き込まれているでしょう。プラウダがいかに人を抱えてようと、狙撃ができる人材はそんなに数はいないと思いますし。

一度警戒は解きますが、再び銃撃等があったら先ほど同様すぐに物陰に隠れてください。

では先ほどの作業を再開します」

ゆつくりと立ち上がった人々によって、暖炉の中で加熱に加熱を重ねられたレンガが再び戦車の上に乗せられ始める。予想通りさらなる狙撃要員は確保できていないように、建物の中は暫くは安全そうだとの見解で一致していた。

建物にあつた黒い布を持ってゴモヨさんとパゾ美さんは2階の、河嶋先輩と小山さんは1階の遺体を回収する。だが遺体は視界から隠せたとしても、血痕だけは冬の池のように氷を張りそうになったまま残されている。

ラムさんがムラカミさんとプリントさんの遺体を抱き寄せながら号泣していた。カトラスさんも彼女の方を握り無表情を貫こうとしつつも、涙と口元の震えまでも抑えられるわけではなさそうだ。だが遺体はそれに何か返事をするわけじゃない。

彼女らを作業に連れ戻すことを名目に近づいていった河嶋さんも、結局は涙を流す3

人目となった。もともと彼女らは河嶋先輩に助けられたという話だったし、河嶋先輩にも彼女らに対して強い思いがあったのだろう。

私も彼女らの死によぎるものがないわけじゃない。あの『どん底』での一瞬の安らぎを忘れたわけじゃない。しかしそれが本当に一瞬であり、すぐに彼女らを作業に引き戻そうとした辺り、私の心はどんどん人から遠ざかっている。

包まれたものは入り口に並べられる。黒い、川だ。流れない、川だ。

「西住ちゃん」

皆の警戒がかなり緩んで来た頃、入り口の方を向いていた会長さんが声をかけてきた。暖炉の前で立ち上がり、服の埃を払う。

「秋山ちゃん達が帰ってきたよ」

「本当ですか」

優花里さんとエルヴィンさんは建物の前の雪の山から飛び降りて入ってくる。体調に大きな変化はなさそうだ。

「不肖秋山優花里、ただ今帰還致しました！」

優花里さんは力強く敬礼を決める。本当に問題なさそうだ。

「敵の様子は？」

「ここから北に1.5キロほどの所で歩兵と戦車を含む敵迂回部隊を発見しましたが、全員凍死しているのを確認致しました。他に動きはありません」

「それは直接確認しましたか？」

「勿論だ。あの様子を見るに今日は攻めよせてこないかと」

「分かりました。ありがとうございます」

不気味だが、向こうから今日攻めよせてくる可能性が一つ潰れただけでも大きい。

「戦車は何輛ありましたか？」

「1輛だけでした」

「1輛だけ……」

「それにしても、こちらは……」

優花里さんの手は黒い袋の並びに向けられる。

「狙撃を喰らいました。やはりモシンナガンに変えたのは、こうして抵抗させずに叩くためだったようです。が、華さんが榴弾でなんとかしてくださいました」

「……変じやないか？」

エルヴィンさんが話の中で首を傾げた。

「……と言いますと？」

「プラウダだって上限は15輛のはず。確かにこちらに対して数が多いのは事実だが、

それでも車輛や人員を見捨てたりするものか？ 数があるなら、一斉に投入して完全な数的優位の下で倒すのが筋だろう」

「……確かに向こうの攻撃がちまちましたものばかりであります。それどころか我々が発見した部隊は攻撃さえ出来ていません。こちらの精神を削るのには効果があるかもしれないませんが、それに見合う損失かという微妙でしょうな」

「……プラウダならスパイの排除などを名目にやりそうなので何とも言えませんね……」

「そうですか……」

「ですが今後の判断材料にはなりません。ありがとうございます」

表向きはそう言ってごまかしたが、それでも何か裏があるのか疑わざるにはいられない。杞憂だと願いつつ、恐怖を覚える予想もする必要があった。

「そど子殿とお銀殿はまだでありますか？」

「あつちはちよつと奥まで行っているのかもしれないな。そど子さん目が良いって話だったし」

その後、ただ時は進み続けた。話すこともなく皆車輛と暖炉の前を往復する。I V号以外の車輛の砲塔、エンジンも動き始める。優花里さん達が帰ってから暫くした後、入

り口の方から何か倒れる音がした。入り口には倒されているものはあるが、倒れるものは本来ない。

見ると、そこに居たのは白いコートを頭まで着てうつ伏せに倒れているものだった。ヘルメットがコートより上にある。

「お銀さん！」

「……西住……隊長、すまない。園さんが……」

「園さんがどうしたのですか！誰か、暖炉の前まで運ぶのを手伝ってください！」

仲間の危機の前に思わず叫ぶ。生きている限り価値はある。

「親分！大丈夫すか！」

「お銀！」

生き残った他の2人もすぐさま駆け寄ってくる。カトラスさんは柄になく表情に焦りをさらけ出している。暖炉の前に寝かせたが、唇は紫に変わり、それ以外は蒼白。

「乾いている服をたくさん願います！あとはすぐに焼きレンガを！それと桶か何かに雪をお願いします！」

「な、何する気だい？」

「一部は服の中に仕込んで、残りはぬるま湯を作ります！凍傷を引き起こしている可能性もありますから！少し熱めのお風呂くらいのを！」

服は濡れているもののうち無理なく脱がせられる部分は取り、他は残す。こんなに寒い中とはいえ無理に剥がして怪我させては感染症になる可能性もある。だがすでに事態は相当悪いも思われる。特に足が。

「園さんは……死んだ」

「そう……ですか」

言葉は絶え絶えだ。まあ、片方がこうなっていてまだ戻らないもう片方がこれより状態が良いとは考えづらかったし、重大な驚きではなかった。

「急に立ち止まって頭を抱えたから……何事か……つて思つて背負つて連れてこうとしてたら……急に……背中の方から……パキツて……何かが割れる音がして……喉から漏れ出るような呻き声が……」

「……そしたら死んでいた、と」

頭蓋骨損傷あたりか……死体がないから断定はできないが。

「……そうらしい。人つて……ああやって死ぬんだな……私は……ああはなりたくない」

何故か彼女の顔には笑みが見える。

「とりあえず乾いている服をかけとくぞー！」

「ジッパで開けるものをどんどんお願ひします！2枚か3枚入れたところで、焼く時

間が短めのレンガを入れます！」

「服は溶けないかい？」

「それは大丈夫なようにします。あとは乾いた布で包んだものを4つほど、末端を温めます！」

「……………に、西住隊長……………」

背後にて彼女の靴を脱がせていたらしいラムさんが体の芯が震えるような声を届けしてきた。彼女の手にある靴には側面に大きく傷が付いており、傷からラムさんの服を見せる。

「ケガ……………」

「帰りにな……………まだ園さんが死んでいると知らなくて……………背負って歩いていた時に……………な、雪の下に埋まっていたらしい木の枝を……………思いつきり踏んでしまつてな……………底は抜けないと思つていたが……………まさか側面がガリツと削れちまうとはね……………」

「……………」

まずい。彼女の足は靴下同様赤く染まって膨れ上がっていた。おまけに傷のある一部は少し黒ずんでもきている。明らかに凍傷だ。医学の知識は私にはないが、これくらいは予想がつく。

「……………さつきまでは……………疼くような感じがしていたんだが……………もう……………痛いだけ……………」

……」

それもかなりの重症だと思われるが……果たしてぬるま湯につけて効くものか……

「に、西住さん！親分は大丈夫なんですか！」

「……麻子さん、会長さん、ちよつとよろしいですか？」

人の力を借りよう。

「どうした？こつちの作業中断していいのかい？」

「……お銀さんの症状、私だけは判断がつきません。手伝いをお願いします」

「……分かった」

「まあ、私に分かるかは分からないけどな。医者じゃないし」

「……」

そうだ。これもある意味逃げだ。彼女らとの合同の判断、という名目で最悪のケースの責任を分け合おうとする手段に過ぎない。麻子さんと会長さんはラムさんが抱えていた左足の外側の傷をじつと眺めていた。時々小言で話しているのは、こちらには聞かえない。

「西住殿！ぬるま湯はこのくらいでいいでありますか？」

優花里さんが桶らしきものに湯気の立つお湯を張って持ってきた。さわるとまだ夏の水風呂もどきくらいでしかない。ここまで寒い環境に居続けると、温度感覚も狂うも

のなのかもしれない。

「まだです。もう一個焼きレンガを投入してください！あとはこちらにもつてくるときも一つ持つてくるように！この天気じゃすぐに冷めます！」

「了解です！」

すぐに立ち去った優花里さんに気を払う余裕はない。お銀さんの顔を覗き込む。息も浅い。

「……西住さん……」

「はい」

「ムラカミと……フリントは……」

「……あちらに」

嘘をつく必要は感じられなかった。黒い袋が3つ。そのうち2つだと指でさつと示す。

「……そうか。だよなあ、こんな寒空の下に偵察か出撃以外で外出する奴はいないよなあ……」

「ライフルで狙撃されました。私の警戒と管理不足です。お仲間を……申し訳ありません」

「……管理してたら、止められたのかい？」

「……」

「私には……そうは見えないけどね……装備も変わってたし……こちらには……手も足も出ない話さ……こんなことは言いたくないし……実際に手足が伸びるわけじゃない……がね」

心なしか顔が赤くなっているように見える。

優花里さんやラムさん、カトラスさんらにより作業が進められる中、会長さんと麻子さんが私を指で外に出るように示した。ついでに河嶋隊長も呼んでいる。私の予想はほぼ当たっていたらしい。

外で麻子さんは深く一つ呼吸してから口を開いた。

「……あれは……どうにもならない可能性が高いだろう。少なくともここでは」

「……私もそう思う。傷が一部壊死しているよ、あれは」

「え、壊死……」

「……そうですか」

色がおかしいかったからそうもなるか。

「もし滅菌された場所や治療道具があれば、切除したりしてなんとかなるかも知れないが、ここにはどちらも無いな。秋山さんのかばんの中身を使ってもいいが、包帯はほぼ

使い切ってしまったっているようだ。傷を十分に塞げない。仮にあっても凍傷の傷相手に足りるかは分らんが。

傷のあたりは下手に温めて血流を良くしたりすれば、体力の消耗も考えれば破傷風クラスでも命に関わるぞ」

「外に出ている間はあの寒さだったからまだ大丈夫だったのかもしれないけど、ここは少しは暖かいからねえ。あの進行度じゃあ細菌やウイルスに感染するのは時間の問題だ、と思うよ。温めたらなおさら」

「そして現状の彼女では感染したら最後、助かるとは思えないですね」

「に、西住。何とかならないのか……人数が少ない私たちからしたら、一人でも減るのは厳しいだろう？」

「……そうなると案は3つ。

一つは彼女だけプラウダに降伏させる。

もう一つはそれでも何とかアルコールで殺菌したりして時間を稼ぐ。

最後は……」

「……で、楽にする、か」

「はい、そうなります。この戦いはこの天候だと長期化する可能性があります。このまま彼女を苦しませ続けるよりは……」

「……な、何を言ってる、西住」

「それにこのまま病気にかかられると、それがチーム内に広がる恐れもあります。一人でも厳しいのです。それ以上各車輛の人数が減る、少なくとも戦車に乗れなくなると……厳しくなります」

「まあ、先日の西住ちゃんの話聞く限り一番最初はナシ。生徒会長としては最後の手は取らせたくないけどね……教育的に」

「今更それを言いますか？」

「……まあ、味方に直接手を下すならね」

「で、2番目が可能か……という話か……」

「……ここでどうこうなる話ではないと思うが、それでも4人で頭を付き合わせなくてはならない。だが全員が一斉に頭を振り上げる時が来た。天をも突かんとする断末魔が同時に彼らの耳を訪れたのである。

「あああああああ！がああああああ！」

「お、親分……」

「い……いッ！」

「が、我慢して……お銀」

「そ……から……足を……足を……足を……足を……頼む……」

ケフツ

「し、しかし温めないことには……」

「がっ……」

壁の向こう、入り口を超えて響くお銀さんの絶叫であった。

「……2番目……」

「……厳しそうだな」

「うん……この様子だと……ね」

「……おい、西住」

3人が一定の方向性で一致を見出そうとしていた時、河嶋さんが3人の間に割り込むように入った。そして私と至近で目を合わせ、両肩を掴んだ。

「西住、頼む！殺すのは……殺すのだけはやめてくれ！あいつは……あいつがないと……船の底は再び血と暴力の連鎖が続く場になってしまう！学園に……学園艦に、そんな場所を残したく……ない！」

絶対に生かして帰せとは言わない！だが助かるかもしれないのに殺す、それだけはやめてくれえ！」

「……どういふことですか？」

会長さんの方へ視線を逸らすと、会長さんは頭を掻きながら気怠そうに話した。

「いやー実はね、数年前まであの船の中って今以上に治安悪かったのさ。西住ちゃんも『どん底』行つたんだろ？そんなことをするなんて考え付かない程度にはね。」

外の人が下手に入ったら帰ってこれないのは当たり前。ひいては船の中でも担当部署や居住地域ごとに縄張りをはって、僅かな独自収入を巡って抗争続き。生徒会からの命令どころか、場合によつちや同じ船舶科の指示さえ聞きやしない。そんなとこだったのさ。

そこをせめて学園艦の中だけでも安定させたい。人の血を流させたくない、つて調停に入つたのがかーしまだったのさ。お陰で生徒会での仕事は私や小山とかに回されてばっかりだったけどね。

結果的に彼女らを戦車道に取り込んだのはかーしまなのさ。だから特別な思い入れがあるんだよ」

「前の友は抗争の中で死んでいった……この大洗で、少なくとも内部で、二度とそんなこと……させたくないんだ！何とかならないのかー！」

「……本人に事情を伝えましょう。それでも助かることを望むなら、最善を尽くします」
「……かーしま、気持ちは分かるがそれが筋だ」

「は……」

会長さんに肩を掴まれた河嶋さんはやつと私の肩から手を外した。

一時的に人払いをして、小さな声で事情は伝えた。その返事はあまりに単純で、的確だった。

「……そうか……やってくれ、西住さん」

「……おい、お銀！お前、死ぬ気なのか！」

「桃さん……自分の身体って……本当に自分で分かるものなんですわ……恐らく……ここで生かしてもらっても……先は……」

僅かに動く右手を胸の上へ移した。それでも本当に一苦労なようだ。

「お銀！生きるって言うてくれ！ムラカミもプリントに加えて……お前も目の前で喪うなんて……」

土煙の残る建物の床の上に、河嶋隊長の額。

「……ははっ……やっぱ桃さんは……私らみたいな人間に……優しいや……優しすぎる……」

一度顔を背けて咳をした。それでさえ彼女の力を奪っているのが、苦悶の表情から察された。

「生きたいと……思っても……もう……寒気に当てられた体が……言うことを……きかないんだ……桃さん……今まで……沢山の……我儘を……聞いてくれて……ありがとう

う……貴女は……そのまま……いて欲しい……」

彼女の片手にしがみつくと人から、声とも分からぬ咽び泣きが発せられる。

「……西住ちゃん……」

「……足の傷は既に感染症にかかりやすくなっています。少なくとも今夜外に出ることは出来ません。そしてその凍傷の治療はここでは不可能です。他の皆のためにも、その決定をしてください。感謝します」

「身体って……あつたまるの……早いんだな……あつたまつたら……きつと……痛みが……やって……くる……痛みが……想像もつかない痛みが……怖い……怖い……だから……その前に……」

「……分かりました。その意思を尊重しましょう。私が執行します。会長さん、河嶋隊長、よろしいですか？」

「……許可するよ。生徒を無為に苦しませるよりは……ね」

「……」

会長さんの吐き出し尽くすような返事の一方、河嶋隊長は未だ躊躇いを隠さない。麻子さんの方向に向くと、面倒そうな顔をして一声付け加えた。

「……彼女を守る術は他にないぞ」

「……そうか。お銀……」

「……大丈夫……」

何とか首を回し地面に近い顔に寄せる様は、人から見たら痛々しいったらありやしない。

「……西住……」

「はい」

「お銀を……頼む……」

「ありがとうございます。あ、皆さんに伝えますか？」

「……いや、やる前に話が下手に広がっては面倒だ。ラムちゃんとカトラスちゃんだけ呼ぼう。流石に伝えないのは可愛そうだ」

「お任せします」

「……には麻子さん含めて3人だけが残った。

「……ははは……あいつらにまた会ったら……生きたくなっちゃまう……とは思わない……のかい？」

「痛みは人間の苦痛の根源。それから逃れようとすることは、何があっても揺らぎませんよ」

「……そうか……そうだ……ひとつ……いいかい？」

「はい？」

「私の服の……ポケットの……中に……パイプが……」

指先には脱がれた服の山。

「……失礼します」

脱ぎ捨てられたまま幾層にもなった服を掻き分け、お目当てと思わしき感触のある服に辿り着く。そこには透明な袋に入ったパイプが、少し歪んだ形で入っていた。

「……歪んでますね」

「……そうだろうなあ……真ん中の辺りを……持つて……口元へ……」

「はい」

袋の周りは溶けたパイプが張り付きかけていたが、それを注意深く外してゆつくり口元へ寄せると、口をかすかに開いてそれを受け止めた。

「ふう……」

「船舶科の帽子はいかがします?」

「……それはいいかな」

ゆつくり、小さく左右に首が振れた。

「親分!」

「ど、どうということなの!」

生き残っている2人が必死の形相で詰め寄る。

「……そのままさ……このままじゃ……みんなに……迷惑かけるだけ……」

「じ、冗談……だよな？」

「冗談で……こんなこと……言えるか？」

私が無言で自身の拳銃に弾が込められているか確認している様をちらりと見て、2人とも口を閉じた。

「……なあに……向こうには……その2人がいるんだ……怖くは……ない……」

そう言いつつも手先が震えるのはこの寒さのせい、ということにした。

「何か他に言い残しておきたいことは？」

「……勝て……プラウダにも……黒森峰にも……大洗女子学園は……残すんだ……絶対に……船底を……守るために……ラム……カトラス……お前らに……会えたことを……忘れはしない……私の元にくるの……暫くの……楽しみに……させてくれよ……」

この身体じゃ……暫く……酒は……必要なさそうだ……ま……向こうで……楽しめるかは……分からないけどね……

西住さん……これでいい」

私は側にあつた、冷たくなりつつある桶の水で手を濯ぎ、素早くハンカチで拭つた。そのまま手に取つた銃を両手で構え、彼女の頭へ向ける。肩から腕、そして照星から先は確実に照準を定めていた。

「……………ははっ……………こんなちっぽけな……………もので……………本当に……………死んでしまうとはね……………」

彼女と目が合った。いや、正面から私が構えているのだから、合うのは普通だ。だがその時、手から力を抜こうとする外圧が、背中全体を駆け巡った。思わず銃口を下げる。違う。彼女は受け入れている。そして私に委ねている。あの時とは違う。違うんだ。

「……………西住ちゃん？なんなら」

「いえ、私がやります」

この苦を生涯の中で味わうのは、私だけでいい。

「お銀さん、目を閉じて頂けますか？」

「……………お安い……………御用さ」

よし、黒い焦点は消えた。これで撃てる。

一呼吸置いてから両手で彼女の正面、脳味噌を確実に1発で貫けるように構えた。

「……………結局……………役立てなかったなあ……………」

最期の言葉は聞かなかったことにした。

この銃にはサイレンサーなんて高性能なものは付いてない。すぐに周りの者に結果は知れ渡った。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

園 みどり子

プラウダ 凍死 頭蓋骨破損による脳損傷

栗下 良華

プラウダ 銃殺 頭部前方から後方への貫通による脳死 即死

こちらに来る者の大半は目の前の光景に気づくや否やすぐに目を逸らしてしまう。話し掛けてくるものはない。銃を足元にそっと置き、両手を合わせる。ただ感謝を込めて。第三者を介在させる必要もない。

「……彼女の意志は尊重されました。先程のお二方と同様、包んで並べてあげましょう。同時にラムさん、カトラスさんを他車輛へ振り分けます。人数的に運用不可能なマークⅣは放棄します」

残ったのは操縦手と砲手か……専門職すぎて車輛を放棄させると使いづらいな……仕方がない。

「ラムさんはアリクイさんチームの通信手、装填手を。カトラスさんはカモさんチームの47ミリの砲手と通信手をお願いします。流星に弾は使えないので、明日以降実戦で

のカンの把握をお願いします。メインは75ミリの方で」

おかつぱの2人を見やったが、どうやら2人をターゲットにした話だと気付いてないらしい。

「金春さん、後藤さん、よろしいですか?」

「……は、はいっ!」

よし、言質取った。船底の人たちと組みたくないなんて言わせる気は無い。誰も何も言わない。会長さんから決定を受け入れた人たちは事情を理解してくださっているからだが、他の人も同様ののだろうか。

お銀さんの遺体は私と会長さん、河嶋さんの3人で黒い布に包み、ムラカミさんの脇に加えられた。

夜を迎えた。夜襲への警戒も兼ねて、交代で休息をとることにした。建物の中には雪がしんしんと降る音と、暖炉の上のやかんが煙を蒸す音、そしてその暖炉の火が跳ねる音のみがこだます。やかんの注ぎ口から直に煙が登っているように見える。

起きているものは暖炉の周りに群がる。短期的なスパンで起床と就寝を、座りながらにして繰り返している。外はもう吹雪こうとはしていなかった。

明日、緩む。

第5章 ⑥ 襲来

12月7日、ブラウダ学園地域遠軽部生田原分部水穂　ブラウダ高校陣地

昨日とはうって変わった快晴の空に、鋭く靴が差し込もうとして押し返される。

「よし！よく凍っているわ。1日無駄にしたけど、これで戦車は十分に機動出来るわね」
同志カチューシャは凍った地面を何度も蹴る。やつのことで氷は割れ、鈍い音に変わる。そのまま踏み潰された氷はパリパリとヒビを辺りに走らせた。

確かに夜は冷えた。お陰で氷は固く、履帯で踏み固めながら走る程度は可能だ。

「はい」

「ノンナ、クララとニーナの部隊は？」

「無事昨日朝向こうを出港しています」

「そう。今我が校に動ける戦車は何輛あるかしら？」

「はい。呼び寄せた分を含めると、331輛中現在240輛が稼働可能です」

「全部ここに集めなさい。1輛残らず」

「は？」

予想外の指示に思わず変な返事が漏れ出る。

「大洗なんて黒森峰の前座にすぎない。一瞬でカタをつけるわ。その為にも圧倒的な数をそろえなさい。我が地域の力を見せつけるためにね」

「しかし、準決勝は15輛までもいうルールですし、少し離れた場所に予備として待機させている車輛もあります。それらを試合開始までに呼び寄せて稼働させられるか」

「ノンナ！」

同志カチューシャは私なんかの言い分を叫んで無理やり止める。

「忘れたの？戦車道は強豪校の都合自体がルール！そして圧倒的、徹底的な殲滅戦こそがこのカチューシャの戦い方なのよ。すぐに乗員をかき集めて出発させなさい！練度や身分の信用性は問わないわ！」

「し、承知しました」

そう指示されたのならば致し方ない。現地に来ていたブラウダの高校生のほぼ全てを、脅し気味にかき集めさせた戦車の中に押し込むことになった。中には戦車の中に入ったこともない人間さえいたが、気にしないでおく。

そう、次に向けてこちらが本気で黒森峰を潰す気であることを示すまたとない機会だ。

試合開始のホイッスルの直前に到着した戦車のエンジンが温まるのを確認してから、

一面に広がる大平原の中、彼女率いるプラウダ高校戦車道部隊240輛は悠々と南進を開始した。

「ノンナ、話についてるわね?」

「はい。あのクソ野郎さえ通さなければ問題ないようでした。条件こそ出されましたが、連盟はこの件には介入しません。それにあちらも『時』に向けて動き出す模様です」
 「でしようね。連盟だつて国の意向には逆らえないでしょうし、この運営が逼迫してるのも誰より知ってるしね。だとしたら今ならギリギリこちらに乗るはずよ」

「流石は同志カチューシャ。しかし……」

一瞬言い淀んだ私に向けられた視線を感じ、次の言葉を紡ぎ出す。

「あの国の意向に乗つかるのが納得いきませんがね」

「ノンナ、学園地域の利のためよ」

「分かっています。私なんかの些細な感情ですよ」

♪ Blossoming beautifully apple trees
 Adense fog over the river

IS2から上半身を出した私は、黒い長髪の間隙間を流れる大いなる風を感じながら、『同志カチューシャ』の冒頭を奏で始めた。

♪ Young K a r y u s h a g o b e y o n d t h e g r o u n d
 w h i c h i s f r u i t e d a n d m a j e s t i c
 ♪ Young K a r y u s h a g o b e y o n d t h e g r o u n d
 a s a l e a d e r o f t h e c o m m o n s t u d e n t s
 それにT34／85に乗る同志カチューシャが丸いキューポラを真ん中から開き続
 く。堂々と、正面から突き当たる風と巻き上げられた雪などで、我らの声さえ阻めない。

♪ The grandeur of Mt. I w a k i
 The vast extent of sea in Tsugaru
 ♪ Young K a r y u s h a f a c t p o w e r f u l e n e m i e s
 a s f a r a s s h e f i s s t i l l t h e r e
 ♪ Young K a r y u s h a f a c t p o w e r f u l e n e m i e s
 l i k e a f o r t o f e q u a l i t y a n d f r e e
 ♪ Thousands of motivated workers
 The young people who have great hopes
 ♪ Young K a r y u s h a s u c c e e d s n o b l e s p i r i t
 to which she succeeds noble spirit
 ♪ Young K a r y u s h a s u c c e e d s n o b l e s p i r i t
 to which she succeeds noble spirit

May Pravda last forever

歌が進むに連れて車長が次々と歌に加わり、最後の繰り返しが終わる頃には240人の雪上大合唱祭と化していた。

「大軍じゃ分かりません！数えなさい。何輛ですかッ！」

無線機の前で語気を強める様に、建物内に緊張が走る。この緊張は程よいを通り過ぎているぞクソツタレが。

「申し訳ありません。雪煙で全体がよく見えませんが、200輛から300輛であります！」

ここから少し西にある高台から優花里さんが報告してくる。その声も無線越しであることを考慮しても余りに震えており、途切れ途切れだ。嘘をつくとも思えない。

そのうえ外の天気は快晴。雪煙で見えない部分があったとしても概算から大きく外れるとも思えない。今日動く、とは分かっていたが、この数は予想をはるかに上回っている。

「西住ちゃん、どうする!!」

「みほりん！」

「西住さん！」

視線を下に向け、頭の中で必死に駒を動かす。この大軍と戦わない……という道はない。そしてここに立て籠もるのではない。ここを要塞とするには立地も悪く、時間もない。だとすると手早く要塞となる地に移動するほかなし。

考えをまとめると、無線機を置いていた机に地図を広げる。

「ここはすぐに包囲されるので放棄しましょう。地形的に有利な背後の高台に移動して迎え撃ちます。これだけの戦力差なら相手も小細工はしてこないと思います」

「え……相手がルール無視してるの？」

「……足して割って250。これでプラウダの全力じゃないんだよなあ……」

「……少なくとも見積もって200輛対6輛……少しくらい地形が有利でもどうにもならないよな……」

理解不足な者も、その裏をも理解している者も緊張の面持ちの中で、河嶋隊長が口にする。小山さんの顔も恐怖か怒りかその他の感情が混ざり合うものとなる。

「ジャツジ！抗議します。準決勝は15輛とルールに記されています。これは明らかに反則です。直ちに試合を中断してプラウダに警告してください！」

いつもおっとりした感じの小山さんが手にあるルールブックを叩き、口から堰を切ったように言葉を溢れさせる。しかし審判は小山さんから目線を逸らし、微動だにしない。

向こうについた、か。こちらは見捨てられたかな？そりやそうだ。プラウダと大洗じやどつちの話に乗ったほうが得かは一目瞭然。

「やだもー。何なのよこの人達！無茶苦茶じゃない。一体どうなってるの！」
簡単だ。強いやつのは尻馬に乗る。弱きものの摂理だ。

しかしこのムードじやいかな。どうにかして場を上昇傾向にしないと。確証はないが言ってしまうか。

「み、皆さん、落ち着いて元気出してください。まだ私に奥の手があります！やられると決まった訳じやありません！」

「そ、そうか、西住！まだ望みはあるんだな！」

「とにかく高台に移動します。エンジンをかけてください！」

私の一単語を信頼してくれたのか、陽気味な顔を連れて皆は自分の車輛に向かう。無線機を通じて、優花里さんとエルヴィンさんにも急いで戻る様に指示した。

さて、こういう時は悪いパターンも想定しなくてはならない。それでトントン……いやそれはきついか、でもそれくらいにはしておきたいなあ。

エンジンのかかった車輛たちは建物を出て1列になつて高台に向かう。

「西住ちゃん」

最後尾から2番目になるI V号のキューポラから身を出すと、会長さんが私の左手と

肩を握りながら声をかけてきた。

「本当は、奥の手なんてないんだろ。だってウチは……」

いきなりなにを言ってくるんだ。学園都市の主人がそんな弱気でいいのか？

「会長さん……この近くの紋別学園都市はプラウダの同盟校。それどころか東北北海道の学園都市の殆どがプラウダの同盟校です。その地縁もありますので……」

ただ……」

エンジン始動の報告をしようとしていた優花里さんが横のハッチから不安げな顔で見つめてくる。

「私が今まで一度でも会長に嘘をついた事がありますか？」

嘘だ。私はこれまでは勿論、今も重大で、重要な秘密をひた隠しにしている。しかしそんな私の言葉でも何か伝わるものがあつたのか、傍の優花里さんは詰まった嗚咽を漏らす。会長さんも目元を手袋で拭う。

「ははは……まったく……みんな我慢しているつてのに、つまらない事聞いちやつて……生徒会長失格だな……」

優花里さんに少し待つよう伝えた後、正面を向き直る。

「よっしゃ、任せた！頼むぜ、参謀！」

その直後、背中が力強く叩かれた。そのまま彼女はⅠⅤ号から飛び降り、河嶋さんの

背中を経由して自分達のヘッツアーに乗り込んでいった。

何だったのか、今は。

一瞬あつげにとられたが、気にする暇はない。今この時も刻一刻とプラウダの大軍は我らを食らいつくさんと向かってきている。一息吐いて移動を開始させた。それに殿としてヘッツアーが続く。

建物の入り口には3つの黒い仲間の遺体を取り残されていた。それらが帰りを待っているのか、向こうで待っているのか、それは誰にもわからなかった。

その間にもプラウダ戦車道部隊は南進を続けていた。シベリアの雪上を移動するトナカイの群れの如く。

「ノンナー！」

「はい」

並んで走行するT34／85の車長である同志が声を掛けてきた。

「やはりあそこの高台に登っているわね」

「ええ。西住流、お前は間違っていない。我々が15輦であれば、な」

一度視線を彼女から山裾へ向ける。

「こういう時は相手に見つかったら終わりなのよね。ま、でもそう動く他ないんでしょ

うけど。で、前衛は彼奴らにしてあるわよね？」

「勿論です。後ろに下がろうとしたら前を撃って良いと精銳には伝達済みです」

「そう。あ、そうだ。ノンナ、一度列を離れて静止射撃していいわ。あそこに榴弾一発行けるかしら？」

同志の指先は、双眼鏡がなければゴマ粒よりも小さく見える、大洗のちんまりした戦車隊に向けられていた。

「あそこですか……撃つてもいいですけど、距離3000はありますから、ほぼ当たりませんよ。そもそもIS2は装填弾薬28発しかありませんし」

「6輻を潰すのに、28発も必要なの？ノンナ。」

それにこの数よ。当たらなくてもいいわ、脅しくらいにはなるでしょう。プラウダに堂々と対抗することの愚かさを奴らに思い知らせてやりなさい」

「……分かりました」

そう言われてはそう動くしかないし、確かに彼女の言には二理も三理もある。

IS2は群れから右に外れる。ある程度進んだところで静止し、照準器に氷の如く冷酷な目を当てる。脳の中で激しい数字の変換が行われる。この砲身の歪みを考慮すれば、狙いは定まったはずだ。

それが終わった時、私の指はトリガーを引いていた。十秒ほど宙を駆け抜けた榴弾は

大洗の戦車隊を確実に狙っていた。

第5章 ⑦ 大洗の民

先頭からIII突、Blbis、ポルシエティーガー、3式、IV号、ヘツツアーが高台の稜線の裏側を指して上昇していた。不意に聞こえる風を切る音、そしてその弾はヘツツアーの近くに着弾した。凄まじい爆風が辺りの雪を吹き飛ばす。ヘツツアーが爆風でかなりずれる。

「カメさんチーム！大丈夫ですか？」

揺れが収まる前に、西住ちゃんからの無線が聞こえてくる。

「小山、かーしま、無事かあ？」

「は、はい……頭ぶつきましたが……すごい揺れでしたね……」

かーしまは無事。小山もこつちを向いてきた。

「ん……なんとか3人とも無事だよ」

「よかった……ではそのまま上に登っててください」

「了解」

しかしヘツツアーは上には登れなかった。

「あれっ？あれっ！」

小山がレバーを引くが車輛は右に回転を始める。前に進まない。

「履帯外れたね、こりゃ。元が38tだし、38tは外れやすいからね……」

「カメさんチーム？」

西住ちゃんがIV号を止めさせ、キューポラから身を乗り出しているんだろう。枠に当たったような音が混じる。

さて、履帯が外れたとなると、留まるか直すかしかない。だが私たちの後ろには高々と上がる雪煙が控えている。外で悠長に直す時間はどう考えてもない。

車輛の放棄。それはない。この75ミリをプラウダに向けない。それは大洗の放棄と同義である。

ここからは動けない。されど攻撃するしかない。そしてカーシマに砲は預けられない。

母ちゃんごめんよ。ここで私の道は決まってしまったよ。ここで勝てば、西住ちゃんは決勝で勝つてくれる。そして、私は西住ちゃんの言葉を信じる。

「ごめん、履帯が外れた。敵はすぐ近くにきている。西住ちゃん達は早く上に登って！」

「えっ、でも……」

「早く！全滅する訳には行かない！奥の手をやるんだろ！」

「……」

返事はない。だがここで躊躇うのは無駄だ。

「会長、距離2800です」

あと、何分あるのか。恐らく数分が命の中でここで立ち止まるのは、大洗の命を削るだけだ。

「もう時間がない！わたしらはここで出来るだけ敵を食い止める！早く！」

「でも……そうしたら……」

「生とか死とか議論している暇はないんだ！君が気にやむ必要はない！私の判断だ！行ってくれ！」

私の目的、その為にここで私の命は必要となる。無為に死ぬ気は無い。そう考え待つことしばらく、やっと返事が返ってきた。

「本当に……良いんですか？」

「ああ、構わない！私らが弾を惹きつける！その間に前衛から削ってって！」
断言した。後顧の憂いも残して欲しくない。また少し、間が開いた。

「……………上に登れる車輛は皆稜線に移動します」

「よし、よく言った西住ちゃん」

深く息を吐いた。これで一つはよし。あともう一つ。大洗に必要な人材は私の隣で震えながら待機している。

無線は後で必要だ。一度外して、その人物の肩を左手で掴んだ。

「かーしま！お前は脱出しろ！この坂を登ってどつかの車輛に入れてもらえ！」

「……はっ？し、しかし、会長と柚ちゃんが残るなら私も大洗女子学園の一員として、ここに残らせてください！」

そう言うだろうと思つたわ。船舶科の人たちを、特にお銀ちゃんを死なせた、とかでも考えているんだろうか。

「馬鹿者！」

「確かに私は馬鹿です！しかし転校後トラウマに囚われないようにして下さった大恩がある方を見捨てられるほどの大馬鹿ではありません！」

かーしまは手を握り締め、歯を食いしばり、黒光りする眼光を向ける。

こりやー、めんどいね。

「そうじゃない！隊長がそう簡単に果てるとか言うんじゃない！リーダーというのは、そう簡単にいなくなつて良いもんじゃないんだ！」

「そうしたら会長こそ我らの大洗からいなくなつていい方ではありません！」

「違う！戦車道のリーダーはお前だ、かーしま。この大会、うちらが優勝し、西住ちゃんに優勝旗持たせるまで、お前は死んではいけない！私は学園を残すための道はつけた！達成するのはかーしまだ！」

頼む！早くここから去ってくれ！」

私が死んでも、勝てば大洗は残る。されどかーしま無しに大洗戦車道は今年を乗り切れない。西住ちゃんとの両輪こそが大洗戦車道を成り立たせているのだから。

「……駄目です……」

「我々生徒会は優勝させ、学園を残す為にやってきたんだ。誰かが決勝まで見届けない訳にはいかない！」

西住ちゃんは優秀だ！だが彼女だけで優勝出来るわけじゃない！この凸凹な面子を纏めきれぬお前がいたからこそ、ここまで来れたんだ！

西住ちゃんの心を真に支えられるのは戦車道で大事な人の死を経験したお前だけだ！だから頼む！時間がない！」

かーしまの頬を一筋の涙がつたう。決心が……ついたか？

「でも……袖ちゃん……は？」

「私は……さっきの爆発で足を痛めちゃったみたい。多分稜線の上まで雪の上を歩けないと思う」

小山は右足に手をかけながら呟く。

「……かーしま、早く行け！」

「……」

かーしまはその場に棒立ちし続ける。

駄目か。ならば仕方ない。どうせ死ぬ身だ。

「どうしても行かないと言おうのなら……」

胸元から九四式拳銃を取り出し、スライドを動かす。そしてその銃口を右のこめかみに当てる。これくらい怖くはない。

「なっ!」

「会長!」

2人は驚きを隠さない。

「私はこれの引き金を引かなければならない。1分時間をやる」

「……」

誰も動こうとしない。沈黙が車内を包む。その制限があと半分となった頃、やっとかーしまの口が開いた。

「い、今まで……今まで本当にありがとうございました!私は必ずや大洗女子学園の存続をこの目で見届けます!」

吐き出すように叫ぶと深く一礼し、振り向くことなく外に飛び出していった。目で追う必要はない。

深く息を吐いてからこめかみから銃口を離し、銃を胸元に戻す。この命をプラウダと

戦わずして散らす、それは有り得ないからな。

さて、では旅路に付き合ってもらう人を呼び出すか。そこにいる、ってことはその気なんだろうし、何よりプラウダに対しより多くの砲弾を撃ち込むには、いてくれた方がありがたい。

「小山！こつちで装填やつて！」

「私は足を怪我」

「嘘だろ？じゃなかつたら怪我した足でアクセル踏めるものか」

「……やはりばれてましたか」

「当たり前だろう。かーしまはあの頭にさらに混乱が追加されていたのか？」

「なぜ残った？これは半ば私の勝手だ。生きたいなら脱出してもいいんだぞ？」

「……話し相手がいなかったら会長、暇すぎて冥土の干し芋。食べ尽くしてしまうでしょう？話し相手くらいにはありますよ」

「なかなかギザなことを言う。」

「面白い。そこまですてこんな私に付いてくるならば、優雅なツアープランナーになってやろう。砲弾まみれだけどな！」

「フツ、よし頼んだ！片方だけで向きの変更頼む！」

「はいっ！」

「左右角は多分これで足りる！距離、もうすぐ1500！いくよ！」
「はいっ！」

小山が操縦席にてヘツツアーを緩やかに回転させる。その間に最期の挨拶をすべく、無線をI V号に繋げる。

他の5輦は稜線の裏までたどり着いた。車体の向きをプラウダの戦車道部隊の方に向ける。

「凄……雪煙で向こうがほとんど見えない。まるで津波ぞな……」

「何あれ！あんなのアリなり！」

ももがーさんが三式車内の不安を伝えてくる。ところがどっこい、審判が止めてないからアリなんだな、これが。

死の接近。そう言っている間に雪煙は刻一刻と大洗側に近づく。

「射撃開始の指示は出しません。各砲手当たると思ったら近い順にどんどん撃つてください」

そう、敵は幾度となく黒森峰に挑み続けた強豪。全力で、しかもこの数でぶつかってくる。恐らく捨て駒も混じっているだろう。

つまりそれらが捨て駒である限り、局所的に損害を与える戦法は全く通用せず、本体

含め全滅並みの大損害を与えないと引くことはしない。それに敵の車輛はT34／85が大半。外見から本隊を見分けるのは至難の技だ。

今の敵までの距離は2000、もうすぐだろう。

ゴマ粒から山椒の粒くらいになってきた頃、ヘッツアーの最初の1発が命中したらしく、敵の砲撃の対象は他の車輛から距離にして200メートル前方にあるヘッツアーに絞られていた。何発もの砲撃の中ヘッツアーは確実に1輛ずつ仕留めていた。

「カメさん以外の各車輛に通達。砲撃の合図は出しません。撃てると判断したら、各車砲撃を開始してください」

流石だな。相手が当てるのが下手か、走行間射撃のせいか。それらもあるが、何より会長さんが確実に当て続けているのは事実。

「西住ちゃん」

「会長さん！大丈夫ですか！」

急な無線の繋がりが、敵車輛に向けられた集中を途切れさせる。

「何とかね。敵が走行間射撃で助かってるよ」

話しながら狙いを定めた会長さんは砲弾を放ち続けているらしい。

「でも、敵が近づいてきてる。そろそろダメっぽいね」

「そんな……」

彼女を次に持ち越す術がないことは分かりきっている。そして向こうはやる気だ。だがこの高潔でも清純でもないが最強の人物を救う手立てはないか、一瞬その思考が身体中を駆け巡る。

「西住ちゃん」

「えっ？はい……」

その超特急を止めたのは、当人であった。

「かーしまを逃したから、よろしく。そして私らをここまで連れてきてくれて、ありがとうね」

今まで聞いたことのない、先ほどと似た声なのだが、意思、逆にこの先の全てを任せるといふ強引な委任が込められていた。少なくとも私が一瞬返答に戸惑うほど。

「……か、会長、こちらこそ……」

「……」

もう無線の向こうから音はしない。完全に、ヘツツアーは関係を断ち切ったのだ。これで一本の木綿クズほどの望みも消えた。

「……」

「みほりん……」

心配そうに沙織さんがこちらを見る。躊躇いはあつた。だが、合理的判断を下すのに3秒以上の時間はいらない。

「華さん、撃てたら構わず撃ってください。優花里さん、装填早めにお願ひします。数から見て、100は撃破しないと相手は引かないと思ひます」

「了解しました！」

「ひ、100……う？え、そんなに……」

「いくらプラウダといえど、あの数全てに精鋭を乗せられるほど練度は高くありません。逆にそれだけ練度が高い人材揃ひなら、黒森峰に9連敗もしないでしょう。

かなりの割合で補欠や下級生、場合によってはそれ以外が乗っていると思われまふ。プラウダからしたら、ある程度の損害は許容範囲でしょう。

しかしこちらは向こうが補欠だろうと精鋭だろうと、撃ち抜かれたら終ひです。だからその母体を減らすためにも、精鋭にダメージを与えるまで削つていくしかないんです」

「な、なるほど……」

「幸い立地的な優位は取れました。やれない訳ではないはず。華さん、距離そろそろだと思ひけど、どう？」

「はい、まもなく1500。撃ちます！」

砲尾から煙が立ち、優花里さんが次弾を素早く込める。

「止まった！命中だよ！」

「次を。撃ち続けてください」

その砲撃を合図に稜線の上の全車輛が砲撃を開始する。やはり練度は低いらしく、前方に砲弾が落ちたことに驚いたのか急停車し、車輛同士がぶつかる様さえ見える。

煙があちこちから上がり始めた。白いものも多いが、灰色や黒っぽいものもある。その下では何人か、私の知らない人間が死んでいる。だがそれを気にする人は、最早大洗チームにはいない。対してこちらは前方のヘツツアー含め損害なし。

だが向こうにまだ200輛近く戦車が残っていることは事実。この戦場の未来は見通せない。

会長さんの話で伺っていた河嶋隊長もなんとか稜線にたどり着き、倒れ込んだ姿でV号の下にいた。

「河嶋先輩！」

「……西住……か、会長が」

「レオポンチームに加わってください！通信手をお願いします！」

乗員数を満たしていないのはこれだけだ。

「……分かった」

河嶋隊長は話を遮ったことには反応せず、背を向けてポルシェティーガーの方に向かう。きつとこの戦場で最も生き残り得る車輛だ。

「レオポンチーム！河嶋隊長を車内に入れてあげてください！」

「分かりました！」

「全車、砲撃を続けてください！先ほどよりも接近してきています！」

「……奇跡だね。小山」

「……はい」

敵先頭部隊、1200を切らんとする。この時もヘッツアーの砲はまだ弾を撃てる状態だった。近くに着弾したり車輛をかすったりする弾はあったが、致命的な命中弾はまった無い。

「敵10輛を斃さざれば死せども死せず、と思つてやってきたけど、まさかここまで大丈夫とはね」

また1発、敵車輛の側面に食らわせてやった。

「小山さ、今ならあの時の西住ちゃんの気持ち分かる気がするわ」

「何時のですか?」

話しながらも小山は淡々と75ミリ砲弾を装填する。そして直ぐに私も狙いを定めはじめた。

「おっと」

しかしその間にも辺りにはあらゆる砲弾が着弾し、衝撃波を撒き散らす。全く、また少し調整が必要だ。

「アンツイオの前の、西住ちゃんが自分の身はどうなっても良いから降伏した方が良
いって言った時さ。」

あの案は呑んだら間違いなく西住ちゃんはアンツイオか黒森峰に殺された。まさに十死零生だね。それだけの怨恨を抱えている。きっと私たちが知りようもないほどの。

それでもそれで良い、みんなが助かればいい、って西住ちゃんは言った。あれに今の我々は似ているだろ」

「なるほど、不安とか、ですか?」

「違うね、むしろ開放感っていうか興味というか、面白い感覚だね、今まで味わったことのない」

再び砲身を凄まじい振動が襲う。着弾もその後近くにあった。

「おお。今のは近いね」

「本当に落ち着いてらっしやいますね」

「昔の哲学者が人間の行動は全て死の恐怖を紛らわすため、って言ったらしいし、多分それが関係しているんじゃないかな？知らないけど」

小山が弾の後ろを拳で押し込む。

「なるほど。天国への興味、といったところですか」

「はは、知らないって言ったじゃないか。あ、ちよつと右で」

それを再び放つ。やはり車輻が少し傾いていたのか、それとも歪んだのか。弾は狙った車輻のとなりの車輻の装甲に弾かれた。

「くそっ」

「ま、そんな時もありますよ。次です次」

「その次があるとは……」

離れた所に着弾する砲弾のなす揺れだけが、ここには伝わる。

「……ありそうだね」

「でしよう？」

次は当てた。その次も当てる余裕があつたから、砲塔との隙間にねじりこませてやつた。

私たちはまだ生きています。そして死に様を決められる。

「小山」

「はい」

「私は、大洗だと思うんだ」

「大洗、ですか……ま、そこまでの干し芋好き、得意料理はあんこう鍋。大洗生まれで大洗女子学園に在学、おまけにその生徒会長となれば、大洗そのものと呼ばれても問題ないでしょうね」

「……だから、私は大洗の一員として、悔いなく死にたい」

「と、なりますと……如何なさいますか？」

「なんだ。ここでできる、大洗の一員と示せる証。誰も知り得ない、ただこの場の2人だけが相互に知る、微かな存在証明。」

あるものが、不意に頭をよぎった。

「……校歌を……私らの大洗女子学園の校歌を歌って……生きていたい」

「校歌ですか。歌い終われませんか？」

「構わない」

他に思いつかないのだ。

「それじゃ、一緒に歌いましょう。私も大洗の一人として死ぬのなら本望です」

「じゃ、歌える限り歌おつか。次撃つたら始めよう」

「安全装置よし！」

「このまま歌いながら装填よろしくね！」

その次の弾は破壊された敵戦車に阻まれたが、合図になることは変わらない。

♪長峯の丘に 立ち返り

茂る木々ある 古墳に至る

春のつつじに 並ぶ松

平穏大洋 眺めたり

ああ 我ら ここに集いし

若葉の都 大洗女子学園

♪涸沼の川の 水清く

昇る海流 抗い進まん

磯浜陣屋の 大筒を

向けし相手の 手を取らん

ああ 我ら 望み果てなし

睦て励まん 大洗女子学園

♪ 原子の母たる 科学都市

ここを離るを 怯むことなし

学の独立 その維持に

あるは学徒の 奮闘ぞ

ああ 我ら 明日を創らん

大洗女子学園 我らが母校

「まさか歌い終われるとはね……」

こちらでも歌っている間数発放ったが、余程相手が下手なのかなんなのか。

「良かったじゃないですか。これで真に大洗女子学園に魂もろとも染まっていると示せたのですから。」

しかし……流石にそろそろ時間のようですね、会長。バレエ部、うさぎさんチーム、猫田さん、園さん、フリントさん、ムラカミさん、お銀さん……みんなと磯前神社で会えますよね？」

引き金を思い切り引く。小山はもう装填しようとしなさい。

「敵距離1000。来るね、そろそろ。大丈夫、きっと会えるさ。後は任せた、先に待つてるよ、みんな。我らの母校、大洗女子学園よ永遠なれ」

戦車を跨げば稜線のある方に視線を向けた時、無慈悲にも削れていたヘツツアーの左側面を85ミリ徹甲弾が撃ち抜いた。爆煙をあげて周りの雪を溶かし続ける車輛から出るものは居なかった。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

角谷 杏

プラウダ 砲撃死 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

小山 柚子

プラウダ 砲撃死 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

第5章 ⑧ 蛙

「ヘッツアー撃破！」

プラウダの主力が待ち望んだ報告が耳に入った。

「やっつとですか……」

「ノンナ副隊長、こちらにも既に30輛近く損害が……」

「ですが残骸に身を一部隠しているせいも、損害が増える速度は落ちていきます。あとは主力が地道に沈めるのみです。I V号とポルシェティーガー、三式に攻撃を集中させなさい」

そう、実際2校の先頭同士の距離はもう1200メートルを切ろうとしている。しかも前方にいるのは、補欠やその他かき集めた者たちを含む余り上手くない者や、戦車道に所属しているもスパイの疑いがある者を集めた部隊、やられて当然だ。損害は損害だが、目的を達する支障となる程ではない。

大洗が前に気を取られて対応しているうちに、後続の精鋭部隊の射程にさえ入れれば、大洗の戦車は鉄くずと化す。そして数輛の損害が出さえすれば、向こうの戦力はガタ落ちだ。

古今東西30倍をひっくり返して勝った戦いは指で数えるほどしかない。勝てる、今回は指に入らない。私を含め、プラウダ戦車道の幹部層はそう信じていた。

それが目の前の精鋭の車輛の砲塔が、いきなりいくつも宙を舞うのを目にしたときの驚きは、想像を絶するものだった。何発もの砲弾による揺れで思わずバランスを崩す。

その原因を察するのは非常に容易だった。

アハトアハト

一撃でプラウダ戦車を穿つ威力、それと発砲音、どちらもこの仮説を証明するに足るものだった。そして向きと数からして、大洗の部隊ではない。

「副隊長！右です！右の尾根から撃たれています！」

「何だ！」

右の物見窓から双眼鏡で眺めた先にあったのは、こちらから台形に見える戦車の群れ、それと茶色。

「くっ……」

予想は無慈悲にも当たっていた、思わず拳を握り締める。奴らが、悪魔が、鬼畜生がやってきた。

「黒森峰……」

ドイツ戦車の殻を纏った奴ら群れだった。

「馬鹿な！黒森峰が……何故！」

理解が出来なかった。何故西住流を破門された西住みほと黒森峰が協力するのだ。黒森峰からすれば西住流の敵だからさっさと死んでもらうのが吉なはずだ。

仮に我々を倒すために同盟しようとしても、決勝の方が継続など戦力的に大洗よりかマシな味方が参戦するはずだ。わざわざ今、ここで、我々を倒さねばならない理屈はない。

だがまずは、同志カチューシヤに、同志に確認を取らねば……

「無線を……無線をすぐに繋げなさい！」

カチューシヤはその身に反して大きな決断を迫られた。尾根の様子を見るに、黒森峰は多くても20輜、大洗を倒せば試合には勝てるが、決勝で黒森峰と戦う為の戦力が削られる。敵は既に我らの精鋭を射程に入れている。このまま大洗に勝利しても損害は計り知れない。

ならば今の数的優位をもって、戦力的に上である黒森峰を殲滅し、その後右の尾根から大洗側へ進撃し、両方潰すのが得策。大洗だけなら、精鋭が削られてもその時点での残存部隊でも勝てる。

被害は大きくなるが、黒森峰の重戦車部隊に横つ腹を見せ続けるよりは、大洗に見せた方がマシ。砲と車輛の質が違う。

そして精鋭を削られた上で主力の残る黒森峰と戦つても……勝てぬ。そしてそれは私には許されない。勝利を、悪魔たる黒森峰からの勝利を、学園は求めている。

カチューシャは手元の2本の旗を掴み、キューポラの外に飛び出す。車内の者からの呼び止めも気にしない。

「全車右旋回！尾根の敵を撃破せよ！」

旗は黒森峰の方を向いていた。勝ちにより近いのは、どう考えてもこちらである。

「突つ込め！ファシスト共を皆殺しにするのよ！狼共の血で尾根を真っ赤に染め上げてやりなさい！」

「ウラー！」

プラウダの車輛は次々に右に周り、黒森峰への砲撃を開始した。宿敵の壊滅を目指して。

黒森峰の試合はこのプラウダ対大洗戦が終わつた後である。逸見エリカ率いる部隊はこの戦いで大洗を勝たせなければならなかった。

決勝に大洗を連れてこい、それが学園長からの指示だった。その意味は勿論理解して

いる。しかし彼女がここに来た理由はそれだけではなかった。

「全車砲撃開始、左が精鋭よ！1号車から12号車までは左を、それ以外は右を潰しなさい！下手に車輛を見せるんじゃないわよ！」

「了解です！」

黒森峰の最強選抜部隊の88ミリが、一斉にプラウダ戦車隊を攻撃した。再び砲塔がいくつか空を舞う。

「馬鹿ね、あんたら舐めすぎなのよ、あいつを。仮にも1年で栄光の黒森峰女学園SS装甲部隊の副隊長を務めたのよ。あの女が簡単に勝負を捨てる訳ないじゃない。ま、それでウチを頼ろうとするとところが甘いわね。

でも条件は合った。動かない理はないわ。たとえあいつが学園の裏切り者だとしてもね！

腐った建物から来た劣等学校が調子に乗りやがって！お前らが隊長や黒森峰隊員にした仕打ちは10倍どころか兆倍にして返してやるからね！敵の砲撃に怯むな！イワン共に確実に1輛ずつ地獄を見せてやりなさい！」

「に、西住さん……敵車輛が……」

左側面から当面の味方が現れてからしばらく、敵車輛が一斉に横つ腹を見せ始めた。

まさに、まさにプラウダはデスバレー行きのリールに跨つてくれたのだ。

「……敵部隊左へターンします！ チャンスです！ 撃ち続けてください！」

叫ぶ。この奇跡が何分続かわからない。今この隙を逃せばこの距離では勝ち目はない。エリカさんは来てくれた。熊本が私を求めているのだ。ここで負けるわけにはいかない。

こちら唯一のアハトアハトも、突撃砲も、日本の中戦車も、フランスのエースも、そして私の乗る歩兵の母も、皆ロシアの量産車をまともな反撃なく潰していた。

しかしそうしている間に、視界に収めていたIS2が砲塔から火を吹いた。

「撃て！ 撃ちながら進め！ 撃ち負けるなッ！」

同志カチューシャは正面へと旗をふりかざす。私からの通信なぞ気にも止めてないようだ。丘を登り尾根を目指しながらプラウダの戦車は砲撃を行う。

だが元から向こうが高台にいて、劣悪な照準器の上この凸凹地面。こちらの砲弾はなかなか向こうに到達しない。尾根の上で口角が上がるクソよりも下賤な女の様が、消えうとしても浮かび上がる。

そしてその現実（まじまじ）を示すかのように、プラウダの部隊は前進を阻まれ、徒らに被害を生んでいる。それも先程みたく補欠やかき集めではない。精銳（せいえい）が含まれている。如何に

同志カチューシャが歯をくいしばろうと、状況は変わらない。

私の乗るIS2も、いくら射撃の腕が良くとも残弾を考えると、そうバカスカ撃てる状態ではない。先頭にいた部隊は敵を減らせていない。後方にいた精鋭が敵に数発命中させているものの、撃破しているのはたった3輦だけだ。こちらはもう残り半分を切りつつある。通常の部隊なら壊滅状態だ。だが同志は進軍を止めようとはしない。

これが本来の目的ではないはず。しかし今の同志は聞かない。ならば行動で、それに必要なことを示し、勝ちに近づく。

「止まれ」

操縦手に声をかける。一度命令の整合性を確認しようとしている。

「はっ?しかし……」

「止まって正面の大洗を狙う」

「は、はあ……」

言われた通り操縦手は車輛を止め、狙いを定め始める。距離は若干伸びて1500、狙える。

「あーんもう、命中しているのに中々止まらないっちゃー!」

3式の照準器を覗きながらびよたんが愚痴る。

「ぴよたん変わるなり！私にも狙わせるっぞな！」

ももがーは2つ上の先輩に普通にタメ口である。しかしぴよたんもそれに反論する気配はない。75ミリ砲弾を装填し終わると紐を掴む。

「はいよ、お二人さん。次の弾ね」

手の空いたももがーの手にラムから砲弾

「助かるなり！」

「なに、こんぐらいいいってことよ。あれから特に通信はないから、遠慮なく撃つていこうや」

「そうっちゃ！早く次次っ！今度こそは撃破してやるウー！」

その時、IS2がその飛び出た砲身から122ミリ徹甲弾を発射させた。ティージャーの正面装甲をぶち抜く弾である。正面から食らった3式は、まさしく砕けるという語が適当な様子で撃破された。砲塔は車体から分離され炎をあげていた。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

小鳥遊 一恵

プラウダ 砲撃死 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

桃川 郷子

プラウダ 砲撃死 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

西島 とうみ

プラウダ 砲撃死 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

「3式撃破確認！」

「200 m移動後また撃つ。装填せよ」

「はっ！」

これで大洗はこちらの主力、最精銳に捉えられ始めたと理解したはずだ。ヘツツアは困だろう。前衛との練度の差をあつ西住みほが理解できぬはずはない。

そして彼女の正面ではプラウダという現在の敵と、黒森峰という将来の敵が戦力を削り合っている。このままガチンコで戦わせ続けるのが、彼女が優勝するための最善策。そしてそれは彼女らが参加した目的の達成に必要なこと。

ようは生き残れば良いのだ。それも戦力を残しつつ。

これらの情報を組み合わせれば、撤退を彼女は選ぶはず。そしてそれはこちらにとつても側面からの砲撃を避けられる。戦力を同志の命ずる黒森峰に集中させることができ

同志の命令は変えられない。そして確かに同志の決定にも一理ある。

装填と移動の完了まで少々時間があつたため、後ろの物見窓から双眼鏡で外を眺める。やはり損害は大きく、煙をあげるプラウダの戦車達が視界の多くを占めた。そこから運良く生き残つた者たちが車輛から這い出し、戦線を離れる。

そこから先の彼女達の運命を、私は見てしまった。言葉を出すための声帯をその光景が固定した。

会場の後方に1台のトラックと3人の男が見えた。恐らく同志が話を付けて呼んだNKVDの奴らだろう。一番厚手のコートを着た1人は立つたまま動かず、1人はPM1910重機関銃の後ろで膝をつき、残り1人は銃身に雪を突つ込み続けている。

絶えず弾丸が発射され、逃げようとする者らを躊躇なく襲う。足、腿、背中、腹、胸、首、頭を撃ちぬき続け、地面に倒れた者はそのまま重機関銃の的と化す。地面は白から服の黒と隙間の紅に変わってゆく。

同志は敗者に、脱走者に、彼女にとつての叛逆者に、死を命じているのだ。

ただじつと人が止まっていくのを見続け、気がつくときューポラから身を乗り出していた。

「副隊長！外は危険です！」

車内の者が止めるが気にもとめず、車輛から飛び降り、煙にむせながら水の混じった雪原を一直線に駆けていた。時々足元を取られるが、転ぶわけにはいかない。こうしている間にも、人材が、プラウダの未来が……

「同志カチューシャー！」

目標はT34／85だ。キューポラから身を乗り出し旗で指示を出し続ける彼女に向け駆け寄り、背後から車輛に登る。相互の砲弾が風を切る。

「おやめください。十字砲火の中突撃を強行しても無駄です！今すぐ停戦をッ！それから撤退をッ！」

旗を持つ人の両肩を掴む。しかし彼女の眼光は黒森峰を見据えている。

「うるさいー！」

振り向きざまの拳をぶつけられる。背後に弾き飛ばされる。戦車の排気口からの熱とかすかな痛みを背中に感じつつ、ただ次の言葉を聞くしかなかった。

「突っ込みなさい！後退する者は地域の裏切り者よ。その場で射殺する！前進しなさい！戦車がやられたらモシンナガンを持って！それさえもない奴は、黒森峰の戦車に近づいて車長を殴り殺しなさい！」

左手の旗は正面に向けられていた。そうしている間にも一輛、また一輛とアハトアハトの餌食となるし、機銃の的も増えていく。その一言が私を本当に人にしてしまったの

かもしれない。

人として、ではない部分もある。ここにある人は、ここでさえなければ黒森峰のクソを殺せる者たちなのだ。そしてそれに必要な団結をみだりに崩した存在ではない。それを……それを自分たちで……

トカレフTT-33、私のポケットに入っていたそれ。弾薬は僅かなれど、最悪の事態、そして接近戦での防衛に備えて持っていた、本来は使われない方がいい代物。だがやむを得ない。この結果私が死のうとも、黒森峰を倒す助けになれば。

それを、私は彼女の後頭部に当てた。接触させたのは、その銃口。

「なんの真似よ、ノンナ」

「お願いします、同志カチューシャ……どうか……どうか命令を……同志ジユコフスキーの仰ったことをお忘れですか！」

本来の目的。これまで幾十年に渡り溜まりに溜まった恨みの全てを清算するために、私はこれを取ろう。

「バカ者が、戦場でメソメソ泣いちゃって。ノンナ、お前も焼きが回ったわね」

自分でも気づかぬ間に大粒の涙が頬を伝う暇もなく零れ落ちていた。全く彼女のその通りである。今の私の顔にはブの字も存在しない。

顔は向けてこないが、いつもより低い声とその発言に鋭い視線の様なものを感じる。

本気だ。信念とも言つて良い。

「カチューシャの命令は絶対よ！撤回はないわ！最後の一人まで突っ込ませなさい！生徒なんていくらでも補充できるわ！最大の、最強の学園の特権よ！」

ここから生きて戻るのはカチューシャとノンナの二人だけでいい。ただし、戻ったらカチューシャに銃口を向けたペナルティは受けてもらうわよ。

分かつたら残りもさっさと突っ込ませなさい。黒森峰を少しでも傷つけてやるわ。いや、距離さえ詰めてしまえば、勝てる！」

返事はしない。無言の涙が頬を駆け抜ける。彼女は何もせずその場に直立する。

彼女は逃げも隠れもしない。その精神力はさすが皆の上に立つもの。されど、私は。

「とつとつとやりな」

指が、動いた。

先ほどまでの砲撃に比べ今回は接射だ。外しはしない。

軽い爆発音が、周りのもの全ての耳を突いた。葉莖がエンジン上部を跳ねまわり、止まる。眼前に広がったのは、前に倒れ顔から血の池に突っ込まれた彼女の後頭部と背中、だった。

ただそれを視界に収めるが、それさえ瞬く間に歪んでいく。車内の者は背後にいた人

間が突然絶命したことに愕然となっている。

これは、我らがプラウダの為……プラウダが永遠に続く繁栄の道を進む為。その死を確認すると、素早く振り返った。

「ジャツジ!!」

「試合終了!」

その合図がかけられたのはホイッスルの音と同時だった。

「プラウダ高校の試合放棄により終了します! よって準決勝第1試合、大洗女子学園の勝利です!」

審判の声がこの土地に一時の平和をもたらそうとする。丘の下では煙が山のように立ち昇り、全て風で南へ流されている。

終わった、ようだ。

ついさつきまで逡巡を繰り返していた私の頭は、叫びながら抱きついてくる優花里さんに何も反応出来ないほどに急停止を喰らっていた。

「西住どのおおお!」

「……また、勝ったの?」

「嘘……あんなにいたのに……」

優花里さんを除く皆も同様。だが少しの間を置いて、このささやかな肉の丘を包み込む叫び声広がっていた。僅かな損害はもはや頭には残っていないらしい。

プラウダに、勝った。これが今年の夏、そして去年の冬に聞けていれば……いや、これ以上はよそう。

「戦闘行為停止！」

「両校直ちに戦闘行為を停止してください！」

あちこちから笛の音と審判による声が響く。私のもつ力は、もう使い終わった。頭をだらんと反らせた彼女をキューポラがら引つ張り出して抱え、車輛の後部に立つ。視線の先は丘の上だ。

西住みほ。こうなってしまった今、同志ジユコフスキーの提案を実施する為に彼女は必須の存在となってしまうた。

ふと、戦車の残骸を通り過ぎた丘の上と視線が合った気がしたが、丘の上から視線を外して車輛から飛び降りた。

私は、同志をこの手で殺した。それだけだ。

地元生まれの、といつてもツガルがプラウダとなる前の時代のことではあるが、作家がこんな言葉を用いていたな。

『恥の多い生涯を送つて来ました』

文学はロシアが至高、日本の言文一致などロシアの受け売り、だとは思っているが、これは強く印象に残っている。

別に私がその主みたく心が安定しない奴だ、というわけじゃない。むしろ彼女に、学園に捧げてきた思いは変わらないし、きつとこのまま変わらないだろう。いや、逆に『学園に心を捧げてきた私』というものを信じたいだけなのかもしれない。

実際、私の歴史は恥辱にまみれている。父を、母を、妹を、家族皆を殺した奴の娘に取り入って出世し、その過去を封じ込める為に、好きでもなんでもないNKVDの奴らに、下着を馬鹿にされながら何回も犯された。そしてまた、人生は最悪の恥とともにファイナーレを迎える。

「……結局、裏切り者の子は、裏切り者。同志カチューシャ、貴女は私を信頼しすぎました」

プラウダの主力の残りがいた所の一角から聞こえたのは、静寂を破る銃声だった。

「発砲はやめなさい！ 試合は終わりました！」

審判の一人が大声で注意する。近くのもの互いに見渡すが、返事はない。その音源たるモノに答えられるはずがない。自分の車輛の転輪に寄りかかるカチューシャとそ

の足元でこめかみに引き金を引いたノンナしかいなかったのだから。

第74回戦車道大会公式記録

プラウダ高校犠牲者

エカチエリーナ ウラジーミロヴナ イワノワ

大洗 銃殺 脳後部から額にかけて貫通による脳死 即死 ノンナ ニコラエヴナ

ノヴィコヴァの持つ銃により射殺

ノンナ ニコラエヴナ ノヴィコヴァ

大洗 銃殺 右側頭部から左側頭部にかけて貫通による脳死 即死 自殺と思われる

る

○大洗女子学園高等学校 v s X プラウダ高等学校

被害 大洗3輜 プラウダ153輜

(大洗側同盟 黒森峰4輜)

プラウダ高校の試合棄権

試合中一度治っていた雪は、今再びしんしんと舞い始めた。私たちの所に一台の車輛

が向かってくる。それは前で止まり、黒森峰の生徒が降りてくる。懐かしい。私も良く知っている顔だ。

「失礼します。黒森峰女学園戦車道選抜部隊副隊長の直下と申します」

彼女、直下さんは頭を下げる。所属こそ違ったが、礼儀正しかったという記憶は間違つてなかつたらしい。

「大洗女子学園戦車道隊長の河嶋だ」

「副隊長の西住です。お久しぶりです、直下さん」

それと共に大洗側の2人があいさつし、たまたま周りにいた者も会釈する。

「大洗の皆様、決勝進出おめでとうございます。逸見隊長から決勝はお互い全力を尽くしましょうとの伝言を預かっております」

雪がますますちらついてくる。次、ね……ま、礼儀正しさには礼儀で応じよう。

「ありがとうございます。黒森峰の皆さんの同盟あればこそです」

嘘ではない。いや、これが勝利の根幹であるのは事実。

「なお、プラウダの捕虜はこちらで引き取りますので、了解を得るように言われました」
「お断りします」

「は。」

はつきりと言ったその言葉に直下さんは思わず耳を疑つたらしい。だろうな。

「捕虜の権利を持つているのはあくまで勝利校である大洗です。申し訳ありませんが黒森峰には引き渡しません」

「……それは今回の400人近い捕虜数と捕虜の管理費用が全てそちら持ちであるというのを理解なさっている上で、ですか？」

「勿論です」

「……」

彼女の言うのは正しい。大量のプラウダ捕虜に食わせる飯と帰りの旅費を埋めるのに必要な金があるなら、とつと押し付けて戦車補強の方がいい。そう考えるのも当然だろう。

だが私には出来ない。現実を知る者として、それは許さない。

直下さんはじつと見つめてくる。その意思是曲がらない、と分かったらしく、少し首を回し、視線を河嶋隊長に移そうとする。

「今大会に関する決定については西住に一任してある。西住がそう言うなら、引き渡しはしない」

「しかしですね……」

「二度は言わない」

「……分かりました。失礼します」

直下さんは仕方なさそうに頭を下げ、背を向けて車輛に乗って帰って行く。理解が早くて助かる。その場にいたあんこうチームのみんなと河嶋隊長の視線はその背中をじっと追っていた。やがてそれも雪原の奥の谷間に消えていった。

「西住殿、どうしたでありますか？捕虜を取っても、我々はどうしようもないでありますよ」

右脇から優花里さんが側に出てきた。

「黒森峰の第2試合はこれからなのにもう決勝の挨拶とはすごい自信だな。

しかしお前を信用して受け入れたはいいが、どうする気だ？向こうが求めるなら、今回の援軍の件を考えて、乗っても良かった気がするが。

信用するから、その理由だけは隠し事なく教えてくれないか？それが……生き残るのに必要かもしれない」

信用。確かに重要だ。止むに止まれぬ理由でまとまらざるを得ないチームが勝てるほど、黒森峰の団結は甘くない。

前に一度似たようなことを話したからか、果ては私がかつての私に戻りきってしまったからか、前みたいに倒れたりするようなことはなさそうだった。

それに私だけ腰掛けるのも、皆に雪の上で座布団もなく座らせるのも、どちらも気が引ける。

「皆さんすいません、ワガママ言つて……まだ話してませんでしたね。私が黒森峰を去り、戦車道を辞めた、いえ、辞めようとした理由……」

「聞いたぞ？ プラウダに虐待されたからじゃないのか？」

河嶋隊長の指摘に笑顔を見せようとした。しかし記憶が口角を上げるのを邪魔する。

「いえ……確かにそれは辛かったんですが、自分のせいじゃない辛さです。苦痛で泣いても、終わればまた明るい気持ちにもなれます」

周りは少し近くの者の顔をのぞいていた。前に話を聞いているだけに、これまた飲み込める話ではないのかもしれないが、事実だ。

「それよりも耐えがたい、日が昇るように何時までも思い起こされ続けるもの」

華さんの顔に水滴が見える。雪が溶けたものでは無いようだ。きつと勘の良さを備え付けているのだろう。華道とはそういうものなのか？

「私が戦車道を辞めた本当の理由は……」

優花里さんが吐く息も白く染まる。周りから漂う霧の中から、私はまた嫌なことを引きずり出す。流石に本能が、足を震えさせ止めようとしてくる。五感も次第にあの場へ引き戻される。

が、話さない意味はない。戦いの意味の一部はここにあり、一番長く生きるのは私ではないのかもしれないのだから。

アインザッツグルッペン（特別行動部隊）

私は見てしまったんです

を
黒森峰が戦車道大会に君臨していた9年間敗退した相手校に対して行っていたこと

私に加害者だったということ

あの悲劇と匂いを知ってしまいました

第6章 決勝戦です！

第6章 ① 効率的

あれは去年の7月のことです。私はその硬式大会に1年生で唯一ティージャー1の装填手として選ばれました。1戦目でヨルダンを、2戦目でプラウダを撃破しました。初めての試合そのものは、いうほど緊張しなかったことを覚えています。あの時の私は、現実を知りませんでしたし。

そのプラウダに勝利した翌日の昼、もう昼飯を食べて休憩も取った後でした、戦車道チーム担当の教員が呼び出しをしました。私達は宿舎の前に停められたバスに乗りましたが、教員から行き先は告げられません。しかし隣に座った姉を含め、上級生がいつになく顔色が悪かったのも、只事ではないなと思っていました。

宿舎から10分走った所、有刺鉄線で囲われた禍々しい所でバスは止まり、歩哨のいる門の前で降ろされました。扉が開けばそこにはすぐ、肉が腐った、思わず眩むような臭いが立ち込めていて、咳き込みながら持っていたハンカチで口を塞ぎました。それでも臭いは抑えきれません。

すると門から男が出てきました。その男こそ今回の戦車道大会の実行委員長の北野

です。あの男です。教官とかと似た服を着ていますから、普通に見ればただのおじさんです。周りの臭いとハエと異様な雰囲気さえなければ。

「こちらは特別行動部隊施設所長の北野氏だ。全員、敬礼！」

教員の号令とともに私たちは右腕を空に伸ばしました。出来ればその手は鼻や口をふさぐのに使いたかったんですが。

「ようこそいらつしやいました。黒森峰女学園の偉大なる戦車道隊員の皆さん。所長の北野です。皆さんほど華々しくなくとも我々もプラウダソヴィエトの絶滅という目標に向け日々努力しています。今日はその成果をしっかりとご覧になってください」

私以外にも何人かが鼻や口を塞いでいました。目もそれを拒否するらしく、涙が止まらない人もいました。それを見た北野が急に笑いだしました。

「到着する前から匂っていたでしょう。こればかりは防ぎようがないので。なに嗅覚はすぐに麻痺します。我々はここで飯すら食ってますからな。

あまり私の後ろから離れなideてください。こども広いですからな。それに迷われたりしたら、私の責任問題じゃすまないもんでね。未来を絶たれるのはプラウダの野郎だけです。では行きましょう」

北野はゆっくり背を向け歩き出そうとしていました。教官が私達を並ばせます。

「いいか、これから見ることは一般生徒や父兄も知らないことだ。だが我が校の未来を

背負うお前達はこれらの意味を理解しなければならない」
「はー」

舗装は特になく、建物の周りを含めて土は丸出し。入り口の近くは僅かな警備がいるのみ。逆にその手薄さが不気味でした。ですがその奥へと進まざるを得なかったのです。

歩いているとある人から水溜りに踏み入れるような音がしました。その人が足を確認すると靴から赤い液体が垂れていました。その足元の赤い流れの源は死体が積み重ねられた所の血の池でした。

「ああ、埋めるのが間に合いませんでな、置き場所が無いんですわ。試合があるといつつもこうです。ま、この先もちよくちよくあるんで、滑らんように気をつけてください。特に内臓は滑りますからな。踏むとバナナよりずるり、といきます」

建物の脇の血の池と反対側に視線を移すと、縦縞の作業服を着せられたプラウダ生が、リアカーで運ばれた味方の死体を深く広い穴を掘って埋めていました。

「……それにしてもいつ来ても強烈な臭いだな。目にまで染みる」

教官は目を軽く抑えていました。

「埋めた死体が腐ってガスが発生するんですよ。やる時はいつつもこんなんですわ。こんな場所だから換気もクソありませんしな」

淡々とその光景を前に2人は話します。血を踏んだものは壁際に走って行き嘔吐を繰り返し、姉も吐き気を催したようで口を抑えていました。そしてその吐瀉物も、別の流れとして血に合わさって、穴の中へと流れていきました。

ふと、その穴を掘り死体を埋めるプラウダ生を監視していた者がポケットから酒瓶を取り出し、それをラツパ飲みします。一気にある程度飲んだあと、大きく息を吐きます。ビンの様子を見るに、その中身は容易に推察できました。

「勤務中に酒を許可してるのか？」

「はい、この環境は最悪ですが、酒だけは自由に飲めるようになっていきます。ま、プラウダの奴らからかっぱらったウオツカが真っ先にはけますな」

北野自身もポケットから水筒を取り出し、キャップを外し、乾杯するように教官のほうに上げます。

「酒を飲まない奴はすぐにノイローゼで頭がおかしくなってしまうてしまうんですわ。教官さん、あなたも別で酒を用意しますから一杯どうですか？」

教官は手のひらを其奴の顔に寄せ、生徒の前だから、と断っていました。

すると私達の前を縦縞の作業服を着た女子が、死体を大量に載せたりアカーを引いて

すぐそばを通り過ぎていきます。その顔をちらりと見て、つい最近見かけた者であることに気づきました。

「お姉ちゃん、あの娘……私達に投降したプラウダの戦車兵です」

姉はその光景から目を背けていました。その姉の袖を軽く掴み、少々無理にこちらに注意を惹かせます。

「いや……全く記憶にないがそうなのか？」

「はい、間違いありません。人の顔や名前はよく覚えてるんです」

「そうか……」

そのリアカーは掘られた穴の前へ運ばれて行きました。

次に北野に案内されたのは1階建てらしいのですが、そうは思えないほどとても高く広い建物でした。その扉が縦縞の作業服を着た人に閉じられ鍵がかけると、轟音がなりました。飛行機のエンジンのような音です。それをすぐ近くで聞いているような感じです。

暫くただその音を聞いた後、鉄の扉が重い音を立てて開き、中から人が大勢倒れこんできました。何重にも重なり、喋ることはありません。北野からそこから出てくる煙は吸わないようにと言われました。

日が傾いてきた頃、作業服を脱がされたさつきの子が穴の中に他の数人の者とともに立たされ、間も無く数発の銃声がそちらに向けられます。

「こうして朝会場近くの仮置き場から移送され一日働かせた者は夕方に処理し、翌日朝にまた作業員を選びます。これを期間中に数度繰り返して、全員処分します。その間飯は用意してません。ま、今はまだマシですが、最後に処分する奴は大概爪や唇がひでえことになってますな。場合によっちゃ歯型があることすら……」

「食事も寝床も必要なしか。効率のいいことだ」

「恐縮です。住処は移動用の貨物車ですしな。ところでお連れの隊員の方達はいかがなさいました？」

北野は辺りを見回します。

「向こうで泣いている」

「しやうがありませんな。ここを訪れた者は男だろうと女だろうと初日はああなります。ま、慣れですな、慣れ」

建物の裏でみな座ったり壁に顔を伏せたり立ったまま涙を流し続けました。私と姉はお互い強く抱きしめ合い、姉は声を堪えつつ、私はその胸に顔を埋め、号泣しました。醜聞もなにもありませんでした。

教官は顔の歪みに歪んだ私たちの前で以上のことを説明として加えると、私たちに試

合に臨む精神力が足りない、と叱責して帰りのバスに押し込みました。

次の日、12月8日の朝。

遠軽町 大洗女子学園陣地 捕虜収容所

河嶋が南京錠に鍵を挿し込む。そのまま高い金網でできた扉を、ギイと力を込めて押し開く。

「よし、出ていいぞ、みんな。我が校は諸君らを解放する。学校なり家なり、好きな場所に帰るがいい」

体育座りのまま俯く者たちに告げる。大半は何を言われたのか分からずに顔を見合わせるが、ガタイの良い2人の女が近づき、立ち塞がる。

「むっ?」

「大洗ツ!汚い手を使って同志カチューシャを死に追いやったお前達をこんな事で許すと思つているのか!お前らの温情など断固拒否する!」

「ああそうかい。私も言われたから開けに来ただけだ。居たけりやいつまでもここに居ろ。だが帰る金をやるんだから、ここでは飯はやらんぞ」

「黙れ!政治委員!」

後ろの隊員が立ち上がり、叫ぶ。

「出してくれるんだ！余計な事言うな！」

「大洗に感謝します！」

「さあ、出よう出よう！」

「帰ろう、プラウダへ！」

騒ぎはますます大きくなる。後ろへ、そしてまたその後ろへ。その立ち上がりの波が数百人程度に波及するまで、時間はかからなかった。なにせここにおいても飯も何も出ないのである。もう命の危険はない。帰ったほうがマシだ。

「な、何だと、貴様ら……」

「スパシーバ」

「スパシーバ大洗」

そう言つて河嶋の開けた扉から、礼を述べつつ次々とプラウダ隊員が外に出る。前に出ている2人は止めようとするも、その流れは止められるものではない。

やがてその2人も喰いかかろうとするかのような河嶋の覇氣の前に、舌を鳴らして引き下がるしかなかった。

「何か……釈然とせんな」

広がる無人の捕虜收容所を見渡す。先ほどまでの喧騒はすでになく、仕事と呼べるも

のはここを明け渡した上で、学園にある資産を元手に帰宅資金を用意し、彼らに渡すのみだ。

「まあよろしいではないですか。西住副隊長たつてのお願いですし、何よりカネはかけたくないでしょう?」

共に来ていたエルヴィンが帽子を整える。

「まあな……しかし、これを見る限り、あのカチューシャ独裁政権も終わりか……」

「元々黒森峰打倒を目指していましたから、こうなつてしまった以上仕方ないのではないですか?」

「それもそうか。そうなると……このままプラウダと黒森峰の対立は続くわけか……果たしてこの先、生き残つても学園はどうなるんだろうな」

「……恩は売つたとはいえ、親プラウダで立ち回るのは無理そうですね。ま、勝つてから考えましょう。いよいよ次は決勝ですしね」

「……ああ、そうだな」

会長なら……と考えようとしてやめた。しばらく涙は必要ない。

12月8日の昼に出た列車は丸2日かけて旧熊本県嘉島町にある黒森峰女学園に向かう。決勝戦会場は黒森峰女学園の南東の森林地帯と高台である。黒森峰が相手を呼

んで試合を行うときは決まってここだった。地形や風の通りなど、情景は今でも詳細に思い起こせる。

本州を日本海側と瀬戸内沿岸を通って縦断し、関門トンネルを越えて熊本から豊肥本線に直通し、水前寺から黒森峰支線に入る。健軍本町、秋津を通過し、到着するのは黒森峰駅貨物ターミナル。やはり戦車の積み下ろしがある為、旅客ホームに入れないのだ。

ホームがないため乗降口には梯子が取り付けられ、それを降りて久々にこの地を踏んだ。

「ここが……黒森峰。西住殿の生まれ故郷。立ち並ぶレンガの建物。戦車マガジンで何度も見た通りであります」

「んー。やっと着いたのね。すっかり、ホント長かったあ〜」

感動し辺りを見回す優花里さんの傍で沙織さんが大きくのびをした。そんなご立派なモンでもないぞ。ただ玄関だけは立派にする貧乏人だ。それにレンガだって外観だけだ。中や裏にや大概鉄骨が通ってる。

暫くして河嶋隊長の指示で戦車を降ろす作業が始まった。とはいえ軽く戦車の確認を取った上で、連盟から指定された場所まで移動させるだけだ。あとはここで車輛内部の確認、弾薬の補充などが済まされ、明日の戦線に投入される。

あとは乗員に関して一つ動きがあった。やはり風紀委員と船舶科の息が合わないらしく、カトラスさんと河嶋隊長の入れ替えを要求してきた。あの時返事したからそのまま押し切ろうとも思ったが、河嶋隊長が足並みが揃わなくなるのは良くない、と交代に応じたため、止む無く私も認めた。交代させたんだから、明日活躍しろよ。

その日の夜、泊まった建物は欧米調の立派なものだったが、部屋は全員同じ和室の大部屋である。17人が布団を並べる。因みに隣とさらに隣の大部屋2つも空き部屋だが、使いようがない。この部屋1つでも空きスペースがかなりあるし、わざわざ離れ離れになる理由もない。

夕飯はそこそこまとりな代物が出た。一応プラウダ潰しに協力した縁もあるのだろう。腹にも溜まったし、何よりそこそこ美味かった。珍しい。

で、夜寝ることになったのだが、あの乗り心地の悪い車輛も戦車より遥かにマシと思えばなんとかなるもので、車内で爆睡を続けていた私にはあまり眠気は残っていないかった。ま、それ以外に寝る気がしなかったし、眠れなかったというのもあるが。

さて、隣の優花里さんであるが、こちらも私と同じく眠れないらしい。列車のなかで私ほど眠れていたようには見えなかったが、それでも眠れないのだろうか。

目を開けたまま天井を暫く見上げていたあと、ごそごそと布団を抜け出して自分の力

パンをさつと漁り、紙とペンと厚めの本を取り出して、その本を下敷きがわりに何かを書き始めた。

何行か書き続けたのち、その内容が不満だったのか、その紙を置いて枕に頭を突っ込んだまま悶えている。厨二病か。

以上、小動物優花里さんの観察日記でした。

もはや可愛いは通り過ぎていく気がする。出会った日に殺しかけようとした時の姿はもうない。ぬひひ、このまま眺めていても良いのだが、そのまま気怠げに天井を眺め始めたので、今度は私から動いてこの可愛いさを堪能することにする。

「優花里さん……」

彼女の右から声をかける。

「は？あ……すみません。音しましたか？」

「いえ……あの、そちらの布団に行ってもいいですか？」

「ええ！……あ……も、もちろんであります！」

急に言われたことに驚きはあったようだが、すぐに紙と本を枕元に置いて布団を捲り上げてくれた。そうすると隣からのそのそと入っていく。

近い。近い。本当に近い。同じ布団に入った2人が顔を見合わせているのだから当然といえば当然だ。

「フフ」

この時はまだ私の方が余裕があると思っていたし、どう見ても向こうは慌てていた。だがゆでダコの触手が手に触れた時、私の手が細かく震えていたことに気づいた。向こうの表情は驚き。ホントに分かりやすく助かる。

何故か。戦場、敵、そしてそれが示す運命。この震えの原因は一つしかない。

そうか。私は分かかってしまっているのだ。そこにいたが故に。

「みつともないでしょう？ 私……死にたくない。明日の試合が怖くて、手が……震えてしまっています」

「そ、そんなの当然です！ 誰だって死ぬのは怖いであります！」

思わず半身を跳ね上げる。そうだな。だが私とその感情を持つていること、それが何よりも恐ろしいのだ。

「だから、こうして人の近くにいれば、治って眠れるかなって」

その隠匿に比べりゃ、こんぐらいの嘘は遥かにマシな代物だろう。

見合わせたまま視線をそらそうとはしない。気をそらそうと辺りに耳を傾けようとすると、周りから小さいが淫猥な声がする。場所は一ヶ所からだけではない。彼女の顔が赤い理由も、一部はそこにあるだろう。

「えっ……と、西住殿が近づいてらっしゃるのは……周りの事が少し……関係している

のでありますか？」

「しっかし久々だなあ、この環境。私は混じる気は無いが。」

「周り？ああ、この声のことですか。それなら関係無いです。もう慣れましたから」

「へっ？」

「どうやら人間命の危険を感じると、そうしたくなるらしいです。黒森峰の時も硬式の試合前の夜毎回聞かされましたから」

「……なんかイメージ崩れるであります……」

「やっぱり黒森峰の者でも人間なんです。当たり前ですけれど……」

「……」

基本戦車道を見るとしたら、テレビか雑誌かあたりだろう。そこにあるのは、戦車道の中でもかろうじてまともな部分だけ。最早それは『戦車道』ではない。

天井を眺める。天井にはうっすらと木の黒い年輪が流れる。

「そういうえば、先ほどまでは何を？」

「は……えっと、その……私も眠れないのです。だから遺書でも残そうかと思ったんですけど、明日は生き残りたいですし……」

遺書ね。確かに普通の両親とかには伝えたいこともあるだろう。特に学園艦在住だしな。私の親にか……呪いのメールでいいな。マナーモードを突破して、深夜3時頃に

鳴らしてやる。

「なるほど。では私も眠れませんし、この騒音に耳を傾け続けるのもなんなので、何か話しません？ 眠れないといって天井の筋を数えるようなことはしたくないので。でも迷惑だったら……」

「いえ、私も眠れなくて……遺書に書く様なことばかり頭に浮かぶので、ぜひお話したいであります。といつても私が話すことは浮かばないので、西住殿からどうぞ」

「……2つ話したいことがあるのですが、どっちからがいいですか？」

「何でありますか？」

「ただ私が話したいことと、勝った時のために知っておいてもらいたいことです」

「では話したいことの方からお願ひします」

「……分かりました」

そう切り出したものの、このことを話して大丈夫なのか。これは前の話とはレベルが違う。彼女らにとつての私の存在、その根底をひっくり返しかねないことだ。

「……これから何を言つても、信じてくださいますか？」

「えっ……は、はい。この状況で嘘をつかれるとも思えませんが……前の話も本当でしょうから……」

「そこじゃありません。私を、です」

「西住殿を？」

「はい」

「も、もちろんであります！西住殿は仲間であり、かけがえのない友人であり、尊敬すべき方であります！信じるに決まっています！」

「そうですか……」

話そうか迷ったが、次の試合だけはまともではない。この、この事実を知っている人間を私以外に作っておくべきだ。それが私に物語を吐き出させた。

第6章 ② 相互信用

「私は……人殺しです」

「へっ？えっ……と」

「私は、この手で人の命を止めたのです」

右手を布団から出して上に掲げ、それを見つめる。この手が、この手がやったのだ。

「……お、お言葉ですが今ここにいるものは、酷い話ですがみなサンダース、アンツイオ、プラウダの犠牲があつて生きております。それは特に西住殿だけが気にする事ではないのでは？」

「……」

「……あ、もしかしてお銀さんのことを……あれはやむを得ませんでした。あの足の傷と衰弱ではとても……そして彼女がそれを受け入れたんです。気にし過ぎることは……」

何とか私をフォローしようとしているらしいが、残念だったな。

「どちらもハズレです。悩める要因がそれだったら、私の心労は数百倍軽くなつたはずです。」

皆さんは戦車道のルールに則り犠牲を生んでいます。そして、生きるためにはこのルールに基づき勝たねばならない。

私は戦車道のルールの下ではなく、自衛の為でもなく、相手のことを思ったわけでもなく、ただ自分の保身の為に人の命を奪ったのです」

「……どういうことでありますか？」

「……私が黒森峰のSS装甲師団にいたことはご存知ですよね」

「はい。SS12部隊副隊長だったこと」

「いえ、それだけでいいんです。その事実だけで。」

SS装甲師団には戦車道大会に参加する以外にも役割があります。それは学園の防衛、および治安維持。それが実行されたのが、去年の黒森峰の等良政権への反乱の鎮圧です」

「え……そんな事を高校生に！あれは防衛隊主導かと思つてましたが……」

「デモ隊や武装した部隊に戦車で突撃するのです。それが学園の敵を壊滅させる最も早く効果的だと、姉は……単調な声でそれを命じていました。」

機銃の音、榴弾の音、全てが命を奪う為に響いていました。私は耳を塞ぎました。無線が、それも大音量で入ってくることを心底期待していました。履帯で人が踏みつぶされる音、身体が砲弾で碎け散る音なんて聞きたく無かった……」

今でも思い起こせば吐き気さえもたらずものだ。夕飯を食べてから時間を置いてて良かったわ。されど……そこまでしてでもまた事実にして伝えておきたいことなのだ。

「ですが当時の私は西住の者として、頭を出したまま外を見なければなりませんでした。知ってますか？人間の身体って思ったより弾が貫通しないので、大量の弾丸をくらうと、血飛沫を残してまずは身体が吹っ飛ばされるんですよ？ま、流星に上半身丸ごと消し飛ばすほどじゃないですけど。そして榴弾になると、本当に腕や脚だけが宙を舞ったりするんです。骨と血肉を剥き出しにしたままね。

来年高3になれば私が隊長となり、もし反乱が起きれば私が鎮圧を指揮することになります。平然とした顔でこなせる姉と違い、私には出来る気がしなかった。それから逃げたかったのも、私が大洗に来た理由の一つです」

「なんということを……」

「ですが、それもまだマシです。攻撃しなければ自分も死ぬ、と自分自身を説得できましたから……本当に自分が許せなくなるのは、自分が死ぬ可能性の直接的な原因ではない人を殺した、あの時です」

ただ表情を変えずに、次を待っていた。

あれは私が高校に入って、装甲師団に入団してから直ぐのことでした。黒森峰では師団に入った者は必ず最初の1年間、処刑人の任に付くか歩兵として一定期間任に付くことになっていました。配属先によって異なりますが、SSだと4ヶ月くらい、でしたね。何でかつて？硬式戦に赴いたり、さつきみたいに反乱を鎮圧する時、躊躇わないように、すなわち人を殺す経験を作っておくためです。名目上は防衛時の歩兵協調の訓練や学園への忠誠心云々でしたが。

私が選んだのは、処刑人になることでした。そもそも私が一年生の時点でSSでも精鋭部隊に配属されてしまったので、歩兵訓練に回す時間がなかったのもありますし、勿論反乱や学園における重大犯罪などが無ければ何もしなくて良い、ということもありました。

しかし残念ながら、その時先ほどとは別件の反乱の計画をしていた者が捕らえられ、銃殺刑になることが決まりました。その処刑人に私が決まったのです。外から見てもういうのは苦手だと即座に分かったのでしょうか。やらせなければならぬ、と。私に拒否権などありませんでした。

実施が決まっても、私には何もできませんでした。無論その者との面会などはできませんでしたし、そうなれば心の準備もありません。が、私がここにいるためにはやらねばならないのだ、とは理解していました。

処刑当日、目の前の者はコンクリートの床の上で口を塞がれ、手足を縛られて転がっていました。周りには姉を含む他の隊員が立っていました。きつと私の醜態を見届ける気だったのでしょうか。床の上の者が暴れば直ぐに近くの者が殴って黙らせませす。

私の手には処刑用のモーゼルC96が握られていました。本来は拳銃の中でも遠距離向きなものなのですが、国内でも日中戦争での将校の捕獲品として辛うじて残っていたため、学園内では高級将校のステータスシンボルなどとして使われていました。

心臓が激しく鼓動し、手は汗で銃を滑って落としそうなほど濡れていました。元から重かった、というのもありますが。

「みほ、早く撃て」

足は震え、顔は硬直し、口は手とは逆にたった一滴の水分も含んでいませんでした。「撃たないと周りの者がこいつが暴れる毎に抑えているんだ」

脳の半分は認めていました。しかし残りの脳の半分と身体が撃つことに抗っていませんでした。

「その者たちの苦労も考えろ」

目の前の者が再び暴れ出し、他の隊員が顔面を何度も殴って鎮めます。

「お前は、自分の意思で人を撃つことを決めたんだ。撃たなければならないんだ」

そう、それを自分の意思で決めたこと。歩兵ではなく処刑人になること、それを決めたのが私であることが重く心にのしかかります。そしてここにいるためには、撃たなければならないことも。

「どうした。こいつは黒森峰の敵なんだ。撃つんだ。お前は学園長に忠誠を誓ったんじゃないのか」

目の前の者は反抗する力を失ったのか、唸りながら涙を流します。撃つたらどうなるとかは考えられませんでした。ただ引くか引かないか、それだけが頭の中で揉めていました。

「その指を、引け、引くんだ、早く。お前が黒森峰SS装甲師団の者ならば」

この揉めごとの決着はなかなか着きません。頭の混乱が内臓にまで及ぶような感覚に襲われます。胃が裂けるのでは、と本気で思いましたよ、あの時は。

「お前がどうしても撃たないなら……仕方ない」

左側頭部に金属らしきものが当たるのを感じました。

「お前を反乱罪で処刑するしかない」

「ちよ、ちよつと！副隊長！」

横にいたのは、こちらにモーゼルC96の銃口を向けた姉の姿でした。親指でハン

マーを固定します。口調、顔いずれもいつもと変わりませんでした。向けた相手は家族ではなかったみたいです。

「流石に後継ではないとはいえ西住の娘さんですし、学園長や隊長の許可を得たほうが……」

「必要ない。反乱罪であることはお前達が証言してくれるしな。みほが殺さないなら、こいつは私が殺す」

恐怖とともに少しの油断が生じます。姉が西住の血を引く私を本当に殺すわけがない、そう高を括っていました。相変わらず手は汗で濡れ、足は震えています。

その時でした。首の後ろを一筋の風が吹き抜けます。後ろの髪の毛の数本が自分ではなくなりません。耳元では鼓膜がちぎれんばかりの音が轟きます。壁には弾丸がめり込み、その周辺も放射状にひび割れていました。

恐る恐る左を見ると、高く挙げられた姉の銃からは縦に煙が登っています。反動があつたのは明らかでした。

「まさか撃たないとも思っていたのか？お前が黒森峰、ひいては西住流の敵となるなら、遠慮なく頭に撃ち込むぞ」

恐怖で支配され、声帯は固定されました。考える余裕は全くありませんでした。

「さあ、やれ」

姉は次弾発射の用意を終えて冷酷に言い放ちます。私はハンマーを移動させましたが、手の震えで狙いが定まりません。

「…………お姉ちゃん…………」

「…………おい！」

姉は部下2人に指示をして、床にいた者の肩を掬い上げて、頭が銃口に当たるようにさせます。目の前の者はあと数分もないことに気づいたのか号泣し、口を塞がれていても分かる程大きく嗚咽を繰り返しています。その目は路上に捨てられた猫が助けを求めようでした。

「さあ、早く。ここままでさせて何もしない気か？なんなら私がこいつを撃つた上で、お前を銃床で殴り殺すか？確かに反逆者に銃弾を捧げる価値もなさそうだしな」

姉が銃口で左側頭部を突きます。次はありません。生きることが、全てでした。

私は大きく息を吐いたあと、目を瞑り指に力を込めました。先程と同じ大きな音が生じた、私の指には温かい液体がかかります。その者の背中側には、放射線状に広がるヒビの入ったコンクリートの壁がありました。

涙を流さなくなったその者は肩を離され、力なく顔からコンクリートの床に倒されました。たったそれだけ、指のわずかな力だけで、1人の人間が…………動かなくなるんです。

私の手はその時が限界でした。手を滑らせて床に落ちるモーゼルの音は私の耳に焼き付いています。

「よくやった」

「西住みほ伍長、万歳」

姉が銃を降ろし、左手で肩をたたきます。周りの者も右手を掲げて敬礼します。

「これでお前は本当に我々の一員となったのだ」

その時から、私は命のやり取りの場でも冷静になれるようになってしまったのです。そう、これよりはマシだ、と。

無言で言うことを聞き続けてくれた。口を挟むのは野暮だと思ったのか。

「これが、私です。これでも、私を友達と思ってくれますか？人と付き合う時、あなたはその人が殺人者であると考えますか？

考えないでしょう。自分と同じく、真つ当に生きてきているはずだ。そう思うのが普通ですし、そうするのが信頼の基本です。が……私はそうではない。

このことを伏せ続けてきた以上、この先も私の友であれ、とまでは言いません。しかし明日だけでも結構です。私を信じてくださいますか？そして……どちらかが生き

残ったら、この話を伝えてください」

どちらも生き残る。不可能ではないかもしれないし、そうあって欲しいが、現実はどうはいかない。普通に考えればどっちも死んでいる可能性が最も高いのだ。

さてこの話を聞いてどう動く。装填手、その身の上である彼女に伝えたのも、最悪の事態も想定しているからだ。もしそうなったら、損害は大きいが。

「私は……」

さあ、話せ。結果を受け入れる用意はできている。

「……私は、申し訳ないですが、西住殿に恐怖を感じました。サンダース戦の時、バレエ部チームがやられても、動じた素振りを見せずに、むしろ笑顔で指示を出すその様子がたとえ仲間が死のうとも、淡々と指示を出す様子が、不気味でした。きっと私が死んだとしても、そう対応なさると思います。勝つ、一人でも多く生き残る、その目的を勘案すればそれは正しいのです。分かっているのですが、その気持ちを私は否定できません」

あり？ 私サンダース戦でそんなにサイコパスじみたことやったっけ……

まあいいや。確かに後半はその通り……かもしれない。状況によるかな。いや、そう考えている時点でもう狂っているのかもしれない。

「それでも、それは9月から育んだ友情全てを否定する理由としては不十分であります。

例え西住殿が殺人者であつても、我々との友情を信じられないとしても、私は西住殿を友達と思いますし、戦車道の選手として尊敬しますし、大洗の仲間の一人としてついでいきたい。

確かに3ヶ月という期間は短いかもしれませんが。しかし時間というものはそこまで重要でありますか？ひと時とはいえ、心を通わず時間を得られたら、それは友情であり、決して消えぬと思います。そして幸いにも、それは一度のみではありませんでした」

友情、ねえ。ついこの前までそれを否定するようにされてきた、というのに、今はその言葉を聞いて、言いようのない安心に包まれている。前に聞いた時もそうだった。そしてこの環境で、私は昔に戻っていた、と思っていた。

「育んだ友情……」

「ええ、それは簡単には崩れません。以前がどうであれ、今の西住殿は我々の友達であります」

先ほどと距離は同じ。されど顔から赤みは抜け、真剣な眼差しのみがこちらに突き刺さる。

そうか……彼女に話したのは正解だな。

「やっど……果実が実りましたか……」

向こうはこの言葉に納得いかないようだが、自分で納得しているから問題ない。

純粋な、果実が実った。今まで花が咲いたことはあった。しかし実る前に相手が亡くなったり、花を咲かせた目的が西住流に対するもので純粋でなかったりと様々だった。全く運がなく、境遇が最悪だ。それだけではなく自分への後ろめたさもあり、実らせることを躊躇っていたのかもしれない。

大きく深呼吸吸した。

「……今の話聞いてそれ程言ってくれるなら、信じるしかない……ね」

「ありがとうございます」

「だったら、その友情が長く続くよう頑張りましょう」

「そうでありますね……」

長く続く。それは明日までかもしれない。

「それにしても、どうして西住殿のお姉さまは妹に銃を突きつけるなんて事ができたのでしょうか？ 私は一子ですが、もし親を撃て……なんて言われたら、自分を撃つてしまおう、と考えてしまいますが」

「……一度だけ、聞いた事があります。本当に撃つ気だったか、と。姉は頷き、

『どうして人を無慈悲に撃つなんて事が出来るの？』

と私が聞くと、暫く考えて言いました。

『私が西住流そのものだからだ』

と。ですが私はそうはなれませんでした」

人を躊躇なく殺すのが西住流。それは硬式戦車道という環境と絶対勝利という条件を同時に満たすために、最もやり易い手法。そしてその為には、人間を壊し、野生に戻さねばならぬ。

姉は病院にお世話になる前に、すでに壊れていたのだろう。

「ところで、もう一つのお話というのは何でありますか？」

優花里さんが次の話を振ってきた。ありがたい。精神的交流を図れた以上あまり用はない。そもそもどちらも好んで使いたい話題じゃないんだから。

「もう一つは、生き残ったあとにあることです。生き残った後、私達は亡くなった方の親御さんに会わなくてはなりません。そこであるのは、親御さんからの追求です。生き残ったら避けられません」

「……でも、我々にはどうしようもないでありますよ」

「そうです。もうどうもできないのです。しかし向こうは大事な家族を失ったのです。どうしてあなたが生きていて、娘が死んだのだ、と思う気持ちは止められないのです。たとえそれが運に左右されるものだとしても」

「……大事な人を失う……でありますか」

「そうです。それも自分の腹を痛めて産んだ子。

私も去年の大会の後、多くの親御さんに会いました。姉は植物状態だった為、私が公式記録や見た情報を元に報告しました。

とはいえ文字では不十分な上、私も全てを見たわけじゃありません。特に収容所に入られてからは、同じ奴らに罵られた集団を語るだけで精一杯でした。

そんな不完全な情報でしたから、親御さんの一部は『報告なんて聞きたくない!』と叫んだり、人によっては私に掴みかかってくる人もいました。そういう人はSS歩兵師団の人に有無を言わせず連れ出されていきました。わめきながら肩を掴まれて連れ出される姿は、どんどん私の中に蓄積されました」

「……そう言いたくなるのもわかる気がします」

そうだろう。特に子供が手紙を残したいと思わせる親なら、親からの愛情も相当だろうし。

「もしかしたら明日私が死んで優花里さんが生き残るかもしれません。そういう事もあ
るのだと知っておいてください」

「……分かりました」

「……明日は、勝てたとしても被害が確実に出ます」

布団の端を強く握る。予想できてしまう未来が、頭で幻影として駆け巡る。

「できるだけ出ない様に考えていますが、この戦力差だけはどうにも出来ません」

「それは……敵は20輻の精鋭、こちらは質は悪くはないとはいえ4輻。しかも敵にはティーガーIIなどがいますから」

「作戦にも、残念ながら運が混じります。そのせいで皆が死ぬのが怖いのです」

「どんな作戦であつても私は西住殿についていくであります」

「……それが、怖いのです。皆が私を信じているからこそ……」

「かといつても命令を守らない方がいいわけではないでしょう」

「そうなんですけど……」

疲れた。この話はせねばならないとは思っていたが、やはり精神的な疲労が肉体に添加されてのしかかつてきた。電車での眠りは浅いものだったのかもしれない。恐怖は睡眠で打ち勝つしかない、か。

その返事を考える体力は、眠りに落ちる前に尽きてしまった。

小さな地震の様な揺れでホシノは目を覚ました。折角眠つてたのに。イラつきながら身を起こすとそのせいか隣のナカジマも起きる。

「ごめん、起こした？」

「いや、この揺れと声が……」

「ああ……」

周りには3つ程の山があるそれは上下に揺れ、吉原を歩けば聞こえそうな音が中から響く。

「な、なんだ……おかしな連中だとは思っていたがここまでとは……マトモなのは自動車部だけか」

ホシノは山脈を眺めたあと、周りを確認する。近くのスズキとツチヤは熟睡中だ。あの意味安心した。

「軍隊に同性愛は付き物らしいよ」

ナカジマも乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

「ほんと……戦車道って軍隊だよなあ」

第6章 ③ 曇天の朝

天気は……どんよりとした曇り。遂に当日だ。風は大きくなく、湿度も高くない。そして6時10分に起きた私は、窓の外の様子からそれを冷静に察知できている。隣の人もすぐに寝ていたらしく、まだ起きる気配はない。

ゆつくりと布団から這い出て一度大きく伸びをしたあと、部屋の外の洗面台で顔を洗いにいく。まだ起きている人はいない。皆の寝顔はまだ生きてそこにある。

冷たい水を顔に浴びせ、部屋に戻って寝間着から着替えている間に、ちらほらと目覚める人が現れた。その中で何故かパイタッチを狙ってきたマゾに対しては、お望み通りであろう張り手を一発。

やはり煩いな、これは。そしてそこまで嫌そうでもないところを見ると、やはり本物らしい。ま、周囲には引かれているぞ。

部屋の中央にテーブルが置かれ、大皿の上には17個の黒パンのサンドイッチがある。ラップで包まれておりこぼれにくくなっているが、1個当たりはそこまで大きくない。それを1人を除いて食べ終わると、皆自分の支度に戻る。私もぱっぱと済ませ、水

をいっぱい飲み干すと、やるべきことを脳内でまとめ始める。

次の試合は圧倒的不利だ。車輛数とその質のみならず、会場が黒森峰学園都市内部に存在しており、黒森峰の戦車道や戦車師団が日常的に使っている演習場である、という点も勘案しなくてはならない。

土地に関してはむしろ向こうに利がある。会場内の散開、奇襲狙いほど阿呆な手はないだろう。

だから勝つためには3つの奇跡が必要だ。私のみみっちい外交知識もフル動員して概要は作つてある。だが一つ一つも奇跡な上、それを確実に起こさねばならない。殆どの人間がこの案を見ても、負けるしかないじゃん、と答えるだろう。

私もである。

逆に、これが1番勝ち目のある策、というのが大洗の衰しいところだ。

6時50分、出発予定時刻10分前。その1人を布団から引つpegがそうと沙織さんが奮闘する。

「麻子起きて！あと10分でみんな出発しちゃうよ！」

「人間が7時に起きれるか……」

沙織さんが布団を引っ張るが、麻子さんはがっちりと角を抑えている。答えられるな

ら起きてほしいものだが。

「何言つてんのよ！起きなきゃ試合出来ないんだよ！着替えても無いし朝ご飯も食べて無いんでしよう！お腹減つても知らないよ！」

「それも今朝2時まで叩き起こしていた張本人が何を言う……」

「麻子夜型なんだからいいでしょう！それはそれ、これはこれ、早く起きて！私だつてそうなんだから！」

「沙織がこつち来たんだろ……それに5時間睡眠で人間が起きれるか……無理だ。出来るわけがない」

沙織さんはかなり苦戦している。華さんが一瞬スカートを留める手を止めた。

さて、起きろ。

カバンのチャックを閉じて麻子さんの正面に向かう。正面に腰をおろすと、枕の前で思いつきり、部屋の空気が震えるほど手を叩いた。

「麻子さん！来てください！今日の作戦に、勝つ為に麻子さんは欠かせないのです！」
手を合わせたまま深く頭を下げる。彼女が欠かせないのは事実だ、というよりこの場にいる人間すべての参加は必須事項だ。

麻子さんがようやく動き、むくりと顔を上げた。

「……」

「どうか……」

「わかった」

そう言うが早いかな、すぐ様ゆっくりながら布団から身を起こし、机の上のサンドイッチを手早く食べ、先程からは想像できないくらいに速さでテキパキと着替え始めた。

「なんで私がやってこんなに起きなくて、みほりんが声かけるとすぐ起きるのよー」

「西住さんには恩義がある」

「私にはないの!」

「ない。最悪でも西住さんには及ばない」

「もー!」

沙織さんが口を尖らせる。そんなもんかあ。

「沙織さん、支度は終わってらっしゃいますの?」

「あ、そうだ! やらないと!」

沙織さんは自分の荷物の方へ戻った。麻子さんが起きたのにはこれもある気がする。幸い他にこれなさそうな人もいない。あとは現場に突入するのみだ。

皆の支度が終わり、窓の外を眺めたり床に横たわってくつろいでいた頃、予定時刻丁度に扉が開く。

「大洗女子学園の皆さん、時間です。出発してください」

係の者の案内のもと、移動用のバスまで行く。入り口を出ると、上からゆつくりと落ちてきている物がある。白いが、雪ではない。雪にしてはあまりにも大きすぎる。

「ビラだ」

「あれ……黒森峰？」

「フォック、アハゲリス……間違いありません、黒森峰です」

頭の上ではヘリの親威が轟音を立てて飛び去っていくように感じていた。それぞれ近くのビラを手取る。空中のものを捕まえる者もいれば落ちたものを拾う者もいる。私も適当に捕まえた。

「何これ、アルファベットに点々が付いている」

「ウムラウト……ドイツ語だな。英訳も書いてある」

「日本語で書けばいいのに……」

麻子さんは少しその英文を眺め、スラスラと訳し始めた。流石だな。私も意味はないと予測しつつも、文面には一応目を通す。

「大洗女子学園の皆さん。我が校は皆さんに投降を勧告します。試合とはいえ、我々はいたずらに犠牲者を出すことを望みません。戦闘を放棄して投降した者には危害を加えません。私物は没収せず、友人達と同室にて収監し、その後はただちに全員解放し帰

宅させることを約束します、かな」

フン、自分の顔を鏡で見ながらそれをしゃべってみやがれ。

「えっ、それって!」

「戦わなくても降伏すれば無事帰れるの!」

一部の者の顔が変わる。アホか、私の話を聞いてなかつ……たか。だが私に従ってきた者たちだ。何をするか……予想できるだろう。

「くさいな」

左衛門佐さんが首をひねる。ま、武田を知ってりやこれくらいの罠は分かるか。

「うむ、これは敵の某略。相手の士気を鈍らせる常套手段。今まで捕虜を殺しまくって
おいてどの口が言うんだ!」

「甘く見るなよ、黒森峰!」

河嶋隊長が縦にビラを引き裂き、その音で皆の少し浮かれた感情は突き崩された。

よかったよかった。本当に離脱だけは避けてほしいもんだつたし。

バスに乗り、都市の南西の郊外にある会場、前線へ向かう。

黒森峰学園都市 ライヒ病院

学園の施設の集中する中心部、フリードリヒ地区にある、都市のみならず県内でも

トップを争う総合病院である。だがこの病院といえど、どうも出来ない患者もいる。

その病室の一番奥、若干隔離されているのかと思える位置に、その人の病室はある。正直この位置は正解だろう。学園からしてもあまり公にはし過ぎたくない話だ。

「それでは、そろそろ出発します」

席を立ち、靴の踵同士を当てて鳴らし、右手をまつすぐ掲げる。誰もが同等の仕草を返すべき敬礼だ。

しかしベッドの上の者から返事は無い。ただ点滴の管によって生かされたものとなっており、その目には一切の光が差し込まない。

西住まほ、黒森峰と提携する西住流の家元後継者にして、『本当の』黒森峰女学園選抜戦車隊隊長。私なんて……到底かなわない方。

「プラウダに奪われた優勝杯、必ず取り戻して参ります」

最後に一礼して、病室の外に出る。外には緊張の面持ちで一列に隊員が並んでいる。ドアは空気圧が抜ける音をさせて閉じた。

「逸見隊長代行。西住隊長の容態は……」

そう、私は代行。その呼び名が、懐旧の情にかられていることをひしひしと伝えてくる。先頭にいる者が尋ねてくるが、表情からもう読まれているだろう。

「ダメだ、完全に昏睡状態だ。話すこともできない。出場は無理だ。残念だが選手登録

は抹消しよう」

奥歯を噛み締める。周りの者の表情は変わらず緊張の面持ちだ。

隊長はただ隊長であるだけではない。西住の正嫡、たとえ話せるだけだとしても、参加している。それはあいつに対抗するに余りある名声であった。

「そんな……」

「決勝でも西住隊長の指揮がないなんて……」

それがないのである。この不安は私では止められない。

「相手は部隊戦術なら姉をも上回るとささえ言われるあのみほ元副隊長」

冷や汗を流しながら顔を見合わせ続ける。

「硬式の実績は相手の隊長が明らかに格上……」

「クッー」

流星に聞き流せず、その者を睨みつけようとした。しかしすぐに思い直す。あいつと私では格が遥かに違う。それは確かだ。

出場した試合はあいつが1年生から合計7試合、私はこの大会が硬式初出場で、出場した試合は準決勝の参戦を含めて3回、そのうち1回がほとんど戦闘なく飛行機で逃亡しやがった知波単戦であるため、実質2回である。

いや、そのうち1度もヨーグルトが協定通り降伏し、こちらも捕らえておく意味もな

いので解放した。彼らの捕虜の中にはグロリアーナもいたが、上から彼らも解放するよういふ言われ、若干癩だが解放した。

つまり実戦経験一回、あの大洗への参戦のみだ。そしてここにいる者の多くも、経験は同様である。ましてや今回が初、という隊員もいる。

「エリカさんの指揮で西住流に勝てるの……」

しかも黒森峰は7月の大会、プラウダ戦で硬式経験者を失いつつある。その為今回の試合に参加する者には初出場の者が多い。数や火力で学園は勝っても、殺られたら自分達は終わり。その恐怖を揉み消せていない者たちばかりなのだ。

その点では今回の大洗にさえ劣るやもしれない。

一列に不安が連なる。緊張の面持ちどころではなく悲愴感で溢れている。しかし一人だけそうでない者がいる。赤星小梅だ。

中学の頃から精鋭に所属した学年でも有数の実力者であり、あいつ以外に昨年の軟式大会の選抜戦車隊の車長に選ばれた唯一の人物である。そう、本来であれば私の学年であいつの補佐をするべきだったのは、その時予備車輛の車長だった私ではなく彼女なのだ。

ではなぜ私か。一つは精鋭が虐殺されたこと。これにより一つ上の世代で隊長を務

められる人がいなくなったから。もう一つは彼女、小梅が黒森峰での軟式での10連覇を妨げたもう1人、とされているからだ。

彼女の乗った偵察用の111号が、豪雨でぬかるんだ道が崩れたために川に落ちた。そこで後続にいたフラッグ車の車長だったあいつが、助けるために車輛を放棄して川に飛び込んだのである。

無論頭のなくなった戦車に何もできはしない。フラッグ車は撃破され、黒森峰は忘れることのできない敗北を喫したのである。

あいつの行動のみならず、対応が遅れた彼女もまた批判の対象となった。そして今年の基本精鋭部隊からは外れていたし、昇進もなされなかった。

そして夏の硬式戦で階級が軍曹以上の方々が殆ど死亡。あいつもいなくなった結果、当時伍長だった私が二階級特進で曹長になり、代行を務めるに至ったわけである。

逆に言えば、私を代行にしたり彼女を出して文句が出ないほどに、今の黒森峰選抜戦車隊は人材が逼迫しているのだ。

何もできないでいた。この場の雰囲気正す手段など、いや手段の問題ではないな。私自身が力不足なのだ。

その中で焦燥が渦巻いていた中で、急に彼女が首を左右に回した後、靴の裏で3度床を叩いた。

♪ オブ シュトウーム オーダ シュナイツ
 Ob, s s t · r m t o d e r s c h n e i t

(嵐の時も雪の時も)

♪ オブ デイ ゾーンネ ウーンス ラハト

Ob die Sonne uns lacht

(太陽が照る時も)

再び靴の裏で2度床を蹴る。いきなり歌い出したことに周りの者は茫然とする。私
 もだ。

だがこの歌はよく知っている。

♪ デイア ダーク グリューエン ハイ ス

Der Tag gl · h e n d h e i ·

(灼熱の昼であろうと)

♪ オーダ アーイスカールデイ ナハト

Oder e i s k a l t d i e N a c h t

(極寒の夜であろうと)

隣の者が歌に加わったのを皮切りにその隣、その隣と歌を歌い始め、リズムに合わせ
 床を叩く。

♪ベジュ タウ ジン デイゲ ジヒター

Bestaubt sind die Gesichter

(顔が埃にまみれようと)

そうだ、我々は引いてはいけけないのだ。学園都市のため、学園長のため、戦車道のため、黒森峰のため、そしてここにいる全ての者のために、引いてはいけけないのだ。それがすべきこと。私が弱気になんてなつてはいけけない。

♪ドツホ フロー イスト ウン ザ ジーン

Doch froh ist unser Sinn

(高らかなる我らの士気)

♪イスト ウン ザ ジーン

Ist unser Sinn

(我らの士気)

歌に加わる。自らの決意を自分自身に浸透させようと下腹部に力を込める。すべての者が歌う、この士気よ。

そしてこれを彼女が歌い始めたのだ。あいつにあの時救われた彼女が。

♪エス ブラースト ウーン ザ パンツァー

Es braust unser Panzer

(我らが戦車は突き進む)

♪イム シュトウーム ヴイーン ダヒーン

Im Sturmwind dahin

(戦いの嵐の中へ)

やっとこのベージたちも、戦いの嵐の中に身を投じることを決めた。礼は後だ。今は病院の看護師に謝罪して向かうのだ、先へ。

黒森峰学園都市コットブス地区 試合会場外の一角

「ダージン様、そろそろ始まりますね」

「ええ。それにしても今日の紅茶、貴女が淹れたにしては少し濃いですわね」

「すみません」

ペコは顔を伏せる。

「いえ、いいですわ。大方私達がここにいていいものかと考えていたのでしょう?」

「……はい」

「こんな言葉をどこ存知?」

All is fair in love and war.

イギリス人は恋愛と戦争では手段を選ばない」

「正直今一番聞きたくなかったです。私達、ヨーグルトに降伏し、彼らが黒森峰に降伏することで全員解放してもらったのですから」

「良いじゃない。私たちは生きていますよ?」

「でもそれは犠牲の上です。BC自由の離反組を……倒していますし、そして今日の前ではあの時好敵手として戦った大洗が殲滅されんとしている……」

「全く、同じチームくらい方針を一致させておいてほしいものですわ。あそこを支援するサンダースの気が知れない」

「何か……申し訳ないんです。その人たちの命の上に、のうのうと生きていることが」

「人は生きていなければ何も出来ませんわ、アンチヨビさんのようにね。一方で我が校はこれで犠牲者をあまり出さずに済み、その上安泰ですわ」

「安泰ですか?戦車の数を元に戻すことに予算を取られるうえに、黒森峰に目をつけられて面倒だと思いますけど。プラウダのカチューシャさんも……」

「この大会で関東情勢は一変します。その黒森峰も今まで、そしてこれから力を削られようとしているではないですか」

「へっ?」

「ペコさん、貴女には聞えませんか?熊と象の足音が」

「熊と……象？」

「今後はその間を取り持つことに尽力すればいい、それこそが我が校の安泰の道とお上は思ふかもしれませんが……ふふ」

ペコは首を傾げる。その時、2人の後ろからローズヒップがダージリンのもとにきた。

「あらローズヒップさん、どうしました？」

「GI6から情報です。上層部から得たため、信頼性は高いとのことですね」

「ありがとう。それとオレンジヴァールとの交渉は？」

「なんとか纏まりそうらしいですね」

「素晴らしい報告をありがとう。そう言われてこそ、あの小煩い3会派のお姉さま方を説得した甲斐があるものです」

「あとお二方も現在こちらに向かつてらっしゃいますね」

「そう。風邪をひいてないといいけど……途中で手配しておこうかしら。あ、ローズヒップ。連絡ついでにこの紅茶少し濃いから、ミルクをお願いできるかしら？」

「お任せですわー！」

ローズヒップは風を引き連れて去った。ダージリンはローズヒップから受け取った手紙をすぐに開く。と思つたらすぐに確認を終え元に戻した。

「どうしました?」

「象の足音はやはり本物のようですわ。ウチのG I 6相手にこれほどのプランを伏せ続けてきたとは、流石は彼らといったところでしょうか。」

「そういえばそろそろ試合が始まりますわね。果たしてみほさんはどんな戦いを見せてくださるのでしょうか。あの時みたいにはラハラさせてくださるといいわね。楽しみです」

「え、ええ。そうですね……」

決勝戦 黒森峰側陣地 7時40分

「全車輛エンジン入ったか?」

「まだ13号車が終わってません」

「遅いわよ、早くしなさい!」

「すみません」

「エンジン始動終わった車輛の者はこちらに集まりなさい」

「遅い。あと30分もないのだ。脇にいた直下さんがそれを抑えにきた。」

「焦りは敗北に繋がりますよ。エリカ隊長。まだすぐに試合が始まるわけじゃないんですから」

「直下曹長……」

「その呼び方はやめてくださいよ。今は貴女が隊長なのですから」

こんな試合の前なのに、笑顔とまではいかないが、緊張が見えない。

「いやしかし、貴女は夏のほぼ唯一の生存者です。尊敬しないわけには……」

「はっはっは。同じ曹長とはいえ、貴女は親衛隊、私は防衛隊です。顎で使ってくださいつて構いません。私にあるのは実に残酷な経験だけ。精鋭を指揮をすることはできませんから」

冗談をよく言うものだ。防衛隊の軍曹であつた際に乗員の一人として夏を生き延び、そして普通に一段階昇進して防衛隊の学生大隊長を務めているのが彼女だ。人を纏められぬはずはない。

「普通に考えれば勝ち目しかありませんが……相手があのみほさんですからねえ。しかも母校の運命が背景にあるとなれば……一応の土気もありそうですね」

彼女が少し顔をまともにして話を続けた。全く、国も面倒なことをしてくれるものだ。

「きつと何か手を打ってきますが……それは読めませんね。援軍の可能性は相当低いと思われますし」

「ま、プラウダとサンダースを共に敵に回していますしね。他は……」

「聖グロもないでしょうね……でも戦いを挑んできているところを見ると、やはり何かしら期待があるのかもしれないわね」

「みほさんにですか？」

背後からもう一人の声。歌の始まりの声だ。

「小梅……」

「期待があるなら丸ごと押し潰すのみ。その力を我々は持つてます。私も黒森峰の人間ですし、敵と害を倒すことに躊躇いはありません」

「そうよね……さきほどはありがとう。あの時の歌が無かったら、統制も何も無かったし、私は何も……」

「いえ、あれが私の役目です。試合に集中しましょう」

ただ静かにそう返事してきた。私と直下さんの間から、遙か先を見据えるような目をして。きっと答えても、話は聞いていない。

「そうね……」

「13号車、エンジン始動しました」

やっとか。時間が残っているのは幸いだ。

「全員集まりなさい」

車長を先頭にその後ろに乗員が整列する。ティーガー1が1輛、ティーガー2が2輛、ヤークトティーガーが1輛、エレファントが1輛、 Mausが1輛にパンターが7輛、ランクが4輛、III号が3輛。車輛総計20輛。決勝に参戦可能な戦車数の最大だ。視界には合計96人の隊員が並ぶ。その命が私の指揮に掛かっている。だが見せるわけにはいかない。その不安を唾と共に飲み込むと一息つき、口を開いた。

「私達はこれから戦わなくてはならないわ。その相手はつい半年前まで共に戦い、勝利と敗北を分かち合ってきた仲間よ。

されど彼女は西住流を破門され、黒森峰から追放された。しかしその力は、大洗で、この大会で何倍にも膨れ上がったわ。残念なことだね。

大洗は今年度限りでの廃校、学園都市の廃止を通告され、その停止という微かな希望に戦車道を結びつけ、それにしがみついてきているのよ。そしてこの様な状況の中でも、仲間達と彼女自身の愚かさ故に戦い続けているわ。

しかし！我々黒森峰は戦車道の絶対王者よ！撃ては必中、守りは固く、進む姿に乱れなし、鉄の心、鋼の掟、それらを我々は持ち続け、それを我々の中で膨らませているわ。たとえ何が相手だとしても我々は戦い、勝たなければならぬ！

大洗女子学園を粉碎しなさい！敵4輛全車撃破し、1人でも多く生き残るわよ！生き残り、この戦いを次に伝えていくことが、学園長への最大の忠誠と思いなさい！」

「ヤヴオール!!?」

「その返事をしない者はいなかった。油断はない。皆あいつを知っているから。だからこそ、私たちは勝てる。」

時を待つ。始まりの笛を。燃料の浪費はこれ以上必要ない。あとはすぐに、手早く、この場で倒す!

第6章 ④ チャレンジ

2012年12月11日火曜日 午前8時

黒森峰学園都市南東部、ブレスラウ地区の高台で審判の右手が挙がる。最後の戦いの始まりを告げる笛の音色は単調だった。たったこれだけで、何人もの命を吹き飛ばすゲームが幕を開けるのだ。

「全車反転！あんこうに続いてください」

大洗戦車隊は続々と会場中央に背を向ける。本来は敵に背を向ける行為、あまり褒められたものではないが、この試合では運はそちらにしか微笑んでいない。ここは会場の西側。黒森峰がこちらに向かつてくるまで、思っているほど時間はないはずだ。

なにせ戦力差がこれだ。わざわざ中央の森林地帯でこちらが出てくるのを待つ必要はない。さつさと距離を詰めて撃破、黒森峰らしい、かつ手間がかからないいい手だ。私がある場所で指揮を取っていてもきつとそうするだろう。躊躇う理由がないからだ。

そしてその時、相手は私たちの行き先を知るだろう。だから急ぐのだ。作戦も移動中に伝えて間に合うだろう。

「……に、西住。正気か？」

「はい。私は至って正気です」

無線越しで初めて作戦を伝えられた各車長の中で、一番早く言い返したのは河嶋隊長である。そういうのももつともな作戦だ。正気と答えたが、もう既に勝ちに囚われまともではないのかもしれない。

「……しかし、本当に可能なのですか？ 私にはとてもそうは思えません」

その次はエルヴィンさん。確かにスターリングロードと維持とどつちが難しいか、となればどっこいどっこいだろうな。

「……なんとも言えません。しかし会場内で戦うよりかはまだ勝ち目が見えます。会場内は向こうも知り尽くしてますし、何より黒森峰の戦術に合うよう平地を軸に設計された敷地です。ここでの勝ち目はありません。」

それよりは向こうも慣れない黒森峰市街地を戦場にするべきかと」

「万一脱出出来たとしても、自衛隊に追撃されるということは無いのか？ 戦車の質、練度共にどう考えても勝ち目はないだろう。秋山と松本も言っていたが……」

「いえ。硬式戦での暗黙の了解として、もし包囲網を突破できたら、会場を脱出したチームが行き着く先まで拡大する、というものがあります」

「無茶苦茶だな。日本全国どこでもありじゃないか」

「全くそうだとは思いますが、ずっと走っていると燃料切れを起こして動けなくなるので、一応範囲は制御可能、というところではないでしょうか。今回はこれに賭けます。私自身、本当に見るのは初めてですけれど」

「宇津木さんの件を忘れたわけじゃありませんが……西住隊長がそこまで言うなら、やってみましょう」

「……そうだな。それをやめさせたところで、私たちがどうこう出来るものでもない。西住、任せた」

「行きましょう、西住さん」

「分かりました。全車引き続きあんこうに一行でついて来てください」

元々陣地はかなり西寄りにある。目標を見つけるのにさほど時間は必要としなかった。

草原を駆けていくと、さきの会場あちこちに見えるのは自衛隊の戦車。それも最新の10式が混じっている。黒森峰の戦車と見比べても、はるかにゴツイ。自衛隊4世代目の頑強さ、それは私たちの車輛など見せるだけで止められると言わんばかりの威圧感となつて見せつけられていた。

「……」

それは大洗チームが近づけば近づくほど大きくなる。そしてついに段差に関わらず

履帯の全容が確認できるほどまで近づいた。

「……撃たれたら、発射光の後に移動を。それより前だと追尾されます。避けても無理だとは思いますが……信じましょう」

「何をだ？」

「さあ？」

大洗の戦車隊には前進を継続させた。

「……距離、1100です」

「に、西住殿。正面の戦車を……」

優花里さんが横のハッチから顔を出して指差す先の戦車の上に、人が立っている。格好からして自衛官だ。

「……大洗女子学園の諸君、警告します。ここから先は指定された会場の外です。すぐに引き返し、試合に戻りなさい」

拡声器でも使っているのか、声ははっきり聞こえる。

「ね、ねえ、みぽりん。大丈夫なの？ 注意受けてるよ！」

「多分」

「多分って……」

長々と話を聞ける余裕はない。光があるかないか……私だって死にたくないのだ。
「引き返しなさい」

構わず前進する。可能性の秤がそちらにしか傾いていないのだ。それに乗るしかないんだ。

「西住……」

「私たちには、前進以外の選択肢はありません。躊躇ったら黒森峰に追いつかれます。各車、車間距離を開けていってください」

砲塔の一つが、ゆっくりとこちらを向いた。狙っているのは、間違いないくⅠⅤ号である。

「麻子さん、向きを変える時間はありません。戦車のどれかから光が見えたら急停車を。それで……少しはなんとかなるかも……」

「横には避けないのか?」

「そんな時間はありません。まあ、この方法も何度も使えるわけじゃないんですが。麻子さん以外はどこかに捕まっておいてください。止まって砲弾が落ちたらすぐ揺れますから」

「う、うん……」

距離700。敵車輛のうち1輛発砲。タイミングはバラバラだったが、後ろの方から

も忙しない金属音がした。無論足元からも。キューポラの枠に捕まっていた私の上半身も思わず前に揺り動かされる。

放たれた弾は右側にそこそこ大きくて逸れ、草地をめぐるどころか、丸ごと吹き飛ばしていった。そして勢いのままにそれを広げていた。平原の中に一瞬にして窪地が生まれたのである。

「ひっ……」

「流石は120ミリ滑腔砲……威力も段違いであります……」

伝わる揺れにビビる仲間はともかく、私はある一つの予感を確信に変えつつあった。可能性は増した。

「各車、砲弾装填」

「お、おい……大丈夫なのか？」

「やるしかありません。安全装置も外してください」

「……はい」

近くのだ。何としても近づくのだ。

「華さん。さつき撃った1輻の履帯に照準を。走行間で難しいとは思いますが、狙いはずらさないで」

「はい」

向こうだって実際に狙われるのは慣れていないはず。いざという時はただ走っているだけではないと見せねばならない。

「あの、みほさん。砲塔と車輛の隙間にしますか?」

「いえ、履帯にします。彼らは戦車道の参加者ではありませんから。もともと脅しを通じる力量差ではありませんし」

距離400。だが恐らくこの距離でも私たちのチンケな砲では傷さえつけられないだろう。車輛を揺らすので精一杯だ。向こうの車輛の鼻先全てに焦点を当てつつ、耳の情報を一時遮断する。

再び、今度は別の車輛が火を吹いた。それは右前方から左側へIⅤ号の正面を素通りし、同様のくぼみを形成した。

「うおっ!」

「きゃっ!」

履帯が浮きそうな揺れが車内を支配する。こんな時期だというのに、手袋もまともにしていない手は汗で滑りそうである。

「に、西住さん……撃たれたら教えてくれ!流石に今のは心臓に悪すぎる!」

「……あ、自衛隊はわざと外しています。そのまま前進を!」

正直私にとっても心臓に悪い。が……本題は彼らの上官が現状を踏まえどのような

判断を下すか、だ。どうする。近づいてから一斉射撃して殺すか、それとも生かすか。生かされてもそれが何時間伸びるかだけかもしれないが、ないよりマシだと信じよう。「このまま最初に撃った車輛の右脇を通過します！各車速度を上げて通過してください！砲撃はしなくてけっこうです！」

「ここから先はお上のみぞ知る。」

「ここまで来たら狙われたらおしまいです。できるだけここにいる時間を短く済ませましょう」

正面の最初に発砲した車輛の車長の顔も認識できるようになっていた。ただ正面のI V号を、場合によっては私をどうするつもりか、判断材料は増えたかに思えたが、無表情のそれは何も伝えてこなかった。

僅かな揺れさえも大きな変化として足元から伝わってくる。凛々しく見える顔が益々大きくなる。

残り200。腕を振り上げた彼女の手が降ろされると共に、さらに多くの砲弾が周囲にばら撒かれ始めた。流石の私も頭を出していたら怪我どころでは済まない程である。

「麻子さん、前進継続！止まらないで！下手にスピード落としたり、死にます！」

「……冗談も大概にして欲しいな……」

「他の車輛も止まらないで！車間維持！これを各車輛に嚴重に通達！」

「そ、それどころじゃないよお……」

弾はことごとく外れる。むしろ私たちの行き先を、二本の線のように形作られた砲弾の跡の隙間が指し示している。しゃがんでないと、何かに掴まっけていても重心ごと体が車内を駆け巡りそうになる。確実に境界との距離は狭まっているはずなのに、無限とも思われる爆音の中で、誰一人としてそれ以上話そうとしなかった。最早こちららも砲撃どころではない。

だが長い長いその地獄を経て間を抜けようとした時、ぱたりと砲撃が止んだ。絶え間無く上がっていた土煙が舞い落ちて、視界に久々の灰色が浮かび上がる。上に乗った土ごとキューポラを押し上げると、左側で先ほどの人が表情はそのままで敬礼しているのが、まだ微かにある空飛ぶ砂つぶの向こうに見えた。右手を掲げるものではない。肘を張った敬礼。

どこの誰だか知らないが私もさらに身を乗り出し、僅かな間だったが目を合わせたまま同じ姿勢をとり、脇を駆け抜けていった。その後には他の車輛も続いてくる。

ここに一つ目の奇跡は達成された。自衛隊包囲網の突破である。全車輛土埃を浴びまくったのを除けば損害なく脱出できた。

「……………に、西住……………」

「はい、これで最初の難関はクリアです。全車輛前進継続。コットブス地区方面の市街地へ向かいます」

一方で砲撃音からこちらに逃げているのはバレたはず。本格的に時間が限られてきている。それにこれはわずか一つだけに過ぎない。

「敵もすぐにこちらに来ます。急ぎましょう」

「分かりました!」

「しかし……本当に成功するとはな……」

「10式なら我々を撃破することは、自動追尾機能を考えれば造作もないはず。しかし威嚇してくるだけで撃破はしなかった……ということは、誰かが大洗の勝利を、生存を望んでいるかもしれない、ということですよ」

「ウチの勝利をですか? いったい誰が? サンダースもプラウダも敵に回してるんだぞ? 私たちは」

「分かりません。ですが、誰かが味方だっただけで、少し気分はマシになりませんか?」

私直属の黒森峰の先発隊が、森を突破して大洗がいた場所に突入する。しかしそこにもう大洗の姿はない。森から来たから、森の中にはいないと思われる。

「大洗は?」

「それが……履帯の跡を見るに、緑川の方に向かった模様です」

「はあ？ そつちは会場外でしょ？ どうなってるのよ……でもそつちの方に行つて、まだ試合が終わつていないことをみると……」

「自衛隊の包囲網の前で止まつているか、それともまだ会場内にいるか……まさか」

「分からないけど合流は待たずに取り敢えず追うわよ。ここはいくら相手がウチの元副隊長だとしても、他の人間からすれば走り慣れない場所。奇襲はないわ。」

でも時間を稼がれると罠を仕掛けてくるかもしれないから、先を急ぐわよ」

その時であつた。確かに先ほど聞いた緑川の方向から、断続的にドン、ドンと音が鳴り響いた。黒森峰の精鋭はここにいるか森を迂回しているし、何よりこの時間で音のする方まで行けるはずがない。

「砲声？」

「ここで演習なんて今日ありましたっけ？ まさか試合の日に？」

「……いや、これは黒森峰のじゃないわね。何かしら……」

「……10式、自衛隊の砲声……」

「えっ？ 本当に？」

「間違いありません。前に研修で自衛隊の演習を見学した際に近くで聞きましたから」

「となると、大洗は本当に自衛隊に突っ込んだのでは……」

「まさか。あんなオンボロ戦車たちが自衛隊を突破出来る訳ないじゃない」

「ですよね……」

戦わずして勝てる。それならそれでいい。プラウダを負かして優勝。それでこの学園の恥辱は一応の終焉を見せる。私のような才のない人間には丁度いい貢献方法なのかもしれない。通信手も何かが気になるのか、音のする方を注視しているが、どうも何もあるまい。

砲手や装填手との話を済ませ、水を一口含んだ上で全車に追撃の指示を出そうとした時、通信手がそれを止めた。

「エリカ隊長……ルフトバツフェから……」

しかもやけに震えた声である。別に戦場の雰囲気当てられた訳ではないだろう。今までも一緒にいた者だ。

「何よ。試合中にわざわざルフトバツフェからなんて」

「それが……」

「早くしなさい」

「……大洗が自衛隊の包囲網を突破、した模様です」

「……ええ？」

「その後は市街地南東部へと進んでいるようです……」

「……本当に？」

「ええ、ルフトバツフェが唯一のフォックエアハゲリスを出して空から確認したそうですから、間違いないかと」

「……どうやって……いや、今はそんな時じゃないわね」

「会場外に出て我らも誘引し、指導による引き分け狙いでしょうか？」

装填手が上を向いてきて尋ねる。

「まさか、そこまで鈍ってはいないでしょう。それにそんなのをウチが認めるはずないわ。」

いずれにせよこちらの優位は揺らがない。作戦変更、直下さんの迂回部隊の到着を待つて追うわよ。向こうが突破しているなら、こちらも出来るはずよ。ただし2000メートル以上の距離を維持しなさい」

「ヤヴォール！」

彼女らの右側から森林を迂回したヤークトパンター、ヤークトティガー、エレファント、マウスなどを含む重戦車部隊が合流し、市街地方面へ出発した。

「……なるほど、話は分かりました」

ヤークトパンターにつなげた無線にて、直下さんは冷静に返してきた。

「直下さん、あまり驚かれないのですね」

「砲声の数です」

「数？」

「こちらが戦つてないとなれば、あの数はあまりにも多すぎました。たった数輻の旧式戦車を止めるには」

「……なるほど。だとしたら、自衛隊はなぜ突破を許したのかしら。意図的じゃなきゃできないでしょうに」

「そこまでは流石に。何か裏はあると思いますが……」

「なるほど、ありがとうございます」

そこで一度無線を切り、小梅に同じことを尋ねた。少し唸つてから返事が来た。

「……エリカさん。恐らく……」

「小梅、どうしたの？」

「学園が依頼したのかも……」

「学園が？なんでよ。会場内の方が勝ちやすいことは知ってるでしょ？」

「はい、乗員、車輛ともに質的には圧勝しています。だからこそ会場外でもこちらが十分勝てると思っているのでは？」

「だからってなんで会場外でやるのよ、面倒じゃない」

「……恐らく、学園が『勝ち以上のもの』を求めているからではないかと」

「勝ち以上のもの？ 圧倒的な勝利じゃなくて？」

「戦力差的に圧倒的な勝利は当然と考えられているでしょう。それを市民のより近くで見せることを考えているのかと……というより大会実行委員長があの人である以上、自衛隊とのツテがあるのはウチぐらいでは？」

「ま、確かに今の状況でプラウダやグロリアーナが自衛隊を動かせるわけもないしね。

しかし市民の前……黒森峰戦車道の威信を示すのかしら。確かに昨今の大会では負け続き。いくら反乱は抑えているとはいえ、市民にも不安があるはずよね。より近くで裏切り者相手に圧倒的勝利。なるほど、あり得そうね。人気取りに使われるのは癪だけだ」

「第一戦車科には市民の金も使われてますからね。相応の安心感を返さねばならないでしょう」

「……それもそうね」

戦車道は学園の駒。私はその駒は指せない。ただの飾りのしかも代役にすぎない。それを思い知らされた。

第6章 ⑤ 母親たち

大洗戦車隊は北西の方にある市街地に向かい、草地の丘陵を越えて行く。しかし後ろのポルシェティーガーが他の3輜に比べ大きく遅れを取っている。元からそこまでスピードを重視している車輛ではないが、坂道でもないのに遅れが大きすぎる。

「沙織さん、ポルシェティーガーが遅れているようです。何が起きたのか聞いてみてください」

「分かった。こちらあんこう、レオポンさんチーム、異常ありませんか？」

返事がない。しかし後ろにいるポルシェティーガーは停止はしてない。暫くして、やっと無線が繋がったらしい。

「え？ナカジマ、さん？」

沙織さんの口調が少し変わった。

「あ、カトラスさんかあ……そつかそつか、入れ替わってたんだっけ。ところでナカジマさんに繋いでもらっていい？」

あの人そんなに声大きくないと思うけど、こういう時はきちんと話してくれるようだ。

「エンジン修理中、って何があったんですか！」

とすこし安心しつつあった私の耳には、叫び声に近いものが入り込んできた。向こうの説明はそこそこ長く、沙織さんの微かな返事を挟んで、車内を緊張とエンジン音のみが包み込む。

「止まるって……」

止まる？何が……

考える間も無く、ただでさえ蒸す車内なのに、さらに粘着質な汗がどんどん顔と背中を伝っていく。

「と、とにかくみぼりに繋ぐよー」

沙織さんはすぐさまこちらに無線を繋げてきた。話し方と漏れた言葉から、尋常じゃない事態が予想される。尋常じゃない、それがどのようなことかは、いくつか候補が挙げられるが、どれか。

「み、みぼりん！大変！レオポンさんチームエンジン止まりそうだってー」

すぐにヘッドホンに手を当てる。それか。だが焦ってばかりもいられない。まずはただ真摯に現実を受け止めねばならない。

「レオポンさんチーム、現状は」

「はい。恐らくプラウダ戦の環境が主要因かと思われる空冷エンジンの出力低下が発生

しています。現状で可能な限りの修繕も行いましたが、効果ありません。あと15分すればエンジンが停止するのは間違いないです」

確かにポルシェティーガーのエンジンは元から強くない。彼女らの技術をもってしてもどうにもならないとなれば、如何なる人間にも何もできないだろう。だがこの損失は余りにも大きすぎる。車輛、人員ともに。

「……どうにも、なりませんか?」

「どうにもなりません。本来ならエンジンごと取り替えないといけない故障です。こちらにはツチャとプリントさんを脱出させます。他はこの88ミリを有効活用する為残ります。できれば2人を回収してください」

「2人だけですか……もう1人これませんか?戦車はともかく、人は来れるのでは……」
「行きません。西住さん、学園を残してください!なに、ここで20輛全部撃破して戻ってくるから心配しないで!」

……説得をかけるのも無理だな。それに彼女らの言うことにも筋がないわけじゃない。黒森峰と正面切つて戦える唯一の車輛。足止めには十分すぎるし、数だつて削れるかもしれない。そして稼げる時間はこちらの味方だ。その分準備できる。

「……よろしくお願いします……おふたりには川を渡つて市街地へと向かうように伝えてください」

長時間会話用のスイッチを切る。そうは分かっているも、額から鼻に向けてさらに大量の汗が流れる。

「どーする、戻ってツチヤさんとかを回収するか？」

そうしたいのは山々だが、それを許せる時間と余裕がない。

「いえ……黒森峰の射程に入ってしまった。回収は……リスクが大きすぎます。2人とは後々合流できることを期待します」

嘘だ。いくら戦車とはいえ、走ってくるものを待つて拾えるはずがない。ならば可能性になってもらうか。

「どうした、西住。ポルシエティーターガーに何かあったのか？」

河嶋さんが無線を繋げる。

「……エンジン不調によりこちらに來れないそうです」

「こっから88ミリが抜けるのか……」

向こうの河嶋さんは溜息を深く吐きながらもやけに冷静だ。普段の彼女なら泣き喚くだろう。しかし頼って呼ぶ人がいない、それが彼女を隊長たらしめていた。

そして彼女の発言もまた事実だ。黒森峰に容易に損害を与えられるアハトアハトが欠ける。今後の戦略にも影響するのは間違いない。

レオポンさんチームの車内で2人声を上げる者がいた。

「どういうことですか！私だけ脱出する？先輩方も脱出しましょう！」

「……自分から死にいくのは……良くない」

ツチャが操縦席からナカジマに向かって叫ぶ。もう一人脱出を命じられたカトラスさんもいつになく低い声で、小さいとはいえ抗議の意思を示す。

ナカジマは少しの間、返事を躊躇った。

「……ツチャ、お前に2つの命令をする。聞いてもらいたい。ひとつはこの車輛をエンジンが止まる前に敵の方に向ける。もうひとつはお前は脱出しろ、そして生き延びろ！」

「何故です！何故先輩方はここに残るんですか！死にたいのですか！」

「我々はここで黒森峰を1輦でも多く減らす！そして、大洗を優勝に貢献するんだ！ここでこのレオポンを放棄して逃亡したり降伏なんかしたら今まで死んだ者たちに顔向けできない！」

このレオポンが動かないとしても、88ミリは役に立つはずだ！いや、役立てなくちやいけない！」

「……だからって、なんで脱出するのが私なんですか！」

「お前が死んだら、誰が自動車部を残すんだ！他の者は生き残って学校が勝っても3月

で引退だ。そして春までに新入部員が来るとも思えない。西住さんは必ず来年も学園を存続させてくれる！その時にお前が来年も自動車部をやってもらう為に生き伸びろ！生きるべきは……若い奴だ。

黒森峰が迫っている。時間が無い！」

「……たった一年の差じゃないですか……先輩方に夢はないのですか！それをここで犠牲に出来るのですか！」

「お前は……12月14日を迎えずに死ぬるのか？11月23日に行ったのがお前の最後のドリキンで良いのか！この中で一番叶えやすい夢を持っているのはお前だ。生きて、生きて生き延びて、絶対叶えろ！」

「……私だけレオポンチームとしての本分を捨てろとは、酷いわがままもあるんですね」
ツチャは悪態を吐きつつも、奥歯を噛みゆっくりと、されど確実に車輛を逆方面に向け始める。

「……さて、カトラスさん。ツチャを助けてやってくれ。こう見えてコイツはかなりの寂しがり屋でな、誰かが見守ってやしないと残るウチらも不安でしょうがない。それにもう……ここに通信手は必要なのは分かるだろう？」

「……そして、このチームの勝手は、このチームの人にしか分からない、と？」

「ああ、そうだ。それにお銀さんから言いつけられたこともあるんだろう？私たちは艦

の上の人間だから、底のことはよく知らないさ。でもそれを真に伝えられるのは、貴女しかいないんじゃないかい？」

「……大したことは……それにあの場には西住さんや桃さんも……」

「ならあの2人を助けるために動いてくれ。私たちの、これまで戦った人たちも含めて、その意味を示して、そして伝えるために」

小規模の半径を使って描かれた半円にて、重戦車はしつかりと黒森峰の想定を捉える位置で停止した。

「……無駄にはしたくないだろう」

「……わかった」

「そう言ってくれると助かる」

視線を外し、目を細めながらそうこぼすと、レバーから手を外した人を見定めた。

「さあ、ツチャ。これがお前のレオポンへの最後の奉公だ。トンプソンはくれてやるよ。自動車部を、大洗を頼んだよ」

ツチャはトンプソンM1を掴み、無言で振り返ることなくキューポラから身を乗り出した。それに続く形でカトラスも外に出る。

「……ありがとうございました」

そう言い残して機関部の上に降り立ち、先輩たちの背後に向け走り出した。そしてポ

ルシエ101／1は共にその最期の力を出し切って、2度と動かぬ塊となった。こうして戦車は陸上の小さな要塞となった。

「さて、大変なモンを背負わせちゃったね。なら先輩として不甲斐ない様を見せる訳にはいかないね」

ヘッドホンを外し、咽喉マイクも外したナカジマが袖を捲り上げながら砲塔から降りる。

「よかったじゃないか、ナカジマ」

「なにが、ホシノ？こんな時に」

「地球最後の日が来るなら、その前に雨の日に出かけたいと前に言ってただろう？」

「そうだけど、今日は曇りでしょ？かといって雨が降る感じでもないし」

「いや、砲弾の雨の中だ」

「生憎それは理想じゃないな……」

「まあ、私もオーナーにはなれなかったけど、このワガママ坊主のレオポンがここまで走ってくれたからな、満足か」

車輛を撫でるスズキの肩をナカジマが叩く。

「なに言ってるんの2人とも、シケた顔しちゃって。私達はここで黒森峰戦車隊20輛を撃破するんだよ！」

「……そうだな、やるだけやるか！」

ホシノも照準器に向き直る。ナカジマとスズキも88ミリ砲弾の装填に移る。黒森峰の戦車群のエンジン音が遠くから聞こえる。しかも徐々に大きくなる。

「ここから先は行かせないよー」

だがそこに鉄壁が立ち塞がる。

パンツァーカイルの行き先は黒森峰市街地だ。しかしその途中に最主力を、しかも単独で平原に配置するなど誰が考えようか。真つ先に稜線を越えようとしたティーガーⅠーⅠーを大きな揺れが襲う。

正面から撃ち抜かれはしなかったが部隊に動揺が走る。目の前にあつたのはポルシエティーガー、大洗唯一のAハトアハト装備車輛だ。

「て、敵襲です！車輛は……ほ、ポルシエティーガー！」

「ポルシエティーガー？ な、何故あんな隠れるところも何もない場所にいるのよ？とにかく早く撃破しなさい！各車輛稜線に展開！砲撃開始！」

しかし黒森峰の次弾装填前にポルシエティーガーの砲身は火を噴き、パンターⅠ輛を撃ち抜く。

「距離は600！早く撃ちなさい！」

エリカは指示を出す、やはり今までの者達と比べて装填速度が劣る。装填し終わった車輛は次々と砲弾を撃ち込もうとするが、命中率は芳しくない。正面に3発ほど命中するが、戦果は履帯を破損させ、右側面のライオンのマークを削れたくらいだ。

ポルシエティーガーからの次の弾はラング、その次は別のパンターと、黒森峰からの砲撃を喰らいながらも頭を出した奴からの的確に仕留めていく。

「何やってるのよ！失敗兵器相手に！」

キューポラから身を乗り出そうとするが、部下に服の裾を抑えられる。しかし一部が両翼から稜線を一齐に超えて展開し側面を殴れるようになると、向こうの車輛も揺れるのか狙いが緩んできた。被害はあったが、このまま敵最大火力相手に勝てるのは確実だった。

「あと少しよ！撃ち続けなさい！」

黒森峰重戦車の砲弾を立て続けに喰らっているポルシエティーガー車内も、貫通弾こそないものただではすんでいない。衝撃で車内を振り回され、身体のうちこちをぶつけている。ホシノは特に隣の砲身などに頭を打ちつけて出血している。

「ホシノ、大丈夫か？」

ナカジマが砲弾を押し込む。

「…………ふう…………」応ね。でもこれは…………やばいかも…………」

次に放たれた砲弾はティーガーの足元に外れる。頭から垂れた血は顎からスカトへと垂れる。

「くそッ」

「スズキ！次弾装填！」

車輛だけでなく、あちこち痛む身体までも酷使して砲弾を撃つ。

「慌てず、急いで、正確に…………な」

「…………ああ。さあ、次だ…………」

その直後、正面に砲弾が命中したらしく、凄まじい振動が車輛を襲う。車内で砲弾を抱えていたスズキが壁に打ち付けられる。

「がはっ！」

2つの鉄にサンドイッチされたスズキの身体から何かが折れる音が聞こえ、砲弾を離して床に倒れた。

「スズキ、大丈夫か！」

「おぐ…………あ…………」

胸と腹の間辺りを手で抑え、息荒く突つ伏す。肋骨が数本いつてしまったようで、辺りの器材を掴んで痛みをこらえる。場合によっては内臓まで影響があるかもしれない。

「……ナカジマ、次弾装填……頼む」

ホシノはさらに頭を打ち付けたようで、出血量が増している。

「……くっ」

スズキの落とした砲弾を2本の腕で拾い上げ、足元に力を込めながら砲身に押し込む。これだけは、これだけは撃ち込む。その意思が力の抜ける身体に最後の力を振り絞らせる。

「……く、らえ……」

意識は朦朧としかけている。トリガーに指を掛けたホシノは今使える全精神力をその狙いに定め、全体力を砲弾の発射に使う。思いを込めた砲撃はエリカ車の履帯を破壊する。転輪も外れた様だ。

しかし、総計10発以上攻撃を受けた装甲はもう限界だった。エレファント重駆逐戦車の88ミリ砲に堪えるには。左側面より機関部まで到達した砲弾によって燃料に引火したらしく、大きな爆発とともにポルシエティーガーとレオパンチームはその働きを終えた。その爆風の残滓が残る中で、前方部から伸びた白旗が、僅かにその裾をあげていた。

黒森峰側は隊長車が2度も砲撃を受けたことに少々混乱を見せている。だが無事だ。

別にこの隙を突いて逆襲してくるとは思えない。

「履帯、転輪破壊されました！」

仮にしてきたとしても、ティーガーの系譜以外ならこの部隊でも十分勝てる。一応その対応はしておくか。

「急いで修理しなさい！他の車輛はブレスラウ地区の緑川沿いの高台の上まで移動！敵の行動を補足しなさい！」

これで敵の主力は撃破できたわ！こいつさえ撃破すれば、ティーガーや他の重駆逐戦車を易々と撃破できる車輛は大洗にはない！構わず進みなさい！」

「や、ヤヴオール！」

素早い指示が功を奏したのか、被害はあったものの悲観的なムードは落ち着いた。しかしまた敵もよくこんな役目をやろうとしたものだ。私たちがみたいに経験を積みまされている訳でもなく、たった2週間前までは普通の女子だったというのに。

かくいいう私も、学園のためと思えばこうして試合に躊躇いなく出ているし、砲撃を命じている。何も変わらないのかもしれない。いや、この場が人を統一してしまおうのか。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

中島 悟子

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

鈴木 久里

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

星野 義美

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

第6章 ⑥ 人道への罪

「そのまま進んで、次の角を左折してください」

エンジン音を立てながら市街地を進む。街中には既に事情は伝えてあるようで、街中には人は見当たらない。既に避難済みのようだ。ありがたい。

御船川の森崎橋は破壊したし、レオポンさんの存在もありこれで時間は稼げた。SS歩兵師団学生大隊とかが来なければ……まあ流石に本格的な投入は避けてくるだろうな。学園の対面的に考えて、ウチ相手に使ってくるとは思えん。

だが時間だけだ。それ以外は変わらない。

結局数的劣勢は播らがないし、火力不足も変わらない。おまけにその過程で最大火力、最大装甲を持つ車輛を失ったのだ。皆も不安に思うはずだろう。それに今すぐにそれを解消することもできない。

私には奇跡を願いつつ、その奇跡を活かす最善の手を打ち続けるしかない。ある一つのことを犠牲にして。

「200メートル先右側が黒森峰の物資倉庫です。警備が2名しかいません。沙織さん、威嚇して追い払ってください」

戦車の上で道案内しながら向かわせたのは、黒森峰の各地に設置された物資倉庫の一つである。かといつて戦車の砲弾とかが置いてあるわけではない。目的は別のものだ。

「お願い！逃げて！」

沙織さんの僅かな願いとともに車内に葉莖が吐かれる。警備の2名は抵抗もなくその場から走り去った。恐らく防衛隊だろう。土気も低いし。

「麻子さん止まらないで！シャッターごと突き破ってください！」

「了解」

麻子さんの操縦は全く狂うことなくそのままシャッターを押し潰し、IV号は倉庫の中に突っ込んだ。車内が大きく揺れる。だがそんな揺れでも、先ほどよりはマシだ。枠に掴まっていれば耐えられる。そのまま前方の空間を確認した上で前に進ませる。

その穴に続いてIII突、Blb isと他車輛が入ってきたことを確認し、咽頭マイクに指を再び当てた。

「あんこう、カバさんの人は一回集まってください」

キューポラから出て地面に飛び降りる。何事かと倉庫の中を見渡しながらぞろぞろと中から出てきたあんこうチームとカバさんチームの前で、倉庫の少し奥の方にあつた一つの縦長のケースを開いた。こんなものを用意してあるとは、流石は軍事バカ学園。自分たちがそうしているから、そうされた時の対策もしてやがるのだ。

中には互い違いにあるものが入れられている。薄茶色のラグビーボールみたいな形の頭と同じ色の棒が組み合わさった代物、パンツァーフアウストだ。

「使い方を説明します」

その一つを手取る。砲弾に比べればマシだが、鉄パイプが付いてるだけあってそこそこ重量がある。

「パンツァーフアウストか」

「エルヴィンさんなら使い方をご存知じゃありませんか？」

「いや、流石に本物を見るのは初めてだ」

以前の私の部屋にはコイツのレプリカが置いてあったな。確か親からの貰い物だった気がする。

「じゃ、一応使い方を。基本的にこれは先の丸い部分を敵戦車に向けて放ち、これを撃破します。その為にはここの安全装置を外し、その先にあるこの穴を、弾の頂点とともに照準を合わせます。」

撃つ時の姿勢は大きく二つ。脇に抱えるか、肩に載せるか、です。何れにせよ発射時に後方に爆風が出るため、後ろに敵以外の人がいらないことを確認してください。また胸元で狙いを定めるのもやめてください。死にます。そしたらここのレバーを押して発射します。

これは使い捨てです。一応弾を付け替えることは可能なのですが、今回はそのような余裕はないと思います。

使い終わったら棒は放棄して、自身の車輛に戻ってくるなり、今回みたいに倉庫を襲つてもう一本手に入れるなりしてください。きつとここはすぐに代わりの兵が駐屯するでしょうから。まあそれを倒すのもアリ、ですが」

「こんなのを戦車を倒せる威力があるの？」

「なにを仰いますか！これは独ソ末期戦におけるソ連戦車の一番の天敵でありますぞ！」

沙織さんの訝しげな目に対し、優花里さんが必死に声を張る。

「誤射とはいえヤークトティーガーを撃破したこともある、という話も聞いたことがあるな。少なくともポルシェティーガーが抜けてしまった以上、重装甲の駆逐戦車とかを撃破できるのはこれくらいしかあるまい」

「へえ……」

たしかに戦車より遥かに小さいこんなものが戦車を仕留められることに違和感を覚えるのも仕方ない。自分たちが戦車に乗って戦ってきた意味も薄れるだろう。が、現にこれより小さいであろうものにウサギさんチームは殺られているわけだ。

「運用に関してですが、射程が短いため基本は隠れながら接近し、撃つた後は当たろうと

外れようと即座に離脱してください。

説明は以上です。カモさんチームは砲が2つあるのでそのまま。あんこうとカバさんは操縦手と砲手だけ残って、他の人はこれで戦います」

「でもそうするとウチの車輛、車長とリーダー両方失うぜよ。流石にそれはまずいんじゃないぜよ？」

おりょうさんが腕を組みながら言う。確かに一理ある。どちらかならともかく、どちらもは流石に統率的にまずい。

「あつ……」

「取り敢えず砲手の左衛門佐は外さないとすると……」

「私がやろうか？ 操縦」

エルヴィンが声をかける。この人操縦出来たっけ？

「おりょうほどではないが、1度冷泉さんに聞いたことがある」

「でも、それだけで動かせるものでは……特にIII突は砲身の自由が利きにくいですし」

「隠れればいいぜよ。余り動かなければ弊害にはならんぜよ。それに隠れるのはIII突の得意技ぜよ」

「じゃあIII突に残るのは私と左衛門佐、行くのはカエサルとおりょうでいいか？」

「御意」

「了解ぜよ」

「ババーネ

（了解）」

そうして担当が決まった。天才肌の麻子さんの指導というのもあり不安ではあるが、彼女たちが納得しているならそれでいい気もする。決まった後そこから少し離れた所にある箱に目をつけた。中身を見ると、予想通りの代物である。

「みぼりん、何やっているの？」

「10、11、12。よし、人数分はある」

「何がですか？」

「痛み止め」

皆の頭にクエスチョンマークが浮かんだところで、一人一つずつ小さな縦長の箱を配っていった。

「これが痛み止めなのか？西住」

皆が中を見ると注射が入っている。

「注射？」

「はい、これは……モルヒネです」

「モルヒネ!!?」

「麻薬じゃないですか!!? どうしてこんなものを!!?」

思わず沙織さんが投げ捨てようとしたのを、割れる前にキャッチすることができた。

「とと……えつと、これは……安楽死用です。これからの作戦は危険で、かつ負傷する可能性があります。自分が大怪我をして死を悟るまで追い詰められた時は、それを打って痛みを和らげてください」

隣の人と目を合わせるも、無言。分かつてはいるが、分かりたくはないだろう。

「……結構効くらしいですよ。でもその代わり、使うのは本当に死を悟った時だけにしてください! 一人でも多く帰って来ましょう。それが、勝利への道です」

言葉の最後が弱々しくなってしまうな。

「分かりました……」

「私たちの戦場はここです。皆さんも各地に散って、迎え撃つ準備をしてください。敵を発見次第、私が信号弾を放ちます。あ、因みにここから欲しい武器があったら持っていつてください」

「はい」

皆詳しそうな優花里さんやエルヴィンの話も聞きつつ、適当に自動小銃や爆弾などを見繕っていく。仮に死にたくなくとも、武器が多いなら越したことはないことは理解し

ているのだろう。それか本能か。

私はパンツァーファウストと追加で自動小銃のみにしておく。身軽な方が動きやすく逃げやすいし、手榴弾とかは一時的には有用でも、次が得られなかつたら意味がない。持ちすぎたら動き辛いしな。それに私には狙撃の腕はない。

そして暫くしてここからかなりの人と車輛が散っていった。そしてこの時より私は殆どの責任を投げ捨てた。このチームの人の命を出来るだけ守るという。

車輛から離れた人をコントロールすることは難しい。何より私もその一人だ。勝つために。そうお題目を立てて、私はまた逃げているのかもしれない。そしてその結果、皆この敵の本拠地で命を燃やし切るのだろうか。

そうはありたくない。可能性は増やしたい。だからこそ、やるだけやらせてみよう。「華さん、麻子さん。ちよつと残って頂けますか？」

黒森峰学園都市郊外 ブレスラウ地区

目下には黒森峰学園都市の主要部が一面に広がっている。周りに視界の邪魔になる物は無い。ここなら敵が攻撃を仕掛けてきても、すぐに分かるし対応できる。

そしてこつちから攻撃を仕掛けなければ敵はこつちに来るしかない。エンジンを

切っても問題ない。むしろ掛けていて燃料切れにでもなったら洒落にもならない。だが暫くは来ないだろう。それが分かっている者たちによる穏やかな空気が高台に漂う。「飲む?」

あるパンターに乗る者が同乗者にペットボトルを渡す。この者たちは初参戦だ。「ありがと、このまま戦わず判定勝ちなら良いのにな」

受け取ろうとした時、ティーガー2の上で双眼鏡を構えていた私がこちらを向いたことに気づいたようだ。

「あ……すみません、隊長代行」

試合前に言われたことを思い出したらしい。確かに大洗を全滅させろ、と言ったのは私だ。仮にこれまでの大会の最中だったなら、こんな発言など許されなかったに違いない。すぐに隊長の拳が彼女たちのほおを襲ったであろう。

しかし私は違う。口元を緩ませ、その者を安心させようとする。

「いや、お前の言う通り、これは硬式戦、会場の外に出ている奴らが反則負けで誰も死なずに優勝できるなら、それが一番いい」

それが黒森峰や西住流の方針に反していることなど分かりきっている。そうでもなければ決勝に大洗は来ていないだろう。

「なんなら自衛隊が片付けてくれれば楽だったんだけどね」

しかし『非常時に最上の策を取れる人間』、それが出来る人間を真っ先に殺し、人の命を部品にする硬式戦車道を快く思えなかった。その者という損害は二度と取り戻せないというのに。きつといつか、この戦いもなくなるといいのだが、私がそれを差配できるような立場になるには、まずここで勝つしかない。

「ただ、こちらから入っていかないとしても、奴らがどこに潜むのかは知っておく必要があるわ。そこでルフトバツフェの出番よ。奴らに対空兵器は無いから、空から全ての動きは筒抜けよ。流石に攻撃はさせないけどね。下手な恩は与えないに限るわ」

「ルフトバツフェと言えば、朝出撃がありましたけど、何なんですかね？」

「サンダースか何かが来てスクランブルかしら？ 全く最近そういうの増えたわね。どうせ攻撃する気なんてないのに。」

まあ今回のために一機だけ貸してくれたんだから、今は試合に集中するわよ」

「は、はい」

左側前方から2つのローターが回る機体が飛んでくる。先ほどまでは偵察などをこなしていた黒森峰のフォック、アハゲリスF a 223だ。とりあえず今後の動きさえ読めれば、あの3輦などどうにでもできる。

しかしそれは構えていた双眼鏡の向こうでいきなり砕け散った。驚きで双眼鏡を目から外した後、丘の上を悲しく爆発音の波が過ぎる。

「え……何？事故？」

「ま、まさか……せ、戦車砲で……飛行機を撃った？」

直下さんも小梅も、この様子には驚きを隠さない。戦車砲なんかで撃墜するのを見るのは初めてだ。そもそも戦車は上を撃つのにあまり向いていない。

「ど、どうやって……」

「……ま、まだ優勢は変わらないわ。こちらに来るまで砲をあちらに向けさせたまま待機していなさい」

「……は、はい」

兎に角これでもうフォックエ、アハゲリスはない。敵情は探りにくくなった。

まずいな。先ほどのしんがりを含め、段々と向こうの、いやあいつの雰囲気は吞まれている。栄光ある黒森峰の者の士気はそう簡単に落ちないと思うが、どうにかならぬものか。

黒森峰学園都市中心部 ライヒ病院

「砲声……？」

白衣の看護婦が東向きの窓のカーテンをめくる。空には依然として雲が張っている。

「そういえば今日は郊外で戦車道の試合がやりましたね」

と分かれれば良くあることである。別に気にすることではない。

カーテンを元に戻すと、反応が返ってこないのが分かりきってる話しかける。だがこうして話している言葉も患者の耳からは入っていく。そうした刺激がこの人の脳を再び活性化させるかもしれないのだ。

そして詳しいことはわからないが、それが学園に必要なこと、らしい。

「確かケーブルテレビで中継もやってますよ。西住さんのお仲間も戦ってるんですよ。一緒に応援しましょう」

まず電動ベッドを動かし患者の上半身を起こす。ワゴンに手をかけながら机の上のリモコンを手にとると、電源を入れ、慣れた操作でチャンネルを黒森峰ケーブルテレビに合わせる。患者が元気な時にやっていたことを、ここではしよっちゅう流しているから。

『戦車道をこよなく愛する皆さんこんにちは。ヨーゼフ加ケ丘です。黒森峰中央放送より、黒森峰演習場にて行われている全国高校戦車道大会の様子をお伝えいたします。』

試合は膠着状態に入っていますねえ。黒森峰戦車道選抜部隊は市街地を見下ろす見晴らしの良い丘に停止したままです。選手たちは落ち着いた様子を見せています。大洗は苦しいですね。これでは側面も背後も取れません。南山さん、どう思われますか』

『そうですよねえ。両サイドも的確に塞いでますね。このままいくかもしれません』

だがここでの解説はいつも学園に有利な情報だけを伝えてきている。永らくここに身を置くうちに、そこに関しては割り切れるようになっていた。

だが彼女らが今の私たちの生活を守っている。それもまた周知の出来事だった。

ただ光を得た時に画面に映っていたのは、キューポラから身を乗り出すエリカと彼女の乗るティーガーII、そして一面に広がる木のない平原。緩やかに動き始めた脳が、画面のわずかな情報から状況を把握しようとし始める。

そしてかすかに残るかつての記憶、それを交えて導いたのはある戦場。それもかなり危ういもの。そしてその内装として必要なものが、奪われていること。

「……だ」

閉じていた口が粘着力を取り払い、自力で動き出す。

「ダメだ……エリカ……」

彼女がアップになった画面に手が伸びる。時間はかなり経っているらしい。手を伸ばしていくのも一苦労だ。

「離れるんだ……そこを……」

だがそれでも、漏れ出る言葉を止めようとは思えない。

「誰か……エリカに伝えろ、アイツは……アイツはまだ、硬式戦の経験が……」

鴻門の会の饗噲の如く目頭、目尻が引き裂かれんばかりに見開いた目は画面に狙いを定める。筋力が大幅に減退した腹筋、背筋を酷使し更に、更に前に手を伸ばす。

「先生！西住さんが！」

看護婦はワゴンにストッパーを掛けるのも忘れて扉を叩き開けて一目散に部屋を飛び出す。だが、それよりも重大な問題がある。

「……アイツは……アイツはまだ……硬式戦を、黒森峰を分かっっていないんだ……」

当面準備の進行に滞りはない。黒森峰の目は華さんが神業とも思える狙撃で潰したし、黒森峰が山から降りてくるようにも見えない。いやさ、やれるならと思っただけさ、本当に空に飛んでるヘリを放物線を描く砲弾で撃ち落とすとか、マジでやれるとか誰も思わんでしょ。けしかけた私がいうのもなんだけど。

狙撃を成功させた時、華さんの心の中では何か踏ん切りがついたような顔をしていたが、その心で破門も乗り越えていくのだろうか。

それを戦車の上で見届けたのち、私は優花里さんと沙織さんと共に、ある建物の一室を蹴り開けて潜んでいる。やはり集団的に避難が行われているらしい。無断立ち入り

のお詫びは生き残ったらするかもしれない。生き残ったら。

ここの下には御船からブレスラウ地区を経由してフリードリヒ地区へと続く主要道が通っており、その直線の先を眺めれば黒森峰の主力が山の上に収まっているのが確認できる。

「西住殿」

優花里さんがその建物の一室で話しかけてきた。

「はい」

窓の外を向いていたが、声を聞いて後ろを見る。2人はそれぞれパンツァーフアウストを握り、顔には汗が浮かべる。気温は9度、遠軽より気温はかなり上とはいえ、息も白く変わる。その汗が塩気のある汗か、冷や汗か、脂汗か、そんなのは分からない。

「本当にまだ、我々に勝ち目はあるのでしょうか？」

「そ、そうだよ。まだ強い車輛が沢山いるんでしよう？ ティーガーとか」

優花里さんの癖つ毛の内向きロールの度合いや沙織さんの髪の毛の外向き度合いがいつもより高い気がする。

後ろに向けていた視線を、外の道とガラス窓が幾つも並ぶ向かいの建物に戻す。その窓もいくつかは水泡がまとわり付き、中は見えない。

勝ち目？ そんなことは分からない。私にできるのは勝つために最善を尽くすだけ。

「分かりません。ただ、黒森峰はルール違反を犯しました。ルールを破った者は負けなければいけないと思います」

「ルール違反？え、黒森峰が？」

「黒森峰が何かやったでありますか？どちらかと言うと会場外に出たウチや、準決勝のブラウダの方が」

「いえ……この大会のルールじゃなくて……戦車道のルールですらなく……」

外に現在では変化はない。それでも警戒を怠らない。敵は黒森峰、そしてここは敵地と真ん中である。

「人道に対する罪、人類へのルール違反を黒森峰は犯して来たんです」

その警戒を区切り、視線を優花里さんの方に向ける。口は少々緩ませようとしたが、それができたかは知らない。二人は言葉を飲み込めていないらしい。まあそうだろう。この目で現実を知るのはこの中では私だけだ。

黒森峰の歩んだ道は、敵としたものの未来を潰して潰して潰し続けることだった。その結果、自分たちの未来が潰れそうになるとも知らず。国の前に学園だった愚かな者たちの、崩壊の足音、それが来ていると信じた。

「一つだけ確実なことがあります。黒森峰が再び戦車道に君臨することを、誰も望んでいないということです」

黒森峰は既にサンダース、プラウダという二強を敵に回している。私としてはそこに
つけ込む機会を狙うしかない。その奇跡が再び私に微笑まんことを。

第6章 ⑦ 戦場に集う者

黒森峰学園都市南部 ドレスデン地区

ここには大量の学生が集まっていた。ちゃんと15歳から18歳までの高校生である。高校戦車道大会の規約に違反する部分はない。装備もきちんと規約に則っている。

だが彼らは黒森峰の者たちではない。いやむしろ、彼らを憎んで憎んで憎み続けてやまない者たちである。

「撃て撃て、撃ちまくれ！ ファシストの街を火の海と化し灰になるまで焼き尽くせ！
今こそ虐殺された生徒や父兄の恨みを晴らし、同志カチューシャの仇を討つ時だ！」
「都市に撃ちこみや場所は問わん！ きつと黒森峰にダメージを与えとるわ！ どんどん撃てい！」

外からはしきりに指揮官らの叫びが、発射音の合間を縫って響く。プラウダ本土から用意した30輻のカチューシャ自走ロケット砲が大量の煙を吐きながら、その名の者の恨みを晴らすが如く黒森峰学園都市を襲う。

そしてその少し奥でプラウダ防衛隊学園駐屯部隊隊長という長い肩書きを引きさげたソホフコーネフが、軍服に身を包み、入ってくる情報を捌きつつ、命令を出してい

た。

「向きは大丈夫か、セルゲイ」

「全て黒森峰学園都市中心部及び南部を狙っています。そこに関しては指揮官層に嚴重に伝えてあります」

テントの出口に向けて双眼鏡を向けつつ、参謀のセルゲイに確認を繰り返す。

「連盟に確認は？」

「問題ありません。学園側が嚴重に手配済みだそうで、参戦については連盟に受託されています」

「そうか。突撃部隊の攻撃準備は」

「問題ありません。指示一つで黒森峰を粉碎出来ます！皆士気は旺盛。必ずやお望みの結果をもたらせるものと」

セルゲイは拳を胸元で振り上げる。こちらはソホフより声が低い。この場にいるとそう思うかもしれないが、軍楽隊にいた時はテナーのセカンドだった。

「しかし……本隊はともかく奴ら、本当に大丈夫なのか？そもそも軍属ですらないし、選ばれた理由からしても性格的にも問題あり。命令云々ではないかもしれないが……」

「今のところは大人しくしますな、今のところは。まあ、餌には食いついてますよ。あとは食いちぎっていかないことを願うばかりですな。あのことは伏せてますし」

「だろ。まあ、同志カチューシャの指示だ。お隠れになつていても、逆らうわけにはいかんしな」

「今後を考えますと、それが宜しいかと」

「そうだ。奴らに關してのあの件は向こうには通してあるのか？」

「はい。交渉の際にこの一文を乗せることが決められてます」

セルゲイが胸元から紙切れを取り出し、机に置く。それをパツと眺めたソホフは頷いてそれをすぐにゴミ箱に捨てた。

「狙撃隊は？」

「ヴァレリーに無線を」

セルゲイが呼ぶと、別の者が無線機を持つてくる。そのダイヤルを素早く合わせ、声を掛ける。ケータイが使えないとこうというのが厄介だ。

「こちらソホフ、どんくらい済んだか、ヴァレリー」

「……もういない。橋は確保できた」

帰つてくるのは暗く小さな声だ。なにか前髪で顔が隠れている姿を想像させる。

「……風がなさ過ぎて面白くない。スコープで真ん中にやつて当たるとかつまらんこと限りない」

「流石言うことが違うな。それじゃ確認の為一人残つて、他はこつちに帰つて来てくれ」

「……ダー。俺が残る。時が来たら教えろ」

「分かった。全く、お前は敬語が使えないのかい」

「狙撃の腕で勝つてから言え」

「お前に勝てる奴がおるか！」

そう言うのと無線機を元に戻した。配下の者は素早くそれを持って戻って行く。

「……ヴァレリーには軽いんですね」

セルゲイが少し気分悪そうに言う。

「彼奴の腕は信頼できるけどな、彼奴の性格的にあれくらいで付き合わんともたん。将来佐官あたりになつて命令しやすくなりやあいんだが。まあありやあ現場向きだ。

下士官が精一杯だろうよ」

「でしような。ま、技術が一級品だからこれからも重宝されるでしようがね」

「しかし……いいものだな」

「この光景がですか？まあ、間違いないでしような。全ての恨みごと燃え尽きて仕舞えばいいのですが」

二人揃ってトーンを落として笑い合う。

「隊長」

「どうした？」

先程の配下の者が落ち着いた様子でソホフを呼びに来た。

「同志クラークから無線です。無線所へ」

「同志クラークからか」

「時の確認ですか？」

「だろうな。分かった。今行く」

構えていた双眼鏡から目を外し、それをポケットに入れて布で囲まれた無線所へ向かう。

入り口の布を払うと、大きな機械が机を占拠している。無線士から手渡されたマイクを受け取る。

「こちらソホフ。如何なさいましたか、プラウダ戦車隊常務監督官様？」

「作戦開始時刻に関してです。あと、その呼び方お辞めになつて頂きますか。今はプラウダ戦車隊臨時隊長です」

「では臨時隊長、開始時刻は、確か向こうが10分後をめどに引き上げ、我々が15分後には撃ち終わるので、20分後でお願いします。我々も其方に敵の目が向いたあと全軍で向かいます。学園の為に偉大なる戦果を期待してますよ！」

「それでは同志マリア、ヨシコ、アレクサンドラ、リツにもその様に伝えておきますわ。

それにしても……貴方がたまで出てくるとは、もはやこれは戦車道と言えるのでしょうか？戦争……いや、それ以上の何か、では？」

「我々は武装偵察隊ですから、ルールのには問題はありません。それにこれはほぼ戦争と言つて差し支えないと思います。憎つくき黒森峰を殲滅する、ね。実に甘美な響きではないですか。」

しっかし、日本語まで流暢な同志クララにはかありません。私どうも日本語の発音は苦手なもので。伝達、よろしくお願いします」

「了解です。プラウダ、ウラー！」

「プラウダ、ウラー！」

無線に向かって敬礼すると、またマイクを掛け口に掛ける。その下に一人、布越しに頭だけさしてくる者がいた。

「隊長、そろそろカチューシャロケットが無くなります」

「次は122ミリカノン砲用意！構わず全弾市街中心部に撃ちこめ！3分以内にだ！」

「ダー！」

山の砲声は途絶えない。

「5号車、応答ありません！」

「8号車、エンジンに被弾で走行不能！脱出します！」

悲惨だ。辺りは投下された爆弾による煙が立ち登り、さらに新たな爆弾が次々と黒森峰選抜戦車隊を襲う。何とか走らせ市街地に急行しているが、そこに向かっている間にも一輛、また一輛と餌食になってゆく。

「ぎゃああー！」

先程脱出した8号車の者たちにP47の重々しい機銃掃射が縦一列に攻めかかり、一人その餌食になる。者によっては上半身が消失し、残りと腕が分離している。しかし私の車輛も、他の車輛とその乗員を気にするほどの余裕はない。

「後ろに付かれたわ！ターンして回避！御船川は空気抜きコックを閉じた後、上流部から突っ込みなさい！そんなに深くないからこれでいけるはずよ！頑張つて！市街はもうすぐだから！」

操縦手は左右に車輛を振らせる。顎の下から垂れる汗を拭う気も起こらない。

「とにかく逃げなさい！くそつ、サンダーズの航空隊がここにいるのに、ルフトバツフェは何をやっているの！とつとと追いちらしなさいよ！」

黒森峰戦車隊は出発前に5輛、川までの移動中に4輛、川縁や川の中で2輛の戦車がそれぞれ走行不能となった。そして私の頭の中では悪魔に近い顔をしたあいつが口角

を上げて語りかけてくる。

ようこそ、私のいる場所へ。

そうせざるを得ないとはいえ、まんまと乗せられていることは分かっている。仮にこれすらも予測していた、いや計画に組み込んでいたのなら、とんだ化け物だ。黒森峰のために、奴だけは殺さねばならない。たとえ私の命が引き換えだとしても。

黒森峰戦車隊が市街地に入った頃を皮切りにサンダース航空隊はぱたりと攻撃をやめ、長崎の方を目指して撤退を開始し始めた。音が遠くなる。やつと……当面の危機は去った。

しかしサンダースめ。直接ウチの戦車隊を攻撃するとは、何を考えている。いくら戦車道の枠内とはいえ、こちらを完全に敵に回すことは避けられない。だが協定のおかげで海軍力で黒森峰は優位にある。上陸はできまい。対立に意味はないはずだ。

何を考えている？

黒森峰学園都市コトブス地区 試合会場外の一角

「まさかサンダースが介入するなんて……あそこは反硬式で対外不干渉を主張していませんでしたか？ ダージリン様」

黒森峰市街地から縦に太く登る煙を眺めながらオレンジペコは話しかける。ダージ

リンはこんな状況でもその煙をも添えて優雅に紅茶を嗜んでいる。

「大概お題目は何かを隠す蓋でしかありません。それに言ったでしょう、熊と象が来ると。これで黒森峰は最悪でも戦車道の覇者に返り咲くのは難しくなりましたわね」

「それは此れ程の被害を受けたら仕方ないでしょう。市街地中心部も被害を受けているようですし、都市の復旧と機甲師団の復活を両方できる力は、さすがの黒森峰にもありませんでしょうから」

ダージリンは紅茶を更に一口飲む。

「それにしてもみほさんは凄いわね。今までの敵を友達にしてしまうなんて」

「友達とは違うと思います、ダージリン様」

「変わりませんわ。みほさんを、みほさんの奮闘を信じているからこそ、熊と象は此処に来ているのですから」

「……あの、そう言えば熊は分かれますけど、なんでサンダースが象なんですか？」

ダージリンは紅茶を飲もうとした手を止める。そしてすぐにほおを緩め直す。

「あらペコ、ご存知ありませんの？現在のサンダースの学園長の愛善はサンダース共和党出身ですわよ。貴女はどうやら世界史の他に日本の学園都市の政治体系についても学んだ方が良さそうですわね」

すぐにカップを空にした。

何とか川を渡り、市街地に入った時、市街地はすでに窓が割れ、火の手が上がり、廃墟と化した建物の群れだった。市街地の状況に思わず絶句するほかない。

サンダース航空隊は戦車隊だけでなく市街地南部も縦横無尽に焼き払う。最早黒森峰学園都市南部は復旧に数年かかるだろう、と思える、いやそう予測できるくらい被害を受けていた。

「7号車応答ありません。8号車応答ありません。10号車応答ありません。11号車……」

先程から通信手が伝えてくるのは、応答なしの無限ループだけ。聞き飽きてはならないものだと分かっている、流石に聞き飽きる。

「もういいわ。誰が残ってるか、応答した車長名を言いなさい」

「赤星、直下、国末、江賀、宮内です」

幸いティーガーIIは共に生き残った様だ。あとはヤークトパンターとパンター2輜、そしてティーガーI。頼れる人間が残ったのは幸いだ、が、駆逐戦車はほぼ壊滅した。まずいな。火力は落ちたし、本格的に黒森峰の各車輜には恐怖と不安が山積し、溢れようとし始めている。

「これは……いくら硬式戦とはいえ市街まで攻撃するとは異常よ」

火事が頻発しているように見受けられるが、響くサイレンは軍事目的の訓練でしか聞いたことのないもののみ。住民の避難は済んでいるようだが、そうだとしても火が消えたら即座にゴーストタウンと化す気配を醸し出している。

そんな煙の街の中に直立する審判は、無表情で2本の旗を共に下げている。ただ己がそうあるべき姿を示し、職務を遂行している。

「試合は、まだ継続しているようね」

残念なのはこの爆撃で大洗が全滅しなかったことだ。せつかくこんなところにやって来やがったのだから、巻き込まれて仕舞えば楽だったのに。

「エリカ隊長、無線です。学園からです」

「誰から?」

通信手からの報告を聞いて、すぐに無線を繋ぐ。

「逸見くん、こちら狩出だ」

「か、狩出教官。如何なさいましたか?」

何故、学園ナンバー3、学園教育統括部長のここまでの方が私に……

「ふふ、私だったことが驚きかね? まあ細々したことはない。そちらに偵察部隊として、SS歩兵師団から3個小隊を送った。無線機と拳銃しか持たせてないが、目の代わりに
はなるだろう。使ってくれ。

それと学園長からはこのような形をとつてでも大洗をできるだけ早く撃滅するように、との指示が出た。これを完遂するように」

「……はっ！学園長から直々にお言葉を賜るなど、この上なき名誉！選抜戦車隊長として間違いなく成し遂げます！」

「そうか、それはなによりだ。私からは一つ、早く戦車道を終わらせろ。ハイルフューラー（学園長万歳）」

「ハイルフューラー！」

無線を切らせる。間を置かずに今度は各車輛全てに繋げさせた。

「諸君」

一度息を吸い、深く吐き出した。

「私は途方も無い犠牲を出した黒森峰女学園戦車隊長としてここにいるわ。きつと歴代でも最大クラスね。殲滅戦っていう条件が付いても。しかも敵の装備は貧弱を越して貧弱。本来なら頭を撃ち抜いてでも詫びなければならぬ。」

でも試合は終わってない。旗は両手とも上がった状態ではないわ。だから戦わなきゃいけない。今回の被害について悩むのも恨むのも……後にしなさい」

だがここまでの言葉では足りない。私は未だ代行としての仕事すらできてないのだから。また私は人を、威信を借りる。」

「先程狩出学園教育統括部長殿より連絡があり、学園長閣下直々に御激励のお言葉を賜ったわ。

『一刻も早く大洗を撃滅せよ』とね。

その上この状況を考慮なさり、偵察員としてSS歩兵師団より小隊を投入して頂いたわ。戦いの最中のお言葉と増援とは極めて異例の名誉よ。ここで今生きて戦う者も、これまでの戦いで亡くなった者も皆等しく与えられたね。

ここまで学園長直々に御配慮頂いた上でその命を満たせぬとあらば、これは戦車道末代までの恥よ！

そしてこれが意味するのはただ一つ。この戦いが王者黒森峰を維持繁栄させるための重大局面であるということよ。だからこそ……ここで叩き潰すのよ、大洗を、西住みほを。あの女は厄介だ、というのは身にしみてわかっているでしょう。生かしておけば黒森峰に100年の災いをもたらすわ。

だから……必ず殺しなさい。戦車ごとでも、一人だけでもいいから。

総員前進。ルール通り大洗を殲滅せよ！」

誰一人見られる状況ではないとは知りつつも、キューポラの上を開けてマイクに叫ぶ。

「神よ、フューラーを祝福せよ！」

右手は煙の隙間を抜け、雲をも超えて、微かな青空を突く。

第6章 ⑧ 各々の戦い

路地の隙間からドイツ戦車が通り過ぎるのが見える。あの後一個後ろの建物に場所を移しておいてよかった。先ほどの建物、近くに砲弾が当たったのか瓦礫が落ちてきていたし。

「来ました。5輜……6輜です。ティーガーIIやパンターはいますが、マウスやヤークトティーガーなどは見当たりませんね……」

黒森峰は3分の1以下に減っています。奥の通りに2輜向かいます。優花里さんと沙織さんは例のポイントに移動してください」

双眼鏡で一輜一輜確認しながら優花里さんと沙織さんに指示を出す。減ったか。予想の範疇内で減ったな。もっと減ってくればそれはそれで楽だが、その分学園からの支援がプラスされそうだしな……こんなものか。

「はい。西住殿、御武運を！」

「みぼりん、気をつけてね！」

二人はそれを聞き、パンツァーフアウストと幾らかの荷物を抱えて部屋から走って出ていった。

さて、動く時か。この戦いのために皆が奮闘してくれることを期待しよう。自動小銃を肩にかけ、倉庫から持ってきた小さな拳銃に少し大きめの弾を装填し、空に打ち上げる。軽い音とともに、弾の周囲に煙が撒き散らされる。

信号弾白。黒森峰来襲の合図だ。そしてそれを確認し、私もすぐに建物の闇に消える。

黒森峰残り6輜、それは優花里に勝利への希望を抱かせるには十分だ。20輜と比べれば数はかなりマシ。さらにマウスなどの重戦車もかなり減っている。

損害比率で言えばこちらが圧倒的に優位。さらにはパンツァーフアウストのお陰で敵の装甲の硬い車輛だつて撃破できる。

その期待感に少し気分が昂つた状態で、沙織と別れ言われた地点の建物の扉を開こうとする。するとその扉は触れる前にすつと奥に開いた。自動ではなかったが。

「あ」

「あ」

開いた入り口の向こうにいたのは黒森峰の服を着た者。その者と同じような表情で同じ言葉を同時に発していた。二人の目はあつたまま動かない。銃を構えようとも思つたが、身体がそうしただがらない。

無言の空白が少しの時間を吸収すると、優花里は半身になり、右腕を入り口とは逆に向ける。流石によく知らぬ人間を直接、即座に殺す勇気はなかった。

「あ……ど、どうぞであります」

「ああ、すみません」

目立つた混乱もなくその者は一礼し、背中に無線機を背負って、長いアンテナを空に伸ばした状態で前を通っていった。その人に背を向けて続いてくぐろうとする。

「あの……」

たどたどしく後ろから声が掛かる。銃も何も構えてないとは予想していたが、実際の通りだった。

「パンツァーファウストなんて使うんですか？」

「そちらは無線機でこちらの居場所を教えるのでありますか？」

不気味だと言わんばかりの様子で話し掛けたその者に、すました顔で返す。この場が真に『なんでもあり』だと知っているならば、この質問は愚問だ。殺すのは早い。されど音で気づかれ、建物ごと崩されては助かるとは思えない。

何よりこの服はSS。彼女は歩兵師団の可能性が高い。タイマンでこちらから仕掛けても負けるかもしれない。

再び目線を合わせたが、先程より遙かに短い時間で、走って各々の行くべき場所に向

かった。次にまた出会わないことを願いつつ。

そしてその後建物のドアを隣も含めていくつか蹴破つてから、窓際であたりをさつと確認し終えた時、いつのまにか自分が殺さない理由を考えていることに気づいた。

「エリカ隊長、SS歩兵師団第4中隊第2小隊の者より無線です」

「分かったわ」

通信手がこちらに話を振ってきた。件の歩兵師団の者たちだろう。

「こちら戦車道選抜隊長代行、逸見曹長」

「こちらSS歩兵師団の観測隊の吉崎軍曹です。本日は……」

「吉崎軍曹、挨拶はいらないわ。情報を持ってきなさい」

下手な話をする時間はない。情報面で優位に立ち、出来るだけ早く叩く。

「は、では早速。大洗のIV号がそちらの前から500メートルの所を通過しています。あと戦車猟兵が各地で数名確認されています。注意してください」

「了解。情報に感謝するわ」

戦車猟兵。全く、厄介なものを投入してきたわね。ちつこいけど盾はない。けれどこの場では建物そのものが盾になり得る。

「そちらでも可能なら掃討をお願いできるかしら？」

「……まあ、ここは戦車道の会場外ですから、連盟への説明は可能だと聞いています。しかし偵察を主眼にしているため、身軽であるためにそんなに武装していないことをご理解お願いします」

「……まあ、しようがないわね。よろしく頼むわ」

外からの無線を切り、各車の車長に繋ぎ直す。

「各車に通達する。敵には戦車猟兵が確認されているわ。見つけ次第躊躇なく機銃で蹂躪なさい。その躊躇が死に繋がるわ。それとI V号が近くに確認されたわ。西住みほも近くにいる可能性が高いから、各車注意を怠らないように！」

「ヤヴオール！」

その返事の強さに少し安心したが、先ほどの一つの言葉が私の心に突き刺さる。

戦車道の会場外だから、直接関係しない者たちもいて問題ない

そういうことだろう。

何故だ。なんで言葉の前置きなんか引つかかる。大した意味はあるまいに。

「どうなさいました？」

言われるまで装填手がこちらを見ていたことにも気づかなかった。

「何でもないわ。ただ……そうね。この戦いの先を見据えたかっただけよ」

適当にそう返した。

次の通信まで余分な時間はなかった。

「I V号発見！前を横切り左へ向かっています！側面が……」

発見した国末の乗るパンターの砲身が、大洗I V号を狙うべく砲塔を回転させ始める。

「待ちなさい！砲塔で追わないで！」

叫んで後輩を制止させる。とりあえずすぐに停止してくれて助かった。士気は高いが、冷静さも一応は持ち合わせている。

西住みほほどの女がそんな容易に姿を見せるはずがない。彼女たちは先に着いている。この地形を利用して待ち伏せなどをしているのが普通だろう。

「敵はこちらの側面を取りたいはず。誘導だとすると……おそらく二時方向の路地に待ち伏せがいるはずよ。宮内、回り込んで確認してくれる？」

「ヤヴオール」

狙おうとしていパンターの後ろを左へ曲がり、土煙を上げて言われた方向に進む。

「私は万が一気づかれて脱出しようとしていた際に備え、宮内の救援に向かう！他車輛は周囲を警戒しつつ先程のI V号を追撃用意。三突が近くにいる可能性もあるし、場合によつては宮内とともに包囲殲滅してやるわ」

「ヤヴオール！」

そして周囲を見渡しながら速度を落として進んでいると、結果はすぐについてきた。

「2時方向の裏にBlbiss発見！」

「報告する間があつたら撃ちなさい！」

すぐにイヤホンを外し、砲声を確認。確かに言われた通りの場所にいたらしい。

私たちの車輛がその場所に近づいた時に見えたのは、燃え盛る敵車輛だけだった。嘘偽りはない。

「Blbiss撃破炎上！キューポラから一人脱出して隠れています、もう一発撃ちますか？」

「いや、炎上している車輛にいたなら、まともに動けるはずがないわ。戦車猟兵を呼び寄せたら面倒だし。何も持っていないようなら放っておき、戦車の撃破を優先しなさい。ルール上それで構わないしね。よくやったわ、宮内」

Blbissはいつまでも火までも吹いて、轟々と燃え盛っていた。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

後藤 モヨ子

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

金春 希美

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

「宮内は私とともに、一本奥の路地からこちらに近づいてきているであろうI V号を探
索し、追跡しなさい！」

「ヤヴオール！」

宮内の乗るパンターは道から段差を降り、枝を踏み折って、先を行こうとする。

その時、二本の白い筋がそのパンターを狙った。一つはそのまま筋を描き続けたが、
もう一つが見事にパンターの左側面に命中する。命中されたパンターは爆風を受け、み
るみる炎に包まれる。

「宮内！」

叫んでも何も変わらない。猟兵がいたか！

「やった！カエサルの一発当たったぜよ！」

「賽は投げられた！」

炎の音に混じって声があったが、きつと即座にその場を離れているだろう。装備は……

あの様子だとパンツァーフアウストか……

「クツ！」

一瞬の油断だろうか、その時を確実に狙われた。目の前で撃破された事に焦っているのが、心臓の鼓動を通して体を揺らす。

「エリカさん……追跡しますか？」

「……ねえ、パンツァーフアウストって何本も持ち歩けるものかしら？」

「いえ。そこそこ重量ありますし、それはないかと……」

「なら車輛の撃破を優先するわ。I V号の後を追いなさい。」

各車ともに連携を密に！敵は残り2輛、5対2よ！猟兵に気をつけなさい！数はそんなにいないだろうから、機銃の残弾は考えなくていいわ！」

咽頭マイクを掴んで叫んだ。どこだ。猟兵はあと何人いる？

道の角で通りの向こうを伺っていた。特に異変はない。いや。異変はあるが敵ではない。

「ねえゆかりん戻らない？あそこにいれば敵来ないみたいだし……」

一緒にいる武部殿が不安げな顔で尋ねてくる。

「試合自体は全車輛撃破されたら負けですし、ここは黒森峰学園都市のど真ん中。見つ

かつて最後に殺られるだけであります。味方が残っていて少しでも勝ち目がある内に合流しないとイケません」

路上とその周りを再度確認する。燻る煙の臭いを払いつつ、銃の引き金に指をかけておく。もし居たら引けるのか、それは別の問題だ。

「それに敵は偵察を投入しています。こちらが不利なのは火を見るより明らかであります。急がなければ」

「て、偵察つてしていいの?」

「偵察行為そのものは禁止されておりません。ただ、さつき会った人は大丈夫でしたが、他の偵察の人が武装している可能性があります。黒森峰ならやりかねません。」

「どうやらここにはいないみたいでありますな。行きましょう」

先に道へと飛び出すと、慌てて武部殿も続く。

市街地に着いてから不思議に思っていたが、この付近、いや市街地のあちこちに、敷き詰められたコンクリートの板の下から登場したかのような、簡易的ながら塹壕のようなものが張り巡らされている。何かの準備かと思われたが、ちょうどいいので気にせず身を隠しながら移動するのに使った。しかし地上に比べて足場が安定しておらず、後ろの武部殿が時折つまづく。

時折戦車の音がするが、ここからではあまりに逃げ場が少ない。身を潜めて躲す。

近くに爆撃に巻き込まれたのだろうか、足の関節が変な形に曲がった審判の遺体が転がっている。審判の立場を侵す行為が咎められるスポーツなど、寡聞にして知らない。

これが本当に試合なのか、それともほかの何か……自分が好きな戦車を生み出した戦争、というものなのか。この塹壕線が後者である証拠としてのしかかる。

「ひい、もうイケメンもお金持ちもいません。生きてお家に帰してください……」

目に涙を浮かべながらついてくる。生きて帰るために死の危険に身を晒す、皮肉な環境に私たちはいる。その比較対象は兎も角。

コンビニがあった。今はもう運営能力はない。ただ店内に突っ込んだIII突の75ミリ長砲身が、鼻先だけ覗かせてその先にある交差点を指向している。

「そうだ、よしそのまま出てこい」

ティーガーIIの砲身と足元の一部が二枚の鏡を経てエルヴィンの視界に入る。

「何を躊躇している。さっさと出て来い。横っ腹にタンクステンを撃ち込んでやる」

砲隊鏡から額からの汗を止めずに頬に流しつつ、手でそれを動かぬよう握りしめてその時を待つ。

「もうちよつとだ……完全に生きてくれさえすれば……」

しかしその見えた砲身が見える範囲は、急に短くなつてしまった。

「あ、クソ！下がりやがった」

「どうしたんだ？」

しかしその下がったあとの車輛の動きは凄まじかった。まず左に45度超信地旋回し、少し進んだ先で今度は右に90度超信地旋回したのだ。足回りの負担は尋常じやないだろうがそれを耐えきり、そこから角にあつた建物に身を擦り付けるようにして側面を守りつつ角を曲がり、やつと右折した。

その機動はまさに見事。敵であるエルヴィンたちも何もできずに見とれていくくらいであつた。

「……チツ！」

「エルヴィン、気付かれたのか！」

驚くのも無理はない。向こうからこちらは見えてない筈なのだから。だがこちらに砲塔を向け、近づいてきている。なら答えは一つ。

「構うもんか、ゼロ距離だ！撃て左衛門佐！」

距離は短い。200メートルもあるかないかだ。左衛門佐が引き金を引くと、車輛は反動で大きく下がろうとし、店内から煙が吐き出される。それだけでなくIII突は砲が低位置にあるため、砲撃により地上から土煙が高々と舞い上がる。

「当たった！」

伝わってくるのは音だけだ。

「殺ったか！」

「分かん！」

敵は弾とともに土煙の向こうに消えた。

「もう一発、照準そのまま撃てッ！」

「定めなき浮世にて候へば、一発先は知らざる事に候！」

左衛門佐はエルヴィンによる装填が確認され次第、即座に先の尖り気味の引き金を引いた。轟音と共に車内に薬莖が排出される。

「次ッ！殺るまで何発でもだ！」

エルヴィンは75ミリ砲弾を掴み、その後ろを拳で砲尾に押し込む。

「3発目！撃ち続けるぞ！」

車内の揺れで頭に載せた帽子とゴーグルがずれるが、大した事ではない。次の砲弾を装填する。

「4発目！」

地面を這うように行く砲弾は土を巻き上げる。エルヴィンは次の5発目の装填に移ろうとする。しかし敵は幾重もの土煙を掻き分け、やっと彼女らの目の前に姿を見せ

た。

茫然とするしかなかった。今まで何事もなかったかの如く、堂々と彼女ら目指して前進していた。車輛正面には四つの凹みというか擦り傷というか、がついているだけである。何度も砲隊鏡を眺めるが、変わらない。距離は100もない。最早III突が撃破されない理由がなくなった。

「やつぱり、キングタイガーはモノが違う」

不思議と口角が上がる。しかしその逆説的に至福の時間は長くは残されていない。不

間も無くティーガー2の砲身がIII突をゼロ距離で狙う。今までの音よりはるかに大きく、低い音が響く。

正面右側に垂直に命中した88ミリを止められる筈がない。寧ろ後ろのガソリンエンジンまで撃ち抜かれたのだろうか、コンビニは一瞬の内に炎に包まれ、III突と共に丸ごと焼き尽くされた。

その煙を吐き出すコンビニ跡前を左折し、ティーガーIIIは悠々とその重い車輛を未

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

松本 里子

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

杉山 清美

黒森峰 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

アパートのある一室で、息の音を聞いた。少し先のドアの向こうだ。そこだけ扉が開いている。背中には機械。そのせいで見えないが、恐らく親衛隊かね。

ふむ、偵察か。流石にかつてのお上はこのまま犠牲がむやみに増えるのを良しとしなかつたらしい。が、一方で目立つた武装は見当たらない。つまり補助はするが直接戦うのは戦車隊、そう考えているのだろう。この者をどうするか、その答えは一つだ。もう二度と報告させないようにする。

しかしそうしようにも方法がいくつかある。情報を聞き出すか一撃か。銃だつて拳銃と自動小銃の二つ。長々と迷う暇はない。一撃で、かつ的確に。となると、やはり拳銃で接近して後頭部から一発、だな。あの時から試合が変わって弾も補充されてるし。ゆつくりと扉に近づく。耳にイヤホンをつけているせいもあり、背後からそつと覗いても気づいている様子はない。親衛隊にしてはえらく不用心だな。もしかして新入り

の系統かな？ そうだとしてもやらねばならないのは変わらない。

彼女が左を偵察した時を狙う。その時一番私から視野が離れる。

右……真ん中……

左っ！

荷物を捨て、三步！ 振り返ってきた敵を顔を見る間も作らずに、機械ごと背中から押し倒す。重心を肩の上に移し、銃の発射準備。

「な……誰……！」

警戒してなかった敵が悪い。それとも我々が猟兵を展開していることを知らなかったのだろうか。なら知らないほうが悪い。

しかしいざ銃を突きつけてみると、私の身体を何かが押し留める。連絡されるのは都合が悪い。それは分かっている。仮にされたりしたら、私の命の危機だ。

なぜ撃てぬ。こいつは敵だ。このような服をしているからこそ。

「ぐ……お、大洗？ れ、連絡を……」

首をひねって服の裾の色を見られたようだ。

うなじから前頭葉にかけて一発。銃口を押し付けて引き金を引く。やはり何度も思うが、命と引き換えにしては指への圧力は軽い。

あの時のような骸の頭が、血の海を成して浮かんでいた。だが見続けられるほど悠長にはしていられない。流石に銃声を鳴らしてしまつた以上ここにはいられない。仕方ない、次の候補に場所を移すか。

頭の切り替えは久し振りに恐ろしいほど早くできた。できてしまつた。

こちらの建物には幸いにして偵察は投入されていなかった。ここは戦車が両側と幅をとつて走行できる道の一つ。猟兵の存在は外の音から気づかれてはいるはず。と、なるこのような道を選択するだろう。さらに警戒しやすくするため速度も落ちる。

そしてやはり予想は当たる。音と窓枠の振動がそれを知らせるのだ。窓際で数を数えていた。幸いにして周囲に誰かがいる気配もないので、暫くはこの音だけに集中できる。

「70……60……」

外から戦車のエンジンが回る音がする。手にはしっかりとパンツァーフアウストがある。それも窓枠の外に現れないよう警戒する。

「50……40メートル！」

その音が自分の右側に壁にほぼ垂直に届いていると判断した。すぐに立ち上がり、立てておいた照準器の穴から確実に狙いを定め、前の車輛に向けて引き金を引いた。

発射された弾は爆炎と鳴動と共に敵の左側面に命中した。炎の音と共にヤークトパンターはみるみる燃え盛る。人が生きているとは思えない。

それを確認すると、急いでその場を去った。攻撃は自分の居場所を教える事と同義だ。それを示すように階段を駆け下りる際、先ほどの場所は砲撃で破壊され、耳元を小さな瓦礫と爆風が駆け抜けた。

ヤークトパンター。防衛隊の車輛で唯一の重駆逐戦車。他にも重戦車の類も親衛隊所属である。つまりこの車輛は防衛隊の中で特別な存在。いや、黒森峰の戦車隊にとつて。

これに乗っていた人を私は知っている。だが戦車の壁があるだけで、これだけ躊躇いをなくせるのか。

第74回戦車道大会公式記録

黒森峰女学園犠牲者

直下 理沙

大洗 砲撃死 死体損壊が激しく死因は不明 即死

第6章 ⑨ 敗走

「最後の一輛、I V号発見しました！5番通り52番地のビル陰に潜んでいます！進行方向は南！6番通りに向かう道から挟み撃ちにできます！」

話が入ってきた。黒森峰にとつてもかけがえのない人だったと思うし、私が指揮する上で支えになる方の一人だった。

「……報告に感謝する」

しかし悲しむ時間など無い。仮に悲しんでいたとしても、何やってんですか、と笑い飛ばされそうなのもあるが。すぐに観測隊からの報告が入る。大洗はこれ一輛のみ。これさえ潰せば、勝ちだ。

「よし、四輛全車で包囲するわ！国末と江賀は5番通りから、小梅は私と合流して6番通りに向かう。I V号を確実に仕留めなさい！」

「ヤヴオール！」

三輛の車長からののはつきりとした返事を確認し、車輛を進める。そして合流した小梅車に先行させ、6番通りに向かう。

その時私の頭は、一時的にそのI V号で支配された。だからこそ考慮すべき存在が頭

から欠けていた。ティーガーIIが悠然と走り、その後尾がとある路地裏の前を過ぎた時、道の真ん中に飛び出した者らがいた。

「ウエーニー（来た）！」

彼女らの手には、パンツァーフアウストラしくはない何かが握られている。駆け足でティーガーIIの後ろに回り込む。

「ウイーデー（見た）！」

右腕の動きが若干ぎこちないが、そんな事は気にせず、ただ目標に走り寄っている。

「ウイーキー（勝った）ツ!!？」

それを合図に二つの吸着地雷をティーガーIIの背面に重い金属音と共にくっつけ、紐を引く。そしてその勢いのまま走り去ろうとした。

「は、早く！早く撃ちなさい！」

「は、はい！」

通信手が7・92ミリ機銃で二人を狙う。銃弾を食らった彼女らは焼いたゴマの如く跳ね回り、地面に斃れた。

だが判断は遅れていた。すぐ後に小梅のティーガーIIの背後は大きな爆発音と共に吹っ飛ばされた。車輛からは火の手が上がり、黒い煙を登らせる。

「……念のためもう少し撃っておきますか？」

「轢きなさい。息の根を止めるなら」

操縦手にそう指示したところ、流石に嫌悪感があるらしく、若干怯えた目でこちらを見してきた。

「しかし、履帯に肉片が挟まると……」

「戦車道は人を苦しめるためにあるわけじゃないわ。早めに、そして確実にとどめを刺すのも礼儀よ」

「……はっ」

車輻は二つの血しぶきの集団を作った上で小梅のティーガーIIの脇を通り、隣り合った状態で一回車輻を止めさせる。

「小梅、乗員は無事？」

「何とか」

戦車の上で炎に消火器を向ける小梅が答える。幸いエンジン部のみで、車内そのものには影響なさそうだ。

「ご苦労だったわ。後は我々に任せて脱出しなさい。この先の行動は任せるわ」

「はい。エリカさんたちも健闘を祈ります」

走り去った後ろには赤い途切れ途切れの線が一本に纏まってついてきている。その奥、起点には履帯に捻り潰された二人の残忍な死体しか残っていないかった。

私は正しい。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

鈴木 貴子

黒森峰 銃殺 履帯に轢かれた跡あり 死体損壊激しく致命傷は不明 即死

野上 武子

黒森峰 銃殺 履帯に轢かれた跡あり 死体損壊激しく致命傷は不明 即死

私がそれを見つけた時、I V号は道の片側に身を寄せ、敵が来るのを待っていた。ここに来たのは先ほどの場所にはもういられないということと、敵がこちらに誘き出される可能性が高い、というものだ。

かといってパンツァーフアウストがあるわけでもないし、他に直接装甲に風穴を開けてやれる兵器も持ち合わせていない。なら車長の頭でも狙ってやろうか、とささやかな期待を寄せていた。今ある唯一の銃、Stg44の銃身を強めに握り直す。

それにしても……爆撃、砲声、ロケット砲、サンダースとプラウダの参戦、これらが指すのは何か。まだ確証は持てないが、予想はできる。ではその状況下で我々の勝利に

必要なのは何か。こちらの残り車輛はあつて二輛。場合によってはこの一輛だけ、かもしれぬ。いや、戦力差的にその方が考えやすい。

相手は何輛だ？五輛以下ではある。そうなると他の人の活躍を考えても……三から五輛かな。数の差、質の差は……未だ圧倒的か。やはり猟兵によつて敵の数を減らしていくしかない。

そして近くの廃墟と化した建物の陰に潜んでいた時、奥から戦車の履帯の音。I V号は動いていない。となると……やはり、パンター。おまけにキューポラから頭を出していない。これじゃ車長を撃てないじゃないか。お前らは西住に則り生真面目に頭を出してりや良かったんだが。

そして偵察はやはり仕事をしていたらしい。ギリギリからわざわざ側面を晒さぬよう出てきて、正面を完全にこちらに向けつつ進んできている。

I V号が足元に狙いを定める。放たれた弾は履帯ではなくその少し上の履帯のカバーに当たり、弾かれる。それで前のめりになった敵車輛から撃たれた弾もまた、I V号の足元にめり込んだ。土砂がこちらにも降りかかる。

下がるI V号をパンターは追撃しようとする。そしてその車輛が十字路を超えて更にI V号と私に迫ろうとする。

その時、視界の右側から二本の筋がパンター目指して流れた。その内一本がパンター

の側面に当たり、黒い煙が砲塔から砲身までまとわりついた。

「おっ」

顔を出し左に向けると、破壊され中が見える建物の一番上で、愉快げに手を振っている人を視認できる。茶髪ロングである。

「沙織さん……」

その隣に棒を構えたままの優花里さんを認めたのとほぼ同じくして、I V号はさらに素早く車輛を後退させ始めた。パンターは車輛丸ごと燃え続け、音と煙をあたりに撒き散らしている。

だが動かない。彼女らは私を見つけたらしく、何を言っているのか、どんな表情をしているのかは分からないが、身ぶりを交え何かを伝えようとしている。

しかしそんなことする暇はない。もう既に彼女らの立ち位置はバレているし、そして今まさに撃破した戦車の裏から、ティーガーIが砲塔をそちらに向けたまま接近しているのだ。

このまま彼女たちを失うのは今後の戦略的に損失が大きい。いや、それ以上に私が、私が彼女らを失いたくない。

逃げる！その場を離れる！早く……持ち物なんざ捨ててどこかに行け！

今から近づいても間に合わない。せめて逃がそう。我を忘れんばかりに声を届けよ

うとした。しかしそれは燃え盛るパンターの音と先程から増してきた他の場所からの砲撃音に邪魔される。向こうの声が届いてないので当然といえば当然だが、死んでもなお邪魔するかこのやろう！

そして最早逃げる時間もなくなり、間も無くその砲塔のアハトアハトが建物の最上階狙つて砲弾を撃ち込んだ。その建物の吹っ飛ばされる様子からは思わず目を逸らした。後に残るは、崩れる瓦礫の音と煙の増加。そして戦車は隅にいた私の前を気づくことなく通り過ぎていった。

そして次の角を戦車が曲がると、やっと私はその建物から向こう側へと飛び出せた。

「……そう。国末のことは残念だけど、猟兵が狩れたなら良しよ。6番通りの郊外側に回り込みなさい。私たちが勝つわ」

「ヤ、ヤボール」

残りは二輜。本当に数は減りに減ってしまった。だが相手はあと一輜。これだけだ。これさえ倒せば……終わる。早く……早く終わらせなくては。

「あの、逸見曹長……先程からここ以外でも戦闘が勃発しているような音がしているのですが……宜しいのですか？」

「今は試合に集中しなさい。話によるとここら辺よね。警戒は緩めないでいなさい。偵

察からの続報は？」

「今はまだ……」

「早くさせなさい……ん？」

正面の先で何かが動いた。いや、出てきた。あちこちから黒く上がる煙、破壊されたコンクリートやレンガの建物、その中に確実に混じっていて実に、本当に素晴らしいものがいた。殺れる、そう確信した。

「ようやく見つけたわ。最後の一匹よ」

待ち侘びたその時に、少し胸が高ぶるのを抑えられない。

「では、終わらせましょう」

そのティーガーIIのアハトアハトに砲撃を命じた。この試合を終わらせる為。

向かい合ったティーガーII。砲塔はこちら。こちらは停止状態。絶望以外の何を捉えればいいのだろうか。絶望の一部を一瞬で払い、とっさに麻子は両方のレバーをそれぞれ逆に力を入れて動かし、時計回りに超信地旋回を開始させた。足回りへの被害など考える暇は無かった。

しかしそれは命中を避けるものでは無かった。ティーガーIIから撃たれた88ミリ砲弾はIV号の砲塔右後部に命中した。麻子は反動で運転機器に額を強く打ち付け、

背中にも大きな痛みを感じた。

頭を打ち付けたせい或少しばかり気を失っていたが、間も無く全身を痛みに襲われながらも、何とか運転機器から頭を放す。

「ううっ……背中をハンマーでぶん殴られたみたいだ……」

何が起きたかは分かっている。痛みが特に強い背中に手を当てると、生暖かい液体が手に着く。戻してみると右手の平全体は完全に、一部の隙間もなく紅に染まっていた。有能なだけに麻子は分かってしまった。

焦げ臭い匂いがする。自分でさえこれなのだ。背後が怖い。

恐る恐る後ろを振り向くと、空が見える。青い。しかし、赤い。

「五十鈴……さん……」

もう砲手五十鈴華の顔は写真か想像でしか見ることはできない。もう、砲手席に腰掛けたその身体は目も、鼻も、口も、耳も、長い髪も有していない。両手を降ろした手と胴と足だけがそこにはあつた。

「クッ」

涙を堪えつつレバーに力を入れて、再び車輛を前に動かした。幸い、動きからしてエンジンに大きな支障は無いらしい。

逃げなきや。とにかく、ここから。私たちは黒森峰には屈しない。西住さんを生かそ

うとする限り。表情も声もないが、きつと五十鈴さんも同調してくれるだろう。外では何かが起こっている。エンジン音に混じって続く砲撃の音。何だ。何が起こっている。そして、何ができる？

「命中！」

「よし！ジャツジのコールは！」

車内で思わず叫んだ。しかし外から笛の鳴る音はない。I V号には小さいが火の手が上がっている。タダではすんでいないだろう。だったらまだ中で生きているのか？

「完全な撃破が必要なようね。もう一度よく狙って、止めを刺しなさい」

「大洗I V号、後退していきます！」

前を見ると確かにI V号は遠ざかっている。それなりの速度も出ているようだ。

「クソツ、動けるの？追いなさい！江賀にも連絡！挟み撃ちにして確実に倒すわよ！」
「ヤボール！」

しかしその動きは一つの声で制止を迎えることになった。

「エリカ隊長！学園より緊急無電です！繋がります！」

車輜を発進させる前に邪魔が入る。あと一步のところなのにタイミングが悪すぎる。だが学園からの命令だ。取り敢えず出発を中止し、無線を繋がせる。

「こちら逸見です」

「こちら狩出だ」

「き、教官……どうなさいましたか。もう直ぐ大洗は倒せますが……」

少しの間、ヘッドホンは音を伝えてこなかった。そしてやっと聞こえた言葉は、実に感情のない声にのせられていた。

「……学園都市フリードリヒ地区にプラウダの大部隊が迫っている。各部隊現在の戦況を省みず、これの防戦に参加せよ」

「なっー」

馬鹿な！ここで、だと……

考えも纏まらぬうちから反駁を始める。

「お待ちください、教官！大洗は現在中破車輛が一輛だけです。それを撃破すれば試合は終了します！戦闘行為は禁止され、宣戦布告によるものでないならプラウダの侵攻は止まるはずですよ！宣戦布告されたものなら防衛隊青年大隊が対応できるはず！大洗を撃破する余裕があります！

いずれにせよこちらの勝利は目前ですよ！あと5分ください。確実に大洗を撃破します！」

「早急に来い。そっちには今何輛いるんだ？」

「ティーガー、ティーガーがそれぞれ一輛のみです。そちらに一輛だけならまだしも、両方送るなんて出来ません！」

先ほどまではすぐに返答があつたのに、今度はやけに時間が空いた。

「……教官？」

「貴様何をやってている!!? 残り二輛だと!!? 我が校の栄光ある戦車隊を壊滅させられただと!!? 今年あれの回復に我々はどれ程の予算をかけたのか、そしてこれまでを守るために何人の命が散っていったのか、貴様には分からののか!!?」

「しかし空爆と猟兵相手では……」

「言い訳なんぞ聞きたくない!!? 兎に角、貴様らもこちらに来い!!?」

いつもは落ち着いている教官らしくないほどの罵声が、私の耳と心臓に突き刺さる。

「……誠に申し訳ございません」

「……すまない、取り乱してしまつたな。とにかく、現在SS装甲師団学生大隊、学園都市防衛隊学生大隊を攻め込んできたプラウダに対して送つたが、最早一部を除き壊滅、突破されている。空爆とプラウダのミサイルで結構やられたからな、数が足らん。」

学園長の命令で非軍属も使つてはいるが、正直使い物にならない。ただ敵の戦車と歩兵の前に死んでいくだけだ。

それに都市防衛の為のアハトアハト高射砲団も空爆で壊滅状態だ。ルフトバッフェ

もサンダースの連合航空隊に有明海で縛り付けられている。撤退中の敵爆撃機の追撃すらできない」

ルフトバツフェが来れなかったのはそのせいか……あの拝金主義の軍団ふぜいが……

「現在は学園に残ったSS歩兵師団の一部が学園と学園官邸周辺で辛うじて防衛しているに過ぎない。士気も下がる一方だ。

その為に君達が防衛に参加するということが必要なのだ。士気を上げ、プラウダに一矢報いる為にも」

「しかし学生大隊しか出していないのならば宣戦布告はされてないと思考します。ならば大洗を撃破すれば、試合は……」

「逸見君、確かにプラウダとサンダース、ポンプルは戦車道大会における大洗の同盟としてこの戦いに参加している。しかしそれは名目だ。プラウダ外務局とサンダース校外交流担当課から、降伏に応じない時は試合終了次第宣戦すると通告を受けている。

全く敵ながらよくやってくれるわ。こちらは学生部隊のみなら数で勝る二校には太刀打ちできん。君たちがその状況なら尚更な。

情報によると緑川河口周辺にサンダースの戦車部隊が上陸しているらしい。宇土も……向こうに寝返った。奴らは確実に黒森峰を崩壊させるつもりだ」

黒森峰の……崩壊。私の愛する学園の。

その言葉はこの先の私の口をしばらく封じられるほどの重りだった。

「試合が終わったら、二校の侵攻に歯止めが効かなくなる。つまり大洗を生かして試合はできるだけ抵抗した上で、プラウダに黒森峰中心部を陥落させた時に終わらせる。ルールに戦闘体制の崩壊を勝利条件とすると決められているからな。

サンダースには空以外参戦させん。それが学園都市の被害を最小にしつつ有利に講和を結ぶ道だ。講和さえなれば、あとはやりようだ。相手が二人もいるしな。会議を躍らせて凌ぐ。

とにかく、これは学園長命令でもある。もう一度言う。各部隊戦況を省みず防戦に参加せよ」

返事を聞くこと無く無線は切られた。急に告げられた事実。もう、学園は負けるしかないのか……こんなに離れた場所で、大洗なんて雑魚軍団に梃子摺りに梃子摺った挙句。

私があつという間に大洗を殲滅していれば！あの極寒の戦場でプラウダの停戦なんざ無視して殲滅していれば！いや、そもそも私が、私がつと強かったら……

椅子の座面を拳で殴り、歯の噛み合う限り全てに力を込める。

「……学園長より命令。追撃は中止よ。学園官邸に向かいなさい。江賀にも同様の連絡

を。 I V号は捨て置きなさい」

照準器の向こうからすでに I V号は消えていた。

第6章 ⑩ 最高のチーム

建物の瓦礫の中に踏み込んで行く。ここで偵察に見つかった時など脳みそから抜け落ちていた。きつと私は生き続けるという悪運を背負ってるな。

「優花里さん、沙織さん！」

建物の中ほどに撃ち込まれた砲弾は建物を足元から完全に崩壊させていた。未だバランスを崩し、崩れる瓦礫の音が聞こえる。埃が舞い、熱気は私の息から白を奪う。

すぐに一人を見つけた。完全にコンクリートの大きな、厚さ20センチはあるであろう塊の下敷きとなり、辺りに血飛沫をばら撒いて、手足の先だけを覗かせている。最早生死を問うまでもない。その下を想像すると、今まで幾つも死体を見てきた私も思わず顔をしかめ目をそらす。

そして、もう一人も土煙の向こうにいた。幸いコンクリートの下敷きとはなっていないが、埃が体に敷き積もり、腹の辺りからの出血が凄まじい。

「優花里さん！」

優花里さんに瓦礫に気をつけながら近づく。声をかけるが、返事はない。この出血、そして内臓が見え隠れするほどの腹部の大きな傷。こう判断するに時間は必要ない。

もう、助からない。

「しつかりしてください。大丈夫ですか！モルヒネは!!？渡したモルヒネはどこですか!!？」

だがそれでも処置は行う。偵察に見つかつてもそれはその時。今は、少しでも長くこの人を生かす道を……

裂けた腹に見えかけた臓物を戻し、服の上から素早く持っていた白い布を巻き付け縛る。服の左上のポケットに入っていたモルヒネ注射のケースを見つけ、右の二の腕上方に袖をまくり上げてから打つ。

優花里さんは先ほどから返事がわりの呻き声をあげるようになったが、とにかく体外への出血はそれなりに抑えられたはずだ。ただ体内に溜まっていくだけだが。こればかりは血管を結んで止めるなりしなければ、止めようがない。つまり、いろいろやったが外見がまともになつただけだ。

一通りの処置が終わると、優花里さんを仰向けにして外に目と耳を転じる。試合が行われているには多すぎる砲声、銃撃音。北西の学園都市中心部から爆撃後より多く登る煙。この空の灰色が天気か煙か、もはや分からない。そして双眼鏡で道の隙間を見たと時に遠くに見えたT34／85。

それらで現状をとりあえず決定する情報は揃つた。

「……プラウダの本格参戦……いつの間にか、試合の目的が黒森峰を倒すことに変わっているようです」

双眼鏡を下ろして優花里さんの足元に膝をつく。

「優花里さん……私は行かなくてはなりません。このままプラウダが黒森峰を攻め落としたら、決勝の最大の勲章者は彼らだ、という印象を与えてしまいます。皆が命を懸けた成果をプラウダが持つていくのは、何としても避けなくてはなりません。我々の勝利のために」

優花里さんは最期まで生き続けようと、肺だけで懸命に深呼吸を続けている。意識ははつきりしているようだ。

「……フフ……凄いですな……」

しかし、大丈夫な訳では全くもってない。声も力無い。

「ここまで絶望的な状況でも……勝利のみを見据えておられる……いい……今も……実際に頼もしい西住殿ですね……」

やっと、優花里さんが声を絞り出す。弱い。血が、傷が、そして辛うじて作り出した微笑みがジリジリと最後の力を削ぎ落としていつている。

「頼もしいだなんて……臆病なだけです。臆病だからバカにならないと動けないんです」

なぜ私は今こうして『西住』であろうとしているのか。あの憎むほど嫌っていた西住の道に沿うように。

簡単だ。

「バカだから、こうして目の前で、私を支えてくれた友達が次々死んでいるのに、まだ試合のことを考えているんです。どうすれば勝てるのか、ただそれだけを考えてしまうんです」

吐く息が白く変わる。優花里さんの先程の笑いも消える。

「小さい頃からお母さんに戦車道をやらされている内に自分が極力傷つかないコツを覚えしました。意味を考えない、何も想像しない、バカになってやるべきことをただやる、やり続ける……」

とにかく楽になりたかったんです。ですがやはり、マシンになるのが精一杯」

空には何本も煙が消えてゆく。上着の上の幾つかのボタンを外し、左胸の方をシャツにする。そこにそつと指を触れる。

「私のここには爆弾が埋まっているんですよ。バカになった報いです。割りに合わないちんまりとした利益の代わりの。」

嫌な事はすぐに押し込んで蓋をして、もう見るのも怖くて開けられない爆弾です。もし破裂してしまつたら……私にもわかりません」

全く恐ろしい想定だ。胸元から指を外し、二本の腕を力無く降ろし、首を振る。

「想像もしたくない……頼もしいどころか自分の記憶から逃げ続けている、臆病なだけの人間ですよ……」

シャツの上に上着を戻すと、片手の指でさつきとボタンをはめる。

「さあ、私の最後のつまらない話はおしまいです。何ができるか分かりませんが、私も出発します」

ここまで来たら、この偽りを貫き通すしかない。彼女に対応する時間がない。

優花里さんの手元に金属の塊と布を置く。

「信号弾と白旗です。近くに人が来たらこれで助けを呼んでください」

これで助ける奴がいるかは知らない。だがこれを見てトドメを刺す奴がいたら、そいつは心の底からのクズだろう。

荷物を纏めようとする、目の先にあるものが目に入った。鼻のフレームが思い切りひしゃげた眼鏡だ。レンズも辛うじてフレームにくっついていて、という感じだ。

死体をどうにもできない以上、数少ない遺品になる。それを手に取り、ポケットにしまおうとすると、連鎖的に重い金属音が耳に入る。見ると優花里さんの手元に置いていた信号弾用の銃が、少し離れた場所に移動している。

「こんなものに……用はないであります……自分も……自分も一緒にいきます」

深呼吸の合間に口を開いてきた。

「行くつて……無理です！動けるわけじゃないですか！」

しかしその通りなのだ。腹筋繊維を一本残らず引き千切られた彼女は、上半身を起こす事も出来ない。動く、ましてやここから移動するなんて出来るはずがない。ここから彼女を移動させるとなると……手段はただ一つ。

「大丈夫であります……お腹の痛みは感じなくなりました。連れて行つてください……お願いです……優勝のために……と死んだみんなのためにも……西住殿と一緒に……大洗の優勝を見届けるのであります……」

腕を伸ばし、涙を流して優花里さんは懇願してくる。どうする。そもそも彼女は置いて行くつもりだったし、彼女を運ぶ時間は今後のプランにとっては支障だ。だが……私にとって彼女は何であつたか……

こう言えるほど効いてしまうモルヒネを少し厄介に思ったが、少し迷つたのち友としてその懇願に応える事にした。こうすれば賢くなれるのか、バカだから分からない。

優花里さんを腕を引っ張り上げて背負うと、若干でも瓦礫で塞がった道を選んで進む。まだ偵察はいる可能性が高い。そしてその時、今の私は戦えない。

時折更に建物が崩れる音と、遠くから銃撃音、砲撃音を耳にしつつ、ある場所を目指

す。

「西住殿……やつと、遺書に書くような事以外にお話ししたい事が浮かんだので……今度は自分の話をしてもいいですか？」

「どうぞ？」

この段階になって呼吸もある程度落ち着いてきたようだ。ある程度、でありまだ荒いが。死に目まで気を紛らわせるのに付き合おう。

「酷い大会になってしまったけど、一つだけ良かった事があります……」

耳元に息がかかる。

「ずつと……お母さんの言葉が、怖かったんです。」

『あなたが戦争で遊ぶのは、何も知らないからよ！本物の戦争を経験したお年寄りや、戦争で亡くなった方と遺族に、失礼だと思わないですか！あなただって、実際に自分が撃たれたら、そんなの大嫌いになるに決まっています！』

って」

だろうな。私だって初めて会ったあの場で殴りかかろうかと思っただのだ。日常的に出会っていたらキレていてもおかしくない。まあ幸いそうはならなかったわけだが。

「悔しかったけど、もしかしたら、そうなのかなと思って……言い返せませんでした……でも……こうなった今でも……ティーガーとパンター……7TPは……カッコよくて

……好きであります」

だが、これが彼女なのだ。戦争を嫌っているかとその道具が好きか。それを別個に捉えている。そしてどれだけそれを取り巻く環境が悪化しても、芯は揺らがぬ。率直に言つて羨ましい。いや、それができてても楽しくない私にしたら、単なる僻みか。

「やつと、自信を持つて、言えたのであります……」

荒れる呼吸の中、その合間を縫うように一言ずつ伝えてくる。

「家に帰つたら……作りかけだったティーガー……黒森峰西住みほ仕様を完成させな
きや……」

何か息を吐き切るようにゆっくりだが一気に言う。家に帰つたら、か……自分のことはよく分かっているはず。だからこそ、私はその話に乗り続ける。

「あはは……そんなのがあるんですか。どのくらいの大きさなんですか？」

二歩進む。返事はない。背中が少し軽くなった気がする。少し歩調を落として二歩さらに進む。それでも返事はない。先ほどまでは少し待てば呼吸の中から返事があつたというのに。背中から振動と温かみが薄くなる。更に歩調を落としてゆっくりとレングアの上を二歩進み終わった時、ただ流れ出る涙を堪えようと歯を食いしばっていた。しかしそれでも止める事は叶わず、目は水源となり続けた。

人が死んでいて、そのために私が泣いている。あの時以来、か。だがあの時のように

残忍さが極限を突破しているわけじゃない。だけど涙は止まらない。

「トモダチ……」

きつと答えはそこだろう。

どこだろう、ここは。

なんだか、あたたかい。

まわりが、しろい。

かべが、みえない。

おかしいな、わたしはさむいふゆのまちにいたはずなんだけど。

「麻子……麻子や……」

だれかの、よぶこえ。

いつも、きいていたこえ。

「おばあ……」

なぜ、おばあがここにいるの。

すがたを、みまちがえるはずがない。

かくじつに、おばあだ。

ここは、どこ。

どこだ。

「病気……病院はいいの？」

「いいもんかね。だからここににいるんだろう。」

よくないから、ここにいろ？

「全くおまえの親もそうだが、おまえもそんな若くしてこんなところに来て。親不孝者が」

ああそうか。

ハハハ……

『麻子さん、麻子さん！』

そこから、こえがする。

これも、いつもきいていたこえ。

なんども、なんどもよんでる。

「ホラ、お友達が呼んでなさる。川を渡るまでにまだ時間があるから最後の奉公をしてきな」

優花里さんの遺体を背負ったまま、道中たまたまⅠⅤ号を発見した。そのことは非常に幸運だったが、ⅠⅤ号はいつも見慣れた姿とはかけ離れたものだった。

辛うじて黒森峰の追撃を逃れたのであろう。砲塔には大きな穴が開き、車輛は傷だら

けだ。シンボルのアンコウのマークもかなり傷が入っている。しかもそれが路上のど真ん中で停車している。

中にはまだ生きている人が、仲間がいるのか。背負ったまま駆け足で近づく。車体の上に登り、エンジンの上に一旦優花里さんを腰掛けさせ、その穴から車内を覗く。その中も、これまでの練習で見慣れた姿ではなかった。

車内には血痕が一面に散らばり、砲手席にいなければ華さんとは分からない遺体、その奥に操縦席の計器に身体を預けた麻子さんがいる。二人ともピクリとも動かない。

「麻子さん生きてますか！麻子さん！」

そのうち生きている可能性がある方に向け、声を張り上げる。何度かそれを繰り返して半ば諦めかけていたところで呼びかけが通じたのか、計器から頭を少し浮かせた麻子さんが、額から太い血の筋を作りながらこちらを振り向く。戦車服の背中の部分は大きく黒ずんでいる。私の袖とは色が完全に別物だ。

出血多量。背中と頭、足元を足せば、相当量になるだろう。

「ああ……お婆あ、なるほどね」

「凄い出血です。傷を見せてください！」

そう呼びかけながら、優花里さんの遺体を穴の周りの棘で傷つけないように注意して運び込むことに腐心している時点で、優先云々の問題でないことを私は示してしまつて

いる。そしておそらく、その通りだ。

「いや……いい、モルヒネを打ってる。それより……行き先を言ってくれ」

予想通りの反応をして麻子さんは身を更に起こし、息を吸い込み椅子を調整して両手で操縦桿を強く、力強く握る。

「早く……命の保っている内に。その為に戻ってきたんだ……」

その言葉には有無を言わさない迫力と鋭さを持ち合わせていた。だがそれよりもあの言葉が私をその場に留めさせる。

戻ってきた。一体どこから？この出血じゃこの車内からは動けないはずだ。ましてやさっきのさつきまで気絶していたのだぞ？

暫く答えられずにいたが、向かうべき、実行すべき事を思い出す。

「市街の中心……黒森峰女学園学園長官邸までお願いします。このままの向きでまっすぐお願いします」

「了解……」

I V号は土煙を上げ、未だに順調なエンジン音を立てながら走り始めた。車内の私は無言で各々の作業をこなしている。麻子さんは操縦桿を握り、物見窓から前を注視しながら車輛をまっすぐ前に進める。目も霞んでゆく中でよくできるものだ。

一方私は車内に置いてあった布で華さんを包んで、それを椅子の後ろで縛る。友人と

して死者にできる最低限のはなむけだ。そして一応無線を繋いで、各車と連絡を繋ごうとする。が、返事はなかった。

「西住さん……」

視線は前に残しながら、麻子さんが話しを振ってきた。

「どうしました?」

「撃たれたあと……黒森峰の追撃が、全く無かった……何が、起こってるんだ? あなたの予想でいい……教えて、くれないか……」

追撃がなかった、か。新たな情報にして、予想を補完するに十分なものだ。

「どうやらプラウダがこの試合に参戦しているようです。こちら側で」

「ようです……ってことは、こちらに連絡も無しにか……」

「プラウダ、そしておそらくサンダースも、真の目的は、おそらく黒森峰を崩壊させることでしょう。この規模までして予行演習などとは考えづらい。」

黒森峰もこれだけ損傷させたI V号を追撃させず、試合に出場しているメンバーまで呼び戻しているとなると、相当まずい状況だと思えます」

「では……何故あなたはこれからわざわざそこに行くんだ?」

「大洗を、真に優勝させる為です」

「……出来るのか? この状況で……無線も繋がらんし……カバさんもやられたと見るべ

きだろうし……」

「分かりません。確かに大洗にあるのはこの車輛と私たちだけですが、みんなの死を無駄にしないためにも、やれるだけのことはやります」

「……分かった。だが……濟まない……そろそろ私の氣力が、限界に近づいているようだ……」

限界か……仕方ない。これだけ出血していながらここまで意識を保ってこれただけでも十分だ。

「……分かりました。では、車庫みたいところがあればそこに隠してください。これが撃破されたら負けです」

「了解……」

再び何も話さなくなり、近くの車庫にI V号を見事ワンテイクで入れた。やりきって安心したらしく、操縦桿から手を離し背もたれに身を委ね、息を吐く。

「麻子さん……すみません」

「……どうした？」

言葉が溢れた。あの時心から頼まれたこと、それを裏切る結果を残さねばならない。

「おばあちゃんのお見舞い、行けなくなっちゃって……」

「……いや、構わない……もう、会えたから……」

「えっ?」

理解が追いついていない。しかしその事を気にせず、麻子さんは話を続ける。

「……西住さん……あなたはあの世とか……神とか、を信じるか……」

急になんだらうか。あの世とか、神か……

顎にをかけて少し考えるが、麻子さんには時間がない事を思い出す。すぐに返すしかない。

「……私は、信じていません。というより、信じたくありません。だって神様がいるのなら、私にこんなに過酷な運命を着せるはずがないと思います。もしあの世があつたら、私の立てた作戦のせいで死んだ皆さんに申し訳なくて、顔向けできません」

私は生き残ってしまう。この試合のみならず、これまでのみんなの命全てを踏み台にして。そんな人間が天国なんてものに行けるはずがない。なら、そんなもの無い。勝手な理由で唯物論者になってしまった方が楽だ。実に無責任なバカだな。

呼吸は落ち着いているが、背中の染みは大きくなり、額の赤い筋は変わらず流れる。麻子さんは自分の身を更に背もたれに委ねる。

「……残念だったな」

自嘲しようか、としたところで、麻子さんが力なく口角を上げた。

「へっ?」

「あの世は……あるぞ。私は……そこでお婆あに会ってきた……」

みんなに、顔向け出来ないなら……出来るまで、こつちに……絶対……来るな……よ」
私の方に顔を向けた麻子さんは、さらに悪戯っぽく微笑んだ。それに返事をする間も無く、崩れるようにそのまま腕を垂らして、首が座らなくなった赤ん坊のような姿になつてしまった。

「麻子さん……」

車長席から降りて彼女の元に向かう。しかし、その呼びかけにも、揺さぶりにも答えは、反応は無かった。もう一度彼女の名前を叫んで揺さぶるが、ただ首が振り子となつている、という結果しかやつてこなかった。その揺れで近くの砲弾が彼女の右足の甲に思いつきり倒れてくる。車輛は正面の壁に砲身を突き立てた。

肩を掴んだ両手をそつと離して、まずは倒れ込んだ砲弾をどかしてから、彼女を姿勢よく座り直らせる。隣の通信手の席に無線の計器に近い場所に、優花里さんの近くで拾った壊れたメガネを置いた。そして自分の居るべき場所に戻り、トンプソンの紐を肩に掛ける。それが終わると、ぐるりと車内を見回した。

「麻子さん……華さん……優花里さん……沙織さん……」

一人一人の姿を見据えつつ、名前を呼んでいく。だがもちろん私の独り言になつてしまふ。一人、いや二人に関しては見える姿は想像でしかないのだ。

「みんな、つい最近までごく普通の女の子だったのに、ここまでよく頑張ってくれました……黒森峰のSSにも劣らない素晴らしいチームでした」
ある持ち物を追加したのちにキューポラから身を出して、車輛から飛び降りて走り出す。

「ありがとう、あんこうチーム。私が戦車道をやってきた中で、いやそれだけじゃなくても、本当に……ただ、最高だった。」

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

武部 沙織

黒森峰 砲撃死 砲撃による建物崩壊による圧死 即死

五十鈴 華

黒森峰 砲撃死 頭部損傷による脳死 即死

秋山 優花里

黒森峰 砲撃死 腹部損失による失血死 負傷後10分ほど生存していたと思われる

冷泉 麻子

る 黒森峰 砲撃死 背部、損傷による失血死 負傷後30分ほど生存していたと思われる

第6章 (11) 主人と娘と

私とカトラスさんはレオポンから走りて走ってプレスラウ地区を過ぎて、森崎橋より上流の橋を隙をついて渡って向こう岸に着いた。あの場に残っていても何もできない。その悔しさは癒えるはずがない。が、生きなければならぬのも確かだった。

「……」まで来たね」

荒れた息を整えながら、同行人に声を掛ける。

「……」からどうするの?」

「いや……特に何も」

ただ背中を押されるままに飛び出し、自動車部を任せただけだ。

「……黒森峰が追ってきているのは確か。早くここからは離れたほうがいい」

「そうですね」

レオポンから持ってきたトンブソンM1を携え、さらに奥、黒森峰の市街に向かう。幸い東の隅つこの地域ならここからでもさほど遠くないらしい。

「武器持ってて大丈夫かな?」

「……流石に置いていった……いや、持っていこう」

私がつっていた銃に手を乗せて細目を上手に見つめてくる。確かにこの先は敵地。持つておくに越したことはない。

幸いその不安は全く必要ないものだった。代わりに市街地は非常に不気味だった。

「誰も……いないのかな？」

「……車もない。人もいない……誰もいなくなった街、だね」

文字通り誰もいないのである。よって武器を持ちながら少し歩いていても、誰にも何も言われることはない。

日は登っているから、窓から電気の光が見えないのはわかる。だがそれでいて、あたりに走る車も人すらも見かけないのだ。自分たちが話すのさえはばかられるような異様な雰囲気支配していた。

「……ただなのかな？」

「……さあ」

市街の中から少し外側に出ようとした時、視界の奥、東の方に何か見える。稜線にこそ隠れていたが、そこにあったのは数多くの戦車だった。

「自衛隊かな？」

「……分からない」

とりあえず身を伏せてみる。自衛隊なら包囲網から脱出している時点で大丈夫云々とは聞いたが、やっておくに越したことはない。

しかしよくよく見てみると、色が皆均一で濃緑だ。自衛隊の戦車は春に教官が来た際に一度見たが、迷彩色だったはず。

「……何処の？」

その戦車の感じをかつて見た事があった。

「もしかして……プラウダ？」

あの色、そして一部の車輛が大きく砲身を前につき出している。間違いない。あの雪山で見続けていた車輛だ。

「……でも、なんでこんな所に……今回の試合、プラウダは参加していないはず……」

「まさか、同盟？」

あの黒森峰が我々にしてくれた事を、プラウダが我々にしようと考えているのか？

ここで一つの考えが浮かぶ。もしプラウダが我々に味方して同盟しているなら、そこに行けば助けてくれるかもしれない。生き延びるのが先輩たちからの指示だった。その指示を最優先するなら、そうするのが妥当かもしれない。

しかし現在プラウダが我々に味方しているのかも分からないし、更に今他の皆は命を、学園の存続を懸けて戦っている。私だけが悠々と生き残るわけにはいかない。

それだけではない。私が生き残っても、試合に負けて学園が廃校になつてはあの場に残った先輩に申し訳ない。だったら、私が出れることをして大洗を優勝させる手助けをするしかない。

「……どうする?」

「プラウダが味方かどうか断定できませんし、大洗が優勝しなきゃ意味ないです。ここは市街地に行きましょう」

「……分かった」

頃合いを見計らつて戦車隊に背を向け、市街地に戻るべく西に向かった。その間に先ほど駆けていった丘の上に、多くの茶色の戦車が布陣していた。

「……黒森峰」

それが何を意味するか、実に容易だ。

「先輩方は……負けた……」

そう言葉を発した途端、不意に涙がどんどん流れ始めた。

「先輩……」

「……幸いこの辺りに黒森峰の人はいないみたいだ。少しくらい大丈夫」

彼女は肩に手を置いた。実に、温かい。

だがその温かさがさらに涙を生じさせる。地面に膝と頭を落とし、やりようのない働

哭を地面にぶつけ続けた。

だがこうしてばかりもいられない。ある程度流した後は、意地でもって無理やり泣き止んだ。

「……もういいのか？」

「はっ」

目元を袖で拭ってただ前を向き、先輩方の願いを叶えるべく進むしかない。

道は真つ直ぐに中心部に向け伸びている。相変わらず通行人はいない。ここを今車で走つたら、とてもスピードが出せそうだ、とか考えつつ街に入る。

しかしカトラスさんがあるものに気づいたのか、建物の隙間に身を寄せるようジェスチャーする。指示されるままにちらりと覗いてみると、その先にいたのは黒い服を着た人達、黒森峰の者だ。手には何か持っている。

一本裏の道に入り、その場所に近づいていく。確認すると、黒森峰のものはマシンガンを手に警戒をしている。彼らが守っている場所には『黒森峰女子園学園都市防衛隊武器庫』と薄れた日本語で書かれている。濃く書かれた点のついたアルファベットは読めない。きつとドイツ語か何かだろう。

「……武器庫……だね」

「どうやり過ぎそうかな……」

「……ツチヤさんの先輩がたの願ひ、叶える気はある？」

小さいがやけに低めの、よく耳に通る声で、カトラスさんが話し始めた。

「そりゃ……もちろん」

「……なら、黒森峰の戦車を潰すのが手っ取り早い。戦車に抵抗するためにも、さらに武器がいる。そして、今すぐにそれを手に入れられるのは、ここ。黒森峰の武器庫ならきつと何かあるはず」

「なっ……」

「……違う？」

武器を……手に入れる？……ここで？

「い、いや……」

「……じゃあ、そのトンブソンで戦車倒せる？」

銃を見つめ直す。無理だ。元は機関銃を防ぎながら前進するために作られたのが戦車。こんな自動小銃じゃ弾かれるのがオチ。

「……それに、攻撃できても死んだら意味ない。なら、強力な武装で一撃で倒した方がいい」

「じゃ、じゃあ、この武器庫を……」

「……あの門番たちを倒して手に入れる」

倒す……つて。

「……それが一番早い。他の武器庫が見つかる、または見つかったても警備が緩め、という保証はないし……むしろここでモタモタしている方が見つかるリスクは高い」

どうしてだ。どうして人を殺そうって話をしているのに、ここまで平然と話せるんだ。

「……今までと変わらない。戦車の砲か……そのトンプソンと続く対戦車兵器ってだけ」

「なんで……なんでそんな簡単に……」

「……それに関して答える暇はないね。行くかい？行かないかい？このままじゃジリ貧だけだ」

どうする。彼女の言っていることは正しい。全くその通りだ。だが……だがここで……

「……まさかこの武器を話し合いで貰えるなんて考えちゃいないよね？」

いや、私のためじゃない。この戦いは先輩がたの、自動車部の、そして学園のための戦いだ。そのためだ、そのためなのだ……

「……分かりました。行きます」

「……そう……ツチャさんが行く？なんなら」

「いえ、私が」

手に持ったトンプソンを眺める。使い方ならアンツイオ戦の時に偵察の為に持って行ったスズキ先輩から聞いた。マガジンポーチにも四つのバイオプラスチックでできたマガジンが入っている。

だがここにいるということは、この二人は試合に無関係の者たちだ。ここで殺すのは自身の防衛のためではない。自分の優勝したい、学園を残したいという欲により起こす行動だ。

幸いだったのはこの葛藤の間、全くもって武器庫前の二人が私たちの存在に気付かなかったことだろう。

ここで戦って勝てば、学園艦に住む三万人の人が都市を離れて路頭に迷わずに済む。優勝するなら、この二人の損はそれに勝る。自動車部も残る。そう自分に言い聞かせて、覚悟を決めた。

マガジンを込めてあることを確認し、引き金に指をかけ、その二人が此方に姿を現すのを待つ。弾は20発、これで倒せなかつたら死ぬしかない。時は来た。見回る二人が一緒にこつちの方に姿を見せた。

「…………行く?」

「は、」

息を吐き、トンプソンを構えて建物の裏から飛び出した。二人に走り寄りながら引き金を引く。

乱れる球の一つが一人目に命中、当たったところが幸い首から上で、猛烈に血を吹いて奥側に倒れる。

もう一人がこちらに気づきMP40/Iを向けるが、引き金の指を固定したまま素早く銃を左に向け、腹部と胸部を狙う。彼女も前のめりに倒れたことを確認し、弾切れを示す音を鳴らし続けた状態で、やっと指を引き金から離れた。

「…………終わった、みたいだね」

「はあ…………はあ…………」

死んだ、らしい。

「…………じゃ、音もしただろうし、早めに済まそう。二人が死んでるか確認して」

「いや…………死体をさらに傷つける真似は…………」

「…………生きてて撃たれても知らないよ。それに私が巻き込まれちゃたまらない」

またしても真つ当な事を言われてしまった。だが血を垂れ流すこれら二つのものに触れたくはない。弾倉を入れ替えて倒した頭に銃口を向け、一瞬躊躇ったが、彼女の視

線があることに気づいて、二人に一発ずつ銃弾を撃ち込んだ。

「……私が開ける方法探すから、少し休んでて」

「あ……はい」

こみあがる吐き気に考える力を奪われて、言われるままに武器庫の脇の壁に背中を預け、腰を下ろした。銃も一度手元から離す。

そのシャッターは閉じている。鍵穴とかはない。シャッターの上の赤いランプの灯った装置などから察するに、遠隔スイッチとかがあるらしい。生憎トンプソンと弾は共用できないようで、私が右脇に朝食を垂れ流す近くで、カトラスさんが不満げに弾の予備を投げ捨てていた。

少しして片方の死体のポケットからボタンのついた機械を見つけ、それを持ってシャッターの前で上に向けてスイッチを押した。するとシャッターは重い音を出しながら、徐々に上へと開いた。

「……おー、ビンゴ」

「入ってみますか」

「……そうだね」

かなり力を入れて立ち上がって合流する。薄暗い中に入ると、縦長のケース、整頓された自動小銃など、よく分からないものを含めたくさんのものが並んでいる。

「どれがその対戦車兵器、ってやつなんですかね？」

「……わかんない。流石にそんな知識ないし」

「ないのここにここをこじ開けたんですか？」

「……いや、こんだけ戦車揃えている学校なら、対策として持つてるはず」

「対策って……何のですか？」

「……他所からの防衛と……恐らく、戦車道の反乱」

「反……乱？」

自分が持つ戦車道のイメージからは、なかなか想像がつかない。反旗を翻して何になるというのだろう。

「……戦車道が反乱起こしたら、戦車以外で止めるしかない。そうなる……そういうのが必要になるよ。」

さ、それより片っ端から箱を開けてみよう。あつたら教えてくれ」

私の疑問が完全に解消される前に、彼女は手を鳴らして箱の山へと歩みを進めた。

爆発物もあるだろうから、扱いには気をつけつつ箱を開けて、中身を確認してゆく。奥まったところにあつたその中の一つのプラスチックケースを開けると、ある物が入っていた。

四角錐型の物の先に紐がついている。底を近くにあつた鉄のケースに近づけると、重

いドアに鍵が掛かるような音がしてガツチリとくっついてしまった。引っ張ってもずらそうとしても外せなくなつたので、仕方なくそのままにする。

「……何かあつたのかい？」

「入つていたケースには……B o m b eと書いてありますが……ボンベではなさそうですし……爆弾ですかね？」

「……磁石が付いてるみたいだね。戦車の車体にも取り付けられるかもしれない」

「でも、これで戦車の車体なんて破壊できるのですかね……」

「……流石に車体にくっつけるだけの爆弾なんて脅しにしかならないし……なんかしら効果はあると思う。使い方さえ間違つてなければ」

「それじゃ、持っていけますか？」

「……そうだね。他に簡単に使えそうなものは見当たらないし、のんびりするわけにもいかない……行こうか」

奥にあつたカバンを手に取り、お互い二つずつその爆弾を入れてから、その場を立ち去ろうとした。しかしそのまま立ち去れるほど、私は気丈な人間じゃない。

「……早く行こう。ここを爆破するのは面倒そうだし」

「少し待ってください」

もう先ほどの死体は、血を流し切つて外気に触れ続けて冷たくなっている。その二人を倉庫側に寄せると、手をヘソの上で重ね合わせる形で仰向けに並べた。それぞれ結構重かったが、日頃重い部品を持ち歩いてきたのが功を奏したようだ。

カトラスさんはただ何も言わずにその様子を眺め、待つてくれている。

彼女らは、死んだ。試合で生きるか死ぬか、それを賭ける場所にいなかったにもかかわらず。

その二人を前にして手を合わせる。だが心の中でも謝罪の言葉はない。私は……私には間違っていない。彼女らは必要な犠牲だと断言してしまおうとするからだ。

「……行こうか」

「はい」

しばらくして手を下ろすと、背後の声が私の気持ちに途切らせようとしてきた。行為自体はやめたし、カバンを背負い直してその場を去った。だがこの記憶だけは棘のように頭の奥まで貫き通し、切り替えを許さなかった。

今度は境界付近で折り返すことなく、市街の奥へと進んでいく。道中道の隙間に身を潜めながらあてもなく進んでいくが、奥まで行っても人がいない。

「本当に……誰もいない」

「……避難したのかもしれないね。西住副隊長が市街地を戦場にするって言うたから」

しかし奥に進むと、あるものが増えていた。南北に進む道の一部の地面に敷かれていたであろうコンクリートが剥がされ、そこそこ深めの溝が横たわっているのである。

「……何なんだ、この溝は？……排水用にしてはやけに雑な作りだね」

カトラスさんが眩ぐが、返事をするための頭が働かない。安全以外にはあの事しか考えられないのだ。だがしばらくして、やっと次の議題が来た。遠くから音が聞こえるのだ。

「これは……エンジン音、ですね」

「……戦車が近くにいるかもしれない」

「一旦待ちましょうか」

この音でやっと棘は抜けた。隙間から少し身を出して辺りを見回すが、道中にそれらしきものはない。

「……遠いね」

「幸いこの辺りじゃ無いようです」

しかもエンジン音といっても戦車とは音が大きく違う。なんの音が考えていたその時、遠くで何発もの爆発音が耳を襲った。

「なっ!」

「……爆発?どこから……」

「こつちみたいです」

生憎ここから煙のとは見えないが、場所をずらして低い建物の上を通して見ると、丘のある南東の方から煙が上がっている。それは何度も何度も繰り返された。

飛行機だ。煙の上で旋回している小さなもの、どこの何かは分からないが、これが煙の原因であり黒森峰の戦車隊を攻撃している、というのは現地に行かなくても検討がつく。

それだけで驚くのは早かった。今度は南西の方から白い筋が、市街地の中心部の方に向けて何本も通っている。幸いこちらを向いてはいないようだ。そしてそれは中心部の地面に向けて吸い込まれていった。

「く、黒森峰が……大洗以外から攻撃されてる……」

こんな装備が大洗にあるはずがない。あってもこんなところを持つてこれるはずがない。

「……そうみたい……だね」

こちらに有利となる出来事である、というのは明らかだった。

「……まずは様子見だね」

喜ぶわけにはいかなかった。先程のエンジン音が此方に向けて近づいてきたのだ。爆弾らしきものが街に投下され、煙を何箇所も登らせている。しかも飛行機の群れはこちらに近づいてきている。ここにいれば爆撃に巻き込まれることは容易に想像できた。

「……………つちに來てるね」

「ど、どうしたら……………どこか隠れられる場所は……………」

周囲を見渡すが、件の溝以外特に隠れられそうなどころはない。それに溝とはいえ上はガラ空き。上から降ってくる爆弾には対抗できない。

一方のカトラスさんは近くの家の中を窓の外から見ていた。そしてカバンから先ほどの爆弾の一つを取り出すと、その根元を握って窓を叩き割った。

「ちよ……………ちよつと、何やってるんですか！人の家ですよ！」

「……………ここに避難する」

「で、でも……………」

「……………たとえ不法侵入でも、爆撃に巻き込まれて死ぬよりマシ……………緊急避難、緊急避難」
割った窓に手を入れ鍵を開けると、素早く窓を開き、窓枠に足を掛けていた。

「……………早く。……………ここは地下室があるから、外の溝よりはまとも」

確かにそうだ。さっきから彼女の話に乗っかってばかりだが、それで助かるのならそ

うするしかない。私も窓から室内に入っていた。

地下室への木の扉が床にあるのを見つけ、すぐに身を滑り込ませる。中にある階段を降り、階段の途中で段を椅子代わりにして腰を下ろす。まもなく近くにも爆撃が開始されたようで、爆発音だけでなく振動も地下室に伝わってきた。

「……やつぱり爆撃みたいだ」

それにしても、本当について最近まで戦争関連の云々なんて、自分にとつて紙の向こうの話でしかなかった。だが今、私はそのものではないが、現場にいる。少し安全なところとはいえ。

そしてその安全のために、私は……

だめだ。考えれば考えるほど、変な思考に染まっていきそうだ。

「そうだ……カトラスさん、一つ伺ってもいいですか？」

「……どうしたんだい？」

一つの疑念をぶつけて、時間を潰そう。

「武器庫の時とか……今回の侵入の時とか、何でそんなに平然と出来るんですか？」

それが正しいのはわかる。だが道德の壁を思いつき壊してそれができるかは、また別だろう。

「……さあね。強いて言うなら……環境？」

「環境、ですか……そうなると、船底の、でしょうか？」

「……まあ、そうなるね」

「私自身そこから辺知識が曖昧なのですが、ただこれをやり過ぎすのもなんですし、少し教えてくださいますか？」

床、といつても頭の上にあるが、を指し示しながら話を切り出すと、カトラスさんは表情を変えなかったものの、頭を指で掻きながら呟いた。

「……あんまり面白くないよ？」

「構いません。無言よりは遥かにマシでしょうから」

「……違いはないね」

話を整理するように上を眺めていた。

「……それじゃあそうだね……学園艦の底の方、上じや大洗のヨハネスブルグと呼んでるって話だけ……ま、桃さんがなんとかしてくださいっおかげで今はマシだけど、昔はほんとそのままだったね。ほんと数年前までは」

「数年前、までですか」

「……そ。甲板とか艦内港湾に直結する出入り口、つまり地上からの物資の供給口をどこの派閥が抑えるか……その大半を掌握しさえあれば、底をほぼ差配することができ

る。そしてその供給口を守る、または奪うために、各派閥は資金源を狙い続けたのさ」
「派閥なんてものが……あつたんですか」

「……あつた、じゃないな。実は今もある。桃さんの調停のお陰で、当面の衝突は回避されていくけどね。」

……そして、基本底に収入源はない。そりやもともと船舶科自体が労働と引き換えに学費を免除されてる人たちの集まりだからね。実家の送金なんてあつたとしても大した額じゃない。船舶科の中にや勉強と勤務をして、バイトまでしてる奴もいる」

「寝る時間あるんですかそれ……」

「……そういう奴の中にや立って寝る術を習得している奴もいるさ。もつとも……勤務中バレたらタダじやすまないが。」

……ま、それはいいとして、つまり底は金がなくて逆に、いやだからこそ金が欲しく堪らない場所なのさ」

「なるほど……」

自分も放課後はかなりの時間を自動車部に割いていると思うが、実にそれは幸せだったのかも知れない。

「……そして、私の仕事は知ってるか？」

「確か……バーの店員さん、でしたっけ？」

「……そうだ。そして、ノンアルが基本とはいえ、飲食で利益率の高い飲み物の販売が軸だ。ま、値段はある程度は安いがね。」

……で、アルコールとか糖度の高いものは基本そんなに腐ったりするもんじやない。つまり廃棄分もそんなにない……要するに、私の店はドル箱ってわけだ」

彼女の話は分かりやすかった。機械の部品が噛み合うように、実に論理的だった。

「あ………だとしたら、もしかして……」

「……話が早いのは、こういう時はいいのかわからないけど……まあ、当たりだろうね。私の店は、金を求める派閥対立の立派な舞台だった」

やはり………そして、元々の疑問の解決になる鍵も、きつとここにある。

「……一応お銀のいた派閥は底でも主要派閥だったし、地上の出入口をいくつも抑える力もあつた………そして私はそこから仕入れて、みかじめ料を納める存在だった。」

……だがね、他所がウチを襲うことは時々あつた。そして大概はウチの派閥の戦闘時の主力、ムラカミとかがいけない時をよく狙つてたね………そうなると派閥の助けが来るまで、基本一人で、いても味方かもわからない客と防衛だ。

……カネだけは盗まれてはいけない。盗めたらまた狙つてくるから………それだけは敵命されてたからね………

空き瓶とかモツプとか、まさに手当たり次第さ。敵も数いたからね………割つては戦う

の繰り返し。考える暇なんてありやしなかった」

かなり壮絶な世界だったのだろう。

「……床にはよく破片が散らばっていたよ……一度だけチャカ持ってきた奴もいたし

……」

「チャカ？」

「……拳銃さ。ま、流石に地上に連れていかれたけど」

「どれだけ世紀末だったんだ？ここまでとは……平穏な甲板からは想像もつかない世界だ。」

「……私の前に店をやっていた人は、腕を殴られて破片で神経やられて、シエイカー振れなくなって辞めたし……私だってココなんかには傷がある……」

「彼女は冬服の袖を捲り上げて、肘の近くの傷を見せてくれた。長さは3センチほど、だが周囲にも若干赤みが残っている。」

「……治療つたってあんなどこじや縫い合わせるだけだからね。酒を麻醉がわりに」

「お酒を……ですか？」

「……そう。度数高めの酒をイッキして、さらに鍋越しに頭を鈍器で叩いて気絶させて、その間に縫う……痛いよ、その時よりあれはあとあと……」

「はあ……」

酒、そして麻酔の方法。あまりの想像の範囲外の出来事続きに、気の抜けた返事しか返せなくなっていた。

「……さて、だいたいこんなもんかね。こんな世界にいたら、冷酷にやるやり方も覚えるってものさ。」

「……でも……お銀が……お銀が死んじやった時は……流石に……」

そのまま頭を抱えて前に体を倒した。そのまま嗚咽が混じり始める。きつと……死ぬ事態はそうそうなかつたのだろう。流石に労働者でもある彼女らを見捨てるのは惜しいはず。

「……そうですか……」

「だからこそ」

嗚咽を振り払い、いつになくはつきりとした口調で、私が伸ばそうとした腕を止めた。

「私は勝ちたい。いや、大洗を勝たせたい。それが……お銀が望んだことだから」

その視線は私の方にはない。正面のコンクリートの壁だけを見ている。

「……貴女は、勝ちたい？」

「生き残るには……勝つしかない、のですかね？」

「……そうだね。ここは黒森峰の都市の中だし……こちらが負けたら、どうなるかは分からない」

「なら、勝ちます」

「……それが聞けてよかった」

ある程度続いた爆撃が終わってから一分くらい過ぎた後、周りを警戒しながら地下室から顔を出した。家は爆撃によって大きな損害は出なかつたらしく、普通に開けたままにしていた窓から外に出る事ができた。

「……音はしてたけど、直接はされなかつたのかね？」

「しかし地下に閉じ込められるよりはいいですよね」

お邪魔した家に一礼して外に出ると、外は崩れた建物で溢れ、そこからは赤い火の手が上がり煙を登らせる。戦争ドキュメンタリーでよく見る廃墟となった街のシーンが、眼前に広がっていた。本当に私たちがいた家は幸運を持っていらしい。

「……これって、なんだったっけ？」

「たしか……戦車道の試合、だった……気がします」

「……でもここは戦場だね」

「ですね……」

とにかく音の鳴る方へ向けて歩き始めた。ここでの爆撃はもう終わったようだが、中心部からはまだ爆発音が聞こえる。それも外に出てから2分もしない内に収まってい

た。

「どこでやってるんですかね？」

「……南東部の何処かだとは思うけど……とにかく歩き回るしかないね」

そうはいつても辺りからの炎の音が、その音探しを妨げる。塹壕を超えたり、塹壕經由で移動したり、警戒しつつも動き続けた。しかしその音は見つからない。

再び建物の隙間に身を寄せる。水を飲もうとしたら、何も持っていないことに気づいた。

「ありや……」

「……まあ、水無しでも一息つけるさ」

「それにしても……見つかりませんね」

「……この都市も相当広いだろうね……いうほど建物も高くないみたいだし、人口もウチより遥かに多いって聞いたよ」

「はえー」

今度は辺りから小さく戦車の履帯の鳴らす音がした。これが一方向ならよかったが、それはあちこちから、本当に四方八方から聞こえたのだ。

さらに砲撃が再開されたのか、その音もする。

「これじゃ……どこでやってるか分からない……どうしたら……」

だが待っている間に状況は変わった。一際目立った音が迫ってきていたのだ。場所は中心部の方からだ。

「黒森峰……ですかね？」

「……他にいないんじゃないかい？」

「プラウダじゃなければ、ですが」

身を伏せたまま顔を覗かせると向こうにいたのは丘の上に見えたあの車輛に似た車輛が幾つか見える。しかしあの丘の上の車輛より小さいように感じる。

I V号だ。あれは黒森峰だ。もしかしたら黒森峰の試合に出ている部隊への援軍かもしれない。そうでなくとも倒すべきものだ。

手に握られた四角錐型のものに水滴が付く。近づいてくる中で分かったが、黒い服を着た黒森峰の者は西住副隊長がいつもやっているようにキューポラから身を出している。もしかしたら、トンプソンで狙える、かもしれない。それならこの四角錐型の爆弾みたいに近づかなくてもいい。

「あれ……狙いますか？」

「……狙ってもいいけど、どうする？この爆弾使う？」

「先頭の車長を撃てれば隊列は混乱します。勝負は相手が車載機関銃でこちらを撃つま

でのわずかな時間ですが」

「……本命は選抜隊、かね……やろうか。今度は私が行こう」

「えっ」

「……さつきやらせて、今回も行かないわけにはいかないだろ。」

それに、私の名は『生しらす井のカトラス』

足がはやいことから付けられた名前さ」

気づいたら手からトンブソンは奪い取られていた。

「……援軍だったらこっちに利するだろうしね」

トンブソンのマガジンを抜き、マガジンポーチから新たなマガジンを取り出して装填する。引き金に指をかけ、戦車をできるだけ引き付けている。

口が渴く。先程の二人を狙う時より鼓動は激しい気がした。私がやろうとしているわけじゃないのに。

30……20……15……。

距離は近づいた。敵はこちらには気づいていない。今なら奇襲が成功するはず。

その距離3メートル。迷わず建物の隙間から飛び出していった。銃をキューポラの上の方に向けて連射する。音からして最初の三発ほどはキューポラに当たったようだがその後は当たったらしく、素早く隙間に戻ってきた。敵車輛は機関銃を準備する間も

無く、横を通り過ぎていく。

「後続がいる。逃げるよ」

「は、はい！」

言われるままに狭い中を頑張つて走つて行く。後ろの車輛が機関銃をこちらに向けようだが、コンクリートの壁2枚挟んだこちらまでは流石に貫通しない。何とかして私たちは隙間を通つて隣の通りまで出る事ができた。

成功だ。これで敵の隊列位は崩せただろう。

「や、やりましたね」

「……逃げるよ。追つてきてる」

「えっ……」

興奮していたのか、そう言われるまで背後から足音の群れが鳴っていたことには気づかなかつた。

「……まずいね」

「このまま振り切れますかね？」

「……土地勘は向こうにあるし、数だつてある。これは……足だけだね、頼れるの」

「なに、私だつて走る事にかけてなら、負ける気はありませんよ？」

「……車で、だろうか？」

「うっ……」

「……まあ、行こう」

確かに彼女の足は速かった。脚力も一応の自信はあるが、それをも上回る勢いでカーブと直進を繰り返す。それに続こうと必死でいるうちに、いつの間にか沢山の声は遠くに消えていた。

「ふう……」

水はないがまた一息つく。

「これから……どうしますかね」

「……まだこの爆弾が残っている……どこかで使っちゃったほうがいい……なんならさっき使っても良かったかもね」

そうなると他の部隊を探すしかない。結果的に再び黒森峰の選抜隊を探すこととなった。だが戦闘は本当にあちこちで起こっているらしく、音では分かりようがない。時にはプラウダらしき戦車と出くわすこともあった。

そして休憩もとりつつうろつくことしばらく、目当ての車輛を見つけた。

「……ティーガー……」

「です……」

これが選抜隊かは分からない。が……私たちが戦っていた選抜隊にはティーガーIはいた。頭は出しているが、再び同じ手が通じるほど甘くはないだろう。

「……やろうか」

「はい」

話し合うまでもなく、2人同時に行くことが決まっていた。

「……機銃が通り過ぎるまで待つよ」

「分かってます」

先ほどの攻撃で機銃の威力を目の当たりに行っている。あれに当たったらもちろん、そのせいで壁が崩れてきてもひとたまりもない。避けようとするのは当然だった。それぞれ一個ずつ握りしめて、その時を息を潜めて待つ。

いや、潜めようと奥に来すぎていた。そして何より……

その道幅は、先ほどより少し広かった。

カトラスさんが先に飛び出した。私も続いて飛び出していく。目当ての車輛目指して。

しかしその時すでに、顔を上げると車長は自動小銃、自分たちと同じトンプソンの銃口をこちらに向けていた。

そして私だけそれに気づいてしまったのだ。

先んじていたカトラスさんが蜂の巣にされるのに、時間はかからなかった。

一瞬だった。一瞬だけ全面開放的な路上で私は固まった。直後に隙間に戻ろうとしたその時を、相手車長は逃してくれなかった。銃弾は左足首、左太腿と右脇腹を狙った。体の三箇所鈍痛が走り、隙間に飛び込んで倒れこむ。しかし黒森峰側も追撃を諦めたのか、そのまま郊外の方に向かっていった。

意識は保っていた。しかしその意識が痛みを感じさせ苦しめる。左足に力が入らないような状況でなんとか立ち上がり、片足歩きで壁に手をかけながら隙間を逆側に抜けた。出血が激しいのか、意識が薄れていき、地面に倒れこんだ。

「流石に……無茶だったか……な……カトラスさん」

彼女に対してはこう思うだけが精一杯。這ったまま腰に四角錐型の爆弾を乗せ、一本奥の広い道に出た。通ってきたときは気にも留めなかったが、道にはフォルクスワーゲンが一輛停車していた。

とにかく座る場所を求めて、血の跡を後ろに残しながら近づいた。災害時の車の扱いを心得ているのか、はたまたただ急いで逃げただけなのか、扉が開いている。運転席から何とか右足で椅子まで移動し、背もたれに身を預ける。

座って落ち着くと、服に染み付き、今この時も広がってゆく血の跡、痛み、そして先輩方への申し訳なき。それらのせいからか、顔に涙を浮かんでいた。

左足からの出血は益々増している。とりあえず持っていたタオルで股のところを縛ってみたが、それでもこの出血が続くようではもう命は長くないだろう。つまり先輩からの願いを達することは不可能になつてしまったということだ。

ならばどうする？ 私はこの時間、どうすればいい？

その時腰の四角錐型の爆弾が脇から顔を出しているのが目に付いた。それと車の引き出しから偶々見つけた車の鍵。

それらを見た時、頭にある計画が浮かんだ。それを実行すると後戻りはできない。しかし左足からの出血を見て、心を決めた。涙なんか引つ込んだ。この残されたわずかな命を懸けて、黒森峰に一矢報いると。

それが大洗の優勝に貢献するかはわからない。しかしそれに近づくと信じた。右足にはかろうじて力が入ることを確認して、鍵を差し込みエンジンを入れる。エンジンは適宜整備されているらしく、かかりがいい。

「いい人を持つてもらったね……」

アクセルを踏み込む。左足は使わない。ガソリンもそれなりに入っている。道を曲がって戦車が通った道にドリフトをかけながら戻る。

「燃えるねえ……」

薄れようとする意識を抑えながら、戦闘しているらしい道の先に進んでいく。

「死んだら怒られるだろうなあ……」

道が真つ直ぐなお陰でスピードはみるみる上がり、見つけた黒森峰の戦車隊にも接近してしまった。だが前からひっきりなしに砲声がするお陰からか、こちらには気が付いてないようだ。

この通りにいるのは三輛だけらしい。もう距離は50メートルもない。そろそろだ。アクセルを一層強く踏み込み、四角錐型の爆弾の紐を引く。猛スピードで鉄の重そうな戦車たちはこちらに迫ってくる。

先輩方、申し訳ないですけど、今からそちらに行きます。

開けておいた窓から力を振り絞って片手で爆弾を外に出す。アクセルからは絶対に足が上らないよう、残された力を振り絞る。

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

加藤 良子

黒森峰 銃殺 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

土屋 圭

黒森峰 死体損壊が激しく致命傷は不明 即死

第6章 (12) 愚将の忠誠

ティーガーIIを学園都市中心部の学園官邸を目指して進ませていた。しかし現状既にプラウダ学園装甲部隊が中心部に迫り、取り囲んでいるようだ。私の気づかぬ間にここまでことが進んでいたとは……

「ここも封鎖されているわ。前方からT34／85が二輛、JS2が一輛出でくるわよ！」

何れにせよ照準器の向こうでは、道路上の三輛の戦車がこちらに砲身を向け待ち構えている。ここが今まで見かけた中で一番突破が容易、というわけではないが、このまま突破しなければ側面を晒すことになる。いくらティーガーIIでも側面を狙われるのは厳しい。

「ティーガーIIを正面から止められると思っっているの！なめないでほしいわね、イワン共!!？」

だが正面からの撃ち合いなら決して負けない。装填してあった砲弾をJS2に撃ち込む。砲身から煙が吹き出し、こちらに流れてくる。近距離ならば地獄に送れる。まず一輛。

しかし次弾装填までに煙の向こうが光り、T34から正面に砲撃を食らう。正面から撃ち抜かれるほどヤワではないが、車内を激しい揺れが襲い、頭の上のキューポラが煩く騒ぐ。

「ぐっ……」

砲手は落ち着いて砲弾の装填が確認されると、T34に撃ち込む。車内に煙と薬莖が排出される。正面から狙われたT34はキューポラから炎をあげ、車体のあちこちからそれ以上の煙を噴出させる。

「命中！2輜目撃破。T34後退していきます！」

「よし、包囲に穴が空いたわね」

道は開けた。あとは進むのみ。前進し学園官邸に急行するよう指示しようとした時、操縦手から焦る口調で報告が入る。

「くっ……隊長、ミツシヨンに異常発生です！ギアが入りません！」

足元からは必死に動かそうとすることによる歯車の噛み合わない嫌な音がする。

ギアが入らない。即ちこの戦車は動かない。

「江賀に無線を」

「はっ……」

ただ路上で無言で待つ時間が、かなり長く感じられた。

「こちら江賀。隊長代行、如何なさいましたか？」

「無事？」

「は、はい。猟兵が二人ほど来ましたが撃退済みです。他には特に……」

「なら、どこかに隠れなさい。やり過ぎすのよ。それが最後の命令」

「はっ……最後？」

無線は言うだけ言つて無理やり切つた。さあ、数多の者を切り捨てるだけ切り捨ててここまで来た。あとはそのまま行くのみ、か。

「……もういいわ……ここまでね」

「は？隊長代行？」

略帽である船形帽をとつてからヘッドホンを外す。

「最早、この試合も、学園も負けね。ここから先は私一人で行くわ」

不安げに見つめてくる砲手の視線を無視して淡々と咽喉マイクを取り、トンプソンを持ってマガジンポーチを腰に結びつけ、キューポラを開いて荷物を先、続いて身を放り出す。

「エリカ隊長代行！」

外に完全に出た私を追つて、砲手がキューポラから身を乗り出す。

「最後の命令よ。貴女達は車輛を爆破して、江賀のティーガーIと合流して隠れて時間

を稼ぎなさい。とにかく試合終了まで戦わないでいなさい」

車輛を降りて素早く中心部を目指して駆けて行った。背後から隊長代行、隊長代行と呼びかける声があるが、耳に入れることは無かった。

私はついに代行としての役目も放棄したのだ。そんな肩書きで呼ばれる資格はない。聞かないふりをし続けたまま、音はやがて本当に聞こえなくなつた。

まだ時たま空の低い位置に飛行機雲の親戚が見える。近くの家は燃え盛り、破壊された煉瓦や木片が所を問わず地を覆っている。白い煙はあちこちから上がり、空に昇る。

中心部に近づいてもその光景が変わらず続く中、一人先を急いでいた。煉瓦を踏みしめ、時折近くの壁の跡に身を潜める。

中心部に近づくにつれて、落ちている死体の数が増える。それも軍属ではない。防衛隊やSSの制服ではなく、本来の黒森峰の制服を着て、パンツァーフアウストや銃を近くに落として瓦礫に埋もれている者が明らかに多い。

人によっては胸のあたりが真っ黒に焼け焦げたまま、パンツァーフアウストの棒を握りしめている。初歩的な使い方のミス。それすらも分かっている人間を、学園は前線に送り込んでいる。

これが意味する所は、そのような手段を取らざるを得ないほど戦局がよろしくない

いうものだった。宣戦布告されていない故に、昨日まで銃の撃ち方さえ知らぬ者を送り込まねばならないほど数が足りないのだ。

落ちていた銃は流石に使えない。弾の規格も今のものとは合わない。使われていないパンツァーフアウストなら何とか使えるが、流石にこれを持ち運んで行動するのは目立ちすぎる。

仕方なくいざという時に備えマガジンをいくつか拾っただけで、残りは捨て置いていった。

先を急ごうとした時、金切り声に近い叫び声が入った。建物の窓越しに身を潜めつつそちらを向くと、少し離れた路上で黒森峰の女子二人が、プラウダの数名の兵に追われ、服をひん剥かれようとしていた。

すぐに捕まり、一人は銃の柄で殴り倒され血痕を拡散させ、地面に伏した。もう一人は向こうの趣味にあったのか、地面の上で襲われていた。そして襲うのにも順番があるらしい。順番待ちがその周りを囲んでいた。

その光景はあまりにもおぞまかった。目も銃も向けることなど出来なかった。

本来ならここで全員奴らを撃ち殺して然るべきだったろう。たとえあの中の一人を巻き込んでしまったとしても。冷静に考えていたらそうなっていた。

だが実に恥ずかしいことに、私は駆け出してしまった。ただ一瞬でも早くこの野生の狂乱から逃げ出したかった。

一方でこれで確信できたこともあった。やはり、プラウダはゴキブリ以下だ。蔑むべき存在なのだ、と。それさえなかったら、殺すことにためらいはなかった、と断言できる。

その後の移動でも弾の使用は必要最低限を心がけた。防戦に加われという指示ならば、その為に弾薬は残しといたほうがいいし、当面は生きねばならない。

万が一発見されて戦わねばならないときは、SSになつてすぐに従軍した反乱鎮圧を思い出す。こう見えてもその戦いで反乱部隊の一つを殲滅し、学園長から直々に勲章を授かったこともあるのだ。プラウダの糞野郎なんかには負けはしない。

鉄の心、動じることなく頭を狙う。

数人の頭を弾数発で破壊したころ、学園の防衛ラインらしきものが見えた。といって塹壕の前に土嚢をいくつか積み、機銃を出し自動小銃を準備した防衛隊が頭だけ見える程度のものだが。見えるだけでも転がっている死体が多い。敵のも、味方のも。

正面から行つては間違われ可能性がある。流星に味方に撃ち殺されるなどというヘマはしたくない。

裏から塹壕に近づき、建物の横から帽子を出して振った。向こうが確認しているかはわからないが、撃つては来ないが、ちらりと見るとMG42はこちらに向いている。続いてある声をかけた。

「Ein Wald (森)！」

少し間が空いたが、返事はしてくれなかった。

「Meer (海)！」

互いにそう言う人間だとは確認は取れたはず。されどまだ弱い。

「武装SS装甲師団曹長、逸見エリカよ！そこを通しなさい！」

「こ、これはSSの戦車道部隊の指揮官の方でしたか。失礼を」

姿を出し塹壕へ走り、滑り込んだ。攻撃はない。

すぐに部隊長らしき娘が駆け足で近づいてきた。服はかなりボロボロであり、階級章がなければ浮浪者とも取られかねないほどだ。

「逸見曹長、申し訳ありません。プラウダ兵の一部が黒森峰の服を奪っているという話があつたもので……」

「伍長、それより現状を」

名前が分からずとも階級で呼べるのは、こういう時は正直楽だ。

「我が部隊を含め、この防衛戦はプラウダの歩兵による第一波を辛うじて撃退しました

ようですが……すぐに第二波が来るでしょうね」

「……その時守れるかしら？」

「第一波の時の犠牲は多かったです、守ってみせます……やれる限りは。そう命令を受けていますから。軍人ならばそれに従い、全力を尽くすのみです」

銃の作動を確認しながら、口角を上げて応じる。

「そう……これ、途中の死体から拾ってきた弾。足しになるかもわからないけど、よかつたら使つてちょうだい」

「は、あ、ありがとうございます！」

「私は学園長に報告して来るから、ここは任せるわ」

「はっ！」

綺麗な敬礼だ。右手がすつと、まっすぐに伸びている。上を確認し、塹壕を飛び出して真っ直ぐ中心部の方へ進む。その中で、背後から一層大きな声が響いた。

「ジーク、ハイル!!？」

もう敵しいだろう。さつきは歩兵主体だったようだが、きつと次は戦車隊が来る。あの塹壕では耐えられまい。士気はありそうなのが救いか。

時間がない。

つい今も一発着弾したここに到着した。道中稼働中のこちらの戦車は見当たらなかった。

フリードリヒ地区ブランデンブルク地域にある学園官邸。

その象徴である入り口の上の鷲の紋章は足元や翼が欠け落ちており、柱の下がえぐれ、壁も傷だらけである。辺りの窓は破れていないものを探すほうが難しい。

学園都市ではなく、学園そのものの喪失。最早話だけだと信じたかった現実は、私の正面に堂々と広がっていた。

その柱の下に腰を下ろし息を落ち付けようとしたところ、地面の一部が開き、地下から人の顔が覗いた。

「オイ、生徒か？……こつちだ！」

姿からして防衛隊だろうか。

「急げ！早く！」

近くまでプラウダ本隊は迫ってはいないらしいが、急かされたのもあつて呼びかけに応え、案内の者に従い穴に入った。階段を一步ずつ下り、白熱電灯のぼんやりした光に照らされた廊下を銃片手に進む。

地上からも地下からも唸り声が絶え間なく耳に入る。そこは地上で軍服が汚れに汚れた私でさえ、いるのが申し訳なくなるような場所だった。

「♪掲げよー」

廊下の両脇は頭、首、腕、胴、足、その何処かは確実に包帯を巻いている人間がずりりと並んでいた。中央にあるのは私ともう一人が並んで歩くのがやつとなスペースのみ。

「♪神聖なる旗を」

S S、防衛隊、一般生徒問わずほとんどの者は体育座りしており、横になれるのはさらに酷そうなほんの一部だけである。

「♪親衛隊は」

それらを数名の血まみれのエプロンを身につけた女性が対処していた。もつともテープや包帯、それすらもない時はカーテンの切れ端を巻いた後はほっとかれたが。その方々を避けつつ、コンクリートに囲まれた空間を進む。

「♪堂々と前進す」

処置を受けた生徒の一部はそのボロボロの身にも関わらず、入り口の防衛隊の者に銃を握りながら、外に出してくれと必死で乞う。そして一部は、そのまま地下から飛び出して行く。行った者のどれほどがまともに帰ってこれるだろうか。

「♪叛逆者の前に倒れし戦友の」

戦闘以外でなら高校生以外の関与も認められる。そう、ケガ人の励ましのために小学

生が歌うのは別に戦車道連盟規約には反しない。

「♪御霊とともにいざ行かん」

助けるべきか、手伝うべきか。一瞬頭をよぎったが、無視して先を急ぐ。これが終わった後私は再びあのゴキブリ以下共を一匹でも多くこの地から駆除しなければならぬのだ。

「♪反逆者の前に倒れし戦」

突然地下は大きく揺さぶられ、叫び声により歌も中断される。近くに着弾したようだ。私もその拍子に右側の壁にそのひたいを打ち付けてしまった。

「みんな続けて……」

♪御霊とともにいざ行かん」

額を壁から外した後も、少しの間嫌な揺れが頭を包んでいた。足で捻り潰したくなる奴らを思い浮かべつつ、それを相殺するべく壁を殴る。

「プラウダめ……」

髪は爆風でボサボサになり、膝を擦りむき、息も大きく荒れている。廊下に靴の踵の音を響かせながら学園長のいる所に向かった。とはいえど単に廊下の奥だ。ここの防空壕はそこまで大規模ではない。

その入り口には門番替わりのSSが二人席に着いている。

「SS装甲師団選抜隊長代行、逸見エリカ。学園長に戦況の報告に参りました」

「生徒手帳の提示を。あと荷物と武器はこちらでお預かりします。その照合と案件の確認をしますので、しばらくお待ちください」

机を置いただけの受付で係りの者が、手元の書類をそのまま読むような対応をする。上からは砲声が下まで響き、壁は崩れて欠片がパラパ

ラと落ちてくる。それどころではない、というのが分からないの！

「私よ！試合中の戦車選抜隊長代行、逸見エリカよ！学園長命令で前線から急いで敵包囲網を突破してきたわ！すぐに学園長やSS総司令官殿に報告に行かねばならないの！

それにね、SSの癖にあの廊下の様を、怪我人すら参戦している様子を間近で知りながら、椅子の上でのうのうとしてるとは、何様のつもり！」

余りに高飛車な態度だったので腹が立ち、思わず反駁する。

「生徒手帳の提示を」

「くそつたれ！勝手にしなさい！」

しかし受付の者の対応は変わらない。荷物を置くと受付の机の上に黒森峰の印の付いた生徒手帳を叩きつける。許可が出るとそのままズカズカと奥に入ってしまった。

「待つことすらできんとは……全く、これだから戦車関連しか能がない奴は……」
今日何度めかの背後の声は気にする余裕がなかった。

中に入ると、廊下が人で封じられている。その奥から怒鳴り声が聞こえてくる。学園長のものだ。

「奴らがここまでやるつもりだと誰一人報告してこなかった！海軍のみならず、SSまでもが私を欺きおつて！職員、軍人、その全ての裏切りでこの戦いは負けるのだ！臆病者揃いが！

職員共、防衛隊共、SS共は殆どが卑劣で忠誠心のない、卑怯者の塊、蛆虫以下の連中だ！

奴らは黒森峰の者たちの中のカスだ！荣誉などない！この学園卒を立派な学歴だと偉ぶっているが一体全体何を学んできた！お上品なテーブルマナーに、外見は立派な宗教作法だけか！

私ももつと早く偉ぶっている奴らを皆殺しにするべきだったのだ！私は最初の最初から裏切られていたのだ！

これは黒森峰の民全てへの重大な裏切りだ！裏切りものは皆報いを受けるだろう！奴らの血によってな！」

人の群れに近づくにつれ、怒鳴り声が大きくなる。群れの中には涙を流す女性を他の女性が慰めている。他の人は無言で、棒が立っているようだ。ただ茫然と棒の追加の本となっていた。

気がつくのと棒はそろそろと動き出し、私が入ってきたドアの方に向かい、消えていった。

部屋からはシルクハットを頭にはめようとしている初老の男が、彼らとは逆の方に向かおうとしていた。その男、等良学園長閣下に走り寄り、跪く。

「閣下！」

「ん？君は……」

「待て！貴様、この方を誰だと」

ボディーガードらしき男が詰め寄ってくるが、帽子をはめた学園長閣下がそれを杖を持っていない方の手で制した。

「まあ待て待て……そうだ。選抜隊隊長代行の逸見くん、だったな」

「は、はい！」

私の顔を覚えていてくださるとは……なんとという光栄か。

「戦況のご報告に……参りました」

「そうか……」

「プラウダは既にフリードリヒ地区ノイケルン地域の防衛線に到達。その兵の士気こそ高いもの、敵の第一次攻勢による被害も大きく、次の攻勢での突破は避けられません。そこから先は……この学園官邸までは大きな障害は……ありません」

領きながら次を促してくださる。

「……はつ。我が……我が黒森峰戦車道選抜隊は私の乗るティーガーIIを含め……19輜が戦闘不能。唯一の残存車輜であるティーガーIには、狩出教官の指示のもと隠れて時間を稼ぐように命じてあります。その上、現状西住みほを殺した、との報告もありません。おそらくまだ生きていますかと。」

申し訳ありません。試合に敗れ……プラウダの侵入を防ぎきれませんでした……」

意味がないのは分かっているも頭をも地面に擦り付けようとしたその時、右肩を何かがそつと触れた。

「……この床は綺麗じゃない。とりあえず立ちたまえ」

「はつ……」

学園長閣下の手であった。そのままゆっくりと引き上げてくださった。学園長の背はあまり高くない、私でさえ少し顔を上げてしまえば目線が合ってしまう。

沈痛な面持ちが、そこにあった。

「詳細な報告をありがとう……君の健闘及び職務遂行には感謝する。が……黒森峰はも

う終わりだ。

北部で日村君のSS歩兵1個大隊が、北東部で久手君の防衛隊装甲第2部隊が、南西部で高鳥君のSS装甲第9部隊などがそれぞれのなんとか敵を食い止めているが、他の戦線は君が見てきたようにもう崩壊している。外はあの有様だ。

今ならまだ戦線が構築できている北から逃げられる。健軍町の方に逃げなさい」

肩に置いたまま、しつかり目を合わせて、私に、私なんか伝えてくださる。

「しかし……私は試合に負けた上、命令すら実行出来ず、さらに部隊のものを纏めて救援に向かわせることすらできなかった黒森峰稀代の愚将です。そのようなお言葉を受けるほどのことは……」

「今日の事態を招いたのは君のせいじゃない。これまでの私の行いのせいだ。気に病むことじゃない。君はその厳しい枠内で、最大限のことをしてくれた。これは、私がどうにかしなければならぬ問題だった」

肩から手を離して背を向けなされる。先程の茫然とした感覚を身体に残しながら、視線を学園長閣下の方に向け続ける。

「私は……黒森峰と学園長に忠誠を誓いました」

「脱出しなさい」

だから……と続けようとした私の言葉は遮られる。ドアノブに手を掛け首だけをこ

ちらに向ける。

「君には本当に申し訳ないことをした。だがそれでも私に忠誠を誓ってくれてるのなら、この老いぼれの最後の命令を聞いてくれないか。

命をムダにすることはしない。君みたいな勇気ある人間は生きるべきだ」

持っていたドアノブを捻って、階段の下へと学園長閣下は消えていった。

受付で生徒手帳と荷物を半ばひったくる形で返してもらい、それらを持って再びあの歌声の響く廊下を進む。

「♪翻さんかな 髑髏の旗を

♪怨敵の首に立てるまで」

曲は何度も繰り返して歌わせているらしい。

飛び出そうとする者たちに混じって地上に戻った。どうするか、どこに行くか。それはもう決まっている。

トンプソンを握りしめ、入り口から壁伝いに一步一步近づいてゆく。出会った敵に容赦なく銃撃を浴びせる。あそこが突破されたら終いだ。最早一刻の余裕もない。

血まみれになった遺体を横目に、いつもは徒歩3分くらいの距離を、10分以上かけて行く。どうしてもその程度は必要だった。

目的地に着く前にトンブソンの弾が切れ、近くに投げ捨てて中に入る。入り口の扉はかなり碎け散っていたが、幸いここはまだ占拠されてはいないようだ。しかし煙はあちこちから登っていて、窓ガラスはどれも割れて破片が散っている。

「早く避難しろ！ プラウダがすぐそこまで来ている！」

「避難するって言ったって……どこへ？」

「そんなもん、プラウダがいない方に決まってるんだろ！」

中は慌ただしい人の流れがあつた。床に無造作に散らばつたカルテの紙。それが風に流され、一部は窓の外に飛ばされていく。

ライヒ病院の中を、それらを踏もうとも流れに逆らい、看護婦にぶつかろうともある場所を目指す。

もう避難されているかもしれない。だとしたら次にその場所に向かうだけだ。

階段を登り、さらに奥に向かう事しばらく、ある部屋の前に着いた。ドアを三度ノックし、空気圧がかかる音をさせて扉を開ける。

「失礼します」

「……その声は、エリカか」

声、それはその部屋に住まうただ一人のものであるのはすぐにわかつた。

「た、隊長！ 意識が……」

その部屋に入り、奥のベッド近くのカーテンを払い除けると、そこにはしつかりと私の目を見据える隊長が横たわっていた。敬礼してベッドの傍の丸椅子に腰を下ろす。

周りはシーツも敷かれていないベッドが散乱している。ベッドの上の人物からのそれ以上の返事はない。膝の上に手を置き、指を手の中に折り込む。

「エリカ、お前が……ここに来たか」

話に向こうから始められた。

「隊長……申し訳ありません。隊長から預かった多くの部下を死なせたうえ、大洗に勝つことが出来ませんでした……」

外から絶え間なく続く砲声。隊長ほどの人物が放っておかれている現実。ベッドの上であつても、状況は予測されているだろう。

「そうか……」

そうとだけ答えなされた。そのまま少し間を置いて、隊長がこちらに顔を向けられた。

「エリカ」

「は、は、は」

呼びかけられたが、少しの間言葉は続かなかつた。

「……お前には済まないことをした、ようだな」

「は……いい、いえ、寧ろ代行としての」

「その代行として必要なことを……私はお前に伝えられなかった」

また遠く、どこかに視線を移しなさる。

「やはりみほと赤星のあの件は重すぎたようだな……あれに對し私は十分な手を打てなかった。お前にも十分な知識、経験を積ませられなかった。

そしてなにより勝たねばならない硬式戦で負けた。天下の愚将だよ、私は。西住の恥
さ」

「そんな……ことは……」

自嘲する隊長への返答に窮していると、窓の外から金属がひん曲げられ、倒される音が私たちの耳に入ってきた。

「きゃああああ！」

「プラウダだ！」

「プラウダの戦車が入って来た！」

「逃げろ、逃げろオーツ！」

どうやらプラウダの戦車がここまで来たようだ。ここまで、か。

覚悟を決めきる前に服の袖に力がかかる。目を開き顔を上げると、袖は隊長の弱々しい右手に掴まれていた。

「エリカ……プラウダに捕まるのはもう二度と嫌だ。それだけは嫌だ……頼む……覚悟はできている」

目尻には涙の粒が乗っかっている。

「お前にしか、頼めない……」

顔には力ない微笑みが浮かんでいた。

奥歯を食いしばり、掴まれた手に視線を集中させる。顔には季節に合わない汗が増し、自分の指の全てを内側に向け膝に、掌に食い込ませた。

最早、どうにもならない。この場に他に人はいない。私が、私が、やることのできる。違う、違うぞ！やらねばならない、のだ。

顔を上げることなく席を立ち、部屋を出て近くの薬品室に向かう。棚の扉を開き中のいらぬ薬品の瓶を床にぶちまけながら、目当ての効果のあるものを探す。落として割った薬瓶の中に酸性の薬品があったらしく靴から滲み出て指先に痛みを与えるが、気にはならない。

目当てのものを見つけると、棚にあった紙コップにそれを移し、それを近くに転がっていたトレイに乗せて病室に戻った。

「……隊長、お持ちしました」

「ありがとう……自分で飲もう」

震える右腕をこちらに伸ばしなされる。が、その手はひどく震えており、握る力もあるかわからない。

「いえ、お手を煩わせる訳にはいきません。私が……」

「そうか……では、頼む」

あつさりとは手は引かれた。紙コップを手にした。トレイを置き、隊長の顔へと近づけていく。

「苦いかな？」

「わ、分かりません」

軽く微笑まされると、少しだけ首を上げなされた。それを支える形で左手を入れて、さらに口元に紙コップを近づける。それが今にも飲まれようとした時、思わず顔を背けた。

病室のトレイの上には水滴の付いたカップと、その近くにある溢れた液体があった。

「ダヴァイ！ダヴァイ！」

窓の外からの砲声と共に、僅かながら理解できぬ叫び声と階段を駆け上がる音が聞こえてくる。

手がかじかむ。そういえば、今日は冬の一日だった。これまでそれに気づかないほど血が沸き立ち過ぎていたのか……

だから負けたのか……そんなこと、今考えても仕方ないか。

膝に両肘をつき手の中に少し強めに息を吹き込んだ後、丸椅子から立ちご尊顔に布団の縁をそつと持つて顔に被せる。

神よ感謝します。私とこの御方に尊厳を守る時間が残されていることを。私は残念ながら、その時渡し守カロンに背中を突かれることになるでしょう。

ベッドの脇に直立して、自分の胸元から生徒手帳を半分抜いて戻す。そのあと2挺持つていた拳銃のうち九四式拳銃を床に投げ捨て、もう一つのワルサーP38を取り出し、スライドを二本の指で挟んで開いて中の弾を確かめる。

中にはしっかりと9ミリパラペラム弾が入っている。これはSS装甲師団に入つて歩兵として反乱鎮圧に参加してからの愛銃だ。私の兵士としての証でもある。壊れているはずはない。

私は最期に偉大なる学園長のご命令に逆らうことになってしまいました。私の忠誠とは、分からなくなってしまう。

スライドを元に戻し、左手で持つて口元に持つてくる。右手は右斜め上に伸ばす。引き金に指をかけ、銃口を口に入れる。

されども、願わくはこの御方が天の国に導かれ、黒森峰女学園に永遠の栄光があらんことを！

靴の踵同士を叩き、めいっばい響かせる。

「ハイルフューラー!!？」

生者がただ一人の空間に叫ぶと、銃声が病室を包んだ。背後の壁に放射状に飛散する血痕。そして縦に流れる血の筋の下には崩れ落ちた逸見エリカが遺された。

第74回戦車道大会公式記録

黒森峰女学園犠牲者

逸見 エリカ

大洗 銃殺 口内から後頭部にかけて貫通 自分の銃の使用による自殺と思われる

即死

一般犠牲者一覧

西住 まほ

ライヒ病院にて死亡。青酸カリを飲んだ跡があり、自殺と思われる。

第6章 (13) 幸せな日

黒森峰女学園。ドイツ風の荘厳華麗な塔が並ぶここも、ミサイルと砲撃と爆撃で火の手が上がり、崩壊状態だった。靴と追加品、そしてトンプソンを抱えて建物に入り、階段を駆け上る。その階段さえ途中でコンクリートを剥き出しにしていた。

内部構造も防衛対策も分かっている。目的地への最適なルートを選ぶなど造作もない。

ここの中にはすでにプラウダが突入しているようだ。ドアが破壊され、中は赤々しいもので占められている。教室の窓も散々だ。だが感情を呼び起こす暇は、私にはないらしい。

前方にある次の階段の下では、二人のプラウダ兵が身を潜めている。

「ここが先頭ですか？」

「ああ、だが階段上の突き当たりにはMG42が粘つてやがる」

モシンナガンを持った一人が答える。ここから先に進むしかないな。

「分かりました！」

「あ、オイ危ないぞ。工兵を待て！」

その者たちの制止を振り切り、階段を駆け上がる。

「今の……大洗か？今は味方だったか？」

「確か……そうだが」

「というより……大洗に歩兵なんていたか？」

「さあ……」

上った先にはプラウダ兵の死体が一個転がっていた。確かに何箇所も銃弾が貫通した跡がある。傷の規模などやその位置、さらに壁の弾痕も見るに、なるほど機関銃が設置されているというのは間違いないらしい。

壁側に寄り、来る途中の黒森峰SSの死体の近くに転がっていた鞆から、その死体のものらしき制服を引っ張り出し、袖を通す。背中に縦に一本縫い目がないから、防衛隊でないかはすぐに分かる。階級章がないがこんな事態だ。ある程度はごまかせるだろう。

「ベルク（山）！」

通しながら叫んだ。積まれた土嚢と机の向こうでMG42を構えていた者たちは一瞬混乱したのか、待ち構えたまま動かない。

「フルス（川）！」

だがしばらくして合言葉が返ってきた。舟型帽を急いではめる。

「SS装甲師団第12部隊の西住伍長です！所属を名乗りなさい！」

「……はっ！我々は黒森峰防衛隊歩兵第3部隊の者です！」

その返事を聞くと壁から身を出し土囊の方へ駆け足で近づいていく。辞めた話は広がってない、というのは事実だったか。それとも姉の方と思われたか？

「何をやっているんです！もう黒森峰は敗れました。こんな所を守っても意味はありません。ただ殺されるだけです。すぐに武器を捨てて投降しなさい！」

二人の階級は兵と上等兵、そして私はSS。なら、命令できるはず。

「しかし、学園長からの死守命令が……」

「援軍なしの死守命令なんて死も同然です。守っても無駄です。投降しなさい！」

二人は暫く考えた後、土囊から身を出して両手を挙げて階段を降りていった。

さて、障害は消えた。彼女らと逆方向に向かい、素早く黒森峰の制服を脱ぎ捨てる。これは仮装に過ぎない。

もう一個階段を上がり、割れて破片が辺りに飛び散った窓から屋上に出る。床のタイルはそのほとんどがひび割れ、爆撃を食らって破壊された建物の瓦礫があちこちに散らばっている。

脱ぎながら肩にかけていた追加品を外す。追加品である縦長のケースから二本の棒を取り出し、片方の先をもう片方の根元に捻ってはめ込む。

左手で軽い方を回しながら、背後を確認してみた。黒いヘルメットをかぶり、息が荒れている女性が、膝に手をつけている。彼女の胸にはJUDGEと書かれ三日月型の茶色の板をぶら下げている。状況は私の都合の良い方に傾いている。本当に、根底さえ無視すれば運の良い日だこと。

はめ終わって一本の完成した棒を握る力を少し強めた。そして、一度先を見据える。屋上を囲む小さい塔の一つに足を掛け、手で体を引き上げつつ次の場所を探して足を乗せていく。高く、より高くへ。

塔に空いている穴にその根元を差し込み、棒の先に付いた布をぼつと広げた。

その布に描かれていたのは青い「大」に、その中央に被さるようにある「洗」。

そう、黒森峰女子学園校舎に掲げられたのはプラウダの赤い旗ではなく、サンダースの白地に青い星の旗でもなく、伸び伸びとした感じを強調する大洗女子学園の校章そのものだった。

手元のトンプソンを素早くフルオートに切り替える。

「黒森峰女子学園はーッ!!?大洗女子学園が占領したッ!」

塔の上で叫びながら、的も無き空にトンプソンのマガジン一個分を撒き散らす。反動

と重力に耐えながら撃ち終わった後、宙にトンプソンを投げ捨てた。

これで終わらないなら、死ぬのみ、か。

「……はい、確認しました……では……に則り……でよろしいですね……分かりました」
後ろの審判が無線で誰かと連絡を取っている。疲れもあり、塔の台座に背中を委ねる。無線のイヤホンから指を離れた審判は、こちらの方にゆっくり近づいてきた。

「おめでとうございます」

次からの審判の叫び声は、意識を失う最中のことで、記憶が曖昧だった。

寧ろ、死んでない方が不思議だ。拾った細めの鉄パイプを支えに、何とか路地裏を動いていた。

「はあ……はあ……ガハッ！」

B l i s s の中で飛び回った破片は、しっかりと右胸脇を貫通していた。その為か血の混じった痰を時折吐き出さざるを得なくなる。満身創痕という言葉は、きつとこの私を指すのだろう。

右胸脇貫通による肺の損傷、火傷、左足骨折、肋骨骨折、頭部負傷、結構な出血、その他切り傷、擦り傷多数。単体では簡単に死なない怪我を幾つも受けていた。動き続けた。目的地はない。止まった時が、死ぬ時だと思つた。

もうモルヒネは打った。痛みは殆ど無いが、それで苦しさと動き辛さから開放される訳ではない。右胸脇から聞こえる空気の抜けるような音が不快で仕方ない。しかしまだ試合は終わってない。これは生徒会が始めた戦い。見届けることのできる人は自分だけだ。それが、先立つた会長とのヘツツァーで交わした約束である。なんとかそれだけで這いずり回っていた。

「……どうなっている……戦況は……ゲホッ、ゴホゴホゴホッ！」

余りに激しい咳に思わず体が前に倒れこむ。腕が支えきれなくなり、うつ伏せに地面に突っ込む。今まで肺の中に血が溜まっていたらしい。喉はもう逆流する血を抑える力も残っていないかった。

むせながら口から血が溢れ出てくる。何度も出てくる血。それがみるみる大地に消えてゆく様に覚悟を決めた。

残念だが、もう……限界だ。もう立ち上がる力はない。致し方ない。

取り敢えず仰向けになり、そこから腕の力を振り絞って上半身を壁に寄りかからせる。食道に残った血が未だに痰に混じって出てくるが、幾分楽になった。頭から流れる血が顎からズタボロのスカートの上に垂れる。

落ち着いてみると激しい砲撃戦が起きているようだ。残り二輛が戦っているにしては多い。まあ、そんな事は大洗が勝てばどうでもいい。大洗が勝てば、大洗が残れば。

しかしもう自分に大洗の為に戦える力はない。結果を見届けたいところだが、このまま死を待つよりは早くこの苦しみから逃れたい。

やっぱり私は自分の事ばかり考えているな。会長や西住なんかの代わりにはなり得ないんだなり

右手でポケットから九四式拳銃を取り出し、スライドを引く。

私は、隊長だったのだろうか……やれる事はやったのか？西住は最大限サポートしてくれた。それに応える事はできたのか。

「……そんなのは、後の人の評価に任せるか……ゴホツ……」

先輩、まさかこんなに早く、そちらに向かうとは思っていませんでした……まさか私が戦車道で死ぬとは……想像……できましたか？」

右のこめかみに銃口を当てる。引き金に指をかけ、今にも引こうとする。

「大洗女子ば」

（いやー、先輩を尊敬し続ける後輩か、いいもんだね。）

「はー」

聞いた事ある声に思わず銃口を外し周りを見渡すが、その声の主がここにいるはずがない。

「会長……」

馬鹿な、会長と柚ちゃんは、あの時へツツアーに残って……

「これは、夢……？それとも、走馬灯か何か……？」

(かーしま、元気にしてたか?)

これは途絶えない。幻聴?

だが会長から声を掛けられて答えないわけにもいくまい。

「……会長、これを見てもそう思えますか？」

(だよねえー)

返事が……あつた……

「会長……こつちの……」

(言っていることは聞こえているよ。その様子だどこつちの声もきこえてるみたいだね)

けらけら笑う声、間違いない。会長のもの。

「……これは……何ですか?ゴホ、ガハッ!」

(夢さ、かーしまの)

「夢……ですか、ならば早く覚めてそちらに……」

再びこめかみに銃口を当てる。夢なら……苦しみつつ見る夢なら……

(待て待て、あと五分生きてみる気はないか?夢を見ている間も時は流れるんだ)

「……五分で一体何があると言うんですか？ゴホゴホゴホッ」

痰が……多い。

(何かあるかも知れないよー)

「何ですかその曖昧な答えは……もはやこの出血にこの怪我です……長くはないでしょう。それなら……この苦しみから逃れたいのです。死なせてください」

(だったらわざわざそれを自分で縮める必要もないだろう。かーしまには試合の結果を聞いてもらわなくちゃいけないんだから)

「しかし……これじゃあそれがあるまで生き続けられるとも思えませんし……」

(んじゃ、断言する。このままかーしまが死ぬまでに、何かが起こる！)

はつきりとした声だった。周りに聞こえてない。黒森峰の者が来ないのが不思議に思えるほどに。

会長がそこまで断言なさる。信じない、という理屈は私にはない。

「……会長がそこまで仰るんですから何かあるのでしょうか……ですが、このまま死を待つのはしんどいので、少し話をしませんか？」

(いいよー)

「今まで……色々ありましたね。ゴホッ」

記憶を辿る力はまだあるらしい。

(あつたねー)

「私が……高校で転校してきた時、始業式の日に話しかけてくれましたよね……」

(あー、あれね。生徒会、ウチらの代が少なかったからね。私仕事増やす気だったし、とにかく人山人海だったね)

「でも、そのお陰で……私は、恐怖を……あの、右腕の映像を……生徒会活動やつている時だけでも忘れられました……ゴホゴホ……本当にありがとうございます……」

(いやねー。そんな大したことはしてない気がするけどね)

「いえ……私にとつては……感謝しても仕切れないです……」

ハロウィンパーティー……覚えてらっしゃいます？」

(ああ、私が魔女になったやつね。かーしまはカボチャ被つてたつけ。あれ……なんて言つたつけ?)

「確か……ジャックオランタン……だったと思います……ガハッ!」

落ちて着いたと思つたら、またこれだ。どうにもならないんだな、本当に。

(他には……生徒会で海行つた時とかは覚えてるか?)

「覚えてます……泥ンコ大会やつて……プロレスだつていきなり……会長が言つて、私
が思いつき……海老反り食いましたね……」

(それとかでつかい水鉄砲持つてきて撃ちまくつてたねー)

「そして……今年に入っていくなり国から今年で廃校だつて……言われて……ゴホッ。私が……やっと、タンジマートでのことを……話して……話すことができて」

（あの話された時は驚いたね。戦車道の現実なんて噂くらいしか聞いたことなかったし。容易く戦車道やるって言ったこと軽く後悔したよ）

「軽くなんですね……ゴホゴホッ」

そうだ。この人は学園の未来を、何千人もの未来を背負っていたのだ。私一人の過去なんて……些細だ。

「で、私が隊長になつて、戦車探して……右も左もわからない状況で……練習はじめて……マジノに完敗して……」

（まああれは……ねえ。しょうがないさ）

「西住を転校させて……戦車道やらせて……さらに頼んで副隊長にして……」

（まあ、西住ちゃんも結果的に飲んでくれたけどねえ、あの時のせいで嫌われても仕方なかったと思うよ。必要だったとはいえ。）

……でも楽しかった。勝利目指して練習して上手くなって、聖グロ相手にあれだけ接戦に持ち込めて……みんな頑張つて……）

「本当に楽しかったですね……」

（あの頃は……）

走馬灯の如き思い出とともに、無言の時間が路地裏を流れる。気がつくくと、先程まであった会長の存在は、ここから完全に無くなっていた。

「あれ……会長？」

そろそろ五分経ったということだろうか？右脇腹を見ると、もう元の群青色の戦車服の色は見えない。また一口血痰が吐き出される。意識も朦朧としてきた。腕を上げる力もない。鉛玉を撃ち込まずともいいだろう。

砲撃音、銃撃音、火災の音、全て続いている。ぼやけていく視界の中、二つの瞳を閉じようとした時、遠くから単調な甲高い音が響いてくるのが耳に入った。私の脳味噌の最後の力を引き出す。

「試合終了ーッ!!？」

血が抜けて軽くなった首を、少しだけ空へ向けた。

「第74回戦車道全国高校生大会優勝は大洗女子学園!!？」

大きな音量で街中にアナウンスが響き渡る。

「戦闘行為を停止せよ！全部隊直ちに戦闘行為を停止せよ！」

大洗が……優勝。勝った……のか。そうか、ゆうしようしたのか……これで……あんしん……して……

第74回戦車道大会公式記録

大洗女子学園犠牲者

河嶋 桃

黒森峰 頭部、右脇腹負傷などによる失血死 負傷後1時間強ほど生存した跡あり

「勇敢なる黒森峰生徒諸君、勇敢なる黒森峰生徒諸君。学園防衛司令長官の狩出だ。

学園長は自決なされた。我々はプラウダに降伏する。

試合は終了した。ジャツジの指示に従い、直ちに武器を捨て投降せよ。直ちに投降せよ。繰り返す……」

地上に降り、校舎の正門の前に身一つで歩いてきた。大きな門の上には黒森峰の印である白丸の中の黒十字が乗っかっている。その背後からは何箇所からも灰色の煙が空高く登っている。

間も無くその印は髪を揺らすほどの風と轟音とともに爆破され、砕け散った。赤く燃えて周りより黒い煙を上げる。その煙を眺めていると、心の中にあつた黒森峰での僅かな良い思い出も空に立ち昇ってゆく気がした。

姉と触らせて貰った優勝トロフィー。小学校の時に母と共に会った優しい教官。S

Sの厳しい練習後に同じ釜の飯を食べた、今は亡き仲間達。それが浮かんでは消えてゆく。

消えてゆく。

勝ったが、勝ってしまったし、勝てなかった。ここから先戦うとしても、それは真の『西住』ではない。それを得るために、私は何を費やしてきたのか。

これが最善の道、利益を最大化する道だとはよく理解している。博打を3度も当ててやつと手に入れた利益だ。そうするしかなかったのだ。

だが……余りにも、余りにも全てを破壊してしまった。全てを。

その煙を眺めていたが、しばらくして門に背を向けた。

泣いた。我慢のがの字もない程大声で泣いた。ボコられグマのボコはどれ程叩かれ負けても応援で再びやってやると言って立ち上がる。しかしもう私に届く応援を出来る人はいないだろう。何より自分自身が出来ないのだから。

辺りではプラウダの戦車が何輛も止まっており、その周りからはアコーデイオンを奏でる音、コサクダンスのリズムをとる者など、プラウダ側の歓喜が膨らんでいた。

「Волк умер! Волк умер!

(狼死んだ! 狼死んだ!)」

その近くには黒森峰の制服を着て銃を携えて死んでいる者達。ただ、前に歩みを進めた。行き先があるわけじゃないのに。

第74回戦車道大会公式記録

○大洗女子学園 v s X 黒森峰女子園

被害 大洗3輛 黒森峰132輛

《航空機 21機》

(大洗側同盟 プラウダ学園 64輛

サンダース大付属 なし

《航空機 17機》

ポンプル学院 10輛)

黒森峰戦闘体制崩壊と判断

第7章 ゆきゆきて戦車道

第7章 ① 役目

12月13日、「あの日」から2日後。世の中では明日には総選挙だ、もうすぐ年末だなんだと騒がしい日々が続いているが、しばらく新聞やニュースと距離を置いている私からしたら実にもどうでも良いことだ。大概悲劇だなんだとばかりだ。人の心を掴むのにこれほどのネタはないのだろう。

信号が赤から青に変わり、タクシーがエンジン音を響かせ加速していく。並木道に沿って景色が変わる。だが手前の並木は大概枝しかない。黄色の葉が多少混じっているだけだ。ここから何かを感じ取ろうとするほど私は風流人ではない。

それらの奥の店や家にはきつとたくさんの人々の生活が転がっているであろう。だが私の中に呼び起こされるものは、大概無意味な碌でもないものだ。

平和だ。錯乱するくらい平和だ。車内は私運転手の二人だけだ。話すこともなく、変わりばえしない車窓に目を投じていた。体を窓際に寄せると、頭上に歩道橋が近づいてきている。

『大洗女子学園優勝おめでとう』

その歩道部分の側面にはそう書かれた横断幕が掲げられている。そのせいか街にもある程度活気があるらしい。学園は生き残ったのだ。それだけ、だ。

着ているのは大洗の戦車服でもなく、制服でもない。あの日の後ダーズリンさんから紅茶とともに送られたイギリスの戦車兵服である。貫い物だが速攻使うことにした。

というのも制服は元々持ってきていないし、戦車服に至ってはいろんなものが染み込んでしまっている。人前で着られるものではない。きつとみんな裸足で逃げ出すだろう。

ふと紅茶の缶をカバンから取り出して眺める。なんなのだろうか、これは。紅茶なんて全く知らない私からしたら、缶の装飾が綺麗だな、くらいの感想しか湧いてこない。

「フォートナム・メイソンですか？」

「えっ？」

また信号で止まったところで、いきなり運転手から声をかけられた。思わず声が出る。

「すみません。ついたらベルが見えたもので。ご迷惑でしたでしょうか？」

「い、いえ。紅茶……詳しいんですか？」

「いえ、最高級の銘柄として有名なので、少しばかり気になりました」

「そうなんですか。でもダーズリンさん、なんでそんな高い紅茶くれたんだろう……」

疑問とともに缶を回してみると、底にある一枚の紙が張り付いている。気をつけて紙を剥がし、その紙を開いた。

Your life is worth more than gold.

Bob Marley

その紙を数回黙読したあと、ゆつくりと声に出して読んだ。

「君の命には金よりもとても価値がある、ですか」

運転手が即座に訳し返してくる中、あの時エルヴィンさんに言われた言葉を思い出した。

『それを任せたい』

ゆつくり手紙をたたみ直し、ポケットに入れる。

私は、何を任されたか。

「西住さん、ありがとうございます。お陰で娘の憧れの大洗女子学園に娘を入れさせられます」

「……いえ……」

運転手に答えるより今後の方が大事だった。ただ、一つやるべきことは決まっていた。

そう言っている間に学校はもうすぐである。

「あ、すみません、そこ真っ直ぐでお願いします」

身を乗り出し、運転手に声を掛ける。

「えっ？学校ならここ曲がったところですよ？」

「一度、家に寄ろうかと」

学校前の歩道には多くの人が詰めかけていた。人々の手には旗、プラカードなどがあつた。

「あつ、タクシー来た。多分あれだ！」

「おい、こつちこつち！」

「バンザーイ！」

「おめでどう！大洗代表チーム！」

予定時刻少し前に学校の前を通るタクシーを目の前にして、歓迎のムードは最高潮に達していた。体を前に倒し、足元の靴紐を結び直す。

それが学校に向かう道に入らず、直進したことで歓迎ムードは一瞬にして萎んだようだ。

運転手にはアパートから少し離れた場所で金を払い、無駄な関わりなく降ろしても

らった。

私は行かない。私になるべきは、悲劇の隊長でも、大洗の救校の英雄でもない。きつとメディアと学園はそれを望んでいる。どちらもごめんだ。私の役目は、ここでは終わつたはずだ。

余り話したことはなかったが、このアパートの管理人の女性が話が非常に通じる方だったのは救いだつた。精神的に辛く実家に帰ることにしたが準備が必要だ、との話をしたら、涙ながらに私を匿い、時間を稼いでくださった。メディアや学園からの追跡を逃れられたのも、紛れもなく彼女のお陰だ。

その部屋に立ち寄って初めて頂いたのは、急だつたことと彼女がまもなく出掛けたこともあってか、一杯のカップ麺であつた。塩味のごく一般的なものだ。温かいココアは飲んだが、食い物で温かいものは北の大地の宿以来か……

身体に良くないとは知りつつも、スープごと飲み干した。部屋のせいもあるのか、身体が温まっていく。箸を置いたら、涙が出始めるまでに時間はかからなかつた。

こんなもので、いや、こんなものだからこそ、か。

一週間もすれば大概のメディアは他の話題、特に政権交代、新政権組閣云々に飛びついていった。その間に私はこつちに関する一応の手続きを済ませ、この先についてじつ

くり考える時間が与えられた。「それ」について。

時を見てまだ学校が授業をしている真昼間、私は出かけた。別に散歩に行こうというわけではない。こんな時間ではあるが生徒会に見つかつたらタダでは済まないので、マスクと髪を隠せるほどの深めの帽子はつけていた。流石にサングラスは憚られた。

たどり着いた先は理髪店。だが見るからに営業してない。窓は完全にカーテンで覆われていて中が見えず、扉には『臨時休業』の看板。

だれもここに堂々と入ってはいこうとはしないだろう。私だつて店の名前が明らかじゃなければ入っていかない。

インターホンは一応ある。カメラはないようだ。鳴らしてみると、少々時間が空いたが応答があつた。

「……はい」

優花里さんのお母様の声らしい。こんなに素っ気ない方ではなかつたと思つていたが。

「えつと……突然失礼致します。西住……みほ、です。優花里さんの件について……」
「お入りください」

話は最後まで聞かれることなく切られた。鍵は開いていた。別にあらかじめ連絡していたとかそういう訳ではないが、やけに、というほど準備がいい。

「……………ちらへ」

中は綺麗だった。受付があり、その奥には鏡に向かい合った椅子が三つほど並んでいる。間には滝壺が三つ並べられているが、中を見るにカラツカラに乾いている。その一方床には髪の毛こそないが、埃が所々落ちている。

その後ろ、きつと客待ち用の椅子を並べてくださったのだろう。それが二対一で向かい合っている。

「……………どうぞ」

「失礼します」

お父様も降りてきて、二人が私の正面に腰を下ろした。マスクと帽子を外して脇に置かせてもらう。

さて、どう言おう。事務で済ますには私と彼女は親しくなり過ぎてしまった。

「本当に……………申し訳ありませんでした」

頭を下げる。下げ続ける。

「こんな言葉で許して頂こうとは思っていません。ですが……………」

「来てくださったのは本当にありがたいです。大洗での催しもいらつしやらなかったようですし」

お母様の声は、低めで、淡々と、感情がないものだ。

「……はい」

「貴女になんと言葉をかけていいのか、本当にわからないのです」

手は膝の上の服を握りしめたまま動かない。

「貴女が優花里を……優花里を死なせたわけではありません。それは分かっています。あの子があんなに言うほど素晴らしい方ですから、きつと生かそうとしてくださったのでしよう。」

ですが……なぜ……なぜ優花里を助けられなかったのか……それだけは教えてください
さい」

「……こちらには、ただ失血死としか教えられていないのです」

付け加えるようにお父様が申された。なるほど、確かに送られてくるのは戦車道連盟からの書類程度しかあるまい。そして今回は数が数だ。全員くまなく検死するか、そんなに詳細には作っていないのだろう。

「は……」

なら状況から説明せねばなるまい。どこから話すか迷ったが、決勝戦の黒森峰の市街地に入ったところから話を始めた。流石にそれ以外だと話が長引きすぎる。

あのあと起こった黒森峰の崩壊はニュースとして広められており、話は思いの外すと理解してもらえた。

市街地での対戦車戦の実行。倉庫で手に入れた対戦車装備を配布し、一部がそれを持って市街地に散らばったこと。

初めは別行動であったが、たまたま遭遇したところで彼女が一輛戦車を仕留めた。しかし近づいてきた敵車輛から逃げ遅れ、結局居た建物もろとも撃ち抜かれてしまったこと。

そして私がまだ生きていた彼女を背負って連れて……その道中でこと切れたこと。

「これが……優花里さんの経緯です」

向こうは共に頷きつつ、一言も逃さず聞いてくださった。そして私が顔を落として話を区切った後も、その理髪店は静寂が支配していた。

「……私がパンツァーファウストの使用法、運用法についてもつときつく、印象に残るように伝えていければ、また結果は違ったかもしれません」

「違った……優花里は生き残れたのかも……しれないのですか？」

「可能性は。私が去った後最後までI V号は撃破されませんでした。そこに残ってれば、生き残れたのかもしれない。ですが……そうなってもきつと優花里さんは私に歩いてきたでしょう」

「そう……ですか」

「そこから先は……申し訳ありませんが、分からないとしか答えられません。現実では

なかったことなのです」

一つ、大きく息を吸った。

「そして何より……あの場であのような危険な作戦しか……提示できなかった。そして……実行の過程で……優花里さんは亡くなった。責任は……指揮した私にあります。どうか……私を恨んでください」

「い、いえ、そのような……」

「恨まれるのは、慣れておりますので」

お母様が伸ばした手は、途中で力なく下へと垂れていく。

「……優花里の部屋を、見ていきませんか？」

返事は未だない中、いや私も返事は望んでないのだろう、不意にお父様からそのような話を提示された。ここに来るのは初めてだ。しかし……人の部屋なんて本人の許可なしに入って良いものなのだろうか。そして許可を取ろうにも、どうあがいても取れるものではないのだ。

「きつと……その方が優花里は喜ぶかと……」

死んだ者を使って欺瞞を語るな。かつて言われた言葉が頭をよぎる。だがその言葉はこの二人に掛けるにしては余りに酷すぎる。愛する人を、自分たちにとってかけがえ

のない存在を喪っているのだ。

となれば……入ってみるか。

「お願いします」

彼女の部屋にはテレビが一つ。あとは机と勉強道具、本棚という、ごくありふれた学生の部屋であった。

意外だった。彼女ほどの戦車好きであれば、もつと部屋中にそういう類があるかとも思ってたのだが。

だが思い返してみれば、話を聞くに彼女の親は戦車道にいいイメージがないようだった。というか彼女自身が親が趣味を理解してくれない、と言ってた気がする。

そう考えれば見た目が無難すぎるこの部屋は妥当だ。何もなさ過ぎる、逆に生活感を感じさせないところが。

「あの日以来……いや、あの大会が始まってからこの部屋にはどちらも立ち入っていません」

「しかし……あの子のことです。きつとまた戦争の模型を山ほど隠し持ってるんですよ……そのせいで死ぬとも知らずに……」

これは彼女の性格を恨んでいるのか、それとも戦争そのものを恨んでいるのか。どち

らもかもしれない。

私は床に腰を下ろし、低い位置から彼女の部屋を一望する。これが、あの人の部屋か。「これは……天罰なのかもしれません……私たちが……優花里を止められなかったことへの……」

「それは……きつと違います」

咄嗟に言葉が出た。

「なぜ……ですか？」

なぜあなたにそんなことが分かるのか？疑問符が散らばった顔はお母様のものであつた。

「先ほども言ったように、私は優花里さんの死に目に立ち会いました。その際に……本当に最後の最後、彼女はこう言いました。『こんな状況になつてしまつても、戦車は好きだ』と」

あの背中での言葉。これが、彼女の本性だ。もう揺らぐも何もない。

「きつと誰がどうこうしようと、彼女の進む道は変えられなかつたでしょう」

「うそ……嘘。だつて……撃たれるんでしょう？そのせいで痛いんでしょう？恐ろしいでしょう？」

語りかけている相手は、もはや私ではない。見えないはずの人だろう。

「残念ながら……事実です」

「そんな……」

そのままお母様は床の上にならずくまってしまった。あの時私の目の前で狂喜乱舞しながら語ったあの少女は、結局死ぬまでそのままだったのだ。

「か、母さん……」

西住さん、これからどうなさいますか？」

「もう少しここに居させてください。ですが私が話せることは話してしまいました。頃合いを見て失礼します」

「そう、ですか……」

お父様はお母様の肩を抱えて別室へと連れて行った。ここには私だけが残る。何も目的もなく残ってしまったが、部屋の隅を見ると押し入れの扉の隙間から何かチラリと飛び出ている。

何かあるのかと開けてみると、戦争映画のポスターが積まれた山からわずかに崩れて飛び出たらしかった。なるほど、話に聞いていたものはきつとここらへんにあるのだな。

少し進んで丁寧にものを退けてみると、布団の山の向こう側に綺麗に兵隊の人形と戦車のプラモデルが何輛か並んでいた。そのうちの一つ、見る限り未完成らしきものを台

座ごと拾い上げてみる。

実に見たことのあるものだった。いや、見慣れていたものだったという方が正しい。

「……ティーガー……」

入っている紋章は黒の十字。番号は……かつての家の印。

「……私仕様、か」

その戦車は実に不恰好であった。上から座席などの中身が丸見えであるし、砲身はま
だ出来てないらしく取り付けられていない。

「……ははっ……へんなの……」

履帯こそなんとか完成されているが、これではゴリアテの方がまだ使い道がありそう
じゃないか。本当に……このままなのか。

「……ねえ、優花里さん……」

語り掛ける先はこの戦車ではない。

「……完成させて……くださいよ……」

これ以上壊れぬよう気をつけつつ、押し入れに残った布団の一つに頭を突っ込みなが
ら、言葉を震わせた。

かけがえのないものを喪ったのは、私もだった。

その月の月末、冬休みも真つ只中、その日が予定日の前日であった。息もすぐに白くなる朝早くに、アパートの部屋に残った段ボール箱の山を残してキャリアバック片手に私は帰省する人々に混ざって学園都市を進む。

マフラーと帽子で顔と髪を隠してしまえば、どうやら気づかれることはなさそうだった。皆この先の未来ばかり見ている。

港でチケットを買い、単調な汽笛とともに大洗女子学園学園艦を去った。またここを踏む日は来るのか。来ないのだろう。

名残惜しさは現実と予測で押しつぶし、先を急ぐ。

第7章 ② バターコーヒー

学園艦を降りたあとは、ガラになくサングラスをかけてマフラーを顎まで巻いて、また家まわりの続きだ。

まずは大洗が地元の沙織さんの家。本当に港から少し離れた閑静な住宅街の中に、武部の表札がかかっていた。インターホンを鳴らすとご両親はおらず、休みゆえに妹さんが対応してくださった。

あげてもらったのちにソファアールと薄茶色の木の低い机の置かれたリビングで話したことは基本的に先ほどと同じだ。強いて言えば彼女を運ぶことができなかつたことくらい。あの岩の下ではどうしようもなかつた。

それを語り終えた後、私は半ば追い出されるようにそこを後にした。

二週間以上が過ぎているが、やはり基本的に触れられたくない話なのか。それとも親がそれを聞いて問題があるのか。後者は普通にありそうである。いきなり発狂するとか。

指揮官として、いや友としてその親はサポートしたいが、親とは直接的な関係がない。沙織さんのような天下をも呑む包容力があつたら……とも思つたが、そこが彼女の良さ

だったのだ。私には持てない。

続いて大洗総合病院に向かった。港から南下し、潮騒の湯の方に向かった途中にある。わざわざバスを使うまでもなく歩いて行った。大洗に暮らしていた麻子さんのお祖母様なら、きつとここに運び込まれていると踏んだのだ。しかし面会は叶わなかった。いや、面会しようがなかった。そのように対応してくださった看護師の方を通じて連絡された。

結局間に合うことはなかったが、だとしたら彼女の最期の言葉を罪滅ぼしに使うしかない。だが同時にそれをととも信用できないと否定しようとする心を、否定することもまた難しい。

大洗駅まで歩き続け、鹿島線で水戸まで出る。皆で水戸まで出かけよう、という時に使ったが、地元の近くでもあったなかなかにかうるさい車輛であった。道中では高い場所から土を見せた田畑が広がっている。何も無い。土だけのだ。

遠くでは街道沿いに店が並び、その前を小さく車が行き交っている。常澄、東水戸を過ぎる頃合いになれば、市街地、商業地区、そして特急の頭が鎮座する水戸駅のホームに滑り込む。

改札を出て左、ロータリーで町の外れまで行くバスを捕まえて、一軒家が畑に混じって見えてくる地域で一際目立つ建物を目指す。もうネットで調べれば結構あっさりともホームページを見つけることができ、こうしていとも容易く訪れることができるのだ。戦車道にどういう影響を与えていくのだろうか。

華道五十鈴流家元宅。私のかつての家を思い起こさせる大きなお屋敷であった。白塗りの壁に囲われ、門の前に立つても屋敷の中がさっぱりわからない。その上インターホンもない。どっからどうやって入ろうか。

屋敷近くを散策しつつ案を練っていると、建物の裏手がガラツと開いた。そこにいたのは一人の青年と人力車。

「あ」

見たことある顔だと思った時には、もう言葉が漏れていた。彼も裏手を完全に開けることなく、戸を途中で止めている。

「……に、西住さん？」

新三郎。華さんの家の使用人の方だ。一度大洗を案内してもらったことがある。

「こんにちは。お久しぶりです……」

実際はそんなに時間が経っていない、一月ほどだが、そう言いたくなかった。

「どうも……（こちらには……何用で？」

「華さんの件について、副隊長としてお話に伺いました」

「お嬢の……分かりました。これより用があり出掛けてまいりますので……」

彼は辺りを見渡すと、私が来たのと逆側の道を示した。

「こちらを少し進んだところに喫茶店がありますので、そちらでお待ちください……私が戻り次第奥様に伺い、宜しければお迎えに参ります」

「どのくらい掛かりますか？」

「1時間も掛かりません」

「では、そうします」

確かに歩いて5分くらいのところに、こぢんまりとした喫茶店があった。外装は木の板を水色に塗装しており、海側にある方がしっくりくる感じの店だった。

店の中は昔懐かしの洋風。私以外に客はいない。窓際の方が外から対応しやすいか、とも思ったが、カウンターの一席に腰かけた。

とはいえ時間を潰すのが主で、金だつてこの先の行程を考慮すれば潤沢なわけじゃない。メニューを見るとやはりそこそこ値の張るものばかり。おまけに私はコーヒーが得意なわけじゃない。

「ん？」

だがそのメニューの中で少し珍しいものを見つけた。

「バターコーヒー？」

その声にカウンターののはずれでカップを磨いていた髭を生やした老年のマスターが、そのあご髭を揺らして反応した。あご髭だけじゃなく、顎そのものも長い。

「そちら、当店のおすすりめですよ」

「へえ」

適当に反応したが、ミルクコーヒーとは違う代物なのだろうか？

「苦味が抑えられるので、コーヒーが苦手な方にこそ味わって頂きたいですね」

なるほど、なら少し頼んでみるか。財布は……大丈夫かね。

「なら、それを一杯」

「はい」

マスターは棚から豆を取り出し、それを丸い銀の器に入れて挽き始めた。

店内を流れるのはクラシックミュージック。音楽には詳しくないので、誰が作ったものかは知らない。これを雅だというのなら、きつとそうなのだろう。個人的に挟まれるコントラバスの低音が気に入った。

だがそれのおかげでコーヒーが入るまでのしばらくの時間、私は足をぶらつかせながら退屈しないで済んだ。

出てきたコーヒーは青磁のような柄が描かれたカップの中に入っており、勿論黒く、僅かに油の粒が浮かんでいる。油同士をくつつけられるほどではないが、その脇にはバラの形が表面に刻まれた角砂糖が二つ。

「コーヒー豆をバターで炒めてから挽いたものでしてね。冷めぬうちにどうぞ」
思ったより白くなかったが、香りは確かにコーヒーのものだ。苦味が薄いというのなら飲んでみるか。

カップの輪に指を引つ掛け、ちよつと口に入れる。確かにコーヒーと聞いて予想できるほどは苦くない。だが、それでも砂糖なしでやり過ごせるほどではなかった。

「ありや、お口に会いませんでしたかな？お嬢さん」
若干顔をしかめたのを見られたのか、マスターがそう声を掛けてくる。

「……すみません。コーヒー飲み慣れていないもので」
「ははは、構いませんよ。別にそんな人もいます」

結果私は受け皿にあったバラ柄の二つに世話になることとなった。これで幾分飲みやすいものになった。

カウンターの左側にも大きな窓が取り付けられている。その先にはこのマスターのものと思われる庭。どうやら家庭菜園をやっているらしい。

さらに一口含んでみる。口の中から香りがふわりと鼻に抜けていく。この香りは嫌いではない。苦味が香りとなったわけではない、まるやかさ。これが風流か。

さらに一口含み、カップの残りが3分の2に近づいてきている頃、私の前に皿が置かれた。水ならまだ話ができるが、何も頼んでないのに皿が出てくるというのはなんとも不自然だ。

そしてその皿の上に小さなお菓子が4つ、それも私が好きなマカロン。思わず顔を見上げる。

「コーヒーが苦いなら、甘いものが合いますよ」

「は、はあ……しかし……」

「お代はいりません。この店自体ただの気が向いた老人の道楽ですの」

「いえ……そんな……」

タダより高いものはない、という言葉もある。流石に突き返そうとする。

「貴女ほどの苦勞人なら、こんなささやかな幸せがあつてもよろしいでしょう？」

思わず突き返そうとしていた手が引つ込んだ。もしかしなくても、私が誰か知っている……なぜ、だ？

「おっと失礼。ですが本当にここから詐欺まがいのことをしたり、誰かを呼んだりする

気はさらさらありませんから」

「はあ……」

じゃあなんでこんなことを？なんの意味がある？

「あの……私のことをご存知なのですか？」

「ええ、西住みほさん、でお間違いないですね？」

「はい……」

何が目的だ？別に顔は昨今の取材の虫たちのせいでもバレているだろうが、マフラーは取ったとはいえ今でもサングラスは外してない。

「ここにいらつしやるのは地元の方か五十鈴流の方が殆どです。ほぼ全てと言ってもいいかもしれませんが」

考える間も無く、頭の上でマスターが語り出した。

「貴女は地元の人ではない。では五十鈴流関係者かというのと、それもないでしょう。奥様はお嬢様の件で塞ぎ込んでおられます。ここしばらく誰もあげてもらってないようですしな」

「あれ……華さんは破門されたはずでは……」

破門した人間を思い寝込む。自分とは縁を切った人間のはずだろう。自分の親が自分が死んだらどうするか……想像してみたがどうも塞ぎ込んでいる姿はピンとこない。

「ははは、あの奥様が本気でお嬢様を破門なさるわけがないでしょう。娘を自分をも超える存在だ、と言って回るほどですよ？」

それにお嬢様も華道は最早自身と一体だそうですから。ま、これはお客さんの受け売りにすぎませんが」

「はあ……」

確かに一日一度花を生けずにはいられない人は、一体と言って過言ではないだろう。

「で、奥様がその状況ですから、五十鈴流の方も最近全くいらつしやいません。どう言葉を掛けたら分からないでしょうな。」

では貴女は五十鈴流ではなく、五十鈴の家に用があることになる。そんな人物、この状態じゃそんないらつしやいませんよ」

なるほど、分かったような分からないような……

「それに、お嬢様が始めたこともあり、私も戦車道に関する雑誌などに目を通してみました。そこで一度貴女の顔写真を見たことがあったもので」

やっぱりそこじゃないか。

「しかし……あのお嬢様が……今でも受け入れられませんな」

つい最近まで後継者筆頭だったのだろう。それであの奢らない性格だ。地元からの

信望も厚かったに違いない。

「昔は時々ここにいらつしやつたものですね。華道の稽古が嫌だ嫌だと仰いながら。しかしいつも暫くするとやっぱりやるんだ、と仰つて帰られるのです」

「そんなことが……」

「まだ小学校上がつたくらい頃でしたから、可愛らしいものでした」

マスターが何か物思いに耽っている間に、また一口。

「……学園艦に移られてからも、時折顔を見せてくださいました。前は……確かゴールデンウィークくらいでしたかな。そこで飲んで行かれたのも、同じくバターコーヒーでした」

これと同じものを華さんが……

一度口に寄せず、遠目から眺めた。

「これはかなり気に入ってくださいました。ですがその時戦車道を始めたことを伝えてしまったばつかりに……お嬢様は……」

ですが……誰も恨みません。戦車道を硬式にした人間を除けば。戦車道をやること、それはお嬢様が自分でお決めになったことでしょうから」

そう、だな。そこに關して自身の意志があつたのは間違いない、はずだ。そしてそれは自身が継ぐはずの華道に活かすためだった。

「ですからこれから奥様に面会なさるなら、躊躇う必要はありません。貴女の責任ではないのですから」

「責任は……ありますよ。華さんが亡くなった原因は……」

「しかし、元の要因はどう考えても……」

「何より私が生き残ってしまつたのですから、何を言つても私が生きようとした言い逃れにしかありません。私以外の皆さんの親は大事な娘を……喪つたのですから」

「……私が言つても、どうにもならないようですな」

「残念ながら、そのようです」

冷めてきつつあつたコーヒーを今までより多めに飲む。やはり苦味は薄まっており、そして甘い。マカロンを一口に入れた後であつたので、粘着部分も纏めて飲み込んだ。

まるで夢だ。存在し得ない幻想が、そのバターコーヒーには含まれていた。

やはり人にはどうこうできないことだ。きつとこのまま右胸に溜まり続けるのだ。

それから暫く、私はもうコーヒーもマカロンも食べ終わっていた。その頃に新三郎さんがこの店に姿を見せた。

「西住さん、奥様より許可が……」

「分かりました。では、お代はこちらに」

言葉に甘えるには厳しいほど私の心は猜疑心にあふれていた。コイン一枚置いて、私は海辺から花の群れに赴いた。マスターは何も言つてこなかった。

人力車を降り、重厚な門からしたら思ったより簡素な玄関から、板張りの長い廊下を通つて案内されたのは、畳張りの20畳はあると思える奥の実に広い部屋だった。

「こちらです」

新三郎さんが襖を開いた先、そこに頬こそこけていたが、凛とした佇まいで背筋を伸ばして正座していた五十鈴百合、五十鈴流家元がいた。

床の間の掛け軸もその下の花瓶も、きつと古から伝わるものだろう。掛け軸に描かれた華は、これまた派手さはないがのびのびと広がり、力強さを感じる。

「失礼します。西住みほです」

「お入りなさい」

入り口近くで正座になり、手を使って距離を詰めていく。正直手が疲れ掛けた頃に座布団にたどり着き、そこに乗つかった。

「新三郎、下がりなさい」

「いえ……ここでお聞かせ願いたく思います」

「ここは女の間答の場です。下がりなさい」

いつのまにか奥に止まったままの新一郎さんとの論争が始まっていた。

「あの……私としては聞いていただいても問題ないのですが……というより、面識ある新一郎がいらつしやる方が安心できるというか……」

そんなに一対一で話したくはない。せめて見張りがわりが欲しい。

「はあ……お客様がそう仰るなら、新一郎はそこに控えなさい。それで西住さん、今日は……いかなる御用で？」

「お嬢様の件について……ご報告に参りました」

話した内容はほぼ変わらない。逆にあの市街戦での出来事には私では分からない部分が多いのだ。だが新一郎さんが後ろで控えながらも、正面の方に向かって話を続けた。

別に武勇伝を伝えたいわけじゃない。だが少しは仲間を誇りに思ってもよからう。へりを撃墜した話なども盛り込んだ。そこで何か吹っ切れた顔をしていたことも伝えておいた。

だが結局彼女は許されることなかった。奥様も許すつもりはないらしい。

「自分の道を見つけてくるまでは……帰るのを許さない……つもりでしたから」

実にいい親だ。後継が死にかけているのに理由をつけて次女を放逐する奴とは、脳味噌の質が違う。

「いちちらを……」

私の話がひと段落した頃、奥様は一つの三つ折りの紙を差し出した。

「失礼します」

そつと開いてみると、中身は白黒の文字が淡々と事実を述べていた。

これが死人の親にかける言葉か。前々から思つてはいたが、現物を目の前にしては手を震わさざるを得ない。

「こんな……こんなことをするのなら……戦車なんて……戦車なんてみんな鉄屑になつてしまえばいいんだわ!」

慟哭なさりながら、畳の上に伏した。優花里さんに言つたら怒られそうだが、實際その通りだ。この世の中はこの戦車というものをどこかに置き去りにし忘れたらしい。

そのままさらに奥へと引かれ、私は新三郎さんの人力車で水戸へと戻つた。

「……西住さん。一つお伺いしてもいいですか?」

別れ際、歩道橋の足元であった。まだ夜には早い、昼は過ぎている。

「お嬢は……貴女のお役に立てましたか?」

「はい。華さんは間違いなく大洗の役に立ちました」

だが、それだけだ。だが……

「それは……よかつたです」

こんな言葉でも慰めになるのなら。

飛行機の子ケツト片手に水戸駅からのバスで羽田空港に向かった。

子ケツトに書かれた行き先は長崎空港だ。幸い羽田出発の5時間以上前に水戸駅の南口ターミナルを出るバスを捕まえることができた。

バスに揺られること3時間弱、朝早かったこともあり、道中は結局寝ていた。

約2時間のフライトの中、眠気を飛ばした私は手紙の山を見直していた。私の所には学園に退学届けを送ってから何件も転学の案内が来ていたが、その殆どが戦車道をやっている所、もしくは新たに戦車道を始めようとしている所からだ。つまりそういうことを求めていたわけだ。

その中で一つ異彩を放っていたのが、サンダース大学付属のケイさんからの手紙だった。その手紙には戦車道の戦の字も書かれてなかった。ただ一緒に生活をエンジョイしないか、とだけ書かれていた。

学生生活をエンジョイ、それが何かはわからない。果たして私に戦車道以外何が出来るか、そこを迷ったこともあった。だが一つ言えたのは、やらされる戦車道はもうしたくなかった。

それから学園との話し合いの末、正式に転校することが決まった。というより、他よりマシな選択肢がこころしかなかった。

ケイさんとの間に面識はない。今までの軟式大会で見かけたことはあるが、元々私自身人見知りの性格である。話しかけることはなかった。文面から陽気な感じが伺えて楽しみはあった。しかし同時に恐怖でもあった。何せ私は彼女の仲間を試合で殺すよう指揮した張本人である。恨まれない方がおかしい。

考えたり窓の外を眺めたりしていると、いつの間にかシートベルト着用サインが点灯した。

空港に到着し、大きめの青いキャリーバッグを受け取って外に出る。コンビニのある左側から中央にかけて、色々な名前が書かれた紙を持った人が並んでいる。しかし辺りを見わたしたが、私の名前は直ぐには見つからなかった。ローマ字、筆記体で書かれていたからまあ仕方ないだろう。日本語で書いてくれ。

やっと見つけたそのローマ字の紙に近づく。

「えっ……と、西住……みほです」

紙を持っていた金髪の女の人に話しかけるとその人は口元をニヤリを上げた。次の瞬間、名前の書かれたスケッチブックを投げ捨てたその女の人に、かなり強く抱きつかれていた。

「ウエルカム、みほ！よく来たわね！」

余りに急な出来事に思わず呆然とする。ハグをやめた女の人は肩を叩いて正気に戻してくれた。

「話は車の中でしましょう！さあ、こつちよ！私はケイ！よろしくね！」

この方が当の手紙の人だと理解し終える前に、腕を引つ張られ引きずられるように彼女についていかざるをえなかった。というかいつの間呼び捨てされる関係になった！

広いロビーを抜け、建物の外へと連れ出される。しかし横断歩道を渡って目線の先にあったのはどつからどう見てもご立派な黒塗りの高級車である。

「えつと……これは？」

「我らの学園長がお待ちよ！」

あつさり告げられた事実にも、思わず足がすくんだ。どうしてそんな偉い人がいるのか……やはり私の存在に何かしら目的を見出して使おうとしているのか？

「ハーイ、アイク。みほを連れて来たわ」

「おお、ありがとう。ケイ」

禿げた頭の光る初老の紳士がトランクを開けて待っていた。その物腰柔かな様子に思わず不安も薄らいだ。

「……………こんにちは……………」

「ようこそ、西住さん。私はサンダース大学学園長を務めております、愛善と申します」
「……………どうも」

「早く車に乗りましょ！ハリアップ！」

ゴツゴツした大きな手との握手を済ませると、またも引きずられるように車に乗り込んだ。全くちよいとは落ち着きというものがないのか。

愛善氏も私のキャリアバッグを詰め込むと車に戻ってきて、運転手に行き先を指示した。車は駐車場を出て、海にかかる橋の方に向け出発した。

「西住さん」

「は、はい」

愛善氏が橋の上で書類片手に話を切り出した。

「それではこの前お電話でお話した内容を確認します。我が校に4月から高2として途中入学し、同時にサンダース大学付属中学校の戦車道の顧問としてこちらが雇いしで、給料から学費を払って頂く、と。お間違いないでしょうか」

「はい」

はつきりと答えた。偽りは全くない。

「みほ、いいの？また戦車道やるなんて」

「ケイさん、いいんです。私がやるべきことは分かりましたから」

そう、あの悲劇を後世に伝えることが私に出来るせめてもの償いだ。それ決断する上で、私がアパートに残って出した結論だった。

「此方としてはそれは構わないのですが、無理はなさらないようお願いします。寮の部屋も確保してあるので、到着次第そちらに向かってください。荷物は明後日には届くはずです。」

あと、4月までは学生ではないので、顧問専任としてお願いします」

「は、はい」

「まあ大丈夫よ。みんなフレンドリーだから直ぐに生活に慣れるわ」

少し固くなりつつあった肩を叩かれると、堅い話と緊張で固まった体からずつと力が抜けた。車は橋を渡り終わり大村の街を走っている。

そして橋を渡り切ろうとした時、私は話そうとしていたことを切り出した。

「……あと、この前は……ありがとうございました……」

私が今生きていることへの礼だ。その話を耳にした愛善氏よ顔が作り笑いに変わる。

「……ああ、あの事です。構いませんよ。あれで、悲劇は最後になりますから。必ず」
ケイさんも先程までのハイテンションが嘘みたいに沈んでいる。やはり触れぬ方が

良かったか。だが……ここで生きる上で触れぬわけにもいくまい。

「そうだと……思いたいです。あと、本当に」

「それは言わなくていいわ」

ケイさんが遮る。

「……もう、終わったのよ。全て」

その様子から何かを抑えていることは直ぐに分かった。この人も、私も、同じなんだ。
「今後もよろしくお願いします」

二人に礼をした。橋を抜けて、街を抜け、車は長崎自動車道を北上し始めた。
期待はない。ただそこで生き抜こう。

第7章 ③ 戦車の道

2073年6月18日 日曜日 夜

少し高めだが、気に障らない音楽がそのプログラムの始まりを告げる。

「どうもこんばんは。竹山です」

黒髪に白髪の混じる紳士が一礼する。背景には黒と白のみ、されど大河を表している
と一目見てわかる。

「大和撫子の武道とされます戦車道について、皆様どれほどご存知でしょうか。」

現在夏の全国高校生大会には40校近くが参加し、男子は甲子園、女子は東富士と呼ばれるほどの人気を誇る、今や日本有数の人気スポーツとなるほど大きく発展しております。その名を知らぬ方はそういらっしやらないでしょう」

今年の大会の表彰式と思われる映像が流される。ウチの学校ではないが、和かな顔をしてトロフィーを掲げる子供達の姿。この顔だけはなかなか変わらない。

「しかし今でこそ平和なスポーツであるこの競技が、これまでの幾度となく日本の、そして世界の歴史に振り回され、苦難に直面してきた歴史をご存知でしょうか？」

若き学生が戦場に行き、戦車道の名の下血で血を洗う戦いに身を投じざるを得なかつ

た。そのような時代が、確かに存在したのです」

今まで何度も、そういう類の番組が組まれるたびに流れてきたものだ。最近のよりは遙かに古めかしい。

『大樹の雫』、本日の「雫」は2012年12月11日、と致したいと思います。

これは、学園都市の雄とされた黒森峰女子学園が、プラウダ学園とサンダース大学らによつて陥落した時、でございます。この時、それは硬式戦車道の試合へと変更された第74回高校戦車道大会の、決勝戦の最中ございました。その最中に起こった戦車道による武力侵攻。

今回はなぜそのような事態に至ったのか。そもそもその戦車道成立経緯から、日本の学園都市への影響を経て語ってまいりたいと思います」

く大樹の雫く

川べりに立つ木から零れ落ちる一滴の雫。その一滴には木が育つ歴史があり、そして川面に落ちた雫は辺りに波紋を広げていきます。その小さな雫から、大きな歴史を紐解いていきましょう。

大樹の章 「戦車の道」

「戦車道の歴史は、第一次世界大戦の終わりからお話しなくてはなりません。第一次世界大戦は1917年のアメリカの参戦と翌年のドイツの春季攻勢の失敗を経て同盟国側の敗戦で終わり、さらに翌年のヴェルサイユ条約でドイツは多額の賠償金を背負われ、領土、軍備に大きな制約を課されました。

その少し前に二月革命、十月革命を経てロマノフ王朝を受け継いだ臨時政府は打倒され、共産国家ソヴィエト連邦が誕生しました。ソヴィエト政権は帝政時代に結ばれたあらゆる契約に義務を負わないとして対外債務を破棄すると通告しました。

欧州諸国や日本はこれに反発するとともに、共産主義の拡散による国内の革命を防ぐため、反ソヴィエトを標榜するウランゲリやサヴィンコフ、デニーキンら白軍を支援し、対ソ干渉戦争を始めます。日本の寺内正毅政権もシベリア出兵を行いました。

しかし赤軍の至宝と呼ばれるミハイルトハチエフスキー率いる赤軍に敗れ、ポーランド・ソヴィエト戦争を除けば各国の干渉は失敗に終わります。

欧州の嫌われ者となったドイツとソヴィエト連邦は、共にポーランドと対立していたこともあり、双方に反対する意見は多かったもののラパツコ条約を結び、互いに手を結び国際的孤立から脱する、という策を打ったのです」

画面の地図の中ではドイツとソヴィエトから手が伸びて結ばれており、その中でイタ

リア辺りに赤い点が示されている。

「協商国の反撃などにて戦車の突破力を身に染みて感じたドイツ軍の将軍達でしたが、ヴェルサイユ条約により戦車の国内製造、輸入ともに禁止されていました。

そのためゼークトラ将軍達はソヴィエトと秘密協定を結び、西側諸国の監視の及ばないソビエト領内各地にドイツの武器製造、訓練施設を建設することとします。

ドイツはそこに優秀な人材を続々と送り、密かに実地訓練を積ませました。ソビエト赤軍の士官達も机を並べ、共に最新の研究を学んでいたのです。

ソヴィエト連邦内の戦車工場は初めトラクター工場に偽装されていました。しかしソヴィエト連邦がイギリスなど諸国との国交を樹立し始める中、各国がこの動きに疑問を抱き始めます。また実際に大規模な戦車の運用訓練を行う必要性に迫られるようにもなっていました。

これを受け、ドイツ軍部は1926年、若者の健全で規律正しい育成を目指すスポーツとして

『Der Weg eines Panzerkampfwagen』

を立ち上げるよう政府に要求しました。この前年にロカルノ条約を結びドーズ案により賠償金の減額が進む中、再び英仏の不信を煽るとの反対もあったものの、当時の外交を指揮していたシュトレゼマン外相がこれを認めます。結果としてその年、ドイツ

戦車道普及協会が設立されず。

ドイツ政府及び軍部は戦車道のスポーツ面及び非軍事性を強調するため、積極的に子供や女性をメンバーに加えるとともに、ルール面においても戦車同士の試合であることを強調しました。当時の軍事世界では戦車は塹壕線を突破するものであり、戦車同士の戦いは想定されていなかったのです。

こうして少女が模型の戦車に乗って、機銃弾にて模擬戦を行う、現在に続く戦車道の概念の基礎が築かれたのです。ナチス政権成立後もこれは継続、拡大され、ドイツ女子同盟の体育教科として導入されました」

背景は戦車の前で並ぶ少女らに変わる。楽しげな顔が印象的だ。皮肉だな。あの時の少女達も連想される。

「他の欧米諸国も戦車道の教育的な効果を認め、こぞつて導入しました。これは次の戦争を見据えた軍備増強の一面もありましたが、やはりドイツ軍部の平和利用のための策が目論見通りにいった部分は大きかったです。

日本も各国の導入を受けて、帝國戦車道教導団を筆頭に、各地に相次ぎ戦車道団体が生まれ、それらを纏める大日本帝國戦車道連合、後の日本戦車道連盟も設立させました。国としては自国産戦車の計画が進む中で、その利用拡大を測ろうとしていましたが、

昭和初期の相次ぐ不況と教導団代表の西住かほの尽力により、家柄を限定し他の日本古

武道の考えを加えた大和撫子の嗜みとして発展していきました。

彼女は後に西住流という戦車道の流派を確立し、西住流初代家元として戦前の戦車道発展に貢献しました。西住流は後に黒森峰女学園と組み、戦後戦車道の主流の地位を獲得していきまます」

あの子の面影が、いやこの人の面影が、あの子にはあるのね。きつと彼女もそうあるとしたのかしら。

「そして戦車道は各地で導入され、1928年に第1回全国専門学校・女子高等師範学校生戦車道大会が行われたのです。今に知られる学校としては、相模女子大学、東京女子大学、東京家政大学、大阪樟蔭女子大学、お茶の水女子大学などの前身が参加しました。

ベルリン五輪と同年の1936年に五輪スタジアムで行われた第1回戦車道世界大会では、決勝戦で日本代表がドイツ代表を破り優勝し、その際の行動が勝っても相手も思いやる大和撫子の精神として世界の注目の的になりました。日本が国際的孤立を深めていた情勢にもかかわらず、当時の画像の一部は当時では珍しいカラーフィルムが使われています」

画像は互いに握手し称え合う黒い服の長髪の少女と黄土色に近い服の短髪の少女の姿が映る。

「しかし日中戦争勃発を受けて同年の全国大会を最後に戦車道は中止へ向かい、第二次

世界大戦時に全ての戦車が帝国陸軍に供出されたことで戦車道は廃止され、戦車道連盟は陸軍省に完全に吸収されず。

第二次世界大戦にて戦車の生産力で劣っていた日本軍は、第二次世界大戦後半には陸上戦にて中国軍以外から勝利を得られなくなります。戦線を突破する戦車を止めるためにより多くの、より質の高い戦車を投入する、それは20世紀の戦車戦の現れであり、戦車道が戦争そのもの、とされ得る姿でした。

さらに東西冷戦が本格化する様子を見せると、それと共に戦車研究も加速します。そして分割されたベルリンにて、緊張解消と互いの戦力を図るべく、中隊規模での戦車戦が設定されます。これが初の硬式戦車道である、とされています。

しかしこれは本格的に雪解けへと繋がる中止され、欧米各国は復活した戦車道での安全化と、そのための使用車輛の制限を一層進めていきます」

アイゼンハワーとフルシチョフの接近。昔世界史でかじっていたのが懐かしくなる。「敗戦後、連合国により占領された日本でも、戦車道の復活が謳われるようになります。GHQは日本国憲法の男女平等に則るためとして、1950年の警察予備隊設立と同時に日本戦車道連盟を復活を承認。ただし世界の動きとは異なり実弾使用を命じ、対米協調による講和を目指す吉川繁政権はこれを受け入れました。これは将来的な日本の再軍備のために、戦車戦の経験値を与えておく為だったと言われています。

先ほどの経緯もあり国内で反発は大きかったのですが、当時の西住流二代家元西住ちほが実弾戦車道を朝鮮半島有事、インドシナ戦争の長期化などの国際情勢に触れた上で『非常時に最高の策をとれる人間を求めている』

と賛意を表したことで正面からの反発は収まり、高校生による年一回実弾での大会の導入が決定され、1950年、第12回全国高等学校戦車道大会が開催されました。戦前以来の大和撫子のスポーツとしての形、一方でドイツでの硬式の形を受け継いでいるため、その現実は大将車輛の死をかけた一騎打ち、というなかなか歪な戦車道は、こうして誕生したのです」

つまり大人の事情が子供を左右したわけだ。もつともそれは大人をも振り回す存在だが。

「その後各国の研究による自動判定装置、炭素繊維による内面保護の強化、貫通性のより少ない砲弾の開発により、安全性が強化された戦車道として軟式戦車道が登場。世界各地に広がりを見せます。

当初は連盟はこれを公認しませんでした。日本国内でも発展を続けていき、1971年に連盟も軟式大会を公認しました。

対して実弾を使い死傷者の出る硬式戦車道は脱退校が相次ぎ、1958年の硬式第20回大会は32校参加していたのに対し、1984年の硬式第46回大会の参加校は

たったの13校という有様でした。これは硬式戦車道に参加していた当時の覇権校、湾岸ジュリアナ高校が連盟に対する強い発言権を用い、数で勝るものが有利となるようにルール改定を行ったのが理由の一つと言われています。

この時改定されたルールは2013年までプロテスタント組織熊本バンドをルーツにしてドイツ式戦車を保有する黒森峰学園と、ソヴィエト連邦からの亡命者を中心につくられ、スターリン批判後はソヴィエト連邦と提携したプラウダ学園が拒否権を行使しあつた為、なかなか改定が進みませんでした。

こうして軟式戦車道が主流となる一方で硬式戦車道が存在する、という状況が生まれただのです」

そして私たちがいたのは、その終わりの近くだった。

「戦車道とは車輛そのものや整備費を含めても、本来かなりの費用を要するものでございます。したがって戦後の畔政権、沼田政権期に行われた第一次、第二次学園都市建艦計画により誕生した学園都市が、その資金力を元手に戦車道を牽引する母体となりました。」

また民主主義の母体となる自治意識を学生期に実践的に育成すべき、との主張から、1953年に資本主義諸国間で世界学園都市自治協定が結ばれます。日本もこれを批准し、学園艦、学園都市には大幅な自治権が与えられることとなったのです。

この二つにより、学園都市は自身の体制を実方面で保障するもの一角として、戦車道を自らの体制下に取り込んでいきます。実際に1960年代後半以後学生運動が過激化してくると運動部だけでは対処しきれず、戦車道部隊を投入する事態は散見されます。その中でも大きなものとして、旧BC学園における赤軍BC蜂起の鎮圧が挙げられます」

映像ではS35の集団がショットガンを発砲している集団に対し、断続的に7.5ミリ機関銃の弾をばら撒いている。その先にあるはずの死体の山は、映ることはない。

「1973年、第四次中東戦争を受けてAPECが石油減産を打ち出したことによるオイルショック、1976年のウランの主要採掘国であるカナダが、ケベック州の独立運動を武力弾圧したことによる国連の制裁を受けて、ウラン禁輸を打ち出したことによるウランショックにより、学園艦の維持費用は増大します。さらにそれらによる国内の経済成長の停滞も見過ごせるものではなく、増えてきておりました。

これを受け当時の阿藤、畑中、福岡政権は内需拡大と過疎化の進んでいた地方を再生するための拠点として学園都市を移設し、活用していくことを発表。二度の学園艦移設計画により学園艦が多く廃止され地上に移設されました。

このことによつて新体制の成立、確立が追いつかない各校に、新都市建設による費用不足が広がり、また湾岸ジュリアナ学園の横暴、汚職の連鎖が世に知れるに連れて世間

の目が冷たくなったこともあり、戦車を売却する、または戦車道を廃止する学園都市は大幅に増加します。特に硬式戦車道の退潮は著しく、1987年には大会番号を受け継ぐのは軟式戦車道の方に変更されたほどです。

2012年時は軟式大会に16校、硬式大会に7校が参加し、軟式大会、硬式大会はそれぞれ年1回行われていました」

背景は海外に転売する為に輸送される戦車と、それを悲しそうに見つめる少女達の映像が流れている。嘆かわしいが……これが続けばまたそれはそれで良かったのかもしいれない。

「硬式大会はほぼ黒森峰女学園とプラウダ学園の争いの場と化していました。それまでフラッグ車同士の一騎打ちが主流だったのに対して、この二校での試合は両校の総力を賭けた試合となりました。

この背景には学園都市を巡る大きな派閥の違いがあります。学園都市が学園艦から本土に移設された際、地元民との確執は避けられないものとなりました。そこで学園艦以来の伝統を守ることで校内を、ひいては都市内を安定させようとする校粹主義と、むしろ学園艦の伝統は放棄してでも移設先に歩み寄ろうとする融和主義に学園都市の道は引き裂かれることとなります。

この対立の主軸を担っていたのが、校粹主義を掲げる黒森峰と、融和主義を掲げるプ

ラウダだったのです。両校はその主張の違い、およびそれを巡る他学園都市への介入、そして国との距離を巡って対立を深めます。相手校の戦力を削るため、互いに総力をかけた試合へと向かったのです。

日プ対立に伴いプラウダ学園地域が戦車道予算を大幅に縮小した為、2002年から2010年まで硬式大会にて黒森峰女学園が9連覇を達成し、また軟式大会においても当時有力だったサンダース大学付属高校が孤立主義化により勢いを失ったこともあり、軟式大会においても黒森峰女学園が9連覇を果たすという、とてつもない偉業を成し遂げました」

あの時は先輩方も誰も黒森峰に勝てるとは思ってなかった。戦えること自体が名誉、そんなことを言う先輩までいた。はつきり言っただけはそれが嫌いだつた。

「しかしこのかつてない黄金時代に影が差し込みます。2011年、黒森峰女学園は硬式大会、軟式大会ともに優勝を逃します。その代わりにその座を掴んだのは、プラウダ学園でした。青師団内戦に介入し校粹主義的な静野政権を成立させた黒森峰女学園でしたが、これこそがこののちの悲劇の前触れだったのかもしれない」

第7章 ④ 黒森峰女学園

後半はかなり暗かった映像が一区切りつけられ、竹山ともう一人の女性がいる画面になる。私もよく知っている顔だ。

「本日は戦車道プロリーグの長崎ウルフズでエース車輻の砲手としてご活躍なさい、最優秀選手賞を4度獲得。引退後はサンダース大学の准教授として戦車道史を研究していらつしやる増谷直美さんにゲストとしてお越しいただいております。増谷さん、よろしく願います」

「よろしく願います。増谷です」

ナオミは軽く竹山の礼に答える。無表情に近く凛々しいこの顔が学者っぽいと、こういう話があるとき引つ張ってこられる。確かにシワこそ増えたが、あの頃の顔立ちはよく残っている。

「増谷さん、早速お伺いしますが、戦車道は戦前ドイツでの軍部と政治の妥協の産物であった、と考えてよろしいのでしょうか？」

「はい。当時のワイマール共和国の政権は多党連立にならざるを得ず、非常に不安定でした。さらに共産党などの不安要素もあり、軍部は味方につけておくしかなかったの

す。

それでも戦車道創設は大きな問題となりました。だからこそハイパーインフレーションを抑え、外交を主導していたシュトレーゼマンが最終的に決定を下した、と考えられます」

「その結果戦争とは異なった形での戦車を利用したスポーツを形作ろうとした、と」「シュトレーゼマン本人がこののち、『かつての決闘がフェンシングとなったように、スポーツになるとは平穩の証である。だからこそDer Weg eines panzerkanpffwagen(戦車道)は、戦争から最も遠いものでなくてはならない』と発言していることから、ワイマル共和国がいかに実質的な戦車保有を誤魔化すかに腐心していたことが分かるかと思えます」

「なるほど。しかしそれにしても、戦後アメリカはなぜ日本に対し、それまでの潮流と異なり硬式戦車道を導入させようとしたのでしょうか？」

「一つには再軍備化を進める中で男性の不足が予想されたことです。先の大戦における被害は、わが国でも生産年齢人口層の男性に集中しました。経済を再生させつつ軍備の精鋭化を進めるためにも、それまで実績のある戦車道から人材を確保しようとしたのです」

「ですが育成を名目に殺してしまつては、意味がないのでは？」

「実際に戦場に身を置かねば、敵を躊躇いなく攻撃することはできません。ソ連軍の上陸に即座に第一撃を与える存在として、戦車道参加者らは想定されていたようです。しかし自衛隊が設立、整備され、北海道に方面軍が設置されると、その意味は失われます」
「ではなぜ、その意味を失つても硬式戦車道は残り続けたのでしょうか？」

「戦車道は戦前から繋がる営みの一つであり、一時は間違いなく国際協調のピースでした。これの廃止は再び日本を孤立へと導くのではないか、その不安が戦車道廃止への動きを抑制した、とされます。当時はまだ日本以外の国でも硬式戦車道が導入されていたので、問題視されることもありませんでした」

「国際的孤立への不安ですか……」

「やはり国際連盟からの離脱とこの時期、そしてこの先も日本は援助機関の非支援国組織や砂糖の取引協定などの例外は除き、国際機関からの脱退はかなり控えます。これがその後の国内の学園都市運営方針にも影響を及ぼすのです」

「ほう……と仰いますと？」

「学園都市間で紛争や内戦が勃発すると、世界学園都市自治協定から脱退し学園都市の自治権を縮小しようとする動きが、野党はもちろん与党内からも現れます。協定加盟国からの勧告も出されました。しかしこの際も国際機関からの脱退による孤立を恐れ、日本政府はこの勧告を拒絶します」

「結果として学園都市間の争いが収まることはなかった、と」

「そういうことです。1994年の佐々戦争、95年のBC自由内戦、96年のベルヴォール戦争、98年の8・10事件、99年の晴天革命、2004年の黒継戦争、09年のマジヤール革命戦争、11年の青師団内戦、そして12年の黒森峰の戦い。この全てに日本政府は直接的な介入ができませんでした。学園都市が保有できる軍備は戦車道連盟規約に則るもののみ、と通達するのが精一杯だったのです」

「なるほど、制御の効かないほどの分権化と硬直的な態度、これがこの悲劇を生み続けた一因と」

「そうなります。学園都市が地方における地盤となったこともありませんが。ここに住むのは学生だけではないので、そこを日本民主党が握っておくのは、もともと地方に強い同党にとっても必要なことだったのです」

「そういうえば先ほど武装を連盟規約に則るもののみ、すなわち戦前の物だけどされたとありましたが、学園都市の争いが加速する中、何故それは守られたのでしょうか」

「やはり各校が軍拡競争を恐れていた、ということが挙げられます。もともと元の市町村との関係がうまく構築できない時もありましたし、第二次学園都市移設計画の際は各校バブル景気による地価高騰の煽りをもろに受けました。

そしてバブル景気が弾けますと一層の財政難が襲うことになります。軍拡競争をす

る余裕はなかつたうえ、仮に起こつたら勝つたとしてもその時には莫大な費用を使い果たしていることになります。その点で政府の通達は上限を定めるのに適切だったのです」

「そういうことだったのですか。増谷先生、ありがとうございます」

ナオミと向き合っていた男が、こちらに向き直つた。

「さて、続いては今回の主役、黒森峰女学園についてお話しした上で、この黒森峰の戦いを語る上で欠かせないある人物を取り上げ、『雫』の真髄に迫りましょう」

雫の章 「黒き森の闇」

「そもそも黒森峰女学園とはどのような学園だったのでしょうか。明治維新ののち日本に西洋化、近代化の波が押し寄せると、それまで禁止されていたキリスト教にも光が当てられます。

1876年、熊本洋学校に在籍していた土族の子供35人が、熊本城近くの花岡山で奉教趣意書に誓約し、世に言うプロテスタント組織熊本バンドが成立します。洋学校は間もなく廃校とされますが、其処にいた生徒たちは京都など各地に散っていきます。その中で熊本に残った横崎経峰が熊本独語学校を立ち上げます。これが黒森峰女学園の

ルーツとされています。

これはもともと個人的な信仰を重視するよりは国家主義的な側面の強い団体であったこともあり、熊本独語学校も国政に協力できる人材を育てることを重視します。明治大正期の医療関係者や第一次大戦時の対独諜報、第二次世界大戦前の日独接近にも独語学校関係者が絡んでいます。

戦後、学徒出陣で失われた独語学校を再興しようとする動きも出てきますが、南方の救援として向かった彼らの多くが帰らぬ人となり、また学校として親独寄りだったこともあり、ナチス主義者だと左派を中心に批判を受け、一筋縄にはいきませんでした。

これを受け当時の江部学校長は女子校として学校を再興すると発表。政治色も薄めていきます。後に日本政府が学園艦計画を発表すると、これに応じて採用され名前も改められ、黒森峰女学園が誕生します。

1959年春、第一次学園艦計画により誕生した学園艦としては後発組として誕生した黒森峰女学園学園艦。当時は江部政権が続いており、生徒統制色は薄れます。その結果発想力ある女性人材を生み出す場として、その存在感を示していきます。

しかし学園都市の運営そのものは江部政権幹部が指導しており、それに反発した学生運動が起こる中1969年に江部学園長が辞任し、後任には品田家隆が就任します。彼は独語学校出身であり、その影響もあつてかこの後黒森峰女学園は国家主義、教員主導

主義へと傾いていきます。

その前段階として、後に親衛隊として恐れられる治安維持隊を、学園長直属組織として立ち上げました。この育成のために呼ばれたのが、当時自衛隊を怪我で退役した身で、後に黒森峰女学園の学園長となる等良智義です」

これが……あのウチで忌み嫌われていたオヤジか。こう見ると杖をついた優しそうなおじさんにしか見えない。こんなのが……我が校、いや日本に多くの人の死をもたらしたというのか？

「品田政権下では治安維持隊を利用し反対運動を鎮圧。一層の学園都市幹部への権力集中を進めていきました。

また同時期には戦車道の主流の一つ、西住流との提携を深め、戦車道の強化と治安維持隊への組み込みを進めます。これ以前も西住流との関係は存在しましたが、これ以降は西住流なくして黒森峰なし、黒森峰なくして西住流なし、と呼ばれるほど一体化を進めていきます。

西住流としては自身を支えうる母体として黒森峰女学園の存在は大きく、黒森峰女学園としても幹部の権力の保証としてこれ以上に力強い存在はなかったのです。

ですが学生運動ののちは大きな動乱もなく、1985年には第一次学園艦移設計画の中で熊本県嘉島町に移設開校。しかしこの際に一部教師が品田政権の教員主導主義に

反発し、独立を宣言。炭鉱廃止後困窮していた福岡県山田市に学園都市を新たに建設しました。これがベルヴォール学園で、その成立経緯から黒森峰女学園とは対立関係にありました。

移設にあたりドイツ風の都市建設を進める中、現地住民との摩擦も起りますが、これに対し元船舶科を防衛隊として組織し直し、都市治安対策の即応部隊としてこれらを鎮圧させます。一方で東にある益城町、御船町、甲佐町の3つと合併し、隣接地域の管轄権移管の一方で残りの地域ではそれぞれ自治を認めました。校粹主義的な部分を都市区域のみに限定することで、不満を逸らそうとしたのです」

校粹主義も融和主義も問題はあった。校粹主義は学園の団結を強める一方で、地元からの反発は避けられなかったわけだ。それが少なかつたのは、ご飯を配れたアンツイオくらいなものだろう。

「その後も品田政権は学園都市幹部への権力集中を進め、教育、軍事、都市運営における官僚機構の整備をします。しかしその最中の1991年、空前の好景気、バブル景気が終焉を迎え、長く続く平成不況に突入します。他の学園都市はもちろん黒森峰もその影響を受け、生徒数の維持こそできたものの、税収入減という問題に直面します。

この危機を乗り越えられる学園が、この先力を持ちます。黒森峰女学園はこれまで輩出してきた人材の伝手を利用し、都市における市場の寡占と引き換えに寄付金上納に依

じる企業を募集。黒森峰企業グループを形成し新たな収入源としました。

この新たな収入源と都市建設の収束に伴う建設援助金支払いの縮小は、黒森峰財政に安定をもたらします。それを元手に各地で売却されていたドイツ戦車を安値で買い集め、黒森峰は日本でも五本の指に入る戦車部隊を形成するに至ったのです。同時に防衛隊の中にも中戦車、軽戦車を主力とする戦車部隊を作らせ、戦力を強化していきます。

しかしこの一方で、黒森峰の政治はこの黒森峰グループの意向も考慮せざるをえなくなります。彼らは黒森峰女子学園学園都市内部の市場を取り仕切り、そしてさらなる利益の拡大を望んだのです。

品田政権もこれに応じる形で、財政難にあつた公立の宇土学園を債権引き受けと引き換えに実質的傘下に収め、この地も黒森峰グループで独占。さらに宇土半島の付け根、松橋郊外の漁港を拡大する形で軍港を建設し、これを99カ年租借。海軍の育成に取り掛かります。派兵をこの時点から構想していました。

バブル景気の弾けた後の学園都市は、その影響を抑えようと生徒数の拡大や自身の経済力確保に力を尽くすようになります。その拡大を狙う中で争いを引き起こしていたのが、長崎県のサンダース大学でした」

話には聞いていたが、ウチの学校の暴挙にも背景はあつたわけか。だがよくまともにできたものだ、とはよく思う。足元に空母が座していたのに。

「第一次学園都市移設計画で1986年に成立した同校でしたが、1992年には五島列島の五島学園と漁業海域を巡る争いを起こして同学園都市に兵を送るなど、緊張を高めていきます。

そしてその北にあった平戸学園とも、彼らの間にあった佐々町、吉井町、小佐々町の3町の編入を巡る混乱の中、1994年6月20日、サンダース大学防衛隊と平戸自警団の間で銃撃戦が勃発。どちらが先に起こしたともわからぬ戦い、通称佐々戦争が始まります。

初めはサンダース大学防衛隊が重要拠点田平近郊に迫るなど優位に進めますが、開戦13日後の7月3日、黒森峰女学園は平戸学園側での介入を決定。翌々日には平戸に上陸し、あつという間に反攻作戦を成功させ、7月26日には佐世保近郊に到達、これを降伏に追い込みます。

こうして黒森峰女学園はその軍事力を内外に示すことに成功したのです」

この敗戦だ。これが……我が校の底に根を張り続けている。

「この戦勝に学園、そしてサンダース大学の圧力から解放された諸校は湧きました。そしてその勢いのまま、黒森峰女学園は翌年九州南部の阿久根学園、豎琴学園や北部の平戸学園、五島学園などと組み、熊本相互防衛協定を締結。市場への黒森峰グループ企業参加許可とそれらへの事業優先権の代わりに、各校への武力攻撃や暴動に対しては黒

森峰女学園も助力、参戦する、との形をとり、黒森峰女学園は一気に九州の覇者へとの上がります。

これが成立したのち、品田家隆は病を理由に辞職。後任にはその佐々戦争を指揮した防衛総司令官の等良智義が指名されます。まさに今後の黒森峰女学園がどのような方針をとるかをありありと示す人事でした。

そして等良政権のもと起こったベルヴオール学園とのベルヴオール戦争には、航空部隊の創設とそれを利用した反撃により勝利。黒森峰女学園は陸海空三軍を揃え、その影響力拡大を狙います。

一方で等良政権は国への接近をより一層進めます。これらの肥大化した軍を支えるには寄付金のみならず国からの学園都市への交付金が頼りになり、日本民主党中心の連立政権の維持が必須となっていたからです。その直前、1993年に非日民連立政権が成立していたのも接近を急がせる要因となりました。

等良政権は政治体制に関しては品田政権を継承します。校粹主義、教員主導主義の堅持とともに、教員は学園運営から分離させて教育、軍事、政治を分立させ、それを学園長等良が統率する等良独裁体制を確立させます。

こののち等良政権は熊本都市圏郊外として飯野ニュータウンを建設。その接続と学園中心部への連絡のためにJR黒森峰支線の建設支援など積極的な財政政策を進め、黒

森峰グループ収支の向上させ安定政権を継続します。一方で各地に義勇軍や観戦武官を派遣することはあれど、九州外への直接介入を控えるようになります。

しかし2008年、リーマンショックが到来。バブル景気崩壊以来の大不況が日本を襲います。いくら市場を確保していた黒森峰グループ企業でも無傷ではすみませんでした。

そしてそれに追い打ちをかけるように2009年、その年の総選挙で与党日本民主党は敗北。野党立憲国民党が衆議院過半数を獲得し、政権交代を達成しました。これは多くの学園都市にとって非常事態でした。それは立憲国民党が学園都市の優遇廃止や軍備の強制的解体を主張していたからです」

やはりどこもこの二つのダブルパンチはきつかったようだ。元からの経済力のあつたウチはまだマシな方だったが。

「この新たな国に対する対応は大きく二つ。距離を取り優遇廃止に抵抗するか、それともこの国に接近するか。多くの私立学園が国に抵抗する中、黒森峰女学園はこれに接近することとしました。寄付金の減る中、国からの援助金が収入の支えになり得ること。そしてそれを支えさせる要因として、立憲国民党政権と学園都市の対立が想定されたからです。そこに介入できる立場として存在感を持つ。それが黒森峰の目論見でした。

実際に2011年に勃発した青師団内戦では、黒森峰女学園の介入により校粹主義派

の反乱軍側が勝利。内戦の終結に貢献します。また聖グロリアーナ女学院がお台場遠足事件を起こすと、空軍を相模湾上空に派遣して睨みを利かせました。一方でこれまで学園都市は都市建設のため税配分での優遇されていましたが、その廃止を受け入れたため、財政は一層の悪化を見せます。

そして皮肉にもこの年の軟式戦車道、翌年の硬式戦車道の両大会で黒森峰学園は敗北。親衛隊精鋭部隊の戦力も削られることとなります」

そう、あの時彼女の姉はいなかった。だからきつと……この策は成功した。

「軍事的威信の低下にそれを回復するための財源の縮小。この打撃はタダではすみませんでした。そしてその中で、国に反抗する諸学園都市との関係は急速に悪化。柳川協定を結んで強調関係を取り戻していたサンダース大学がこれを破棄するなど、外交的にも苦境に立たされます。

そしてその中で2012年に発生したのが、黒森峰の戦いだったのです」
頼らざるを得ないが故に、か。孤立とは実に悲惨なものだな。

第7章 ⑤ 大洗の救世主

「さて、それではこの戦いを語るに欠かせない人を紹介しつつ、『雫』の核に迫りましょう。これまで色々と学園都市間や内部での戦争の名称を取り上げてまいりましたが、この『黒森峰の戦い』という名に違和感を持たれた方もいらっしゃるかと思います。これに戦争、の言葉が並ばないのには大きな理由があります。

この戦いの大部分は、硬式戦車道の試合の名目のもとで遂行されたのです。戦車道の名の下それまでの戦争ではあった宣戦の通告なしに行われた。その事実を勘案して、この黒森峰学園都市をめぐる一連の戦いはそう呼ばれます。

2012年、戦車道の歴史に大きく刻まれた大会がありました。第74回全国高校生軟式戦車道大会。元々この大会は軟式戦車道にて実施される予定でした。しかし大会運営委員会側の決定で硬式大会、しかも殲滅戦ルールを適用することとなったのです。そのルールの結果この大会は、死者が総計2200人を超える残酷なものになりました」

「下手な戦争での死者数を超える。いやそれどころかこれのほとんどが未来を支えるはずだった若者、というのが悲惨さを加速させている。」

「誰もがこの大会は硬式出場経験のある黒森峰女学園かプラウダ学園が優勝すると考えていました。しかしこの大会は、誰もが予想しない結末を迎えます」

画面は昔の映像から、今度は見慣れた映像へと切り替わった。どこかの住宅地らしい。

「私は今、熊本県熊本市に来ております。こちらは現在は住宅地となっておりますが、こちらには昔田園地域であり、その中に広がる演習場の外れに西住流の一門宅が置かれています。今は小さな石碑だけがそれを示しています。」

西住流の当時の師範にして次期家元、西住しほには二人の娘がいました。姉のまほ、そして妹のみほです。彼女らは西住流の後継者として教育を受け、黒森峰女学園中等部に入學。共に戦車道のエースとしてその名を馳せるようになります。

高校進学後もその名声は変わらず、共に入学早々エリート育成コースである武装SS装甲師団に入隊。2年にして隊長を任せられた西住まほと共に、1年の夏の硬式戦車道大会を勝ち抜くと西住みほは副隊長へと抜擢されます。

しかし2011年冬、黒森峰女学園は軟式戦車道大会で敗北。その原因とされたのは、フラッグ車を任されていた妹の西住みほが、川に落ちた味方車輛の救出に向かい、指揮を放棄した結果撃破されたことでした。

この結果彼女はなんとか副隊長の地位こそ保ったものの、軟式大会10連覇を逃す原

因となり、勝利を重んじる西住流にとって許せるものではないとされ、西住流から段位剥奪の処罰を受けます。

翌年7月の硬式戦車道大会で黒森峰女学園はシードを挟んだ2回戦でプラウダ学園に敗北。彼女と西住まほを含む多くの者がプラウダの捕虜となり、その殆どが虐殺されました。

彼女は何とか生き延びたものの、姉の西住まほは植物状態で発見され、捕らえられた者24人中生存者は彼女らを含む5人だけでした。生存者の中でその翌年の3月までに精神的ショックで自殺した者が2人おり、姉のまほともう一人の生存者である直下理沙は翌年の第74回硬式戦車道大会の決勝戦の中で死亡。高校時代を生き延びた者は彼女ただ一人という有様でした。

生還後に家元の西住しほに硬式戦車道の存在に関して反論したことが原因で、彼女は西住流を破門されます。ですがこれは実質的な勘当であり、姉の西住まほの復帰までの特別措置とも言われています。同時に黒森峰女学園からも強制退学を命じられ、熊本を去ることになります。彼女が新天地として選んだのは茨城県の大洗女子学園でした」

画面は住宅街から学校の建物が見える場所へと変わる。こっちの校舎よりは小ささうだ。

「こちらが現在の茨城県の大洗学園です。西住みほさんが転校なさった当時は女子校で、その時代まで残された数少ない学園艦の一つでした。

しかしその大洗女子学園学園艦に危機が訪れます。立憲国民党の学園艦全廃計画の一環で学園艦廃止が決定され、さらに実績がなかったため、大洗女子学園は学園都市ごと廃止。生徒は周辺諸校に割り当てる、と決められました。

それに当時の生徒会長の角谷杏氏は抵抗。交渉の末、戦車道大会を優勝すれば廃校と学園都市の廃止を取りやめることを条件に引き出しました。西住みほさんはその実現のための駒として、復活された戦車道の隊員に組み込まれます。しかしそれを実現するために参加した大会が、不幸にも第74回戦車道大会でした。

大洗女子学園はたった8輛、32名で大会に参加し、サンダース大学付属高校やプラウダ学園といった強豪に対し、被害を出しながらも西住みほの卓越した采配で勝ち上がります。

激しい戦いの末決勝戦で起こったのが、この黒森峰の戦いでした。これにより黒森峰学園は敗北し、生存者は西住さんただ一人、戦車は大破したIV号戦車のみという悲惨な状況で大会を終わります。これは勝利とは呼べない本当に紙一重での優勝でした。ですがそれでも勝利は勝利、生徒会が望んだことは達成されたのです。

しかし彼女の悲しみという言葉では表せないような感情は想像できるでしょう。な

にせ何年も通った学校が目の前で崩壊し、自分の大洗での仲間が2週間弱で皆いなくなってしまうのですから」

彼女は人の死に数の差はないと言っていた。だが自分以外ないこととそうでないことの間には、広く深い溝が横たわっていた。

「そしてこの決勝戦の勝利には、黒森峰の戦いの経緯が関わっています。

この黒森峰の戦いはサンダース大学、プラウダ学園、ポンプル学院が戦車道連盟の協力を利用して、第74回大会の決勝戦で黒森峰女子園の中心部、学園校舎まで地上部隊を侵攻させたことを指します。この結果等良学園長は学園長官邸で自殺。のちに手続き上宣戦を受けたのち、宇土講和協定が締結され、黒森峰女子園は解体されるのです。

先程お話した通り、この戦いは硬式戦車道の試合の一部として起こされました。それが西住みほが率いる大洗女子学園対黒森峰女子園の決勝戦だったのです」

竹山は路地の裏へと進み、大きな建物の一つ奥にある小さな白い施設の前で立ち止まった。綺麗とは言い難い。

「この試合を見る中で、私たちはある施設に協力しました。それがこちら、大洗学園の大戦勝館の一本裏手にあります、74祈念館です。こちらでは第74回戦車道大会の犠牲者の遺品を展示したり、各試合の状況を模型を用いて説明したりと、当時の記憶

を残そうとする試みが行われています」

建物の前では一人の女性が立ち、彼を出迎える。

「こちらはこの祈念館の館長を務めていらつしやいます、武部香織さんです。武部さん、本日はよろしくお願ひします」

「お願ひします」

年は50手前か。そこそこ伸びた茶髪がスーツの肩部分を覆っている。

「では、こちらへ」

自動ドアと受付の前を通り抜け、奥へと進む廊下が、陽の光に照らされつつ広がっていた。その窓と反対側にある壁に、写真が上下にずらされつつも横一列に並んでいる。

「こちらは？」

「はい、こちらでは第74回大会で亡くなった方を一人ずつ写真付きで並べています。総計36名、間違いなく我が校からの犠牲者です」

「これだけの数の……」

男は驚きの表情で奥まで見渡している。我が校にもこういうのはあるが、名前が彫られた石碑があるのがせいぜい。

「手前から89式中戦車、M3 Lee、マークIV、ヘッツァー、三式中戦車、ポルシェティーガー、III号突撃砲、Blibis、そしてIV号中戦車の各乗員の写真になり

ます」

手前から写真を写したまま竹山が奥へと進む。そしてある写真の前で立ち止まった。

「こちらが角谷元生徒会長、でいらつしやいますか?」

「はい。彼女が戦車道をこの学園に復活させ、大会以前も大会中も戦車道チームをまとめる上で大きな役割を担ったと言われています」

「それにしても……このように写真の位置が大きく上下しているように見えますが、これにはどのような意味が?」

確かに竹山が示した写真は男の腹ぐらゐの位置にある。隣と見てここだけ谷ができています。

「はい、こちらは彼女らの身長データをもとに、それに合う位置に写真を並べています」
「身長、の位置ですか。89式中戦車の方々の写真の位置がやけに高かったのも頷けます」

「彼女らはバレーボール部ですからね。このようにすることで、彼女らが決して勇敢な戦士だった訳ではなく、どこにでもいる高校生であったことを感じて頂ければ、と」

「確かに……こんな小さな少女たちだった、と言われれば……また捉え方も変わりますね」

奥に進むと、少ししたところでまた足を止めた。

「武部……こちらは確か、武部さんのおばにあたる方だと伺っていますか？」

「はい。武部沙織は私の母の姉にあたる方です。母から聞く話だと本当に人付き合いの良い快活な方だということだったので、学園の語る英雄像との間に違和感を覚え、大洗のその後の歴史を考えてやはり自分も興味をもちまして、結果こうしてこの職を預かっている次第です」

「そういうことだったのですか。そしてここにいらっしやるのが最後まで戦ったI V号中戦車の乗員の方々ですね」

「はい。あんこうチームと呼ばれていたそうで、車輛にもマークが入っています」

「やはり大洗のあんこうが有名だったからですかね。こちらの一番組、ここにスペースを空けてあるのはやはり……」

廊下が左に曲がる中、その手前には一人分写真を置けるほどのスペースがあった。

「はい。唯一生き残った方、西住みほさんのためのスペースです。もつとも許可もなにもとっておらずただ場所があるだけです。実際にここに飾られる可能性は低いと思いますけどね」

「確かに、西住さんは大会の後一度も大洗に足を運ばれたことはないそうですし」

「彼女が我が校に帰って来れば、現在でも間違いない救校の英雄として扱われます。それを嫌っているのかと」

「なるほど」

細かな話を交えながら、黒森峰女子学園跡から発見されたり遺族から提供されたりして集まった遺品の前を通り過ぎ、模型が並ぶ部屋に立ち入った。

「こちらが第74回戦車道大会における大洗女子学園の戦いを紹介するコーナーです。この一番奥が黒森峰の戦いのものですね。黒森峰女子学園都市を再現しています」

「結構規模が大きいですね」

竹山の体格と比べて見るに、横3m、奥行き2mはあるだろう。それが透明な板に囲まれてそこに置かれていた。

「はい。当時の写真や地形に関する資料を用いて制作しました。それでは順に説明をして参ります」

近くにあるボタンが押されるのに合わせて、模型の上に設置された電球が光る。

「まずはこちらの南東部ブレスラウ地区。黒森峰女子学園の演習場があり、ここが当初は試合会場とされました。」

しかし西住さんは会場西部に展開していた自衛隊を突破して市街地へと脱出。この状況を受けて、戦車道連盟が市街地を試合会場と認定しました。しかしこの脱出の最中、残っていた4輦のうち1輦、ポルシェティーガーが脱落してしまいます。

残り3輦はそのままブレスラウ地区の市街地に潜伏します。一方でそれを追撃する

黒森峰戦車隊はこの台地に陣をとります。試合は膠着したのです。

その中でサンダース大学、プラウダ学園、ポンプル学院の同盟参戦を連盟が受託し、まずサンダース大学付属高校の航空隊が市街地を爆撃。黒森峰女学園の航空隊をスクランブル発進で有明海に引き付けた上で、航空基地、市街地内の武器庫や補給設備、果てには黒森峰戦車隊を攻撃します。それが終わってから南のコットブス地区に進撃してきたプラウダの砲兵隊が市街地を攻撃します」

元から録音されていたのであろう爆撃音、そして砲撃音がそこその音量で模型から鳴り響く。

「最後にあらかじめ周囲を包囲していたプラウダ学園とポンプル学院の戦車部隊が即座に中心部に向けて侵攻。南のコットブス、西のポツダム、北西のノイルピーン、北のノイランデンブルク、北東のエーバースヴァルデの5地区からそれぞれ攻撃を開始します」

プラウダの進軍ルートと思われる5本の線が光の筋として模型の上に現れる。全てが黒森峰の中心部の建物へと伸びている。

「黒森峰女学園も学生大隊の者を繰り出して抵抗するも、戦車隊の精鋭はその場になかった上に爆撃で装備を失い、さらに隊員の数が揃いきりませんでした。プラウダ学園らはこれを制圧し、実質的な降伏へと追い込むこととなります」

しかし実際は爆撃により市街地へと降りてきた黒森峰戦車隊をBliss、III号突撃砲を失いながらも撃制した西住みほさんが、走行不能となったIV号中戦車を放棄して市街地へと急行。黒森峰女子園の校舎に単身突入し、これを制圧します」

中心部の校舎らしき模型の一角からすると水色の旗が開く。

「この結果戦車道連盟はこれを黒森峰女子園の戦闘体制の崩壊と判断。大洗女子学園の勝利へと至ったのです」

被害も少なくなかった。航空機を投入して爆撃、そしてそもそもスクランブルを誘ってさらに足止めさせるのだ。死者も出たし機体も多く失った。

「大洗女子学園の優勝が決まる前にサンダース大学の地上部隊も上陸。プラウダ学園ら
の地上部隊と共にこの地に残り続け、宣戦を通達。無論黒森峰に抵抗する力はなく、宣
戦を通達された12時間後には宇土講和協定の締結が進められました。」

これによりサンダース大学とプラウダ学園の2校により黒森峰学園都市を分割し、そ
れぞれの主義に近い学校としてテンペルホーフ大学とヴァント学院を設立することに
なったのです」

「相当早く事態が動いたのですね」

「等良学園長もおらず中心部にプラウダの兵がいた状況ですからね。抵抗をしようと言
う動きはなかったようです」

「しかし……これだけのプラウダ学園の部隊が展開していたのに、なぜ黒森峰女学園は対応できなかったのでしょうか？かなり軍事力はあつたと伺っていますが」

「それにもこの戦いが戦車道大会の一部であつたことが関係しています。高校生の戦車道大会ですので、戦闘員として認められるのも高校生に限られます。しかし黒森峰も部隊の配置そのものは把握してましたし、それに対して簡易的な塹壕線を構築するなど対策は進めました。プラウダ学園は宣戦をしてくるであろうと判断し、卒業生らを含む青年大隊も含めた配置を進めていました。」

そしてサンダースと爆撃とプラウダの砲撃といった混乱の上、戦闘に入るには青年大隊に配備していた武装を学生大隊にも配り直さざるを得ず、しかも学生大隊だけでは人員が足りませんでした。

結果としてまともな防衛体制を構築できぬまま、黒森峰は蹂躪されたのです」

「上手く隙をついた、というわけですか」

「隙そのものを作り出した、とも言えますが。西住さんの活躍あつての勝利であり、大洗女子学園が黒森峰からの勝利を収める立役者だったので」

「武部さん、本日はご説明ありがとうございます」

「こちらこそ、ご来場感謝します」

「互いに一礼して竹山はその場を離れ、広い通りへと足を踏み出していく。

「このように黒森峰の戦いではたった1日、12月11日のただその日のみで勝者である大洗女子学園、サンダース大学、プラウダ学園と敗者の黒森峰女子園とに学園都市の明暗が分かれることになったのです。その明暗は学園都市を、そして日本をどのように導いていったのでしょうか。『波紋の章』で見えてまいります」

第7章 ⑥ 勝負の先

画面は再びナオミと竹山のいるスタジオに戻ってくる。

「増谷さんはこの黒森峰崩壊の戦いをご覧になったそうですね？」

「はい。決勝戦に航空部が参加するのを上陸した緑川河口から隊長と見てまして、その時言っていたんです。『棄権はプラウダと当たるのを避けるためだった』と」

「隊長、というのは間笠圭さんでよろしいですか？」

「すみません、説明不足でした。そうです。間笠隊長がそう言っていたんです。その後の2大派閥体制ができ、その盟主がお互いに直接攻撃出来ないプラウダとサンダースであれば、対立はすれども大きな争いにはならないだろう、と上層部は見ていたのです」

しかし嘘もいいところ、というのが現実だった。

「なるほど、そういうえば近年サンダースが公開した資料に、黒森峰統治に関する協定があったと聞きましたか」

「こちらの小寺・松岡協定ですね」

そう言ってナオミは机に資料を出し、その中からパネルを選んでカメラ側へと立たた。

「これは大会が始まって3日後にサンダース大学学園都市の小寺春校外交流担当官とプラウダ学園地域の松岡洋外務局局長との間で結ばれた秘密協定です」

「これもサンダース大学の情報公開の中で出てきたものですか？」

「そうなります。内容としましては、

・ 黒森峰を決勝にて崩壊させるためサンダースは空から、プラウダは陸から攻撃すること

・ 黒森峰崩壊後の分割線、通称小寺・松岡線の策定

・ 硬式戦車道の廃止

・ 戦車道連盟の拒否権を縮小

・ 戦車道大会の拡大を共に目指す

などです。

これによりサンダース側は硬式廃止という実績。それに伴う学園長選挙前の支持率上昇と軍備拡張への支持を取り付けることに成功。

プラウダ側は今後の2強対立の相手のサンダース大学の喉元に衛星校を作るとも

に、硬式廃止に伴う戦車道予算の縮小により浮いた分を地域発展、同盟校支援に回せるようになります。

また共に余分な戦車をこれまで戦車道大会に参加していなかった多くの学園都市、特に同盟校に輸出しました。これは日本民主党の政権復帰後の景気回復の後押しも受け、後の参加校の増加に繋がります」

「確かに現在の戦車道では車輛が使えなくなるのは稀ですからね。ところで硬式戦車道について、捕虜の虐殺などの記録も残されているそうですが」

「はい、近年再統合された黒森峰女学園が過去の等良独裁政権時の情報公開を進めていますが、その中に硬式大会における捕虜の虐殺を行ったアインザッツグルッペン、通称特別行動部隊の記録があります。その中には毒ガス、銃殺、強制労働と言った記録が多くあります。プラウダ学園地域は情報は公開していませんが、こちらも捕虜の虐殺を行っていた、という証言が多数あります」

「なんと酷い……なぜこのような事が起こってしまったのでしょうか？」

「原因はバブル経済崩壊後、日本戦車道連盟があるルールを追加した事によるものです。『死傷者は事故扱いとする。それに対する戦車道連盟からの保障は行わない』

これはもともと財政難に陥っていた戦車道連盟が被害の出た建物への補償に資金を回すために決められたものであり、各校に個別で補償する様に指示されました。

しかし硬式戦車道参加校にこれを無視するものがおり、さらに以前は死傷者をだした相手校への補償を義務づけていた事を湾岸ジュリアナ高校が改定した事がこの様な悲劇の原因と言われています。

特に黒森峰女学園で残虐な行為が行われたのは当時の日本政府、立憲国民党政権が絡んでいたと言われています」

「と仰いますと?」

「政権交代以前からプラウダ学園都市と日本政府は、車力分屯地の扱いや三厩村編入問題などを巡り、対立関係にありました。それは政権交代後も変わらず、立憲国民党政権はさらなるプラウダへの圧力強化を公約とし、推し進めていきます。

日本政府がなんとかしてプラウダを苦しめ、日本民主党の支持基盤の学園都市の力を縮小する為に、黒森峰女学園に財政援助をしてプラウダを攻撃させ、さらに対立激化により両有力学園都市を存続させつつ力を削ぐのが目的だったようです」

国が自国民を殺させる。実に醜い。そして学園都市も戦争をする時点で変わらないのかも知れない。

「しかし黒森峰の戦いでは国際学園都市自治条約にて学園都市間の争いに国は直接介入できないと定められている為にただ見過ごすしかなかったのです」

「なるほど。やはりその条約が国と学園都市の存続に大きな影響を与えていたようです

ね。増谷さんは今後の高校生戦車道はどのように推移するかと考えていらつしやいますか？」

「その後の時代にも関わらず、戦車道は安定して活動を続けています。国際学園都市自治条約離脱後学園都市の権限は縮小されていますが、それでもスポーツには影響してこないことを望みます」

「ありがとうございます。それと本日触れた西住さんに関してですが、増谷さんは西住さんと戦ったことがございますよね？」

「はい、大会の1回戦で当たったのが大洗女子学園でした。私達は相手を1輦撃破しましたが、盗聴を逆手に取られ副隊長車を含む3輦が撃破されました。同級生の副隊長も殺され、正直彼女に恨みが無いとは言いません」

私もあの時、彼女たちを、アリサたちを喪った。確かに暴走する時もあったけど、データをまとめて活かすのが早かったりと頼りになる仲間だった。でもそんなアリサも……本当にあつさりとして死んでしまっていた。

あの時の責は私がいづらか背負い、背負い切れていない分はミホに押し付けているのだろう。

「しかし西住さんはあの地獄を仲間を失いながらも生き抜いた上で、現在の戦車道の安全性の発展と思想構築に寄与なさいました。その事は絶対に忘れてはならないと思ひ

ます」

「なるほど」

ナオミと相対していた竹山が、再びカメラの方に視線を向けた。

「それでは皆さん、本日の『波紋』、すなわち勝った大洗女子学園などと、負けた黒森峰女子園。その二つに分かれた道がどのような影響をこの先与えていったのでしょうか。それを見てまいりたいと思います」

波紋の章「勝負の先」

「大洗女子学園の勝利、それは当時行われていた衆議院総選挙を見る上でも欠かせない材料となりました。戦力は圧倒的に劣勢だったにもかかわらず、名の知られた戦車道の名門を打倒して優勝。それは悲劇の挑戦者、大洗女子学園の名を全国に駆け巡らせま

す。そして同時に日本民主党は大洗女子学園が学園艦全廃計画に含まれており、戦車道での優勝がその引き換えとなっていたと暴露。もともと日本民主党優勢だった選挙は一気に圧倒的優勢へと傾きます。

立憲国民党も全廃計画の破棄を公約に掲げて応戦しようとしたましたが、その結果逆に

元々の支持層の反感を買ってしまいます。

結果は日本民主党の圧勝。再度の政権交代で与党の座を取り戻します。これは各地の学園都市を安堵させる結果でした。日本民主党は学園都市に与えられていた財政優遇を復活させるなど、学園都市の自治を支持する方針に回帰します」

当時の首相にしてある程度の長期政権を担った男、当時はニュースでよく見た顔が、淡々と演説する映像の中に移されている。

「しかし再建を約束された大洗女子学園の道はそうならかではありませんでした。再建の上で問題とされたのは3点。

まず大洗女子学園が廃校になるとの前提で話が進んでいたこと。廃校に関する学園艦解体や住民を移す計画がすでに立てられて進められており、それを完全破棄するのは相当の時間と費用がかかります。おまけに学園艦そのものの老朽化は最早逃れようがなく、学園都市を地上に移設することは避けられませんでした。

次いで大洗女子学園の都市規模がさほど大きくなく、大洗町そのものと合わせても5万人に満たない状況でした。これは大金を投じてまで完全再建すべきか政府や地元関係者を悩ませます。

最後は大洗町に隣接する学園都市、ひたちなか学園都市が存在したこと。国はこれまで隣接していた学園都市同士での争いが多かったことから、学園都市同士を隣接させな

い方針を採っていました」

確かにウチが平戸とぶつかったのも、隣接しようと合併した時の問題が原因のはず。それを避けようとするならそれが一番早いのか。

「しかし大洗町を除き受け入れを希望する都市はなく、大洗町に移設せざるを得ない、との結論に至ります。

結果学園都市民の移設費一部徴収とひたちなか学園法人に所属することと引き換えに、現在の地に移設されることとなったのです。市場としての一体化を望む声もこれを後押ししました。

ひたちなか学園としても好き好んでこの結果を受け入れたわけではありません。もともと住民、学生は周辺の公立学園都市に分散して移住させる予定だった事もあり、ひたちなか学園都市もその移住先の一つとしてそれに合わせた拡張を行っていました。その計画を完全に潰された上に新たに学園都市を受け入れよ、との方針には反発が巻き起こります。

ひたちなか学園都市はそれを押さえ込んで国との交渉を進め、茨城港大洗港区の運営権の移譲、大洗女子学園への指導権と引き換えに同校を法人下部として組み込むことを認めました。

そして3年後の2015年4月、都市建設の加速化が望まれる中で大洗女子学園は共

学化され大洗学園として大洗町神山町周辺を中心に設立されました。この共学化は共学であつたひたちなか学園と一体的に運営しやすくなるためだったとされています。

一方で大洗女子学園改め大洗学園は混乱の渦に吞まれていきまます。戦車道で名を挙げはしたものの、全戦車を撃破または破損された状態で再興できるはずもなく、結果的にその力を借り続けることはできませんでした。

また学園都市移設後、その運営権を巡つて大洗町、ひたちなか学園法人との間での意見の相違が顕在化。その調整の末、大洗学園の自治権は学園艦時代よりも大幅に縮小されます。財政、学園の方針にも決定時には町と学園法人の同意が必要とし、さらに軍備の非保持が定められます。

しかし一方で学園都市は学生の尊い命を捧げたことによつて護られたとの思想から、学生の間で一体感が生まれます。この大洗学生ナシヨナリズムと呼ばれる動きは加速し、一部ではひたちなか学園からの独立、学園艦時代以上の自治権確保を主張する過激派、血盟戦線が登場。学園生徒議会与党も学園の軍備保持、自治拡張などを主張する大洗学園フォーラムが移設以降握り続けます。

指導による影響力強化を狙うひたちなか学園都市側と、それを出来るだけ排除しようとする大洗学園側との対立は、日に日に深まっていくこととなります」

こういう時一番辛いのは市民の意向を受け、一方で意見の異なる相手と相対せざるを

得ない政府なのだろう。私もかつてそのような立場だった。

「また日本の学園都市も黒森峰女学園を倒したことで安寧を得られたわけではありませんでした。」

サンダース大学は親黒森峰寄りだった九州の学園都市を以前と同様の保証を行うことで取り込み、他の同盟校であるBC自由学園、シオン学園、タンジマート学園らを含め佐世保協定機構を設立。

。プラウダ学園も震災支援を行った東北太平洋沿岸諸校を取り込み、マジヤール学園、伯爵学園、黒部学園らとともに五所川原協定機構を設立。

さらに聖グロリアーナ女学院がオレンジヴァール学園、コアラの森学園、そして知波単学園らを取り込んで山手協定機構を設立。これらは2013年春までに設立され、これら機構3派による争いが激しさを増すかと思われました。

しかしここで国が仲裁し、学園都市による統括機構の設立を提言。公立学園都市を含め、機構3派を取り込んだ日本学園都市連盟が2013年冬に生まれました。ここでは機構3派の存在を相互に承認し、機構内部での軍事的動乱は機構が、それ以外の場合は独立保証委員会の決議のもと鎮圧することが定められます」

この機構3派による鎮圧を認めたことが、この先の動乱を続けさせる要因なのだ。

「これによって学園都市にも平穏が取り戻されることが予想されましたが、それは1年

もせずうちに夢物語と化してしまします。

黒森峰女学園崩壊後も校粹主義を主張し独裁政権を樹立した栃木県のアンツイオ学園都市で内戦が勃発したのです。独裁化の中で追放された民主主義派と親プラウダ派はそれぞれアンツイオ解放学園と赤服学園の樹立を宣言。サンダース大学とプラウダ学園はそれをそれぞれ承認し、機構に組み込みます。

このようにすることで、サンダース大学とプラウダ学園は機構内部での軍事的動乱鎮圧を名目に各校に支援を表明。アンツイオ内戦は有力校の代理戦争の様相を提示し始めます。

アンツイオ解放学園崩壊後、聖グロリアーナ女学院がアンツイオ学園に援助を与えたことでアンツイオ学園優勢に傾き勝利しますが、その後親プラウダ学園で設立された旧黒森峰女学園の東半分ヴァント学院での内戦や、静岡県 of 白藤江内戦なども経て、プラウダ学園とサンダース大学、聖グロリアーナ女学院の間の対立は深まっています」
そして私もこの『支援』の一環に加わっていたことがある。実に人を狂わせるのに都合のいい場所だったし、仲間が何人も帰らぬ人となった。

「この大きな渦に大洗学園も飲み込まれていきます。2018年冬、ひたちなか学園法人のトップであった拓田団吉が血盟戦線の者に暗殺される血盟戦線事件が勃発。大洗学園は風紀委員会を動員し血盟戦線を鎮圧させ沈静化を図りますが、ひたちなか学園都

市との溝は一層深まります。

そしてその後も財政などにおいて対抗的姿勢を取り続けた大洗学園に対し、ひたちなか学園法人は2020年秋、大洗学園の完全分校化を宣言。治安部隊を校舎を接収するため向かわせませず。

これに対し大洗学園は秘密裏に簡易的な軍事訓練を施していた運動部と風紀委員を動員し、引き渡しを拒否。学園法人からの離脱を表明し、大洗事件が勃発しました」
画面には女が一人。これは動画サイトに投稿された映像のようだが、編集を加えたのか多言語の字幕がついている。

「これは学園校舎とマリントワーの攻略に手こずったひたちなか学園に対し、聖グロリアーナ女学院が直接介入を示唆。艦隊を阿字ヶ浦沖に派遣します。一方でひたちなか学園はプラウダ学園に支援を要請。再び代理戦争の様相を見せます。

結果公立学園都市であることを理由として国が仲裁し、2021年春、大洗学園の独立運営権の承認の一方でひたちなか学園への港湾周辺の割譲を取り決めた水戸協定を以って終戦となります。ひたちなか学園はその後五所川原協定機構に加盟し、それを背景に圧力をかけ続けます。

しかし大洗学園も山手協定機構に加盟。この後対ひたちなかを名目に軍備拡張を進め、町の運営権も獲得。一時期総兵員数は二千人を超えるなど、その経済力に見合わな

い軍備を保有するに至ります」

無論その軍事予算はグロリアーナから出る。そうなれば彼女らが望んだ独立は独立ではなくなっただろう。

「相次ぐ内戦への介入とその長期化により、有力校は疲弊の一途を辿ります。2024年のオレンジヴァール学園が山手協定機構から離脱を皮切りに、各校の機構からの離脱が加速。各機構はかつてほどの影響力を保てなくなります。」

2032年、実に20年ぶりの政権交代を達成した自由協同党は、公約として掲げた通り世界学園都市自治協定からの離脱を宣言。各国も日本国内の治安の改善を求め、これを了承します。

国の介入により日本学園都市連盟はその権限を拡大。各校の軍備の保持こそ認められたものの制限し、また一定の自治を認めつつも国が財政に介入できる権限を各校に認めさせます。これによりもはやかつての自治権は望めなくなりました」

逆に各校もウンザリしてたらしいが、本当のところを知ることができるほどまで私は賢くなかった。

「この長い混乱は日本を10年以上遅らせたとする一方で、各校が少子化による将来の生徒不足を懸念し積極的な支援策を打ち出したことが、日本の少子化のある程度の歯止めとなった、との主張もあります。」

いずれにせよ、この騒乱により多くの若者の命が失われた。そこにどのような意味を見出すかはいざ知らず、その結果だけは変わりません」

「増谷さん」

時計を見ると、このプログラムも終わりが近づいて来たらしい。

「このように纏めました、増谷さんはこのような学園都市の争いが何をもたらしたと考えていらつしやいますか？」

「学園都市を弱らせ、結果としては政権交代後の国の介入時の抵抗を弱めた、と学者の観点からは考察します」

「それは他の観点もあると？」

「多くの若者が死んだ。その頭脳、いえその存在そのものが未来への大きな財産だったはず。日本の歴史の汚点、決して忘れてはならず、反省すべき出来事であると、私は断言したいです」

「なるほど、そこまで仰いますか……浅学の身である私としましては、この命に対し精一杯哀悼の意を表すのが精一杯でございます。増谷先生、本日はご説明、本当にありがとうございました」

「ありがとうございました」

ナオミは顔を伏せたまま画面の右端へと消える。

「そして、私なんかよりも遥かに深く、苦しい想いでその命たちに祈りを捧げてきた方がいらつしやいます。番組でもご紹介致しました、西住みほさんです。

本日の『大樹の雫』、ラストはサンダース大学出身で西住さんのご友人である井上さんが撮影したものや、西住さんとお会いした際の映像とともにお別れしたいと思います。本日はどうも、ありがとうございました」

……

サンダースの者が何人か取材されている。顔ははつきりとは映されていない。

「西住教官ですか？いつもニコニコして穏やかな先生でしたね。『戦車道は安全で楽しく』が口癖でした」

……

「ええ、定年までずっと独身で過ごされました。その後は分かりませんが、あの方ですからきつと独身のままかと。

戦車道の安全性や学園都市間の戦争との別離について熱心に取り組んでおられました。生徒達にも慕われていましたよ。

ただ公私問わず祝賀行事には一切ご参加されませんでした。同僚や教え子の結婚式

などにもね。最早誘わないのが暗黙のルールとなっていました」

……

熊本大病院と書かれた入り口をカメラは超えてゆく。

「こちらです」

後ろ姿のミホは看護師に案内される。305号室の入り口のネームプレートに書かれていたのは『西住しほ』だ。私も知っている彼女の母の名。

部屋に入ると看護師は外に出て行った。

「お母さん」

ミホはベットのそばの椅子に腰掛ける。ベットの上の存在は目を見開いたが、それ以上は何もしない。

「末期ガンと聞いて最期に一度お目にかかりに来ました。50代での死、私は決して早いとは思いません。お母さんはやるべきことをやらなかったのです」

ベットの上で横になっている西住しほに雑誌や新聞にあつた年齢不相応だった若々しい様子はもう見えない。ほおは痩せこけ人口呼吸器をつけられた、物の側に足を大きく踏み込んだ人がそこにはいた。

「あなたは……今何をしているの……」

「私ですか？あれからサンダースに顧問兼生徒として招かれ、サンダース高校を卒業後

は顧問として生徒達に軟式戦車道を教えています」

「そう……」

「あの大会の翌年1月には硬式廃止が決定され、黒森峰がなくなり西住流への各種補助金も打ち切られ、お母さんが大変苦労されたことは聞いています。でも、それは当然の報いだと思います。硬式はお母さんの代で癒着と権益を断ち切り、終わらせるべきだったのです」

ミホはおもむろに椅子から立ち上がる。

「なぜ何もしなかつたんです！なぜ私にやらせたんです！そうすればお姉ちゃんも仲間のみんなも死なずに済んだんです！そして……貴女ならそれが出来たはず！」

椅子を倒してベットの上のしほの上に覆うように乗って襟首を引つ掴む。息を荒らげ、叫び続ける。

「家元として……西住流を……守らなければいけなかつたのよ」

ミホは襟首から手を離し、ベットから降りてそばに直立してウンザリした目で見下ろした。

「車輛規格の統一が進む今、戦車の質にこだわった西住流は完全に時代遅れです。今も、昔も」

しほに背を向けた。

「頼みを聞いてここの入院費は払っておきますがもう来ません。お葬式も御墓参りもやりません。さようなら、お母さん」

部屋から出て行つた。カメラはそこで切られている。

……

あるコンビニ。良くあつた店の名前だ。

カメラは店員の『鈴木』のネームプレートからズームアウトする。

「165円が1点、99円が1点」

初老の脱サラした感じの店員がパンのバーコードを読み取り機で読み取っていた。

「キタノさん」

その言葉を聞いた店員は目線をそらす。客は、ミホだ。

「なぜ鈴木なんて名前を変えて働いているんですか？」

返事はない。雑誌を立ち読みしている客の1人が視線を向けた以外は反応はない。だがその客も我関せずというように視線を雑誌に戻す。

「私です。黒森峰武装SS装甲師団の西住です。覚えてますよね、収容所の視察でお会いしたこと」

横の温かい飲み物売り場と裏腹に2人の間に冷徹な雰囲気の流れる。店員はミホの

耳元に口を近づける。

「……撮るのはやめてくれ。人には色々事情があるんだ」

「事情ですか？ええあるでしょうとも。ではあの大会をBR法に変更したことにはどんな事情があつたんですか！」

背筋を立て男の目を見て言いかける。男は目線を再びそらし、金髪の若い店員を呼ぶ。

「悪い、代わってくれ」

「あ、はい……」

金髪は北野の手でレジを待っていたおにぎりを受け取って、すぐに合計金額を百数十円上げる。

「待ってください。この写真あなたですよ、キタノさん！」

男は無言でサングラスをかける。

「どうしてサングラスを掛けるんですか？説明してください。どうしてルールは変更されたんですか！」

そのまま男は店の裏に、どんな声にも反応することなく下がっていく様子をカメラは追っていた。

「キタノさん！キタノさん！あの収容所の臭いを覚えていますか！私は今でもハッキリ

覚えていますよ！」

そのまま男は奥から出てくることなく、映像は打ち切られた。

……

カメラはズームアウトしつつ、竹山は両腕を肩幅に広げ深く頭を下げた。

「西住みほさんは77歳になった今でも亡くなつた仲間達への祈りを毎朝欠かしたことはありません」

庭の飛び石の上でミホは遠くを向いた後深く、深く礼をした。

……

部屋に上がった竹山の前に、ミホが一冊の本を持ってきて、その数ページ目を開いた。「こちらがその大会記録ですか」

「はい、そしてここには全員の死んだ日付と理由が書かれています。死因不明の方が多いですがね」

シワの多い彼女の指は最初の磯辺典子から最後の冷泉麻子までをそつとなぞつていく。

……

「突如として硬式ルールに変更された時、思われたことはございますか？」

「ルールを聞いた時、そしてトーナメントを見て思ったんですよ。ああこりやもうダメだ。このチームは助からんと。どう計算しても……無理だったんです。」

どうせ助からんのなら、犬死するより勝利の役に立って死ぬ方がみんなも本望じゃないか、浮かばれるんじゃないか、と」

「どうせ死ぬなら……と」

「傲慢ですわな、後から思ってみれば。でもその時はそれが一番良いと思ったんですよ」

「お祝い事の招待を全て欠席されてきたと伺いましたが、何故でしょうか？」

「そんなね、チームのみんなを16や17で死なせておいて、自分だけ遊びに行ったりめでたい場で楽しんだり出来ませんよ」

ミホの顔は竹山ではなく外の庭の方を向いている。

「結婚なさらなかつたのも……」

「それもあります、私の中にある爆弾を背負い込むことになる相手が不憫だと思いません」

……

礼をする姿を前方ななめ右から捉えた画像とともにテロップが流れる。

『西住さんはこの取材の3ヶ月後にご逝去なさいました』

……

「ねえ……これで良かったの？ミホ」

第7章 ⑦ 不死の霞

なんだか、あたたかい。

まわりが、しろい。

そしてうえは、あおい。

ここは、どこ。

ここは、くものうえ。

まえを、みる。

なにかが、くる。

くもの、なみ。

わたしは、なにもできない。

ただ、それにのまれた。

つよい、かぜ。

さびたからだを、はんみにする。

めをひらいても、ただまっしろ。

わたしは、すこしめをとじた。

まわりが、はれる。

けしきは、かわらない。

だけど、なにかがちがう。

なんだ、それは。

うえは、あおいまま。

いたみが、ない。

からだか、かるい。

そのまま、したをむく。

てのしわが、ない。

そので、あちこちふれる。

ほおも、すべすべだ。

わかく、なつてしまったのか。

だとしたら、ここは。

ふくが、しろい。

えりが、ひろい。

むなもとの、すかーふ。

これは、おおあらいのせいふく。

なぜ、わたしがこれをきいているの。

なぞは、おおい。

だけど、ひとはいない。

こたえも、ない。

どこへ、いけばいい。

なにを、すればいい。

あてもなく、さまようだけ。

もし、もしだが。

わたしが、しんでいないなら。

はやく、いかなければ。

はやく、もどならければ。

おや。

むこうに、だれがいる。

ひとりか、ふたりじゃない。

もつと、おおい。

まるで、かべのよう。

あれは、みんなだ。

かおはみえないけど、わかる。

ということは、そう。

とうとう、きてしまった。

ここに、きてしまった。

きてしまった。

駄目だ。

まだ、みんなに会ってはいけない。

決して、会うことは許されない。

私の罪は、あの人生で償えたはずがないから。

走り始めた。みんなに背を向けて。

ここにはいてはいけない。

決して逃げ切れるものではないとはわかっている。私は死んだのだ。そして死者は生き返ることはできない。それは私が誰よりも知っている。そうなれば……いつかは会わねばならない。

だが私は心が指し示すまま、逃げ出した。

「あ、逃げた！」

向こうも気づいている。指揮をとるのはやはり会長さんか。

「バレー部！躊躇いなくやつちやつて！」

「はいッ！近藤、いくぞ！」

「はい！」

会長さんの指示を受けた磯辺さんから打たれたスパイクを、近藤さんは見事にアカツトする。動くのはわずかに一步。

「河西、スコープオンいくぞっ！よっ」

「せいっ！」

ジャストミートで放たれたボールは背中に命中する。しかも背骨のど真ん中。歳をとっていたせいもあったか、勢いのまま前に倒れこんだ。

「1年生、ひっ捕らえろ！」

大野さんを先頭に阪口さん、澤さん、宇津木さん、山郷さん、そして最後に丸山さんが連なって私の元へと迫ってくる。長い老人生活は私から身体の動きの坎を失わせていたらしく、立ち上がって走り出す前に囚われの身となってしまうた。

6人のうち、大野さん、澤さん、阪口さんを中心に肘を引いて、背中を押ししてみんなのところ连接到いった。皆の顔が見えてくる、霧の向こうからはつきりと、大きく、大きく……一人一人くつきりと……

顔は……手で塞いだ。

「すみません……皆さんに合わせる顔がなくて。ごめんなさいどうか私を許してください……」

こうなつて溢れ出すのは、謝罪の言葉の山。私はなにもできなかつた。あの戦車道の試合で勝つて学園を残す。それだけだつた。いやそれすらまともな結果とは思えない。

その後学園はどうなつた！私がサンダースに行つてからの教え子も！みんなの血から新たな血を流れることを止められず、おまけに私が育てた生徒は挨拶に来てから戦地へと送られていったではないか！彼らを止めることすらもできなかつたのだ！

結局私にできたのはサンダースの新たな手駒を言われるままに増やすことと、単に足りない頭をこねくり回すこと。そして足りない頭からは決して有益なものは生まれな

い。
そんなちつぽけな、何の意味もない人生のために、皆の人生は何十年と短くなつた。そんなことが許されるはずがない。

「何を言つてんだい？西住ちゃんをよくやってくれたじゃないか」

その会長さんからの声に目元の手をどかす。

「だつて……だつて！みんなせつかく生まれたのにたつた十数年しか生きられなくて……私の、私のせいで……私が馬鹿だから、私が勝つてみんなを生き残らせることができなかつて知つてたのに指揮をとつちやつたからこんなことに……」

「でも、大洗の勝利が硬式が終わる一因になったのは間違いないのでしょうか？」
真つ先に答えたのは柔かな顔の華さんだ。

「西住さんがその後、戦車道の安全性向上とその普及に努力してくれたことで、私達の死が少しは意味のあるものになったことを、むしろ感謝しますよ」

「そうだ、危険だという覚悟くらい私らだつて出来てたぞ。何でも自分が分かつてて背負つてるなんて思うなよ！

というか私が一番分かつてて然るべきだろ、隊長は私だつたんだから！」

「はいはい桃ちゃん、せっかく西住さん来たからつて無理しなくていいからね」
「む、無理なんてしてないっ！っーか桃ちゃんゆるーな！」

生徒会の会長さん以外のおふたりが続く。そう、現実揉まれて薄れていた夢。それが少しずつ形を取り戻す。

「そうそう。別にみぼりんだけが戦つてたわけじゃないんだから。」

ただね、みぼりにひとつ言っておきたいのは、せっかく生きてたんなら、遊びも恋愛も私達の分まで思いつきり楽しんで欲しかったわ。誰もみぼりんがこんなに苦労することなんて望んでなかったんだからね」

沙織さんが眼鏡の縁をくいっと押し上げた。

「自分は……。西住殿がやることは何でも賛成ですので、今はお疲れ様と言いたいだけ

であります」

「優花里さん……」

「しっかし残してもらった学園もあんな風になっちまうとは……本当に厄介ごとばっか残しちゃったもんだね、私も。んで、西住ちゃんも付け狙われるような立場にさせちまったし、逆に謝りたいのは私の方き。全くなんであの学園からナシヨナリズムなんて起こるんだか……」

「だ、だから……あの後も生き残れる人がいたら……」

「あーもうやめやめ！ 湿っぽいのは周りの雲の海だけで十分！ ま、短い人生だったけど、クソツタレな殺し合いを一つ終わらせたんならこんなもんじゃん？」

「そうですね」

「やつと来たか……」

会長さんに応じる形で小山さんが言い終わる頃、その奥から麻子さんが少し人を掻き分けて出てきた。

「どうやら、顔向け出来なかつたようだな」

返す言葉もない。

「人間、何かをやり遂げないと死なない。だから私たちは決して死んでなかつた。そんな悲しげな顔はやめてくれ。」

「私らは西住さんの心の中で生き続け、西住さんは『安全な戦車道を創り上げる』という願いを叶えてくれたんだ。感謝しない奴はおろか、恨む奴なんてここにはいない」

「……麻子さん……」

「だから、私からも礼を言おう。本当にありがとう」

「み……みんな……」

再び顔を覆う。しかしその手あつた後ろめたい気持ちは、完全ではないが溶け始めている。膝について溢れ出る涙を拭う。

別に嫌いというわけではないが、きつと麻子さんの言葉を使って自分を締め上げてきたのだろう。その麻子さんからの許し。膝の力が抜ける。

「会長。そういうえば大洗が優勝したのに、まだアレ、やってませんよね」

「そうね、こういうのは全員じゃないと意味ないんだから。60年経ってやつと揃ったわ、もうちよつと時間経つてからでも良かったけど」

「その時間のコントロールの仕方なんて知らないんだけどね」

エルヴィンさんの呼びかけにそぞ子さんも続き、お銀さんがパイプを加えてそれを皮肉る。それを聞いて会長が音頭をとる。

「そうだね。よし、それじゃあいくぞー。戦車道大会はウチらの優勝ーッ！せーの」

「えい！」

「えい！」

「おーっ!!?」

もう、前進は必要ない。その場に37人の突き上げられた右手と共に、満足の歓喜が響き渡った。

死なくても良かった少女達は、もう悲哀の涙を流さない。霞と共に消えてゆく。

特別章

特別章

① 大洗前日譚

二十三時、このような時間に生徒が学校に残るのは、通常なら許されないことだ。この学生の殆どが寮生活であることを加味しても。だがここ、大洗学園高等学校の一部の部屋にはいまだに明かりが灯っている。おそらく職員室、警備員室、生徒会室、そして生徒会長室ぐらいなものだろう。その一つであるのが確実な生徒会長室に一人、ドアを開け放つて駆け込んでくる者がいた。

「すみません、遅れました」

「神埼遅い！ 今日の場合のことを理解しているんだろうな！」

「霞！ それは私の役職が何かを知つての発言でしょうか！ こちとら教員陣に最早説教レベルの説得をされてきたんですよ！ 文句ならそれを心臓が捻じ曲がる思いで体験してから言つてください！」

部屋に入つて早々、扉の近くの者と口論し始めた。全くこんな時に。

「まあまあ落ち着きな。そんなにカツカしてちゃ話し合いになりやしないヨ。取り敢えずカツちゃんはそこに頼むワ」

「……ふん」

何とか書記の酒見のとりなしで収まりはしたが、椅子に座る音も大きい。ギシギシと音を立てるのみならず、部屋をも揺らすかと思われた。

「定時から六分過ぎているけれど、さっきの事情なら仕方ないわね。これで全員揃ったかしら」

一番奥の正面にホワイトボードを背に座す生徒会長籠田が、指と小声で人数を確かめていく。それを二回り終わらすと、不意にこちらへ視線を向けた。

「盗聴とかの可能性は？ 佐渡川」

だが相手は私ではなく、隣の奴だったようだ。まあ私に振られてもどうもできない質問なのだが。

「専用機械で調査いたしました。その危険はありません。またここにいる者のもつ電子機器はすでにこちらで預かっております。そしてこの部屋周辺は当直の警備員の方と直属の風紀委員が警戒中です。彼らの身内など関係者の中にひたちなかと関係あるものはいません。ご安心を」

「そう。それでは諸君、これより大洗学園中学高等学校生徒会、および学園経営委員会各委員長による緊急会合を始めるわ」

籠田が、暗闇の中でなかなかにしれたい音を奏でる雲をその全体にくまなく移す窓

ガラスを背景に、低めの声で話を切り出した。

「挨拶は省略、本題に入るわ。議題は皆存じている通り、我が学園の母体であった学園都市運営法人、ひたちなか学園への対応よ。我が校はこちらへの相談や通告なしに自治権の剥奪を決定されたことに対し、法人からの離脱を宣言したわ。それに対するものと思われる連中の行動が今夜確認されたわ。佐渡川風紀委員長、報告を頼みます」

籠田は先ほど声をかけた男を指名する。短髪のスツキリした奴だ。正面に出てきてサツとホワイトボードに近隣一帯の地図を広げながら、指差しして説明を始めた。

「佐渡川だ。直近の情報によると、ひたちなかの治安部隊が中橋周辺に集結中。そのまま橋を渡って大洗町に入る見込みとのことだ」

「大洗に……町側は部隊の通行許可を出したようですね」

「実際にその報告も入っている。まあ町が断る理由はないからな。彼らがこのまま大洗を海岸沿いに南下すれば、我々学園の管轄地域に入る」

「そう。これが最近までなら何の問題もなかったでしょうけど、これまでの経緯を鑑みるに、ターゲットが我々大洗学園である、と捉えるのが自然でしょう」

「でしようなあ。向こうが我が校の分校化を強制執行しに来たと考えるべきでしょう」

「これについての対応を話し合いたいわ」

「佐渡川、数はいかほどで？」

「恐らく四個中隊、実働部隊のみでも千人は超える。補給など後方の者も含めれば、相当な数になる。さらに向こうの精鋭とされる第一中隊が確認されていることから、装備も向こうの最良のものかと思われるな」

「千人か……向こうの全軍ではないからまだましとはいえ多いな。最良となると機関銃くらいは用意しているかも知れん」

「会長、どう対応するかはともかく、学園校舎の安全を確保するのが先決です。まずはここにいる者以外の風紀委員を動員させてください」

佐渡川は椅子を回転させていた籠田の正面に進み出る。

「まだ部隊の行き先が不明よ。こつちから下手に先に動いたら、向こうに大義名分を与えてしまうわ」

「ならば風紀委員全員校舎に忘れ物があることにしておきます。実に壮大な忘れ物ですがね」

「そうしなさい。ついでに明日までの宿題にした方が話が簡単ね。構内深夜立ち入り証は発行させておくわ」

「では早速」

地図を残したまま、隣の生徒会室へと歩を進めていった。籠田は近くの会議に参加してない庶務の一人を呼び出し、最低百数十枚、刷れるだけの枚数の構内深夜立ち入り

証を二十分以内に発行するよう命じた。そして彼は無表情で隣の部屋へ去った。

「さて、どうしたものかしら」

「会長」

先ほど喧嘩していたうちの一人、神埼が話に割って入った。

「教職員連盟連絡員の神埼です。教職員連盟からの要望ですが、やはり学園の即時明け渡しと法人脱退の撤回しかない、とのこと。それを確実に履行するようこつぴどく言いつけられてきました。ま、前々から変わらないんですけどね」

「そうでしょうね。彼らはウチが大洗学園という独立した学校だろうと、ひたちなか学園の純然たる分校であろうと、教員としての職務を遂行できる事には変わりないし」

「会長、やはり戦うのは得策ではありませんよ。単純に考えて人口は三倍、経済力、推定GDPは名目、実質どちらにおいても向こうの租借地含めれば五倍近く。さらに町が向こうにつくなら、こちらは内部の団結にも不安があることになります。勝てる要因がありません」

「何を言うんすか田邊！ この学園の何十年に渡る伝統を無に帰せというんすか！ お前はこの学園での文化祭、体育祭、その他の学校行事、日常での友人との会話、部活動、学園からの帰り道、その有意義な記憶の根源たるこの学園を無くしてしまえと！」

反駁したのは生徒会副会長の河田。生まれも育ちも大洗という生粋の大洗の民で、今

回もこれまで同様強硬姿勢の継続を主張しました。

「だからといってこの地を煤塵と化けさせるわけにもいかんだろう。しかも負けるのが確定の戦争で、だ」

「まだ負けると決まっているわけではないじゃないですか！ 貴様の地域運動発展委員の名は、それに背負われた役割は飾りなんすか！」

「その私だから言うんだよ！ 勝とうなど現実的ではない」

「田邊、やはり勝てないかしら」

「勝てませんよ、会長。そこらへんはウチの備品統括部長の刈谷の方からお伝えします」
その隣にいた襟付きの服を着たがっしりとした男が、肘でつつかれてから立ち上がった。

「えー、はい。備品統括の刈谷です。私の方から運動発展委員会の経緯の確認及び現状についてご説明いたします。学園都市を建設してからは五十年近く。されど学園艦からの移設の中で、我が校は復興迅速化の名目でひたちちなかの庇護下に入る事になりました。その際に我が校はひたちちなか、大洗町と結ばれた協定で、予算縮小のためとして武装部隊を実質禁止されました。

しかし当時の各担当者の尽力もあり、将来的な再軍備のための隠れ蓑としてこの委員会が設立され、その時を見据え準備をしてきました」

「……とはいうものの、現状では装備が圧倒的に不足してますし、向こうの職業軍人もいる部隊には敵いません」

田邊が割り込んできたのに続いて、生徒会会計の時谷が話に加わった。

「装備は何か予算誤魔化しながら調達したものですからねえ。そもそも十年で充足を目安に調達してましたし。私としては抗戦に賛成したいんですが、ライフルとその弾薬を考えると……」

「数が不足しています。弾薬の供給や故障時の代替を考慮すると、実戦配備可能なのは約三百五十丁。おまけにそれも連射の利かない単発式です。最大二千人をフル装備で動員可能とされるひたちなかには敵いません。」

それとご理解して頂かねばならないのは、我々に拠点の奪還は不可能だ、ということ。何せ大砲、ロケット砲などの火砲がありませんからね。迫撃砲すらともに運用できません。この類はいくら何でもごまかせなかつたもので。そうなれば万が一撃退できたとしても、向こうは易々と講和には乗ってこないでしょう」

「でも相手は千人くらいだそうじゃないか。籠城くらいなら何とか」

「無理ですな」

挟まった意見は冷徹に途中で切られた。

「援軍のアテもないのに籠城するアホが何処にいますか？ 逆に兵糧攻めされたら終わ

りですよ？ それに増派してこない保証がどこにあります？ ここがひたちなかからの距離があるわけでもない。向こうにとつて補給は容易です」

いいぞ田邊、その調子だ。お前が出来ないと言い続ける限り、総意がそう易々と首を縦に振ることはあるまい。専門にはそれだけの力がある。

「と、そうそう。外交的にはどうなってるかしら？ 正木」

指名された眼鏡の丸顔の男は、のそのそとデカイ図体を動かして立ち上がった。そのくせ人に会うからといい香水をつけているのだが、身体バランスと絶妙に合わない。

「広報主任の正木です。今回の件は他校からひたちなか学園法人の内部改革と捉えられている為か、こちら側につくことを表明している学園都市は現状いません。しかしひたちなかの強行姿勢に批判的な学園都市なら存在します」

「……聖グロリアーナか」

「ええ、ここ関東地方の最有力学園都市です。元々友好関係は築いていましたが、一步進めて彼らをこちら側に付けられないか、現在交渉を進めておることは前にお話した通りです。付けられれば、ひたちなかへの最大の抑止力となりましょう」

「つけられれば理想的だけど、展望は？」

「彼らの望みは自校系資本による権益と、ここら一带における影響力の安定化です。そしてそれを妨げているのはひたちなかでしょう。そこを保証すれば我らにも道があり

ます」

「ではそれは続行。でもそれは背景に過ぎないわ。本命はひたちなかとの交渉。そつちはどうなの？」

「……それが無事進んでいるのなら、こんな事態にはなっていないですよ。こちらは政治的独立以外、特に治安維持、財政においては譲歩に譲歩を重ねておりますが、その一点に向こうが拘りを見せております。去年の一件のせいで大いぶ心象も悪いようで、少なくともひたちなか学園法人かひたちなか学園生徒会の決定なしにこちらが政策を実施したりすること、これだけは認めないつもりですよです」

「やはり聖グロリアーナに対抗すべく、ウチを完全に取り込んで経済力と軍事的威信を付け、不安要素を取り除く算段かしら。そうなると国もあちらを支持するでしょうね」

「国は聖グロリアーナの独自姿勢を警戒してますから、消極的の支持ならすぐにもするかと。大洗には国の防衛隊も駐屯しておりますが、それが部隊の通行を邪魔したりはしないでしょうな」

よし、流れが降伏に傾いている。公立校にとって国が支持しないのは、反抗する大義が無くなるに等しい。学園のために私も加わるか。

「……やはり受け入れるしかないのでは？　（ここまで四面楚歌であるならば……）」

「何を言うんすか！　この学園の校舎がいざという時抵抗出来るように設計されている

のを知らないんすか！ 耐震基準を遥かに超える強度があり、廊下の壁の穴は一階広場への狭間として利用出来るっす！ 場合によっては地下施設で砲撃を避けることも出来るし、水も地下に貯水施設がある！ そんじよそこらの建物より立て籠もるには適してるっす！ 抵抗している間に聖グロを引き込めば……」

「そ、そうだ。少なくとも向こうに犠牲を与えて、再び交渉に持ち込むチャンスはあるはずだ！ 何よりひたちなかの法人からの離脱を宣言したらこうなるのは必定！ 今更何を怖気付くことがある！ そして向こうが交渉を打ち切ってくるなら、なおさらこちらの正当性は喧伝可能だ！」

「そうなればひたちなかとの全面戦争は避けられない！ 仮に撃退できたとしても破壊された校舎の、場合によっては都市そのものの復興にはどれだけの資金が必要になると思っている！ その資金はどうする！ 莫大な借金をする気か！ 仮にそれを聖グロ系の資本に頼る気なら、ここは今度は聖グロの傘下にされるぞ！ 逆にそれ以外の資本を使ったら、今度は聖グロが何をしてくるか……」

「だが一度学園が潰れてしまつては二度と立て直すことは出来ない！ これまで先輩方によつて繋がれてきた大洗の歴史を、伝統を守る為には戦うしかない！ 願いは無条件で叶わないんだ！」

「そもそも学園都市なんて戦後に誕生したに過ぎないもの！ おまけに最近女子高から

共学に変わっている！　こんなんでは伝統もなにもない！」

「伝統に時間は関係ない！　先達が命を費やしてでも繋いできたものがあるのなら、それが大洗の伝統だ！　そしてそれは確実にここにある！」

「学生を死なせるのが、学園都市を司る生徒会の取るべき道なのかいネ？　寧ろ学生の能力を将来に活かすのが本来の道ではないノ？　それに政治的独立は関与しているのかネ？」

よし、酒見もこちらよりに傾いた。生徒会の要職を取り込めたのは大きい。心の故郷のためにここを残すだど？　そんなものは国にでも預けておけばよい。

「それはそうだ。だからその道をこの先使う何万、何十万という生徒の為に、大洗学園を残すのが一番の役目だ！　このような立場にいるからこそ、何十年先を見通さねばならないのだ！　近視眼的な思考じゃやっていけないぞ！」

「そんな目に見えないもののために戦ってきたのがこれまでの学園都市間の歴史ではないですか！　学園都市の希望が血で叶えられる時代には必ずや終わりが来ます！　ここは我らが先駆けとなって降りるべきです！　それで名を遺す。十分じゃないですか！」

「そんな時代がいつになったら来ると言えるんすか！　少なくとも今はそんな時代じゃない！　そしてその争いに生き残るには、自分たちが先にその競争から降りるわけには

「いかなんすよ！」

「ふざけるな！ 實際に戦争になったら死ぬのは前線に赴く人たちなんだぞ！ この中に赴く人は、少なくとも生徒会の面子ではないのに、この総会で決定しようとする」とそのものがふざけている！」

「松澤文化祭実行委員長！ 生徒会外のクセにふざけたことを言うな！ 本来は生徒会だけで決定できるはずだが、学園の存亡に関わることだからと他の要職の話も聞いているんだぞ！」

「だからその上から目線がダメだと言っているんだ！ ここが未来ある命を潰す決定をし得る場だと理解しているのか！」

「会長、議会のこともお忘れなく。このことが知れたら大洗学園フォーラムは単独で宣戦の決議を出すかもしれませんぞ？」

多人数にまたがる口論は平行線を辿った。副会長の河田、整備委員長の中島、生徒会広報宣伝部長の佐古山らが学園を守るべし、と開戦賛成。一方地域体育発展委員長の田邊、文化祭実行委員長の前、松澤、生徒会の書記の酒見らが若き血を投じるべきにあらざ、と抗戦反対、即時降伏を主張。この二派閥によって、外の気候の成す音を封じるほどの口論が繰り広げられる中でも、生徒会長籠田を中心としたその他多くの者が判断を下していなかった。

「ここで久々に外気が取り入れられ、一人の男が話し合いに戻ってきた。

「風紀委員の動員、完了しました」

「佐渡川、よくまあこんな時間にテキパキと集まったものね」

「彼らにとつて忘れ物がいかに重要か、つてことですよ。それと正木、お前宛の連絡が一つ来ている」

「本当ですか？」

「駐聖グロの者からだそうだ」

「このタイミングでか……直ちに。会長、一度失礼いたします」

「かまわないわ」

こうして生徒会長室内で佐渡川と正木は入れ替わった。降伏勧告だとよいが、そう都合よくはないだろうな。

「それで佐渡川、風紀委員会会長として今回の件について意見を聞きたいわ。あなた方はいざとなったら実働部隊となつて貰う人たちに含まれますし」

「はい。風紀委員会として本来の責務を果たすならば、断りなく軍勢を派遣し大洗学園の風紀を乱そうとするひたちなかは、撃退、駆逐されるべきだと断言致します。ところがそれが可能かと申されれば、実力的に不可能だとお答えする他ありません。

しかしこの学園校舎の防衛に関しては、お命じいただければ身命を賭して実行致

しますし、それを成し得る士気を風紀委員は持つております」

「おい何を言つてんだお前。やつと開戦回避へと舵が切られかけていたのに、なぜそれを戻そうとするんだい阿呆。くそつ、面倒なことを……」

「馬鹿な！ 風紀委員会は軍を対象にした戦闘訓練なんてまともに受けていないはずだ！ 戦争を前にして士気なんて上がるわけが……」

「あなた方運動発展委員会の内部組織ではそうかもしれませんが、風紀委員会はそのように危機を前にして怖気付く腑抜けではありませんので。それに戦争ではなくとも、かつて要請を受けて血盟戦線を鎮圧したことはございます。こちらも犠牲者が出るほど過酷なものでありましたが、学園のためと皆一步も引くことなく遂行いたしました。」

この度ひたちなかと戦うこととなつても、命を賭けることに異存はございません。金がない金がないと行動を避けてきた運動発展委員会とは違います。学園の規則に則り平穩を全力で維持するのが役目でございますゆえ」

次に口が開けば、彼は田邊に唾を吐くだろう。

「……そう」

「会長、ひたちなかの部隊は中橋を通過。大洗に入りました。目的は明らかです。このまま沿岸を南下すれば、大軍で時間がかかるとはいえ、二時間も要さずにこの学園は包囲されるでしょう。一刻の猶予ありません。どちらの判断であろうと、風紀委員会は

そのために必要な行動を実践します」

籠田は判断を下そうとしない。仮に本当に風紀委員の士気が高いとしても、装備的に彼らだけでは戦えるはずがない。運動発展委員会所属のメンバーを呼び出す必要がある。これ以上引き延ばすことはそれを不可能にする。すなわち降伏しなくなる。ここが攻め時。ここさえ越えてしまえば……

「会長、しかしこれから運動発展委員会のメンバーを招集しても、彼らへの武器配備や防衛配置などの時間を考慮すれば間に合うとは……ここはやはり」

「会長……」

教室に一人戻る者。デカイ図体を跳ねさせながらやってきた。表情には明暗が混在している。

「正木、何かあった？」

「聖グロの校外交流担当局長が我が校を支援しても良いと通達してきました！」

「何ですって！」

「やはり聖グロがこちらにつくぞ！」

「勝てる！ 戦争になっても勝てるぞ！」

開戦派の論調に火種が投じられる。それだけではない。これまで籠田同様口を閉ざしていた者たちも、この動きに便乗してきた。彼らが加わったことで人数比もひっくり

返つちまいそうだ。聖グロリアーナ、この言葉に人助けに似た甘美なる響きが備わっているとしても考えているのだろうか。他の学園が自身の利になること以外やるわけがあるまいに。

「しかし一つ条件が付いてまして……」

「何かしら？」

「二度我が校がひたちなかを撃退すること、それを条件に武器弾薬の提供を申し出てきました。これには防衛戦の成功も含まれることは確認済みです！」

「ひたちなかの、撃退……」

「やりましょう、会長！ 我が校を守る術はこれしかありません！ 聖グロならばひたちなかからの防衛のみならず、存分に張り合える、いや逆襲できる武装を準備してください！」

なるほど。大洗の内部で戦闘状態にして、その復興に資本を投下する算段か。そして自身の血は流さない。結局は奴らの政権を支える独自資本の都合か。反吐が出る。

「馬鹿言うな！ それが出来ないから降伏するべきだと言ってるんだろうが！ 何より撃退するには、こちらから攻められない以上向こうが強攻してこないといけない！ 勝つにはただ包围すればいいのに、何故わざわざ攻めかかってくると考えるんだ！」

「……いえ、問題はそこじゃないでしょう」

「何がです、会長？」

「その提案が聖グロの総意か、はたまた交流担当局が勝手に言っていることか読み切れない、ということ。後者なら私たちは無駄な戦いに突入することになります」

「わが校の独立を守る意思を示すために戦うことは決して無駄ではないし、現にひたちなかとプラウダが接近している以上、聖グロにはひたちなかを弱体化させられるという得、動機がある。乗ってくることで自体に矛盾はないですよ」

「えー、矛盾がないことと実行されるかは別かと……それにプラウダに介入されたら、事態は悪化しますし……」

「それに長期戦は向こうの尊厳を傷つける！　ウチみたいな雑魚に時間を掛けてるってな！　そうなれば攻めかかってくる！　いや、攻めかかってこざるを得ない！　水は地下から補充出来るし、耐えれば弱い方であるこちらに世論もつく！　世論さえ加われれば、聖グロにとってこれ以上の機会はない。今は嘘であっても、後々現実のものとすることは可能だ！」

「そうつすよ！　これは勝てる戦いになってきてるつす！　会長！」

「だがそうだとしても、この地で戦闘を行うことによる被害は無視できません！　経済的損失、それを借款で賄うなら財政の首に縄をつけられる。」

そして何よりいざというときには戦争を選んでしまう、という信用の喪失！　仮に戦

争してもひたちなかをせん滅できない以上、この先もひたちなかとの対立は続かざるを得ん！ 仮に勝ってもまともな復興はできないぞ！

それに人命は取り戻せないのだ！ 学園を残すために学園を支える生徒を死なすなど、矛盾の極みではないか！」

「……降伏は……あれに見ゆるは、との頭文字のついた偉大なる大洗学園復興の道を永久に閉ざす道です。されど戦った、そして仮に負けたとはいえ奮闘したとなれば、一時的に学園が失われようと、その事實は学園を復活させ、再興しようとする者にとつて心の支えになる事でしょう。素晴らしいことです。

だがその事態はあり得ません。勝利はこの佐渡川がもたらしてみせます」

「仮に事実が残っても、学園を受け継ぐべき人間が死んでしまつては何の意味もないではないんじゃないノ？」

「この度の聖グロの件については確認が必要ですが、今回の件が事実ならば、私としても即時降伏には反対です。我が国は国連学園都市憲章を採択済みです。そこで各学園都市の自治の保証を謳っている以上、国が一方的な自治権剥奪を容認するのは国際的な問題ともなりえます。その可能性がある以上、易々と学園を放棄するべきではないかと」

「今回の件にわざわざ口出してくる奴がどこにいる！ 仮にいてもわざわざ国がひたちなかを止めるなどとどうして言えるのだ！ そんなものと引き換えに生徒の命を捧げ

ろというのか!」

「ひたちなかと交渉をするためにも、ナイフは持たざるを得ません。戦争したいのではありません。交渉に持ち込むためです」

広報の正木までもが即時降伏反対に傾き、自分よりの派閥の旗色が次第に悪くなるのが見て取れた。この分断は結局生徒か学園か、どちらをより残すべきか、という主観的判断の総意が生み出したもの。あとは主体性を持ってない奴らがその場の流れで右往左往するのみ。

何とか再び流れをこちらに、その雰囲気をもたらせるワードを探りつつ、議論の中で発言していった。こちらにはまだ本職がいる。時間を味方に行っている以上張り合える、と信じていた。

だがそこで不意に、口を閉ざして口論を眺めていた生徒会長が手前にかざした。

「そこまで」

しばしの間をおいて、会場内を久々の静寂が支配する。何が始まるのか、そのただならぬ雰囲気の中、てんでばらばらに向けられていた視線が次第に一点に集中しだす。期待があった。ある者にとっては即時降伏の、またある者にとっては徹底抗戦という言葉を受ける、という。窓の外が一瞬、雲を視界から消すほどの光に包まれた。

「……私には、勇気がないわ」

「……会長、ならば……は」

「私には、選挙で学園の市民に選ばれた代表として、過去から受け継がれたこの学園の主として、この大洗学園都市を無条件で放棄する、という決断をする勇氣はない」

口を挟もうとした私の言葉は、窓に回帰した雲と地面に叩き付けられる轟音と共に、無意味な欠けらと化した。

「……力なき契約は、ただの言葉に過ぎない。契約は相互に信用できる、という道德的背景が必要よ。現在学園都市間の根底にあるべき道德がないのなら、万人の万人に対する闘争に身をおかずにはいられない。そしてそこから真つ先に降りた者は集団の他の構成員全てから攻撃される対象になってしまう……」

「そうだ、それは仕方ない。だが……それでも……」

「私はこの大洗学園を、残念ながらその集団に残そうとすると、ここに宣言する。本来ならばここに呼び出した諸君の総意をもってこの決定を下したいところだが、現にひたちなかの部隊が接近しているという事情もある。そこでこの場で行われていた討論における開戦論者が、降伏論者を人数的に上回っている、という事実をもって、この結論の承認とみなす」

「会長！」

この時の声が誰のものか、はては会長を止めようとする声か支持する声か、そのどち

らかなのかも分からない。分かったとしてもこの空気はその声で凝り固まってしまっている。

「佐渡川、一つ聞いわ」

腰を座面から離し、指先を佐渡川に向ける。

「何なりと」

「勝つ可能性はあるのよね？」

「あります。いえ可能性ではありません、勝利は事実です。そして我らが前線に赴いた暁には、それをこの手に収め、学園に差し上げてみせましょう」

「……よろしい、ならば徹底抗戦よ。その前に事実関係をひたちなかに問い質した上で交渉を継続しなさい。話し合いで決着が付くならそれが望ましいわ。」

しかし交渉が打ち切りになり、ほかに望みがないならば……血路を開く他になし！

聖グロ云々は考慮せずとも、降伏しても負けても学園がなくなるのなら、勝利の可能性と学園の榮譽が護られる道を選びましょう。

この学園都市の根幹は都市を運営する生徒会。その核心たる生徒会室のある学園校舎を何としても守り抜きなさい。他の拠点はいったん放棄せざるを得ません」

「はっ！」

「田邊！ 即刻運動発展委員会所属のメンバーをかき集めなさい！ 武器が手渡されず

とも、校舎内のバリケードの設置などに人員は必要よ！ この際中途半端なことはしない。非常時動員条例第十三条、防衛出動を発令するわ！」

「安田講堂か何かですか……行政からの命令ならば致し方ありませんな。貴女の決断が、この地に幸運をもたらさんことを願います」

遂に開戦反対派の合理的理由を述べられる人材もこの決定に首肯し、退出した。もう止まらない。最早この地に血の川が流れることは避けられない。

「神埼！ 至急職員室の方々に今回の決定について通達しなさい！ しかし明日授業を待っている教員の帰宅は許可しません。ここは学園、教員の存在なしにその名を使い続けては向こうに隙を与えます。その時恨み節も漏れるでしょうから、私の決定である事を通達しつつ、時間がないことを強調しなさい！」

「はあ……胃痛になったらその時はあなたを恨みますよ、会長」

また少し一人当たりの面積が拡大した。次々と指示を出していた籠田が気を緩め、席に戻った。

「一方でこの決定をしたのが生徒会でありながら、生徒会は前線に人を送りつつここに居続ける。それに不満を持つ人がいる事は理解しているわ。先ほどは総意云々言いましたが、結局はこれは私の独断です。そしてその責任を取り、私も直々に前線に行きましよう」

「会長、何をおっしゃるんすか！ 貴女が前線に行ってしまったら、誰が生徒会の決定を下すんすか！ そして学園の指揮は誰が……」

「河田、お前よ。会長代理として、お前が愛する学園の為に全力を尽くしなさい。これからの書類にはそこにある私の印鑑を勝手に押しして、全て私の命令にしてしまいなさい」

「会長……」

「ただし日付は書かないこと」

「それは何故？」

「私が死んだ後にサインした書類があつたらおかしいでしょう？」

「……はっ。私の故郷である学園都市のために、身命を賭すつす」

「諸君」

すぐに視線を河田から外し、顔を正してこちらを見渡した。

「全ての責任を私に押し付けなさい！ 本当に決裂した際は、我が校の真なる独立とその継続のために戦い抜くのです！ ただひたちなかを排除することに注力しなさい！」

「はっ！」

窓には鋭い水滴の跡が斜めに幾本も流れている。もう既に長針は短針を追い抜いてしまっていた。本当に昨日が、学園の平和な最後の一日になってしまった。

そしてこの先、学園に残った私は気づかされることになる。『開戦』が、私の想像して

いた、いやおそらくこの場にいた者たちにとっての『開戦』が、現実とは予想もつかないほどにかけ離れていたことに。

特別章 ② 島田愛里寿さんです！

アリス「というわけでこの話では質問に答えていったり設定に関する話を捌いたり裏話をしたりして、お茶を濁していきたいと思います」

ルミ「どういう脈絡ですか。というかこれ実質あとがきじゃないんですか？立派なタイトル付いてますけど」

アリス「あとがきじゃなくて『不死の感情・改 特別編 島田愛里寿さんです！』だと作者は主張するつもりらしいわ」

アズミ「まあそれはそうとして、そういうことなら一つずつ話を進めていきましょう」

・小梅さんどないだったん？

アリス「活動報告に設置した質問箱に来た質問ね」

メグミ「別にツイッターでも良かったんじゃないの？」

ルミ「こんな作者のフォロワー増やしてどうすんのよ」

<https://mobile.twitter.com/EzonoHinata>

a

アズミ「と言ってサラツとURL貼つとくのよねえ」

ルミ「絶対意味ないです」

アリス「それで小梅さんだけど、確かに黒森峰の戦いは生き残った」

メグミ「菌にものが挟まったような言い方ですね」

アリス「黒森峰が黒森峰の戦いの後に分割され、サンダース大学が西部をテンペルホープ大学、プラウダ学園が東をヴァント学院として誕生させたことは書いたよね」

ルミ「まさにドイツ分割」

アリス「その後のヴァント学院は徹底した反黒森峰政策をとったの。まあ当然ね。プラウダは黒森峰に捕虜を殺されまくってる。わざわざそれを許した体制、制度を続ける必要がないもの」

アズミ「そうよね。でもそんなことしたら反発が起こるんじゃないかしら」

アリス「その通り。その反黒森峰政策が都市改造、行事などにも波及するし、黒森峰が合併後に自治を認めていた東部の町もその自治権が取り上げられたの。基本一党独裁、中央集権のプラウダを真似たわけ。」

流石にやりすぎたせいで2015年、東部の町に逃れた黒森峰の生き残りが町と組んで新黒森峰学園の立ち上げを宣言。無論これをヴァント、プラウダが許すはずもなく、

ヴァント学院は内戦状態に陥るわ。これがヴァント内戦」

ルミ「しかし相手には最強の学園都市プラウダが付いてますし、しかも対サンダースの最重要拠点。単なる生き残りだけなら鎮圧されたのでは？」

アリス「結局この内戦は2年近く続いた。新黒森峰はサンダースの支援を受け、初期は積極攻勢、後にゲリラ戦を展開し続けたの。プラウダが疲弊した要因の一つ。

そして黒森峰の戦いを生き残り、何とか南の公立学園都市、阿久根学園に逃れていた赤星小梅は、この内戦に新黒森峰側の義勇兵として参戦。元々黒森峰戦車部隊の中核の一人だった彼女は、有力者候補の殆どを黒森峰の戦いで失っていた新黒森峰にとってかなり威信のある存在で、実績も重ねて中隊長まで昇進したの。

しかし元々数で劣っていたし、はつきり言つて単なる寄せ集め。アンツイオ内戦に見切りを付けたプラウダも本格的に派兵し始めた。そして彼女はヴァント、プラウダの部隊に追い詰められる中、益城飯田山の戦いで戦死した。享年21」

アズミ「……若いですね」

アリス「彼女は戦いの中で西住みほに助けられ、そして戦いの中西住みほによつて母校と掛け替えない仲間を失った。そして再び、戦いの中で存在意義を探していたのかもしれない」

・大学選抜戦あつたらどうなったの?

アリス「たぶんチハタンズが30輻揃えて負けてたんじゃないかな?」

アズミ「正直考えてないのよねえ」

・アインザツグルツペンの行動

アリス「アインザツグルツペンがプラウダ以外の敵に対しても同様に虐殺を行つていたのか、という質問」

ルミ「基本プラウダは不倶戴天の敵、つて感じでしたけど、他はどうだったのですか?」

アリス「処分の対象はプラウダとその同盟校のみ。他は解放していた」

アズミ「あ、そこは分別あるのね」

アリス「わざわざ関係を拗れさせる必要もないからね。ただ硬式にも故宮学院などの親プラウダの学園があつたから、そこはある程度対象になつた」

アリス「質問箱からはこんなものかな。ではここからは設定関連や小嘶など」

・島田流どうなったの?

メグミ「これは質問箱ではなく、感想に來た話ですな」

ルミ「結局話にも絡んできませんでしたしね」

アリス「島田流の説明して、学園都市と戦車道の流派の情勢から説明……いる？」

アズミ「いりますねえ」

島田流

群馬県館林市に拠点を持つ戦車道の流派の一つ。西の西住流と並び、日本の戦車道流派の片翼を担う。だが西住流と異なり、硬式戦車道には明確に反対している。

基本は『ニンジャ戦法』とも呼ばれる集団戦術。戦車の質は西住流ほどは重視しないため、戦後戦車道全盛期の頃には財政的に余裕の少ない公立学園都市を中心に提携を結んでいた。ちなみに大洗女子学園が戦車道をやっていた時に受け入れていたのも島田流。

しかしその提携先故に、オイルショック以降の戦車道の退潮の影響をもろに受ける。予算に限界のある公立校の方が戦車道を廃止していったためである。公立校の戦車道参加校が少ないのはこのため。

それを受けて島田千代の先代、島田京香が国外の戦車道が盛んでない国に積極的に進出する方針に転換。世界20カ国以上に道場を持つに至る。島田千代以降もその方針

は変わらず、日本での影響力は重視はしていない。

だがそれでも北関東、南東北の戦車道参加校（ヨーグルト学園、伯爵学園など）と提携するなど、日本戦車道に影響を及ぼしている。

作品と絡んでいるところだと、アンツイオ学園はもともと島田流寄りだったが、アンチヨビが戦車道を差配するようになると西住流寄りに転換した。これにはアンチヨビ本人が西住流に師事していたこともあるが、島田流とプラウダ学園が関係を強めようとしていたことも遠因である。

プラウダ青年団がカチューシャを中心に対黒森峰强硬方針をとる一方で、プラウダ共産党は黒森峰の勢力を弱めた後に、硬式戦車道を廃止することを念頭に置いていた。そして国との対立要素（三厩編入や車力基地に関する問題、移民の独自受け入れなど）がなくならない以上、管轄地域発展と防衛強化のため戦車道に関する予算の縮小を狙っていた。

自治権維持のため立憲国民党政権の崩壊を狙いつつ、東日本大地震の復興支援を名目に東北太平洋側の学園都市に影響力を拡大。通称南下縦深政策をとることとなる。

一方島田流としてはプラウダ学園がアフリカや南米に一定の影響を有していることを利用し、さらなる島田流の拡大を狙った。この利の一致が島田流とプラウダ学園の関係を強めていたのである。

しかし左派政権を崩壊させたアンチヨビラアンツイオ黒服党にとって、プラウダ学園の南下縦深政策の波及を阻止することが至上命題であった。結果としてプラウダ学園と関係する島田流を排除することはその要求と一致していたのだ。

アリス「関係しているとすると、こんなところ」

ルミ「世界展開する方針にしたから、硬式戦車道のゴタゴタに巻き込まれずに済んだ、というわけですね」

メグミ「でもプラウダと結んだってことは、この先機構の間で争いが始まったら巻き込まれるんじゃない……」

アリス「巻き込まれたね。プラウダはこの後の各地方での内戦に介入したりするから、島田流を学んだ人が送られることもあった」

アズミ「うわ……」

アリス「私が正式に家督を継いで10年後くらいにはなんとかあったけど」

ルミ「それって単に学園都市が疲弊しただけじゃ」

アリス「硬式の廃止は戦車道と戦争を遠ざけたけど、逆に戦車道では学園都市に対し何もできなくなってしまったの」

メグミ「なるほど……その一方で学園都市は戦車道で経験を積ませようとする、と」

アズミ「確かに安全とはいえ実弾使用に変わりはないし、戦術面などでは有用な部分もあるのかしら」

ルミ「逆に防衛拠点とかはないし、戦略面は問われない部分が多いから、士官ではなく兵士の育成までなら、つてなるのかしら?」

アリス「黒森峰も戦車科で進めるのは隊長がなれる准尉まで。それ以上は大学を卒業する必要がある」

・ 継続、知波単、BC自由各学園の動向

アリス「これも感想の中にあつた」

ルミ「ではまず私の母校、継続学園からですね」

継続学園

石川県旧珠洲市に建設された、フィンランドをモデルとした学園都市。能登半島北端に位置する。創立は戦後で、第二次学園艦建造計画にて学園化され、第二次学園艦移設計画で同地に建設される。

政治体制は議会制民主主義と学園長公選制の併用。議会では中道右派の「継続の会」が長らく与党。

移設時にバブル崩壊の影響を受けるが、元から日本民主党の地盤だったこともあり移設に関する政治的対立はあまりなかった。だが1993年の能登半島沖地震で大きな被害を受ける。

元から陸上交通の便が悪く（金沢から鉄道で3時間）、海上交通のための港湾拡大も限界があり（飯田港↔富山港フェリー4往復と飯田港↔姫川（糸魚川）港2往復のみ）、おまけに冬の降雪量が多いこともあつて経済発展は進まず、税収は学園都市最低クラス。主産業は漁業、農業、窯業（珠洲焼）。だが個人重視の教育の質の高さは認められており、その学費をある程度に保つことで辛うじて収入は下の上程度。人口は3万7千人とこれまた学園都市最低クラス。

元はプラウダ寄りの中立政策を採っており、プラウダが富山湾周辺の学園都市に支援して形成した富山湾ブロックに加盟。盟主的立場にあり、立山観光ルート掌握で財を得た黒部学園の地上部隊の駐屯を認める代わりに、飯田港運営権を譲渡。軍事費削減による発展を狙った。

しかし黒部学園の地上部隊が2002年に強姦事件を起こすと、反黒部立山、ひいては反プラウダの運動が拡大。選挙で都市議会は反黒部が過半数となり、自警団の設立が決定される。

2004年には駐屯地周辺で暴徒化した反対派により駐屯隊員が殺害される蛸島事

件が発生。黒部学園は隊員保護を名目に継続学園への全面的駐屯を宣言し、継続学園はこれに対し事件を起こした反対派は警察に引き渡すものの、自治権の喪失に対しては抵抗する意思を示した。黒継戦争の始まりである。

この戦争は黒部学園の圧倒的勝利に終わるかと思われたが、名将萬根平太郎率いる継続自警団が頑強に抵抗。後に黒森峰女子園が継続学園を支持して参戦し、航空隊が富山湾の海上補給ルートを遮断。黒部学園は劣勢に追い込まれる。

この後サンダース大学と聖グロリアーナ女子学院が仲介し富山協定が結ばれ、継続学園は富山湾ブロックを離脱。飯田港の運営権を取り戻す。しかしプラウダとの対立、黒森峰地上部隊の駐屯と費用負担、黒森峰グループ企業の市場進出、独占はさらに財政状況を悪化させた。

戦車道もその煽りを受けている。

黒森峰崩壊後は佐世保条約機構に所属。南下縦深政策に対するサンダース側の前線基地の役割を担い続ける。近年は自然エネルギーを主体とした開発でエネルギー自給を狙う。

保有軍備は陸上駐屯隊3個中隊450人、海防艦一隻(カレリア)のみ。

ルミ「うーんこの」

アズミ「これまた微妙な道を進むわねえ」

アリス「ミカさんが試合放棄したのも納得だね。そして黒森峰の戦いには参加しないことでサンダース側にすんなり加われたと」

メグミ「そこはやり手ですよ」

アリス「フィンランド化した本物には敵わない」

知波単学園

千葉県旭市に建設された学園都市。その名は「知恵の波を単身渡れるような進取の精神に溢れる学生になるように」との精神から取られている。戦前は短大の付属校だったが、戦後に私立化、独立した。

政治体制は学園長世襲制と議会制民主主義の併用。だが行政の長とされる総督の権力が弱く、補佐する大臣は学園長から任命される。

本来の母校は千葉港だが、東京湾に入れず移設が困難との理由から、第一次学園艦計画で同地に移設された。その後債権の移譲と引き換えに銚子市を編入。人口は17万人を数えるに至る。

銚子港での漁業の船舶停泊料などでバブル景気崩壊後も一定の収入を確保し、海軍を強化。周辺諸校へ影響力を広げる。聖グロリアーナ女学院と関東の覇権を争い、茨城南

部、千葉北部、埼玉西部を影響下に納める。

しかし198年に完全独裁化とさらなる対外拡張を主張する者らによる8・10事件が勃発。戦車道隊員の一部が参加し、鎮圧の中でその戦力を削られることになる。とはいえ完全に凋落したわけではなく、この後も親日本民主党、親黒森峰の立場を取りつつ、聖グロリアーナとの対立を続ける。

しかし2011年、千葉県茂原のマジヤール学園にて親プラウダのマジヤール社会党によるクーデターが発生。親知波単の布袋政権が打倒され、知波単に逃れてくるという事件が勃発。知波単はすかさず介入を仕掛けた。

上陸はうまくいき茂原中心部を攻略するものの、長柄、長南の攻略に苦戦。何とか布袋政権の回復はさせたものの、長期戦によりその国力は大きく削られることとなった。

2013年に山手協定機構が成立すると、知波単はそれまで関東の覇権を競っていた聖グロリアーナと手を結び、山手協定機構に加盟。以降はアンツイオ内戦介入など聖グロと行動を共にし、プラウダなどに抵抗する。

軍備は陸上防衛隊850人と砲艦5、駆逐艦5。航空隊80機（紫電改など）を保有する。

アリス「こんな感じ」

アズミ「こちらは大変そうねえ」

アリス「聖グロリアーナは三浦、館山、伊東などの公立学園都市と繋がりを持って、この港を拠点に海軍を持ってたけど、知波単はかつて学園艦時代は館山港を利用していったから、これを奪還するのが一つの目標だった」

ルミ「結局叶わなかった」

メグミ「それはしようがないよね」

・BC自由学園

元々はBC学園と自由学園という別々の学園艦であった。BC学園は清貧、質実剛健、実学主義を基にしたフランススコ会系の学園であり、学費も私立にしてはかなり安めであった。しかし1969年に学生運動の過激派による赤軍BC事件が勃発。戸田治安維持部隊長の指揮のもと戦車道部隊も投入され、24人の風紀委員、治安維持部隊の犠牲者を出しつつもこれを鎮圧した。この活躍で彼はマレシャルの称号を授与される。

一方自由学園はカトリック系とはいえイエズス会系。しかもマジノ女学院の系列校にあたり、文化芸術や教養を重視するいわゆる『お嬢さま学校』であった。こちらは大きな混乱なく学園艦時代を乗り切る。

第一次学園艦移設計画の中で大規模化を求められ、同じフランス系、カトリック系であることを理由として合同となった。が、元々気風も指導方針も真逆に近かったため、大学と統治機構は合同とするものの、高校より下はそれぞれ分割して整備することとし、岡山県鴨方町、金光町、寄島町、里庄町、矢掛町を合併してフレンチ学園を誕生させた。

しかし都市統治委員会では資金、生徒数の多い自由学園側が優位を握り、開発も自由学園側の施設がある地域が優先された。これをBC学園側はやむを得ず黙認し続けてきたが、1994年、学園を揺るがす重要事項が都市統治委員会を通過した。高校の統合である。

これには流石のBC学園側も反発。教育の強引な自由学園化だとして、反自由学園運動が激しさを増す。そして翌年、もはやその履行が避けられなくなる中、BC学園側の地域、元矢掛町を中心に駐屯していた治安維持隊が蜂起する。BC自由内戦の始まりである。

元々軍人の数はBC学園出身者が多かったこともあり、初戦はBC学園側が優位に進める。またBC学園側は指導者として当時83歳のマレシャル戸田を担ぎ出し、戦意を高めようとした。

しかし元々資金力に劣っていた上、自由学園側をサンダースが支援。おまけにBC学

園側は期待していた黒森峰からの積極的支援を受けられず、次第に劣勢となる。だが矢掛の入り口となる中山・山田の戦いで戸田も前線に出るなどして撃退。聖グロリアーナや国の仲介の元岡山協定が結ばれ、名前こそBC自由学園として優位性を残したものの、高校統合は履行。後に学力差を名目にBC学園側から入学する者には受験を課されるなど、自由学園側優位はむしろ一層強まった。

このエスカレーター組（自由学園系の中学から進学）と受験組（BC学園系の中学から受験して入学）の争いは、戦車道においても大きな溝を残すこととなる。

保有軍備は治安維持隊1200のみ。だが人口が9万人に満たないと考えると、これでも多い部類。

メグミ「アズミ、これ大丈夫なの？」

アズミ「大丈夫じゃないわよ」

アリス「基本親サンダースのまま進んでいくことになる」

アリス「質問はこれくらいかな？」

メグミ「一応これはどうなんですか？」

・秋山淳五郎の話を抜いたワケ

アリス「前の作品に入れた日本とプラウダの戦争をなくしたから」

ルミ「まあ自衛隊と戦争してから黒森峰滅ぼす地上部隊を編成させるのは無理ありませんからね」

アズミ「この作品そのものが無理の塊みたいなものだけど」

メグミ「まあカーボンあるのに戦争で戦車が撃破される世界線だから」

アリス「そこだけは原作と絡めるとどうにも組めなかつたんだって」

ルミ「設定を突き詰められない作者は作家の屑だつてはつきりわかんかね」

アリス「以上で終わりです。実は青師団内戦辺りも細かく練つてあるのですが、長くなつてめんどくさそうなのでやめときます」

アズミ「流石に本筋から離れすぎますしねえ」

メグミ「お読みいただいた皆様、本当にありがとうございます。作者井の頭線通勤快速の次回作はまだ決まっていますが、とりあえず短編をちよこちよこ投稿したり、『パワプロドリームII』でガルパン応援プロジェクト』を投稿したりします」

ルミ「ガルパンも絡んでいる作品なので、この血の色を濃く染めた世界から抜けて、スポーツに舞い戻つてもよろしいのではないのでしょうか」

アリス「それじゃ、これで本当に終わり。創作元のTK様、情報提供頂いた忍者小僧

様、評価、感想を下さった皆様、そして何より少しでもお読み頂いた皆様に、簡単では
ありますが御礼申し上げます」